

Ⅱ 府内在住者の集計・分析

1. 未婚者の結婚希望

(1) 結婚意思

(結婚の意思に大きな変化はみられない)

未婚者のうち、結婚意思を持つ者は（「すぐにでも結婚したい」から「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない（いつかは結婚したい）」までの合計）は、男性 85%、女性 86%となっている（図 2.1.1）。

2014年調査と、生涯非婚（一生、結婚するつもりはない）の割合を比較すると、男性はやや減少し、女性には変化はみられない（図 2.1.2）。京都府では結婚意思において生涯非婚が増加している状況にはないと考えられる。

結婚意思は、男女とも年齢との間に強い相関がみられる（図 2.1.3）。特に、年齢の上昇につれて年齢志向（ある程度の年齢までに結婚したい）が減少し、生涯非婚が増加する傾向がある。主に、結婚意思が強い者が年齢とともに結婚した結果と考えられるものの、年齢との相関が考えられる事象と結婚意思との関係を把握する際は注意が必要である。

図 2.1.1 結婚についての考え（未婚者、単数）

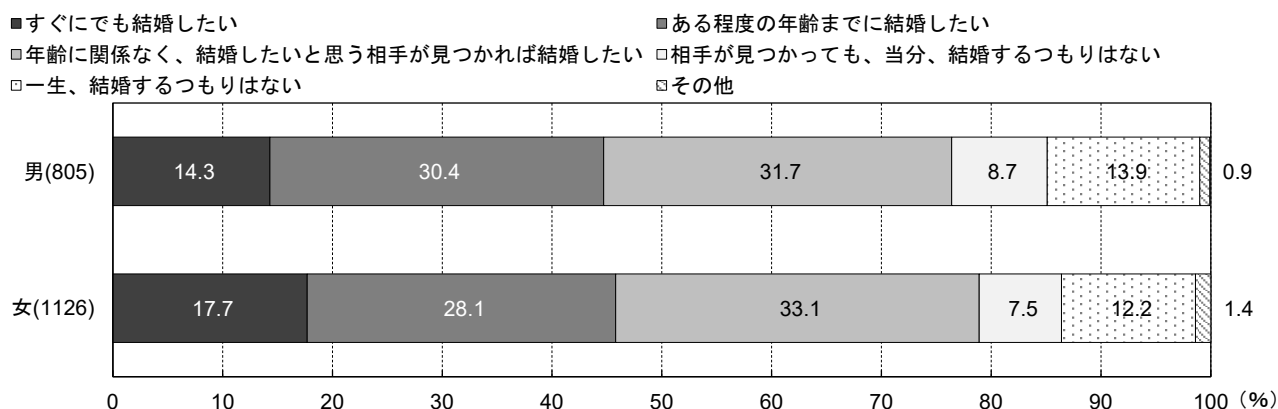


図 2.1.2 結婚希望における生涯非婚の割合の推移（未婚者）

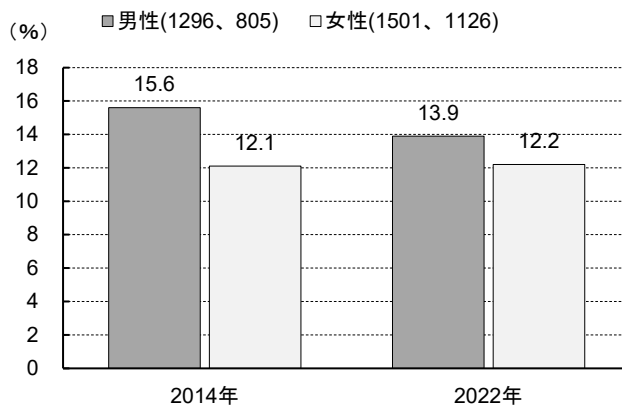
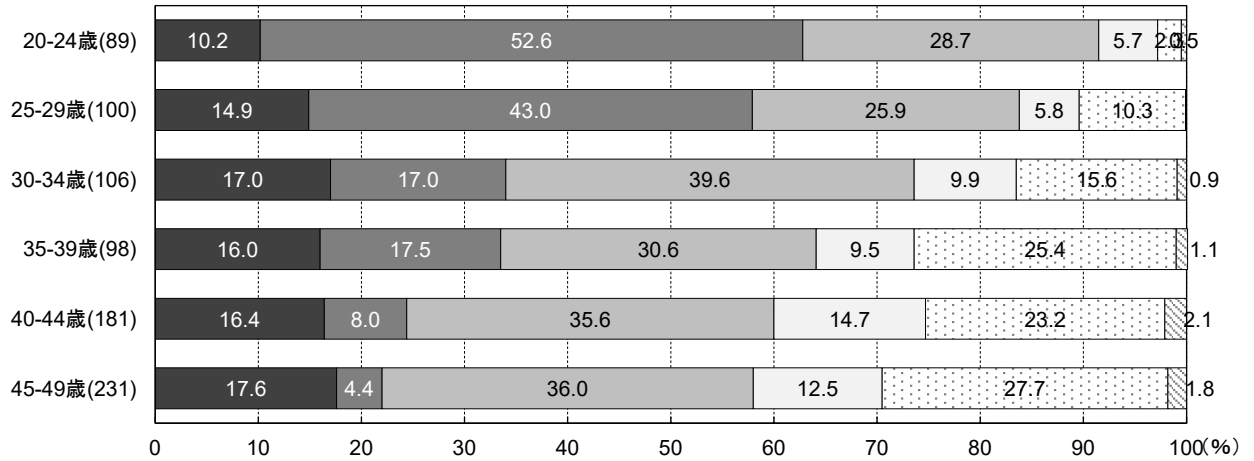


図 2.1.3 年齢階層別にみた結婚意思（未婚者）

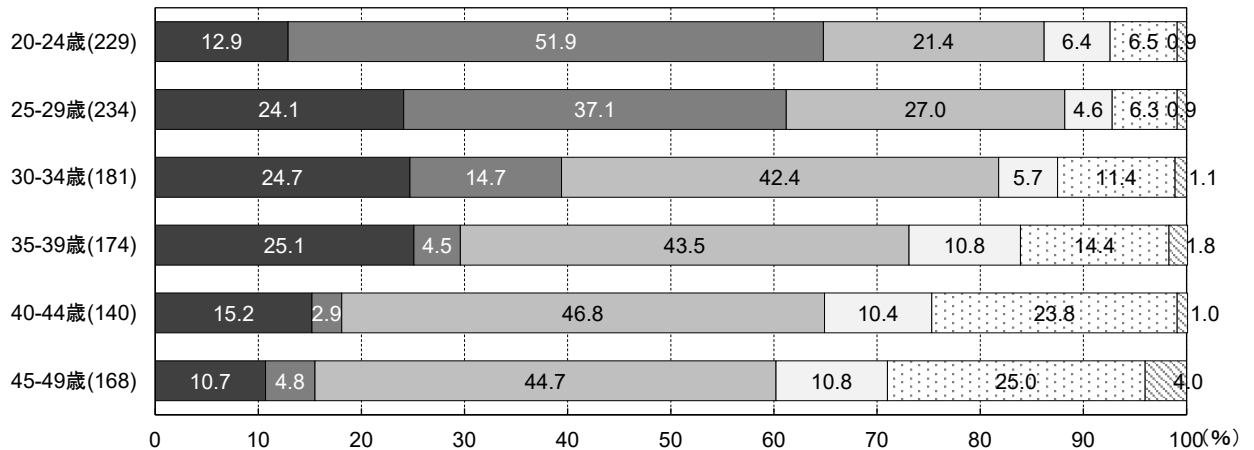
（男性）

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかったも、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



（女性）

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかったも、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他

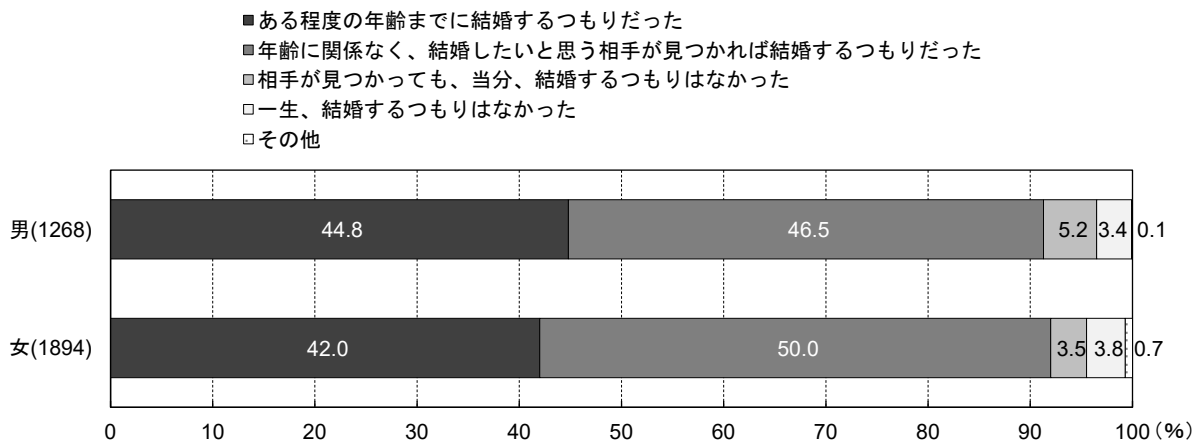


(有配偶者等の未婚時の結婚意思)

有配偶者等に未婚時の結婚意思を振り返ってもらくと、「ある程度の年齢までに結婚するつもりだった」という年齢志向が、男性では45%、女性では42%に達する(図2.1.4)。

「年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚するつもりだった」という相手志向を合わせると、男女とも90%を上回る。ほとんどの既婚者が、年齢志向か相手志向であり、「相手が見つかったも、当分、結婚するつもりはなかった」「一生、結婚するつもりはなかった」の回答は、未婚者と比べて少ない。

図 2.1.4 結婚についての考え (有配偶者等、単数)



(注) 有配偶者等は有配偶者及び独身者(離死別)

(2) 未婚者の結婚意思に対して影響が想定される要因

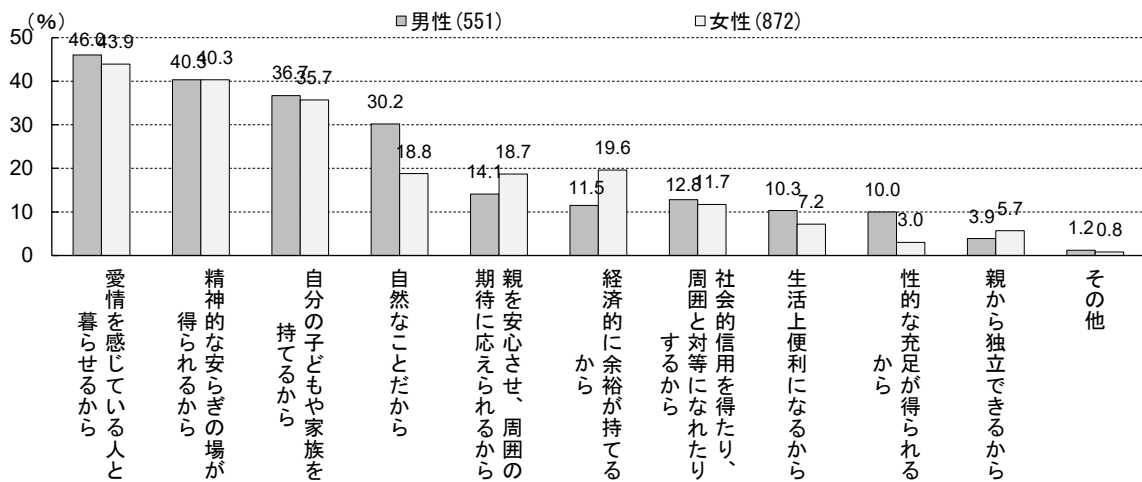
①結婚したい理由、結婚するつもりはない理由

(結婚するつもりはない理由は「結婚を重視していない」が最も多い)

結婚したい理由は、「愛情を感じている人と暮らせるから」「精神的な安らぎの場が得られるから」「自分の子どもや家族を得られるから」といった結婚のメリットを挙げる回答が多い。価値観である「自然なことだから」は、男性 30%、女性 19%であり、男女に差がみられる(図 2.1.5)。

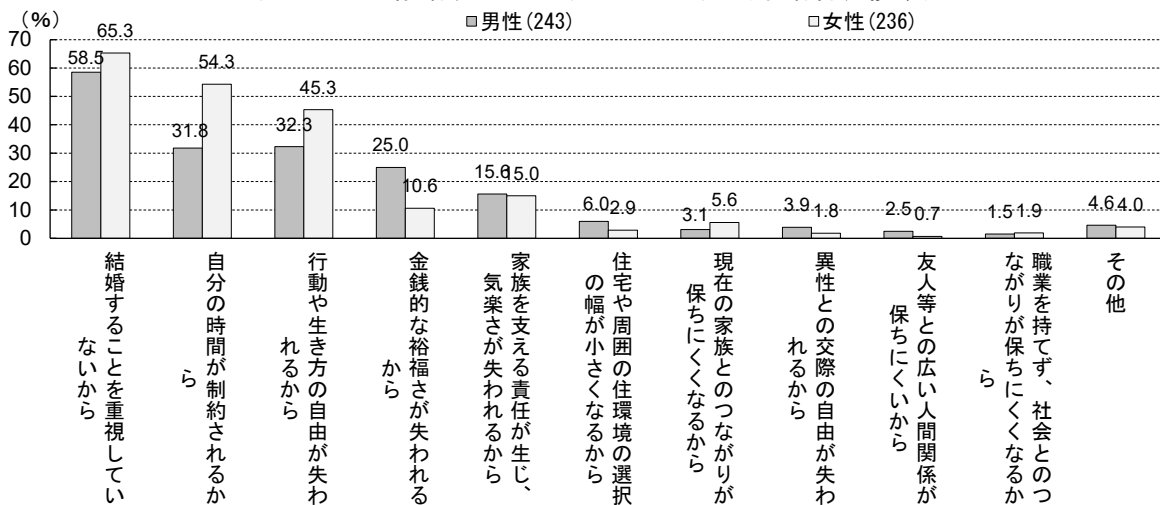
一方、結婚するつもりはない理由は、「結婚することを重視していない」という価値観に関わる理由が最大で、男女とも半数を上回る。女性では「自分の時間が制約されるから」と「行動や生き方の自由が失われるから」といったデメリットを挙げる回答も多い(図 2.1.6)。

図 2.1.5 結婚したいと思う理由(未婚者、複数)



(注) 図 2.1.1 で、「すぐにも結婚したい」「ある程度の年齢までに結婚したい」「年齢に関係なく、結婚したい」と思う相手が見つければ結婚したい」と回答した者が対象

図 2.1.6 結婚するつもりはない理由(未婚者、複数)



(注) 図 2.1.1 で、「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない」「一生、結婚するつもりはない」と回答した者が対象

②所得

(所得のゆとり感がなくなると生涯非婚が増加する)

年収を分析軸にして未婚の就業者の結婚意思を集計すると、男性では年収が多いほど「すぐにも結婚したい」が増加する傾向がみられる(図2.1.7)。女性でも「すぐにも結婚したい」は年収400万円以上600万円未満までは所得にしたがって増加している。

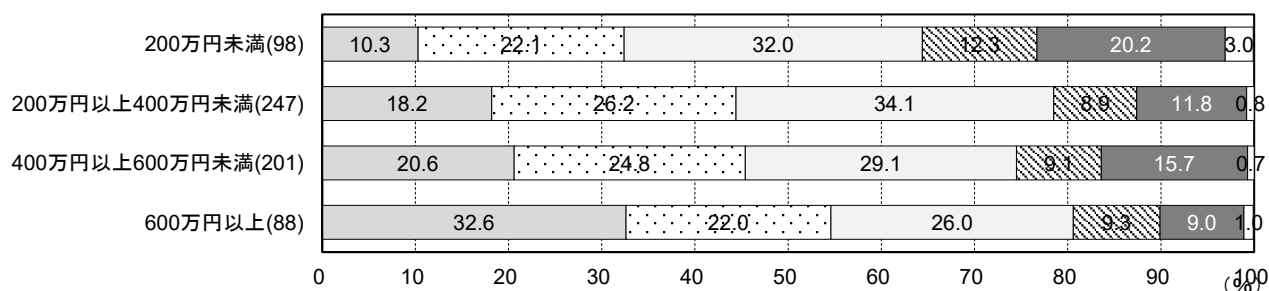
所得は個人の主観によって捉え方が異なると考え、意識調査では「所得のゆとり感」を把握した。「所得のゆとり感」によって結婚意思を集計すると、男女とも所得にゆとりがないと考える者は生涯非婚が増加する傾向が表れる(図2.1.8)。出生率に対しては生涯非婚の割合が直接的な影響を及ぼすと考えられるため、所得額に加え所得に対する主観的評価も重視される。

「所得にゆとりがあるか」の質問に対して「そう思う」と回答した者の年収平均額は男性で480万円、「そう思わない」は356万円であり、その差は123万円であった(図2.1.9)。女性では「そう思う」が404万円、「そう思わない」は289万円であり、115万円の差が生じている。

図2.1.7 昨年の年収別にみた結婚意思(未婚者、就業者)

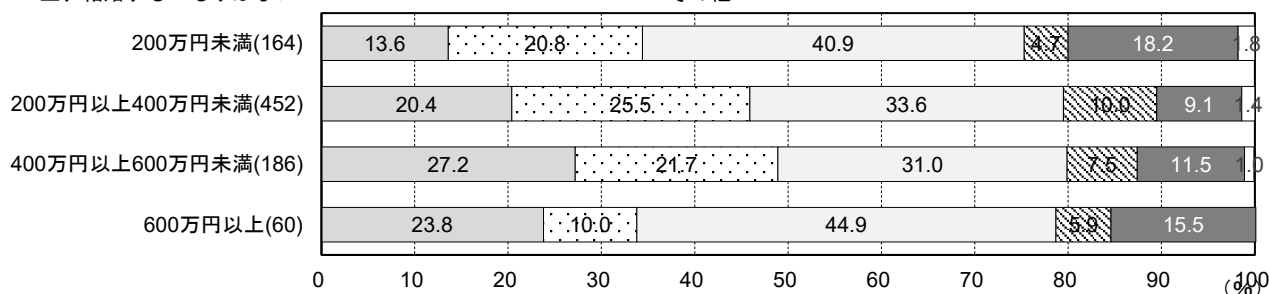
(男性)

- すぐにも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかったら、当分、結婚するつもりはない
- その他



(女性)

- すぐにも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかったら、当分、結婚するつもりはない
- その他

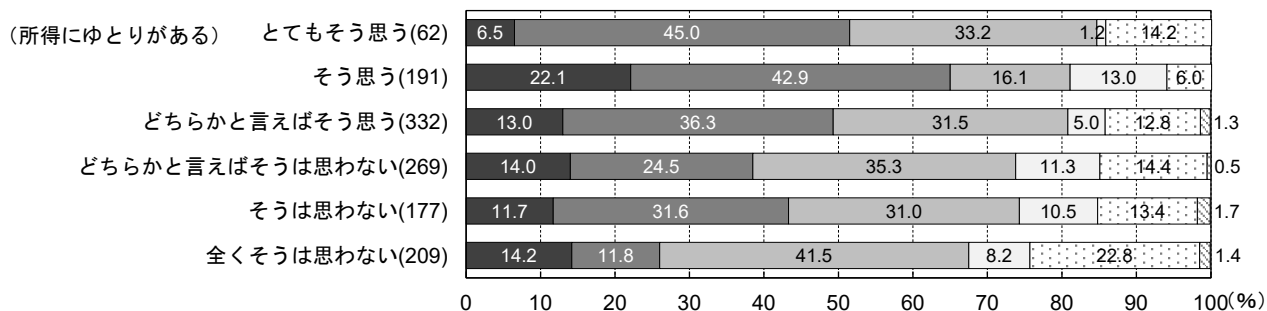


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1268	0.1002
P値	0.0099	0.0386

図 2.1.8 所得のゆとり感別にみた結婚意思（未婚者、就業者）

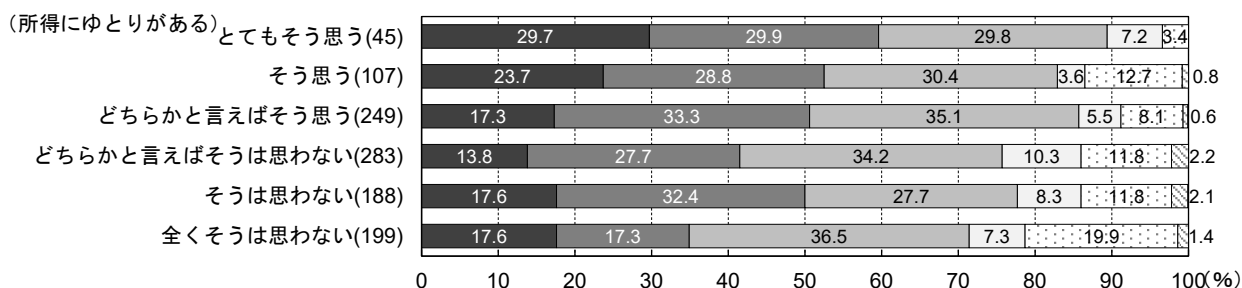
（男性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他



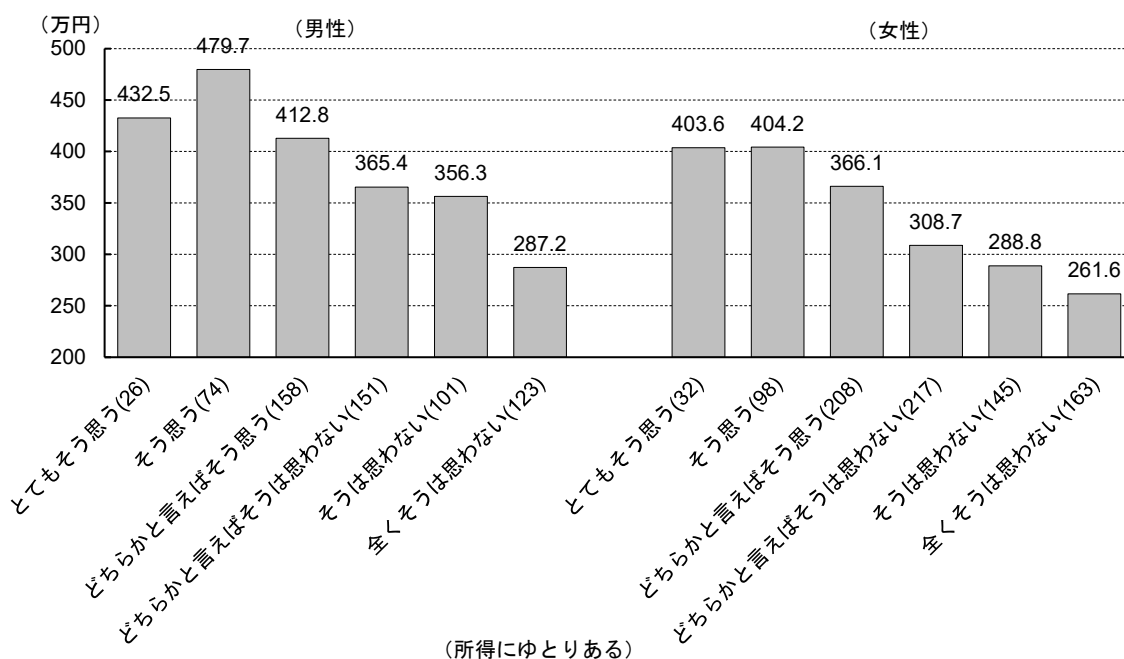
（女性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1272	0.0985
P値	0.0000	0.0006

図 2.1.9 所得のゆとり感別にみた昨年の年収の平均額（未婚者、就業者）



(未婚男性に比べ未婚女性の「所得のゆとり」が少ない)

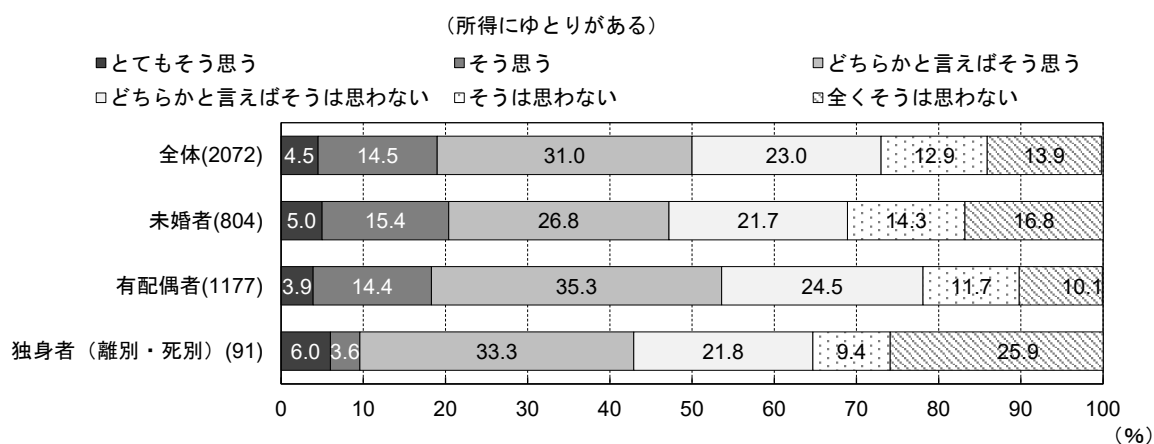
「所得のゆとり」の分布を確認すると、未婚者の男性では、「とてもそう思う」と「そう思う」との合計は20%、「全くそうは思わない」と「そうは思わない」の合計は31%である。未婚の女性では、前者は14%、後者は36%である。

中間回答（どちらかと言えばそう思う、どちらかと言えばそう思わない）を除けば、「所得のゆとり」は否定的回答の方が多く、この傾向は女性で強い。

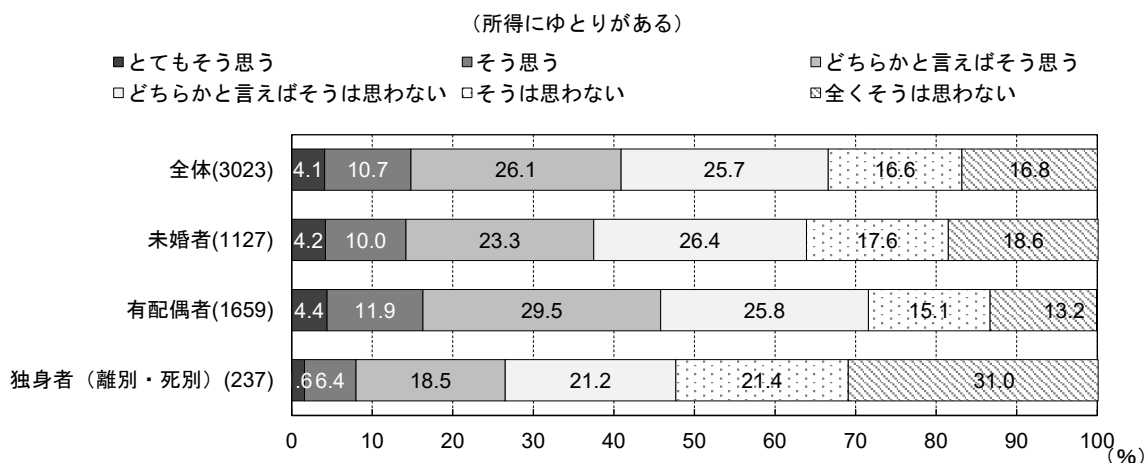
また、未婚者と有配偶者を比較すると、「そう思わない」と「まったくそうは思わない」の合計は、男女ともに未婚者の方が多い。

図 2. 1. 10 配偶状態別にみた「所得のゆとり」(単数)

(男性)



(女性)



③就業形態

(就業形態は男女両方の結婚意思に影響を及ぼす)

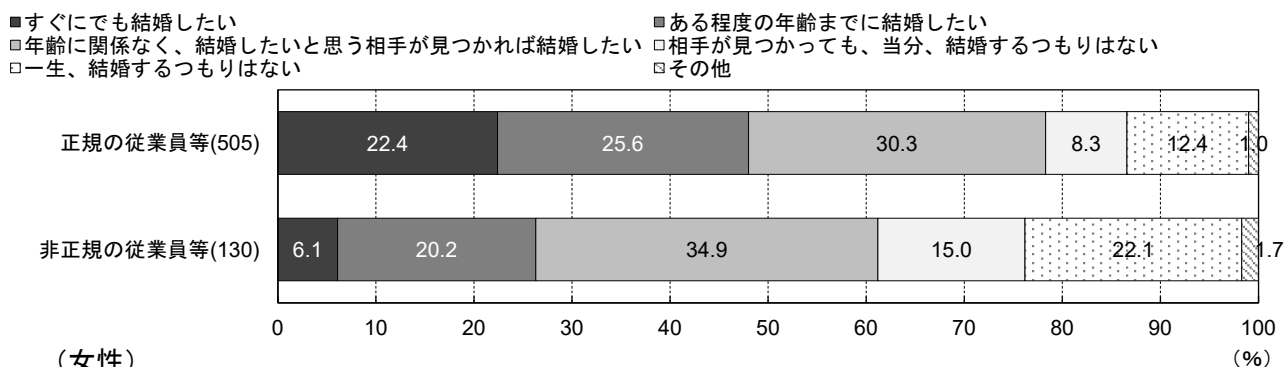
未婚の就業者の就業形態と結婚意思の関係について把握した。就業形態は、正規の従業員等(図 2.1.11 の注釈参照)か非正規かに注目して区分を行った。

両者を比較した結果、男性では、正規の従業員等で22%に上る「すぐにでも結婚したい」が、非正規では6%に過ぎない(図 2.1.11)。結婚の年齢志向(ある程度の年齢までに結婚したい)、相手志向(年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい)には大きな差はないものの、非正規の従業員等では「当分、結婚するつもりはない」が15%、生涯非婚が22%に達し、正規の従業員等の約2倍になる。

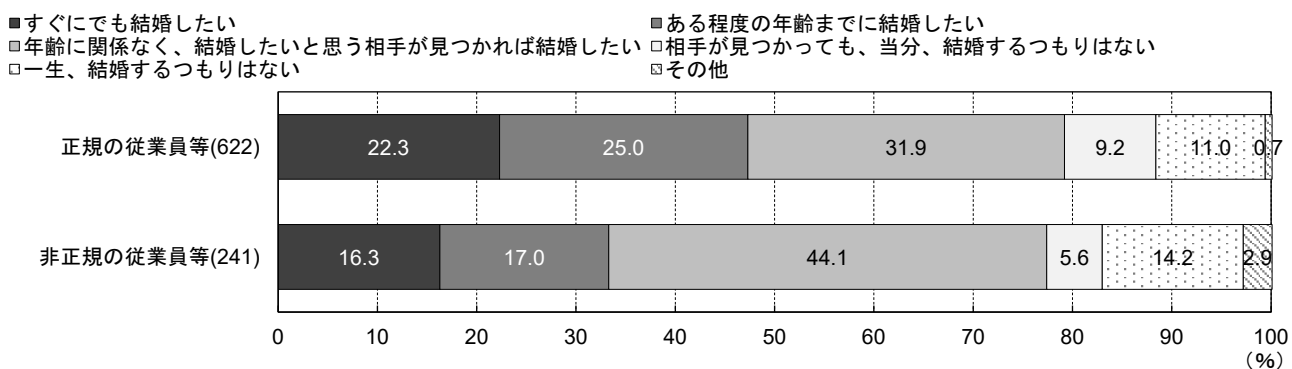
女性でも、非正規であると、「すぐにでも結婚したい」と年齢志向が少なくなり、相手志向と生涯非婚が増える。就業形態は、男女両方の結婚意思に影響を及ぼしている。

図 2.1.11 就業形態別にみた結婚意思(未婚者、就業者)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1885	0.1577
P値	0.0004	0.0007

(注)「正規の従業員等」とは、正規の職員・従業員、会社などの役員、自営業主・家族従業者、家庭での内職であり、「非正規の従業員等」は、パート・アルバイト、派遣・嘱託・契約職員である

④交際状況

(交際経験は結婚意思に影響を及ぼす)

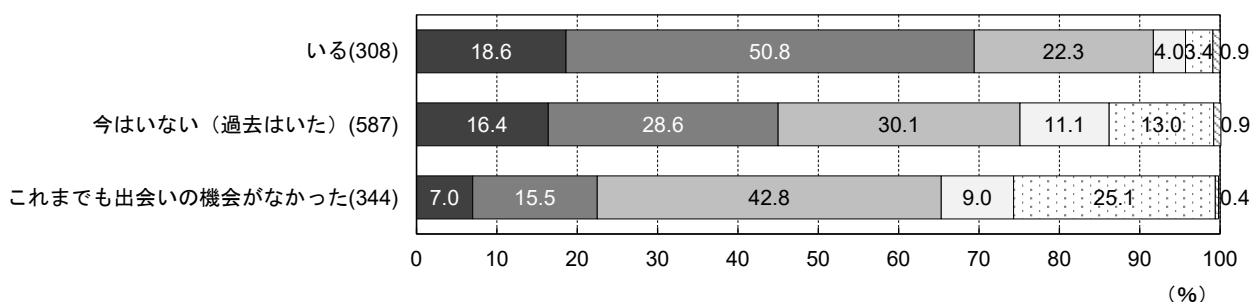
交際経験別に結婚意思を把握すると、現在の交際相手の有無だけでなく、過去の交際経験によっても結婚意思が影響を受けることがわかる(図 2.1.12)。男女によって影響の仕方に差がみられるものの、過去に交際経験がないと生涯非婚の割合が25%に上ることは共通している。

交際につながるような男女の出会いの機会の多さは、結婚に至らなくても、結婚意思の変化を通じて出生率に影響を及ぼすと考えられる。

図 2.1.12 交際経験別にみた結婚意思(未婚者)

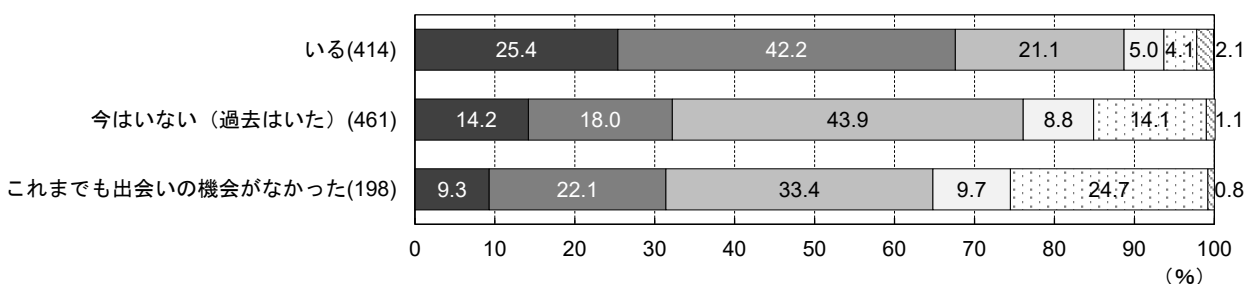
(男性)

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



(女性)

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2570	0.2779
P値	0.0000	0.0000

⑤結婚や子育てに対する価値観

「結婚することは自然なことである」という価値観との関係を把握した)

結婚に関わる価値観のうち、「結婚することは自然なことである」という意見への賛同度と結婚意思との関係を調べた。

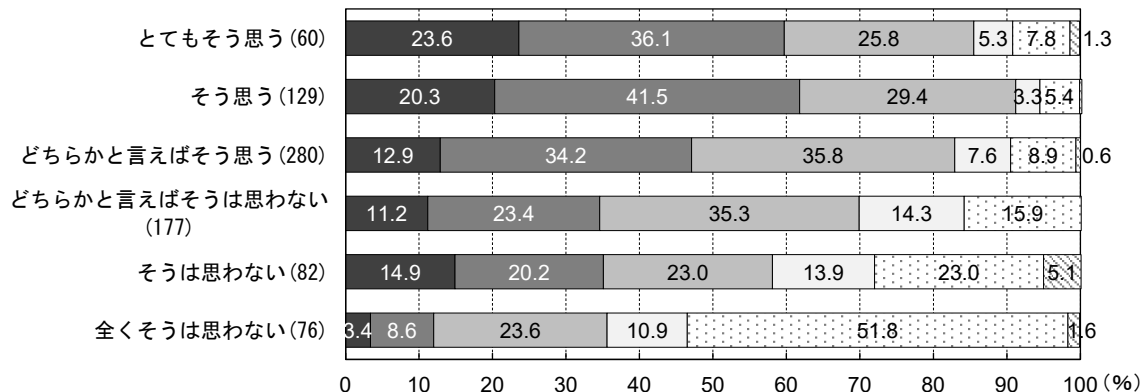
「結婚することは自然」という価値観を分析軸にして結婚意識をクロス集計すると、相関関係があることは明らかである(図 2.1.12)。特に、女性では男性よりも明瞭な関係が表れている。

図 2.1.13 結婚の価値観別にみた結婚意思(未婚者)

(男性)

- すぐにでも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他

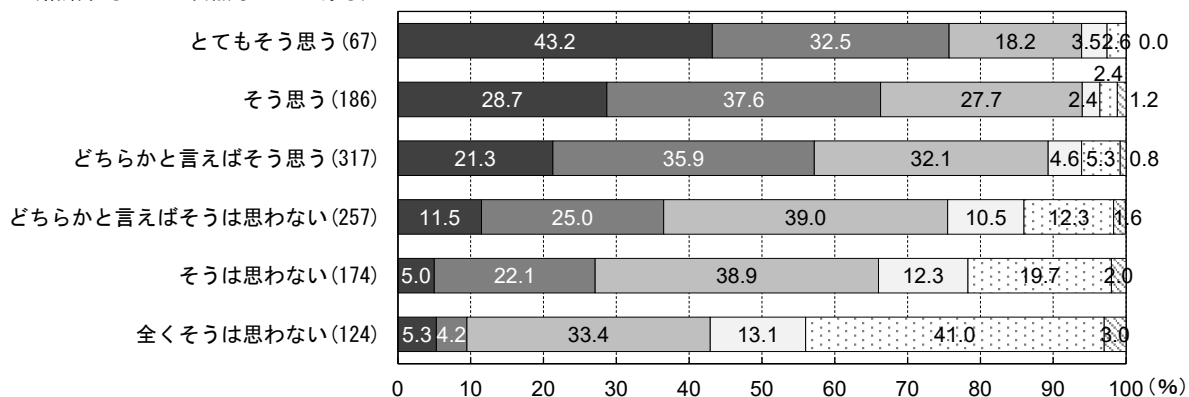
(結婚することは自然なことである)



(女性)

- すぐにでも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他

(結婚することは自然なことである)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1980	0.2241
P値	0.0000	0.0000

（「子どもを持つことは自然なことである」という価値観との関係を把握した）

子育てに対する価値観のうち、「子どもを持つことは自然なことである」という意見への賛同度と結婚意思との関係を調べた。

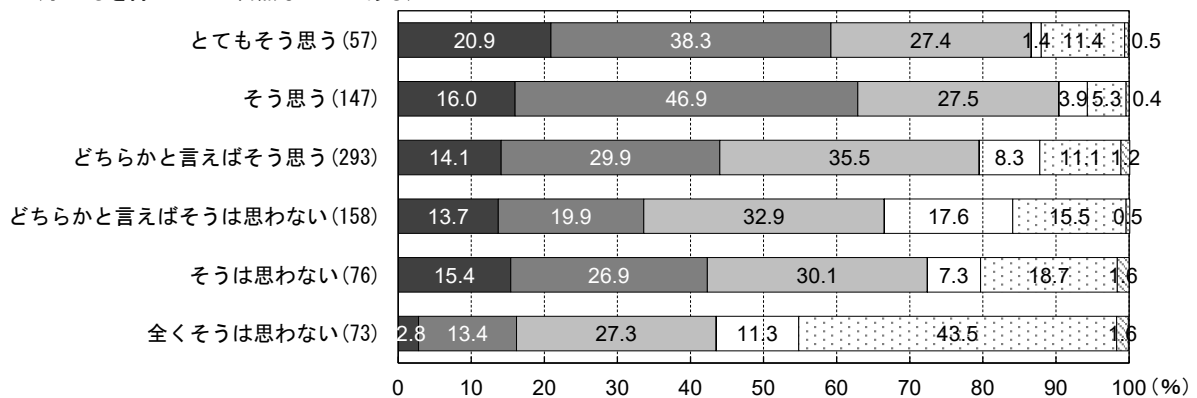
「子どもを持つことは自然」という価値観を表側として結婚意識をクロス集計すると、「結婚することは自然」ほどではないものの、相関関係が表れる（図 2.1.14）。また、結婚の場合と同様、女性の方が関係は明瞭である。

図 2.1.14 子育ての価値観別にみた結婚意思（未婚者）

（男性）

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他

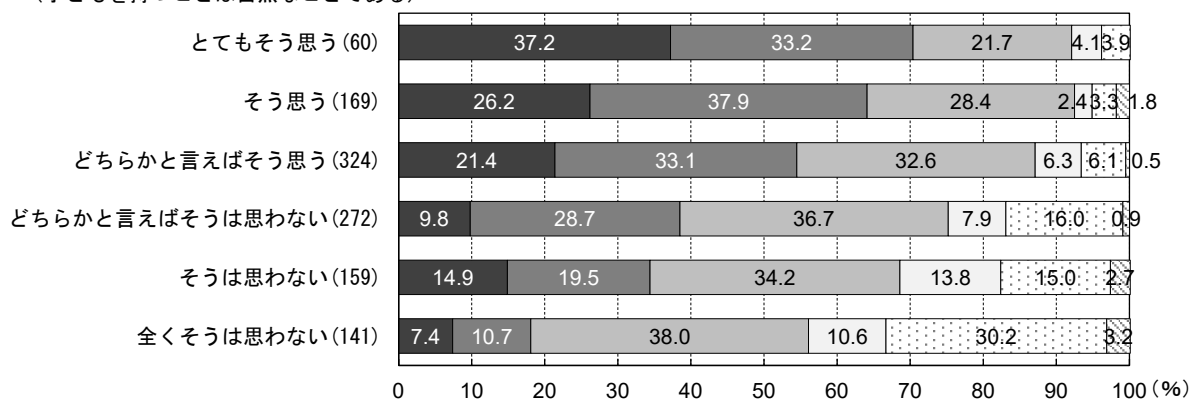
（子どもを持つことは自然なことである）



（女性）

- すぐにも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他

（子どもを持つことは自然なことである）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1490	0.1702
P値	0.0000	0.0000

（「一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい」は80%に上る）

「結婚することを重視していない」など多様な価値観がある中で、人生の根幹に関わる結婚の意味を把握するため、未婚者に対して「一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい」について賛同度を尋ねた。その結果、男女ともに約80%の肯定的な回答が得られた（図2.1.15）。

上の問は「誰か」を特定していないが、この問を分析軸にして結婚意識をクロス集計すると、男女とも強い相関が表れた（図2.1.16）。結婚の価値観が多様化する中で、根底的なところで結婚に対する希望を持つ者が多いと解釈できる可能性がある。

図2.1.15 「一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい」（未婚者）

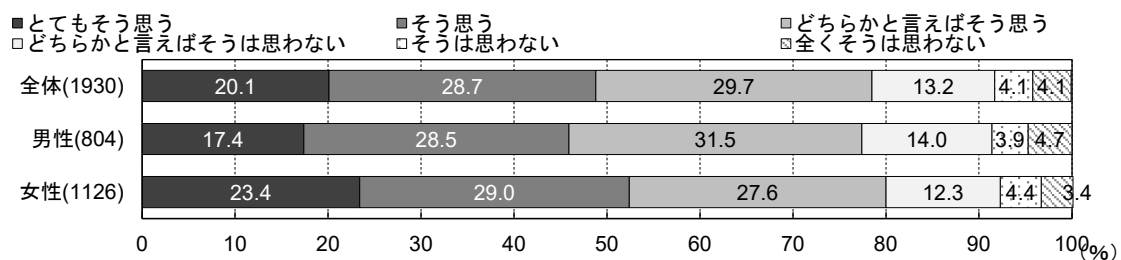
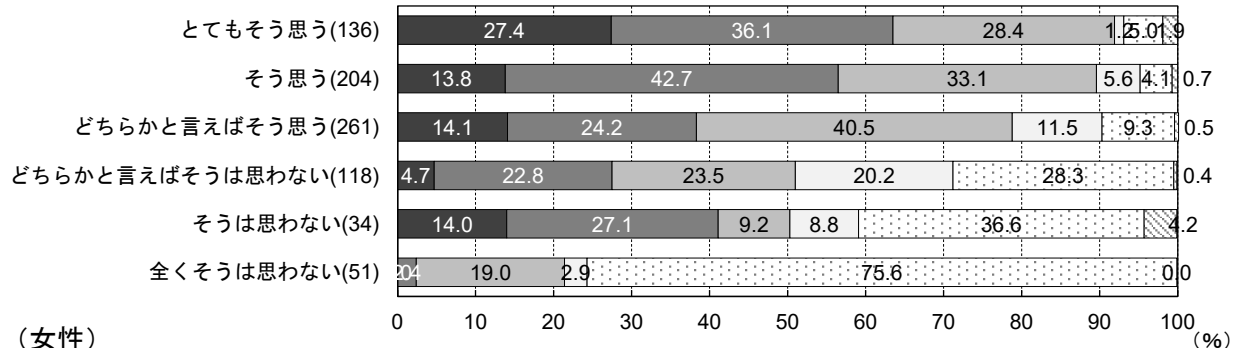


図2.1.16 「一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい」と結婚意思

（男性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

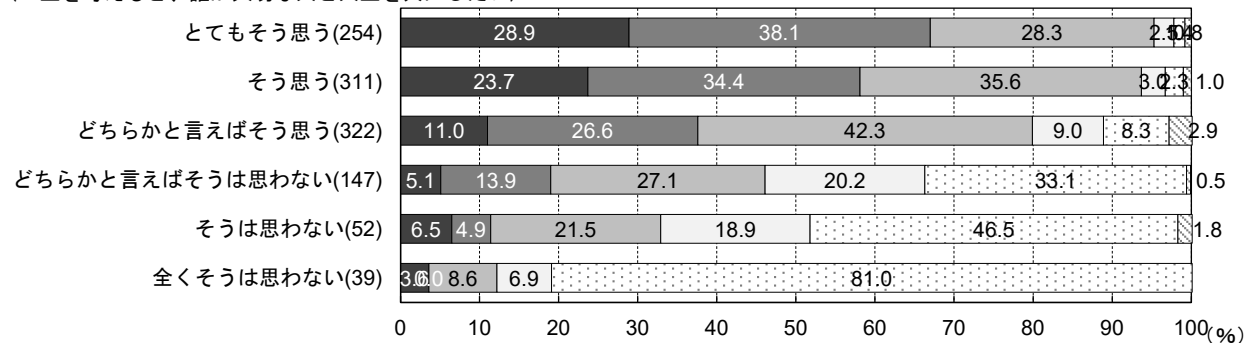
（一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい）



（女性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

（一生を考えると、誰か大切な人と人生を共にしたい）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2760	0.2928
P値	0.0000	0.0000

⑥自己肯定感・自己効力感

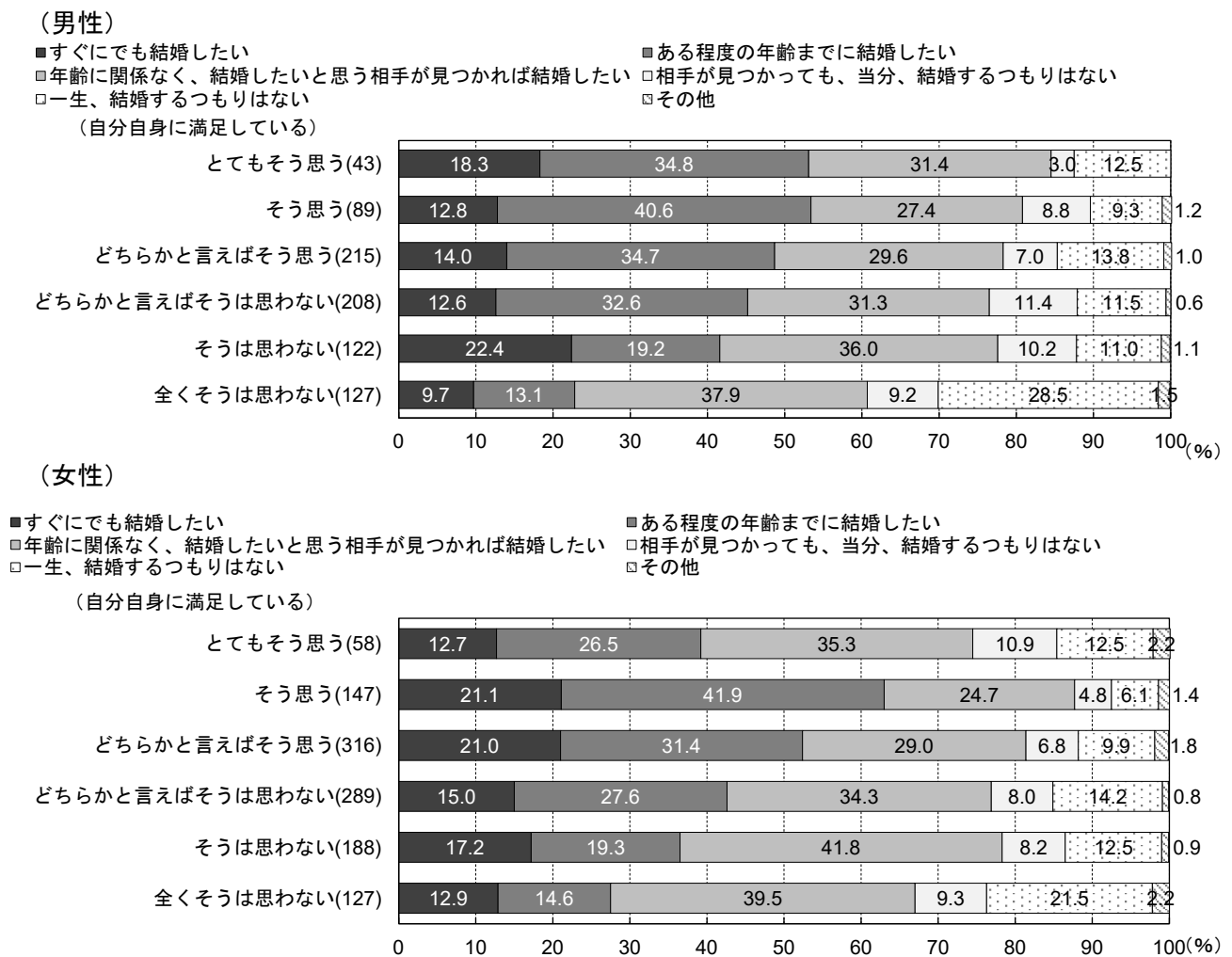
(結婚希望を持ってないでいる者が存在する)

結婚意思に対して自己意識（自分自身に対する意識）がどのように影響しているか把握するため、自己肯定感や自己効力感（自分は役に立つ、問題を解決できるという意識）と、結婚意思との関係を把握した。自己肯定感を測る質問として「自分自身に満足している」、自己効力感「自分はいまうまくいかわからないことにも意欲的に取り組む」を取り上げた（図 2.1.19）。

これらの質問を分析軸として結婚意思の集計を行うと、自己肯定感、自己効力感ともに、結婚意思との間に相関が表れる（図 2.1.17、図 2.1.18）。

これらの集計結果は、結婚に関する価値観や結婚のメリット・デメリットとは別に、自己意識が若年層の結婚意思に影響を及ぼす要因になっている可能性を示していると考えられる。自己肯定感や自己効力感が低く「結婚するつもりはない」と回答している者の中に、結婚意思がないのではなく、結婚の希望を持ってないでいる者が存在する可能性もある。

図 2.1.17 自己肯定感の強さ別にみた結婚意識（未婚者）



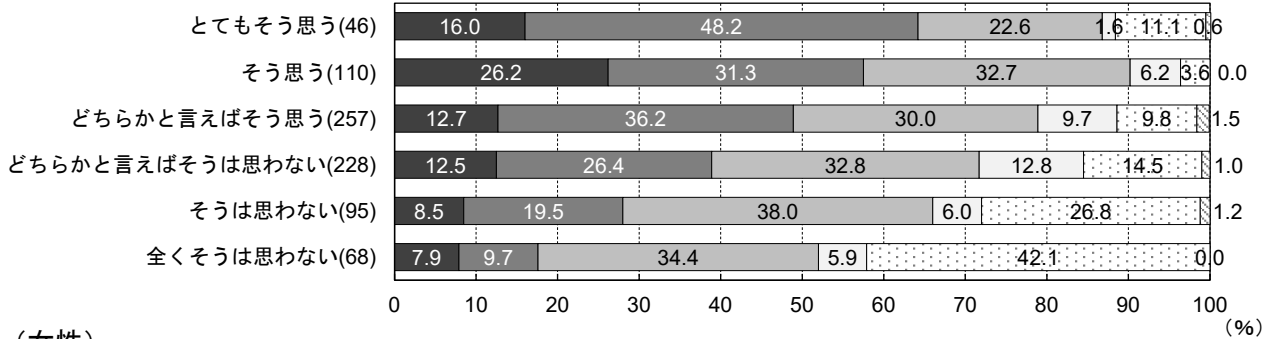
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1059	0.0884
P値	0.0081	0.0109

図 2.1.18 自己効力感の強さ別にみた結婚意識（未婚者）

（男性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

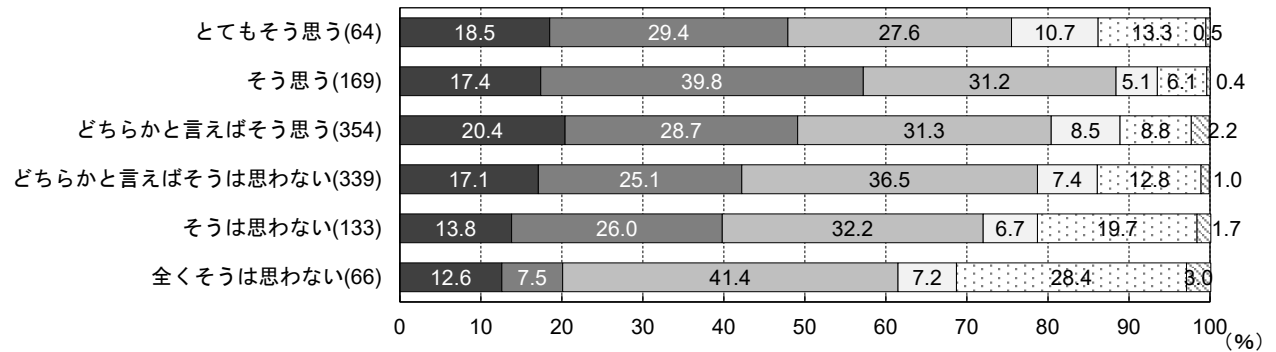
（自分はいまよくいかわからないことにも意欲的に取り組む）



（女性）

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

（自分はいまよくいかわからないことにも意欲的に取り組む）

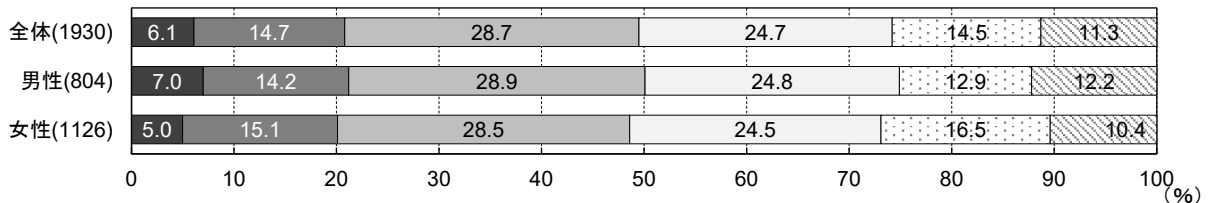


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1383	0.1065
P値	0.0000	0.0000

図 2.1.19 自己肯定感、自己効力感の分布（未婚者）

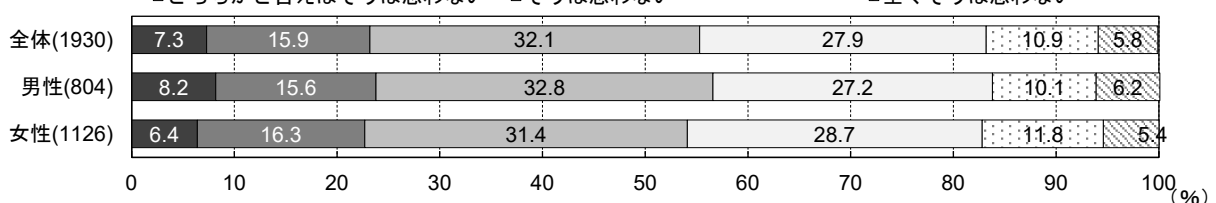
（自己肯定感）

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- 自分自身に満足している
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



（自己効力感）

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- 自分はいまよくいかわからないことにも意欲的に取り組む
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



⑦女性のキャリアアップ

(子育てをしている女性のキャリアアップ可能性が結婚意思に影響を及ぼす)

今回の意識調査では、女性のライフコースに関して仕事におけるキャリアアップの理想や、現在の職場で働く女性が子育てをしながらキャリアアップできるかなどを把握した。

図 2.1.20 の女性の回答をみると、子育てをしている女性のキャリアアップ可能性の評価が高いほど「すぐにでも結婚したい」や結婚の年齢志向が増加する傾向がみられる。反対に、「全くそうは思わない」では生涯非婚が23%に達する。

興味深いのは、子育てをしている女性のキャリアアップ可能性に対する男性の評価が、男性の結婚意思にも同様の影響を及ぼしているとみられることである。

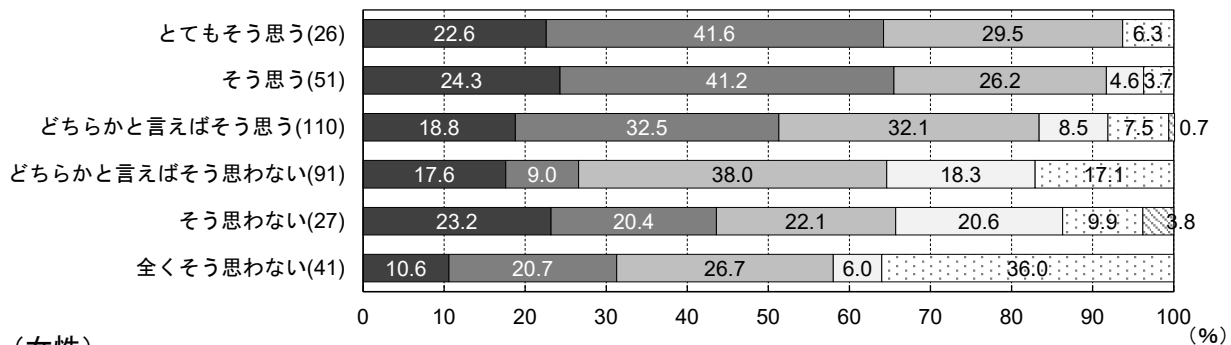
このように、職場での子育てをしている女性のキャリアアップ可能性が、男女両方の結婚意思に影響を及ぼしている可能性がある。

図 2.1.20 職場での子育てをしている女性のキャリアアップ可能性と結婚意思
(未婚者、就業者)

(男性)

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

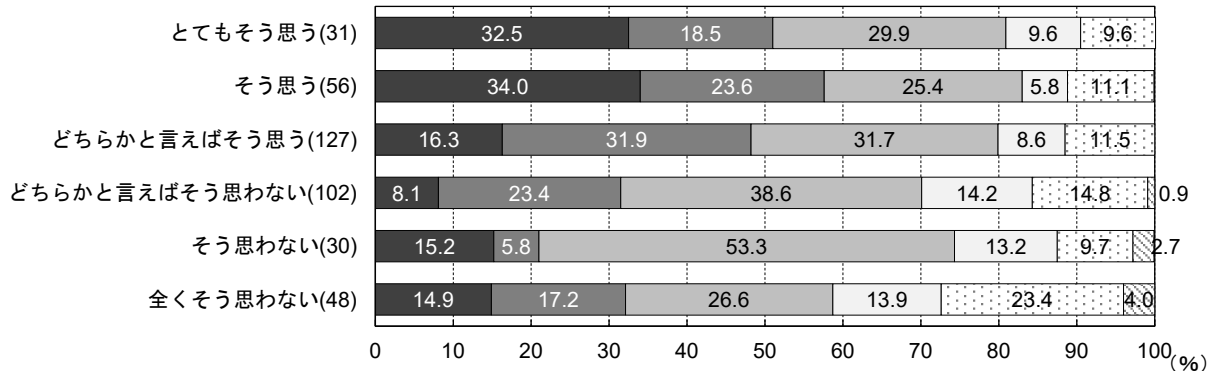
(職場では、働く女性が子育てをしながら、理想のキャリアアップをできると思うか)



(女性)

- すぐにでも結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 一生、結婚するつもりはない
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない
- その他

(職場では、働く女性が子育てをしながら、理想のキャリアアップをできると思うか)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1869	0.1546
P値	0.0000	0.0048

(3) 地域別の集計

(未婚者の結婚意思は、男女とも相楽東部が最も多い)

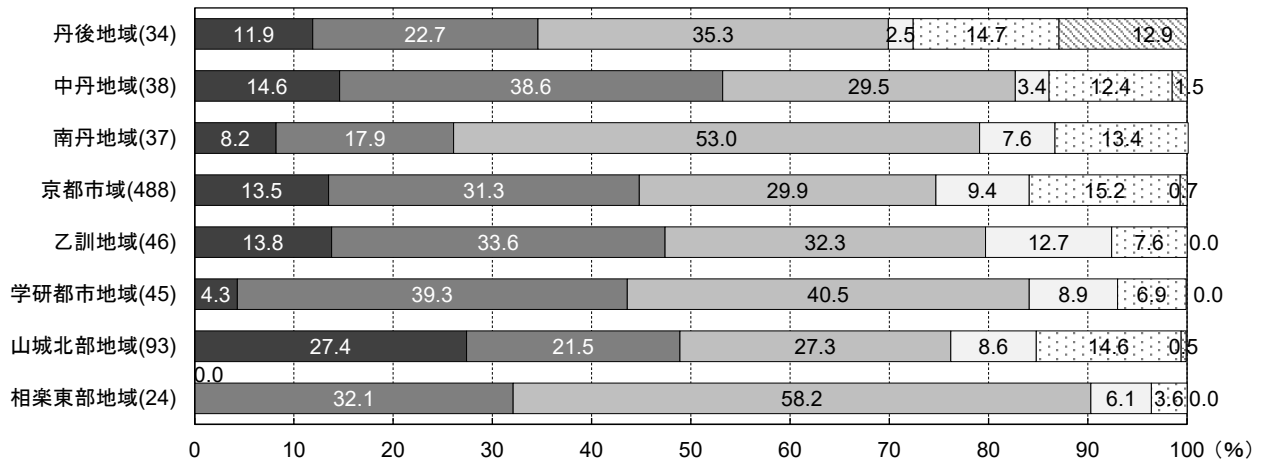
今回の意識調査では、地域毎の結婚についての考えについて把握した。

図 2.1.21 の回答をみると、男女ともに結婚意思を持つ者（「すぐにでも結婚したい」から「相手が見つかったら、当分、結婚するつもりはない（いつかは結婚したい）」は相楽東部が最も多くなっている。反対に、「一生、結婚するつもりはない」では、男性は京都市域が 15%と最も多く、女性は南丹が 16%と最も多くなっている。

図 2.1.21 地域別にみた結婚についての考え（未婚者、単数）

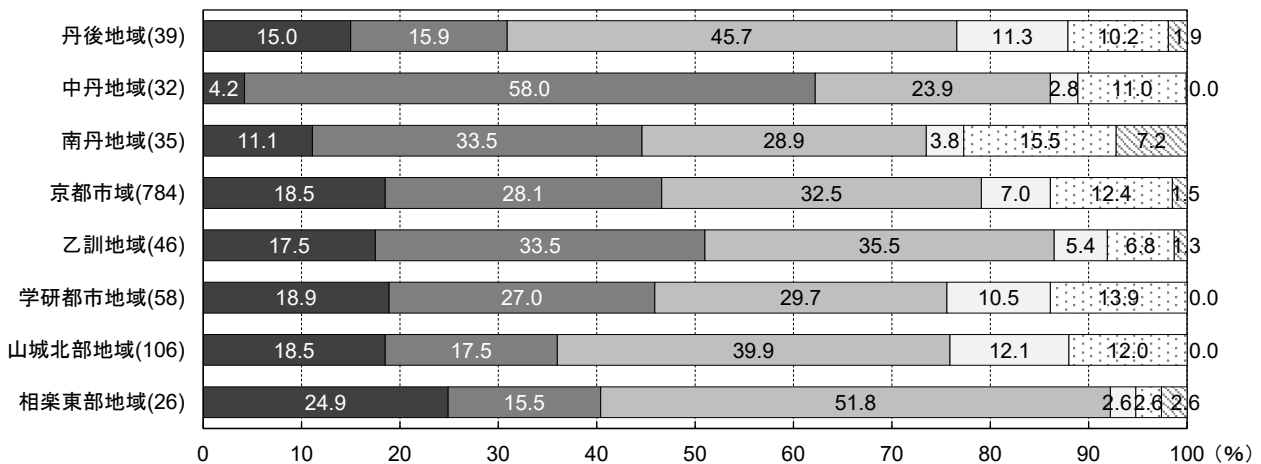
(男性)

- すぐにでも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかったら、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



(女性)

- すぐにでも結婚したい
- ある程度の年齢までに結婚したい
- 年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい
- 相手が見つかったら、当分、結婚するつもりはない
- 一生、結婚するつもりはない
- その他



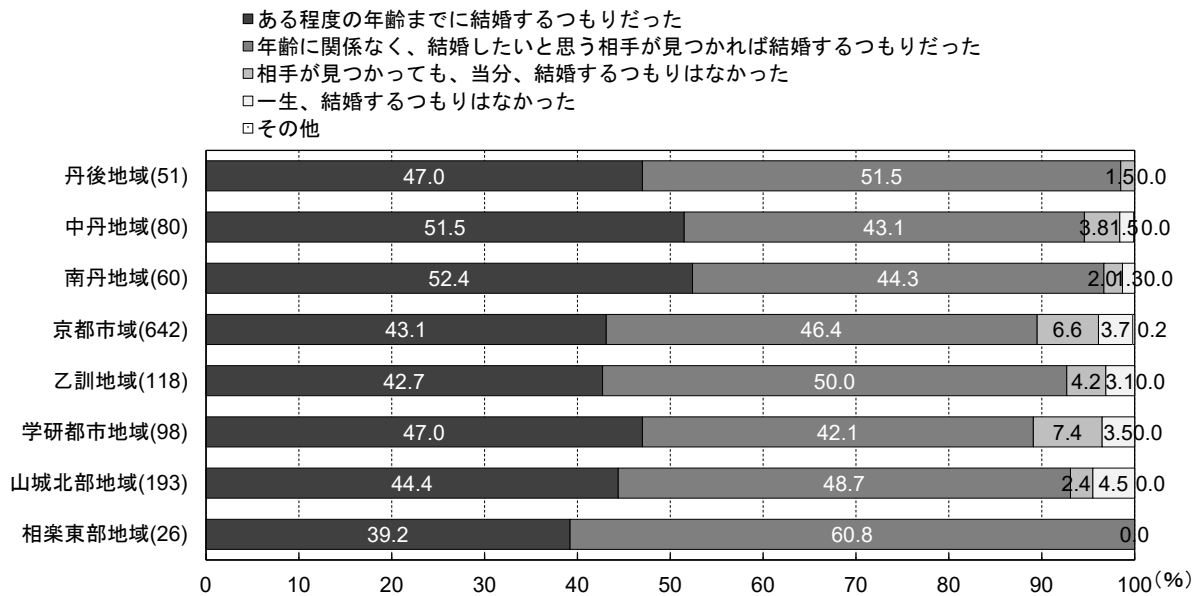
(有配偶者等の結婚意思は、相手志向では、多くの地域で90%を上回る)

有配偶者等に未婚時の結婚意識を振り返ってもらったと「ある程度の年齢までに結婚するつもりだった」という年齢志向が、男性では南丹が52%と最も多く、女性では相楽東部が52%と最も多い(図2.1.22)。

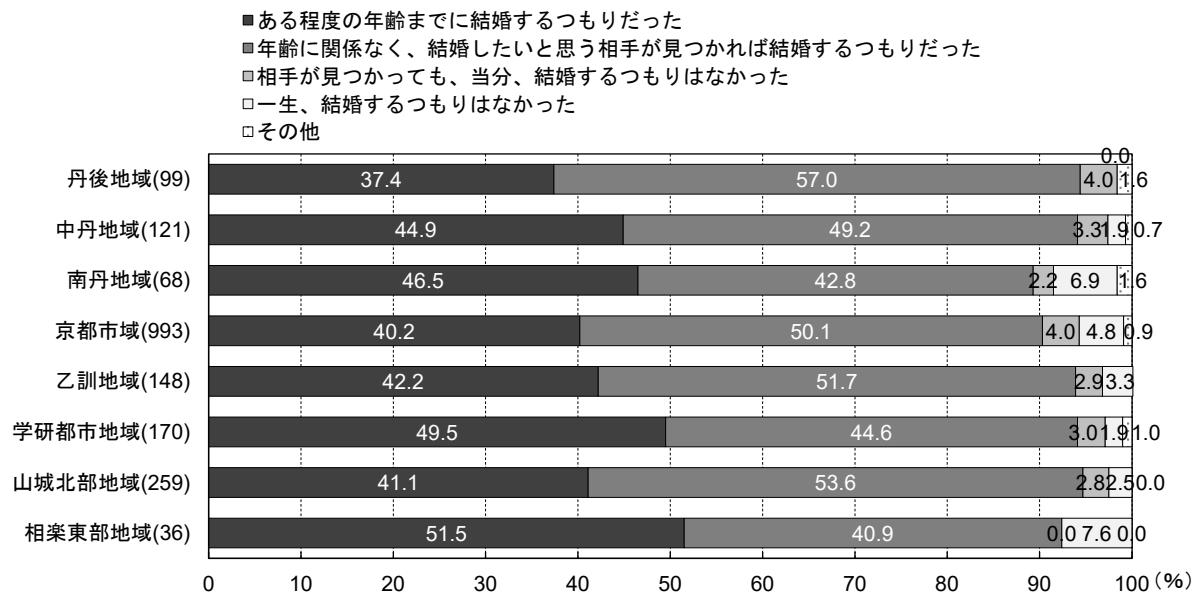
「年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚するつもりだった」という相手志向に合わせると、男性は京都市域と学研都市、女性は南丹を除くすべての地域で90%を上回る。

図2.1.22 地域別にみた結婚についての考え(有配偶者等、単数)

(男性)



(女性)



(結婚したい理由として「自然なことだから」という回答が丹後、南丹、中丹、山城北部で多い)
 地域別に結婚したい理由をみると、多くの地域で男女ともに「自分の子どもや家族を持てるから」「愛情を感じている人と暮らせるから」「精神的や安らぎの場が得られるから」といった結婚のメリットを挙げる回答が多い。また、男性では丹後、南丹、山城北部、女性では中丹、南丹で「自然なことだから」という回答が多くなっている(表 2.1.1)。

表 2.1.1 地域別にみた結婚したいと思う(思った)理由(複数)

(男性)

(%)

区分	N	愛情を感じている人と暮らせるから	自分の子どもや家族を持てるから	自然なことだから	精神的な安らぎの場が得られるから	親を安心させ、周囲の期待に応えられるから	社会的信用を得たり、周囲と対等になれるから	経済的に余裕が持てるから	生活上便利になるから	性的な充足が得られるから	親から独立できるから	その他
全体	1713	43.3	41.6	39.2	34.5	12.4	12.1	8.0	6.5	6.2	3.0	1.1
丹後	73	37.8	43.3	43.0	37.1	17.5	15.6	6.2	4.0	6.8	0.0	1.0
中丹	106	35.2	53.9	37.6	43.7	11.2	8.5	2.5	2.8	6.9	0.0	1.3
南丹	84	35.2	35.6	41.1	44.6	7.7	6.4	2.3	2.7	2.7	2.0	1.2
京都市域	906	45.2	39.5	37.9	34.7	12.5	13.5	10.2	7.8	6.8	3.1	1.2
乙訓	140	43.3	52.5	39.4	28.1	13.5	14.0	5.2	5.3	3.3	5.6	0.5
学研都市	121	41.6	43.3	38.8	21.2	17.3	19.7	8.0	6.0	11.9	2.8	1.8
山城北部	235	45.0	38.8	44.2	35.0	10.0	4.5	6.5	5.9	2.4	4.6	0.3
相楽東部	48	40.8	54.6	32.5	46.0	15.8	13.2	4.8	8.9	6.7	0.0	0.0

(女性)

(%)

区分	N	自分の子どもや家族を持てるから	愛情を感じている人と暮らせるから	精神的な安らぎの場が得られるから	自然なことだから	親を安心させ、周囲の期待に応えられるから	経済的に余裕が持てるから	社会的信用を得たり、周囲と対等になれるから	親から独立できるから	生活上便利になるから	性的な充足が得られるから	その他
全体	2613	47.8	41.9	34.4	27.3	16.8	13.0	8.7	7.3	4.9	1.5	0.9
丹後	123	52.4	39.8	35.0	34.4	14.2	8.1	9.5	5.5	5.0	1.1	2.7
中丹	139	51.7	32.3	30.4	37.9	18.5	10.5	5.5	5.9	3.3	0.5	0.0
南丹	86	40.8	33.9	30.6	40.3	17.8	10.2	9.6	12.5	6.9	2.8	1.6
京都市域	1506	46.4	43.8	36.5	24.6	16.4	14.8	9.5	6.0	5.0	1.4	0.9
乙訓	177	47.1	42.6	31.4	29.0	19.3	10.8	4.8	9.1	2.9	0.0	0.7
学研都市	203	56.0	38.1	33.3	27.3	17.9	9.7	6.5	10.4	4.4	3.4	0.5
山城北部	322	48.4	42.7	30.6	27.7	15.8	11.8	9.6	9.7	5.5	1.7	1.1
相楽東部	57	59.3	53.7	41.6	26.1	31.1	6.1	4.4	4.8	4.9	0.0	0.0

(結婚したい理由として「自然なことだから」という回答が丹後、南丹、中丹、山城北部で多い)
地域別に結婚するつもりはない理由をみると、多くの地域で「結婚することを重視していない」という価値観に関わる理由となっており、特に男性では中丹、女性では中丹、乙訓が多くなっている(表 2.1.2)。

表 2.1.2 地域別にみた結婚するつもりはない(結婚するつもりはなかった)理由(複数)
(男性) (%)

区分	N	結婚することを重視していないから	自分の時間が制約されるから	行動や生き方の自由が失われるから	金銭的な裕福さが失われるから	家族を支える責任が生じ、気楽さが失われるから	異性との交際の自由が失われるから	住宅や周囲の住環境の選択の幅が小さくなるから	現在の家族とのつながりが保ちにくくなるから	友人等との広い人間関係が保ちにくくなるから	職業を持たず、社会とのつながりが保ちにくくなるから	その他
全体	347	51.0	37.2	36.9	25.5	16.2	7.6	5.5	3.8	3.4	1.4	3.7
丹後	8	67.5	15.9	0.0	13.2	15.9	0.0	9.4	0.0	9.4	0.0	10.0
中丹	11	71.3	34.2	78.2	26.8	8.7	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
南丹	13	45.3	14.7	44.9	28.9	14.7	0.0	0.0	14.7	0.0	14.2	0.0
京都市域	217	47.3	37.9	32.8	24.1	16.5	8.9	6.8	3.9	4.2	0.9	4.3
乙訓	24	50.6	51.6	59.3	40.1	22.4	6.8	0.0	0.0	0.0	3.1	0.0
学研都市	22	60.4	45.5	61.9	26.6	12.5	0.0	12.1	3.8	3.4	0.0	3.8
山城北部	50	57.9	33.5	24.5	26.1	17.0	7.4	0.0	3.4	1.6	1.6	4.0
相楽東部	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(女性) (%)

区分	N	結婚することを重視していないから	自分の時間が制約されるから	行動や生き方の自由が失われるから	家族を支える責任が生じ、気楽さが失われるから	金銭的な裕福さが失われるから	現在の家族とのつながりが保ちにくくなるから	友人等との広い人間関係が保ちにくくなるから	住宅や周囲の住環境の選択の幅が小さくなるから	異性との交際の自由が失われるから	職業を持たず、社会とのつながりが保ちにくくなるから	その他
全体	372	62.4	50.0	43.7	14.5	11.8	6.6	3.4	3.1	2.6	2.6	5.7
丹後	11	60.1	77.7	40.0	28.0	6.0	0.0	12.7	0.0	0.0	10.3	10.3
中丹	13	72.4	43.9	43.3	0.0	21.3	0.0	13.9	6.9	7.4	0.0	0.0
南丹	14	62.6	61.3	55.8	16.6	10.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.9
京都市域	249	61.7	48.2	44.0	15.8	10.8	6.0	4.1	1.8	1.1	2.6	6.2
乙訓	16	84.7	39.3	34.2	25.4	25.2	8.7	0.0	5.1	0.0	4.9	10.2
学研都市	23	52.4	57.9	47.3	5.0	13.1	9.5	0.0	5.7	13.9	4.5	0.0
山城北部	43	61.6	52.9	40.1	10.5	10.6	12.4	0.0	8.6	5.7	1.6	1.6
相楽東部	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 相楽東部は、十分な標本サイズを得られなかったため掲載を省略した

2. 未婚者の結婚予想

(1) 結婚の予想

（「結婚できそうにない」は約 30%を占める）

図 2.2.1 では、「結婚できそうにない」が男性で 26%、女性で 30%を占める。未婚者の自分の結婚に対する予想は「希望の実現予想」と捉えられ、これらの回答は結婚希望が実現できないと予想している未婚者の割合とみなすことができる。「結婚するつもりはない」と合計すると、男性 41%、女性 46%に上る。

結婚意思と同様、結婚の予想も年齢との相関がみられる（図 2.2.2）。「結婚できそうにない」は、女性では、20-25 歳と 30-34 歳の間（+16 ポイント）、30-34 歳と 35-39 歳の間（+14 ポイント）で増加が大きい。

図 2.2.1 結婚の予想（未婚者、単数）

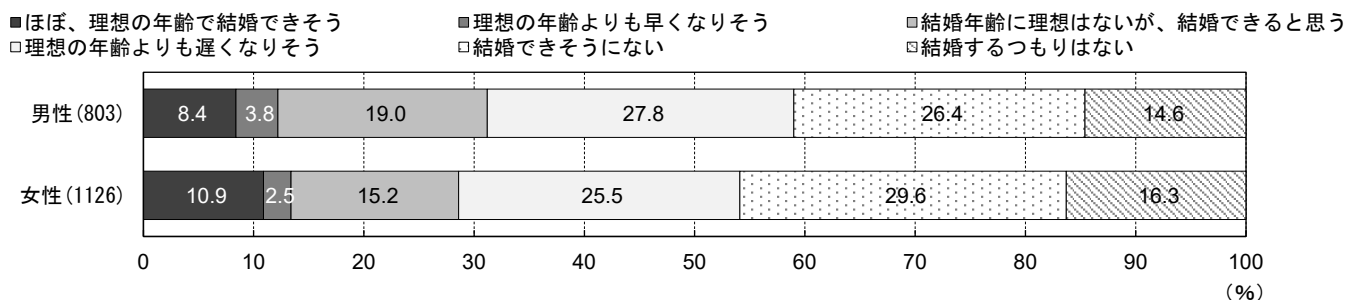
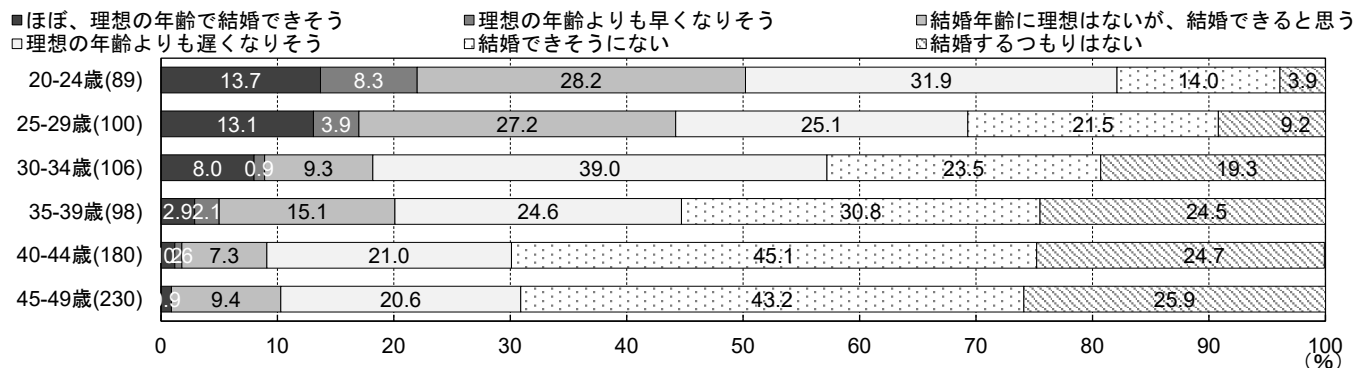
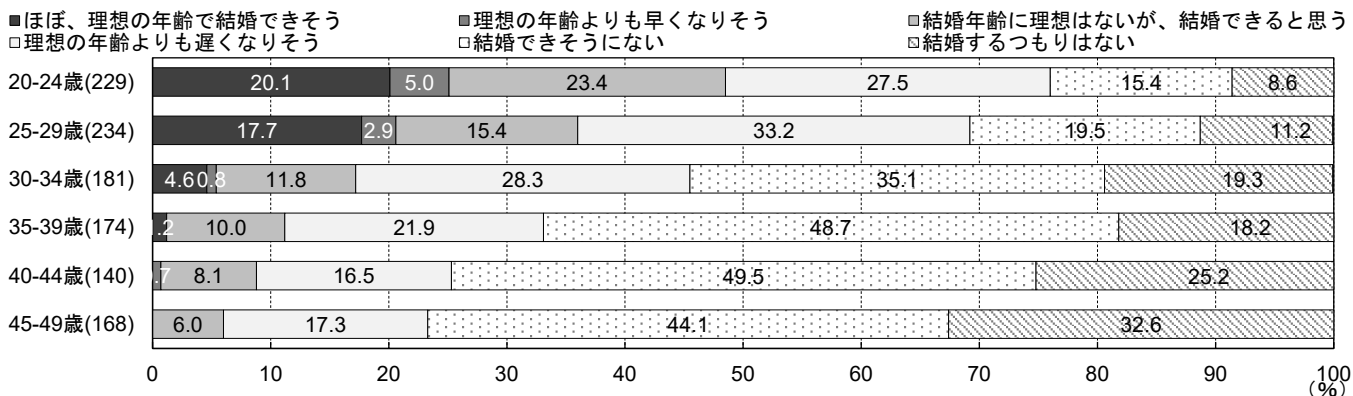


図 2.2.2 年齢階層別にみた結婚の予想（未婚者、単数）

(男性)



(女性)



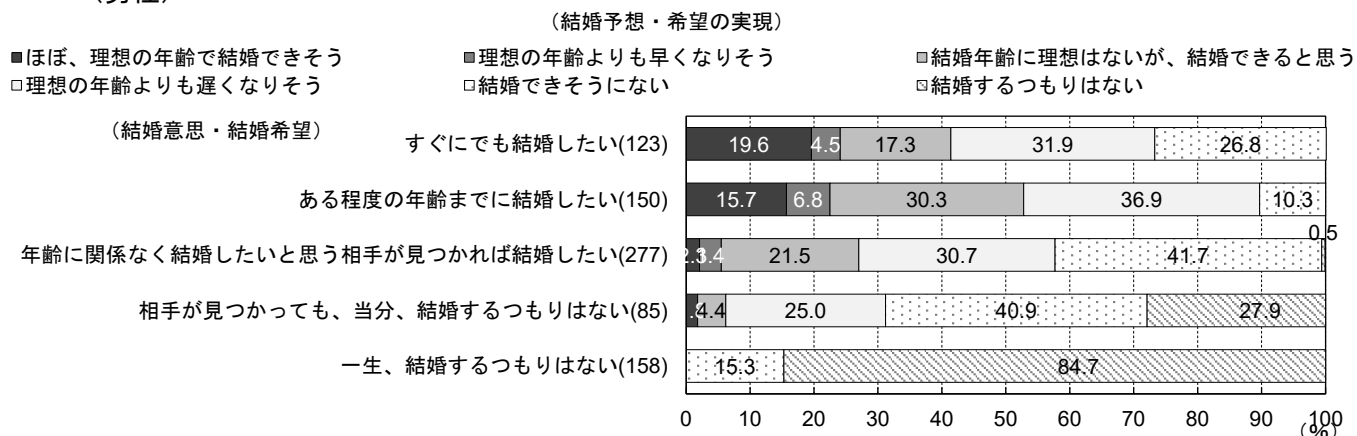
(結婚の実現予想が結婚意思に影響している可能性がある)

図 2.1.1 の未婚者の結婚意識を分析軸にして結婚予想を集計すると、結婚の意思が強い者ほど、「結婚できる」「ほぼ、理想の年齢で結婚できそう」から「理想の年齢よりも遅くなりそう」の合計)が多くなる傾向がみられる(図 2.2.3)。これは、結婚に対する見通しが、結婚意志(結婚希望)に影響を及ぼしていると解釈することもできる。

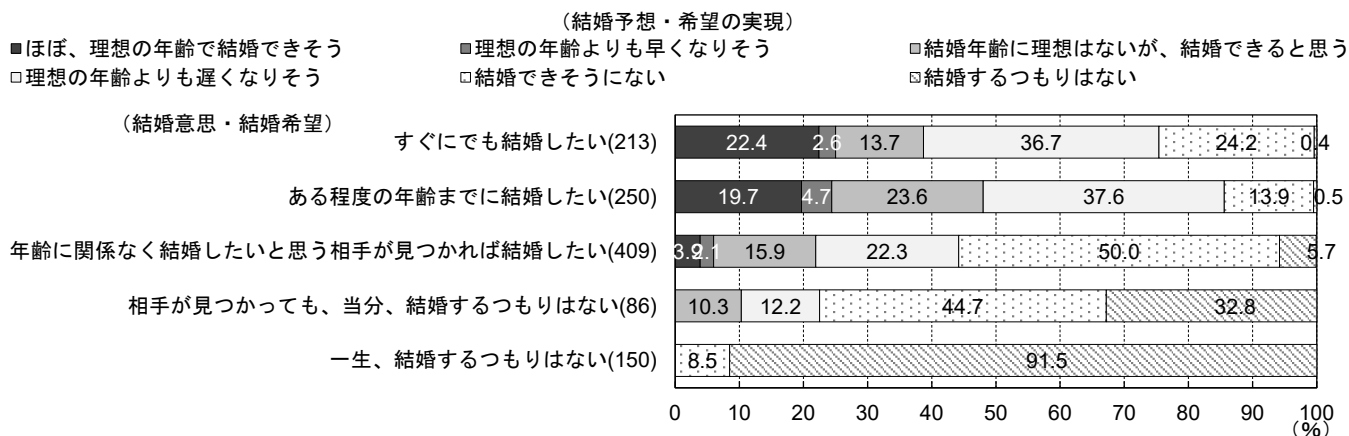
また、結婚の「相手志向(年齢に関係なく結婚したいと思う相手が見つければ結婚したい)」では、「結婚できそうにない」が、男性で 42%、女性では 50%に上ることが注目される。「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはない」と同程度の割合である。結婚に対する、男女の出会いの機会等の重要性を示していることが考えられる。

図 2.2.3 結婚意思(結婚希望)と結婚予想(希望の実現)

(男性)



(女性)



(2) 未婚者の結婚予想に対して影響が想定される要因

①結婚できそうにない理由

(「結婚したいと思う相手と出会いそうにない」が最も多い理由)

結婚の予想に対して「結婚できそうにない」と回答した未婚者を対象に、その理由を把握した(図 2.2.4)。「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」が最も多く、特に女性では72%に達する。結婚意思の「相手志向」の多さと男女の出会いの機会の不足が相まったものと考えられる。

これに次いで回答が多い「異性とうまく付き合えないから」や「自分に自信を持ってないから」は、過去の交際経験や自己意識の問題が影響を及ぼしている可能性が考えられる。

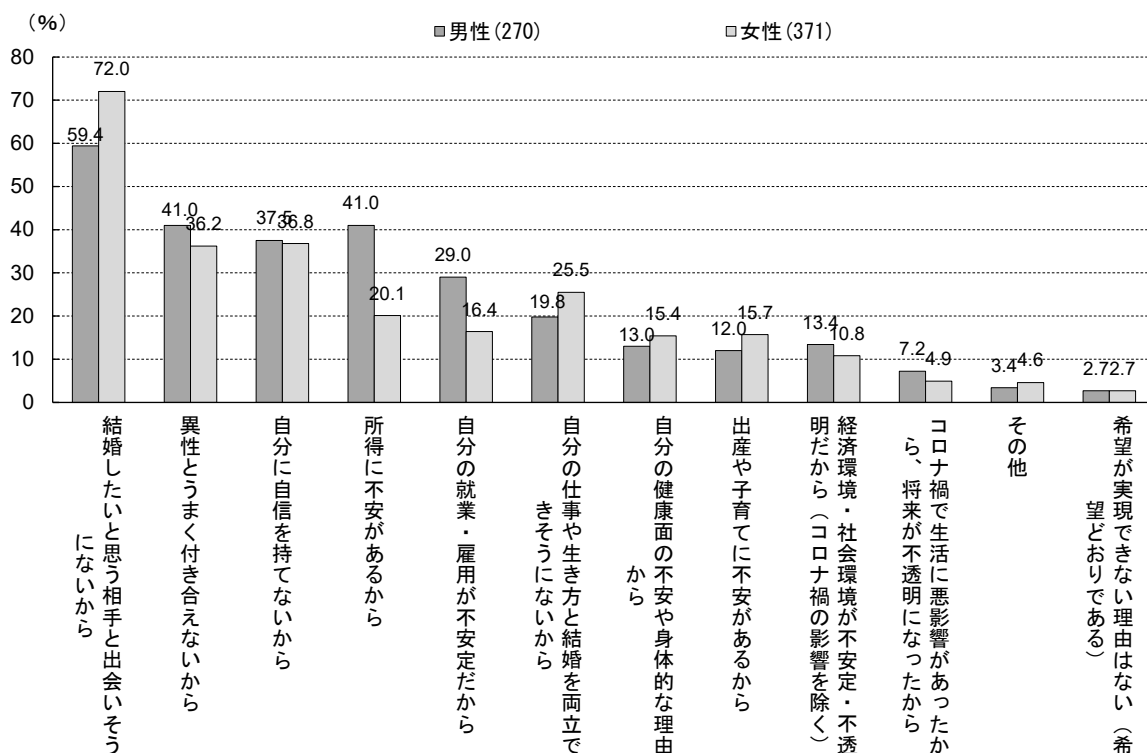
「所得に不安があるから」や「自分の就業・雇用が不安定だから」は男性に多く、前者は41%、後者は29%に上る。収入額や所得のゆとり感、就業形態の結婚予想への影響は既に分析した通りである。

「自分の仕事や生き方と結婚を両立できそうにないから」は女性に多い。男性20%に対して女性は26%に上る。

結婚意思に関する「結婚したいと思う理由」や「結婚するつもりはない理由」は結婚等の価値観の問題が大きな割合を占めていたが、「結婚できそうにない理由」は結婚希望の実現を妨げる多くの具体的な理由が挙がっている。

図 2.2.4 結婚できそうにない理由

(未婚者、結婚意思があり結婚予想に対して「結婚できそうにない」と回答した者、複数)



②所得

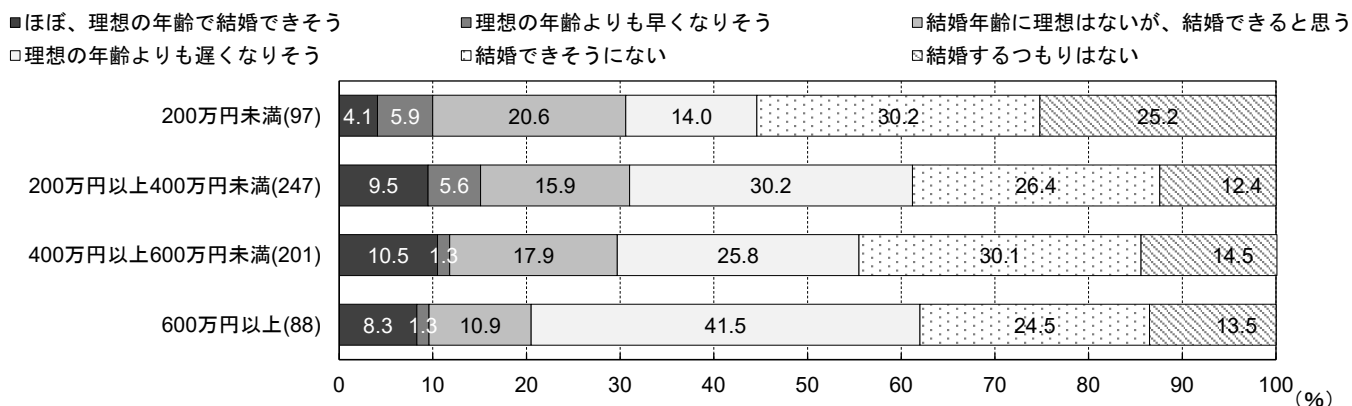
(結婚予想は「所得のゆとり感」の影響を受ける)

図 2.1.7 の通り、所得と結婚意思の間には緩やかな相関がみられたが、所得と未婚者の結婚予想では、はっきりとした相関は表れない(図 2.2.5)。

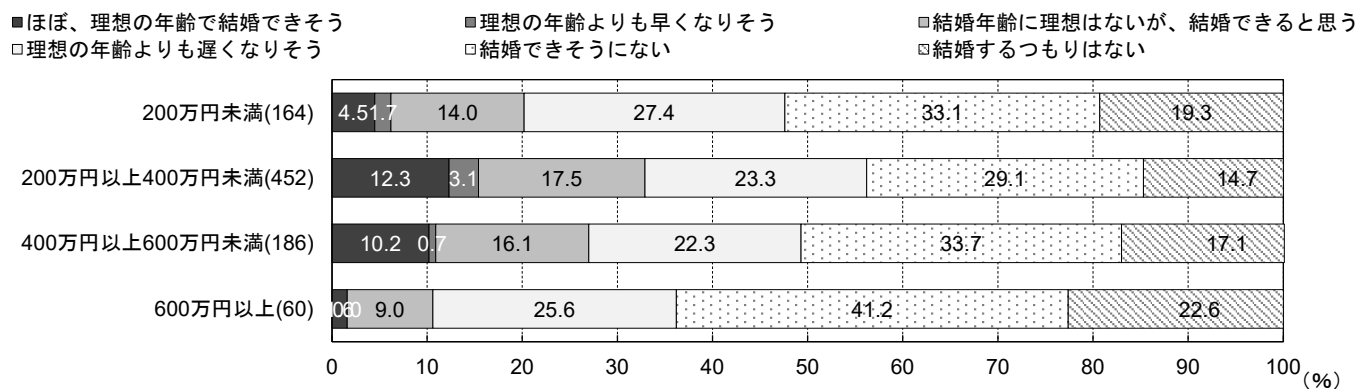
ところが、所得のゆとり感と結婚予想との相関をみると、所得のゆとり感と結婚意思よりも明瞭な相関が表れる(図 2.2.6)。所得水準の高さは所得のゆとり感を増すため、若年層の所得向上が求められるものの、結婚予想は、結婚を前提とした本人の所得の主観的評価や、住居地と関連した生活費の影響を受けていることも考えられる。

図 2.2.5 昨年の年収別にみた結婚予想(未婚者、就業者)

(男性)



(女性)

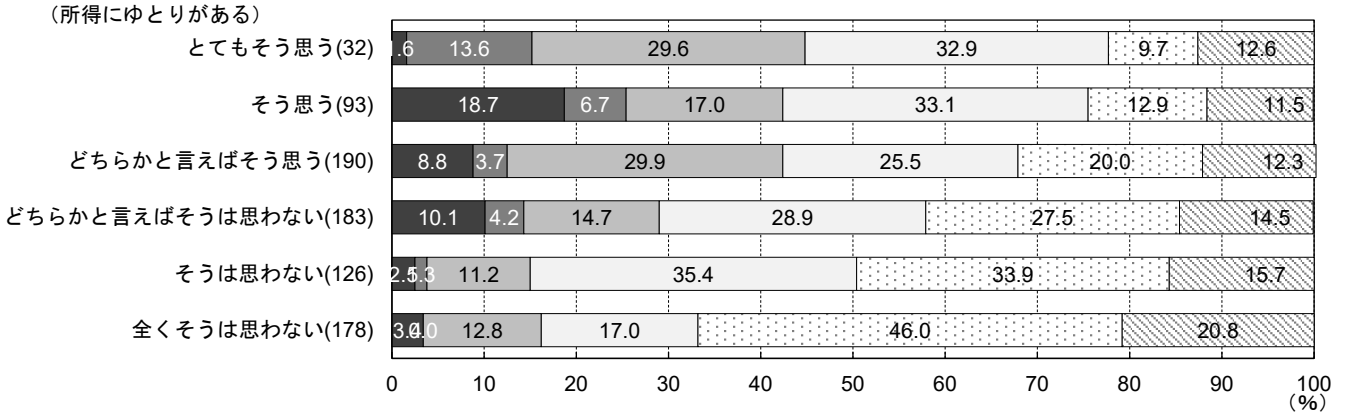


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1051	0.0742
P値	0.1373	0.5064

図 2.2.6 所得にゆとり感別にみた結婚予想（未婚者、就業者）

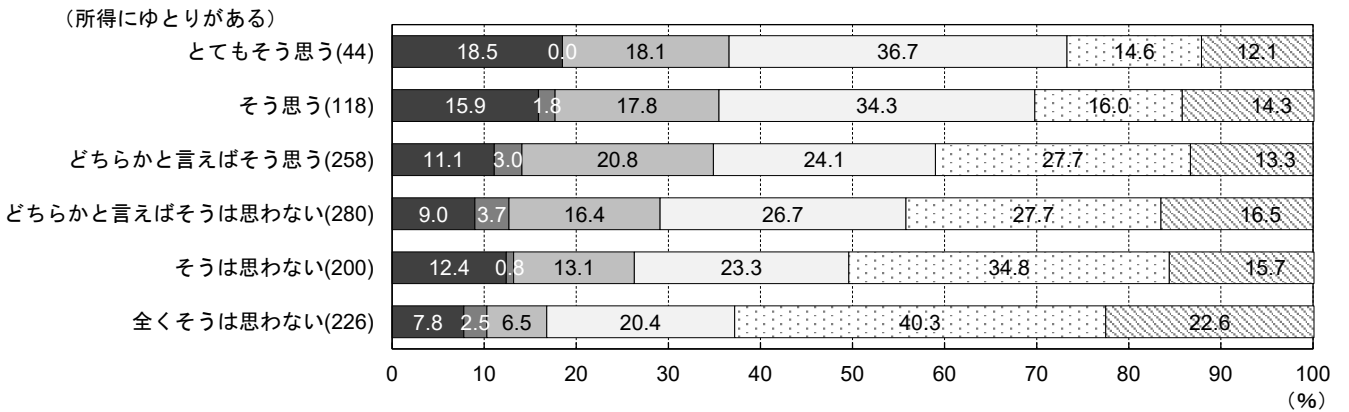
(男性)

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できると思う
- 結婚するつもりはない



(女性)

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できると思う
- 結婚するつもりはない



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1518	0.1076
P値	0.0000	0.0000

③就業形態

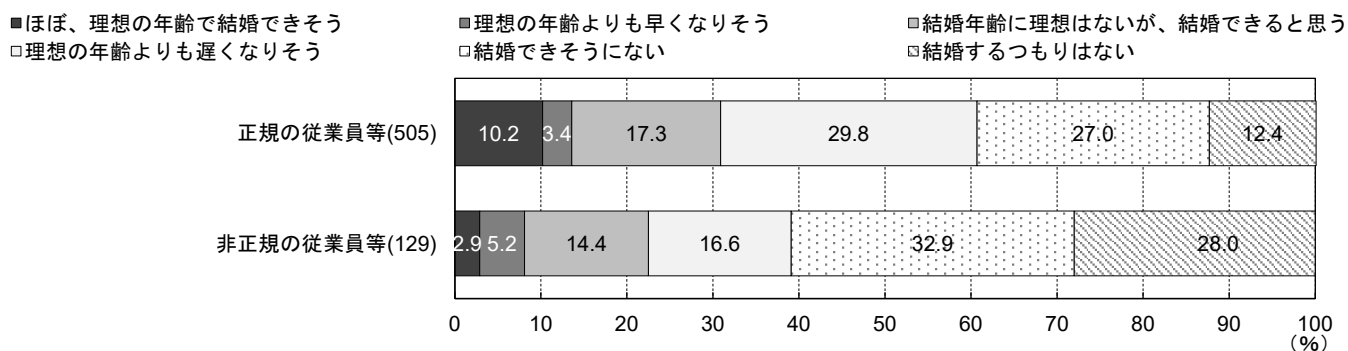
(就業形態は男女両方の「結婚できそうにない」という予想を増やす)

図 2.1.11 の通り、男性では非正規の従業員等であると生涯非婚が約 2 倍に増加する。図 2.2.7 では、非正規であると、生涯非婚に加えて、結婚予想のうち「結婚できそうにない」が正規の従業員等に対して 6 ポイント増加している。女性の「結婚できそうにない」は、正規の従業員等に対して非正規では 5 ポイント増加する。

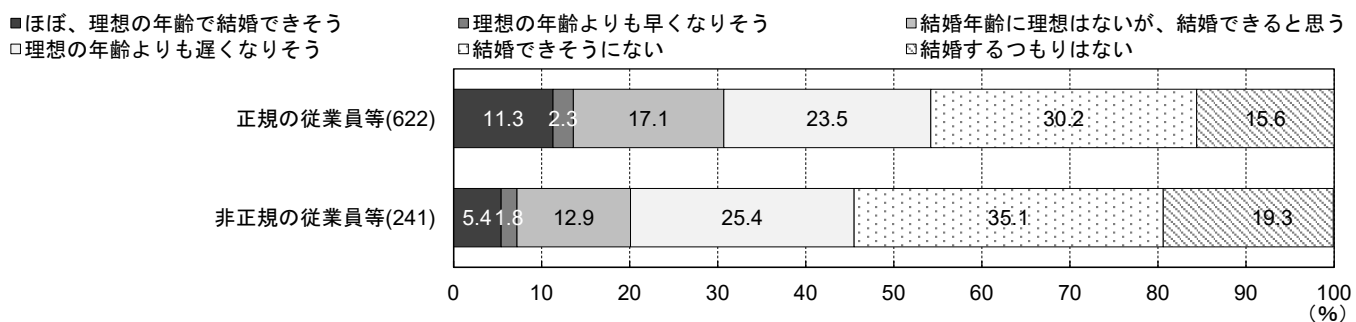
結婚意思の場合ほど明瞭ではないものの、就業形態の影響は、非正規の従業員であると、男女の両方で「結婚できそうにない(結婚希望が実現できそうにない)」と考える者をやや増加させる形でも表れる。

図 2.2.7 就業形態別にみた結婚予想(未婚者、就業者)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1554	0.1027
P値	0.0091	0.1049

(注)「正規の従業員等」とは、正規の職員・従業員、会社などの役員、自営業主・家族従業者、家庭での内職であり、「非正規の従業員等」は、パート・アルバイト、派遣・嘱託・契約職員である

④交際状況

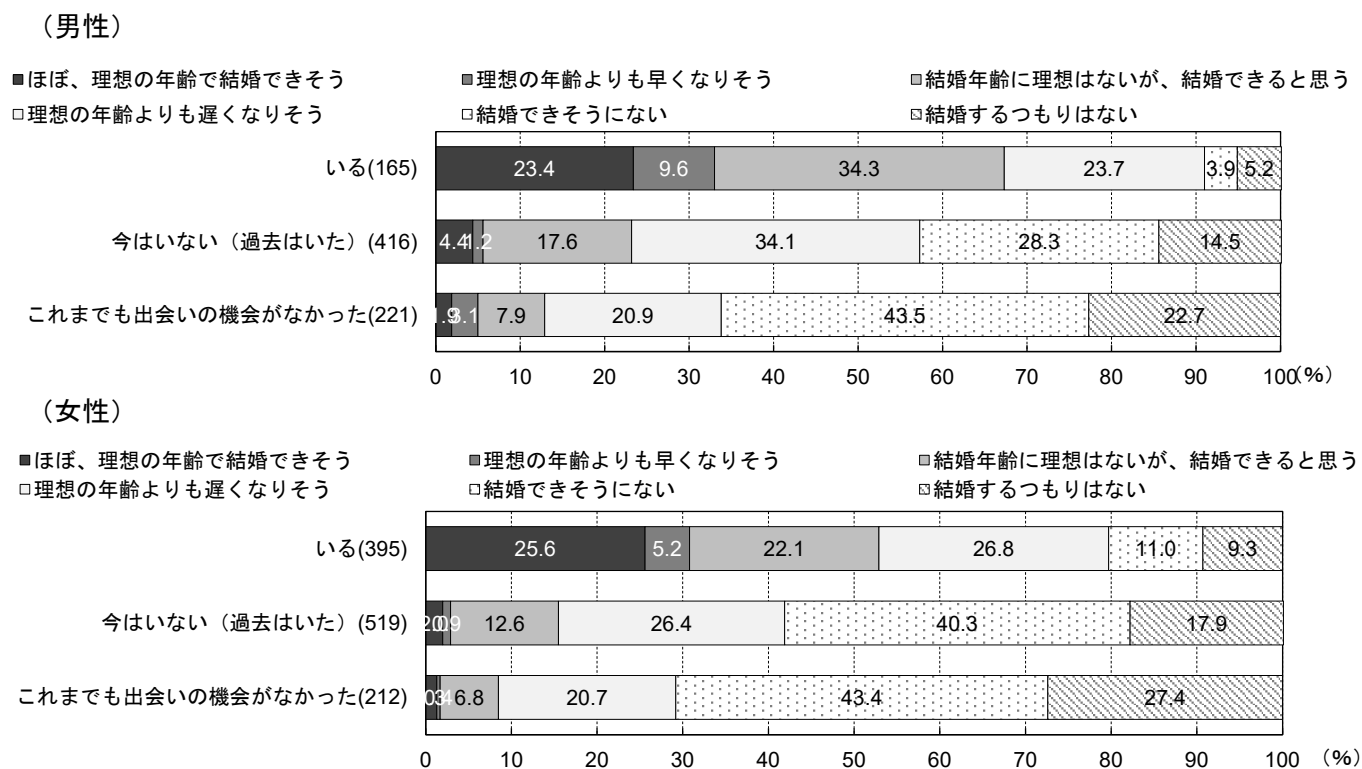
(結婚予想に対する交際経験の影響は結婚意思への影響よりも明確)

後述する図 2.7.1 の交際状況を分析軸にして未婚者の結婚予想を集計すると、結婚意思よりも明瞭な相関が表れる (図 2.2.8)。

特に、「これまでも出会いの機会がなかった」とすると、「結婚するつもりはない」に加えて「結婚できそうにない」が男性で 44%に増加し、そうでない者との差が大きい。女性では 43%であるが、「今はいない」でも「結婚できそうにない」が 40%に上る。

男女の出会いの状況は、未婚者の結婚予想に明らかな影響を及ぼし、このことが結婚意志に反映されていることも考えられる。

図 2.2.8 交際状況別にみた結婚予想 (未婚者)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3499	0.3517
P値	0.0000	0.0000

⑤自己肯定感・自己効力感

(自己肯定感・自己効力感は、結婚予想に対して強い影響力を持っている)

自己肯定感や自己効力感が少ないと、結婚意思に対して結婚の相手志向や生涯非婚が増える傾向があった(図2.1.17、図2.1.18)。

結婚の予想に対しては、自己肯定感が低くなるほど男女とも「結婚できそうにない」が著しく増える傾向が明らかである(図2.2.9)。自己肯定感は結婚予想に対して強い影響力を持つとみられる。

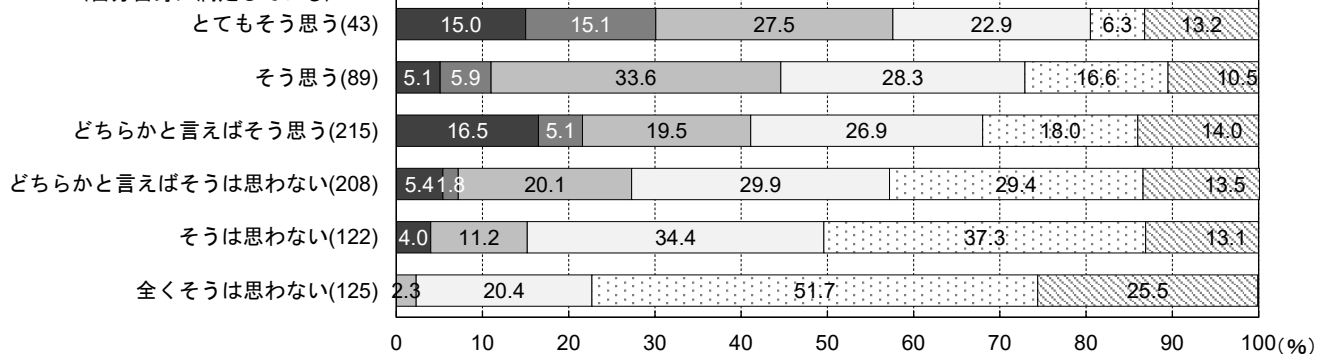
自己効力感でも同様の集計結果が得られた(図2.2.10)。

図2.2.9 自己肯定感の強さ別にみた結婚予想(未婚者)

(男性)

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できると思う
- 結婚するつもりはない

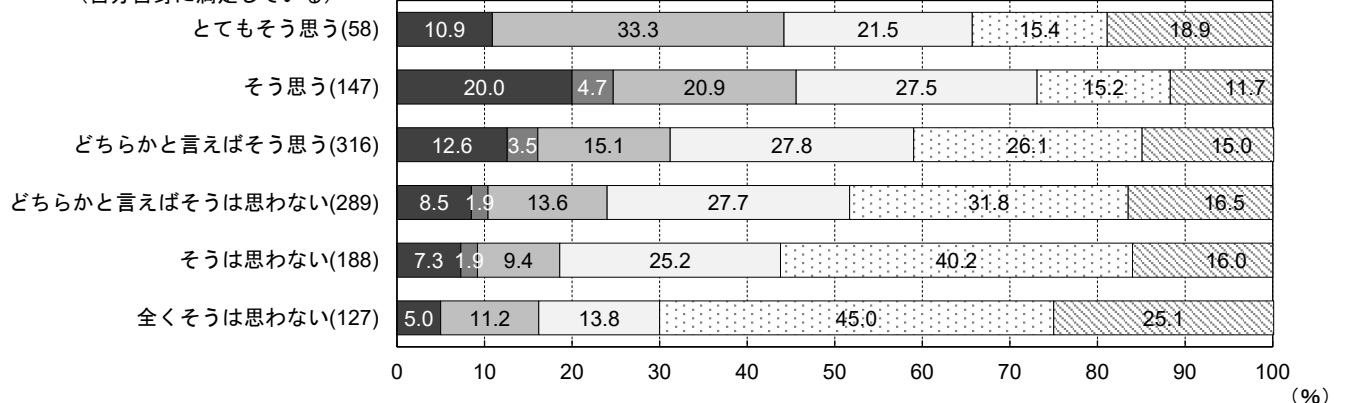
(自分自身に満足している)



(女性)

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できると思う
- 結婚するつもりはない

(自分自身に満足している)



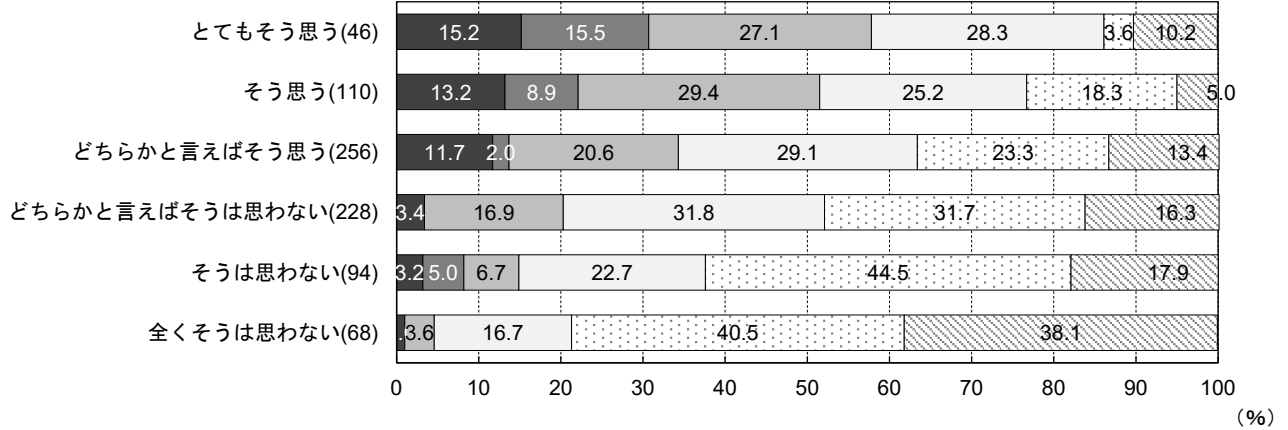
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1602	0.1310
P値	0.0000	0.0000

図 2.2.10 自己効力感の強さ別にみた結婚予想（未婚者）

（男性）

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できと思う
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚するつもりはない

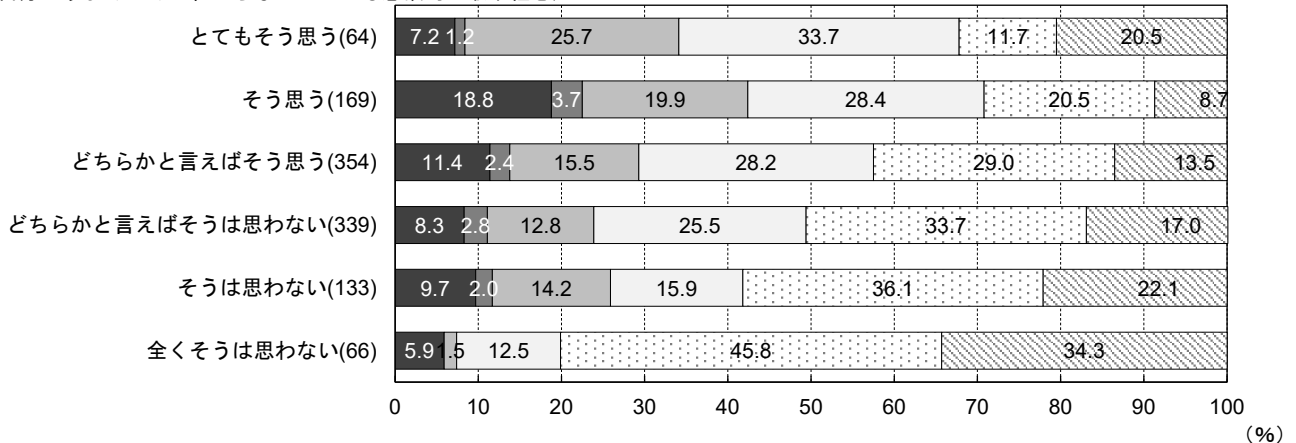
（自分はいまうまくいかわからないことにも意欲的に取り組む）



（女性）

- ほぼ、理想の年齢で結婚できそう
- 理想の年齢よりも早くなりそう
- 結婚年齢に理想はないが、結婚できと思う
- 理想の年齢よりも遅くなりそう
- 結婚できそうにない
- 結婚するつもりはない

（自分はいまうまくいかわからないことにも意欲的に取り組む）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1741	0.1252
P値	0.0000	0.0000

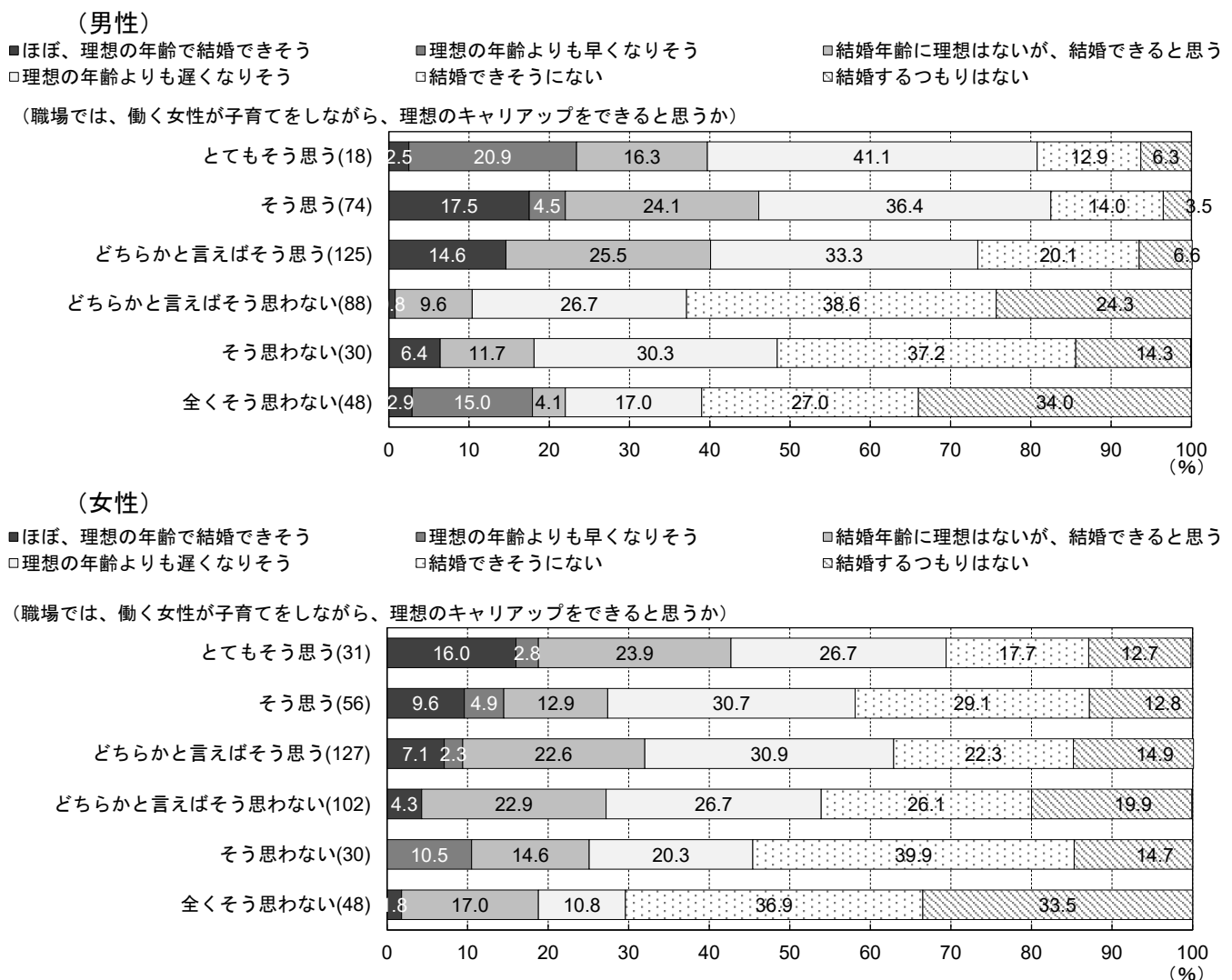
⑥女性のキャリアアップ

(職場における子育て中の女性のキャリアアップ可能性は結婚予想に影響を及ぼす)

結婚意識と同様、結婚予想と、現在の職場での子育てをしている女性のキャリアアップ可能性との関係を調べた。その結果、女性では、子育てをしている女性がキャリアアップできるかに対して「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答する者は、「結婚できそうにない」が大きく増加している(図2.2.11)。

男性でも、子育てをしている女性のキャリアアップ可能性に対する評価が否定的であると、自分が「結婚できそうにない」と予想する者が大幅に増加する。

図 2.2.11 職場での子育てをしている女性のキャリアアップ可能性と結婚予想
(未婚者、就業者)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2010	0.1438
P値	0.0000	0.0282

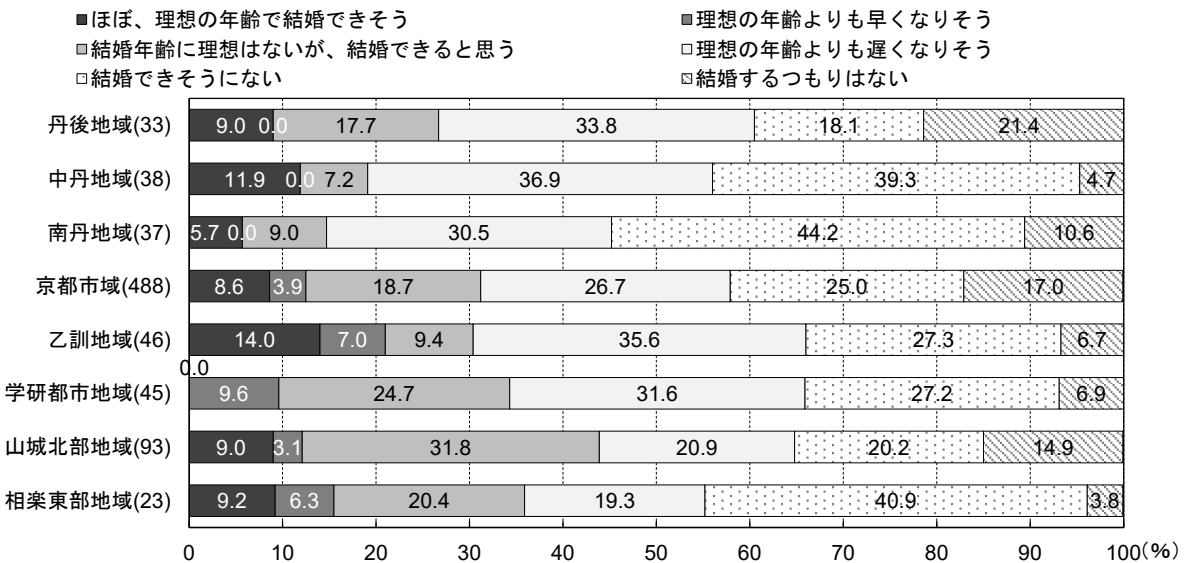
(3) 地域別の集計

(「結婚できそうにない」と回答した方は、男性は相楽東部、女性は丹後が多く40%を上回る)

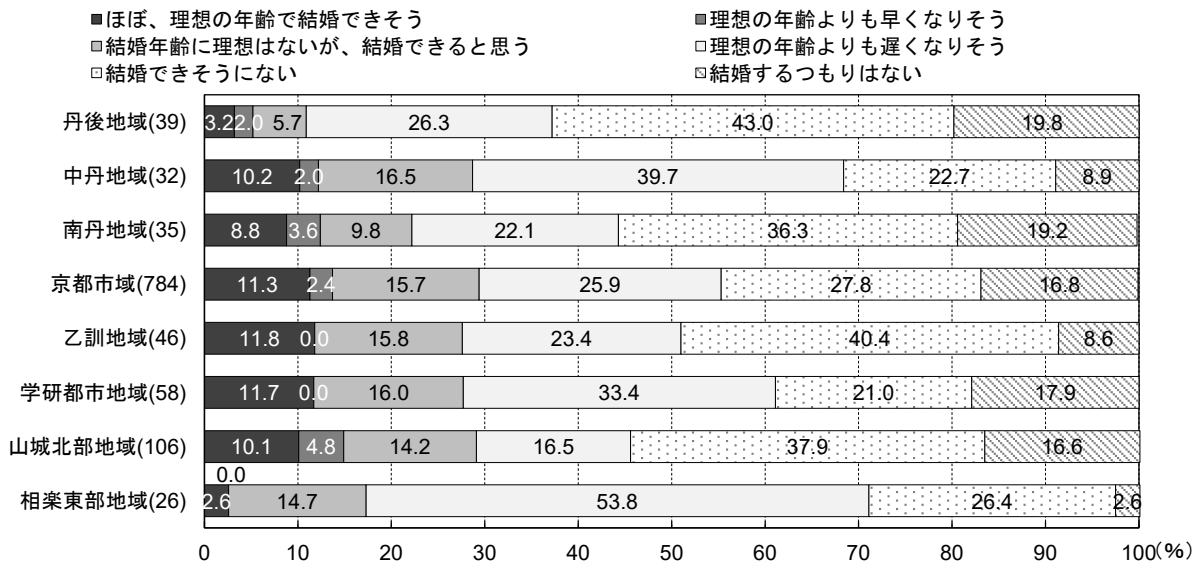
図 2.2.12 をみると、「結婚できそうにない」が男性では相楽東部で41%と最も多く、次いで南丹が多くなっている。また、女性では丹後が43%と最も多く、次いで乙訓が多くなっている(図 2.2.12)。

図 2.2.12 地域別の結婚の予想(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



(多くの地域で男女とも「結婚したいと思う相手と出会いそうにない」が理由として最も多い)

図 2.2.12 で「理想の結婚よりも遅くなりそう (もっと早く結婚したかった)」「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」と回答した未婚者を対象に、その理由を把握した (表 2.2.1)。

男性では「結婚したいと思う相手と出会いそうにない」が多くの地域で多く、南丹が60%と特に多い。一方で丹後は「所得に不安があるから」が40%と最も多くなっている。

女性では、すべての地域で「結婚したいと思う相手と出会いそうにない」が最も多くなっており、特に61%と相楽東部で多くなっている。また、中丹と相楽東部では、「仕事や生き方と結婚を両立できそうにない」、丹後と乙訓では「出産や子育てに不安があるから」と回答する方が多くなっている。

表 2.2.1 地域別にみた「理想の結婚よりも遅くなりそう (もっと早く結婚したかった)」「結婚できそうにない」「結婚するつもりはない」と思う理由 (複数)

(男性)

(%)

区分	N	結婚したいと思う相手と出会いそうにない※1	所得に不安があるから	異性とうまく付き合えないから	自分に自信を持っていないから	仕事や生き方と結婚を両立できそうにない※2	自分の就業・雇用が不安定だから	出産や子育てに不安があるから	自分の健康面の不安や身体的な理由から	経済環境・社会環境が不安定・不透明だから※3	コロナ禍で生活に悪影響があったから※4
全体	1178	43.2	29.6	26.2	23.5	18.6	17.6	11.7	9.0	8.6	2.8
丹後	45	26.0	39.7	30.2	27.1	19.7	10.6	12.5	0.0	3.1	0.0
中丹	63	59.5	18.1	45.1	16.0	21.8	13.8	8.9	10.9	3.8	1.2
南丹	61	60.1	18.1	25.1	24.0	5.6	13.6	17.8	8.2	5.0	4.0
京都市域	667	40.5	30.7	25.1	25.6	19.9	19.8	13.0	10.3	10.4	3.5
乙訓	91	41.9	25.7	26.6	24.9	19.6	9.9	10.1	1.6	11.2	2.3
学研都市	68	37.8	35.6	28.4	22.4	25.9	15.2	8.6	11.0	5.1	1.1
山城北部	159	45.7	33.9	17.3	16.8	11.9	17.3	6.3	6.5	7.1	1.9
相楽東部	24	41.1	34.6	30.6	39.0	20.5	26.7	0.0	3.4	7.0	7.0

区分	その他	実現できない理由はない※5
全体	3.1	11.3
丹後	13.6	8.6
中丹	2.3	3.5
南丹	1.6	9.1
京都市域	3.5	11.9
乙訓	0.0	13.9
学研都市	2.1	13.3
山城北部	1.6	13.0
相楽東部	16.2	0.0

- ※1 「結婚したいと思う相手と出会いそうにない」は、調査票において「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」と表記されている
- ※2 「仕事や生き方と結婚を両立できそうにない」は、調査票において「自分の仕事や生き方と結婚を両立できそうにないから」と表記されている
- ※3 「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから」は、調査票において「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから (コロナ禍の影響を除く)」と表記されている
- ※4 「コロナ禍で生活に悪影響があったから」は、調査票において「コロナ禍で生活に悪影響があったから、将来が不透明になったから」と表記されている
- ※5 「実現できない理由はない」は、調査票において「希望が実現できない理由はない (希望どおりである)」と表記されている

(女性)

(%)

区分	N	結婚したいと思う相手と出合いそうにない※1	自分に自信を持っていないから	仕事や生き方と結婚を両立できそうにない※2	出産や子育てに不安があるから	異性とうまく付き合えないから	所得に不安があるから	自分の就業・雇用が不安定だから	自分の健康面の不安や身体的な理由から	経済環境・社会環境が不安定・不透明だから※3	コロナ禍で生活に悪影響があったから※4
全体	1665	49.7	24.9	20.7	20.5	19.2	14.1	10.3	10.2	8.2	3.3
丹後	74	53.8	22.7	19.6	30.4	15.5	10.9	4.3	9.6	7.8	1.3
中丹	71	45.7	28.6	29.6	16.5	17.7	15.7	10.5	1.2	6.5	0.0
南丹	61	44.4	35.1	29.9	20.4	31.2	15.3	9.3	7.2	14.6	6.1
京都市域	1033	49.8	24.4	20.8	20.7	18.3	15.3	10.3	11.3	8.1	3.7
乙訓	89	60.2	19.1	13.1	21.2	17.6	9.8	7.2	5.1	4.2	0.0
学研都市	113	40.5	25.6	16.6	21.4	17.0	12.3	10.3	10.6	6.1	2.4
山城北部	187	52.9	24.9	19.1	18.4	22.3	10.4	13.6	11.1	9.8	3.7
相楽東部	37	61.2	22.9	30.7	16.9	16.6	14.5	3.5	3.3	4.0	1.8

区分	その他	実現できない理由はない※5
全体	5.3	9.2
丹後	5.4	9.5
中丹	4.7	9.3
南丹	6.3	4.7
京都市域	5.5	9.5
乙訓	1.1	4.5
学研都市	3.9	11.5
山城北部	6.5	9.8
相楽東部	17.0	5.7

3. 初婚年齢（晩婚化）

(1) 理想の初婚年齢と現実の初婚年齢

(女性では理想の結婚年齢がある者が44%に上る)

理想の結婚年齢について、男性では、「おおよその理想がある（理想があった）」は27%、「特に理想はない（理想はなかった）」が63%であった。女性では、「おおよその理想がある（理想があった）」は44%に上り、男性と大きな差がみられる。女性の「特に理想はない（理想はなかった）」は49%と半数にとどまる（図2.3.1）。

「おおよその理想がある（理想があった）」と回答した者について、理想の結婚年齢の平均値を算出すると、男性は平均29.1歳、女性は平均27.4歳である（図2.3.2）。

図2.3.3に理想の結婚年齢の分布を示した。男性では「30-31歳」が最頻値であり、女性では「24-25歳」と「30-31歳」の二つのピークがあることがわかる。

図 2.3.1 結婚について理想だと思う年齢（単数）

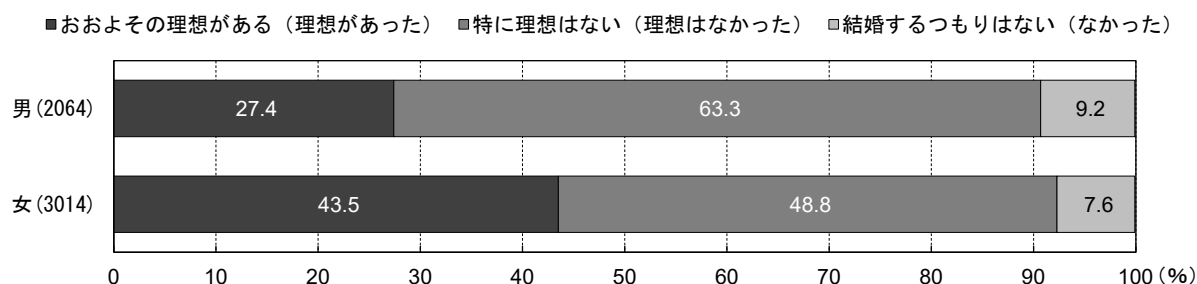


図 2.3.2 理想の結婚年齢の平均値（結婚年齢に理想がある者）

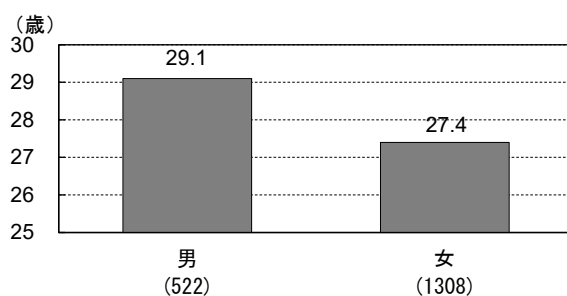
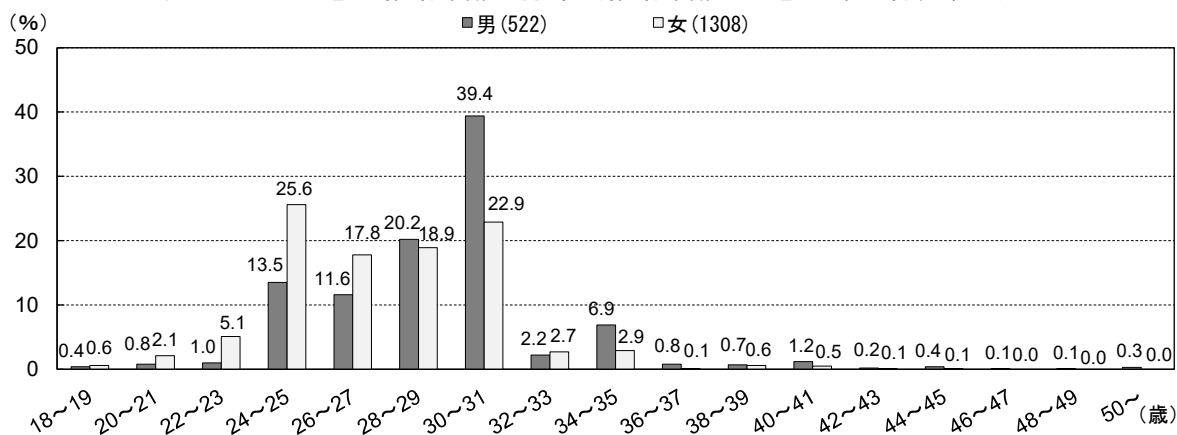


図 2.3.3 理想の結婚年齢の分布（結婚年齢に理想がある者、数量）



(初婚年齢は理想と現実で分布に大きな違いがある)

晩婚化が生じる様子を調べるため、未婚者の理想とする初婚年齢と有配偶者の現実の初婚年齢の間で、両者の分布と平均年齢を比較した(図 2.3.4、図 2.3.5、表 2.3.1)。

未婚者の理想とする初婚年齢は男性 29.2 歳、女性 27.9 歳、有配偶者の現実の初婚年齢は男性 29.5 歳、女性 28.2 歳である。男女とも理想の初婚年齢よりも現実の初婚年齢の方がやや高いが、ほとんど差はないとみられる。

ところが、未婚者の理想の初婚年齢の分布と、有配偶者の現実の初婚年齢の分布は大きく異なっている。未婚者では、理想の初婚年齢の最頻値は、男性では「30-31 歳」、女性は「28-29 歳」から「30-31 歳」であり、男女とも「30-31 歳」を超えると回答者が急減する非対称な分布になっている。

一方、有配偶者の現実の初婚年齢は、男女とも平均年齢に近い年齢階層を中心としたほぼ対称的な分布であり、正規分布に近い形になっている。これらのことから、「30-31 歳」を超える年齢階層においては、結婚年齢の理想が実現せずに、本人が意図しない遅い初婚年齢になった者が多く含まれていると考えられる。

図 2.3.4 理想とする初婚年齢の分布(未婚者、理想とする初婚年齢がある者)

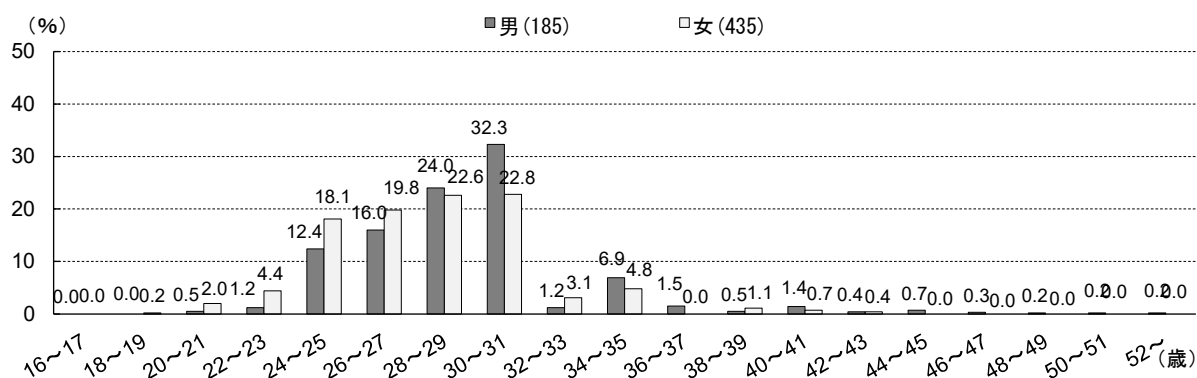


図 2.3.5 現実の初婚年齢の分布(有配偶者、理想とする初婚年齢があった者)

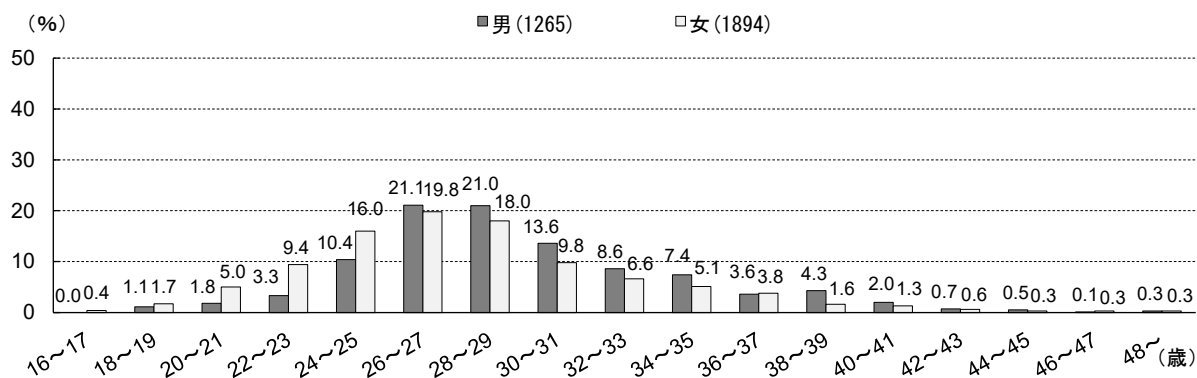


表 2.3.1 未婚者の理想とする初婚年齢と有配偶者の現実の初婚年齢の平均値(理想とする初婚年齢がある者・あった者)(歳)

項目	男性	女性
未婚者の理想とする初婚年齢	29.2	27.9
有配偶者の現実の初婚年齢	29.5	28.2

(2) 初婚年齢に対して影響が想定される要因

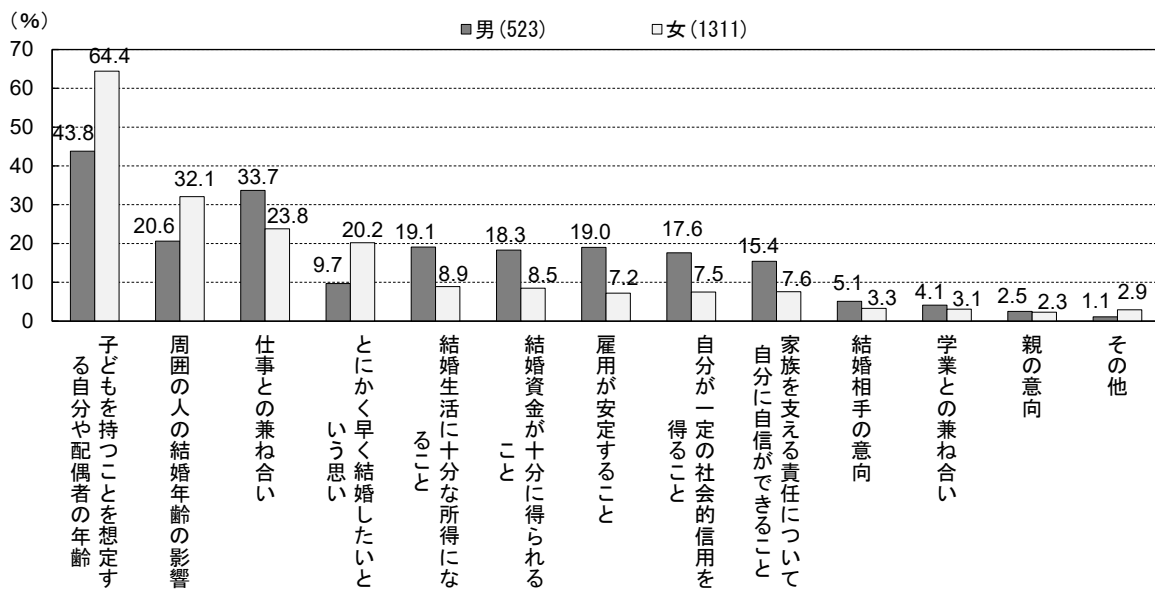
①理想とする結婚年齢がある（あった）理由

（女性では「子ども持つことを想定した年齢」が約3分の2に上る）

初婚年齢について「おおよその理想がある（理想があった）」と回答した者に、理想とする結婚年齢がある（あった）理由を尋ねると、「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」が男性では44%、女性では64%に上る（図2.3.6）。次いで、女性では「周囲の人の結婚年齢の影響」が32%と多い。これらの理由は、女性が男性を大きく上回っていることが特徴である。

男性では、「仕事の兼ね合い」が34%に上るほか、「結婚生活に十分な所得になること」「結婚資金が十分に得られること」「雇用が安定すること」「自分が一定の社会的信用を得ること」など、所得や雇用に関わる理由が多い。女性でも「仕事との兼ね合い」は24%に達し、三番目に多い理由になっている。

図 2.3.6 理想とする結婚年齢がある（あった）理由（複数）



②結婚意思

(結婚意思は初婚年齢にも影響を及ぼす)

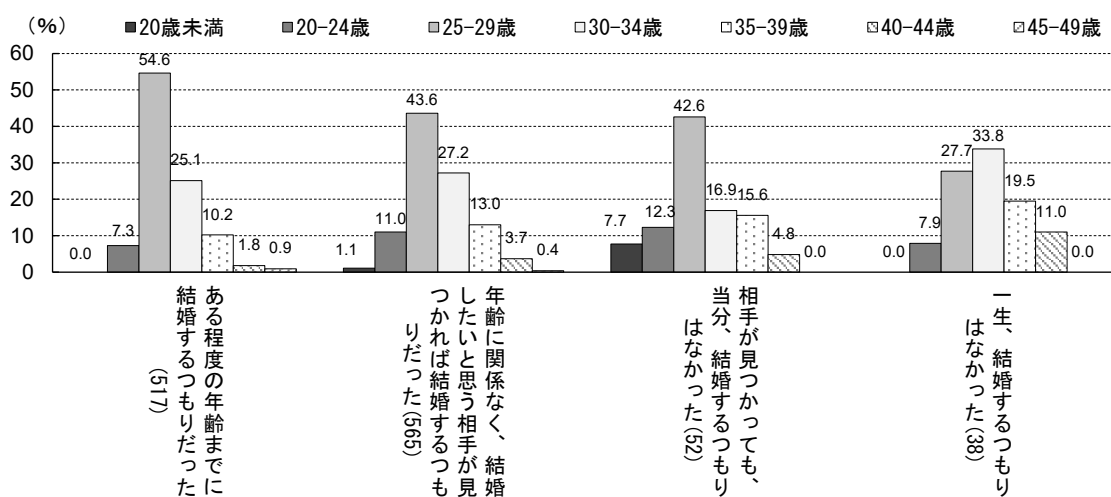
年齢志向、相手志向等の結婚についての考え方は、結婚するか・しないに加え、初婚年齢にも影響を及ぼすと考えられる。

今回の調査では、未婚者とともに有配偶者に対しても、未婚時の結婚についての考え方を尋ねている。そこで、有配偶者の未婚時の結婚の考え方と現実の初婚年齢との関係を調べた。その結果、「ある程度の年齢までに結婚するつもりだった」(年齢志向)では、初婚年齢が「25-29歳」以下である者が、男性では62%、女性では75%に上る。平均初婚年齢は、男性29.4歳、女性27.8歳である。

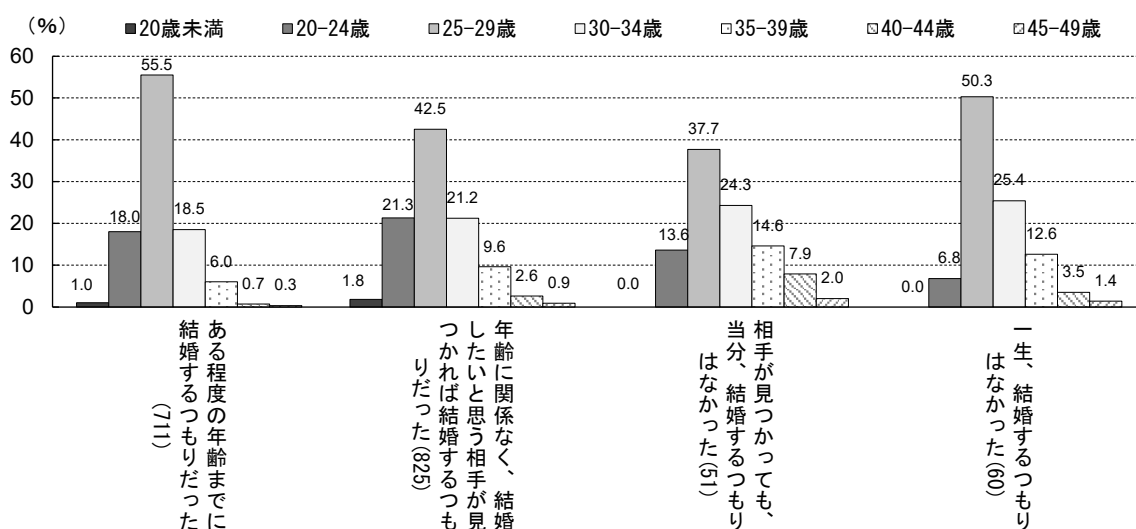
「年齢に関係なく、結婚したいと思う相手が見つければ結婚するつもりだった」(相手志向)では、「25-29歳」以下は男性56%、女性66%に減少する。「相手が見つかって、当分、結婚するつもりはなかった」では男性63%ではあるが、女性では52%になり、結婚意思に影響を及ぼす要因は、結婚意思を経由して初婚年齢にも影響を及ぼしていると考えられる。

図 2.3.7 結婚についての考えと本人の初婚年齢 (有配偶者)

(男性)



(女性)



③就業形態

(就業形態は男性の初婚年齢に影響を及ぼす)

就業形態の正規・非正規は、未婚者の結婚意思と結婚の見通しに対して、男女の両方で強い影響を及ぼしていた。そこで、就業形態の正規・非正規と初婚年齢（晩婚化）への影響を把握した。

男性では、25-29歳以降、非正規の従業員等に比べ、正規の従業員等の初婚年齢が早い傾向が顕著である（図 2.3.8）。これは初婚年齢の平均値にも表れている（図 2.3.9）。

女性でも関係は弱いながら同様の傾向がみられる。

図 2.3.8 就業形態と本人の初婚年齢（有配偶者、就業者）

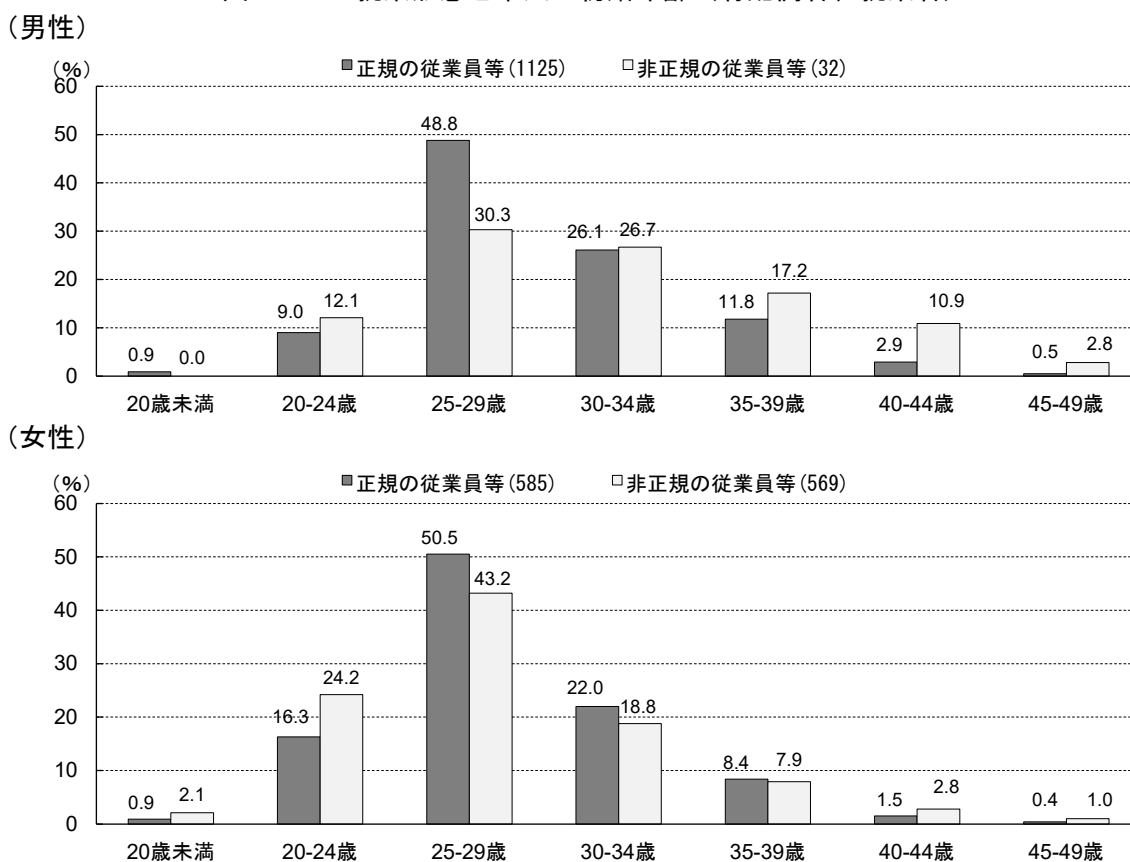
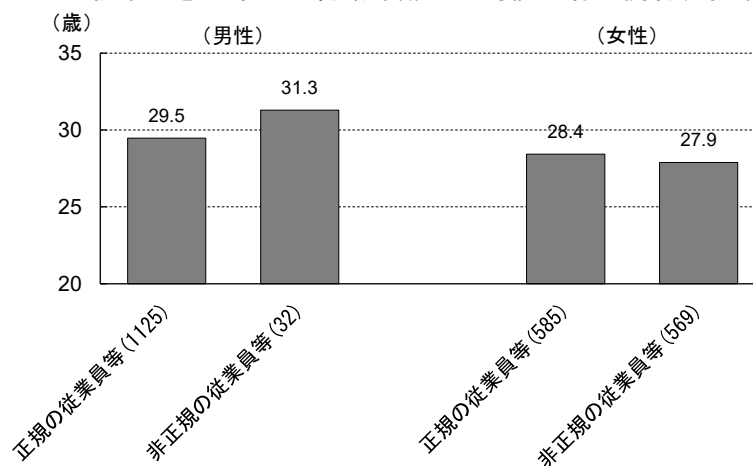


図 2.3.9 就業形態と本人の初婚年齢の平均値（有配偶者、就業者）



④結婚・子育てに対する価値観

(24-25 歳から 26-27 歳が境目)

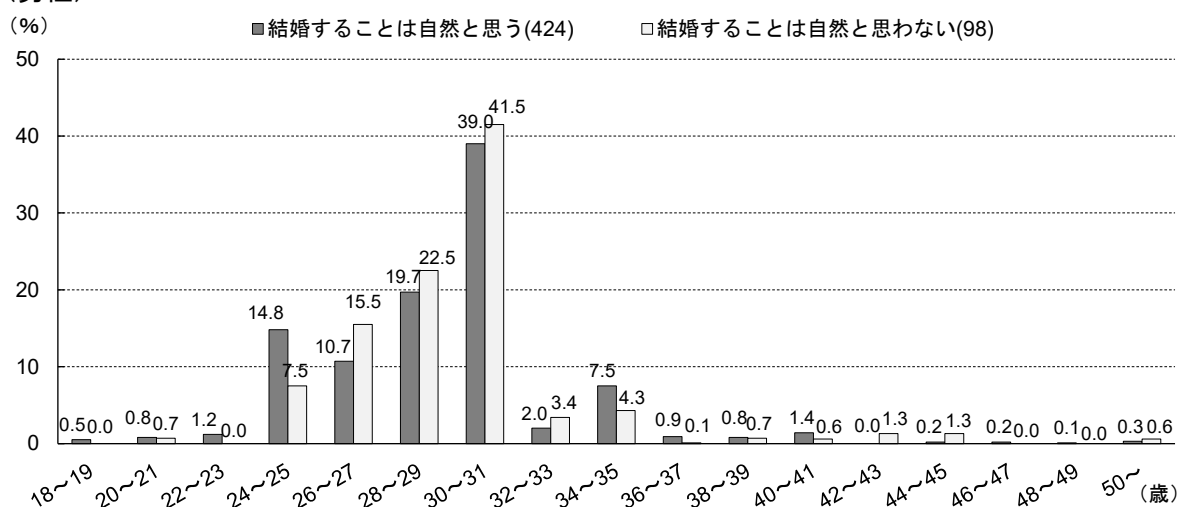
結婚の価値観（結婚することは自然なことである）と理想の結婚年齢との関係を調べた。

図 2.3.10 の注釈の通り、結婚の価値観を二区分して理想の結婚年齢の分布を作成したところ、男女ともおおよそ「24-25 歳」までは「結婚することは自然と思う」の方が多い。特に二区分した価値観で「24-25 歳」の差が顕著である。

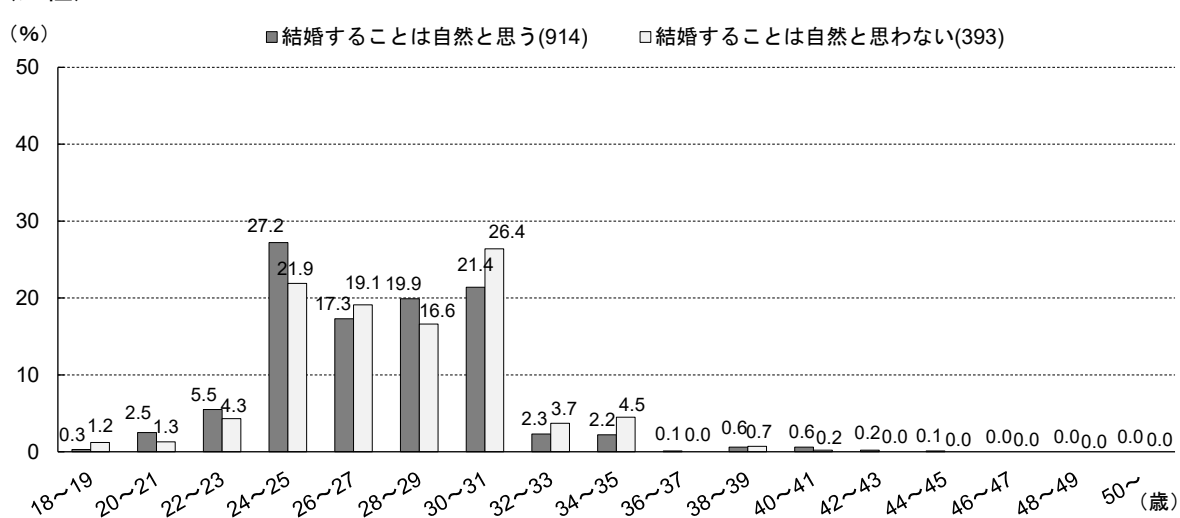
「26-27 歳」以降になると、おおよそ「結婚することは自然と思わない」の方が分布は多くなっている。結婚の自然さは、理想の結婚年齢に対しても一定の影響を及ぼしていると考えられる。

図 2.3.10 結婚の価値観別にみた理想の結婚年齢の分布

(男性)



(女性)



(注) 図中の「結婚することは自然と思う」は「結婚することは自然なことである」に対して「とてもそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した者であり、「結婚することは自然と思わない」は「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」と回答した者

(女性では26-27歳から28-29が境目)

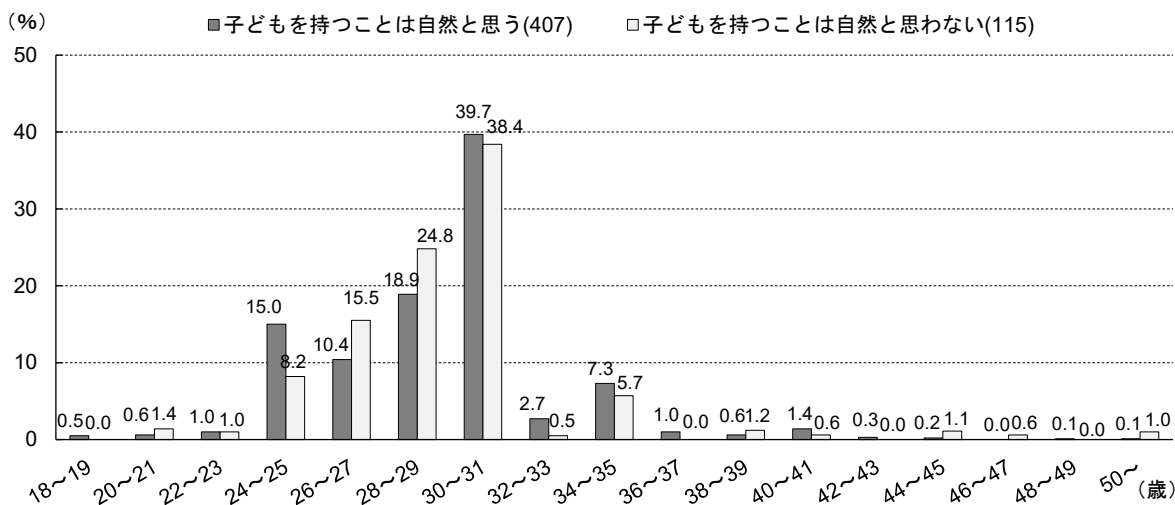
結婚の価値観と同様に、子育ての価値観（子どもを持つことは自然なことである）と理想の結婚年齢との関係を把握した。

図 2.3.11 の注釈の通り、子育ての価値観を二区分して理想の結婚年齢の分布を作成したところ、男性では結婚と同様、おおよそ「24-25歳」と「26-27歳」において、二つの価値観の間で分布が逆転する。

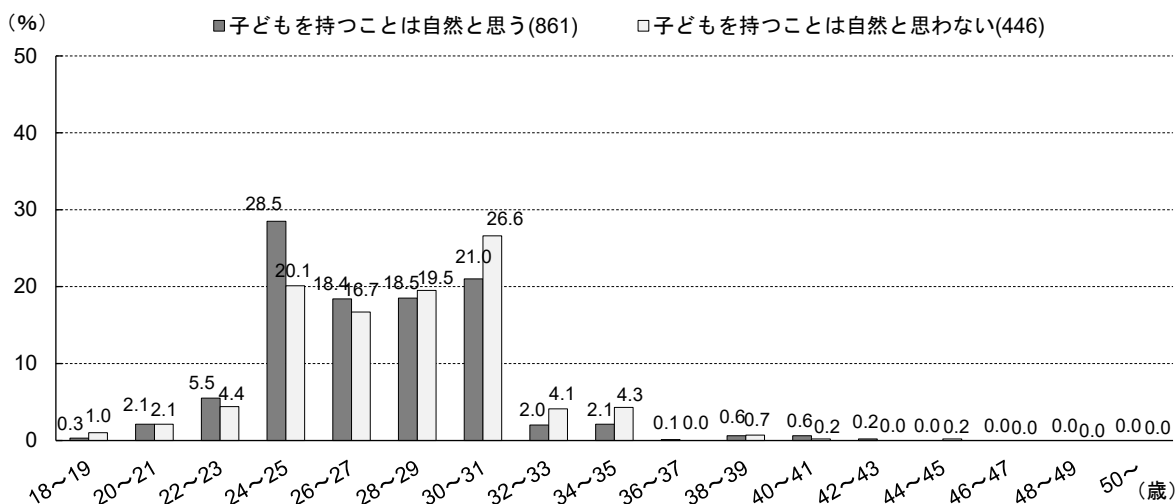
女性では、「26-27歳」から「28-29歳」が境目であるものの、特に二区分した価値観で「24-25歳」や「30-31歳」における差が顕著である。

図 2.3.11 子育ての価値観別にみた理想の結婚年齢の分布（未婚者）

(男性)



(女性)



(注) 図中の「子どもを持つことは自然と思う」は「子どもを持つことは自然なことである」に対して「とてもそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した者であり、「子どもを持つことは自然と思わない」は「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」と回答した者

⑤交際状況

(交際経験は理想の結婚年齢にも影響を及ぼす)

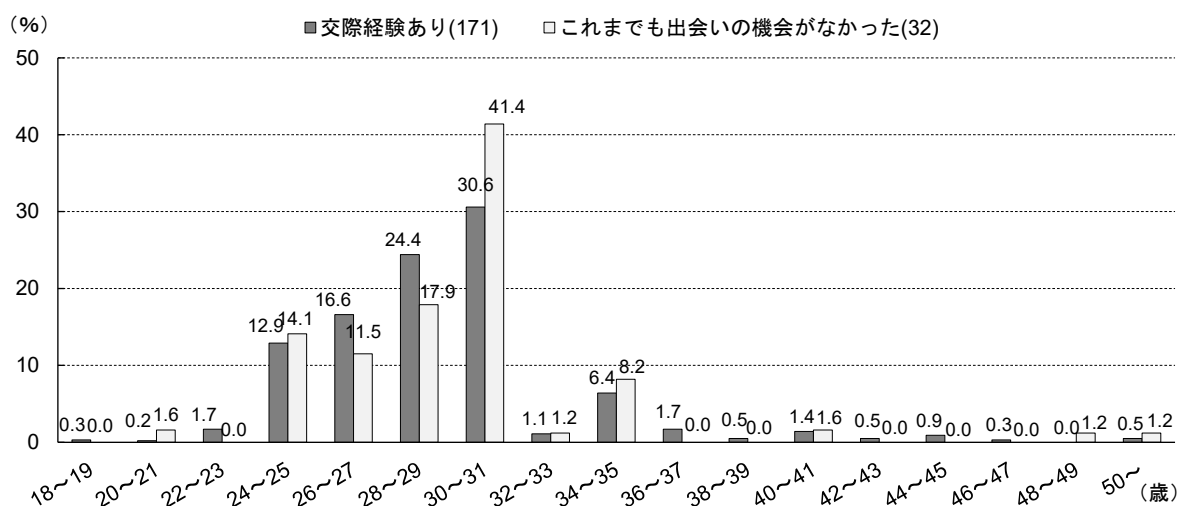
交際経験は、結婚意思や結婚予想に加え、理想の結婚年齢に影響を及ぼすとみられる(図2.3.12)。

男性では、26-27歳と28-29歳を理想の結婚年齢とする者は「交際経験なし」よりも「交際経験あり」の方が多く、これらの年齢階層の次の30-31歳では「交際経験なし」の者の方が多くなる。

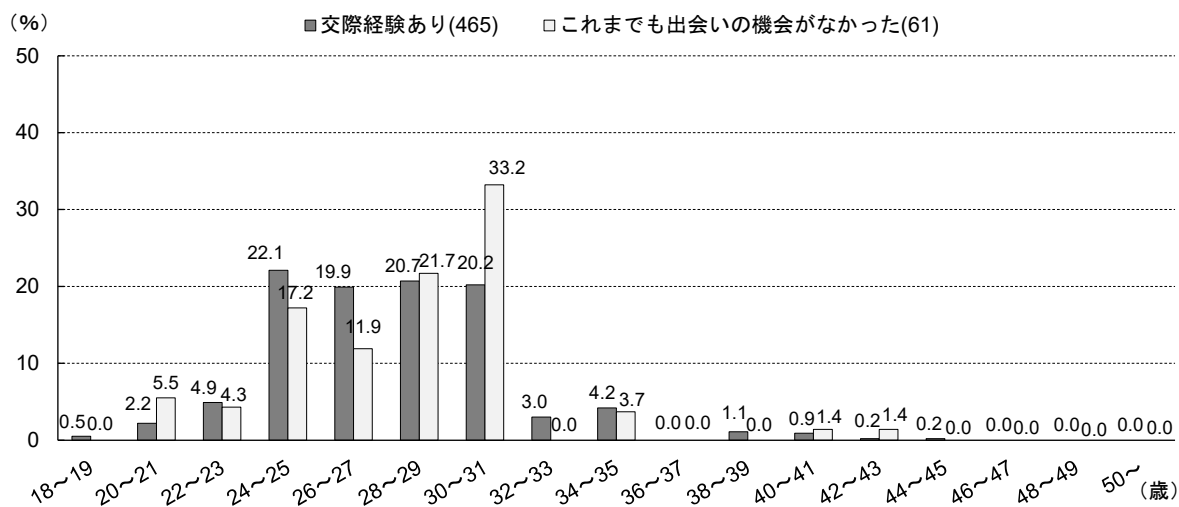
女性では、24-25歳と26-27歳を理想とする者は「交際経験あり」の方が多い。28-29歳は同程度であるものの、30-31歳になると「交際経験なし」が「交際経験あり」を13ポイント上回る。

図2.3.12 理想の結婚年齢の分布(未婚者、理想の結婚年齢あり、交際経験の有無別)

(男性)



(女性)



(注) 図の「交際経験あり」は「いる」と「今はいない(過去はいた)」の合計

(3) 理想の結婚年齢の実現

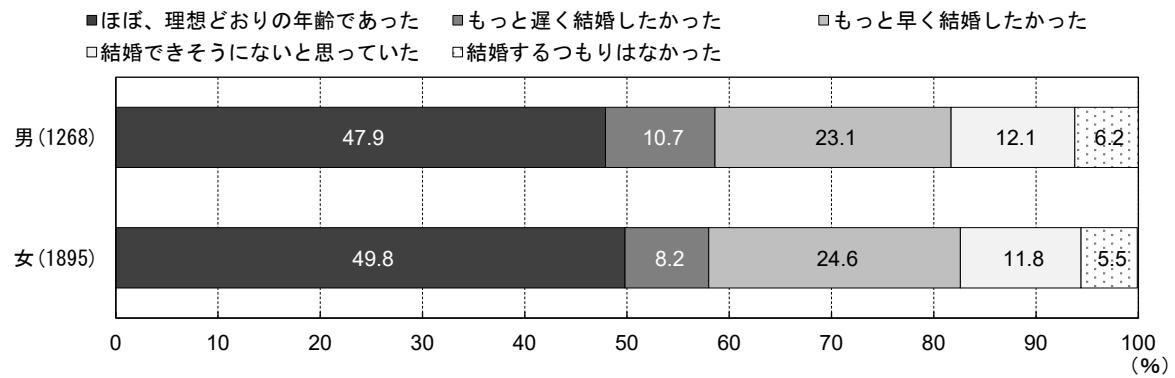
①結婚の実現状況

（「もっと早く結婚したかった」が「もっと遅く結婚したかった」を大きく上回る）

有配偶と独身者（離死別）について理想の結婚年齢の実現状況をみると、「ほぼ、理想通りの年齢であった」が、男性は48%、女性は50%であり、男女ともほぼ半数に達する（図2.3.13）。

一方で、「もっと早く結婚したかった」が、男性では23%、女性は25%と4分の1に上り、「もっと遅く結婚したかった」（男性11%、女性8%）を大きく上回る。晩婚化には、理想の結婚年齢が実現できず、結婚が遅くなるという面も大きいと考えられる。

図 2.3.13 結婚の実現状況（有配偶者・独身者（離死別）、単数）



(初婚年齢の理想と現実の差をみる)

有配偶者・独身者（離死別）で初婚年齢に理想があった者を対象にして、理想の初婚年齢と現実の初婚年齢の差をみると、男性 0.7 歳、女性 0.9 歳である（表 2.3.2）。

女性では、24-25 歳になると、24-25 歳までが理想の初婚年齢であった者の割合を、現実の初婚年齢が 24-25 歳までであった者が下回るようになる（図 2.3.14、図 2.3.15）。24-25 歳以降、この状態が続く。女性では 24-25 歳から希望の初婚年齢が実現できない者が生じ、その後、解消されないまま 40 歳代に到達することがわかる。晩婚化の一因と考えられる希望の初婚年齢の実現の問題は、比較的若い年齢階層から始まっている。

表 2.3.2 理想の初婚年齢と現実の初婚年齢の平均値

性別	理想の初婚年齢	現実の初婚年齢	差（現実-理想）
男性	29.1	29.8	0.7
女性	27.1	28.0	0.9

図 2.3.14 理想の初婚年齢と現実の初婚年齢（相対度数）
（有配偶者・独身者（離死別）、理想としていた初婚年齢を回答した者、単数）

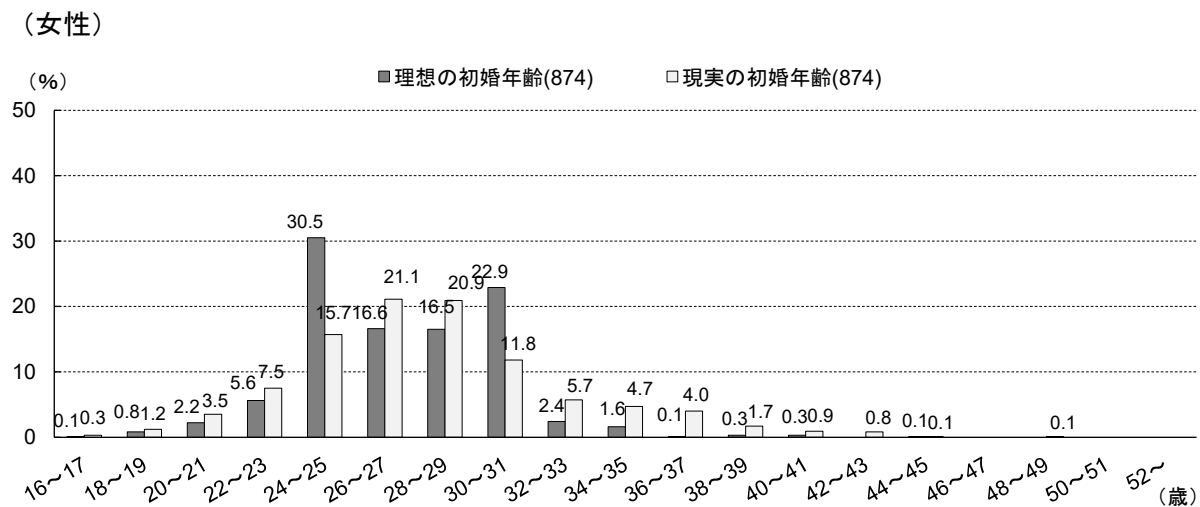
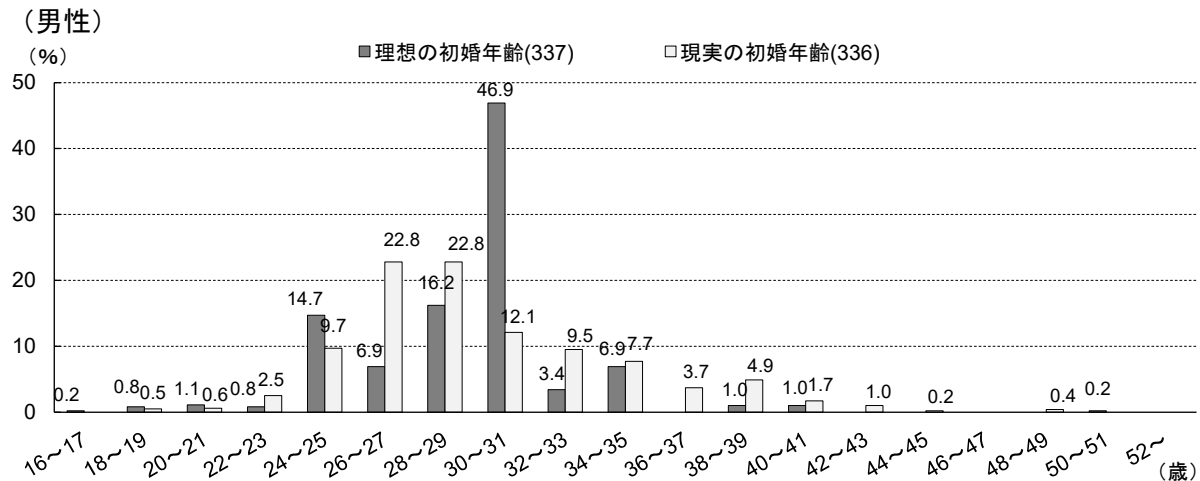
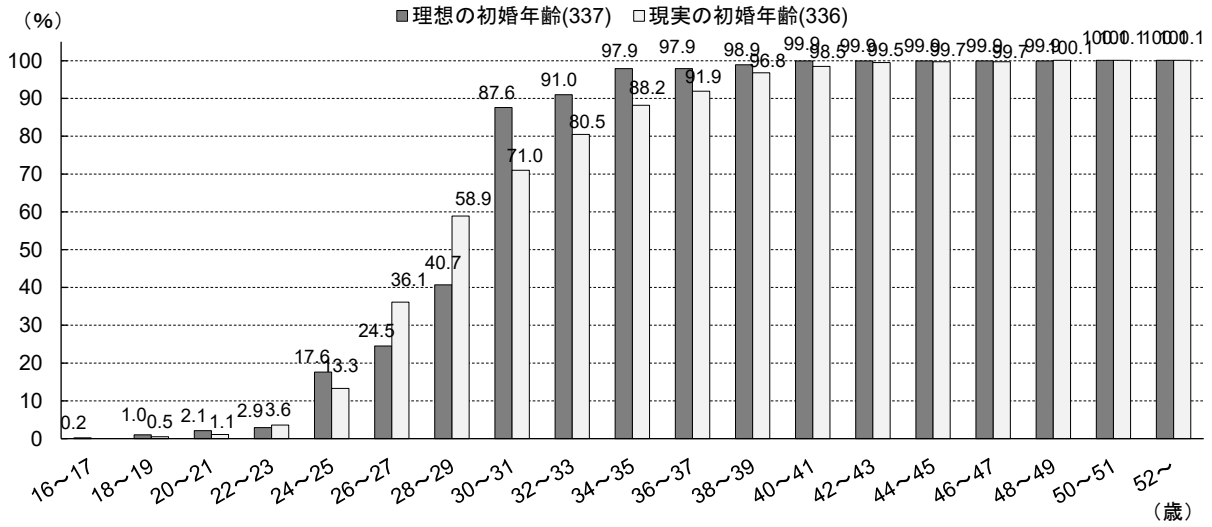
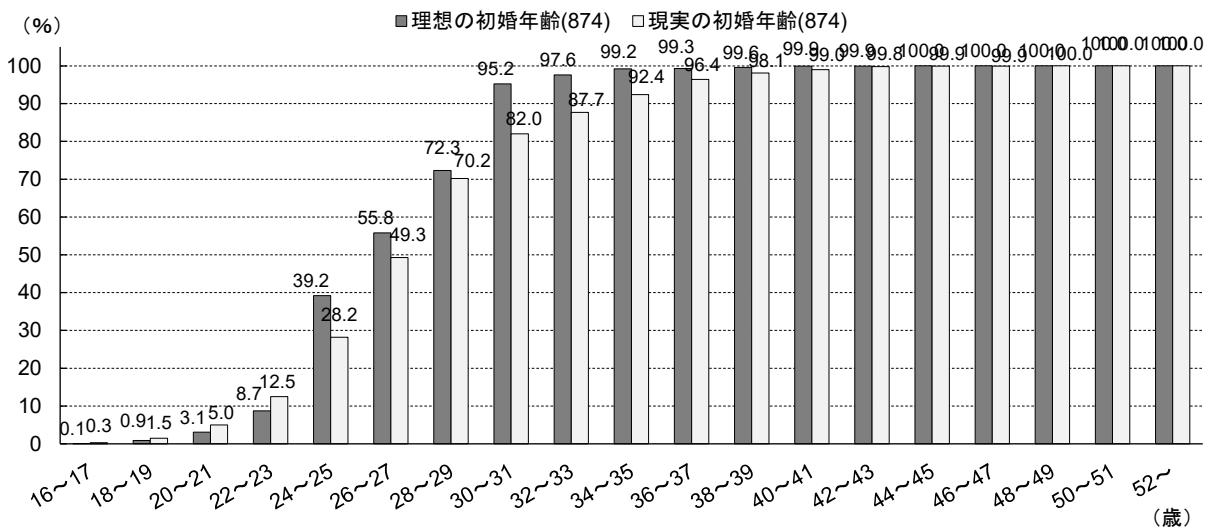


図 2.3.15 理想の結婚年齢と現実の初婚年齢の累積相対度数
 (有配偶者・独身者(離死別)、理想としていた初婚年齢を回答した者、単数)

(男性)



(女性)



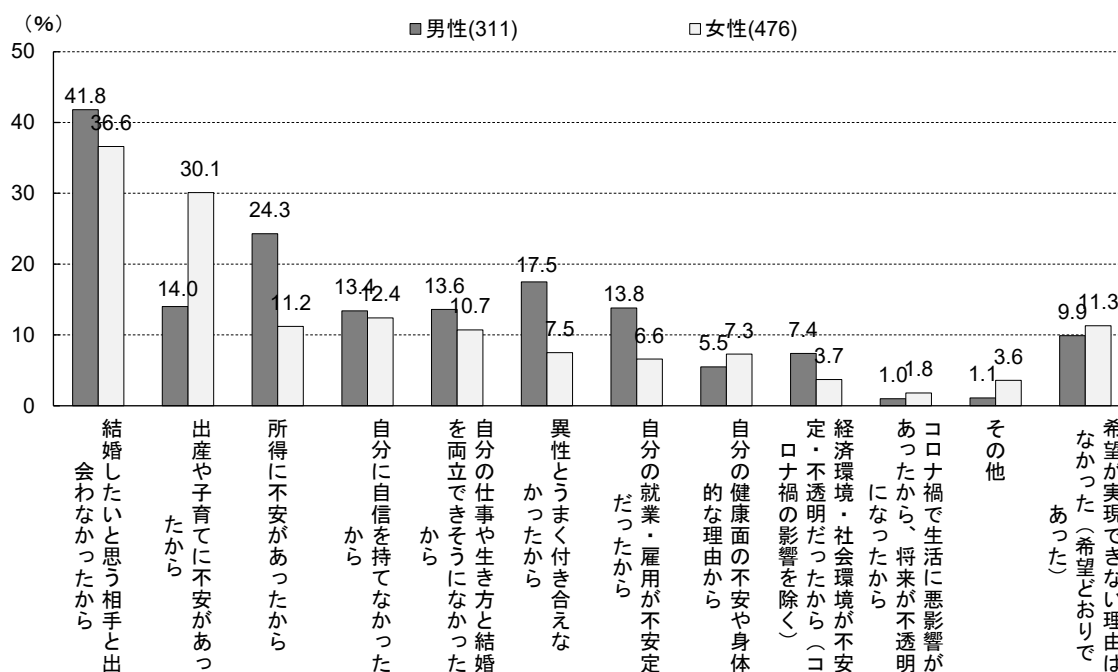
②結婚年齢が遅くなった理由

(最大の理由は出会いの問題である)

有配偶者・独身者（離死別）において、理想の初婚年齢よりも現実の初婚年齢が遅くなった理由は、男女とも「結婚したいと思う相手と出会わなかったから」がもっと多い（男性42%、女性37%）（図2.3.16）。出会いの機会の不足が問題となるが、そもそも未婚時において結婚の相手志向が多いことも要因の一つになっていると考えられる。

女性で二番目に多い理由は「出産や子育てに不安があったから」であり、30%に上る。男性では「所得に不安があったから」（24%）が二番目の理由になっている。

図 2.3.16 「もっと早く結婚したかった（理想の初婚年齢よりも遅くなった）」と思う理由
（有配偶者・独身者（離死別）、「もっと早く結婚したかった」と回答した者、複数）



③未婚者の理想の結婚年齢の実現予想

(未婚者では3分の1以上が「理想の結婚年齢よりも遅くなりそう」)

未婚者の結婚予想からも、理想の初婚年齢と現実の年齢で差が生じる要因を探る。

未婚者の結婚予想をみると、「理想の年齢よりも遅くなりそう」が男性36%、女性35%を占めており、男女とも3分の1を上回る(図2.3.17)。

その理由は、男女とも「結婚したいと思う相手と出会いそうにないから」が最も多い(男性45%、女性53%) (図2.3.18)。

男性では、「所得に不安があるから」「異性とうまく付き合えないから」も30%近い回答になっている。女性では、この二つのほか、「自分に自信を持ってないから」や「自分の仕事や生き方と結婚を両立できそうにないから」が20%前後になっており、回答の多い理由になっている。

図2.3.17 未婚者の結婚の予想(未婚者、理想とする初婚年齢があった者、単数)

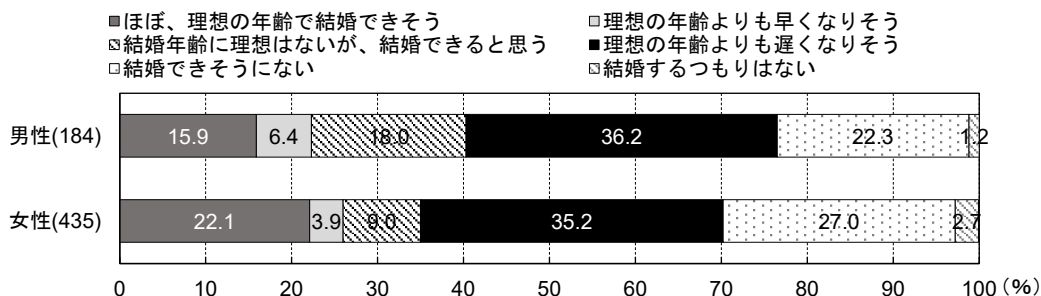
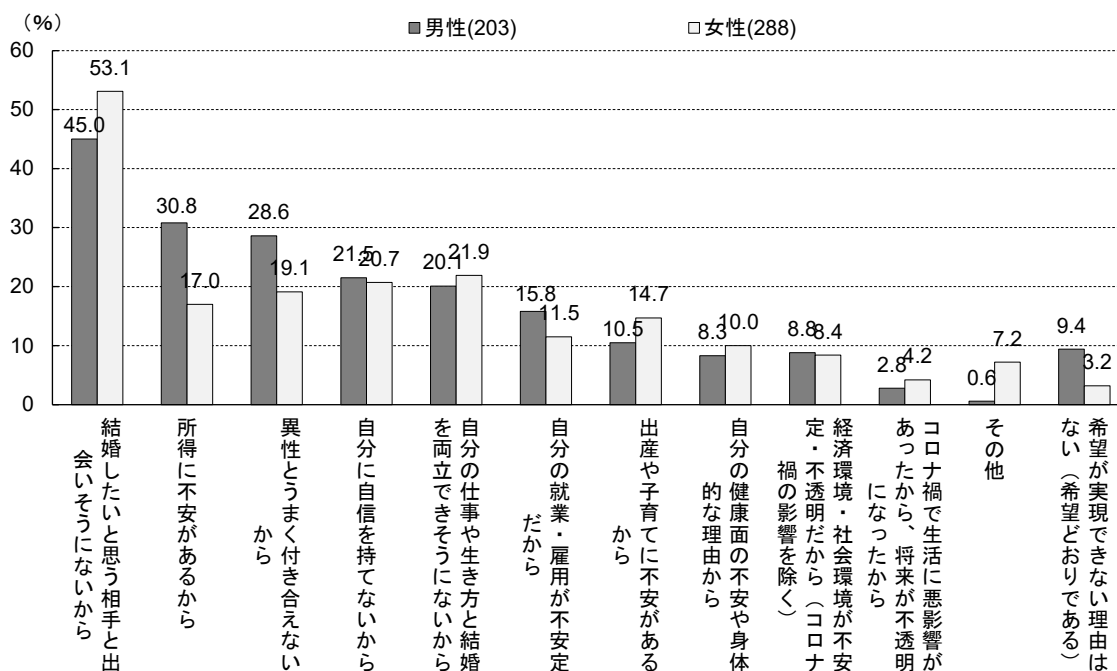


図2.3.18 「理想の結婚よりも遅くなりそう」と思う理由(未婚者、「理想の結婚よりも遅くなりそう」と回答した者、複数)



(4) 初婚年齢と最初の子どもを持った年齢の関係

(晩婚化が第2子以降の出生に影響していると考えられる)

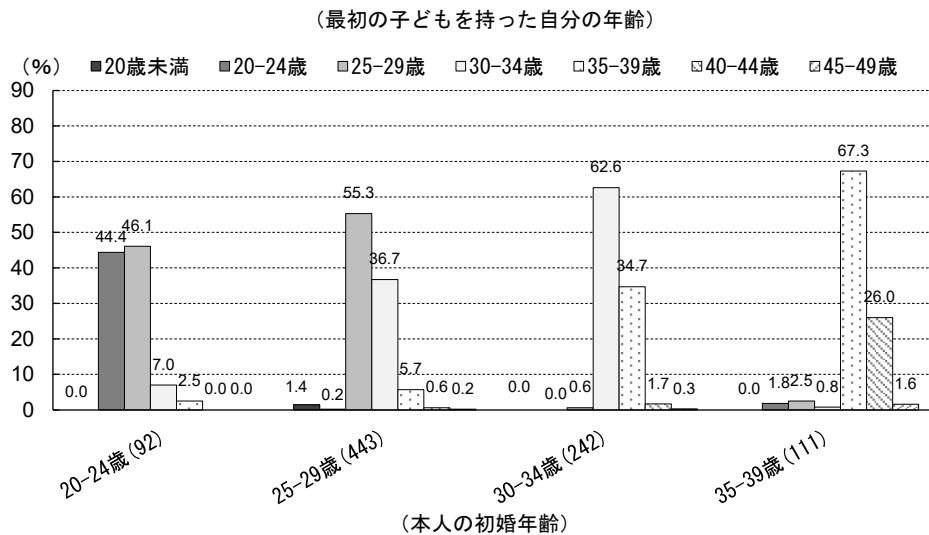
初婚年齢の分析の最後に、初婚年齢と最初の子どもを持った年齢の関係を把握し、晩婚化が少子化に影響を及ぼしていることを確認した。

女性に着目すると、初婚年齢が20-24歳であると最初の子どもを持った年齢は「20-24歳」が52%、「25-29歳」が40%を占める(図2.3.19)。初婚年齢「25-29歳」では最初の子どもを持った年齢は「25-29歳」が60%、「30-34歳」が33%となり、初婚年齢30-34歳では「30-34歳」63%、「35-39歳」が35%であった。初婚年齢35-39歳では最初の子どもを持った年齢は「35-39歳」が67%、「45-49歳」が26%となる。初婚年齢に高くなるにつれ、最初の子どもを持った年齢が上昇する傾向が明らかであり、初婚年齢が第2子以降の出生へ影響していると考えられる。

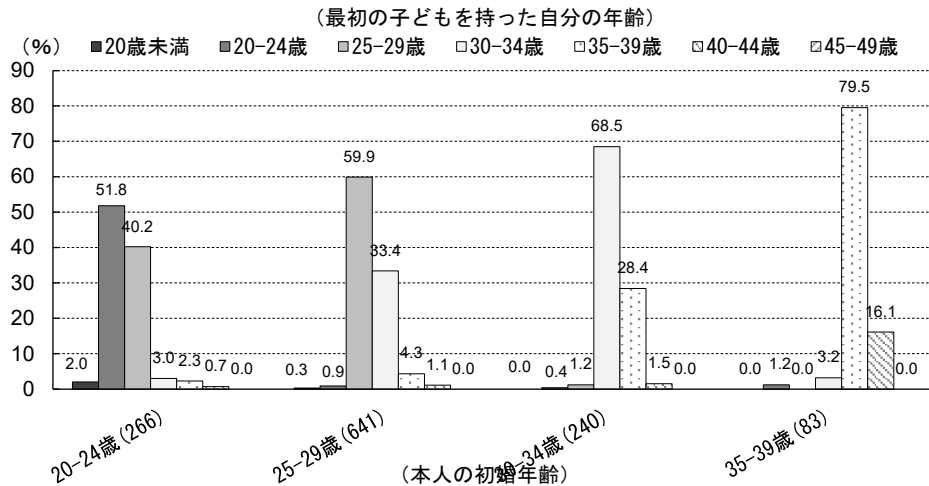
男性においても、同様の結果が表れている。

図 2.3.19 本人の初婚年齢と最初の子どもを持った自分の年齢 (有配偶者)

(男性)



(女性)



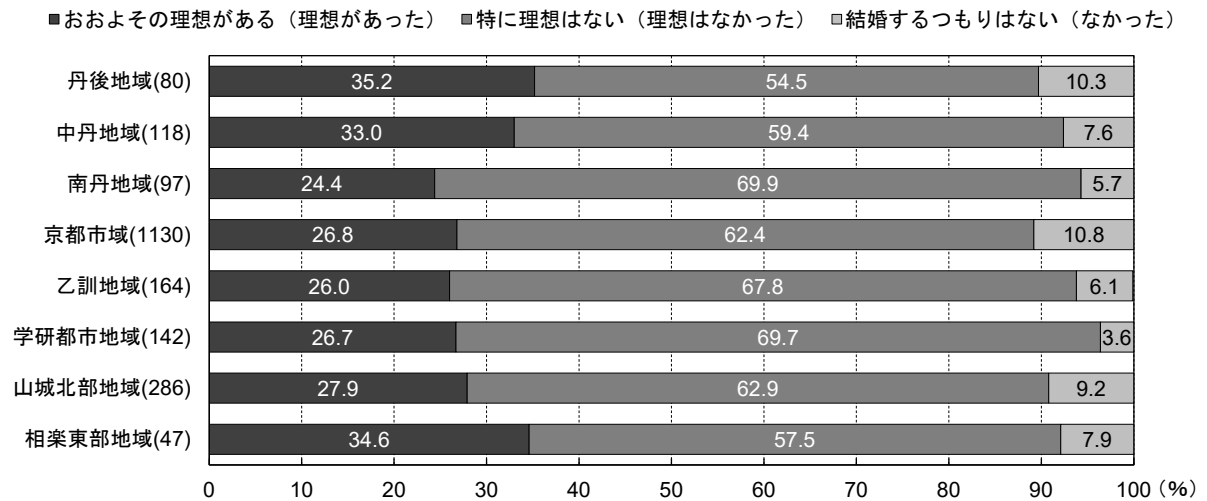
(5) 地域別の集計

(男性は丹後、女性は相楽東部で「理想がある(理想があった)」という回答が多い)

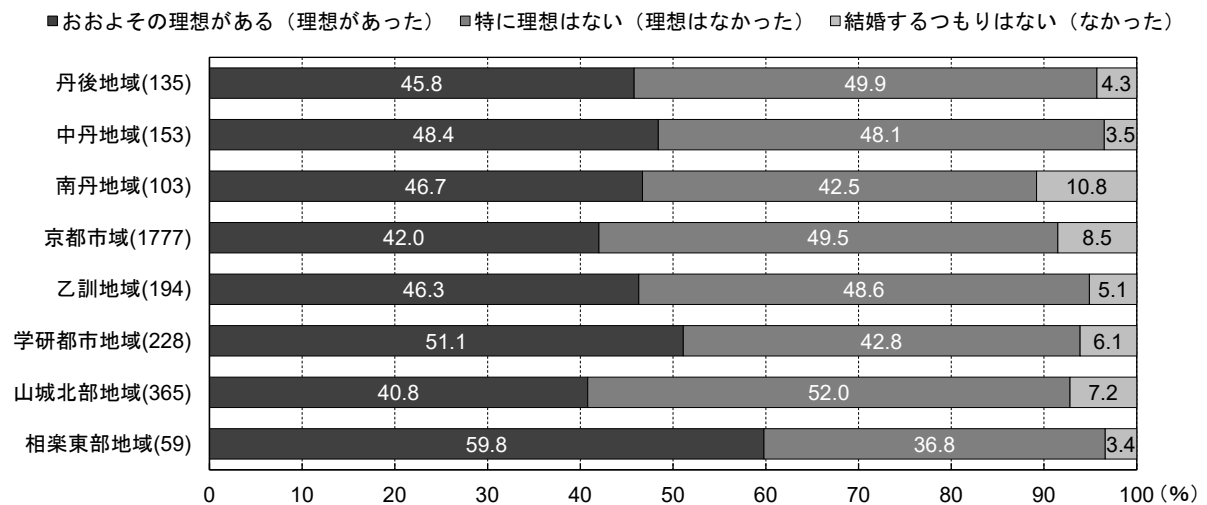
理想の結婚年齢について地域別にみると、男性で「おおよその理想がある(理想があった)」と回答した方は、丹後で35%と最も多くなっている。一方で「特に理想はない(理想はなかった)」と回答した方は、南丹、学研都市で70%と多くなっている。また、女性で「おおよその理想がある(理想があった)」と回答した方は、相楽東部で60%と最も多くなっている。一方で「特に理想はない(理想はなかった)」と回答した方は、山城北部で52%と多くなっている(図2.3.20)。

図 2.3.20 地域別の結婚について理想だと思う年齢(単数)

(男性)



(女性)



(多くの地域で「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」が多い)

図 2.3.20 で「おおよその理想がある(理想があった)」と回答した者に、理想とする結婚年齢がある(あった)理由を把握した(表 2.3.3)。男性では多くの地域で「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」が最も多くなっている。一方で、学研都市では「仕事との兼ね合い」が 38%と最も多く、中丹でも 46%と多くなっている。また、丹後と乙訓では「周囲の人の結婚年齢の影響」の回答も多く 30%を上回っている。

女性ではすべての地域で「子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢」が最も多くなっている。次いで「周囲の人の結婚年齢の影響」の回答が多い地域が多い。また、丹後と南丹では「仕事との兼ね合い」の回答が約 30%と多くなっている。

表 2.3.3 地域別の理想とする結婚年齢がある(あった)理由(複数)

(男性)

(%)

区分	N	子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢	仕事との兼ね合い	周囲の人の結婚年齢の影響	結婚生活に十分な所得になること	雇用が安定すること	結婚資金が十分に得られること	自分が一定の社会的信用を得ること	家族を支える責任について自分に自信ができること	とにかく早く結婚したいという思い	結婚相手の意向
全体	523	43.8	33.7	20.6	19.1	19.0	18.3	17.6	15.4	9.7	5.1
丹後	30	42.4	18.5	33.8	21.8	12.6	20.7	27.2	8.8	12.1	8.5
中丹	35	59.3	45.7	16.8	9.1	15.7	3.0	11.4	26.9	9.1	2.0
南丹	26	50.1	36.4	17.8	17.6	8.7	13.6	29.1	12.5	8.4	9.9
京都市域	272	41.2	33.9	19.5	19.9	23.4	18.8	19.2	14.7	8.5	6.2
乙訓	40	54.5	23.2	36.7	17.2	11.2	21.9	9.3	17.7	12.7	5.9
学研都市	30	34.8	38.0	27.5	25.1	20.4	24.5	33.6	14.4	3.6	0.0
山城北部	73	42.8	30.6	14.6	19.9	10.6	22.5	4.2	12.9	16.9	2.4
相楽東部	17	73.4	32.8	30.5	14.2	10.1	13.8	0.0	16.5	0.0	5.1

区分	学業との兼ね合い	親の意向	その他
全体	4.1	2.5	1.1
丹後	2.5	2.6	0.0
中丹	0.0	0.0	0.0
南丹	2.7	4.3	0.0
京都市域	6.1	1.8	1.2
乙訓	0.0	12.9	0.0
学研都市	6.0	1.9	1.7
山城北部	0.0	1.7	2.0
相楽東部	5.1	5.2	7.4

(女性)

(%)

区分	N	子どもを持つことを想定する自分や配偶者の年齢	周囲の人の結婚年齢の影響	仕事との兼ね合い	とにかく早く結婚したいという思い	結婚生活に十分な所得になること	結婚資金が十分に得られること	家族を支える責任について自分に自信ができること	自分が一定の社会的信用を得ること	雇用が安定すること	結婚相手の意向
全体	1311	64.4	32.1	23.8	20.2	8.9	8.5	7.6	7.5	7.2	3.3
丹後	63	67.2	42.4	30.8	18.4	2.1	2.9	3.7	6.8	2.6	0.0
中丹	74	64.2	36.7	22.0	19.6	9.8	8.4	5.9	5.2	8.8	9.4
南丹	49	71.1	27.4	29.5	15.1	15.4	13.2	10.2	5.4	5.0	1.5
京都市域	731	62.5	32.2	24.9	18.2	9.3	8.9	8.7	8.3	8.1	3.2
乙訓	88	68.2	33.7	26.1	21.9	7.1	8.6	6.0	8.2	3.1	3.1
学研都市	116	68.7	28.2	21.8	27.8	4.6	10.7	5.5	6.1	7.4	2.7
山城北部	156	64.7	31.0	16.5	25.4	9.0	5.0	5.6	6.7	6.3	2.5
相楽東部	34	88.7	23.5	14.5	7.2	7.3	2.0	14.8	2.0	8.0	0.0

区分	学業との兼ね合い	親の意向	その他
全体	3.1	2.3	2.9
丹後	0.0	3.8	5.2
中丹	0.9	1.3	2.1
南丹	1.6	5.8	7.3
京都市域	4.3	2.3	2.6
乙訓	0.0	3.4	3.7
学研都市	4.0	1.1	2.3
山城北部	1.3	1.2	2.6
相楽東部	0.0	6.6	5.3

4. 希望する子ども数

(1) 希望子ども数

(希望子ども数の大きな減少がみられる)

希望する子ども数の平均値（他のすべての集計と同様に男女別・年齢別・地域別によるウェイト調整済み）は1.72人であった。2014年調査報告書に記載された希望子ども数2.3人を大きく下回る（図2.4.1）。今回調査で男女別に希望子ども数の平均値を算出すると、男性1.75人に対して女性は1.69人であった。

希望子ども数の分布をみると、「二人」が男女ともほぼ半数を占める（図2.4.2）。多子となる三人以上を算出すると男性17%、女性20%である。男性よりも女性の方が希望子ども数の平均値がやや少ないことには「子どもは欲しくない」が女性で20%（男性17%）に上ることが響いている。

図 2.4.1 希望子ども数の平均値

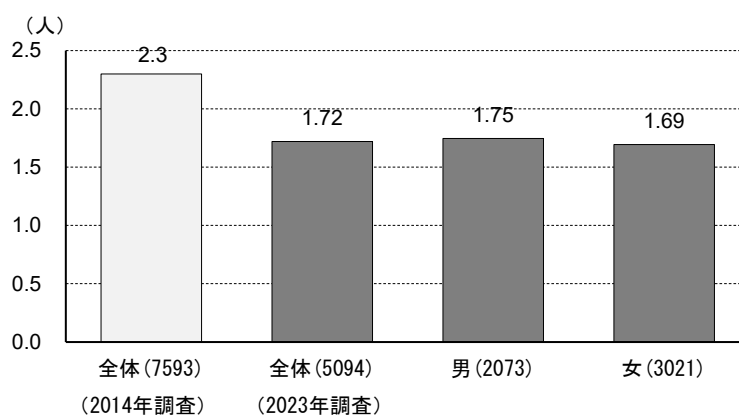
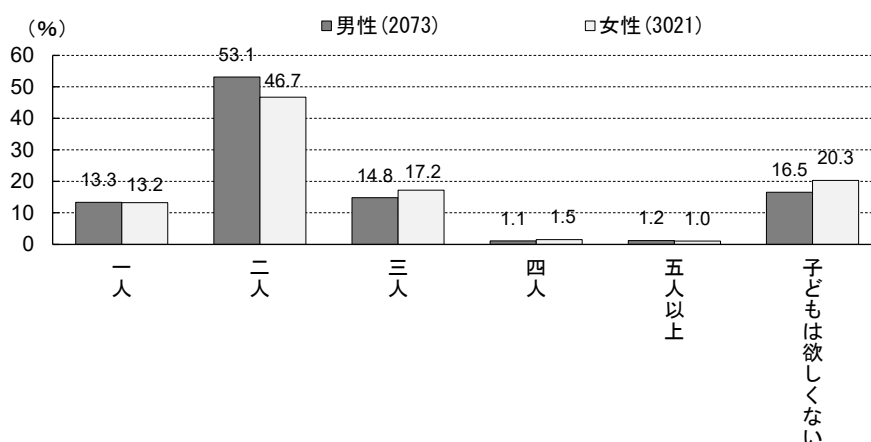


図 2.4.2 希望子ども数の分布



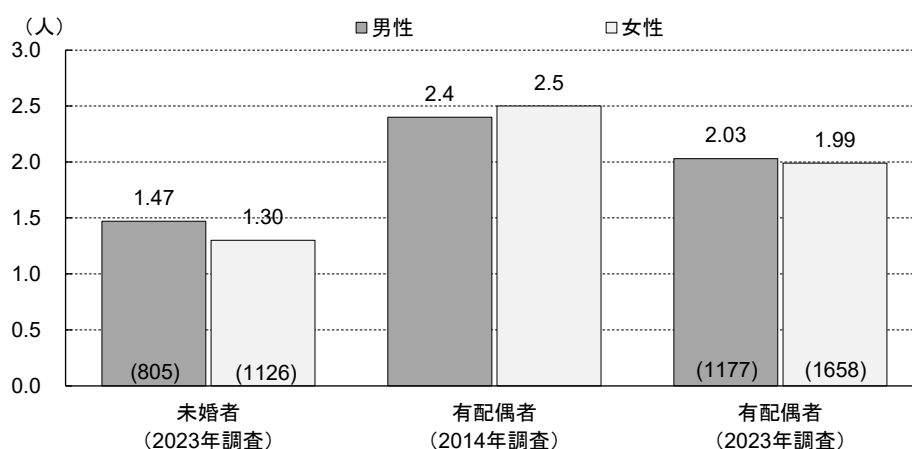
(配偶状態によって希望子ども数の差が大きい)

有配偶者の希望する子ども数の平均値は、男性 2.03 人、女性 1.99 人である。2014 年調査の男性 2.4 人、2.5 人から大きく低下している (図 2.4.3)。また、有配偶者の希望子ども数に対して、未婚者では、男性 1.47 人、女性 1.30 人であり、配偶状態による差が大きい。

有配偶状態別に希望子ども数の分布をみると、未婚者の希望子ども数を低くしている理由は主に「子どもは欲しくない」の回答であることがわかる (図 2.4.4)。未婚者の「子どもはほしくない」は、男性と女性の間で 10 ポイントの差が生じている。

未婚者の希望子ども数は、未婚者の結婚意思を強く反映している (図 2.4.5)。とりわけ、女性において結婚の「年齢志向」と「相手志向」の間で大きな差が生じていることが注目される。

図 2.4.3 配偶状態別の希望子ども数の平均値



(注) 図 2.4.1 の「全体」では「独身者 (離別・死別)」(男性 3.3%、女性 7.6%) が含まれるが、未婚者と有配偶者の比較に当たって「独身者 (離別・死別)」の掲載を省略した (以下、同様)

図 2.4.4 配偶状態別にみた希望子ども数の分布

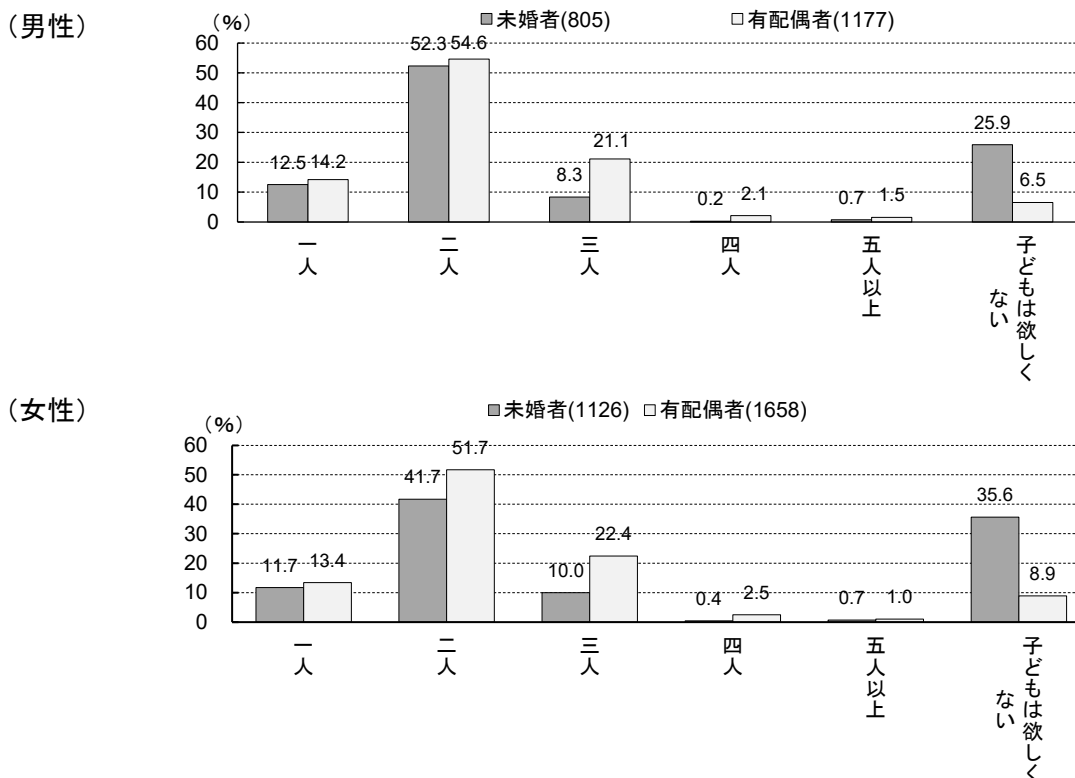
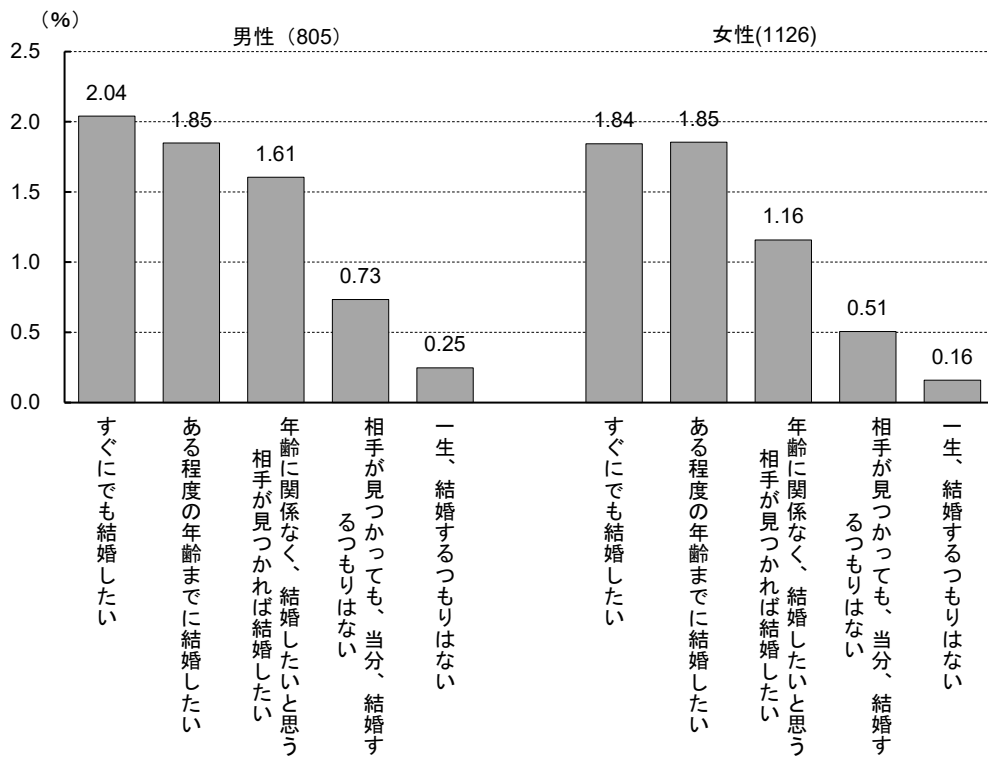


図 2.4.5 結婚意思別にみた希望子ども数の平均値（未婚者）



(2) 有配偶者の希望子ども数に対して影響が想定される要因

①子どもが欲しい理由、欲しくない理由

(子どもが欲しい理由は価値観、欲しくない理由は金銭面が際立つ)

子どもが欲しいと思う理由は、「生活が楽しく心が豊かになるから」「自然なことだから」「子どもが好きだから」といった、子どもや生活の価値観に関わる理由が多い(図2.4.6)。

一方、子どもが欲しくない理由(希望子ども数が一人である理由)は「金銭的な裕福さが失われるから」が際立って多く、この他にも「自分の時間が制約されるから」「行動や生き方の自由が失われるから」等のデメリットを挙げる回答は多い。その中で、「子育てに自信がないから」が女性で25%に達し、女性の二番目に多い回答になっている。また、女性では「出産に対して自信がないから」も19%に上る。

「子どもを持つ積極的な意味が見出せないから」といった価値観に関わる理由は、男性14%、女性16%になっている(図2.4.7)。

図2.4.6 子どもが欲しいと思う(思った)理由(有配偶者、希望子ども数一人以上)

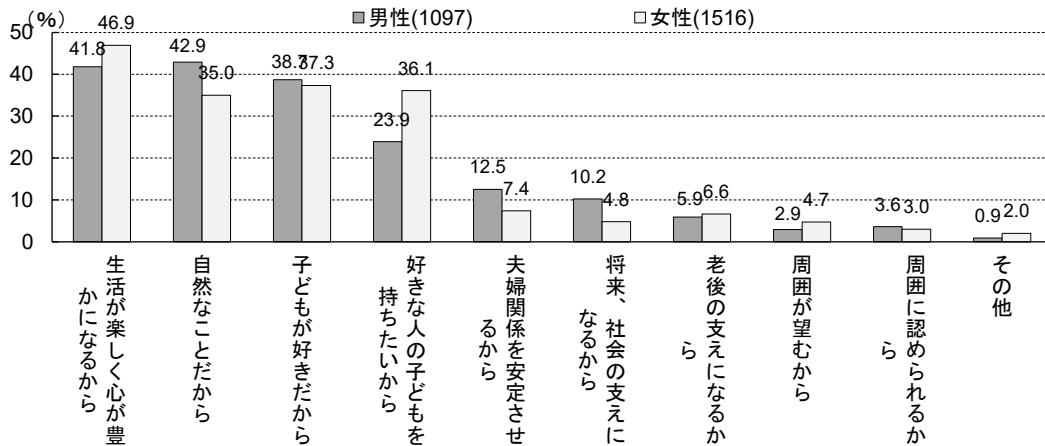
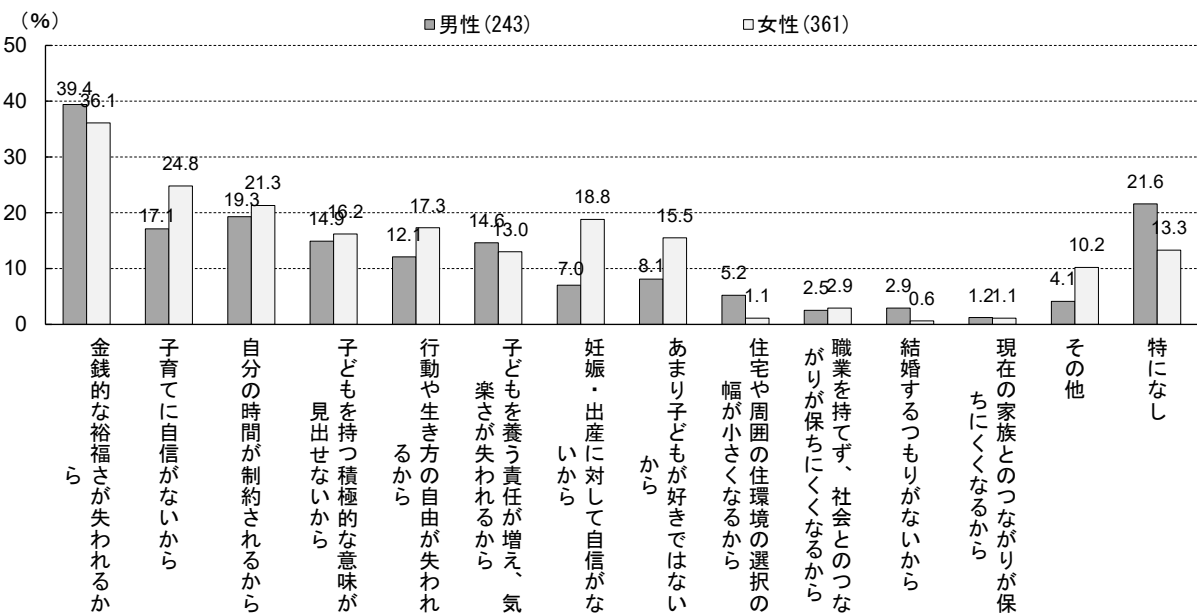


図2.4.7 子どもが欲しくない理由、希望子ども数が一人である理由(有配偶者、希望子ども数が一人または「子どもは欲しくない」と回答した者)



②最初の子どもを持った自分の年齢

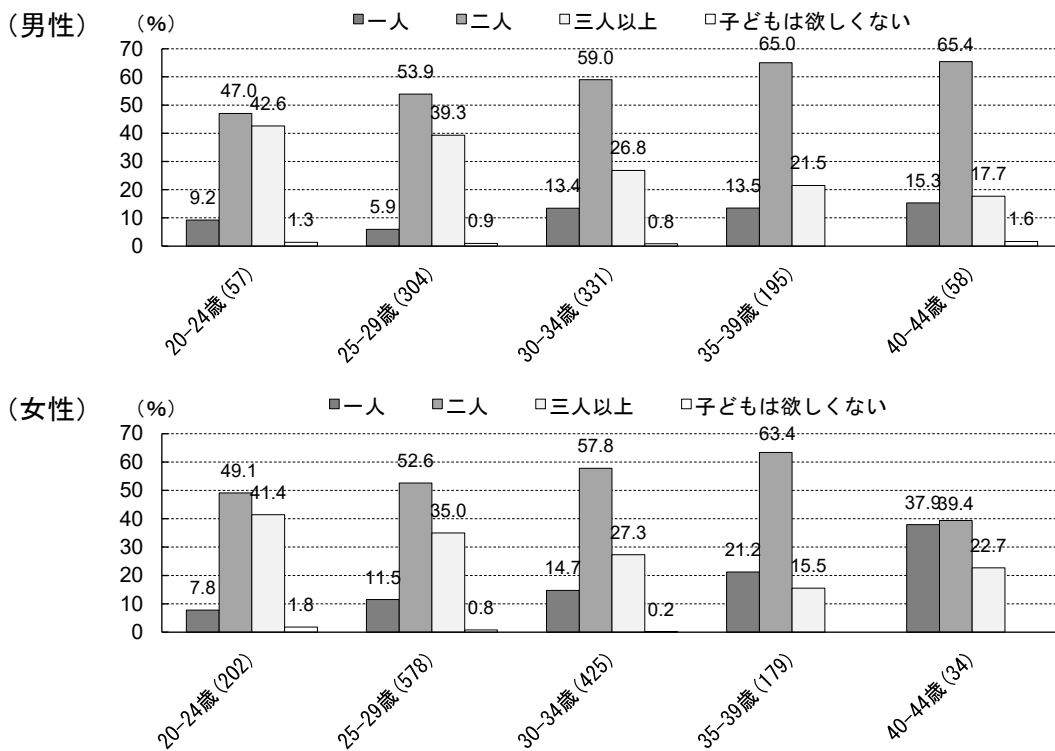
(有配偶者の希望子ども数の分布は最初の子どもを持った年齢によって大きく変化する)

有配偶者の希望子ども数の分布に、最も明瞭で、かつ、強い影響を及ぼすと考えられるのは、最初の子どもを持った自分の年齢である。特に女性において影響が顕著である。

図 2.4.8 の通り、年齢に伴って「三人以上」が減少するものの代わりに「二人」が増加するため、図 2.4.9 の希望子ども数の平均値は、男性ではそれほど大きく低下しない。女性は、年齢に伴う「三人以上」等の減少が大きいため、希望子ども数の平均値の低下が大きくなっている。

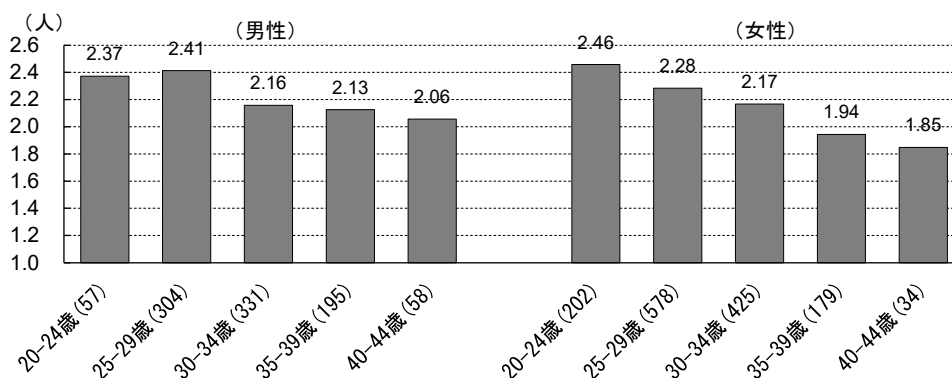
最初の子どもを持った年齢は初婚年齢と強い関係があると考えられ、これは初婚年齢を分析する際に触れる。なお、最初の子どもを持った年齢の影響を受けて、希望子ども数への影響が想定される事象の中に関係が表れにくいものがあることに注意が必要である。

図 2.4.8 最初の子どもを持った自分の年齢別にみた希望子ども数（子どもがいる有配偶者）



(注) 標本サイズが小さい20歳未満と40-49歳の掲載を省略した(以下、同様)

図 2.4.9 最初の子どもを持った自分の年齢別の希望子ども数平均値（子どもがいる有配偶者）



③所得

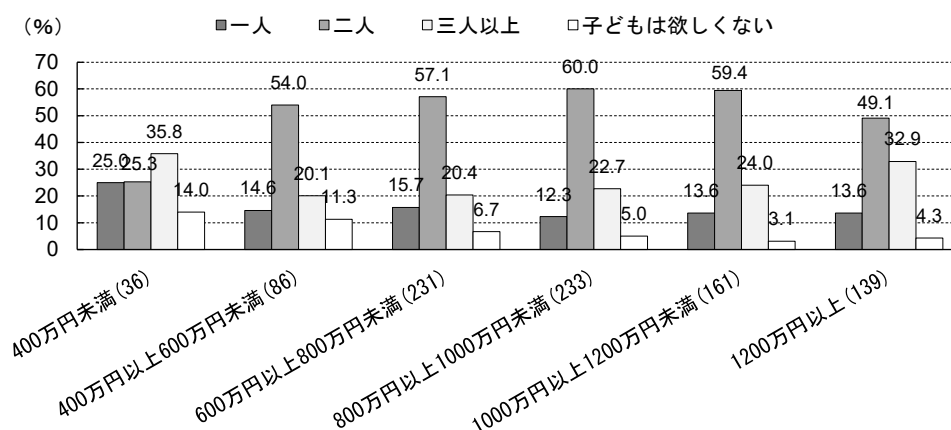
(夫婦の所得と希望子ども数の中に明確な関係はみられない)

図 2.4.7 の通り、有配偶者において、子どもが欲しくない（希望子ども数が一人である）理由は「金銭的な裕福さが失われる」が最も多かった。そこで、有配偶者を対象に、夫婦の年収合計と希望子ども数との関係を把握した（図 2.4.10）。

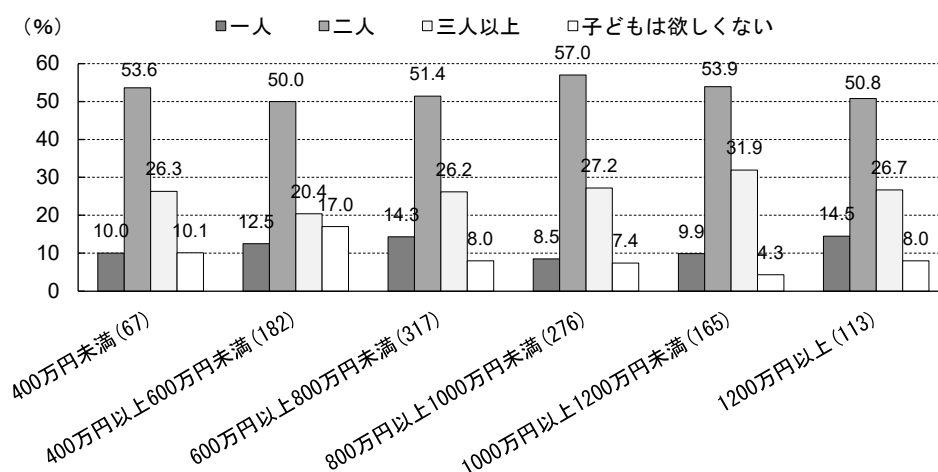
ところが、夫婦の年収額と希望子ども数の中には明確な相関は表れなかった。

図 2.4.10 夫婦の年収合計別にみた希望子ども数（有配偶者）

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1018	0.0827
P値	0.0247	0.0852

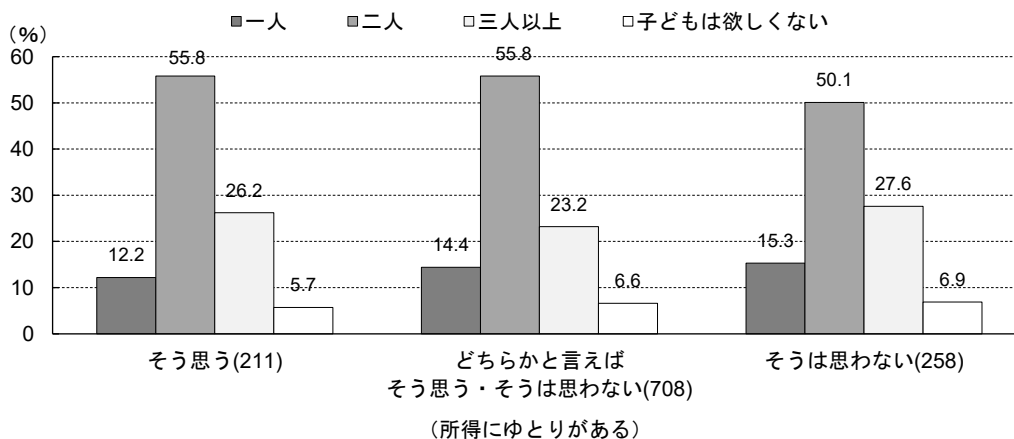
(有配偶女性では子どもを持つことへの機会費用が影響している可能性がある)

「所得のゆとり感」別にみると、男性では、希望子ども数との間に相関はみられない(図2.4.11)。しかしながら、女性においては、「所得のゆとり感」があると希望子ども数「一人」と「子どもは欲しくない」が増加し、「三人以上」が減少する傾向がみられる。

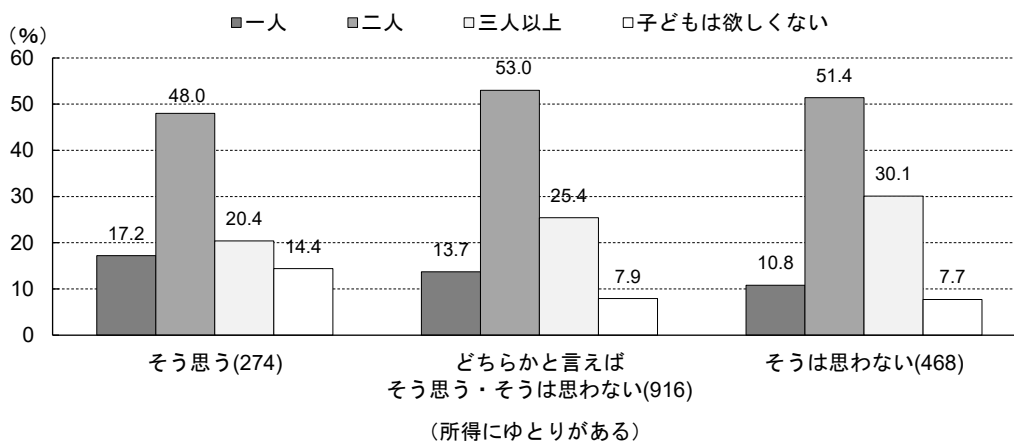
有配偶女性においては、希望子ども数に対して、所得のゆとり感が、子どもを持つことへの機会費用となって表れている可能性が考えられる。

図 2.4.11 所得のゆとり別にみた希望子ども数 (有配偶者)

(男性)



(女性)



④労働状態

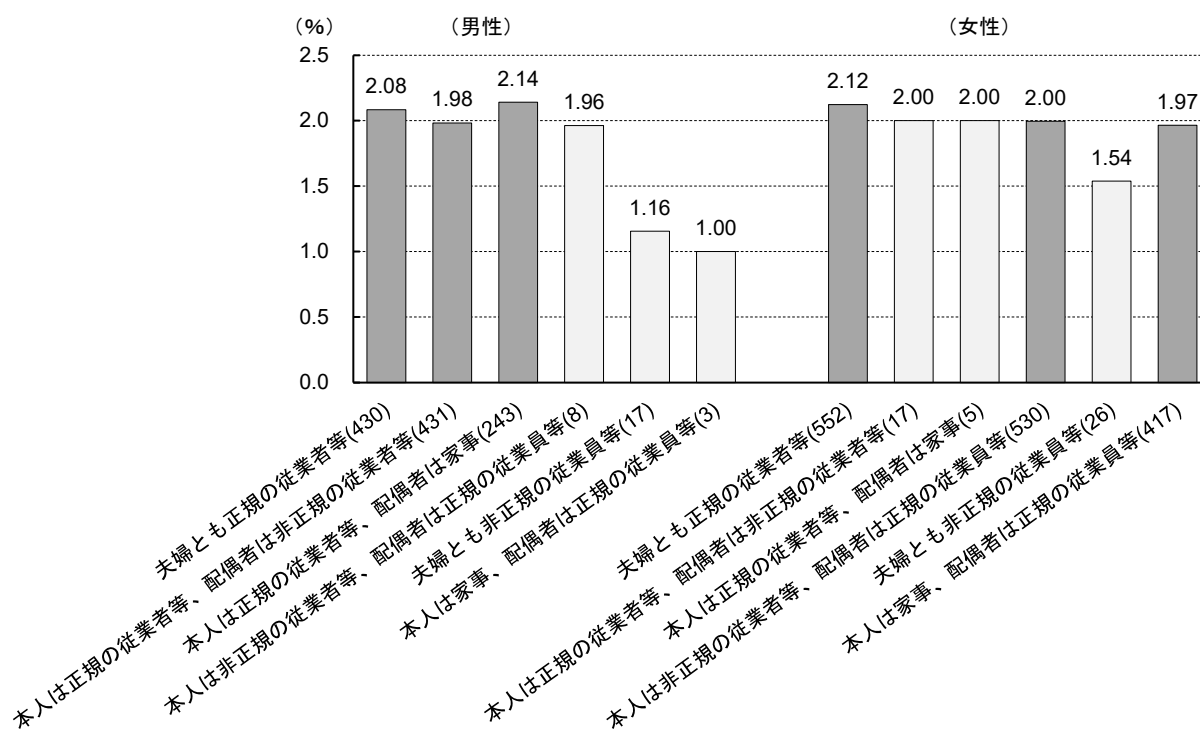
(夫婦とも正規従業員でも希望子ども数は2を超える)

本人と配偶者の就業形態を利用して六つの組み合わせを作成し、男女別に希望子ども数の平均値を算出した(図2.4.12)。

男女とも、「夫婦とも正規の従業員等」と「男性が正規の従業員等、女性が家事」との間に希望子ども数の差はなく、両方で2を超えている。また、「夫婦とも正規の従業員等」と「男性が正規の従業員等、女性が非正規の従業員等」との間でもほとんど差はみられない。女性が、家事、またはパートタイム等によって時間的に自由度があるとされる非正規従業員であると、希望子ども数が多くなるという事実はみられない。

ただ、回答数は少ないものの、男性の場合、男性が非正規従業員であると希望子ども数は大きく減少し、女性では、夫婦が両方とも非正規従業員であると希望子ども数が少なくなる。

図 2.4.12 夫婦の労働状態別にみた希望子ども数の平均値(有配偶者)



- (注) 1. 「正規の従業員等」は、正規の職員・従業員、会社などの役員、自営業主・家族従業者、家庭での内職であり、「非正規の従業員等」は、パート・アルバイト、派遣・嘱託・契約職員である
 2. 労働状態のうち、失業中、学生、無職、その他(働くことができない)は省略した
 3. 色の濃い棒グラフは、回答数が大きく、注目される労働状態の組み合わせである

⑤子育てに対する価値観

(子育ての自然さは「三人以上」を大きく増加させる)

子育てに対する価値観を「子どもを持つことは自然と思う」で把握して、希望子ども数との関係性を把握した。

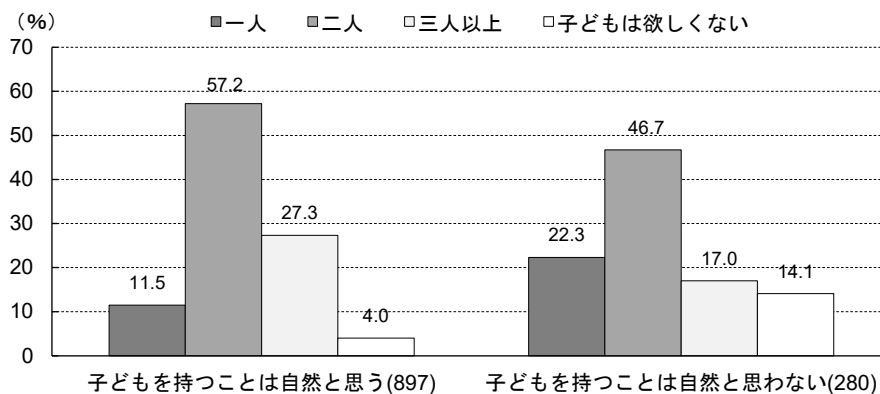
その結果、「自然と思う」であると「自然と思わない」に対し、男性では「子どもを欲しくない」と希望子ども数「一人」が大きく減少し、「三人以上」が増加する様子がはっきりと表れる。「二人」も増加する(図 2.4.13)。

女性では「二人」にはほとんど差はなく、「一人」の割合も男性に比べ大きくない。ところが、「子どもを欲しくない」の減少や、希望子ども数「三人以上」の増加は男性よりも大きい。

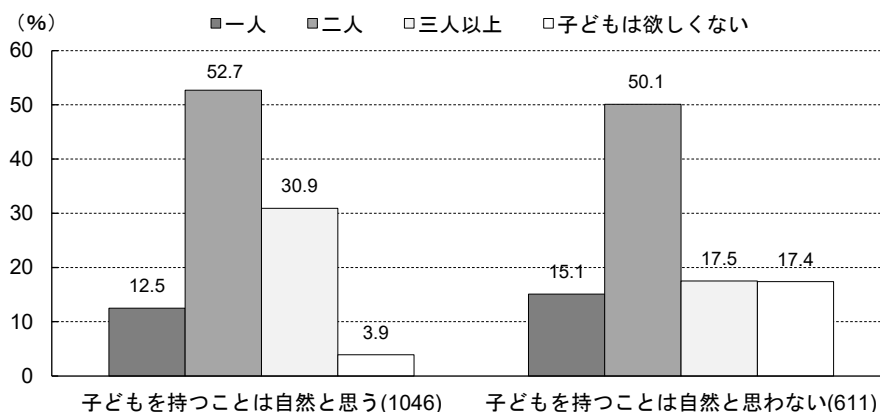
子育てに対する価値観別に希望子ども数の平均値を算出すると、男性では「自然と思わない」の1.73に対して「自然と思う」は2.12になり、女性では「自然と思わない」の1.71に対し「自然と思う」は2.16に上昇する。(図 2.4.14)。

図 2.4.13 子育ての価値観別にみた希望子ども数(有配偶者)

(男性)

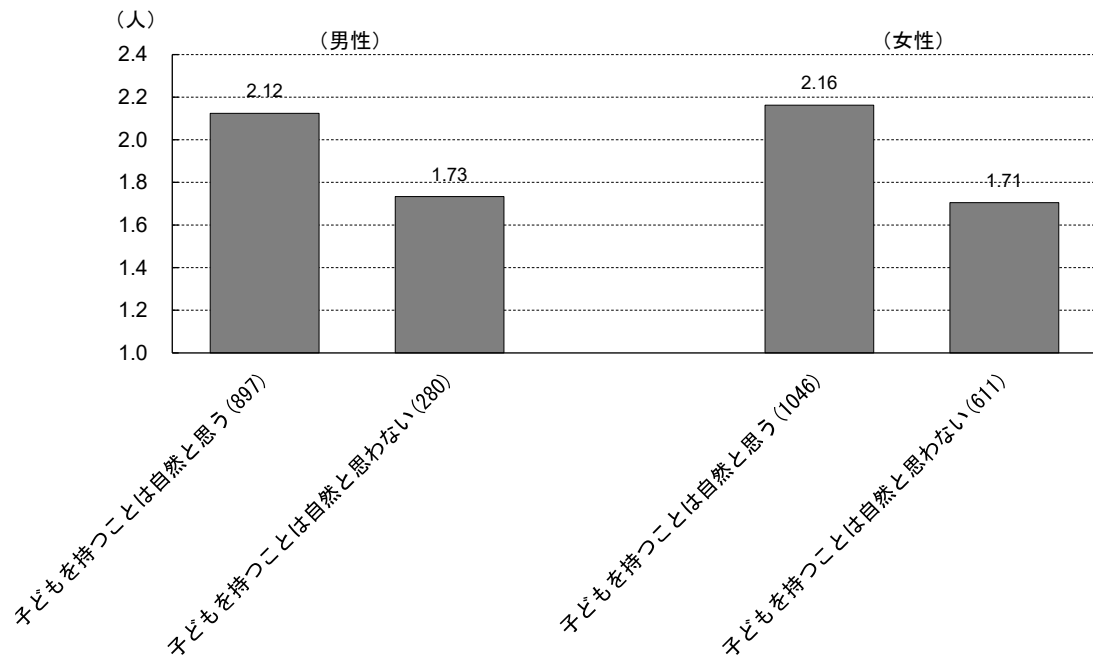


(女性)



(注) 図中の「子どもを持つことは自然と思う」は「子どもを持つことは自然なことである」に対して「とてもそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した者であり、「子どもを持つことは自然と思わない」は「全くそう思わない」「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」と回答した者

図 2.4.14 子育ての価値観別の希望子ども数の平均値（有配偶者）



⑥子育ての幸福感

(子どもがいる者のほとんどが子育ての幸せを感じている)

「子育てをされていて幸せを感じる」という者は、「とてもそう思う」が男性、女性とも 24%に上る(図 2.4.15)。「どちらかと言えばそう思う」までの合計では男女の両方が 89%になり、子育てに幸福を感じている者がほとんどを占める。

子育ての幸福感と希望子ども数との関係は、幸福感が強い者ほど「三人以上」が増える傾向がみられる。女性では「一人」が減る傾向もあり、幸福感との関係がより明瞭である(図 2.4.16)。

図 2.4.15 子育ての幸福感 (子育てをされている有配偶者・独身者)

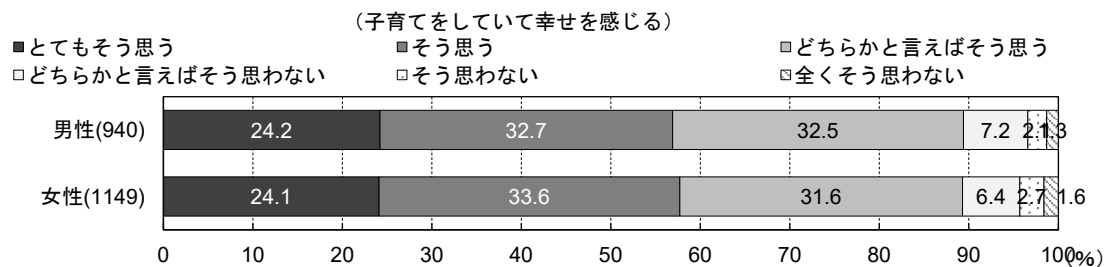
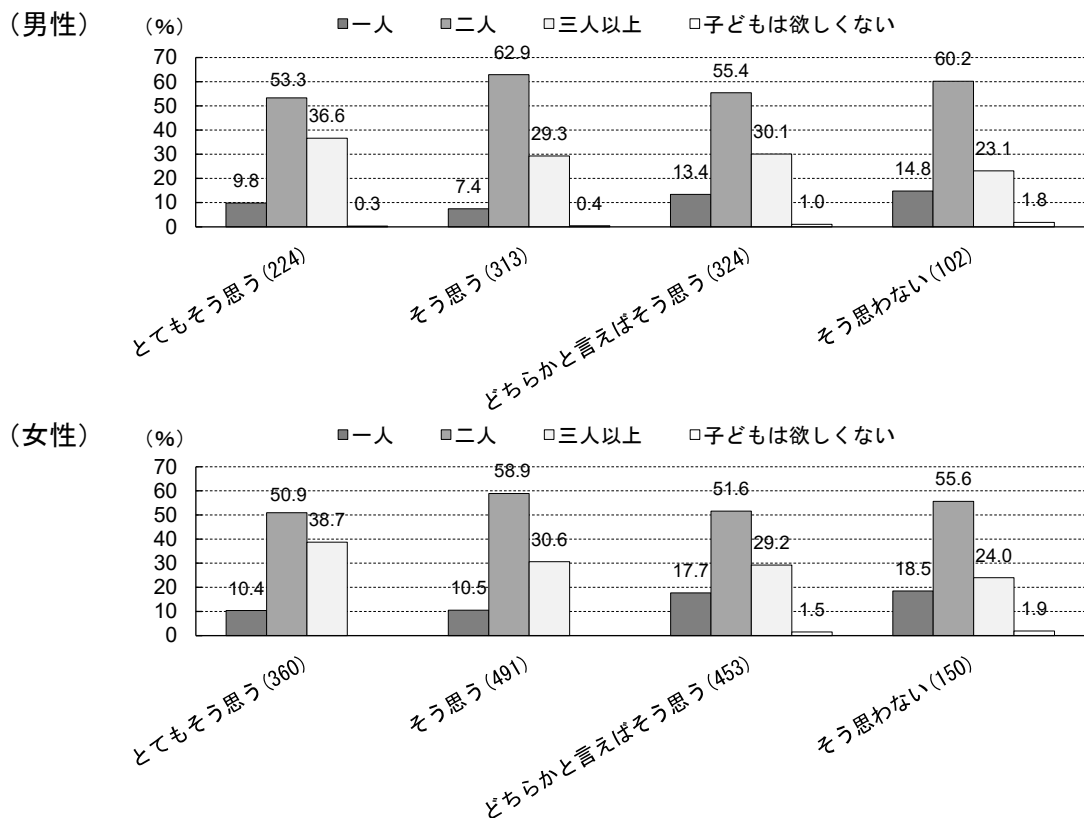


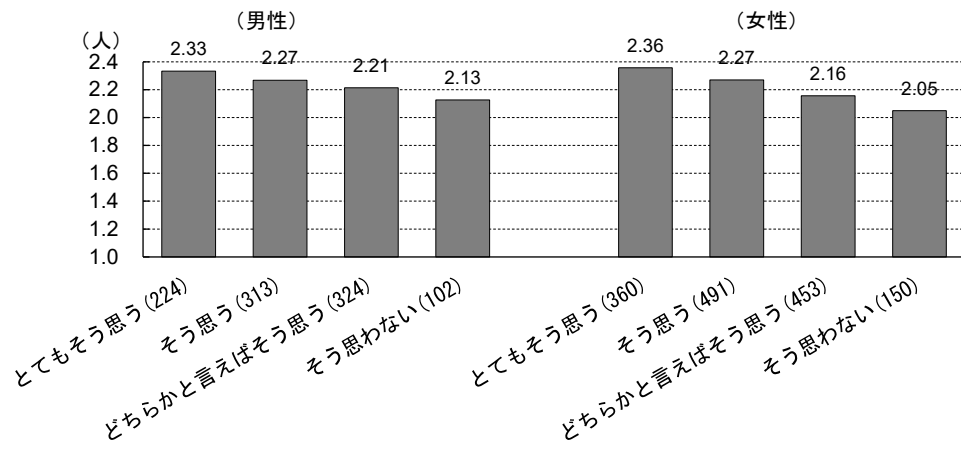
図 2.4.16 子育ての幸福感別にみた希望子ども数 (子育てをされている有配偶者・独身者)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0731	0.0992
P値	0.0795	0.0000

(注) 図 2.4.16 の「そう思わない」は、図 2.4.15 の「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」の合計である

図 2.4.17 子育ての幸福感到にみた希望子ども数の平均値
 (子育てをしている有配偶者・独身者)



⑦配偶者との家事・育児の分担

(家事・育児の分担が大きく偏ると希望子ども数への影響が表れる)

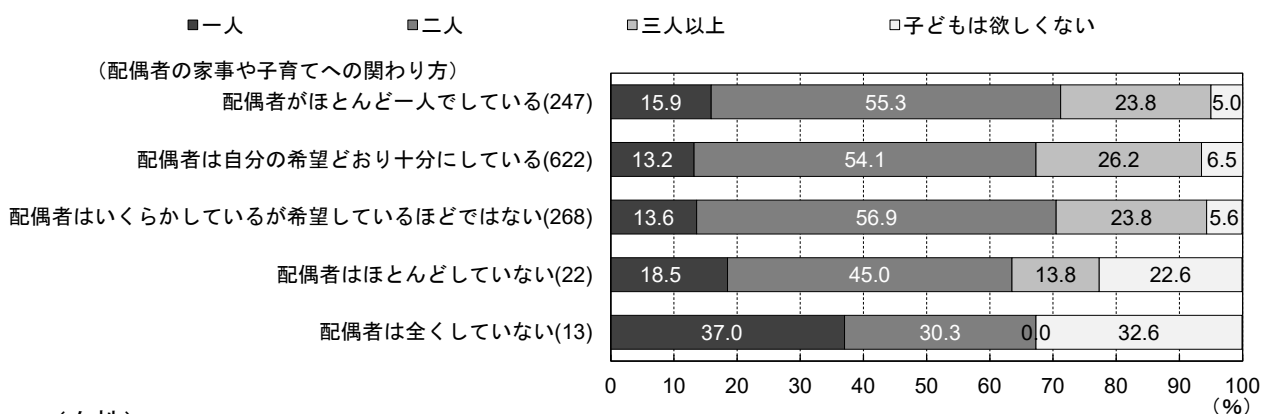
有配偶者において、家事・育児が自分一人に偏っていると希望子ども数に影響することが考えられる。そこで、配偶者の家事・育児の分担状況を分析軸にして、希望子ども数の集計を行った(図2.4.18)。

女性の集計結果をみると、「配偶者はほとんどしていない」とであると「子どもは欲しくない」が13%の上り、「配偶者は全くしていない」では「子どもは欲しくない」(16%)がさらに増加する。また、「配偶者は全くしていない」とであると、希望子ども数「一人」が増加し、「三人以上」が大きく減少する。明瞭な関係ではないものの、配偶者との家事・育児の分担は希望子ども数にいくらか影響を及ぼしているとみられる。

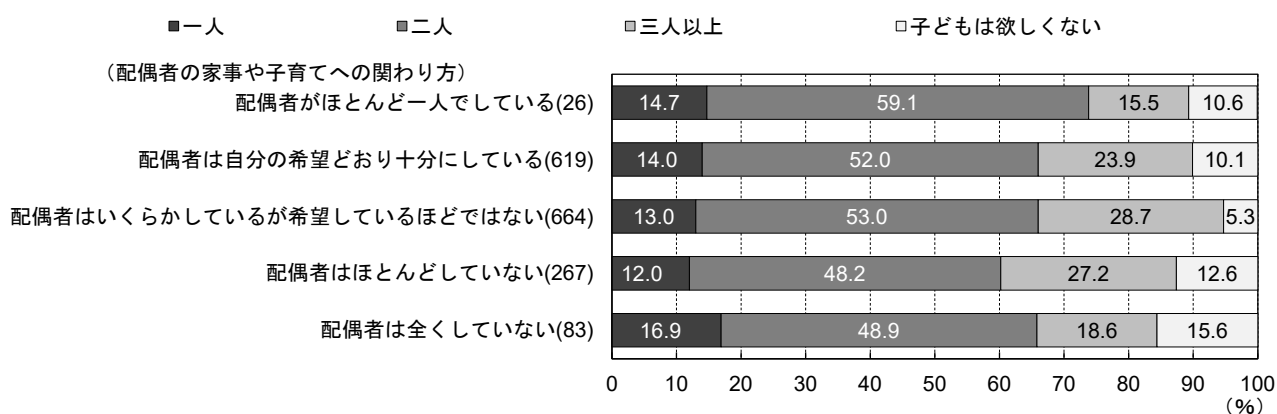
男性では、回答者数は少ないが、「配偶者はほとんどしない」「配偶者はまったくしない」とであると希望子ども数に顕著な減少がみられる。

図 2.4.18 希望子ども数 (有配偶者、配偶者の家事や子育てへの関わり方別)

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0991	0.0742
P値	0.0006	0.0068

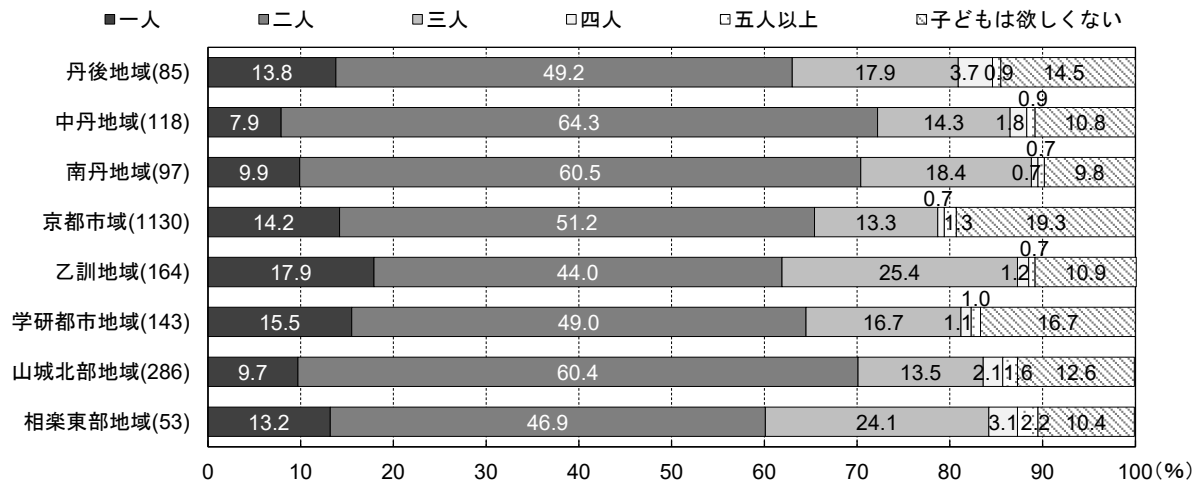
(3) 地域別の集計

「子どもは欲しくない」という回答は男女とも京都市域で最も多い

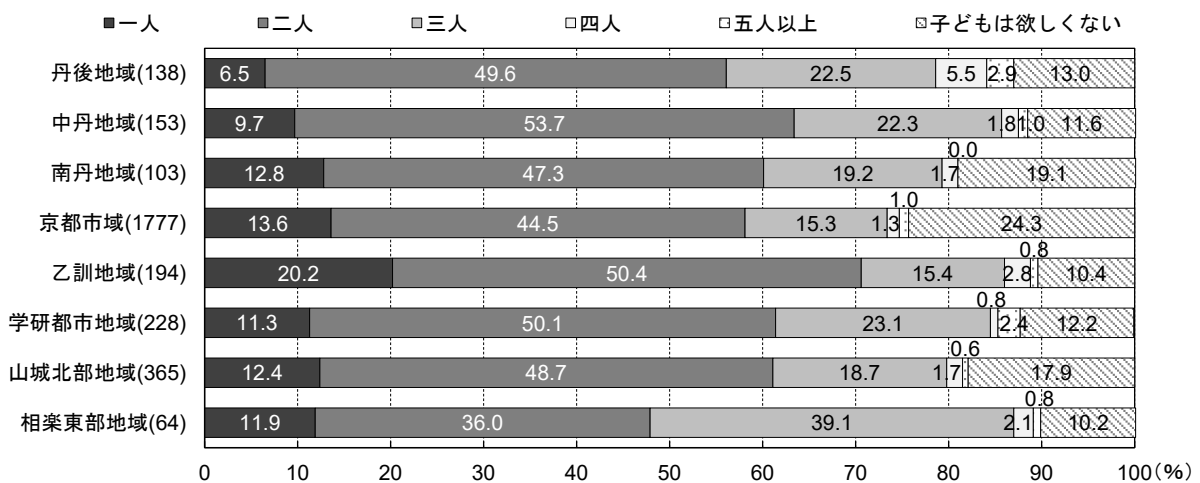
希望子ども数の分布をみると、男性ではすべての地域で「二人」が最も多い。また、乙訓と京都市域は他の地域と比べ「一人」が多く、乙訓と相楽東部は「三人」が多くなっている。一方で京都市域と研究都市は「子どもは欲しくない」が多くなっている。女性では相楽東部を除く地域で「二人」の回答が最も多く、相楽東部では「三人」が最も多くなっている。一方で、男性と同様に「子どもは欲しくない」の回答が他の地域と比べ京都市域で最も多く、男性と比べても5ポイント多くなっている(図2.4.19)。

図 2.4.19 地域別の希望の子ども数の分布

(男性)



(女性)



希望子ども数の地域差は大きく、男性では相楽東部の 2.03 人のほか、南丹の 1.92 人、中丹の 1.91 人が 1.9 を超えている。女性では相楽東部の 2.13 人、丹後の 2.10 人、中丹と学研都市の 1.96 人が多い。

京都市域では男性 1.66 人、女性 1.59 人とどまっている。

表 2.4.1 地域別にみた希望子ども数の平均値
(人)

住居地	全体	男	女
丹後地域	1.97	1.85	2.10
中丹地域	1.93	1.91	1.96
南丹地域	1.82	1.92	1.72
京都市域	1.62	1.66	1.59
乙訓地域	1.86	1.90	1.83
学研都市地域	1.85	1.73	1.96
山城北地域	1.82	1.88	1.76
相楽東地域	2.08	2.03	2.13

（「生活が楽しく心が豊かになるから」が多くの地域で多い）

地域別に子どもが欲しいと思う理由を把握した（表2.4.2）。男性では、丹後・中丹・南丹を除く地域で「生活が楽しく心が豊かになるから」が最も多くなっている。丹後・中丹・南丹では「自然なことだから」が最も多く、そのほかの地域も30%を上回るなど多くなっている。女性では、丹後を除く地域で「生活が楽しく心が豊かになるから」が最も多くなっている。丹後では「子どもが好きだから」が最も多く、他の地域でも30%を上回るなど多くなっている。一方で、「自然なことだから」という回答は丹後・南丹・乙訓以外は30%を下回るなど男性と比べ、すべての地域で低くなっている。

表 2.4.2 地域別にみた子どもが欲しいと思う（思った）理由（複数）

（男性）

（%）

区分	N	生活が楽しく心が豊かになるから	子どもが好きだから	自然なことだから	好きな人の子どもを持ちたいから	将来、社会の支えになるから	夫婦関係を安定させるから	老後の支えになるから	周囲に認められるから	周囲が望むから	その他
全体	1707	41.0	37.6	35.9	26.4	12.4	11.1	8.8	6.0	3.1	1.0
丹後	75	44.3	33.8	47.7	34.7	8.8	8.7	7.9	1.0	3.2	2.6
中丹	101	36.2	37.1	43.6	26.4	5.4	9.5	11.9	8.7	1.7	0.6
南丹	86	37.0	35.4	40.8	22.9	13.8	10.0	3.1	2.6	1.5	0.0
京都市域	893	39.7	38.3	32.6	27.0	13.4	11.1	10.0	6.7	3.7	1.0
乙訓	145	46.1	42.2	32.1	23.9	17.1	9.9	9.2	3.1	1.4	2.7
学研都市	121	50.6	38.3	40.1	34.3	13.2	13.9	5.0	6.4	2.1	0.5
山城北部	240	42.1	34.3	40.2	20.1	10.2	11.8	6.4	4.6	3.6	0.6
相楽東部	46	47.7	29.4	43.0	33.1	9.4	12.6	10.9	4.9	3.7	3.6

（女性）

（%）

区分	N	生活が楽しく心が豊かになるから	子どもが好きだから	好きな人の子どもを持ちたいから	自然なことだから	老後の支えになるから	将来、社会の支えになるから	夫婦関係を安定させるから	周囲が望むから	周囲に認められるから	その他
全体	2422	46.1	38.1	35.9	28.3	8.6	6.9	6.6	4.9	3.2	2.2
丹後	122	43.9	44.1	42.3	36.0	7.0	3.5	7.5	4.9	1.6	2.8
中丹	136	42.3	37.9	32.0	39.1	9.7	10.5	5.3	2.2	3.5	3.2
南丹	84	44.6	38.8	35.0	26.9	11.7	6.9	7.5	4.4	3.7	6.8
京都市域	1345	46.2	38.7	35.8	26.4	8.8	6.8	6.3	5.4	3.1	1.9
乙訓	174	47.2	30.3	38.8	32.7	6.2	6.4	6.7	4.3	2.8	1.3
学研都市	201	51.9	40.4	30.0	24.3	8.9	7.4	8.4	3.7	3.0	1.9
山城北部	302	44.1	36.9	39.5	29.5	8.0	5.8	6.7	5.3	4.0	2.0
相楽東部	58	55.2	23.0	46.7	22.7	10.0	14.2	5.0	10.5	0.9	6.2

「金銭的な裕福さが失われるから」が多くの地域で多い

地域別に子どもは欲しくない又は希望する子どもの数が一人である理由を把握した（表2.4.3）。

男性では、すべての地域で「金銭的な裕福さが失われるから」が最も多くなっている。次いで「自分の時間が制約されるから」が多い地域が多くなっている。女性では、相楽東部を除く地域で「金銭的な裕福さが失われるから」が多くなっている。また、男性と異なり丹後・中丹・南丹を除く地域で「子育てに自信がないから」が多くなっている。

表 2.4.3 地域別にみた子どもは欲しくない又は希望する子どもの数が一人である理由（複数）
（男性）

(%)

区分	N	金銭的な裕福さが失われるから	自分の時間が制約されるから	子どもを持つ積極的な意味が見出せないから	子育てに自信がないから	子どもを養う責任が増え気楽さが失われる※ ₁	行動や生き方の自由が失われるから	結婚するつもりがないから	あまり子どもが好きではないから	妊娠・出産に対して自信がないから	住環境の選択の幅が小さくなるから※ ₂
全体	667	32.6	18.3	15.9	15.0	13.3	12.9	9.1	7.3	3.3	3.2
丹後	21	44.4	4.9	11.4	20.2	9.8	4.9	14.4	8.0	0.0	0.0
中丹	28	31.9	23.1	18.8	8.9	13.5	16.8	4.6	9.8	0.0	9.9
南丹	22	24.6	12.3	3.4	15.8	12.3	3.4	16.8	3.4	5.4	7.1
京都市域	406	31.8	19.7	16.9	16.3	14.9	14.3	9.4	8.0	3.1	2.6
乙訓	51	43.3	17.6	6.5	6.3	13.6	15.5	7.9	3.0	7.0	1.5
学研都市	45	33.5	19.4	13.6	18.4	10.5	5.2	2.9	6.3	1.4	3.5
山城北部	82	29.9	12.7	20.1	10.0	6.6	11.8	11.4	6.2	5.7	4.3
相楽東部	12	39.2	16.5	16.5	20.8	11.4	0.0	18.2	16.5	0.0	0.0

区分	社会とのつながりが保ちにくくなるから※ ₃	家族とのつながりが保ちにくくなるから※ ₄	その他	特になし
全体	2.0	0.9	3.3	25.3
丹後	0.0	4.1	0.0	14.8
中丹	0.0	0.0	7.2	22.4
南丹	8.5	0.0	3.5	27.2
京都市域	1.1	1.0	4.0	24.0
乙訓	1.3	0.0	2.6	34.1
学研都市	6.3	0.0	0.0	32.0
山城北部	3.5	1.0	1.1	26.1
相楽東部	0.0	0.0	0.0	28.0

※1 「子どもを養う責任が増え気楽さが失われる」は、調査票において「子どもを養う責任が増え気楽さが失われるから」と表記されている

※2 「住環境の選択の幅が小さくなるから」は、調査票において「住宅や周囲の住環境の選択の幅が小さくなるから」と表記されている

※3 「社会とのつながりが保ちにくくなるから」は、調査票において「職業を持たず、社会とのつながりが保ちにくくなるから」と表記されている

※4 「家族とのつながりが保ちにくくなるから」は、調査票において「現在の家族とのつながりが保ちにくくなるから」と表記されている

(女性)

(%)

区分	N	金銭的な裕 福さが失わ れるから	子育てに自 信がないか ら	自分の時間 が制約され るから	子どもを持 つ積極的な 意味が見出 せないから	妊娠・出産 に対して自 信がないか ら	行動や生き 方の自由が 失われるか ら	あまり子ど もが好きで はないから	子どもを養 う責任が増 え気楽さが 失われる※ 1	結婚するつ もりがない から	社会とのつ ながりが保 ちにくくな るから※3
全体	1009	27.2	26.6	21.6	20.8	19.2	17.1	16.0	14.0	8.9	2.3
丹後	24	23.9	11.9	35.2	16.9	5.9	21.0	23.6	14.1	7.6	8.7
中丹	35	29.8	21.1	21.3	15.8	26.2	20.5	15.0	11.7	2.1	0.0
南丹	33	32.7	17.7	23.9	37.6	17.5	14.2	8.4	11.9	8.9	0.0
京都市域	685	25.4	27.0	21.3	21.2	20.3	17.0	15.7	14.1	9.8	2.1
乙訓	56	28.7	30.3	12.2	20.1	13.8	9.7	19.5	14.2	5.7	5.3
学研都市	53	25.9	25.1	18.5	20.1	16.1	21.1	2.6	10.4	5.5	6.2
山城北部	113	34.6	29.9	26.7	15.4	17.0	19.1	24.6	16.3	9.2	1.6
相楽東部	10	0.0	34.3	30.0	29.2	36.3	15.5	0.0	0.0	7.1	0.0

区分	家族とのつ ながりが保 ちにくくな るから※4	住環境の選 択の幅が小 さくなるか ら※2	その他	特になし
全体	0.6	0.5	8.6	13.4
丹後	4.8	0.0	13.0	11.9
中丹	4.9	0.0	9.3	10.1
南丹	0.0	2.2	15.8	11.1
京都市域	0.5	0.4	9.1	13.0
乙訓	0.0	3.0	3.6	21.4
学研都市	0.0	0.0	8.8	18.3
山城北部	0.0	0.0	5.2	11.4
相楽東部	0.0	0.0	22.1	5.2

5. 持てると思う子ども数

(1) 持てると思う子ども数

(持てると思う子ども数は1.49人である)

希望とは別に、現実に持てると思う子ども数を尋ね、男女別・年齢別・地域別にウエイト調整を行った値を算出すると1.49人となった(図2.5.1)。男性は1.54人、女性1.44人であり、女性は男性よりも0.1人少ない。

持てると思う子ども数は、男女とも「二人」が40%以上を占めるものの、男性では45%、女性41%であり、両者に差がみられる(図2.5.2)。次に多いのは「一人」であり、男性23%、女性24%である。「三人」は男女とも11%であった。

「子どもは欲しくない」が男性では20%、女性では23%を占めており、男女の持てると思う子ども数に差を生じさせている。

図2.5.1 持てると思う子ども数の平均値

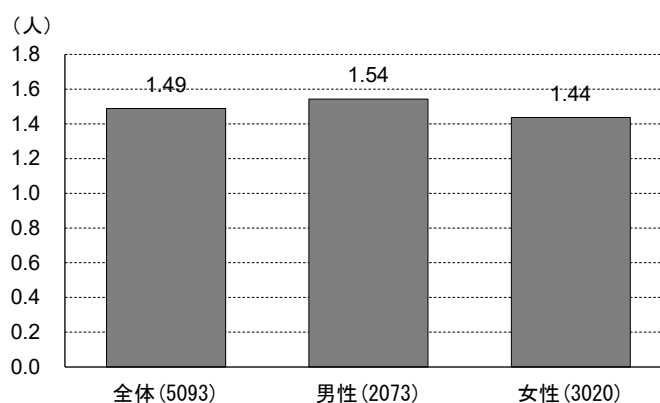
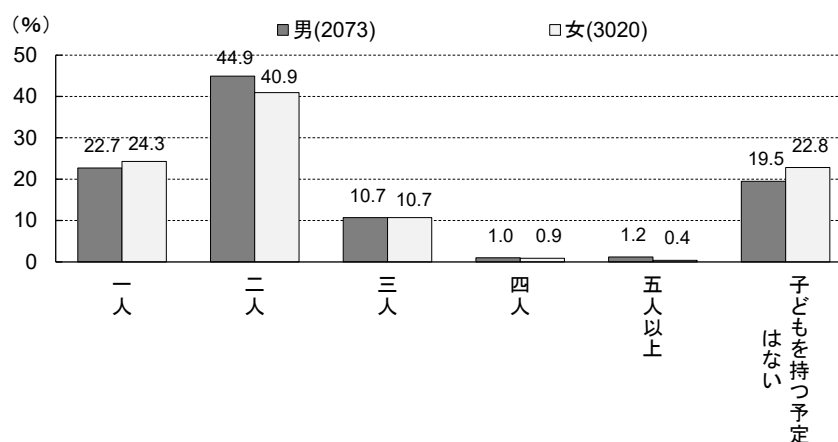


図2.5.2 持てると思う子ども数の分布



(有配偶者の持てると思う子ども数は前回調査より減少している)

希望子ども数と同様、持てると思う子ども数も配偶状態によって大きな差が生じている。有配偶者の持てると思う子ども数は、男性 1.89 人、女性 1.75 人である (図 2.5.3)。有配偶者全体では 1.82 人であり、有配偶者の持てると思う子ども数を把握している 2014 年調査 (2.1 人) から減少している (0.28 人減)。

未婚者の持てると思う子ども数は 1.15 人である。有配偶者と同様、女性の方が少ない (男性 1.21 人、女性 1.07 人)。

未婚者と有配偶者の持てると思う子ども数の差は、主に「子どもを持つ予定はない」の差であるものの、未婚者は有配偶者と比較して、持てると思う子ども数「一人」が多く「三人」が少ないことも影響している (図 2.5.4)。

図 2.5.3 配偶状態別の持てると思う子ども数の平均値

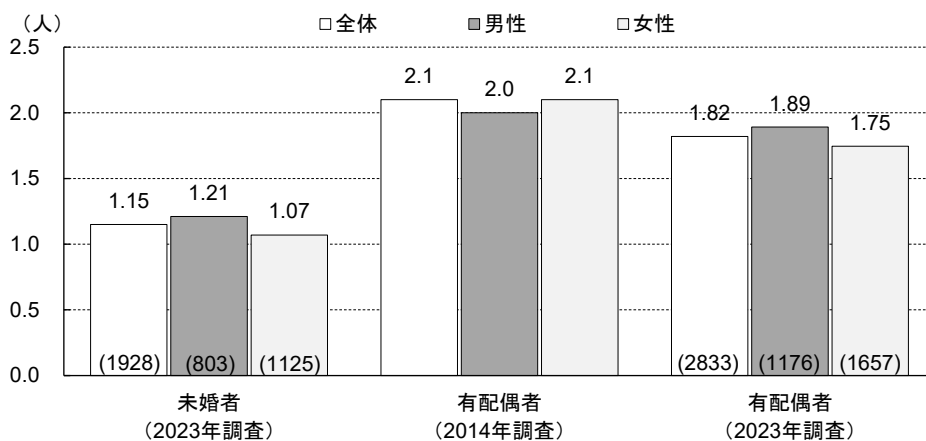
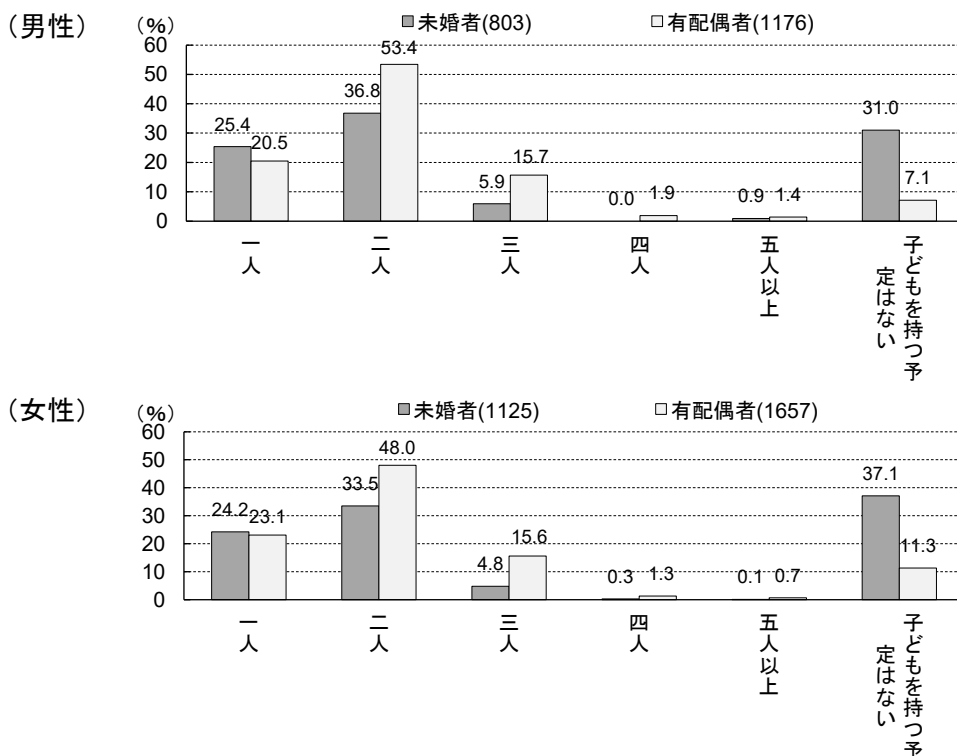


図 2.5.4 配偶状態別の持てると思う子ども数の分布



(2) 持てると思う子ども数に対して影響が想定される要因

①所得

(有配偶者の持てると思う子ども数は夫婦の年収合計に従って増加する)

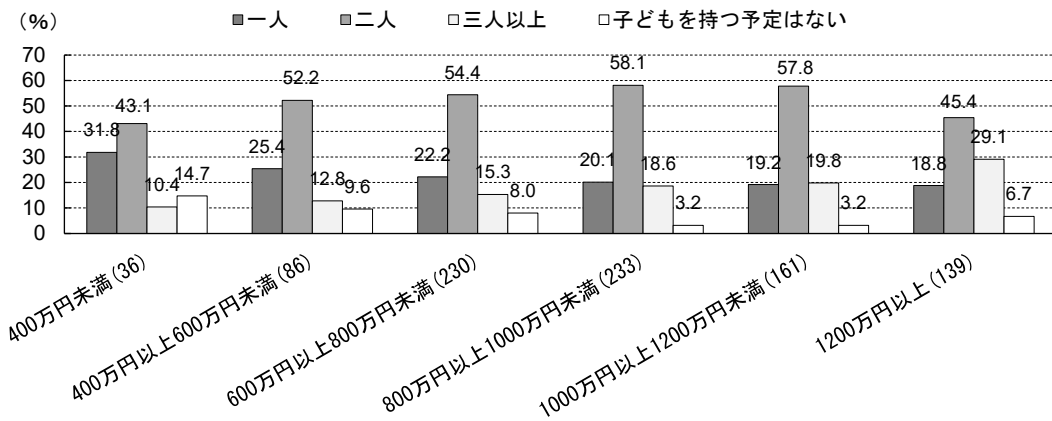
有配偶者を対象にして、夫婦の年収合計別に、持てると思う子ども数を集計した(図2.5.5)。

その結果、男性では、年収が多いと、年収の全階級を通じて「三人以上」が増加する傾向がみられる。「二人」は「800万円以上1000万円未満」まで増加し、その後は「三人以上」等の増加によって回答が減少するため、有配偶者男性では夫婦の年収合計が、持てると思う子ども数を増加させるように影響を及ぼしていると考えられる。

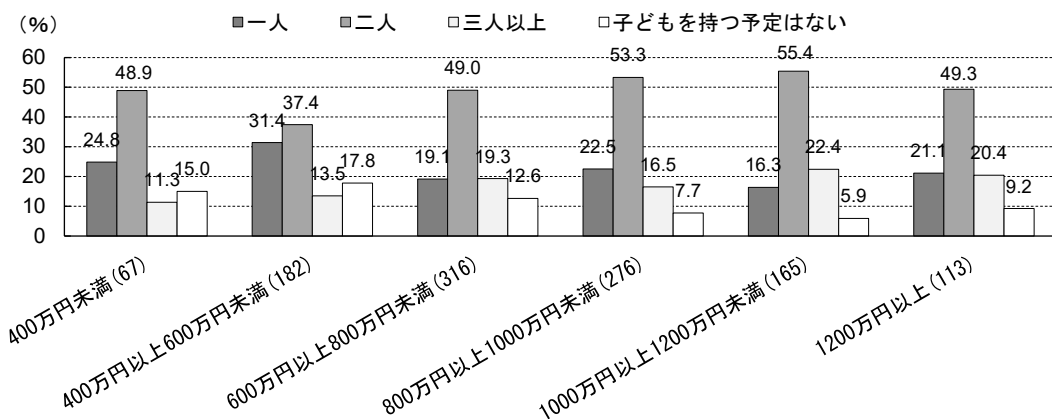
女性においても、おおよそ男性と同様の傾向にあるとみられるが、夫婦の年収合計が「1200万円以上」になると、「一人」や「子どもを持つ予定はない」が大きく増えるという違いがある。また、男性に比較して、夫婦の年収合計が「400万円以上600万円未満」であると「一人」が31%、「子どもを持つ予定はない」が18%と大きな割合を占めている。

図 2.5.5 夫婦の年収合計別にみた、持てると思う子ども数(有配偶者)

(男性)



(女性)



(女性では所得にゆとり感が強いと持てると思う子ども数が減少する)

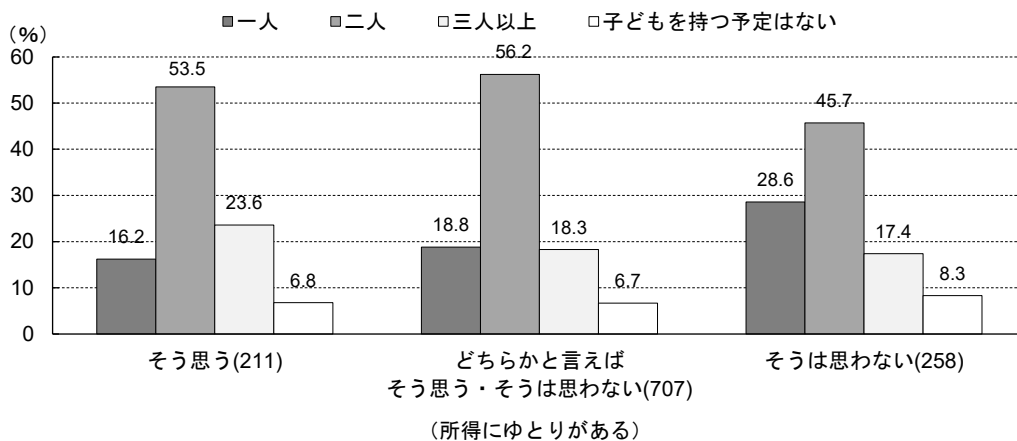
所得のゆとり感でも、男性では、所得のゆとり感が増すと、持てると思う子ども数の「一人」が減少し、「三人以上」が増加する傾向が明らかである(図2.5.6)。

女性でも、「所得のゆとりがあるか」の問いに対して「そうは思わない」(図中の注釈参照)と回答した者と、「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」といった中間的な回答であった者の間で比較すると、後者は前者に対して「一人」が大きく減少して「二人」が増加する。

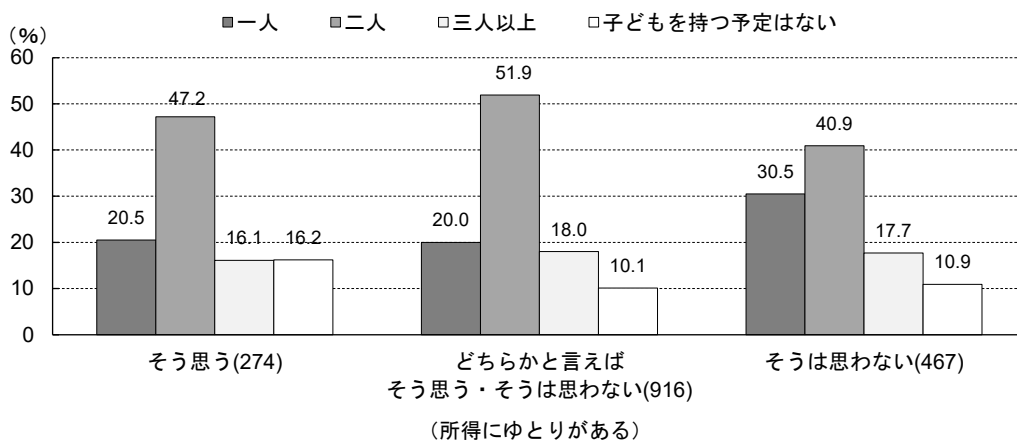
ところが、「そう思う」では「子どもを持つ予定はない」が最も多くなる。「一人」も中間的な回答と同じ割合であり、「三人以上」はやや減少する。これらのことには、所得の機会費用が影響を及ぼしている可能性のほか、子どもを持つ予定がないため所得のゆとり感が生じていることも考えられる。

図 2.5.6 所得のゆとり別にみた、持てると思う子ども数(有配偶者)

(男性)



(女性)



(注) 図中の「そう思う」は「所得にゆとり」があるに対して「とてもそう思う」「そう思う」(断定的肯定)と回答した者であり、「そうは思わない」は「全くそう思わない」「そう思わない」(断定的否定)と回答したものである

②労働状態

(女性では夫婦とも正規雇用であると最も持てる思う子ども数が多い)

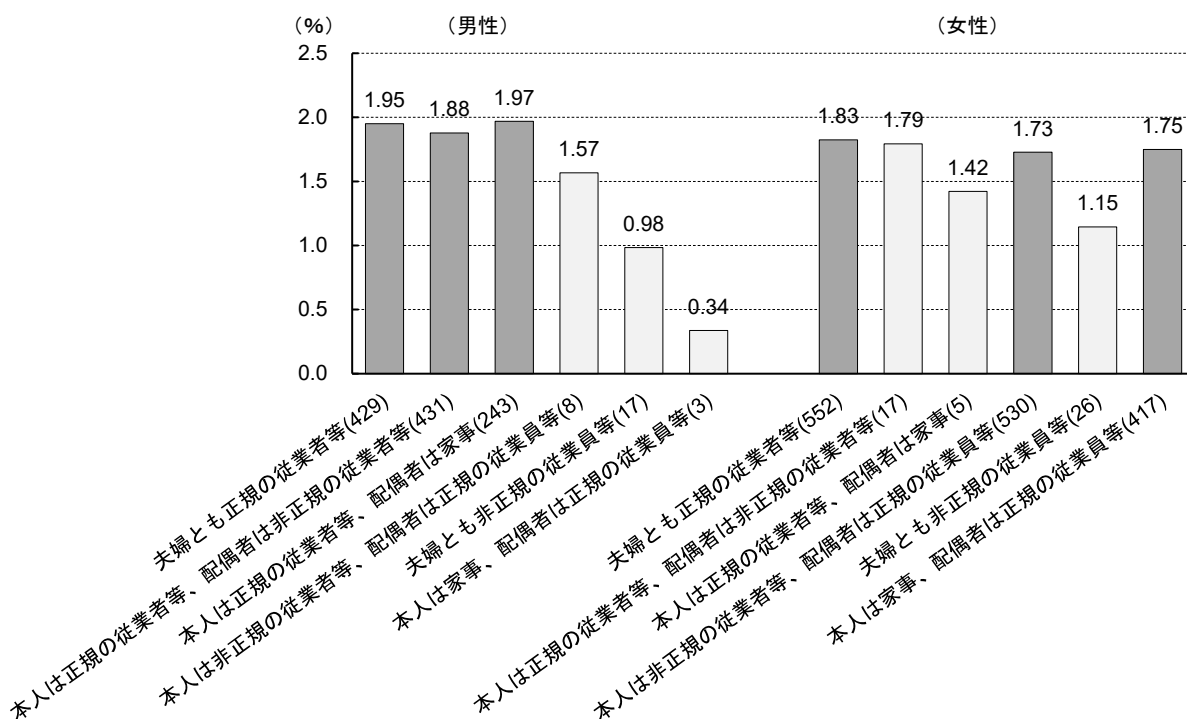
有配偶者の持てると思う子ども数の平均値は1.82人であるが、図2.5.12によると、数は少ないものの、夫婦のうち夫が非正規雇用であると有配偶者の持てると思う子ども数は大きく減少する場合が多い。男性では、本人が非正規雇用であると持てると思う子ども数は1.57人、夫婦とも非正規雇用であると0.98人になる。

女性でも、夫婦とも非正規雇用であると、持てると思う子ども数は1.15人に大きく減少する。ところが、本人が正規雇用、夫が非正規雇用の場合は1.79人であり、全体の平均値と大きな差はない。

また、夫の労働状態を正規雇用に固定し、妻の労働状態を組み合わせ、持てると思う子ども数をみると、男性では、妻が正規雇用の場合は1.95人、非正規雇用では1.88人、家事は1.97人であった。大きな差はみられないものの、これらの中で持てると思う子ども数が最も少ないのは、夫が正規雇用、妻が非正規雇用の組み合わせである。

一方、女性では、夫が正規雇用の場合、自分が正規雇用であると持てると思う子ども数は1.83人、非正規雇用では1.73人、家事は1.75人であった。大きな差ではないものの、男女とも正規雇用の組み合わせが最も持てると思う子ども数が多く、夫が正規雇用、妻が非正規雇用の組み合わせが最も少ない。

図 2.5.7 夫婦の労働状態別に見た、持てると思う子ども数の平均値（有配偶者）



③男女の役割分担意識

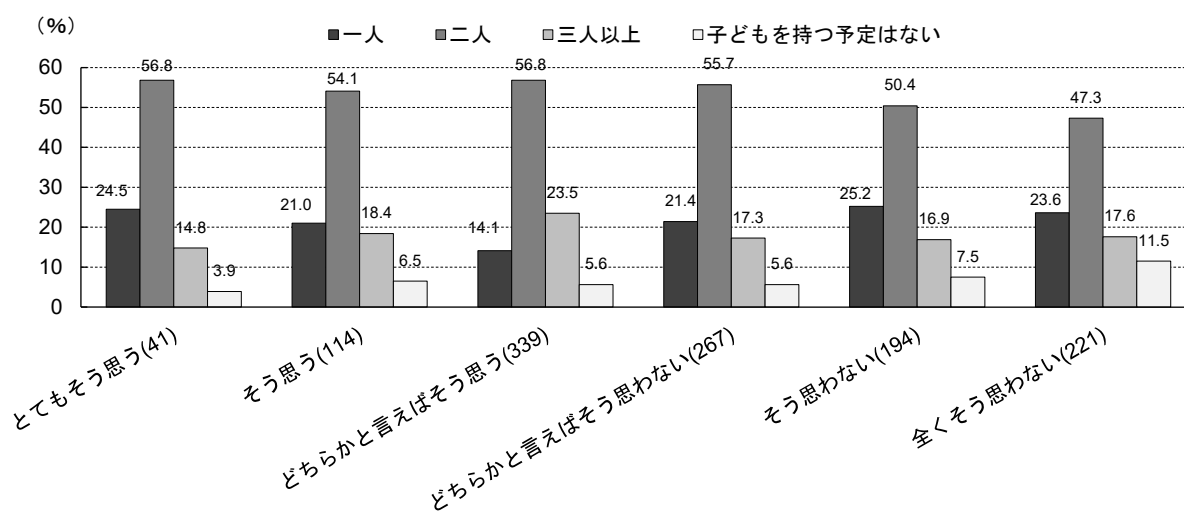
(有配偶者の男女の役割分担意識と持てると思う子ども数に関係はみられない)

男女の役割分担意識と持てると思う子ども数の関係は、有配偶者と未婚者で大きく異なる。

まず、有配偶者をみると、男女とも、男女の役割分担意識と持てると思う子ども数の間には相関はみられなかった(図2.5.8)。

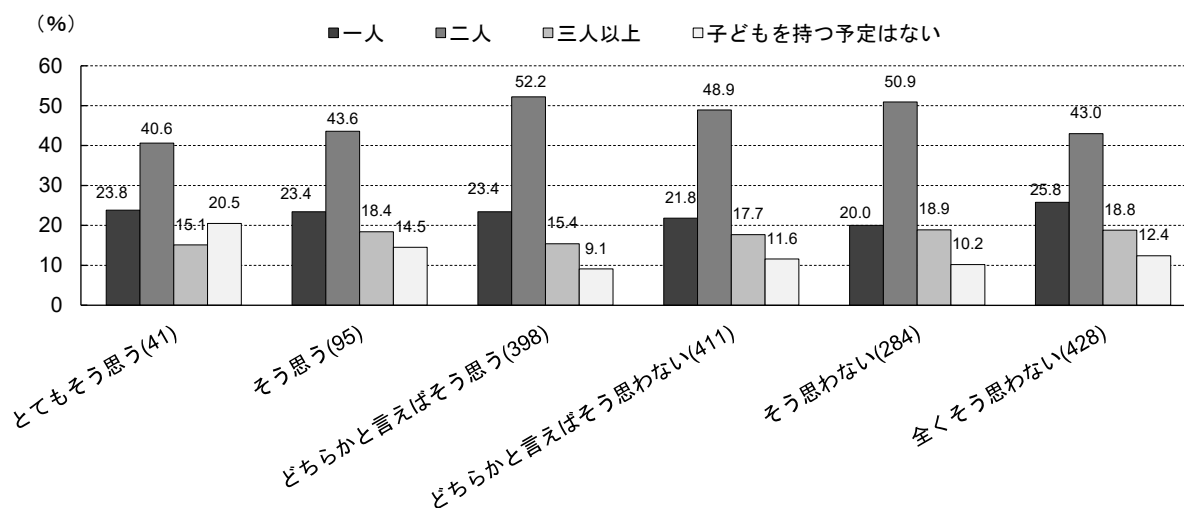
図 2.5.8 男女の役割離分担意識別の持てると思う子ども数(有配偶者)

(男性)



(「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について)

(女性)



(「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について)

項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0769	0.0549
P値	0.1412	0.4526

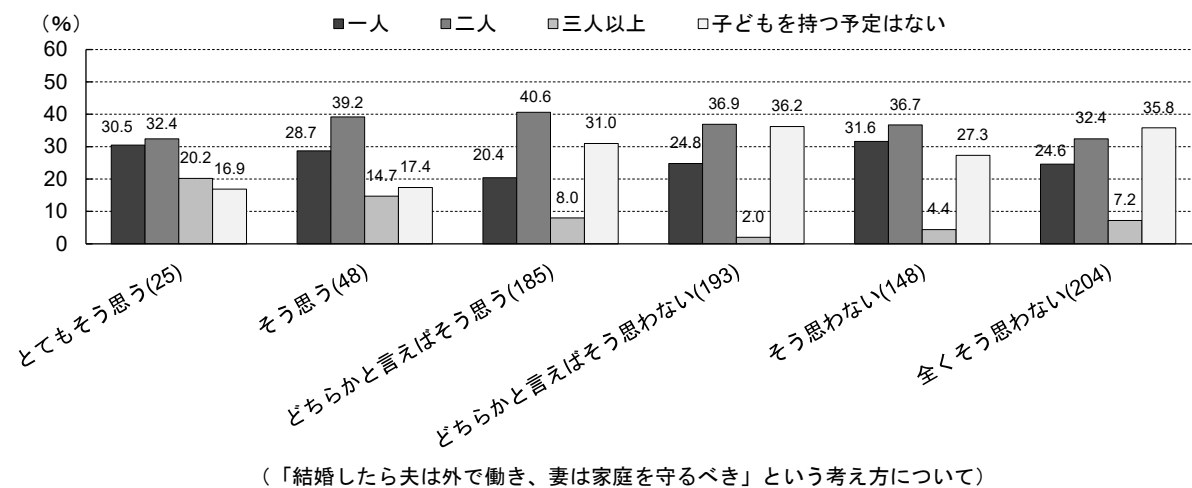
(未婚者では役割分担意識に否定的であると「子どもを持つ予定はない」が増加)

未婚者では、男女とも、男女の役割分担意識に対して否定的であるほど「子どもを持つ予定はない」が増加する。この傾向は、特に女性で顕著である。

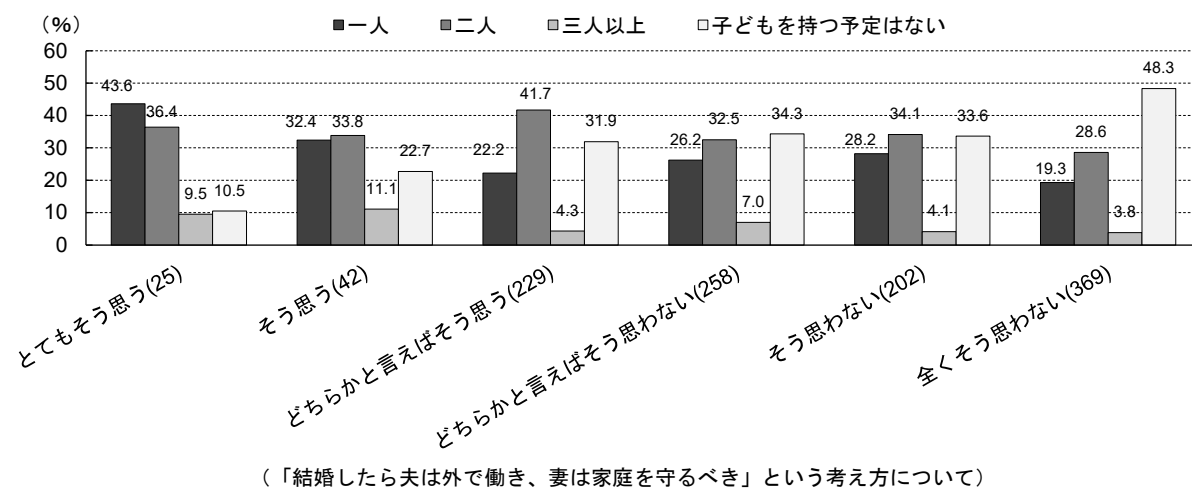
このことは、女性において、仕事と子どもを持つことが両立できないと考える者がいると解釈できる。対象は未婚者であり、結婚する前に、役割分担意識に否定的な女性にそう思わせるような地域の社会・経済に問題があると考えられることもできる。

図 2.5.9 男女の役割分担意識別の持てると思う子ども数（未婚者）

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1077	0.1195
P値	0.0220	0.0000

④生活時間のゆとり

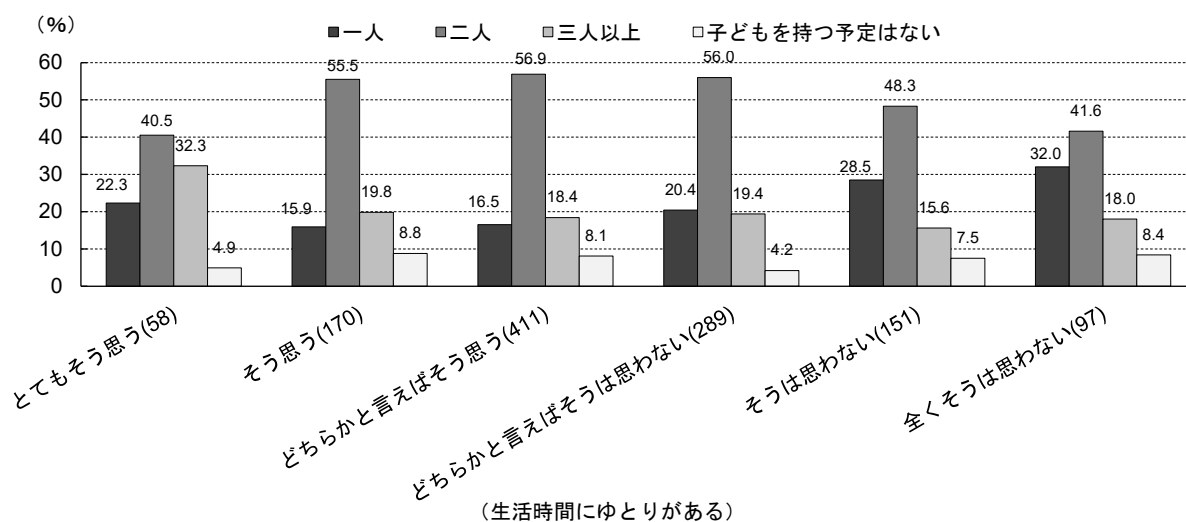
(女性では生活時間のゆとりがあると「一人」が減少する)

有配偶者のうち男性では、「生活時間のゆとり」があると、持てると思う子ども数の「三人以上」が増加し、「一人」が減少する傾向があるとみられる。しかし、「生活時間のゆとり」の「とてもそう思う」で「一人」が増えることもあり、全体として関係ははっきりしない。

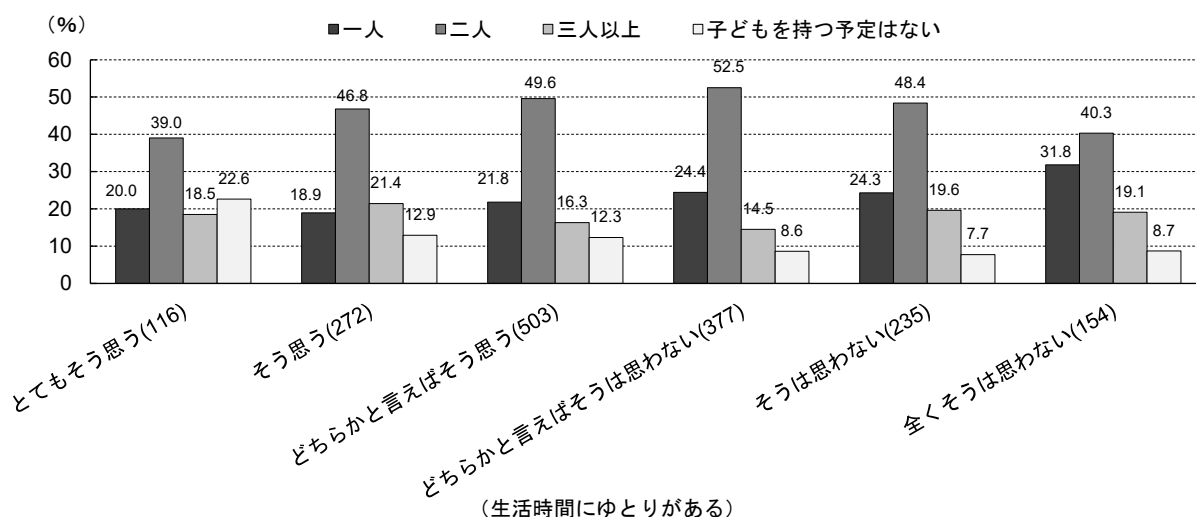
女性では、「生活時間のゆとり」とともに、持てると思う子ども数の「一人」が減少するものの、同時に「子どもを持つ予定もない」も増加する。子どもを持つ予定がない者に、生活時間のゆとりがあるという逆の因果関係が生じている可能性がある。

生活時間のゆとりと持てると思う子ども数（有配偶者）

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0778	0.0997
P値	0.1259	0.0000

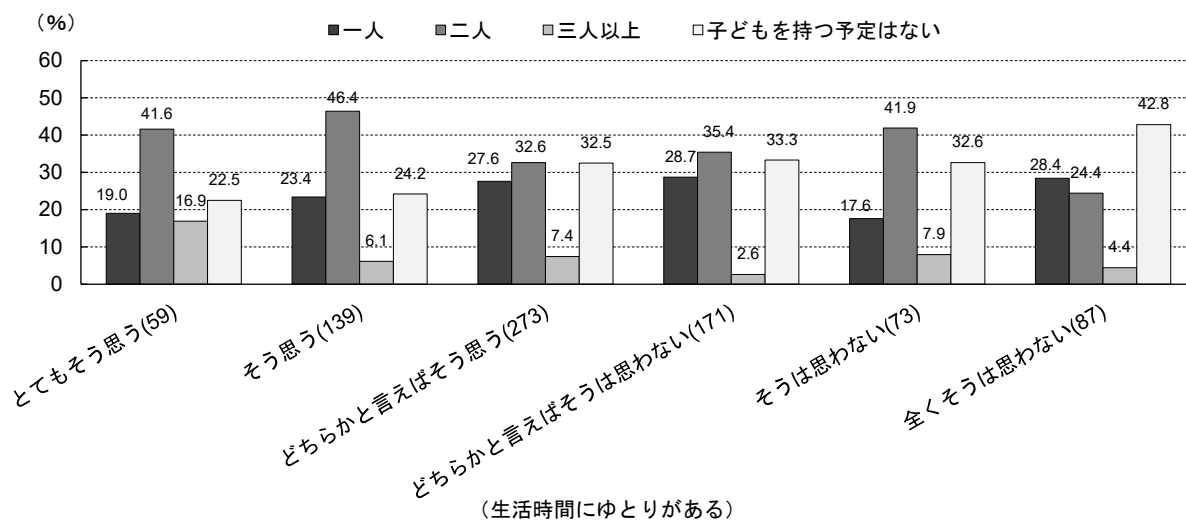
(未婚者では、女性で生活時間のゆとりがあると「二人」が増加する)

未婚者では、「生活時間のゆとり」があるほど、男女とも、持てると思う子ども数のうち「子どもを持つ予定はない」が減少している。これは、生活時間のゆとりが結婚意思を強めていることが考えられる。

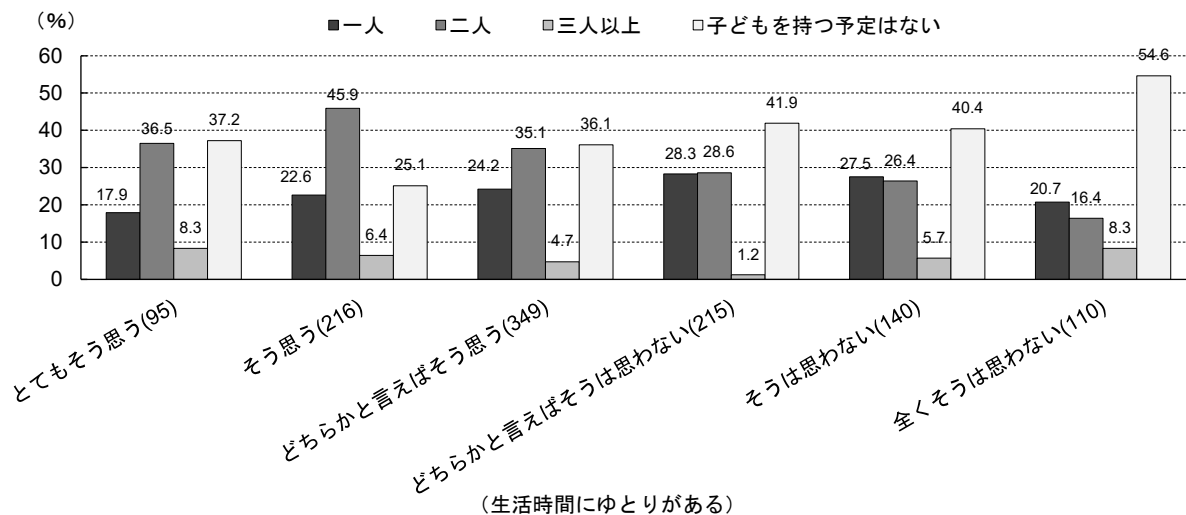
女性では「子どもを持つ予定はない」が減少することに加え、「二人」が増加する傾向がみられる。

図 2.5.10 生活時間のゆとりと持てると思う子ども数（未婚者）

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1494	0.1586
P値	0.0000	0.0000

(3) 希望子ども数との比較

①希望子ども数との比較

(希望子ども数と持てると思う子ども数の差は女性の方が大きい)

希望子ども数と持てると思う子ども数の平均値を比較すると、対象者全体では、持てると思う子ども数は希望子ども数よりも0.23人を少ない(図2.5.11)。

男性における希望子ども数と持てると思う子ども数の差は0.21人であり、女性では0.25人である。女性は、男性に比較して希望子ども数と持てると思う子ども数の両方が少ないが、両者の差が大きいのも女性の方である。

持てると思う子ども数の分布を希望子ども数と比べると、男女とも、希望子ども数に比較して「二人」と「三人」が減少して「一人」が増加する(図2.5.12)。特に、女性では「三人」の差が6.5%に上る。

図 2.5.11 希望子ども数と持てると思う子ども数の平均値

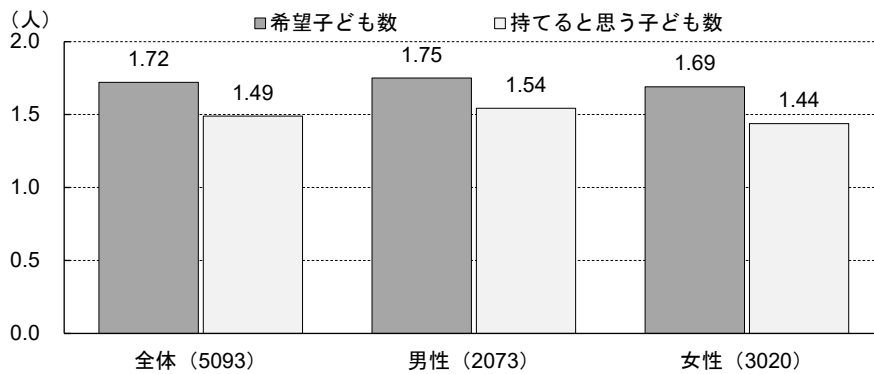
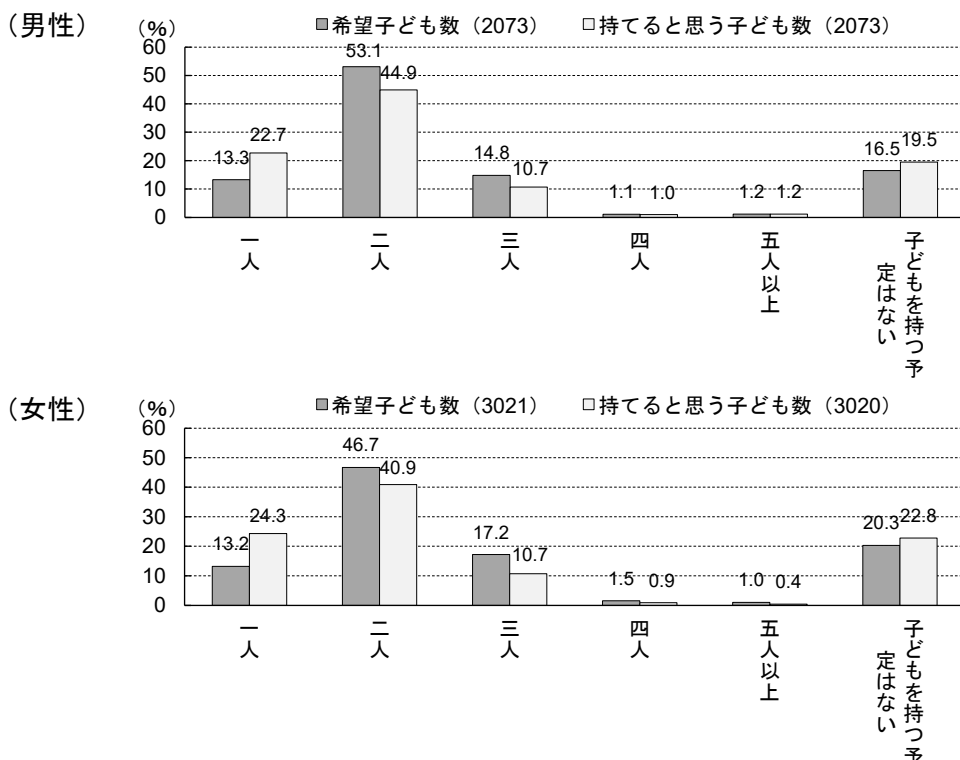


図 2.5.12 希望子ども数と、現実に持てると思う子ども数の分布



(希望子ども数「三人以上」では半数以上が希望通り持てないと考えている)

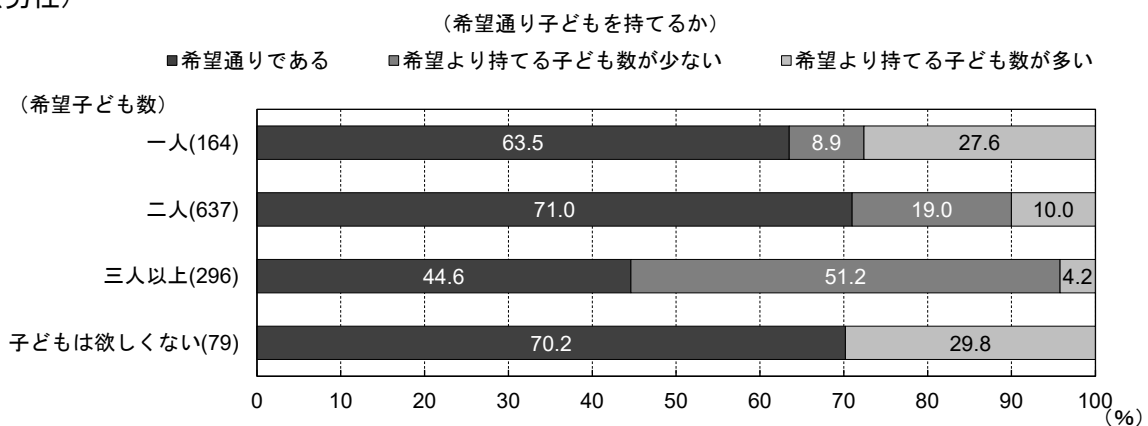
有配偶者が、希望通り子ども数を持てるかについてどのように考えているか、希望子ども数別に集計した(図 2.5.13)。

男性の回答をみると、希望子ども数「一人」では「希望より持てる子ども数が少ない」は9%であるものの、希望子ども数「二人」では19%、「三人以上」では51%に上る。

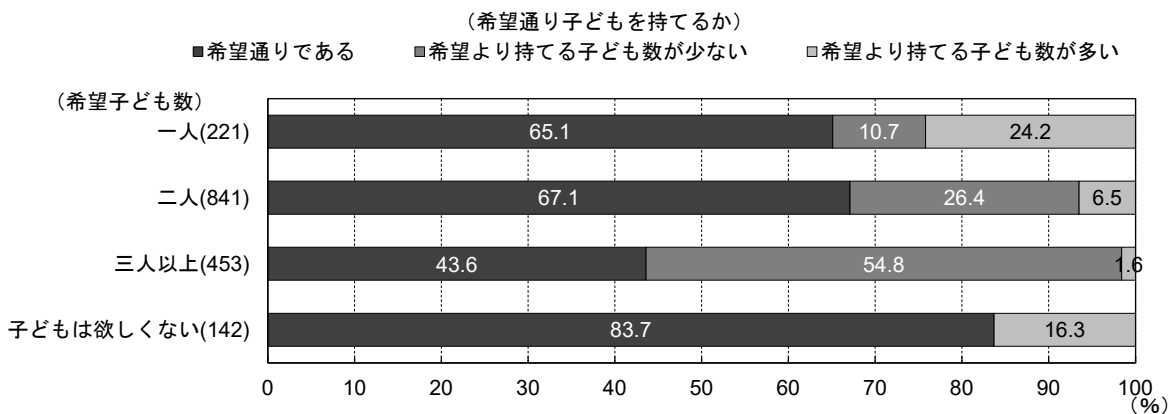
女性では、希望子ども数「一人」では「希望より持てる子ども数が少ない」は11%、希望子ども数「二人」では26%、「三人以上」では55%であった。どの希望子ども数でみても、「希望よりも持てる子ども数が少ない」と回答する者は、男性よりも女性の方がやや多くなっている。

図 2.5.13 希望子ども数にみた希望通り子どもを持てるかどうかの予想(有配偶者)

(男性)



(女性)



(4) 希望子ども数を持たない理由

①希望子ども数別の理由

(所得の不安や子育てや教育の経済的負担が大きな理由になっている)

希望子ども数より持てると思う子ども数が少ないと考える有配偶者を対象に、希望子ども数別に、希望子ども数を持たない理由を把握した(図2.5.14)。

希望子ども数「二人」と「三人以上」に注目すると、男性では「所得に不安があるから」が最も多い理由であり、前者は55%、後者では47%に上る。次いで、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が「二人」で36%、「三人以上」では42%と多く、経済的な理由が続いている。

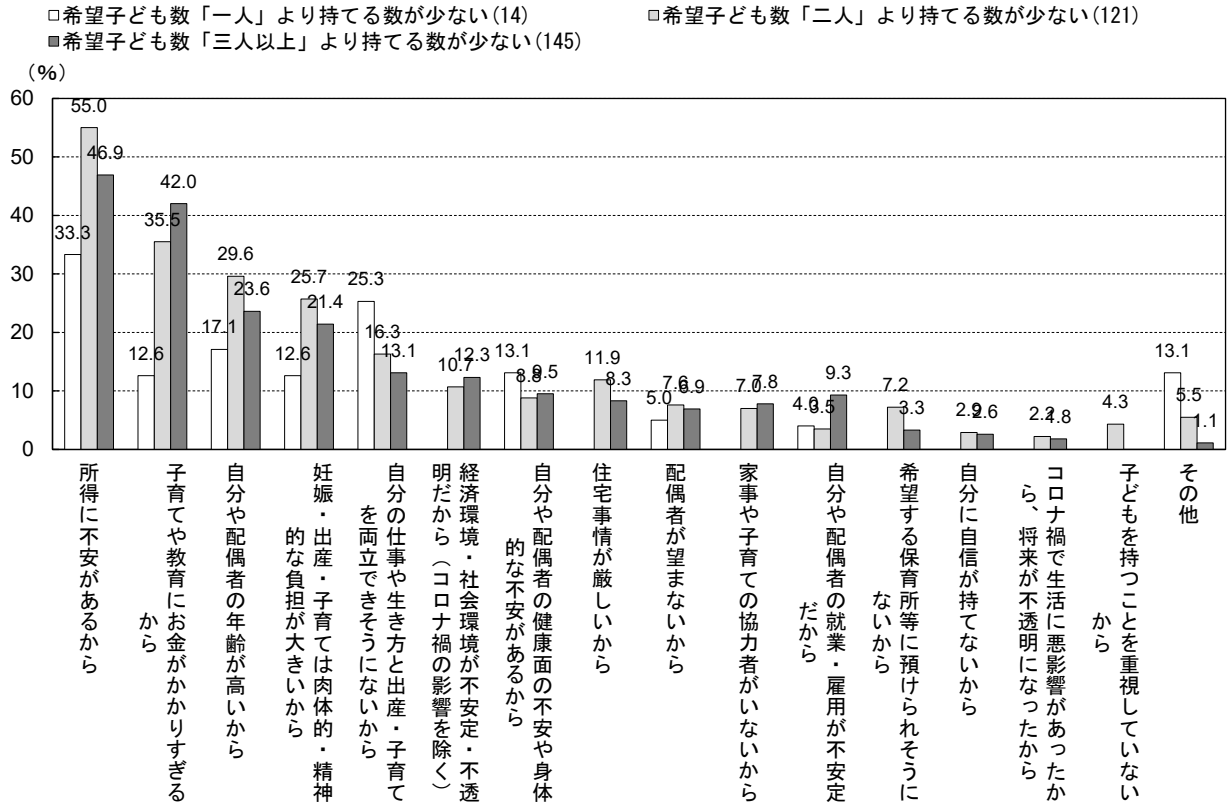
女性では、「二人」「三人以上」とも「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が最も多い理由であり、「二人」は56%、「三人以上」では67%に達する。「所得に不安があるから」も、「二人」で51%、「三人以上」では48%であり、男性同様に回答が多い。

これらの他では、男性の「二人」「三人以上」では「自分や配偶者の年齢が高いから」(「二人」27%、「三人以上」24%)、「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいから」(同26%、同21%)の回答が多くなっている。

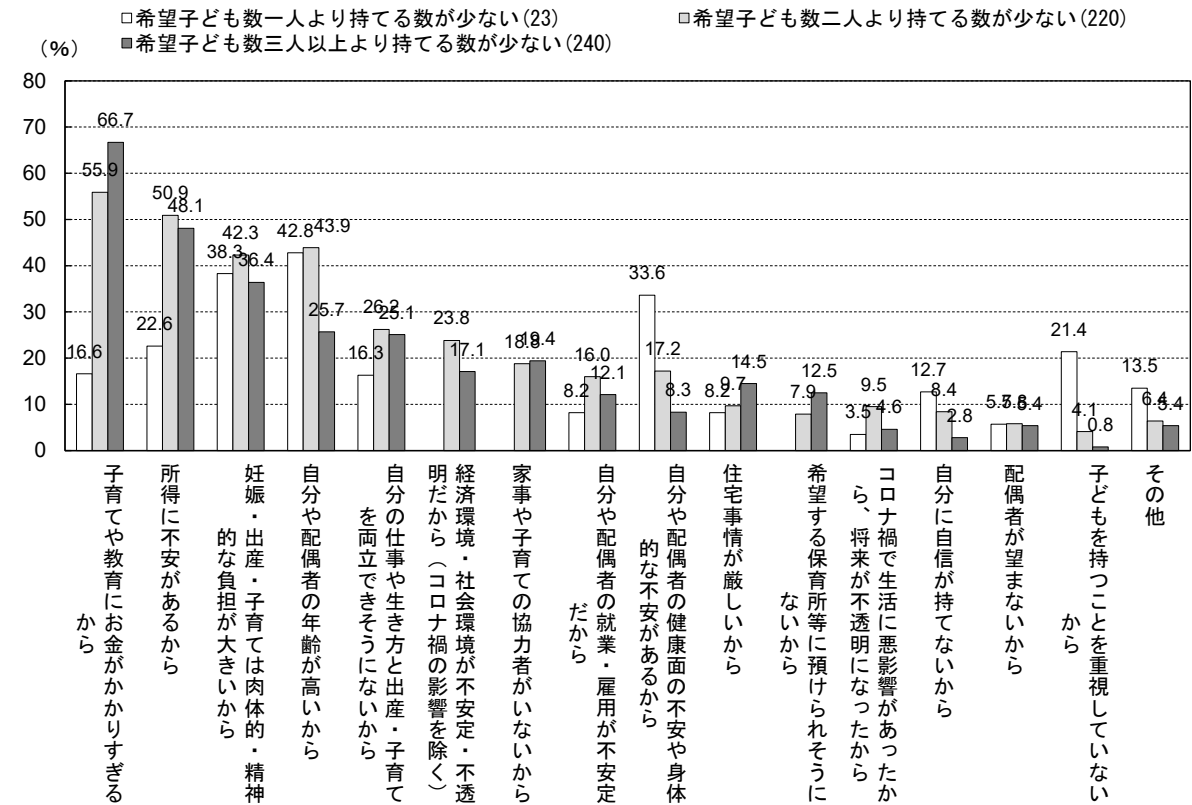
女性も、男性と同様、「二人」「三人以上」では、「自分や配偶者の年齢が高いから」(同43%、44%)、「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいから」(同42%、同36%)が経済的な理由に続くものの、男性よりも回答の割合が多いのが特徴である。これらの回答は、男女とも晩婚化が影響していることが考えられる。

図 2.5.14 希望子ども数別の希望子ども数を持ってない理由（有配偶者）

(男性)



(女性)



②経済的負担

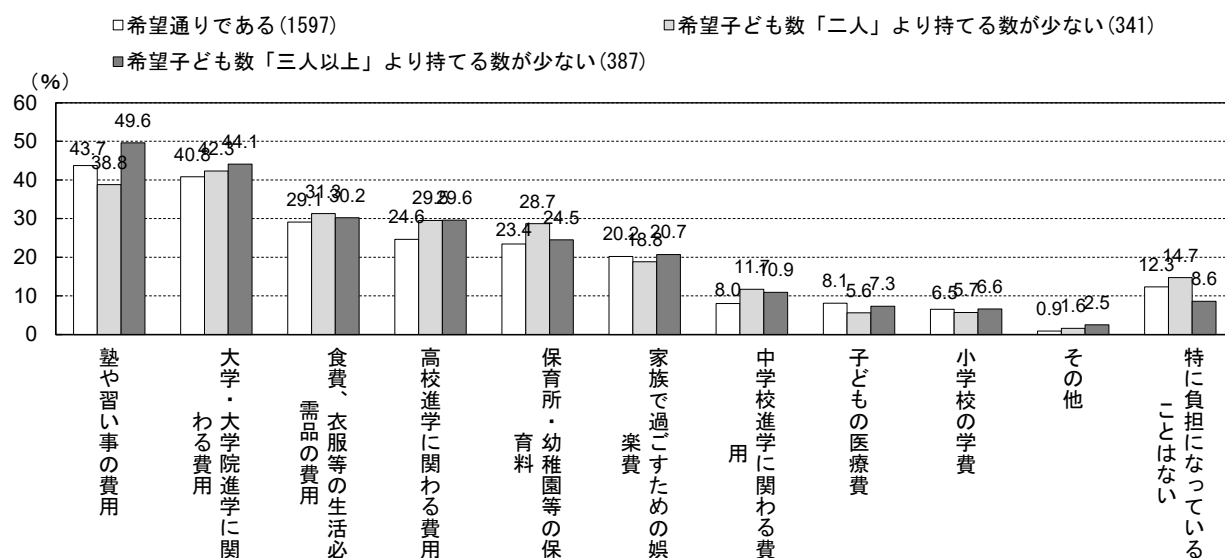
(経済的負担の内容は希望子ども数を持てるかどうかによって差異はみられない)

図 2.5.14 の結果を踏まえ、子育てや教育で家計の負担になっていることを、希望子ども数を持てるかどうかで詳しく調べたところ、両者には明確な関係は見出せなかった。

後述する通り、夫婦の収入合計別でみると「食費、衣服等の生活必需品」「家族で過ごすための娯楽費」は収入との相関がみられる。

しかしながら、教育費とはあまり強い相関はみられず、収入が多いと教育費の支出も多くなる、あるいは収入が低くても子どもに一定の教育費をかけようとする親が多いことの両方が考えられる。

図 2.5.15 希望子ども数を持てるかのみた子育てで家計の負担になっていること
(子育てしている有配偶者)



(注) 標本サイズが小さい「希望子ども数『一人』より持てる子ども数が少ない」は省略した

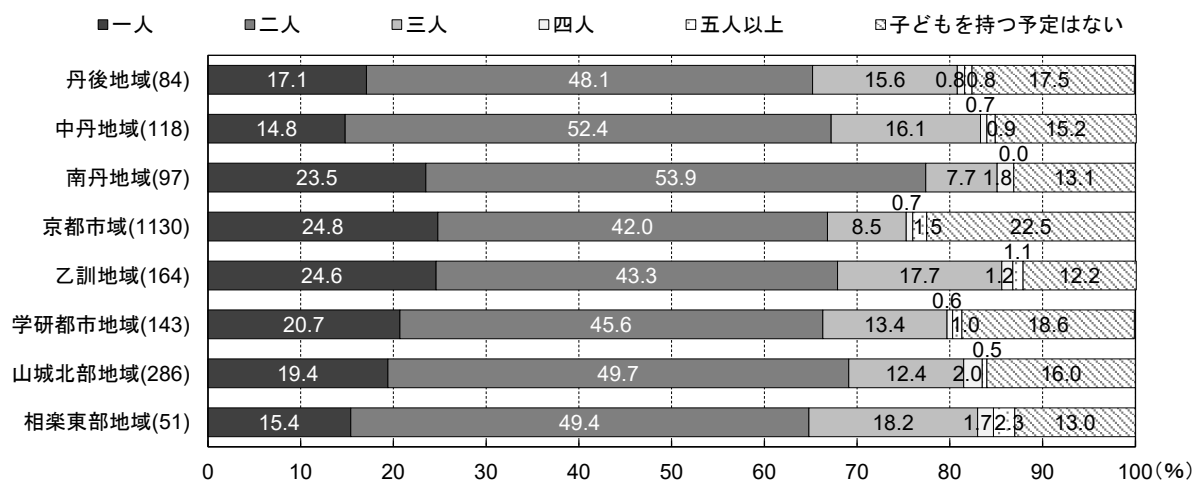
(5) 地域別の集計

(すべての地域で「二人」の回答が多くなっている)

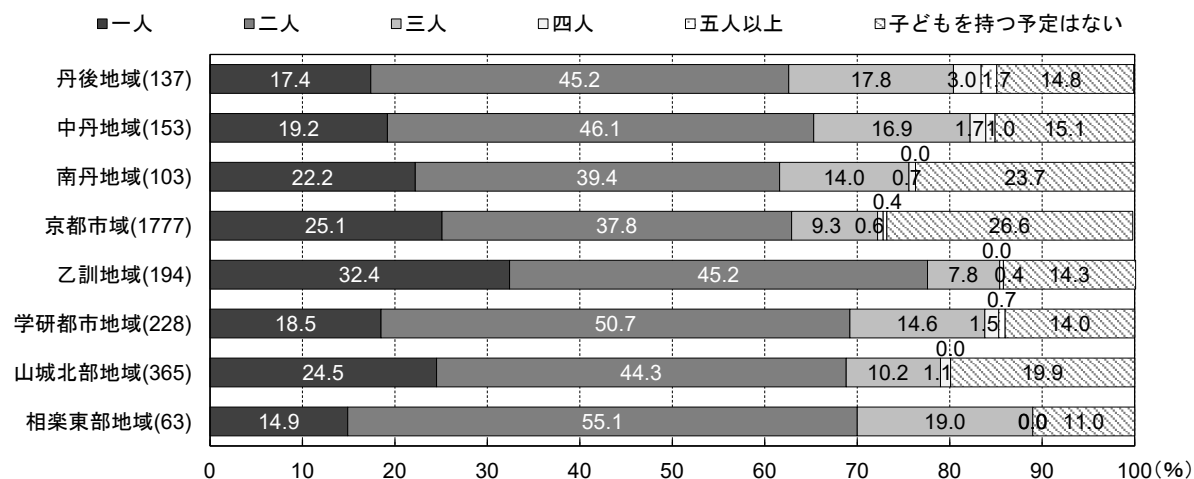
希望とは別に、現実には持てると思う子ども数を把握した(図 2.5.16)。男性では、すべての地域で「二人」が最も多い。一方で、京都市域は「子どもを持つ予定はない」が23%と多くなっている。女性でも男性と同様にすべての地域で「二人」が最も多くなっている。また、南丹と京都市域は「子どもを持つ予定はない」の回答が20%を上回るなど多くなっており、京都市域は男性と比べ更に4ポイント以上多くなっている。

図 2.5.16 地域別の持てると思う子ども数の分布

(男性)



(女性)



地域別の持てると思う子ども数の平均値は、男性では相楽東部の 1.87 人、中丹の 1.75 人、乙訓の 1.74 人が多い（表 2.5.1）。女性では相楽東部と丹後の 1.82 人、中丹の 1.74 人、学研都市の 1.73 人が多い。

京都市域は男性 1.45 人、女性 1.34 人であり、南丹も女性 1.46 人と少なくなっている。

表 2.5.1 地域別にみた持てると思う子ども数の平均値
(人)

住居地	全体	男	女
丹後地域	1.74	1.68	1.82
中丹地域	1.74	1.75	1.74
南丹地域	1.54	1.61	1.46
京都市域	1.39	1.45	1.34
乙訓地域	1.61	1.74	1.48
学研都市地域	1.67	1.60	1.73
山城北地域	1.57	1.66	1.48
相楽東部地域	1.85	1.87	1.82

(すべての地域で、経済的理由で持てると思う子ども数が少なくなっている)

希望子ども数より持てると思う子ども数が少ないと考える有配偶者を対象に、地域別に希望子ども数を持っていない理由を把握した(表2.5.2)。

すべての地域で男女とも「所得に不安があるから」「子育てや境域にお金がかかりすぎるから」といった経済的理由が多くなっている。特に乙訓は男女とも経済的理由の回答が多くなっている。また、男性では、中丹は「家事や子育ての協力者がいないから」、京都市域は「住宅事情が厳しいから」、乙訓は「仕事や生き方と出産・子育てを両立できそうにない」の理由が他の地域と比べ特に多くなっている。女性では、相楽東部と乙訓は「自分や配偶者の就業・雇用が不安定だから」、中丹は「希望する保育所等に預けられそうにないから」の理由が他の地域と比べ特に多くなっている。

表 2.5.2 地域別にみた子どもは欲しくない、希望する子どもの数が一人である又は現実に持てる子ども数が希望する子ども数より少ない理由(複数)

(男性)

(%)

区分	N	所得に不安があるから	子育てや教育にお金がかかりすぎるから	自分や配偶者の年齢が高いから	結婚が遅くなりそうだから	仕事や生き方と出産・子育てを両立できそうにない※1	肉体的・精神的な負担が大きいか※2	自分や配偶者の就業・雇用が不安定だから	子どもを持つことを重視していないから	経済環境・社会環境が不安定・不透明だから※3	自分に自信がないから
全体	1179	40.9	27.9	18.1	17.0	14.7	14.7	11.2	10.3	9.9	9.6
丹後	44	41.0	36.9	17.7	28.2	11.8	8.1	7.6	8.0	15.8	8.7
中丹	53	30.2	27.3	18.3	19.7	12.9	13.9	5.8	4.0	9.1	14.8
南丹	54	30.9	19.3	15.4	20.5	8.7	11.5	8.0	11.4	5.5	7.0
京都市域	684	42.7	28.6	18.2	16.1	15.0	15.5	11.8	11.8	11.7	8.2
乙訓	88	50.6	36.9	14.1	20.6	24.0	25.7	5.6	7.3	8.2	5.4
学研都市	75	30.2	30.2	17.5	10.7	17.8	13.1	12.6	9.0	4.7	18.5
山城北部	150	41.0	18.9	21.4	18.8	9.9	8.8	14.5	7.5	5.1	12.7
相楽東部	31	34.3	28.0	13.2	14.6	6.6	14.5	2.7	15.8	6.5	8.5

区分	住宅事情が厳しいから	健康面の不安や身体的な不安があるから※4	家事や子育ての協力者がいないから	希望する保育所等に預けられそうにないから	配偶者が望まないから	コロナ禍で生活に悪影響があったから※5	その他	希望が実現できない理由はない※6
全体	7.9	6.7	5.6	3.7	3.2	2.3	1.9	15.8
丹後	0.0	3.2	1.5	0.0	2.6	1.5	3.3	13.6
中丹	4.9	7.6	15.2	2.3	4.5	4.6	3.1	9.4
南丹	6.4	6.3	7.3	1.5	5.0	1.5	0.0	14.3
京都市域	10.0	6.8	5.9	4.0	2.8	1.9	1.9	16.2
乙訓	6.4	6.0	2.2	4.5	5.1	4.6	0.0	11.2
学研都市	3.2	7.4	4.3	4.6	3.2	3.0	1.9	22.4
山城北部	4.0	6.1	2.8	3.6	3.2	2.0	2.0	16.0
相楽東部	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	5.3	23.2	5.9

(女性)

(%)

区分	N	子育てや教育にお金がかかりすぎるから	所得に不安があるから	肉体的・精神的な負担が大きいから※2	自分や配偶者の年齢が高いから	仕事や生き方と出産・子育てを両立できそうにない※1	子どもを持つことを重視していないから	結婚が遅くなりそうだから	経済環境・社会環境が不安定・不透明だから※3	自分に自信が持てないから	健康面の不安や身体的な不安があるから※4
全体	1829	39.1	35.1	29.3	23.4	22.9	17.5	16.6	12.6	12.5	10.8
丹後	68	44.6	38.2	41.3	33.8	29.6	17.8	12.7	23.1	10.2	13.3
中丹	75	37.5	30.0	28.5	23.9	16.4	11.8	7.9	12.9	7.7	4.4
南丹	61	47.6	41.2	24.7	25.6	17.8	15.6	17.2	9.8	12.2	5.9
京都市域	1145	36.8	32.4	28.3	22.6	23.5	19.7	19.0	12.5	13.6	11.2
乙訓	112	44.5	42.4	33.5	21.2	22.0	10.5	13.3	12.1	16.2	7.5
学研都市	113	37.8	42.0	33.5	22.3	20.1	10.1	11.2	11.2	10.4	12.6
山城北部	222	44.8	40.4	29.9	26.1	24.5	17.2	12.9	12.9	8.6	13.0
相楽東部	33	32.3	37.1	46.5	29.4	25.8	6.1	28.4	30.6	7.9	16.0

区分	家事や子育ての協力者がいないから	自分や配偶者の就業・雇用が不安定だから	住宅事情が厳しいから	希望する保育所等に預けられそうにないから	コロナ禍で生活に悪影響があったから※5	配偶者が望まないから	その他	希望が実現できない理由はない※6
全体	10.5	9.0	5.4	5.3	3.9	2.6	4.7	9.3
丹後	11.6	4.3	5.7	2.2	3.5	2.2	7.7	7.8
中丹	14.3	7.0	7.5	9.6	1.1	3.9	8.0	4.5
南丹	9.9	5.3	9.9	6.3	4.1	4.0	2.2	6.2
京都市域	10.0	9.1	5.1	5.1	3.9	2.2	4.2	10.4
乙訓	10.1	11.5	9.7	7.2	6.6	0.7	6.8	6.8
学研都市	10.4	6.1	4.8	4.8	3.3	6.2	5.0	5.7
山城北部	12.0	11.3	3.1	4.0	3.4	2.6	4.7	10.1
相楽東部	13.8	11.8	4.6	6.6	12.4	0.0	15.8	2.0

- ※1 「仕事や生き方と出産・子育てを両立できそうにない」は、調査票において「自分の仕事や生き方と出産・子育てを両立できそうにないから」と表記されている
- ※2 「肉体的・精神的な負担が大きいから」は、調査票において「妊娠・出産・子育ては肉体的・精神的な負担が大きいから」と表記されている
- ※3 「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから」は、調査票において「経済環境・社会環境が不安定・不透明だから(コロナ禍の影響を除く)」と表記されている
- ※4 「健康面の不安や身体的な不安があるから」は、調査票において「自分や配偶者の健康面の不安や身体的な不安があるから」と表記されている
- ※5 「コロナ禍で生活に悪影響があったから」は、調査票において「コロナ禍で生活に悪影響があったから、将来が不透明になったから」と表記されている
- ※6 「希望が実現できない理由はない」は、調査票において「希望が実現できない理由はない(希望どおりである)」と表記されている

6. 地域における人々の関わり合い

(1) 結婚や子育ての自然さ

①結婚や子育ての自然さ

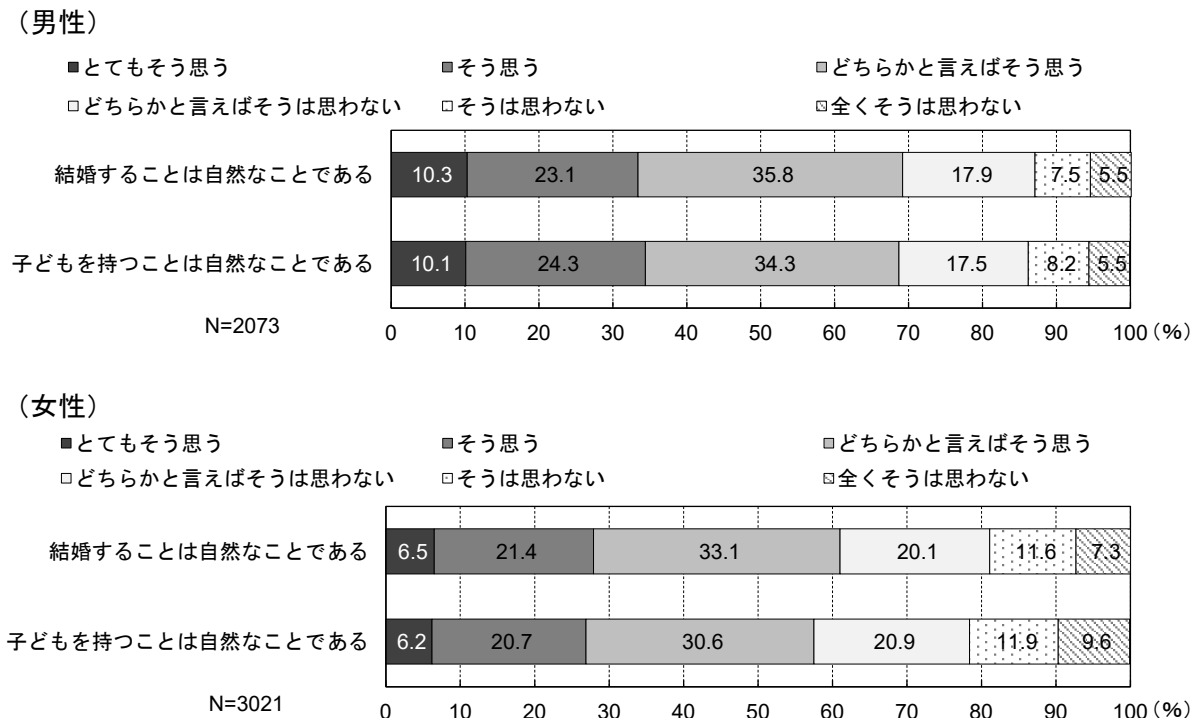
(結婚や子育てに自然と考える回答は 60%から 70%)

「結婚の自然さ」は未婚者の結婚意思、「子育ての自然さ」は希望子ども数等に影響を及ぼしていた。

そこで、結婚や子育ての自然さの回答状況を集計すると、「結婚することは自然なことである」に対して「とてもそう思う」と「そう思う」と回答する者は男性 33%、女性 28%であった(図 2.6.1)。「どちらかと言えばそう思う」を加えて肯定的な意見をまとめると、男性 69%、女性 61%となる。逆に、男性 31%、女性 39%と約3分の1が否定的な回答であった。

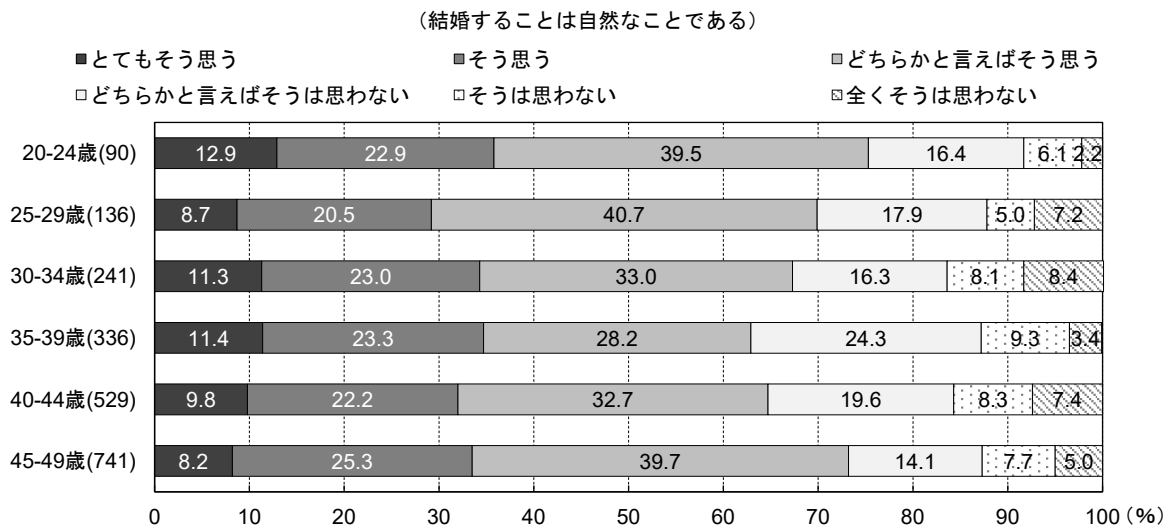
「子どもを持つことは自然なことである」に対する回答は、男性では「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が 34%、「どちらかと言えばそう思う」を加えると 69%であり、結婚の自然さに対する回答とほとんど変わらない。女性では「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が 27%、「どちらかと言えばそう思う」を含むと 58%となり、結婚の自然さに比べてやや肯定的回答が少なくなっている。

図 2.6.1 結婚や子育ての自然さ

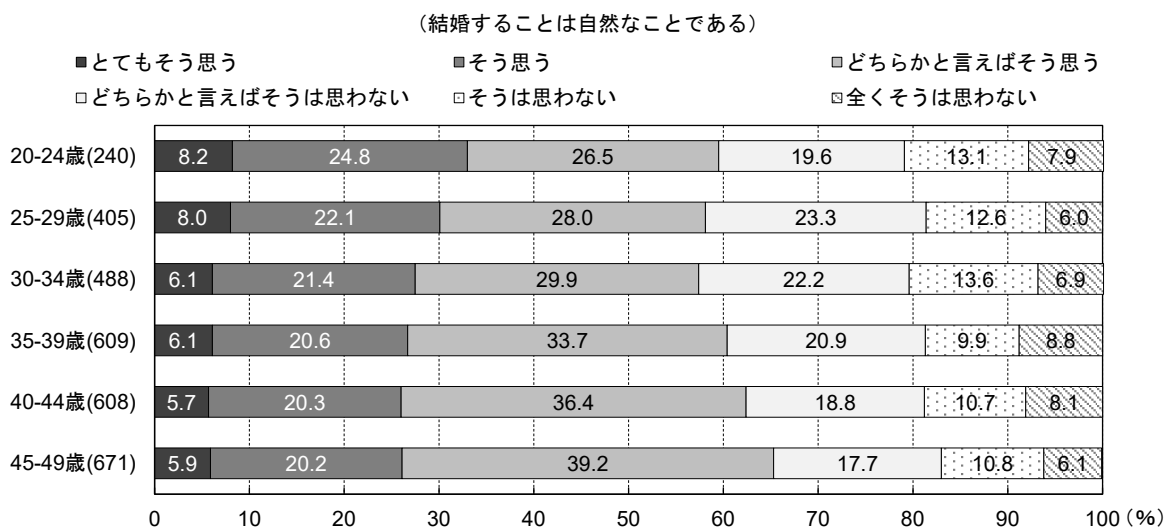


「結婚の自然さ」や「子育ての自然さ」を年齢階層別にみた（図 2.6.2、図 2.6.3）。男女の両方で、年齢との明瞭な相関はみられない。

図 2.6.2 年齢階層別にみた「結婚することは自然なことである」という考え方について（男性）

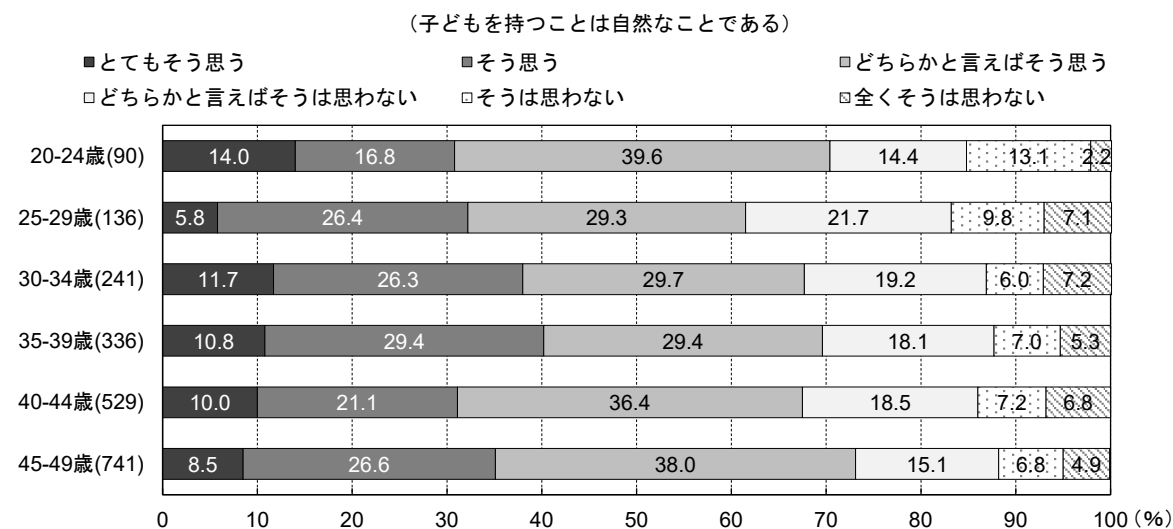


（女性）

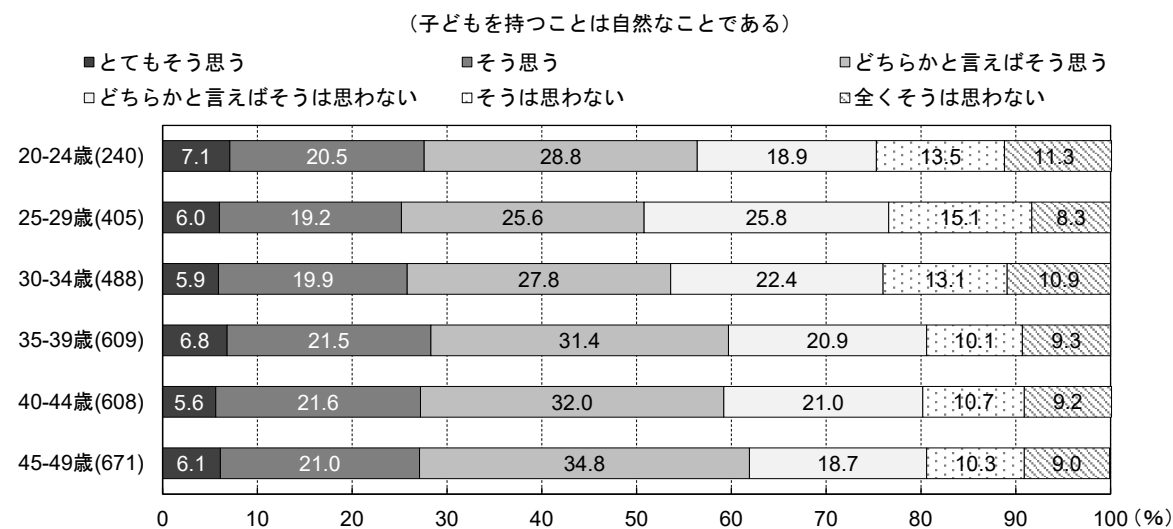


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0642	0.0494
P値	0.0151	0.0589

図 2.6.3 年齢階層別にみた「子どもを持つことは自然なことである」という考え方について (男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0640	0.0425
P値	0.0161	0.3447

②結婚観・子ども観、結婚・子育てに対する感じ方

(結婚観の肯定的意見は約 70%、子ども観は約 80%)

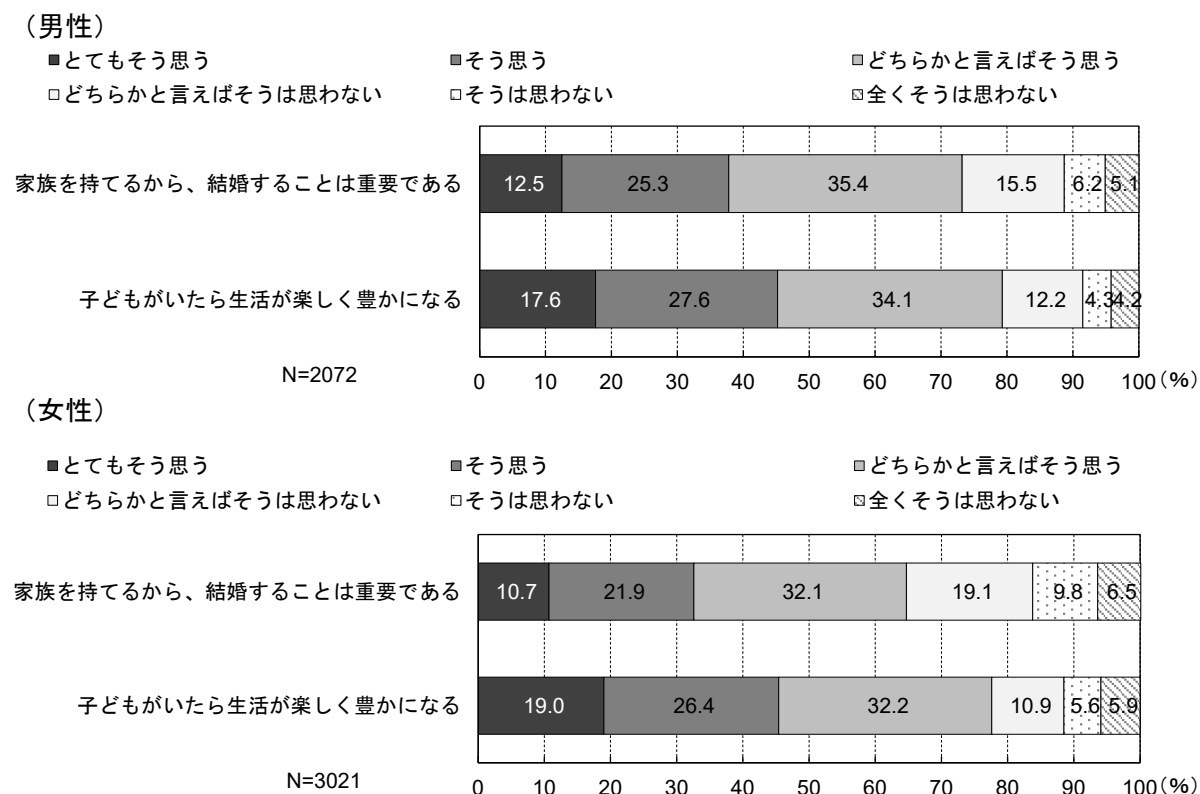
「結婚や子育ての自然さ」に影響を及ぼすと考えられる「結婚観・子ども観」及び「結婚・子育てに対する感受性」を男女別に集計した(図 2.6.4)。

本調査では、結婚観は「家族を持てるから、結婚することは重要である」という意見への賛同度で把握した。男性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は38%であり、「どちらかと言えばそう思う」を合わせると73%になる。女性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は33%、「どちらかと言えばそう思う」を加えた場合は65%である。男性の方が肯定的意見の者がやや多い。

子ども観は「子どもがいたら生活が楽しく豊かになる」という意見への賛同度である。男性の「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は45%、「どちらかと言えばそう思う」を合わせると79%である。女性でも「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は45%になり、「どちらかと言えばそう思う」を加えた場合も78%となり、男性と変わらない。

結婚観と子ども観を比較した場合は、男女とも肯定的意見は結婚観よりも子ども観の方が多くなっている。

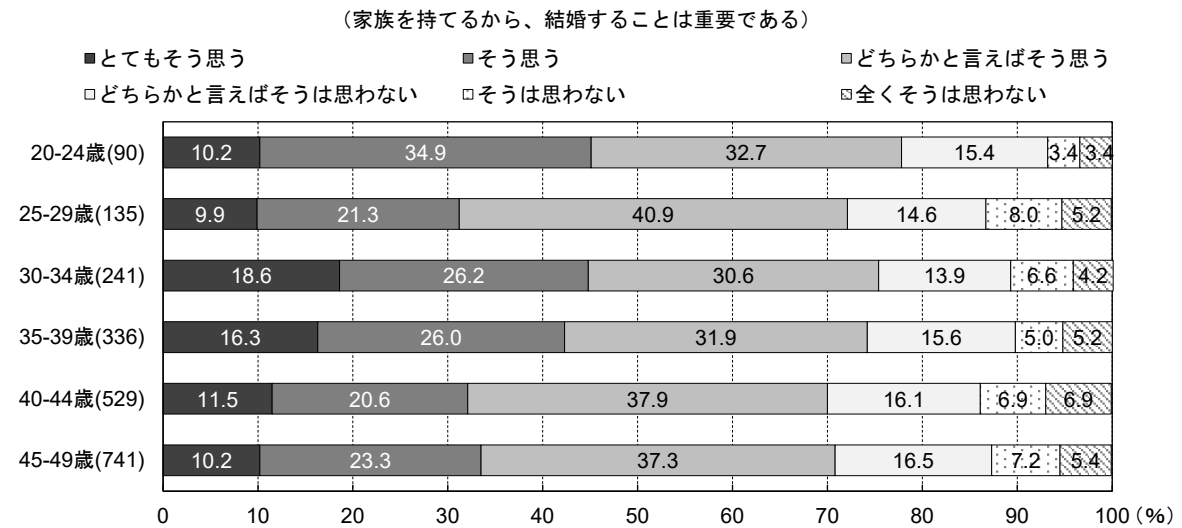
図 2.6.4 結婚観・子ども観



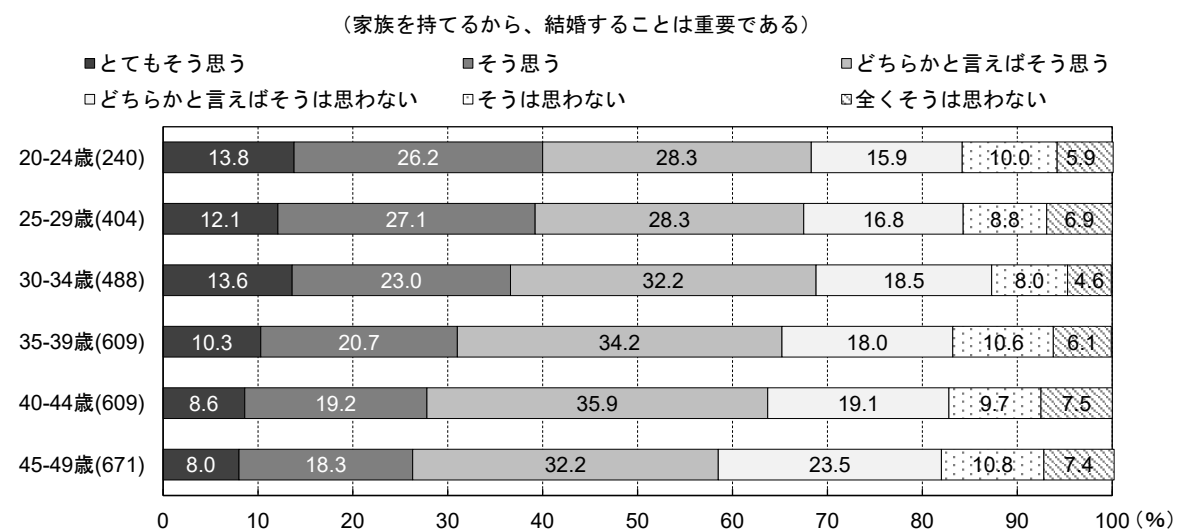
結婚観、子ども観を年齢階層別にみた（図 2.6.5、図 2.6.6）。結婚観において、女性では年齢階層が低くなると肯定的な意見が緩やかに増加している。

図 2.6.5 年齢階層別にみた「家族を持てるから、結婚することは重要である」という考え方について

(男性)

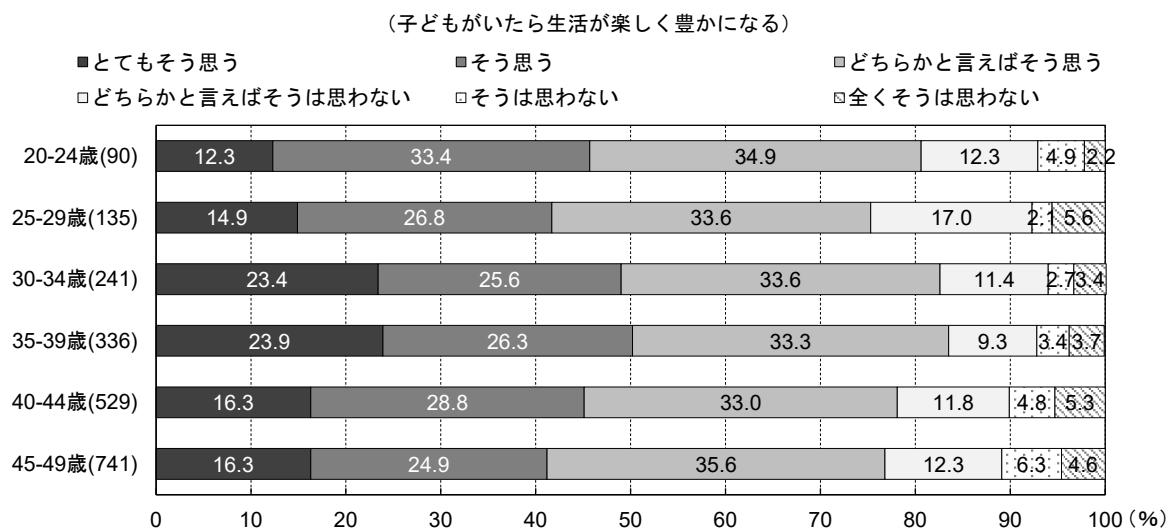


(女性)

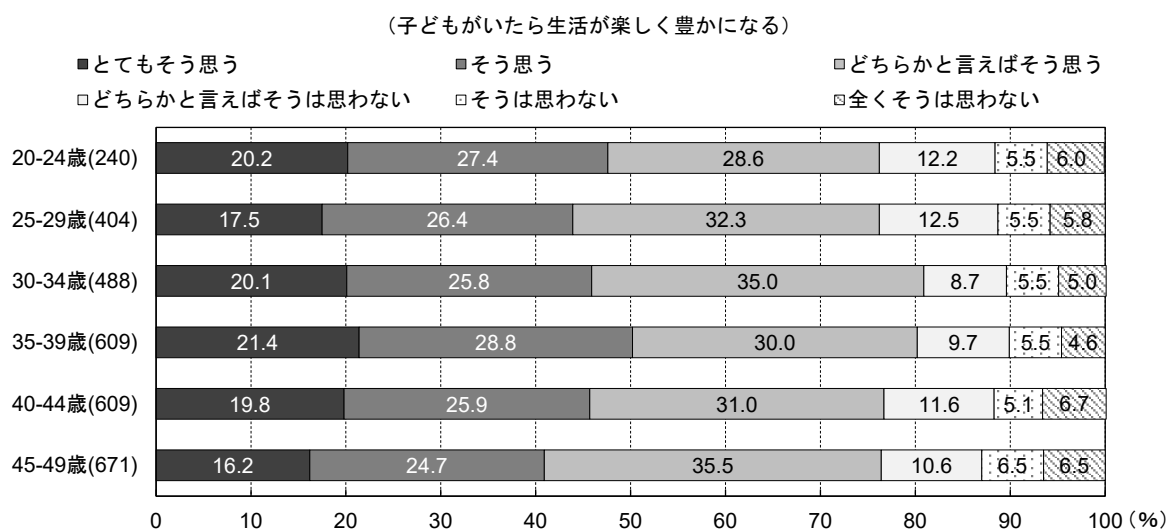


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0599	0.0614
P値	0.0553	0.0003

図 2.6.6 年齢階層別にみた「子どもがいたら生活が楽しく豊かになる」という考え方について (男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0598	0.0401
P値	0.0569	0.5060

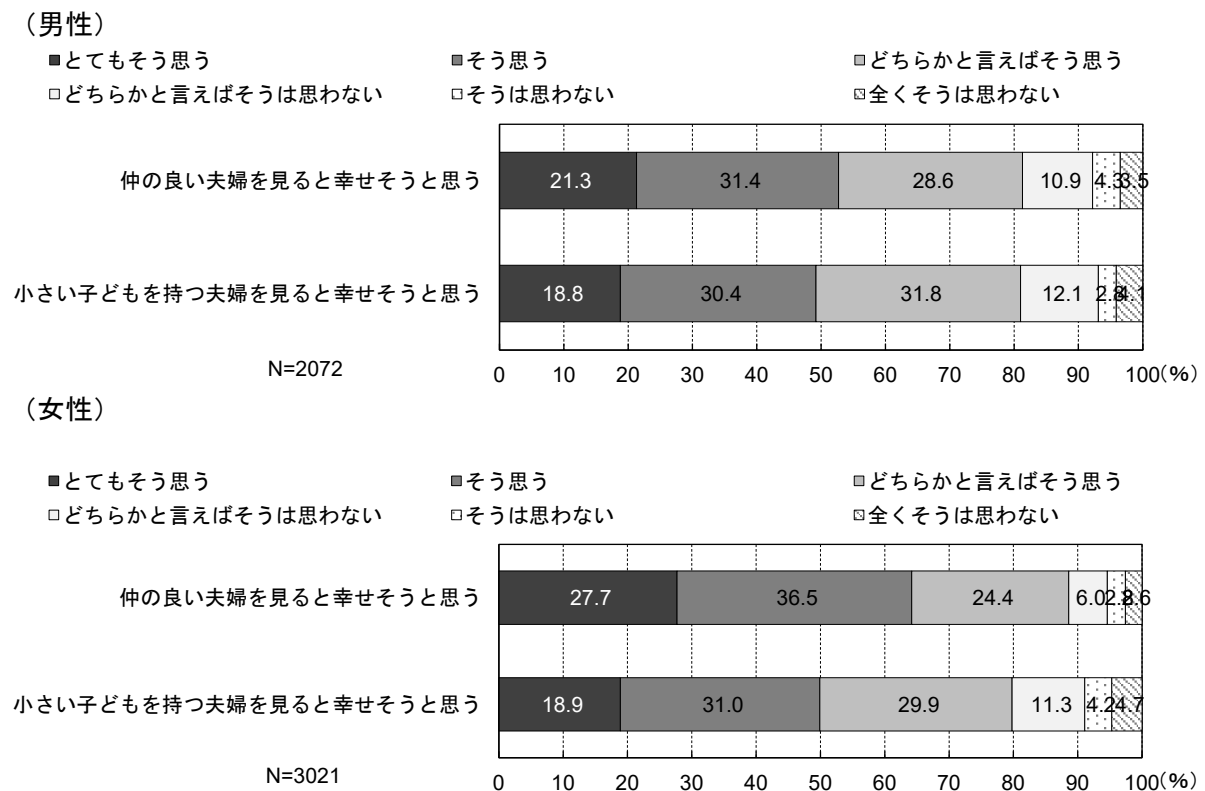
（「仲の良い夫婦を見ると幸せそう」は女性では90%近い）

本調査では、結婚観・子ども観とは別に「結婚や子育てに対する感受性」を把握した（図2.6.7）。感受性は「感じる力」を表し、結婚観・子ども観が表わす価値観とは異なると考えたためである。

結婚に対する感受性は「仲の良い夫婦を見ると幸せそうと思う」という意見への賛同度で把握した。男性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は53%であり、「どちらかと言えばそう思う」を合わせると81%に上る。女性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は64%、「どちらかと言えばそう思う」を加えた場合は89%とほぼ90%に達する。

子どもに対する感受性は「小さい子どもを持つ夫婦をみると幸せそうと思う」という意見への賛同度である。男性の「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は49%、「どちらかと言えばそう思う」を合わせると81%である。女性でも「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は50%、「どちらかと言えばそう思う」を加えた場合は80%になる。結婚の場合と比較して、男女間の回答に差はみられず、子ども観と子育てに感受性の間でも大きな差異は生じていない。

図 2.6.7 結婚・子育てに対する感受性



③結婚や子育ての自然さと、結婚観・子育てに関する感じ方の関係

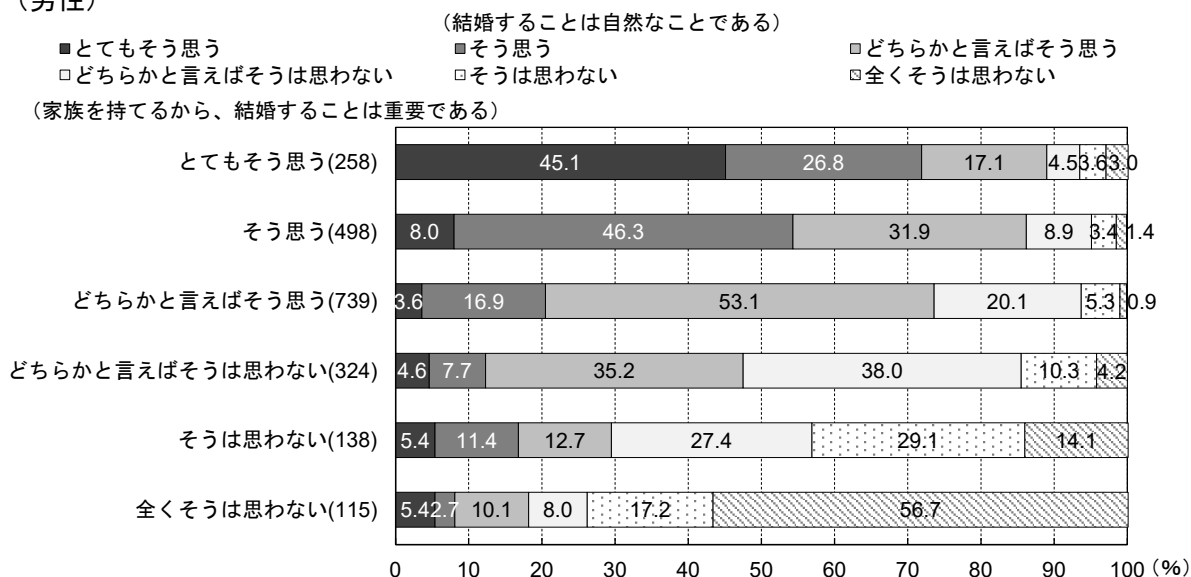
(かなり明確な相関が表れる)

図 2.6.8 から図 2.6.11 において、家族観→結婚の自然さ、子ども観→子育ての自然さ、結婚に対する感受性→結婚の自然さ、子どもに対する感受性→子育ての自然さの順で、クロス集計を行った。その結果、どのクロス集計からもかなり明瞭な関係が表れた。

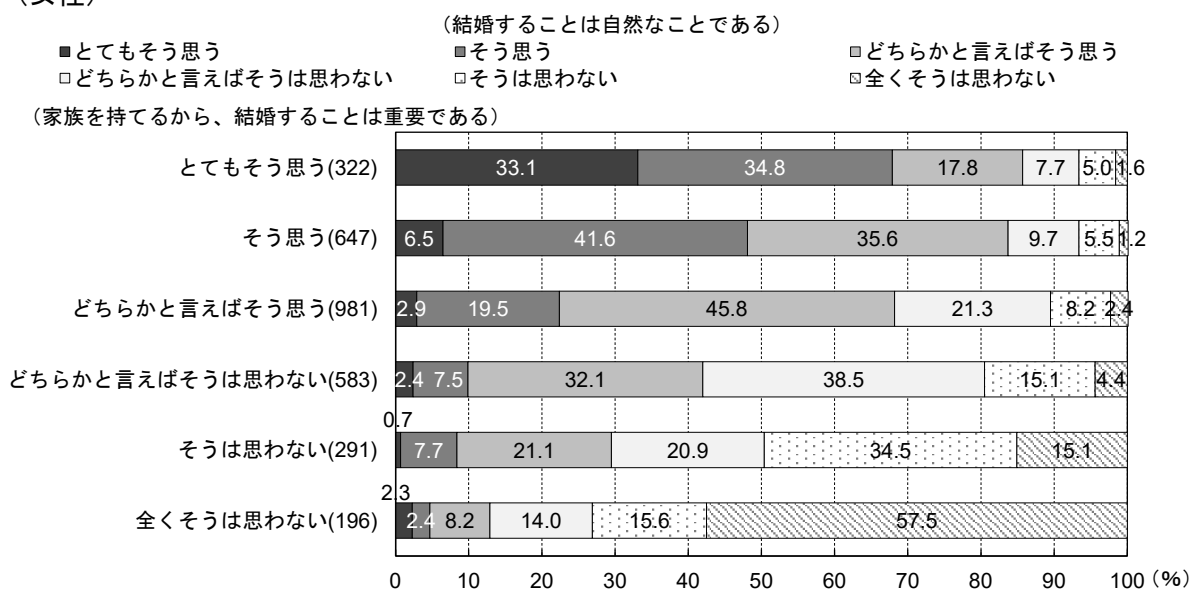
全体的には、家族観・子ども観の方が、結婚・子どもに対する感受性よりも関係は明瞭であり、女性よりも男性の方がはっきりとした関係が表れた。

図 2.6.8 家族観別にみた結婚の自然さ

(男性)



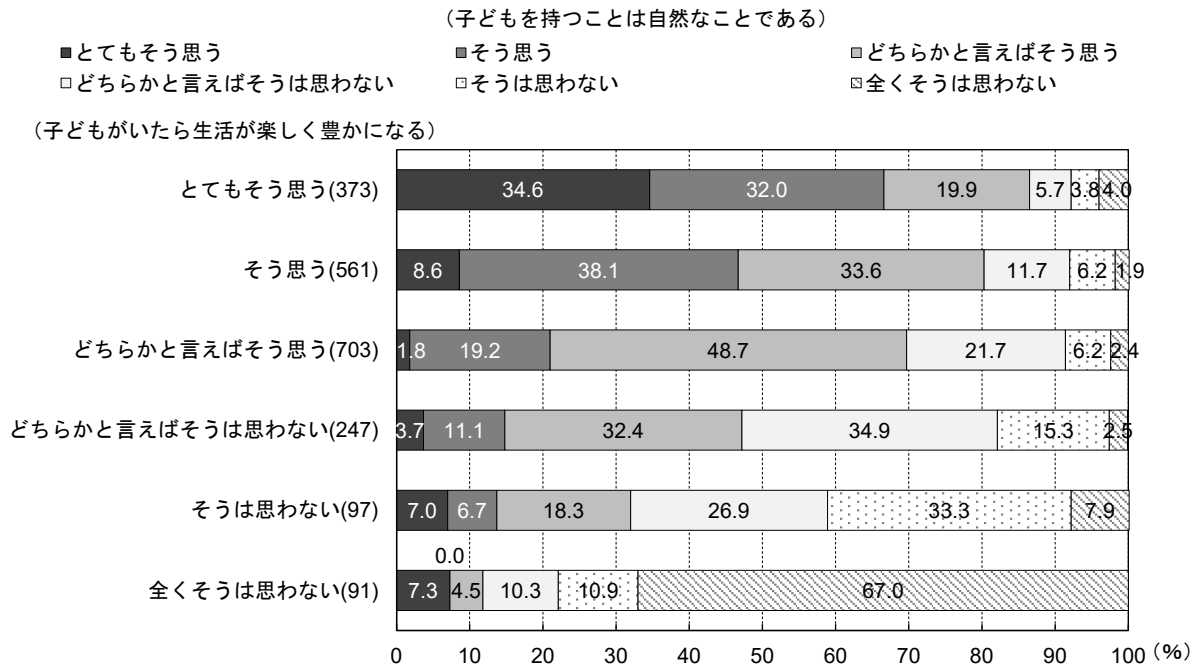
(女性)



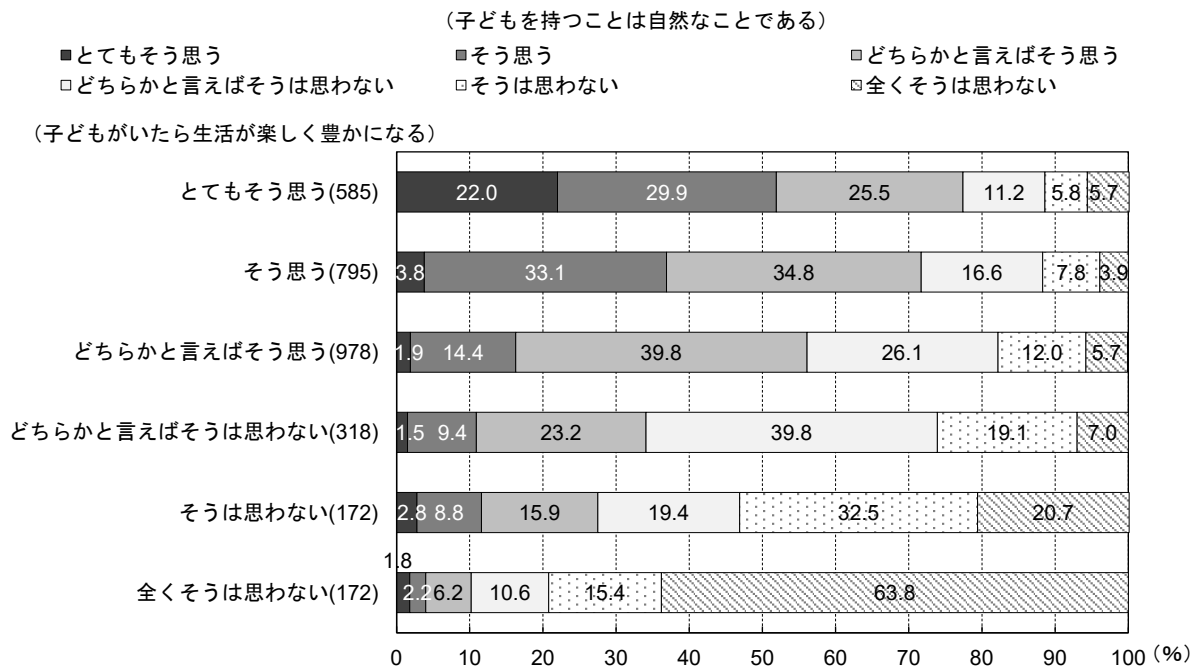
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3990	0.3556
P値	0.0000	0.0000

図 2.6.9 子ども観別にみた子育ての自然さ

(男性)



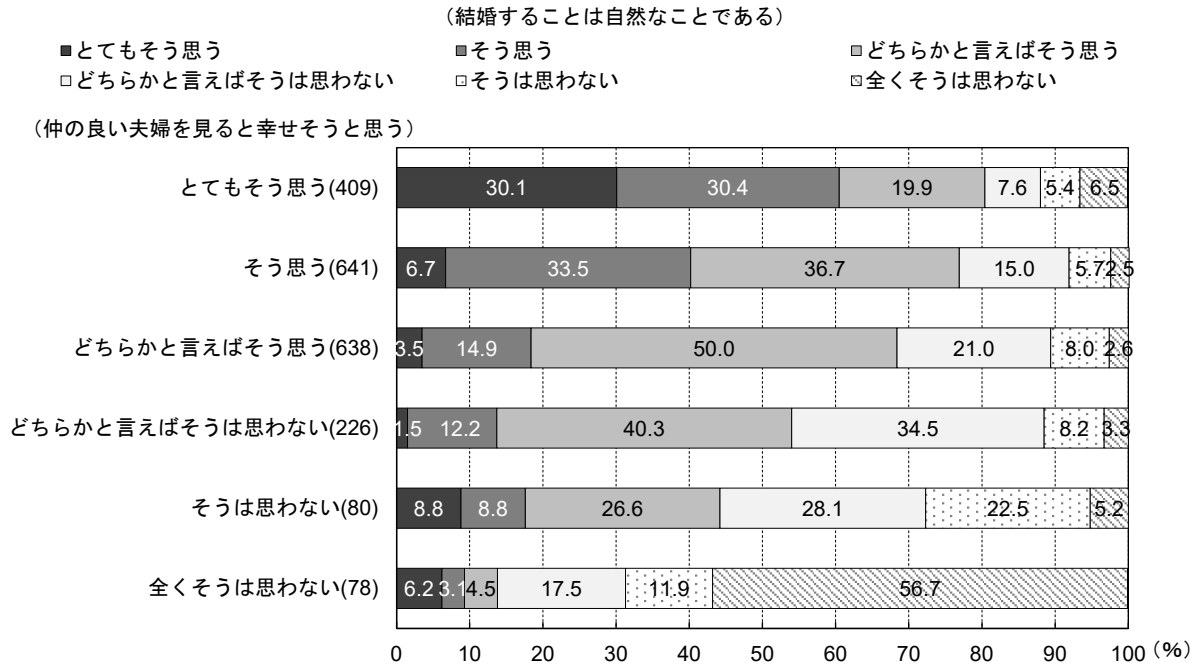
(女性)



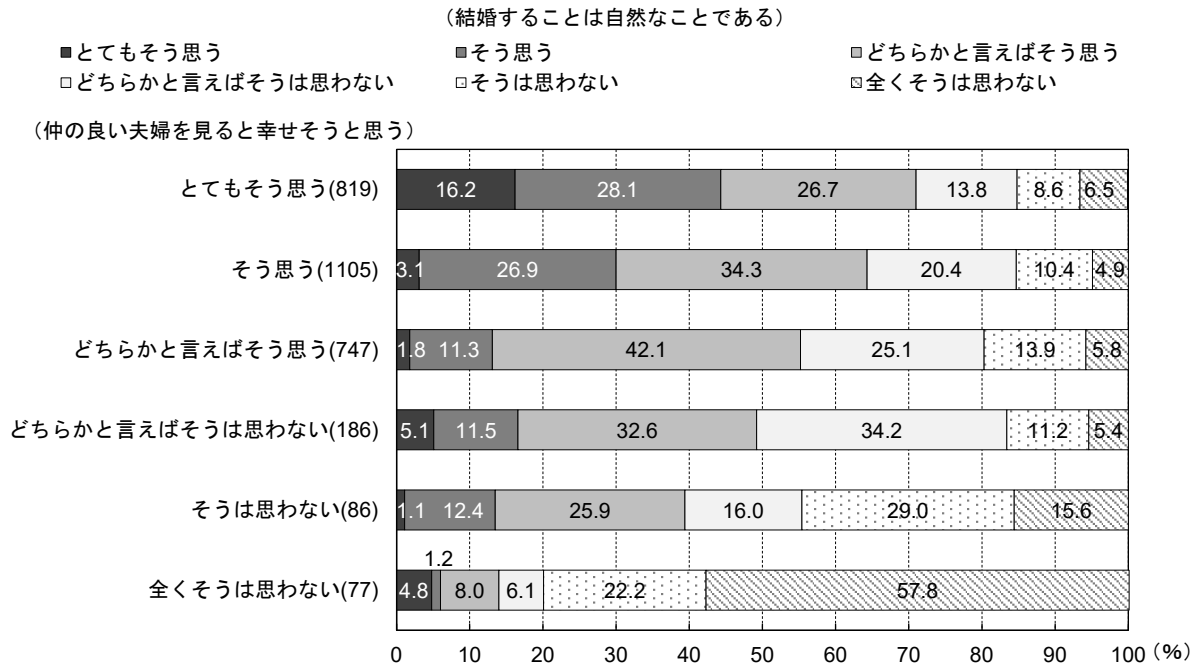
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3560	0.3018
P値	0.0000	0.0000

図 2.6.10 結婚に対する感受性別に見た結婚の自然さ

(男性)



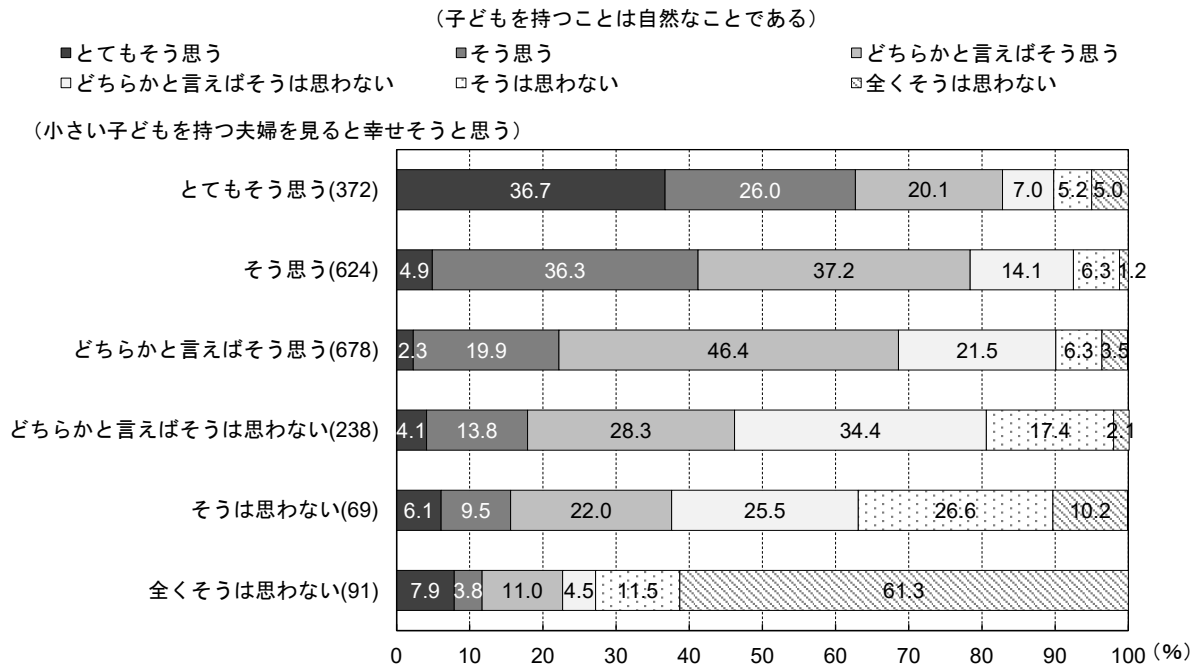
(女性)



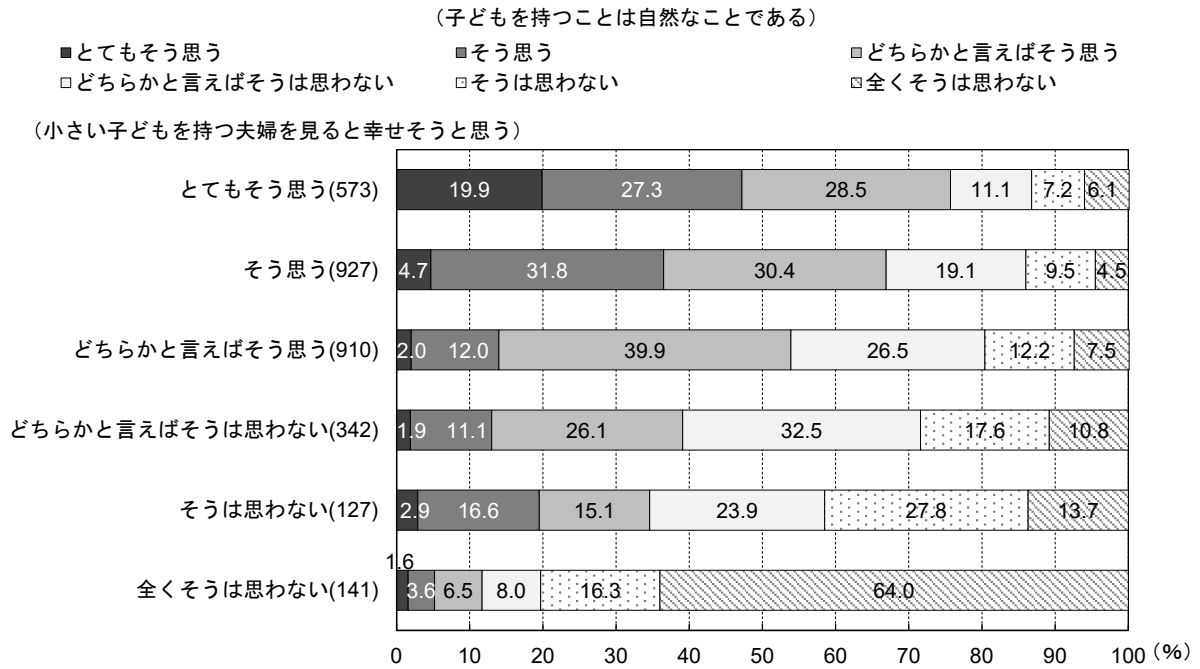
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2899	0.2183
P値	0.0000	0.0000

図 2.6.11 子どもに対する感受性別にきた子育ての自然さ

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3173	0.2629
P値	0.0000	0.0000

(2) 小さい頃の経験

①小さい頃の経験

(六つの項目から指標「小さい頃の経験」を作成した)

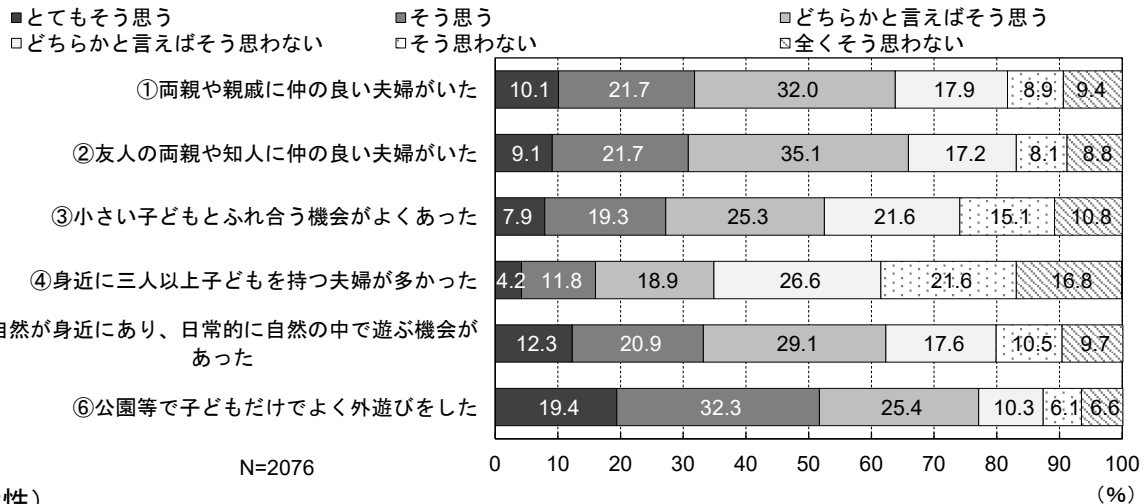
本調査において「小さい頃の経験」とは、子どもの頃の結婚や子育てに関わる経験や、子ども同士の外遊び等の経験を示す。こうした経験は、結婚や子育てに対する価値観や感じ方に影響を及ぼすと考えられるため、図 2.6.12 の6項目にわたり「小さい頃の経験」の多寡を把握した。

男女とも、「⑥公園等で子どもだけでよく外遊びをした」を除けば、肯定的意見と否定的意見のどちらかに極端に偏ることはなく回答にばらつきが生じている。また、「④身近に三人以上子どもを持つ夫婦が多かった」は、他の項目と異なり否定的意見の方が多いといった特徴がみられる。

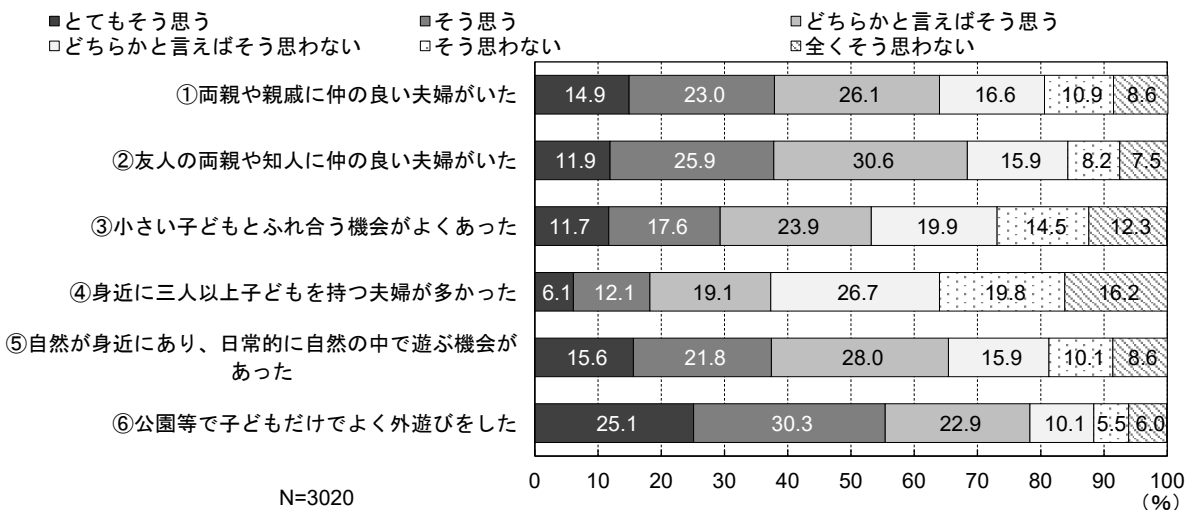
図 2.6.12 の多段階形式の回答をスコア化し、六つの項目の回答を合成する主成分分析を実施した。主成分分析の結果から得られた第1主成分の主成分得点が、本調査における指標「小さい頃の経験」である。

図 2.6.12 小さい頃の経験（単数）

(男性)



(女性)



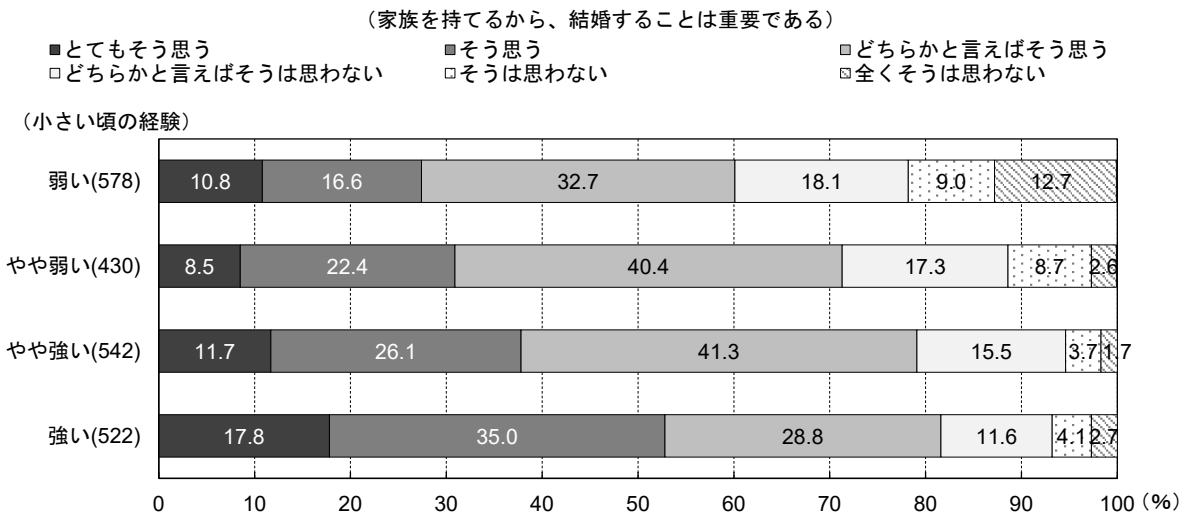
(小さい頃の経験は家族観や子ども観に影響を及ぼす)

家族観や子ども観、結婚や子どもに対する感受性は「小さい頃の経験」に影響を受けると考え、図 2.6.13 から図 2.6.16 において、「小さい頃の経験」を分析軸にして、家族観・子ども観、結婚や子どもに対する感受性の集計を行った。

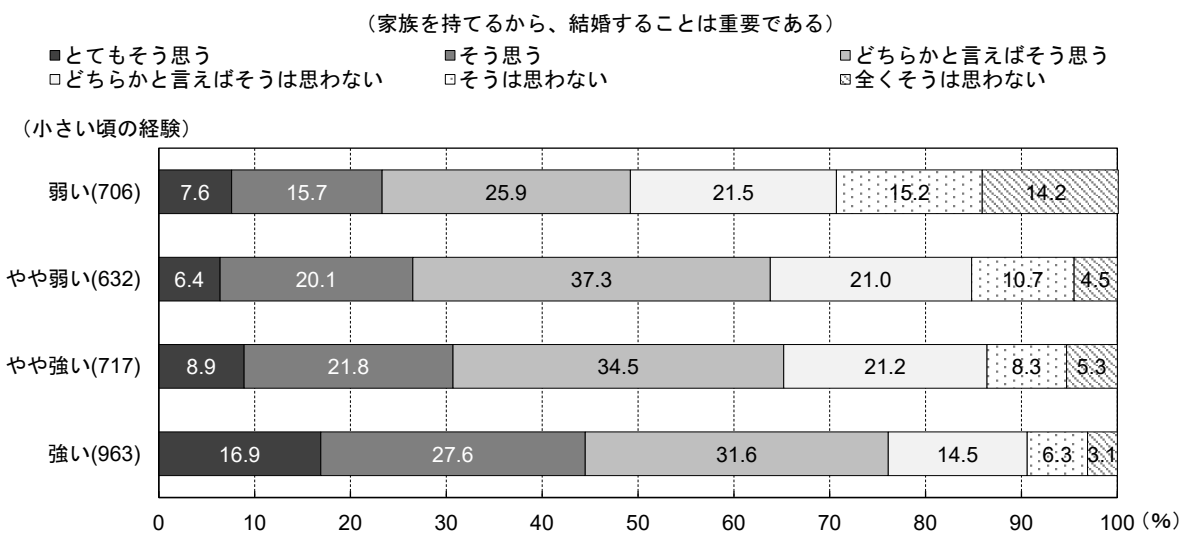
その結果、指標「小さい頃の経験」が強い者ほど、家族や子育ての重要性に対して肯定的評価をする者が多くなり、また、結婚や子どもについて「幸せそう」と思う者が増えることがわかった。それらの関係は極めて明瞭というほどではないが、「小さい頃の経験」が「弱い」と「強い」では「とてもそう思う」の出現率はおおよそ2倍から3倍の差になる。

図 2.6.13 小さい頃の経験別にみた家族観

(男性)



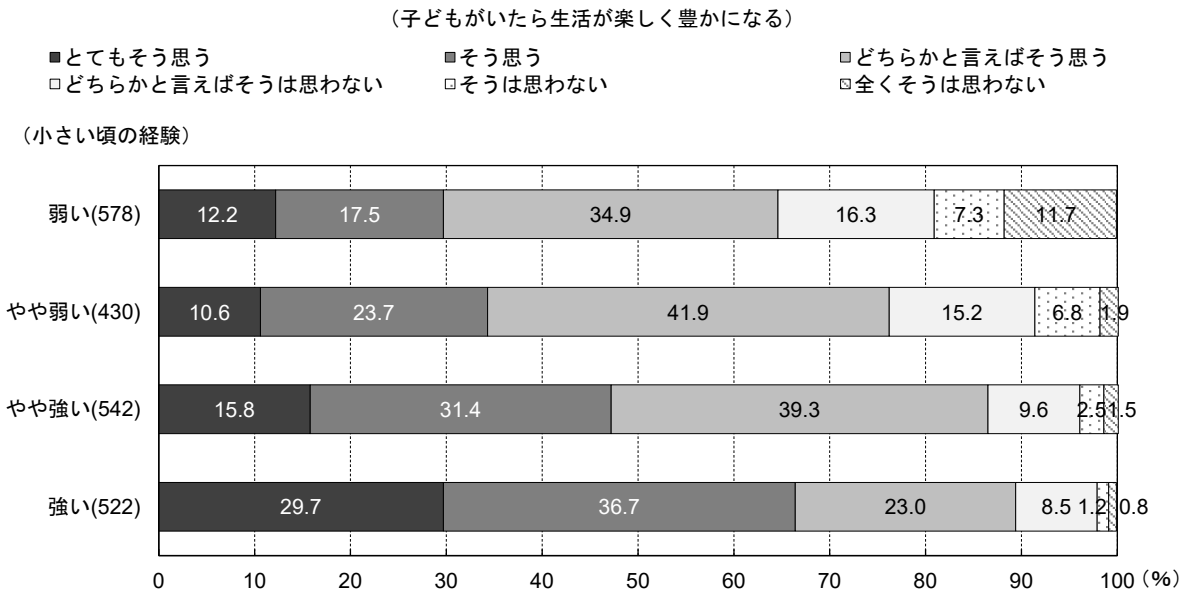
(女性)



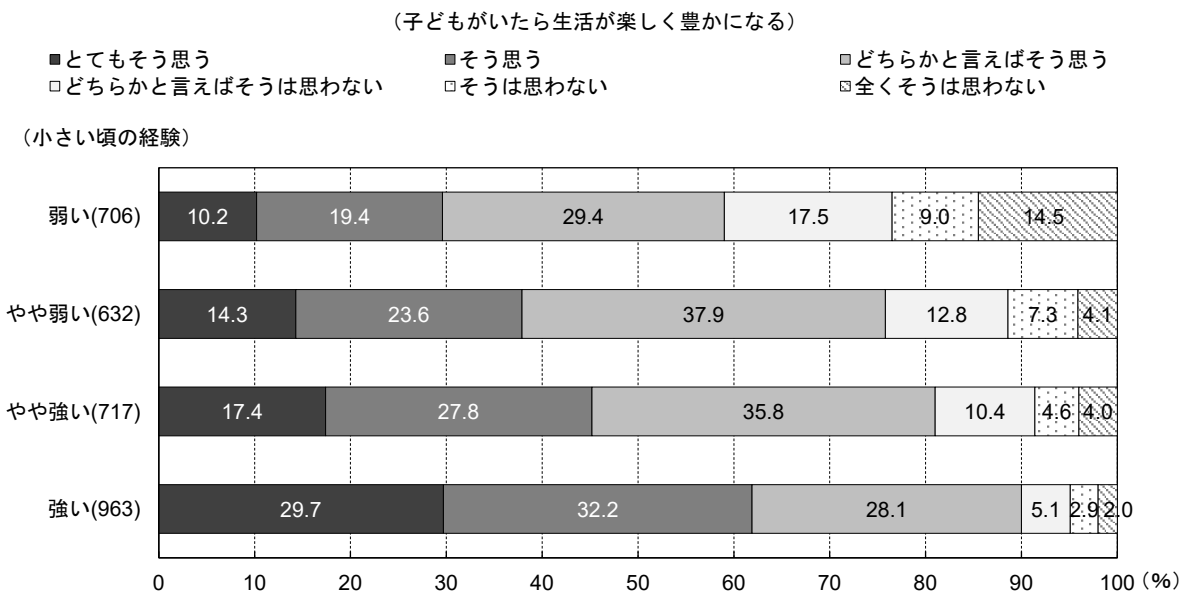
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1668	0.1564
P値	0.0000	0.0000

図 2.6.14 小さい頃の経験別に子ども観

(男性)



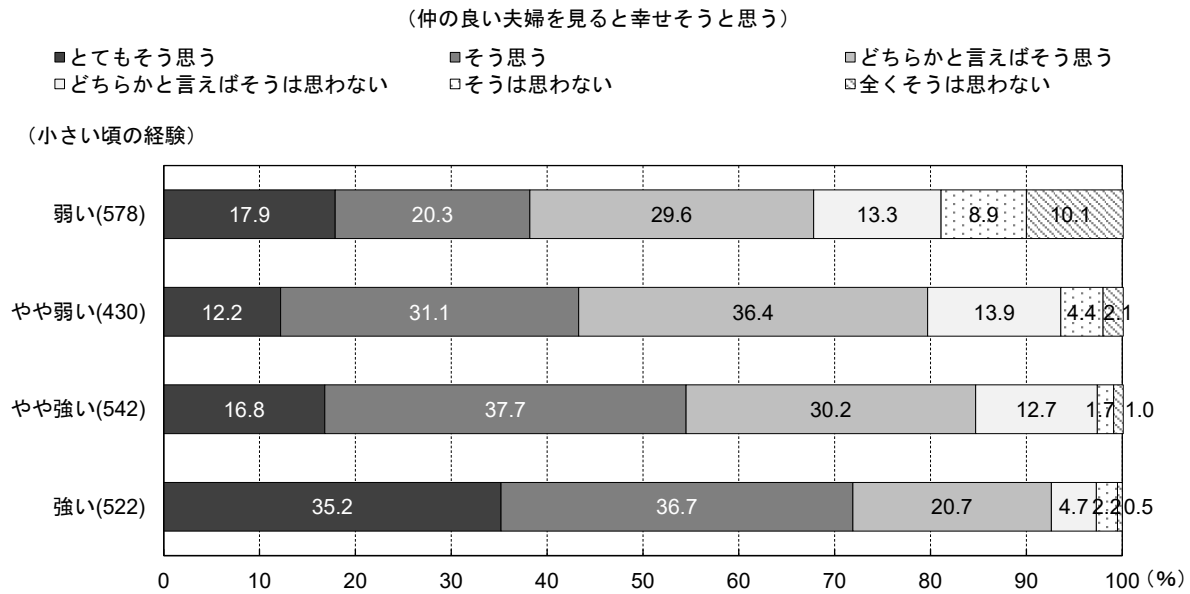
(女性)



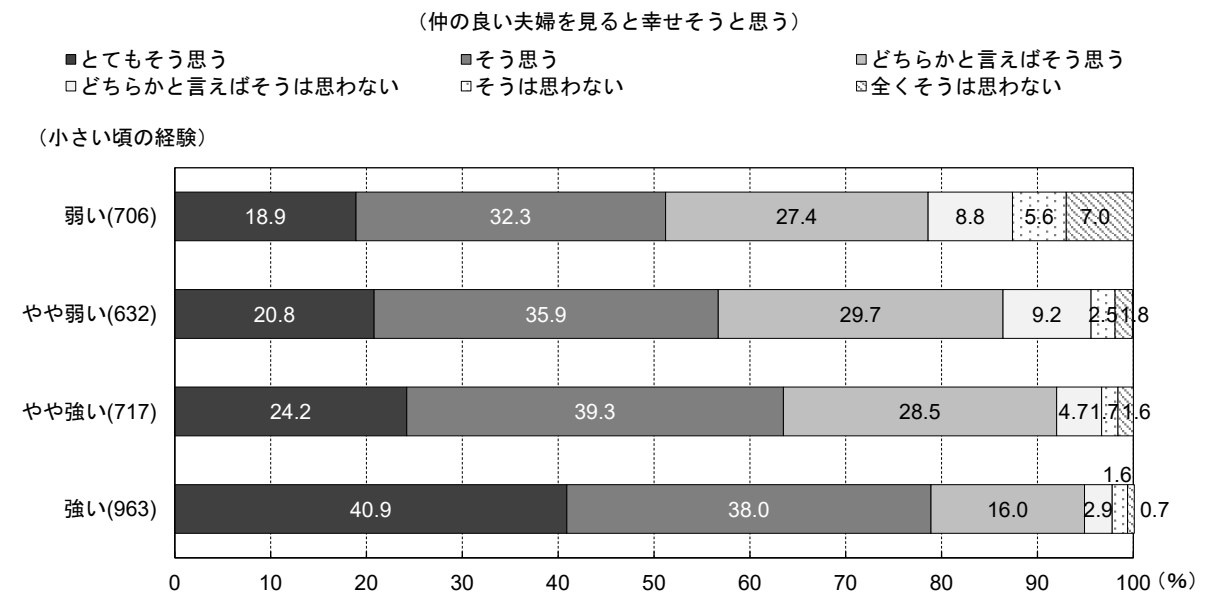
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2176	0.1949
P値	0.0000	0.0000

図 2.6.15 小さい頃の経験別にみた結婚に対する感受性

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2060	0.1669
P値	0.0000	0.0000

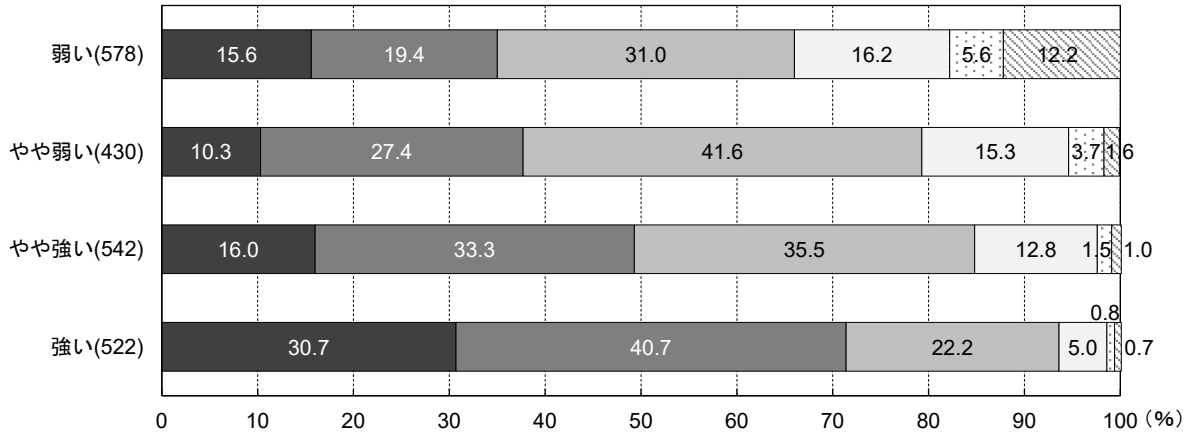
図 2.6.16 小さい頃の経験別にみた子どもに対する感受性

(男性)

(小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う)

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない

(小さい頃の経験)

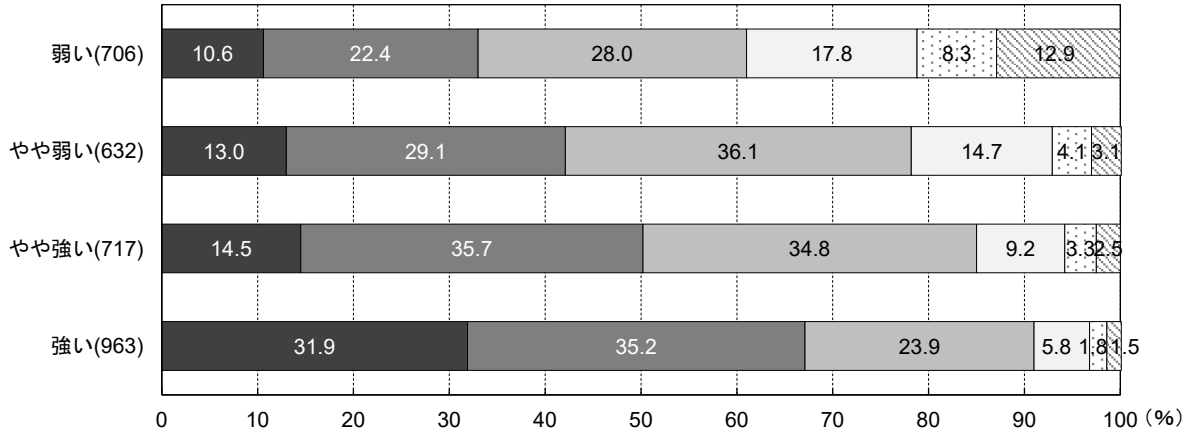


(女性)

(小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う)

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない

(小さい頃の経験)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2184	0.2087
P値	0.0000	0.0000

④子育てを通じた地域との関わり

(7個の項目から「子育てを通じた地域との関わり」を作成した)

本調査における「子育て世帯と地域との関わり」とは、子育て世帯の地域コミュニティの人々との交流、子育て世帯の地域行事等への参加、地域コミュニティにおける子育て世帯同士の交流等を表す。これらの関わり方は、子育てに対する価値観や感じ方に影響を及ぼすと考えられることから、図 2.6.17 の七つの項目によって「子育て世帯と地域との関わり」の強さを把握した。

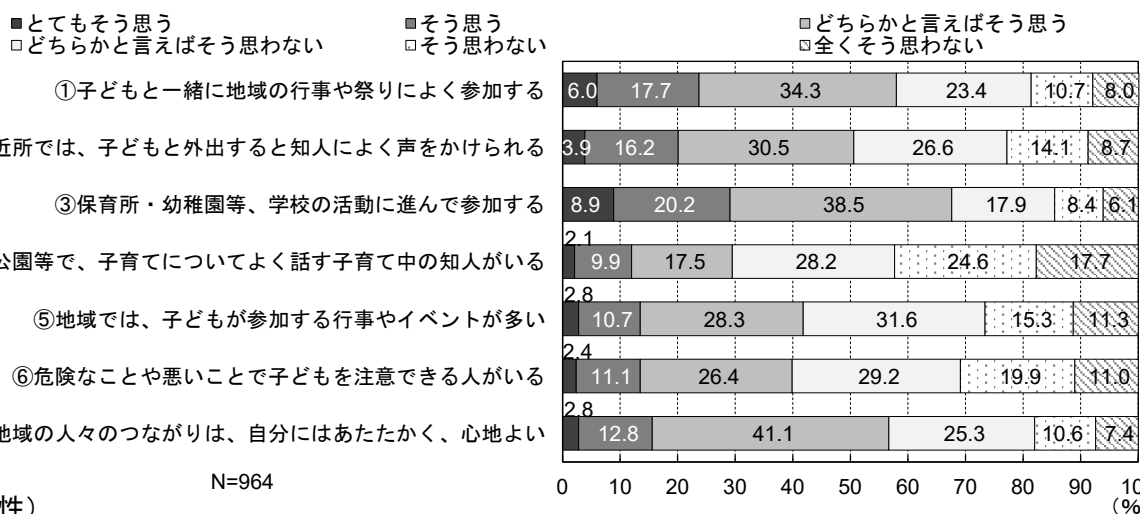
いずれの項目においても「とてもそう思う」が少ない傾向はみられるものの、全体的に回答にはばらつきがあり、地域との関わり方の状況が様々であることがわかる。

「③保育所・幼稚園等、学校の活動に進んで参加する」等の四項目で肯定的回答が多く、「④公園等で、子育てについてよく話す子育て中の知人がいる」等の三項目では否定的な意見が過半を占めており、項目によってもばらつきがみられる。

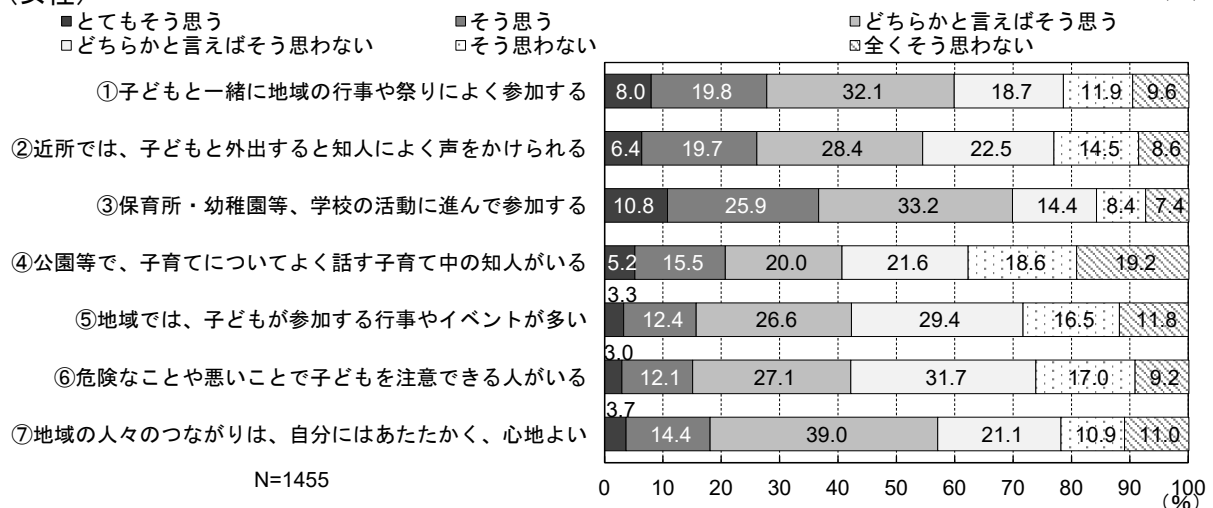
図 2.6.17 の多段階形式の回答をスコア化し、7項目の回答を合成する主成分分析を実施した。主成分分析の結果から得られた第1主成分の主成分得点が、本調査における指標「子育て世帯と地域との関わり」である。なお、図 2.6.17 の質問の対象は子育て世帯である。

図 2.6.17 子育てを通じた地域との関わり (単数)

(男性)



(女性)



(女性の子育てに対する感じ方に対して関係が表れる)

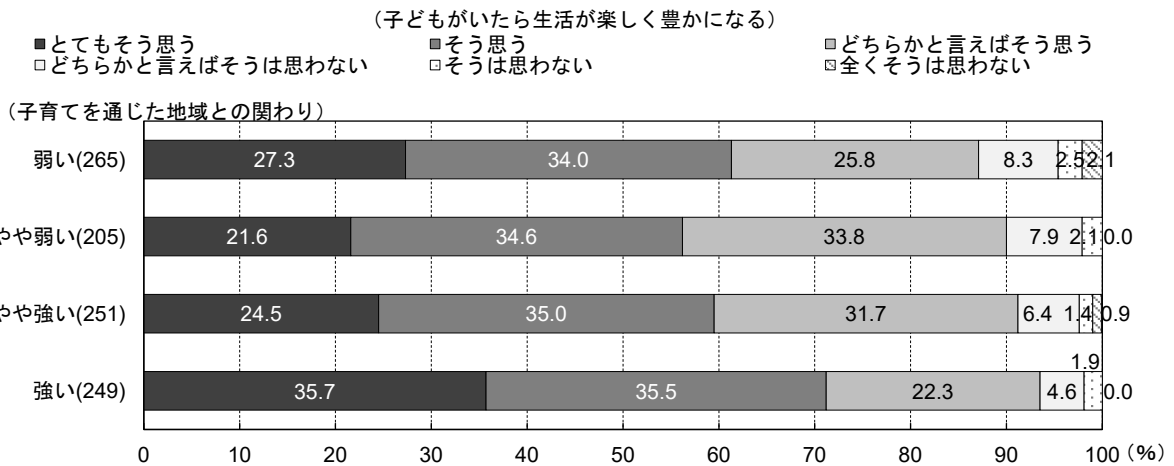
子ども観、結婚や子どもに対する感受性は、「子育てを通じた地域との関わり」に影響を受けると考え、図2.6.18と図2.6.19において、「子育てを通じた地域との関わり」を分析軸にして、子ども観と子どもに対する感受性の集計を行った。

その結果、分析軸と集計項目の間で関係は認められるもの、その関係は明瞭ではなく、関係の強さも大きくない。これは、結婚や子育てに対する価値観や感じ方が、子育ての時期までに形成されていたためと考えられる。

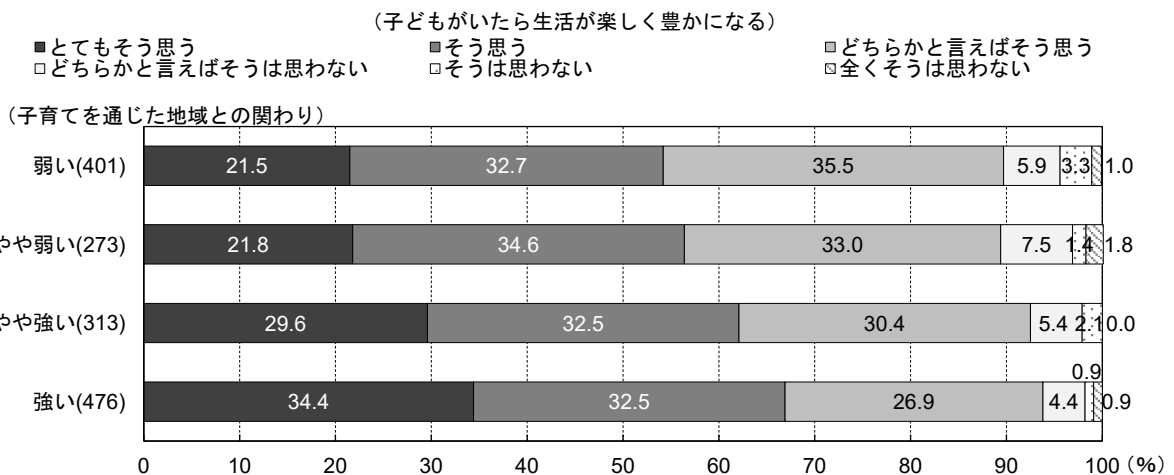
こうした中で、女性の子ども観への影響は、「子育てを通じた地域との関わり」の「弱い」に対して「強い」になると「とてもそう思う」が1.6倍になり、やや強い関係がみられる。例えば、第1子の子育て経験が、第2子以降の希望に影響を及ぼす可能性が考えられる。

図 2.6.18 子育てを通じた地域との関わり別にみた子ども観

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1017	0.0970
P値	0.0116	0.0003

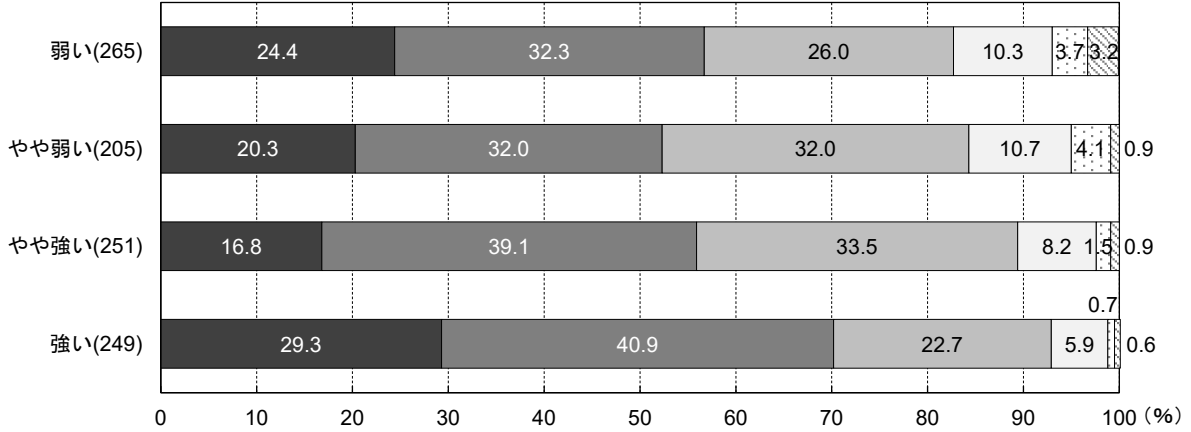
図 2.6.19 子育てを通じた地域との関わり別にみた子どもに対する感受性

(男性)

(小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う)

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない

(子育てを通じた地域との関わり)

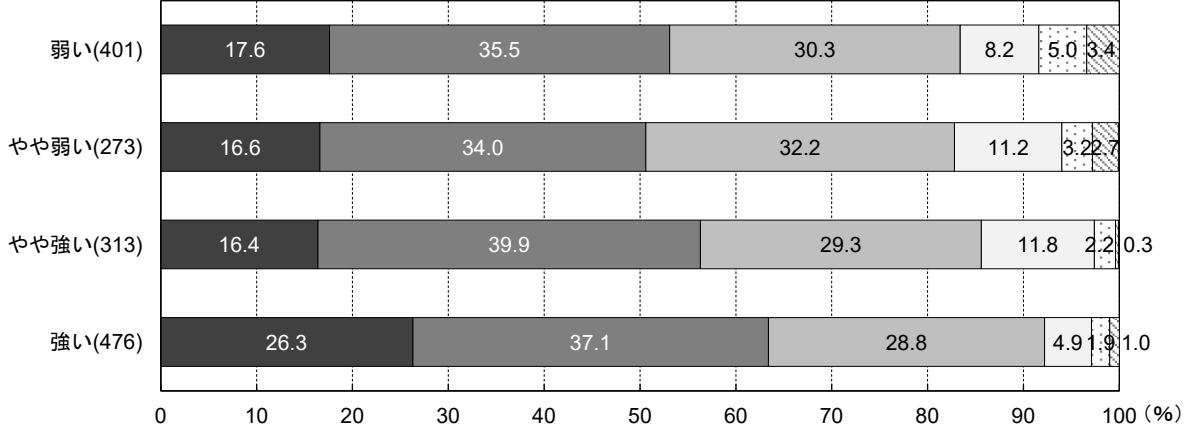


(女性)

(小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う)

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない

(子育てを通じた地域との関わり)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1233	0.1064
P値	0.0001	0.0000

⑤子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合い地域に不足していること

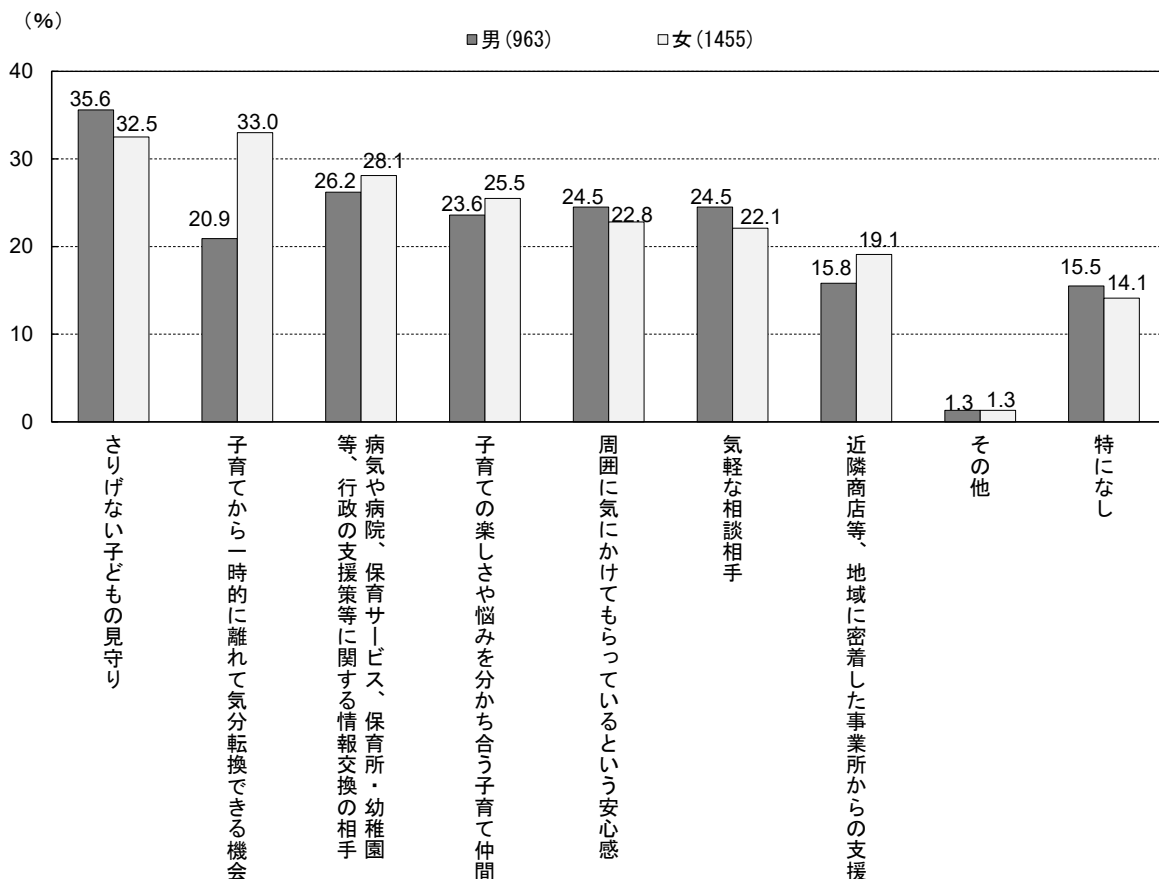
(助け合いで不足していることは男女で回答に差がある)

子育てをしている者を対象に、子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していることを把握した(図2.6.20)。

「さりげない子どもの見守り」が男性では36%、女性では33%に上る。女性では「子育てから一時的に離れて気分転換ができる機会」が33%に達するが、男女で回答に差がみられる(男性21%)。この他では、「病気や病院、保育サービス、保育所・幼稚園等、行政の支援策等に関する情報交換の相手」の回答が男女とも30%近い回答になっている。

また、「子育ての楽しみや悩みを分かち合う子育て仲間」「周囲に気にかけてもらっているという安心感」「気軽な相談相手」は男女とも20%を上回る。

図 2.6.20 子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していること(複数)



(3) 社会関係資本

①社会関係資本の作成

(7個の項目から「社会関係資本」を作成した)

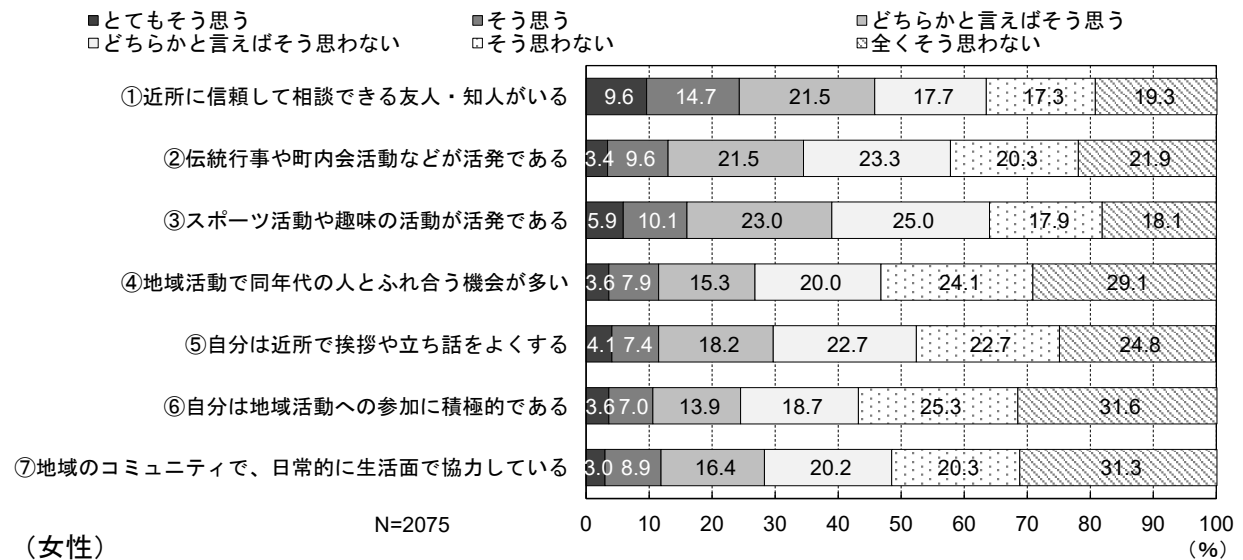
府内在住者が普段どのようなコミュニティや人々と関わっているか、また、過去にどのようなコミュニティや人々と関わってきたかを把握するために、まず、暮らしている地域や地域との関わりについて男女別に尋ねた。

地域や地域との関わりについて、男性においては「近所に信頼して相談できる友人・知人がいる」を『思う』（「とても思う」「そう思う」「どちらかと言えば思う」の合計）と回答した方が45.8%と最も多くなっている。しかし、いずれも50%を下回っている。

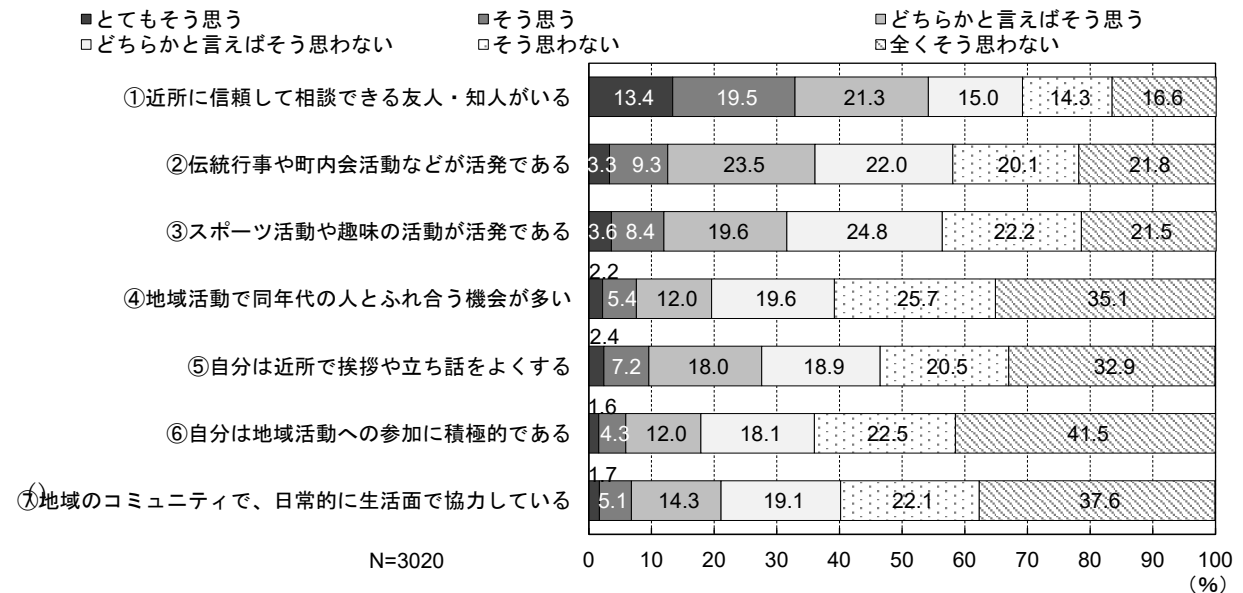
また、「自分は地域活動への参加に積極的である」を『思う』と回答した方は24.5%と最も低くなっている。

図 2.6.21 暮らしている地域や地域との関わりについて（単数）

(男性)



(女性)



②社会関係資本と「小さい頃の経験」及び「子育てを通じた地域との関わり」との関係

(社会関係資本は「小さい頃の経験」及び「子育てを通じた地域との関わり」に強く影響)

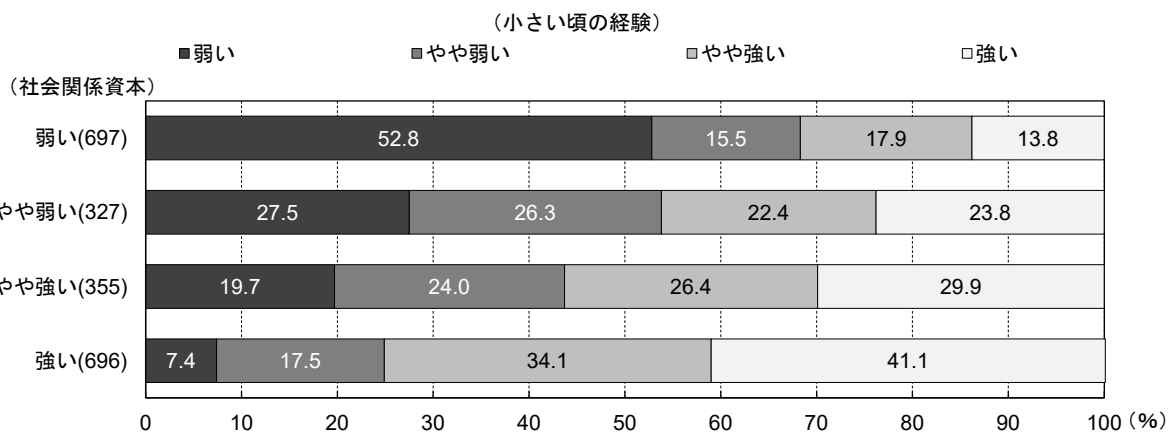
地域コミュニティの社会関係資本の蓄積状況は、「小さい頃の経験」や「子育てを通じた地域との関わり」に影響を及ぼすと考えられる。そこで、図 2.6.22 と図 2.6.23 において、「社会関係資本」を分析軸にして「小さい頃の経験」と「子育てを通じた地域との関わり」の集計を行った。

その結果、両者とも明瞭な関係が表れた。とりわけ、社会関係資本の蓄積に対する肯定的意見が強い者ほど「子育てを通じた地域との関わり」についても肯定的に捉える者が多くなる関係は、はっきりと表れている。「小さい頃の経験」についても「子育てを通じた地域との関わり」ほど明瞭ではないものの社会関係資本との正の相関は明らかである。

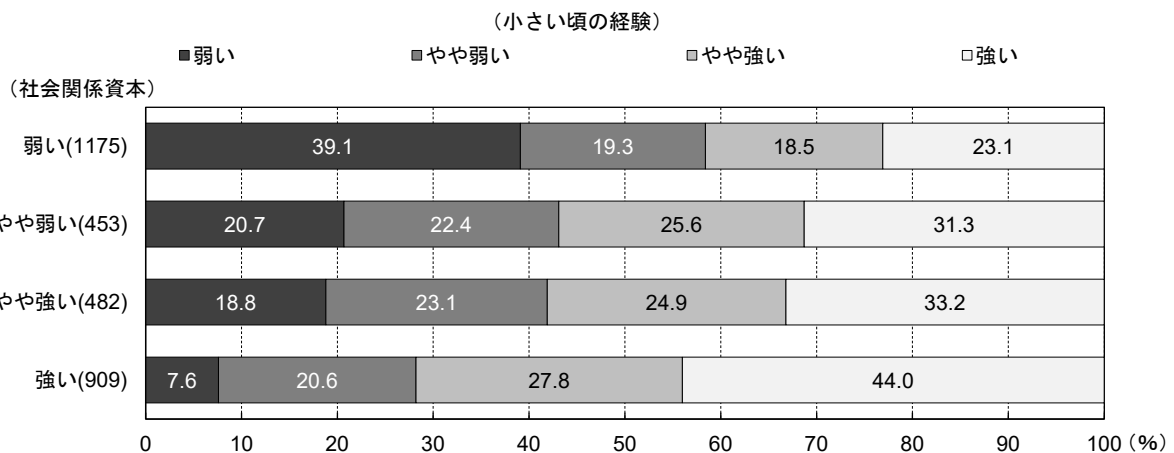
男女別では、「小さい頃の経験」では、男性の方が明瞭で、強い（「小さい頃の経験」の「弱い」や「強い」の出現率の変化が大きい）関係がみられる

図 2.6.22 社会関係資本別にみた小さい頃の経験

(男性)



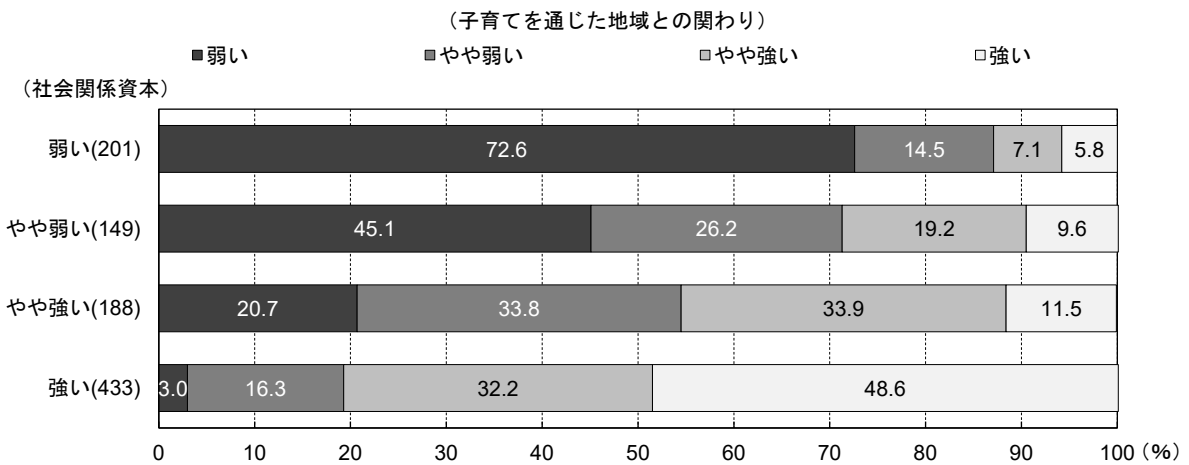
(女性)



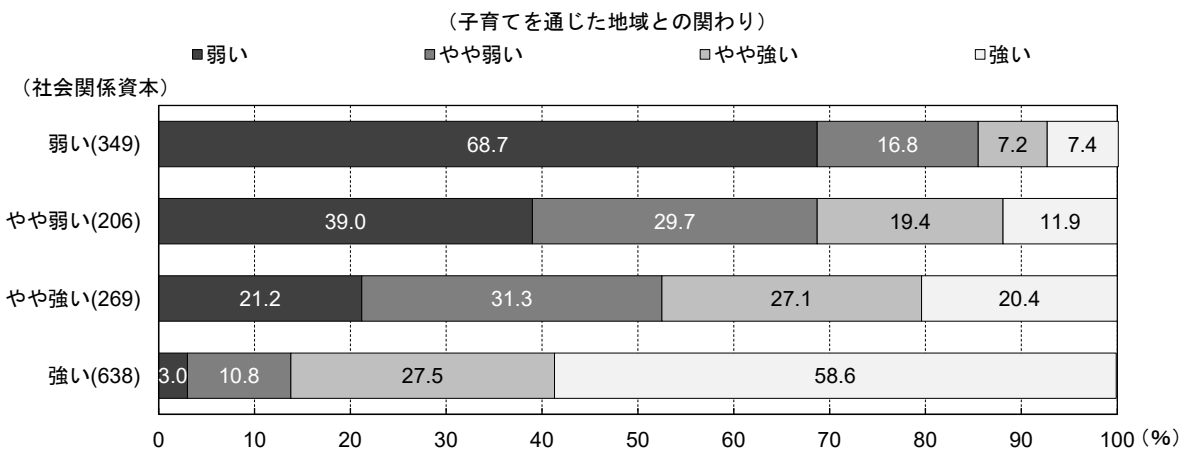
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2551	0.1925
P値	0.0000	0.0000

図 2. 6. 23 社会関係資本別にみた子育てを通じた地域との関わり

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.4029	0.4080
P値	0.0000	0.0000

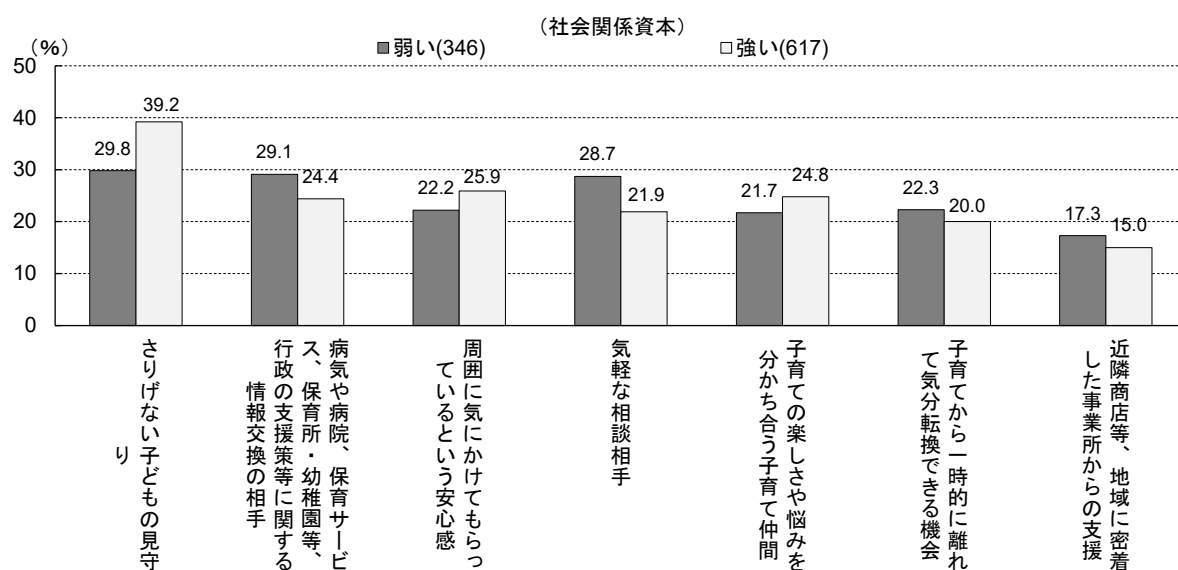
(社会関係資本が「弱い」と「気軽な相談相手」が増加)

社会関係資本の蓄積状況に対する意見を「弱い」と「強い」に二区分し、「子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していること」を集計した(図2.6.24)。

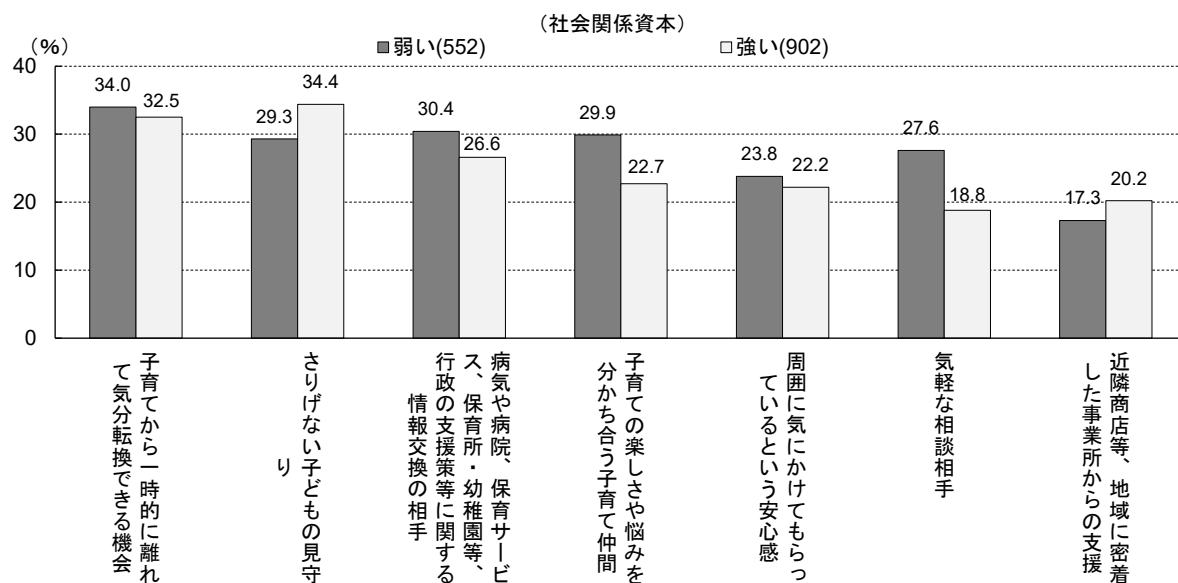
その結果、男女とも、社会関係資本が「弱い」と「気軽な相談相手」の回答が増加する。女性では、社会関係資本が「弱い」と「子育ての楽しさや悩みを分かち合う子育て仲間」が増えることがわかった。逆に「強い」と「さりげない子どもの見守り」が増加する。

図 2.6.24 子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していること (社会関係資本別)

(男性)



(女性)



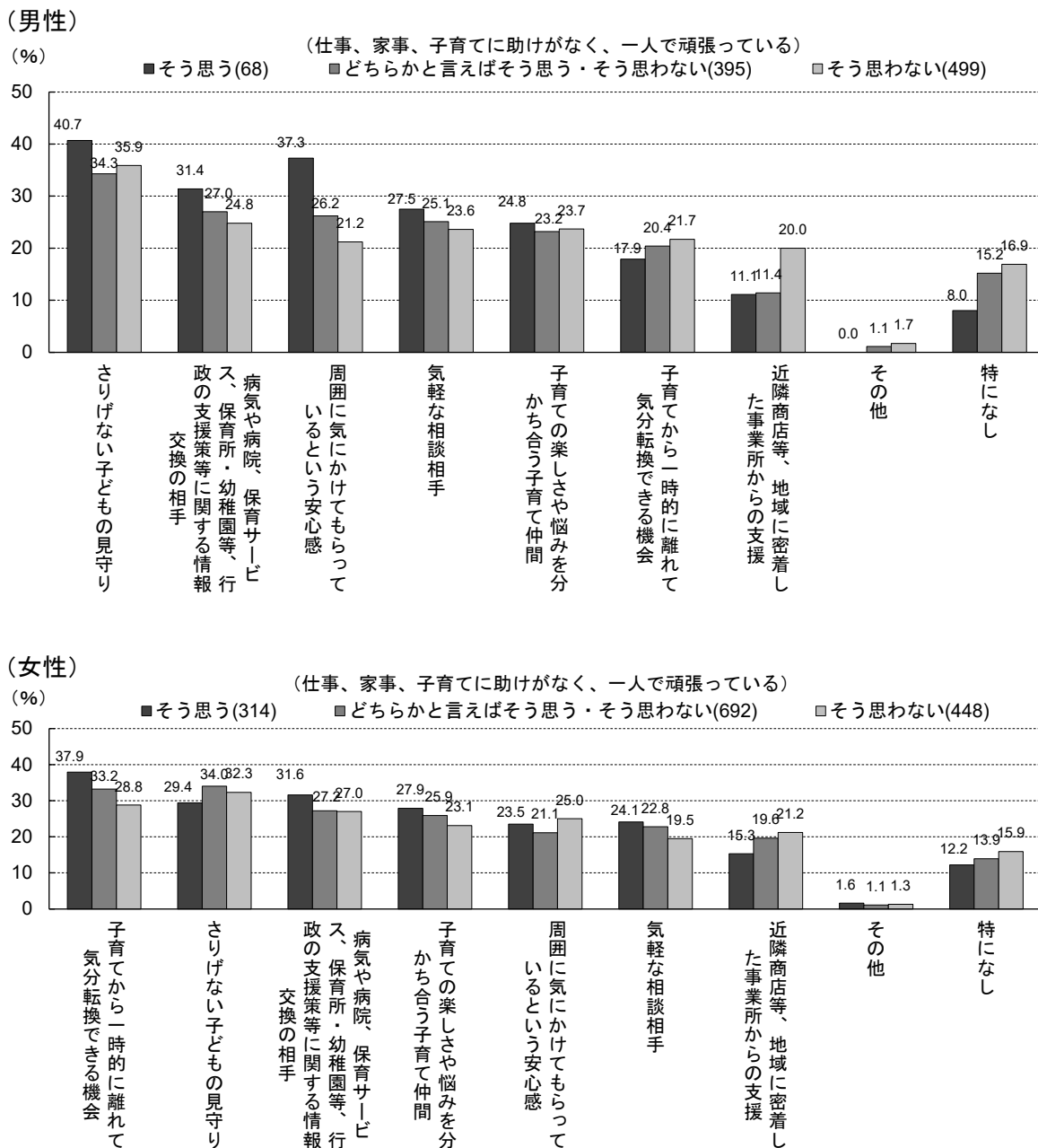
(注) 「弱い」は図2.6.24の「弱い」と「やや弱い」の合計、「強い」は「やや強い」と「強い」の合計である

(必要とされる地域の関わり合いや助け合いは「孤育」の状況で変化する)

「子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで、暮らしている地域に不足していること」は、子育てをしている者の「孤育」の状況によって回答が変化する。

男性では「孤育」の程度が高いほど「周囲に気にかけてもらっている安心感」が増加する(図2.6.25、図2.6.26)。女性では、「孤育」の程度が高いと「子育てから一時的に離れて気分転換できる機会」や「子育ての楽しみや悩みを分かち合う子育て仲間」が増えている。

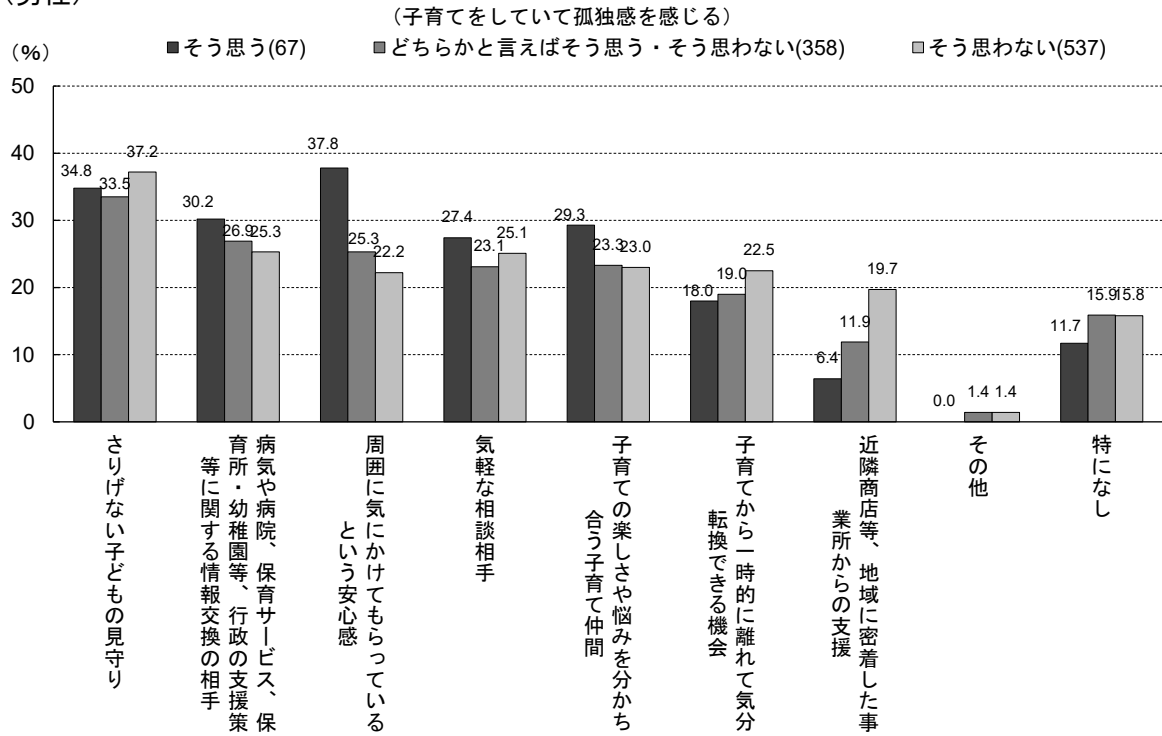
図 2.6.25 子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで、暮らしている地域に不足していること(「孤育」の状況別、子育てをしている者)



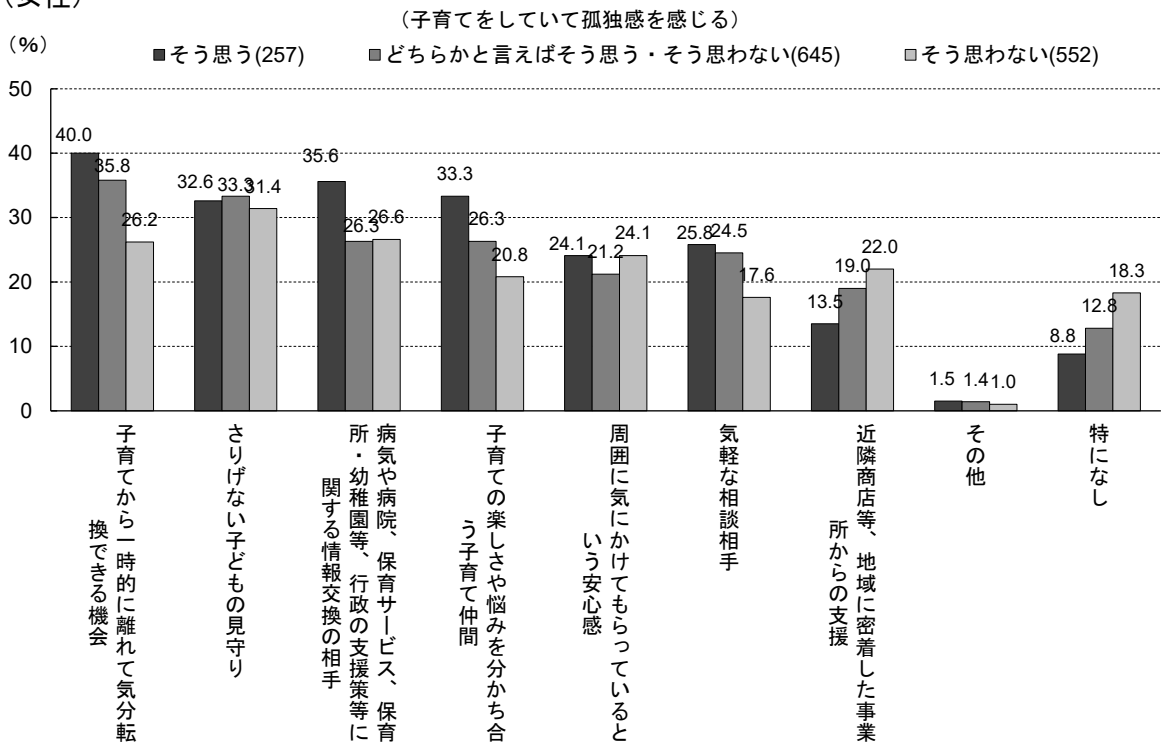
(注) 図では、分析軸である「仕事、子育てに助けがなく、一人で頑張っている」の回答は、「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的回答を「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」の中間的・否定的回答を「どちらかと言えばそう思う・そう思わない」、「そう思わない」「全くそう思わない」の否定的回答は「そう思わない」の三区分に再設定した。

図 2.6.26 子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで、暮らしている地域に不足していること（「孤育」の状況別、子育て中の者）

(男性)



(女性)



(注) 図では、分析軸である「子育てをされていて孤独感を感じる」の回答は、「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的回答を「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」の中間的答を「どちらかと言えばそう思う・そう思わない」、「そう思わない」「全くそう思わない」の否定的回答は「そう思わない」の三区分に再設定した。

(4) 地域別の集計

①小さい頃の経験

(小さい頃の経験は、男性では相楽東部、女性では丹後で強い)

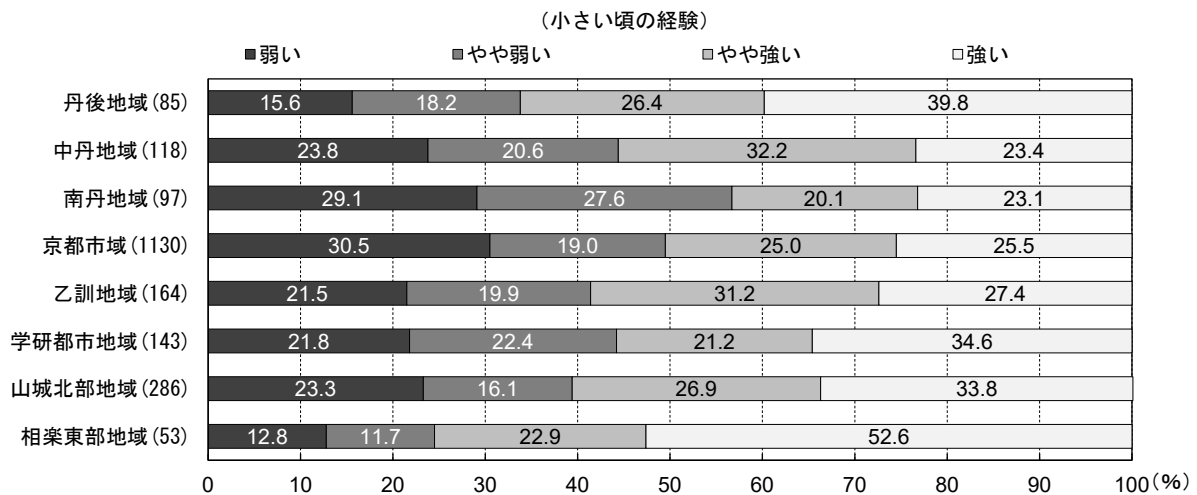
図 2.6.12 の多段階形式の回答を地域別にスコア化し、六つの項目の回答を合成する主成分分析を実施した。主成分分析の結果から得られた第1主成分の主成分得点が、本調査における指標「小さい頃の経験」である。

スコア化された「小さい頃の経験」を地域別にみると、男性では相楽東部で「強い」が53%と他の地域より多く、京都市域で「弱い」が31%と最も多くなっている。女性では丹後で「強い」が50%と最も多く、男性と同じく京都市域で「弱い」が27%と最も多くなっている(図 2.6.27)。

各地域のスコアの基となった各地域の小さい頃の経験の詳細は、図 2.6.28 のとおりである。

図 2.6.27 地域別の小さい頃の経験

(男性)



(女性)

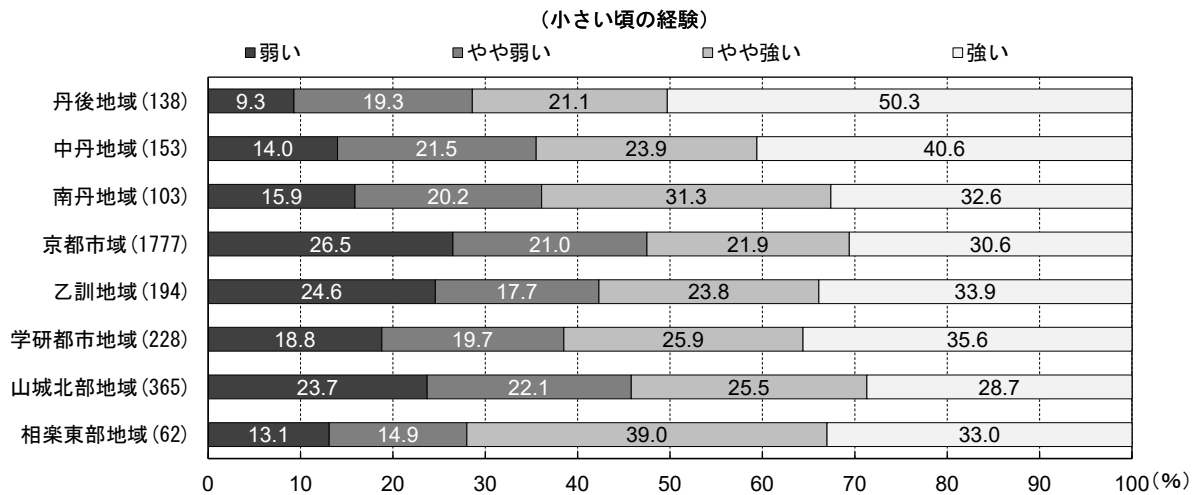
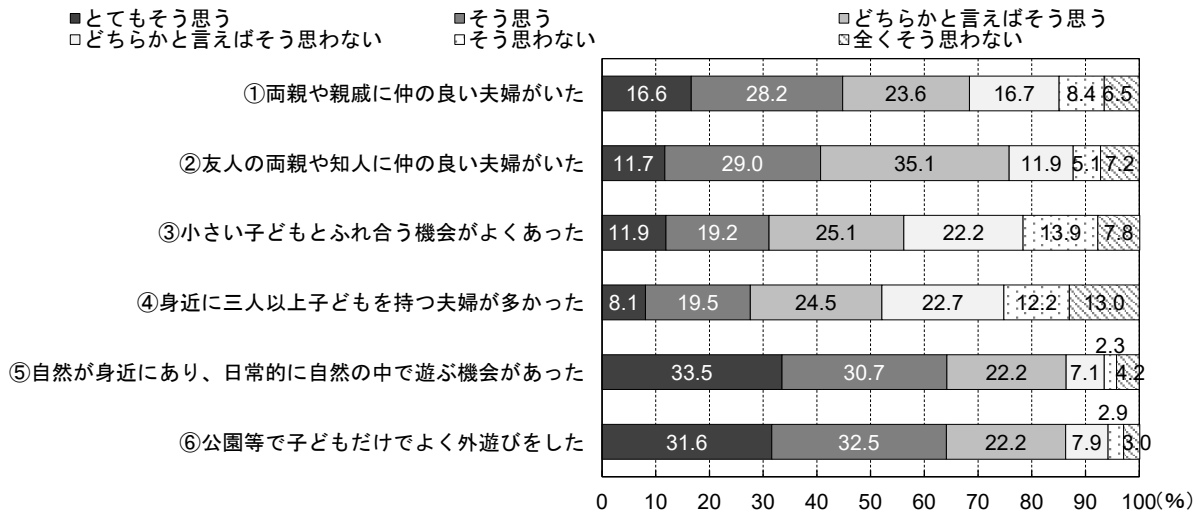


図 2.6.28 地域別の小さい頃の経験の詳細

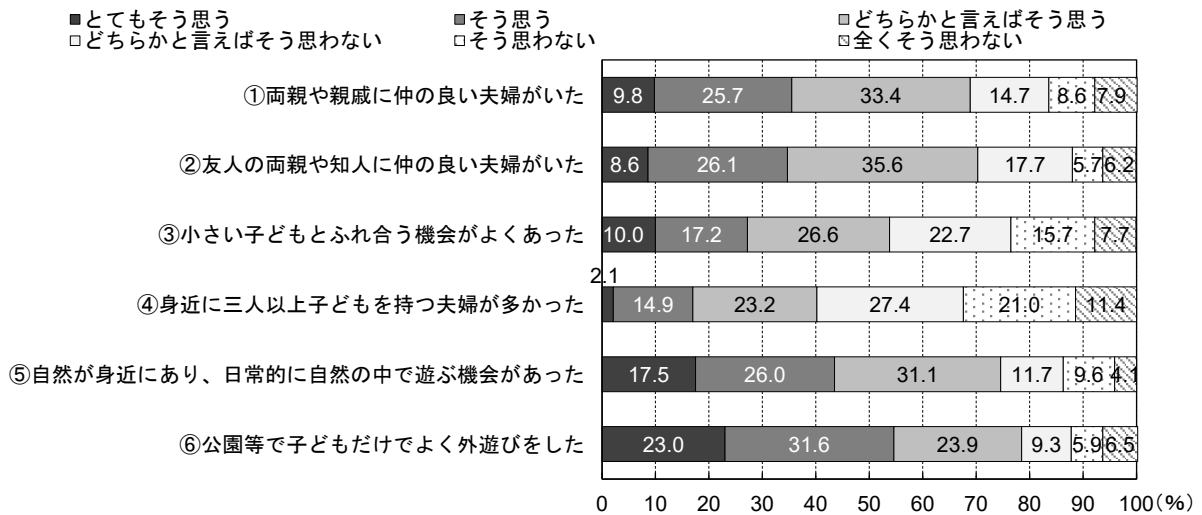
(丹後地域)

N=224



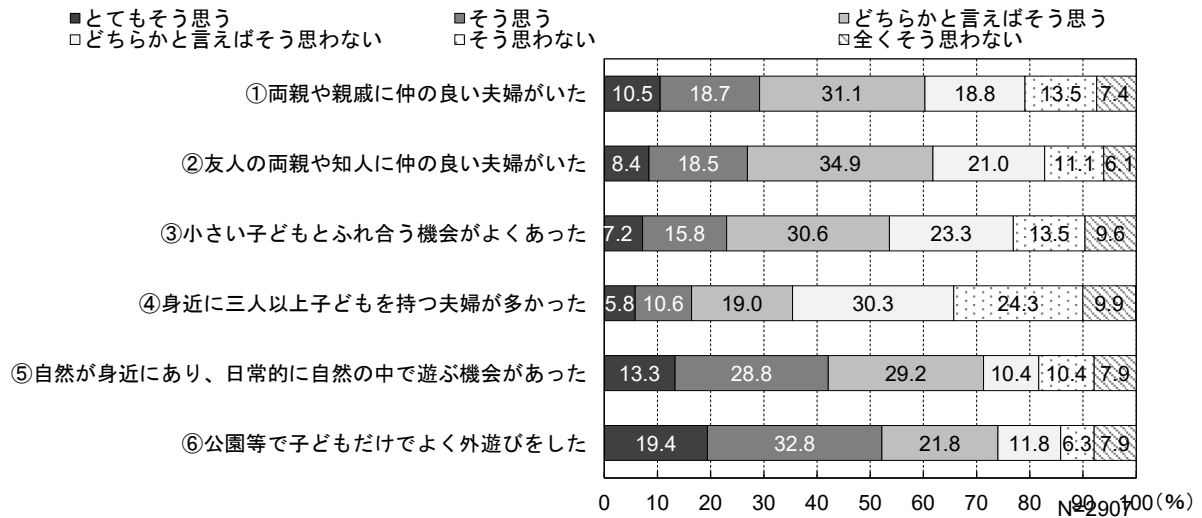
(中丹地域)

N=271

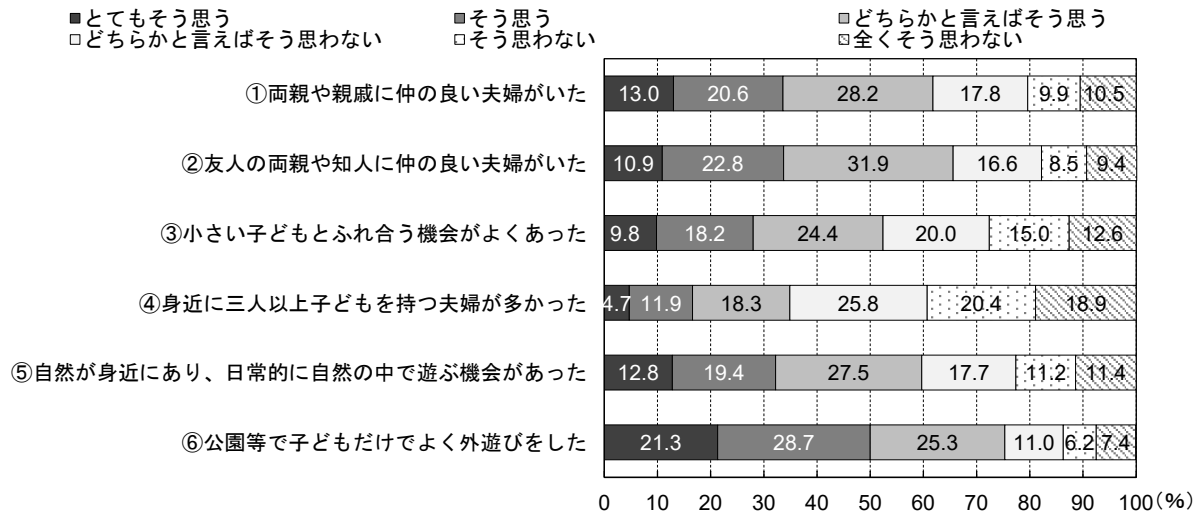


(南丹地域)

N=200

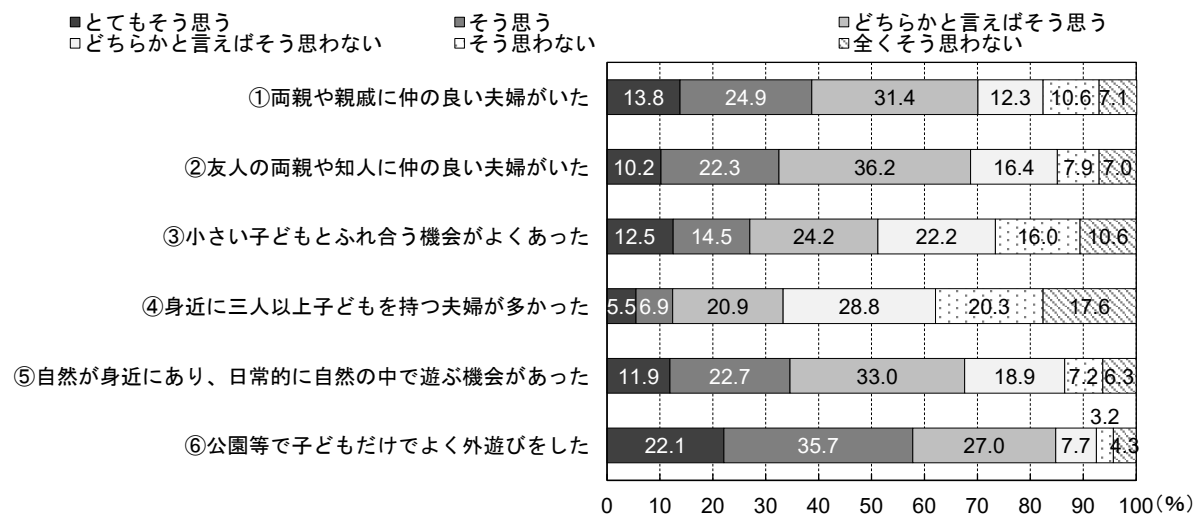


(京都市域)



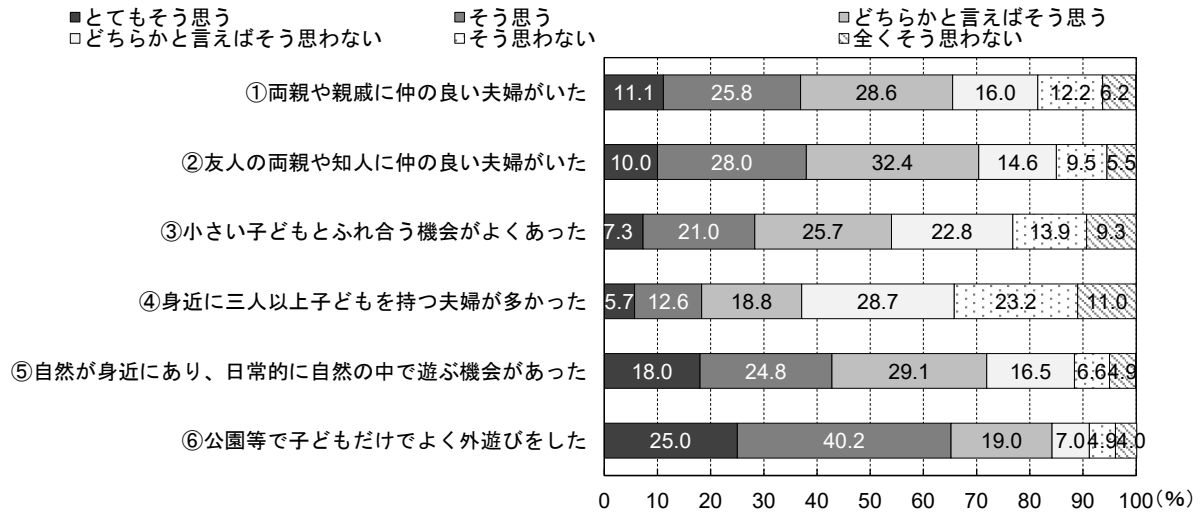
(乙訓地域)

N=358



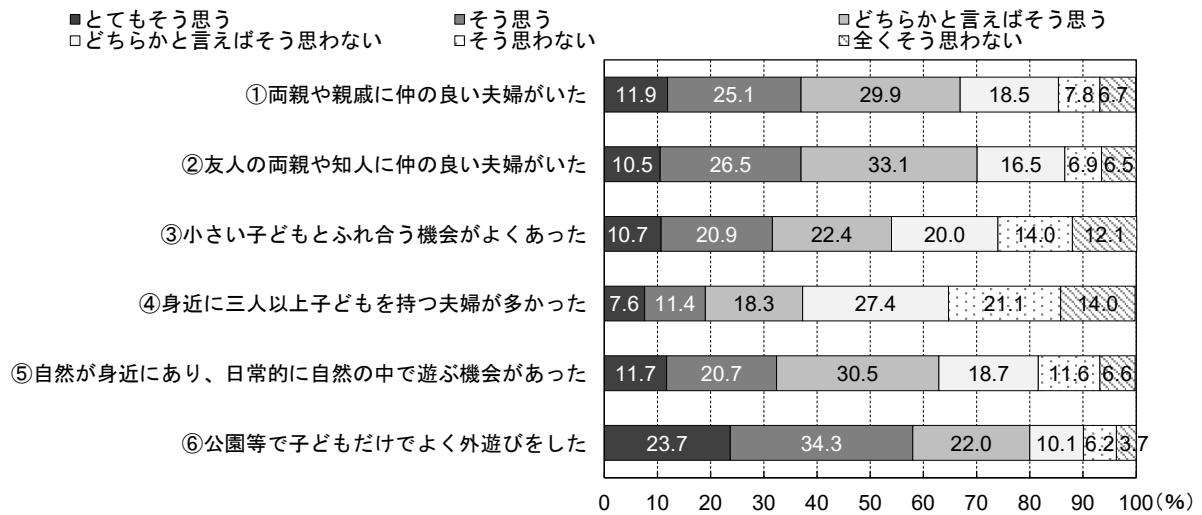
(学研都市地域)

N=371



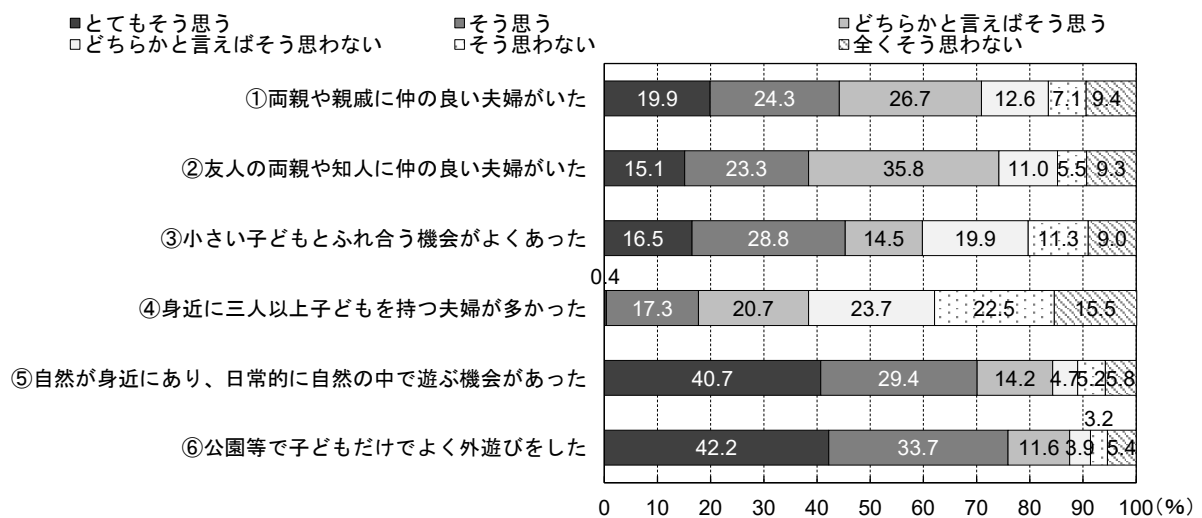
(山城北部地域)

N=651



(相楽東部地域)

N=116



②子育てを通じた地域との関わり

(子育てを通じた地域との関わりは、男性では丹後、女性では相楽東部で強い)

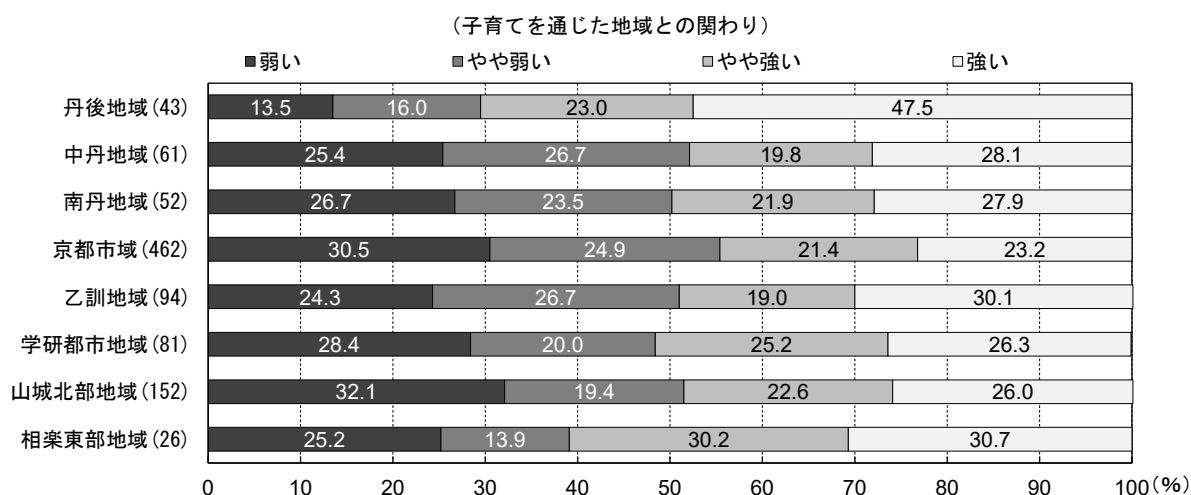
図 2.6.17 の多段階形式の回答を地域別にスコア化し、7項目の回答を合成する主成分分析を実施した。主成分分析の結果から得られた第1主成分の主成分得点が、本調査における指標「子育て世帯と地域との関わり」である。なお、図 2.6.17 の質問の対象は子育て世帯である。

スコア化された「子育て世帯と地域との関わり」を地域別にみると、男性では丹後で「強い」が48%と他のより多く、山城北部で「弱い」が32%と最も多くなっている。女性では相楽東部で「強い」が49%と最も多く、京都市域で「弱い」が33%と最も多くなっている(図 2.6.29)。

各地域のスコアの基となった各地域の子供を通じた地域との関わりの詳細は、図 2.6.30 のとおりである。

図 2.6.29 地域別の暮らしている地域や地域との関わりについて

(男性)



(女性)

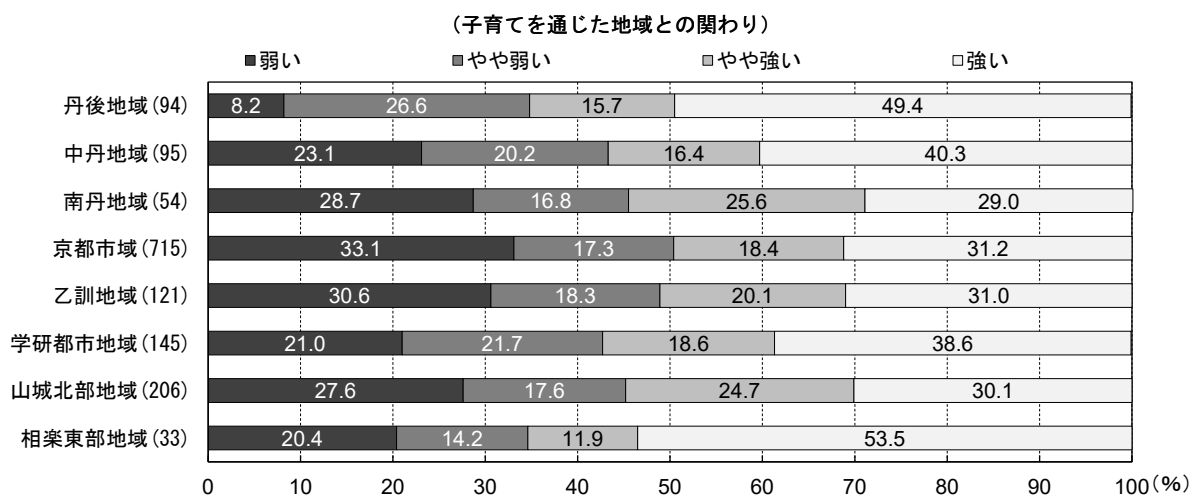
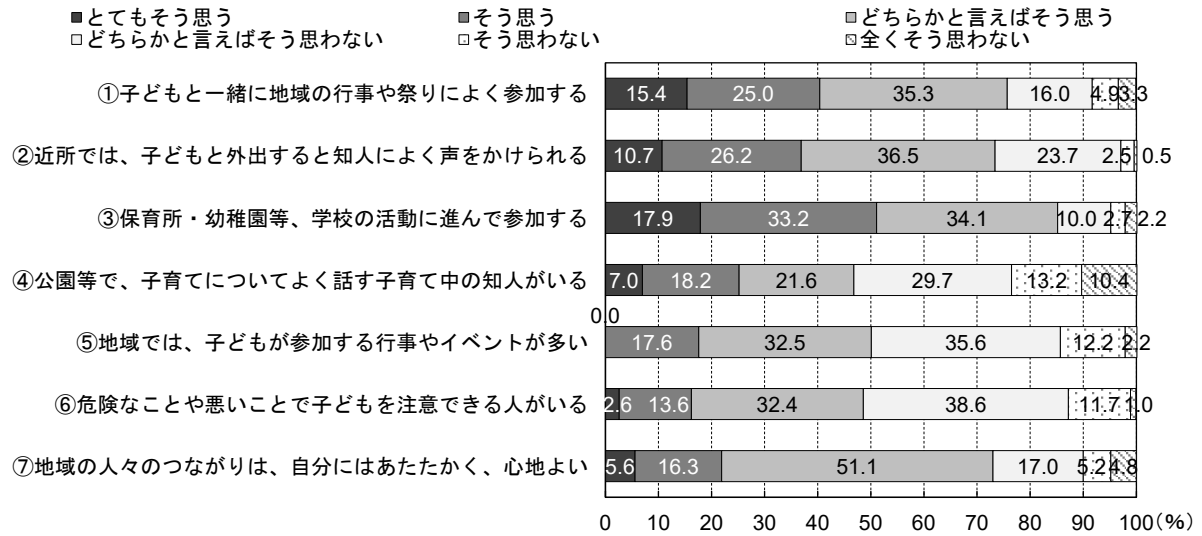


図 2. 6. 30 地域別の暮らしている地域や地域との関わりの詳細

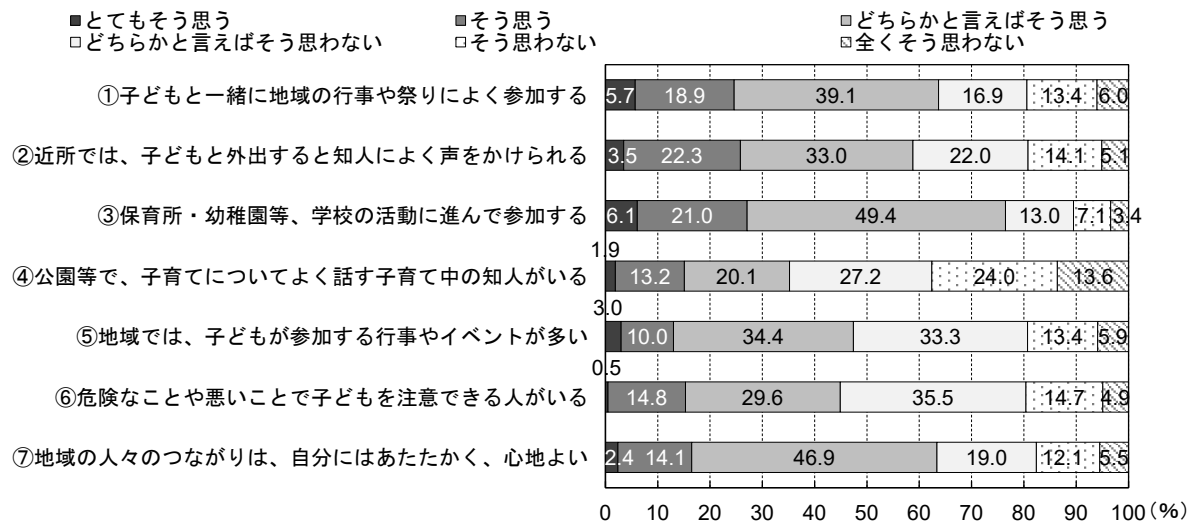
(丹後地域)

N=131



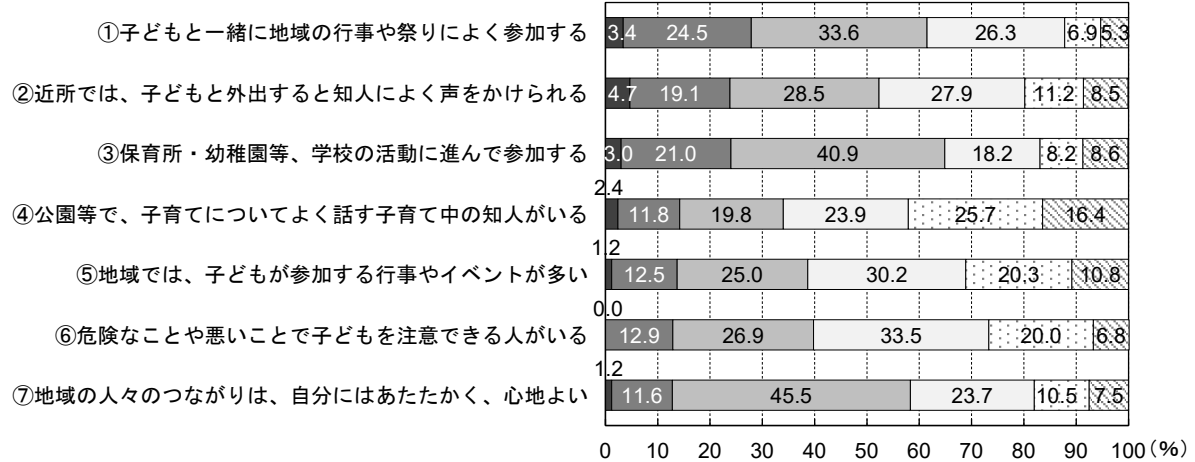
(中丹地域)

N=156



(南丹地域)

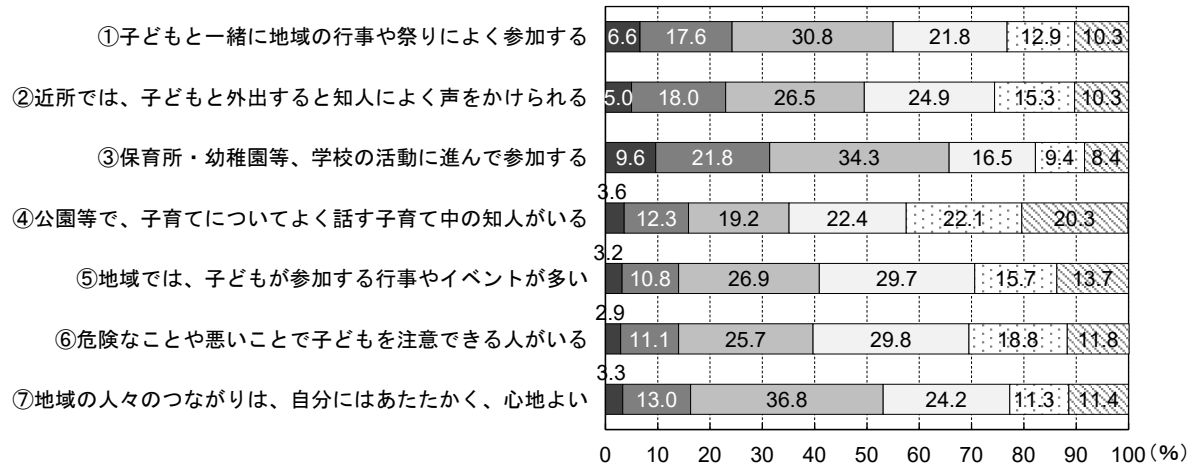
■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



(京都市域)

N=1177

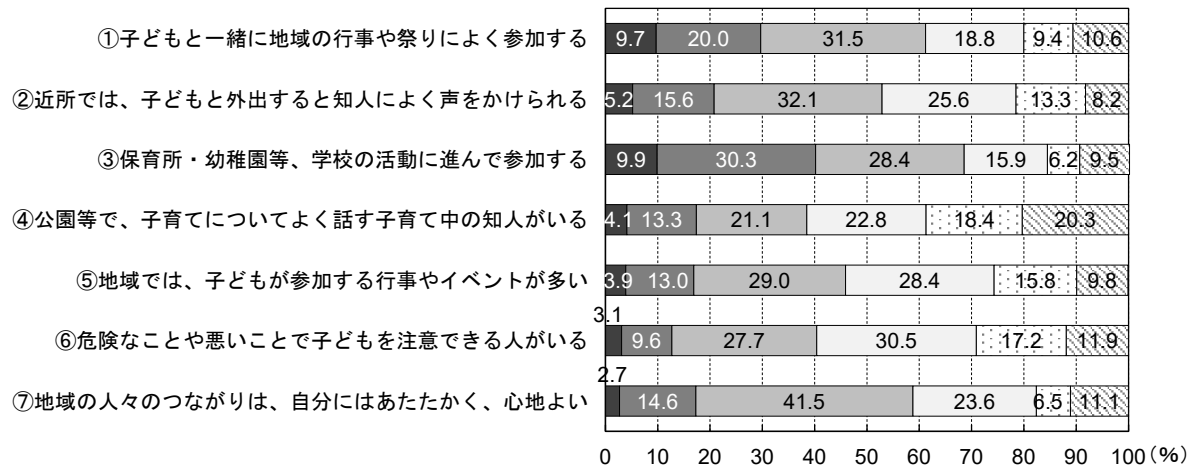
■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



(乙訓地域)

N=215

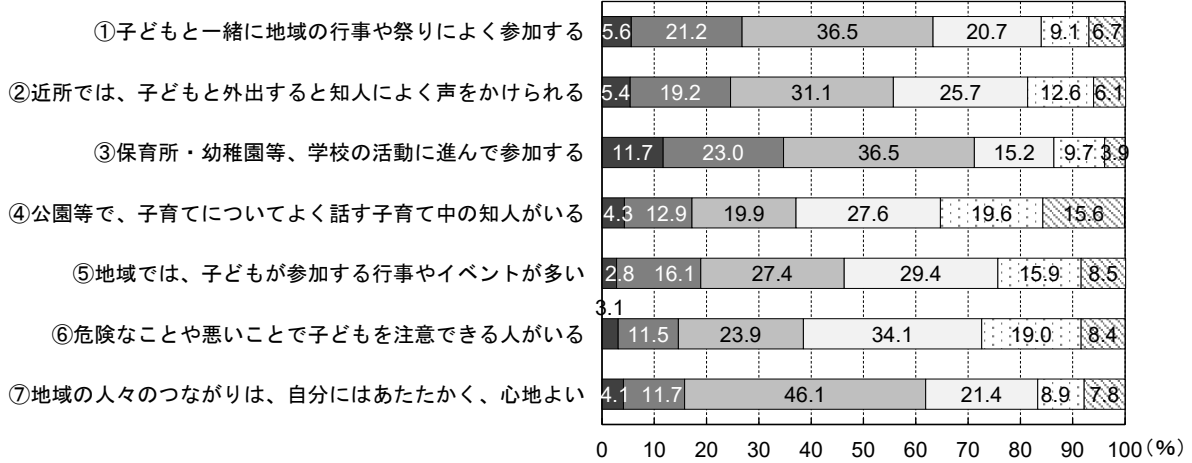
■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



N=225

(学研都市地域)

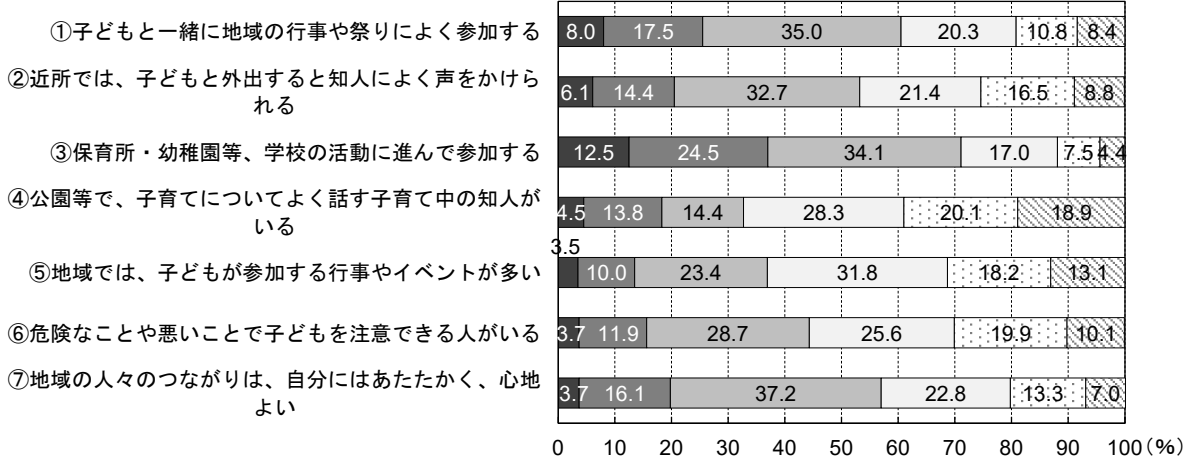
■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



(山城北部地域)

N=358

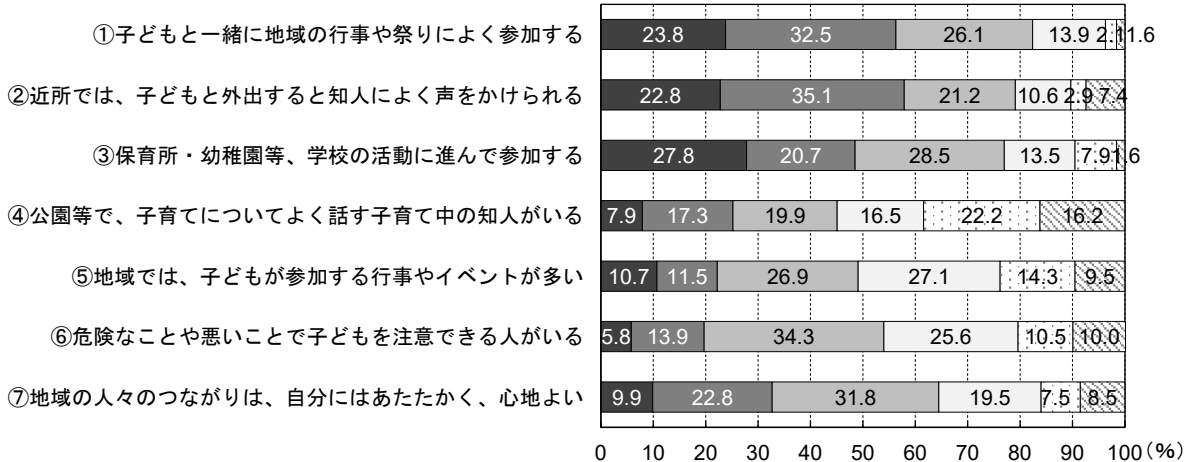
■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



(相楽東部地域)

N=51

■とてもそう思う □どちらかと言えばそう思わない ■そう思う □そう思わない □どちらかと言えばそう思う □全くそう思わない



③社会関係資本

(子育てを通じた地域との関わりは、男性では丹後、女性では相楽東部で強い)

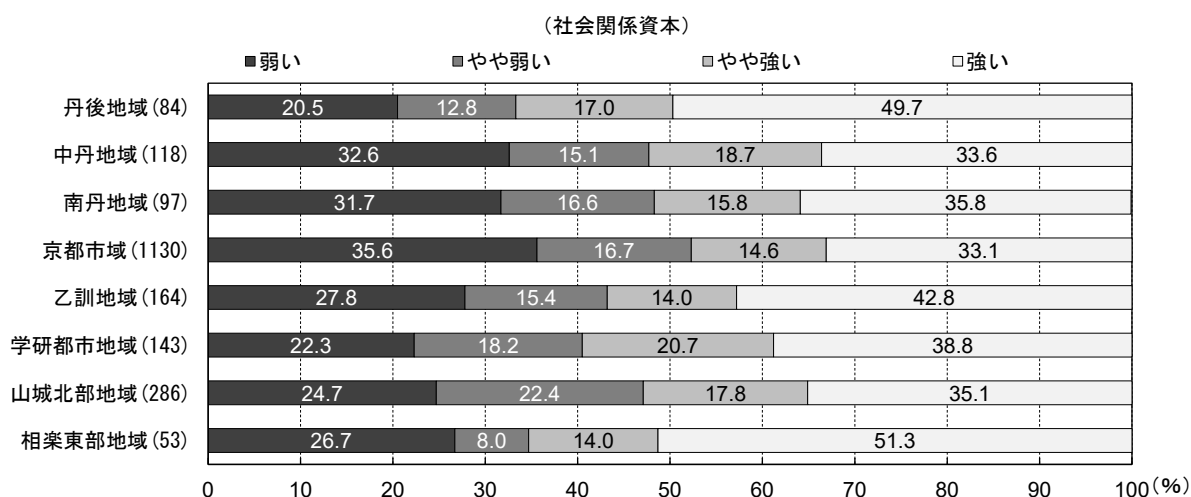
図 2.6.21 の多段階形式の回答を地域別にスコア化し、7項目の回答を合成する主成分分析を実施した。主成分分析の結果から得られた第1主成分の主成分得点が、本調査における指標「社会関係資本」である。

スコア化された「社会関係資本」を地域別にみると、男性では相楽東部で「強い」が51%と他の地域より多く、京都市域で「弱い」が36%と最も多くなっている。女性では丹後で「強い」が49%と最も多く、京都市域で「弱い」が43%と最も多くなっている(図 2.6.31)。

各地域のスコアの基となった各地域の子供を通じた地域との関わりの詳細は、図 2.6.32 のとおりである。

図 2.6.31 地域別の暮らしている地域や地域との関わりについて

(男性)



(女性)

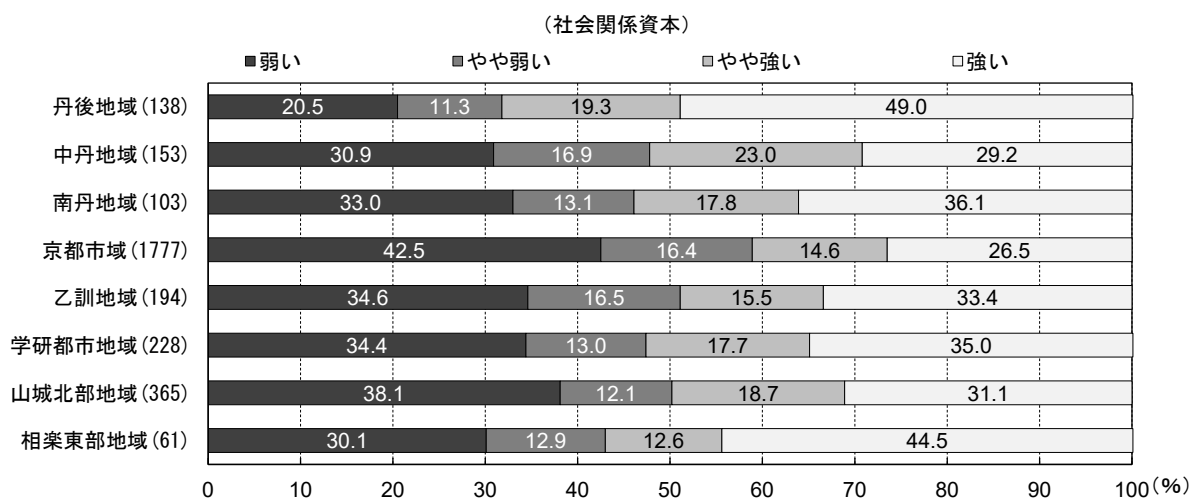
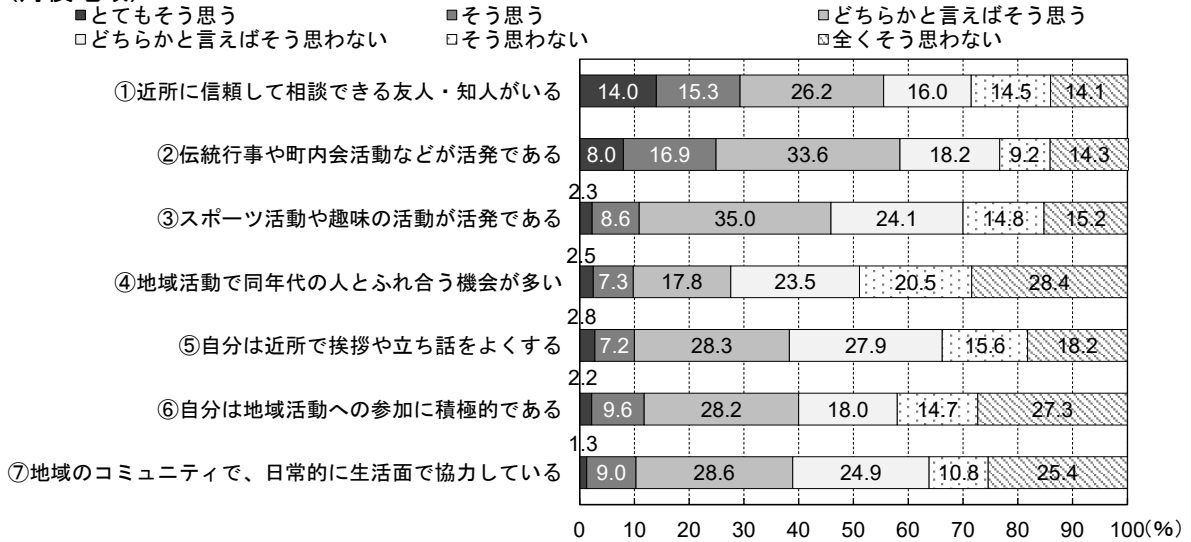


図 2.6.32 地域別の暮らしている地域や地域との関わりの詳細

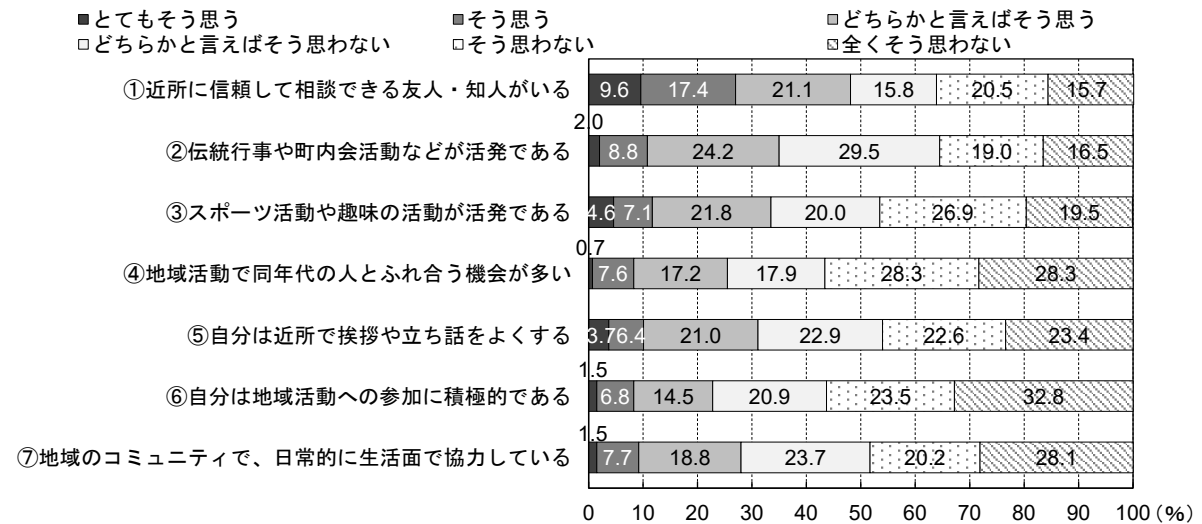
N=223

(丹後地域)



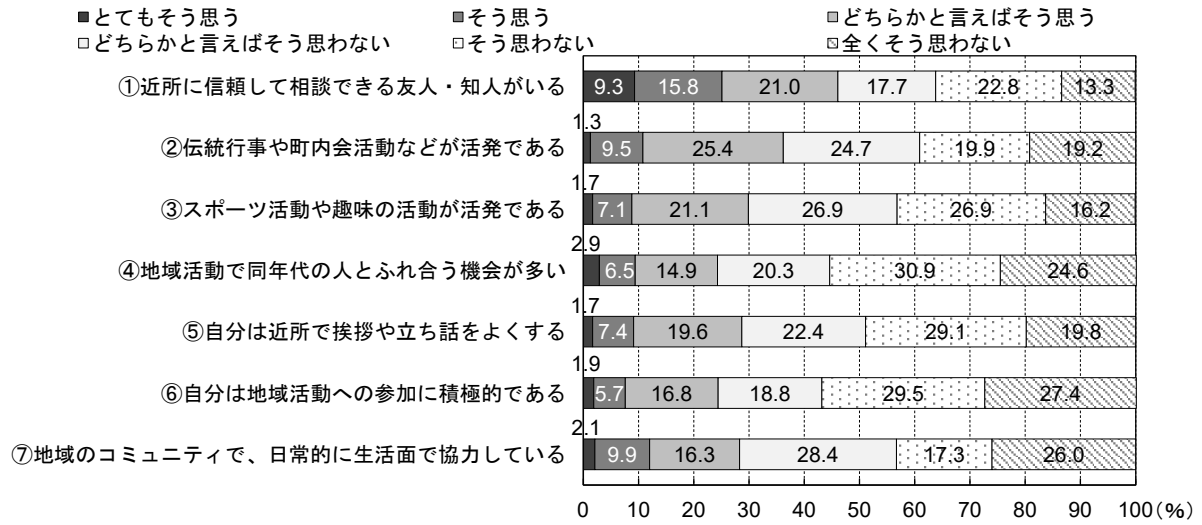
(中丹地域)

N=271



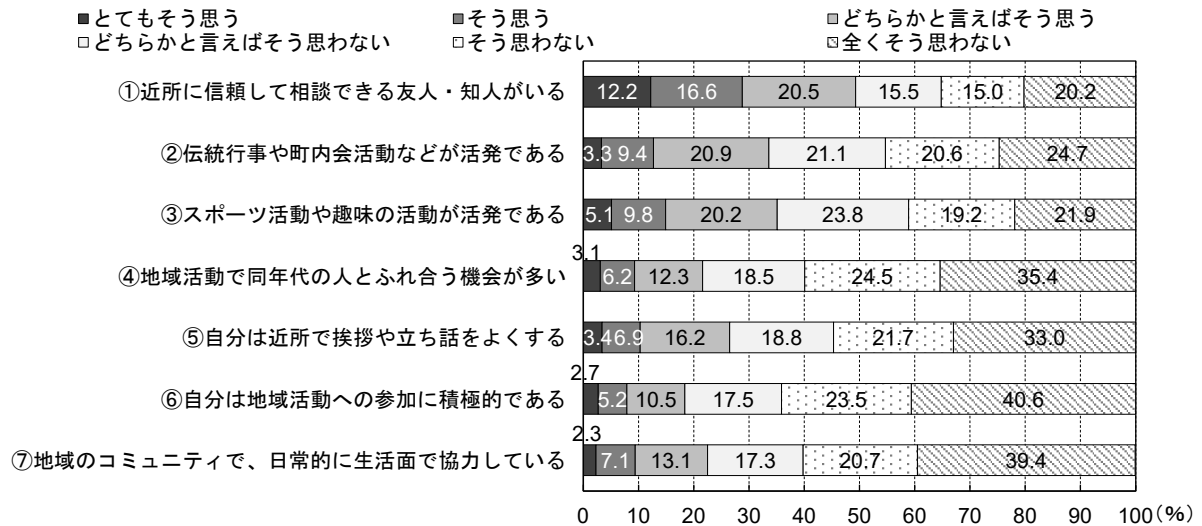
(南丹地域)

N=200



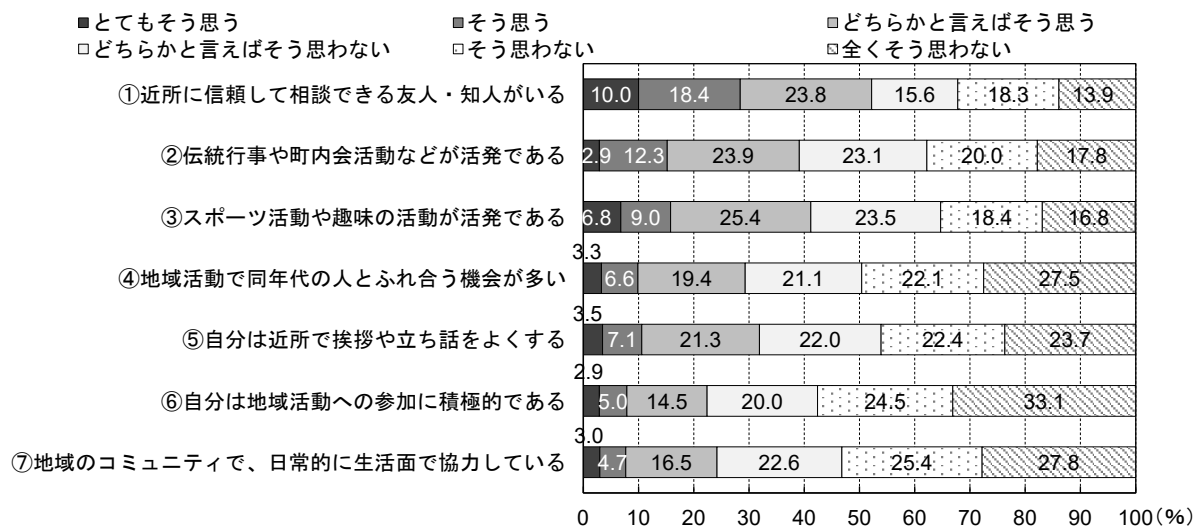
(京都市域)

N=2907



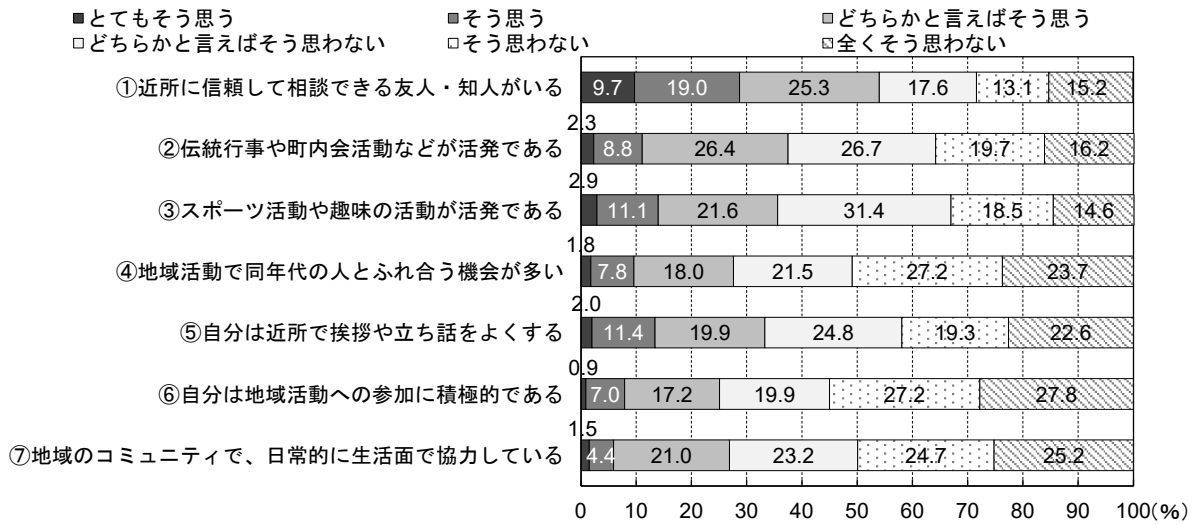
(乙訓地域)

N=358



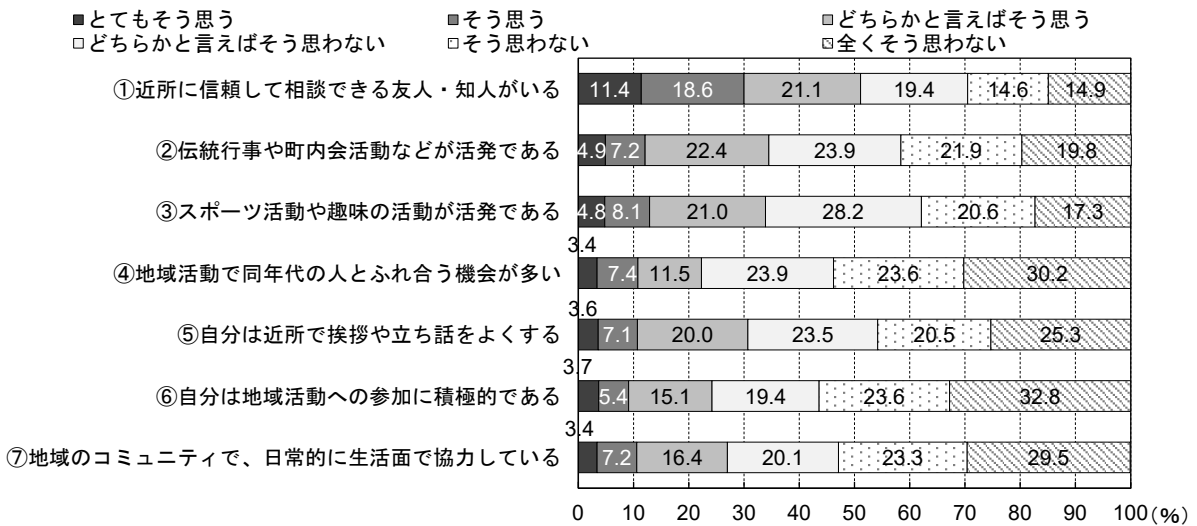
N=371

(学研都市地域)



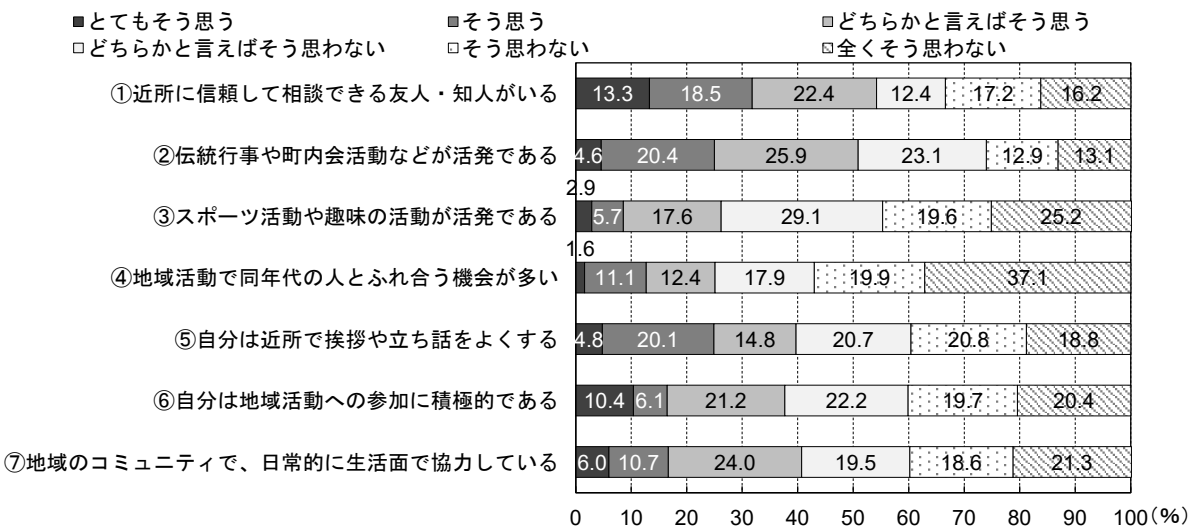
(山城北部地域)

N=651



(相楽東部地域)

N=115



④子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していること

(女性では多地域で「子育てから一時的に離れて気分転換できる機会」が不足と感じている)

地域別の子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していることについて把握した(表2.6.1)。男性は相楽東部を除く地域で「さりげない子どもの見守り」が最も多く、相楽東部は「近隣商店等、地域に密着した事業所からの支援」が多くなっている。また、丹後・中丹・京都市域では「病気や病院、保育サービス、保育所・幼稚園等、行政の支援策等に関する情報交換の相手」、南丹・学研都市・山城北部では「気軽な相談相手」が不足しているが多くなっている。女性では、多くの地域で「子育てから一時的に離れて気分転換できる機会」が多くなっている。また、中丹・京都市域・山城北部では「さりげない子どもの見守り」、丹後・乙訓・学研都市・相楽東部では「病気や病院、保育サービス、保育所・幼稚園等、行政の支援策等に関する情報交換の相手」が不足しているが多くなっている。

表 2.6.1 地域別の子育てのために必要な人々の関わり合いや地域における助け合いで地域に不足していること(複数)

(男性)

(%)

区分	N	さりげない子どもの見守り	病気や病院、保育サービス、保育所・幼稚園等、行政の支援策等に関する情報交換の相手	周囲に気にかけてもらっているという安心感	気軽な相談相手	子育ての楽しさや悩みを分かち合う子育て仲間	子育てから一時的に離れて気分転換できる機会	近隣商店等、地域に密着した事業所からの支援	その他	特になし
全体	963	35.6	26.2	24.5	24.5	23.6	20.9	15.9	1.3	15.5
丹後	42	33.3	28.7	13.6	28.6	24.0	28.2	22.8	5.3	13.1
中丹	61	34.6	37.5	24.9	30.7	19.8	26.8	18.0	0.0	7.2
南丹	52	44.1	21.6	12.7	21.8	16.0	17.1	14.0	1.6	15.8
京都市域	462	35.6	27.0	25.8	21.4	25.3	19.8	14.5	1.7	16.6
乙訓	94	30.1	23.5	25.8	24.2	24.2	27.5	18.0	0.9	16.8
学研都市	81	35.9	20.0	26.2	29.6	27.1	21.5	8.9	0.0	17.6
山城北部	152	36.8	23.8	24.7	28.8	20.1	16.8	20.7	0.5	14.7
相楽東部	19	20.1	23.6	6.5	6.5	31.2	35.8	55.2	4.5	17.5

(女性)

(%)

区分	N	子育てから一時的に離れて気分転換できる機会	さりげない子どもの見守り	病気や病院、保育サービス、保育所・幼稚園等、行政の支援策等に関する情報交換の相手	子育ての楽しさや悩みを分かち合う子育て仲間	周囲に気にかけてもらっているという安心感	気軽な相談相手	近隣商店等、地域に密着した事業所からの支援	その他	特になし
全体	1455	33.0	32.5	28.1	25.5	22.8	22.2	19.1	1.3	14.1
丹後	89	34.7	28.4	36.3	20.6	19.7	18.3	20.5	2.2	14.0
中丹	95	35.0	31.9	30.9	23.0	22.2	23.4	21.8	0.0	13.5
南丹	54	31.8	29.2	31.4	20.8	15.0	35.1	17.6	3.0	20.5
京都市域	715	31.4	33.8	25.5	26.3	22.8	22.7	16.7	1.5	14.5
乙訓	121	36.0	32.8	36.1	21.0	23.0	15.6	24.0	0.0	14.0
学研都市	144	32.8	26.2	33.7	33.8	20.8	16.1	21.1	0.6	14.9
山城北部	206	35.7	34.5	23.6	24.0	27.8	24.1	21.6	1.4	11.2
相楽東部	31	44.7	12.5	51.8	27.0	15.2	26.2	26.2	10.6	1.9

7. 男女の出会いの機会

(1) 交際経験

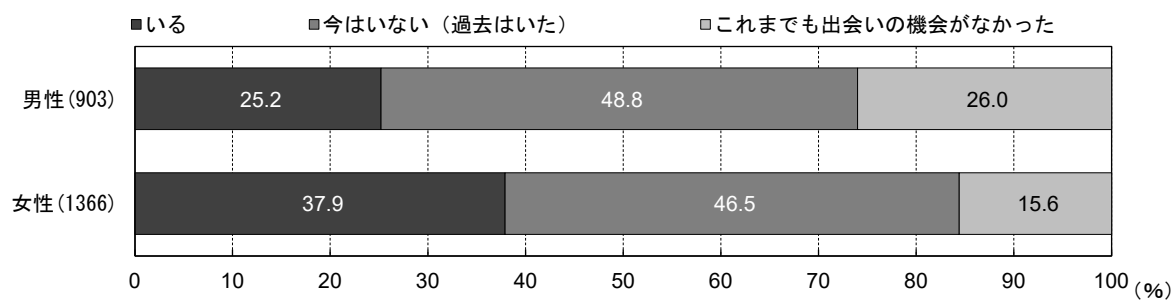
① 交際経験の有無

(交際相手が「いる」は2014年調査と大きく変わらない)

現在、交際相手が「いる」男性は25%、女性では38%である(男女で違いが表れる理由は主に未婚者数の男女の差によると考えられる)(図2.7.1)。2014年調査では、男性26%、女性34%であり、大きな変化はみられない。

現在「いる」と「今はいない(過去はいた)」を合計して、交際経験がある者を算出すると、男性は74%、女性84%になる。

図 2.7.1 交際経験の有無(未婚者、単数)



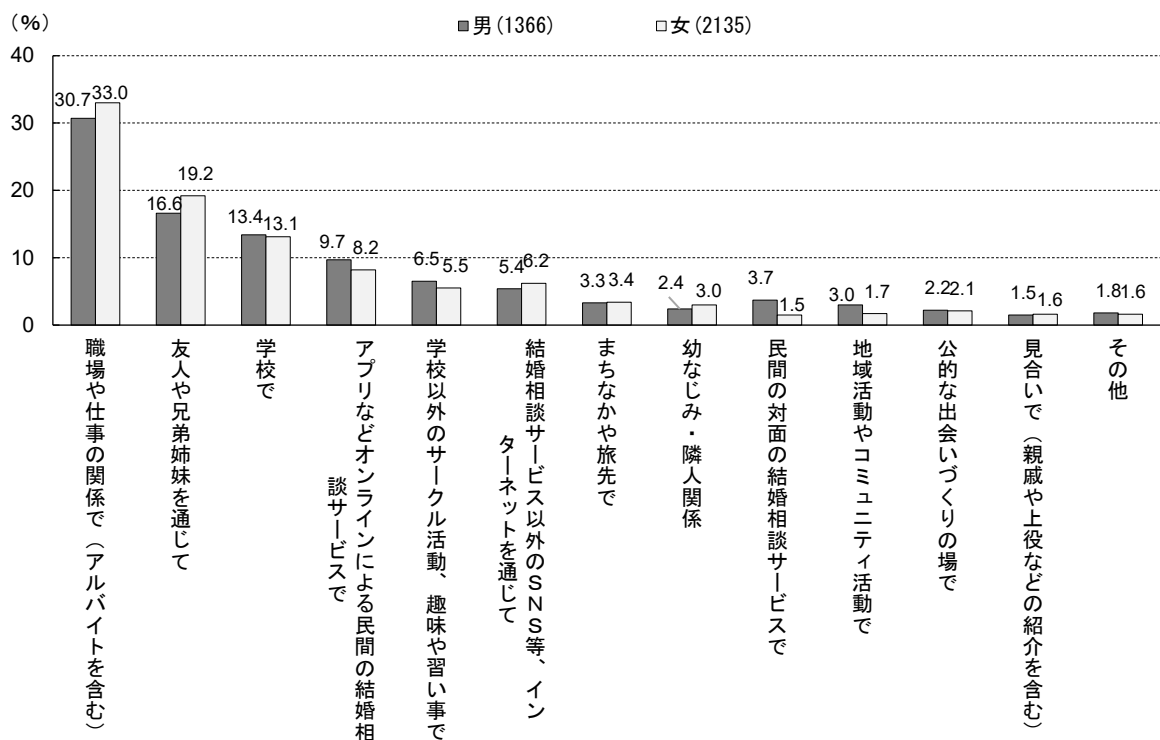
②出会った機会

(オンラインによる出会いが増えている)

出会いの機会の実態を把握するため、有配偶者及び交際相手がいる者の出会った機会を尋ねた(図 2.7.2)。その結果、「職縁(職場や仕事の関係で)」が約 30%、「地縁(友人や兄弟姉妹を通じて、幼なじみ・隣人関係、地域活動やコミュニティ活動)」が 20%強、「学縁等(学校で、学校以外のサークル活動・趣味や習い事で)」が 20%弱となった。これらは 2014 調査よりやや減少している。

一方、「アプリなどオンラインによる民間の結婚相談サービスで」と「結婚相談サービス以外の SNS 等、インターネットを通じて」が、新しい出会いの場として現れている。両者の合計は男性で 15%、女性では 14%を占める。

図 2.7.2 配偶者又は現在の交際相手との出会い(有配偶者及び現在交際相手がいる者、単数)



(2) 出会いの可能性

①周囲の出会いの可能性

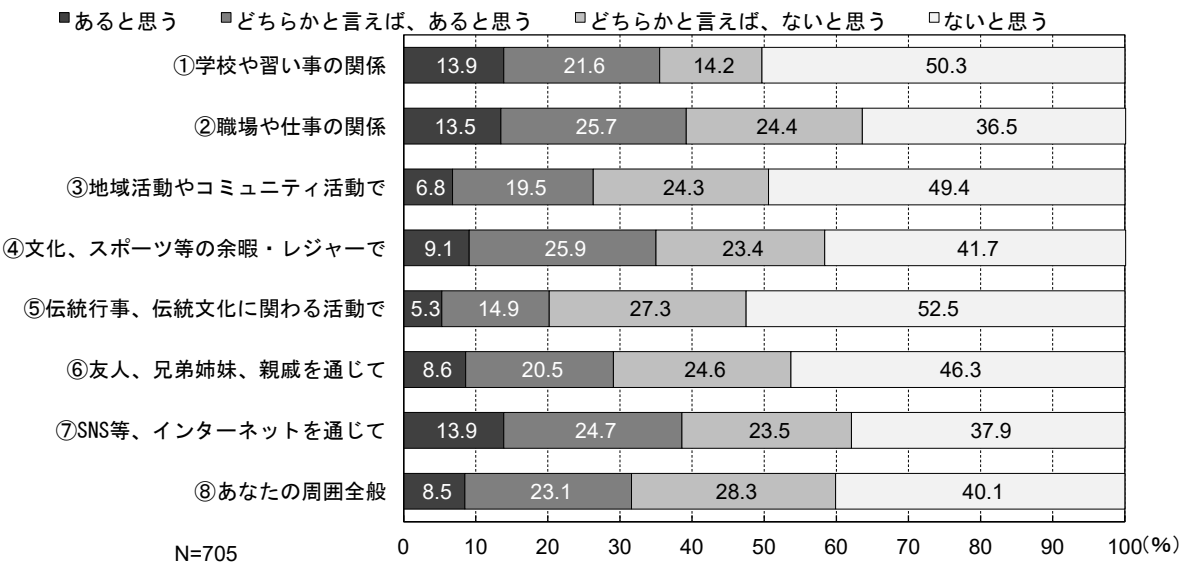
(交際経験のない者の約70%は出会いの機会がない)

現在、交際相手が「今はいない(過去はいない)」「これまでも出会いの機会がなかった」と回答した未婚者に、交際や結婚につながるような異性との出会いがあるかどうか把握した。

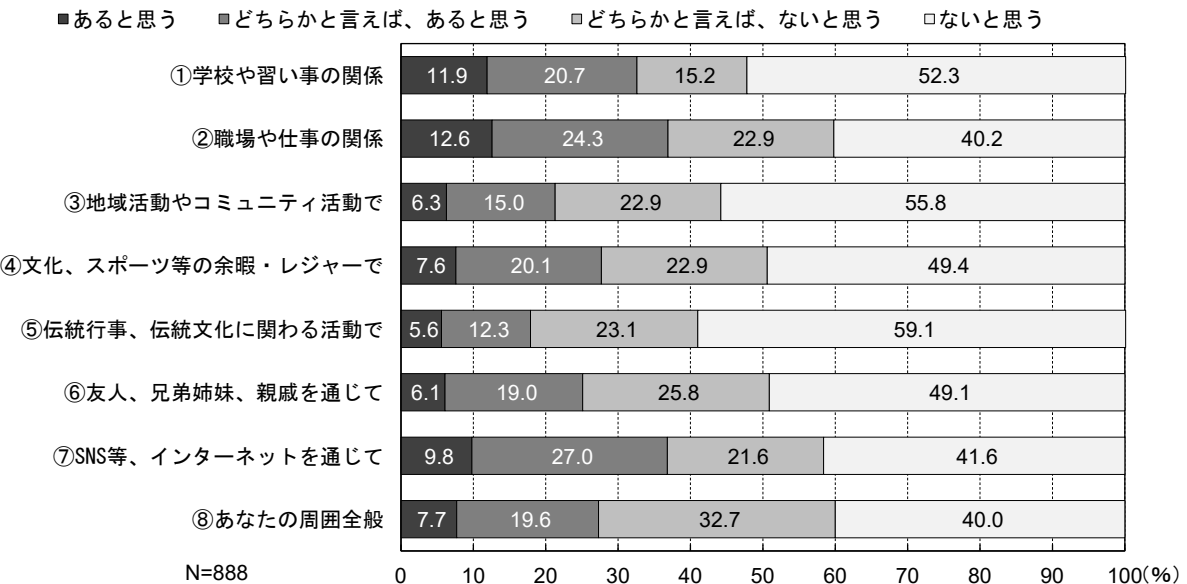
「あなたの周囲全般」として尋ねると、「あると思う」と「どちらかと言えばあると思う」の合計で、男性32%、女性27%であった。男女とも、残りの約70%は、「ないと思う」「どちらかと言えばないと思う」と回答している。

図 2.7.3 交際や結婚につながるような異性との出会い(単数)

(男性)



(女性)



男女の出会いを、「学校や習い事の関係」（学縁）、「職場や仕事の関係」（職縁）、「地域活動やコミュニティ活動で」（地縁）に着目して、「あると思う」と「どちらかと言えばあると思う」を集計すると、学縁は男性 36%、女性 33%、職縁は男性 39%、女性 37%、地縁は男性 26%、女性 21%であった。学縁、職縁に比べて、地縁は 10 ポイント程度低く、「伝統行事、伝統文化に関わる活動」や「友人、兄弟姉妹、親戚を通じて」の回答の少なさと関連していると考えられる。また、「文化、スポーツ等の余暇・レジャーで」は、男性 35%、女性 28%であり、学縁に近い回答となっており、注目される。

こうした中で、「SNS等、インターネットを通じて」が男性 39%、女性 37%に上り、「職縁」を同じ割合になっている。インターネットを通じた出会いは、有配偶者の出会いの状況を踏まえると今後も拡大が予想される。

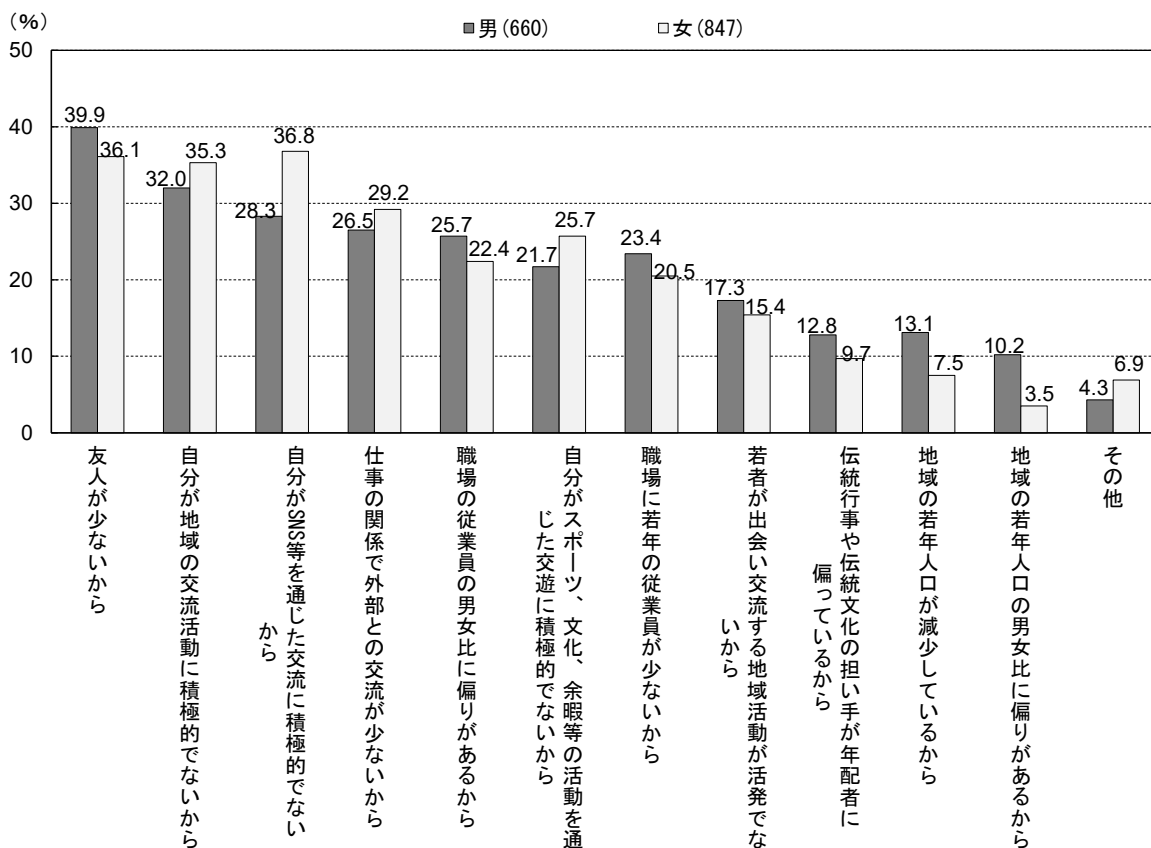
②出会いが「ない」と思う理由

（自分自身に関わる理由が多い）

図 2.7.3 で、交際や結婚につながるような異性との出会いが「ないと思う」「どちらかと言えば、ないと思う」とする者を対象に、その理由を尋ねた。

男性は「友人が少ないから」が 40%と最も多く、次いで「自分が地域の交流活動に積極的ではないから」が 32%と多くなっている。女性では「自分が SNS 等を通じた交流に積極的でないから」が 37%と最も多く、次いで「友人が少ないから」が 36%と多くなっている（図 2.7.4）。

図 2.7.4 交際や結婚につながるような異性との出会いが「ないと思う」理由（複数）



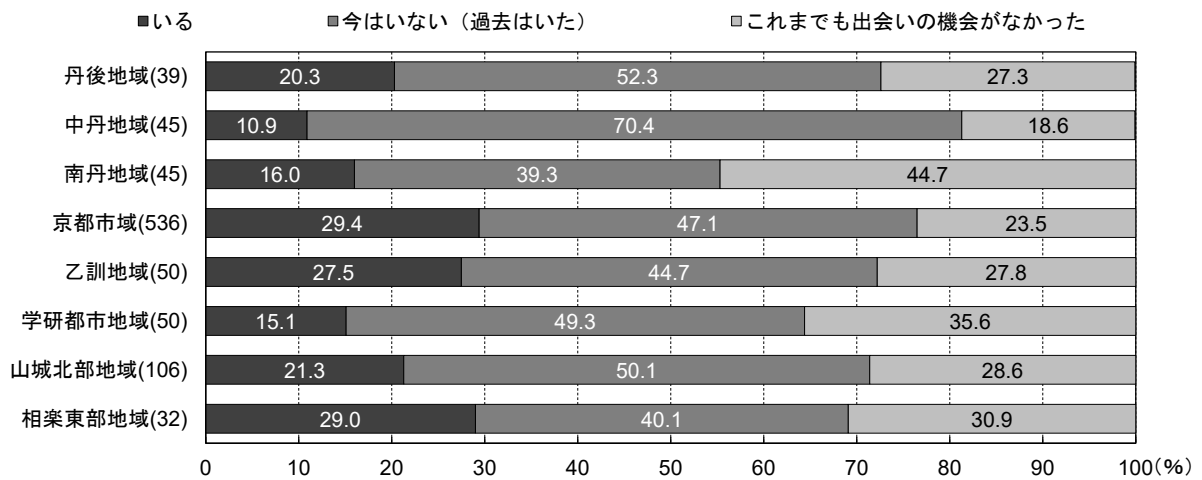
(3) 地域別の集計

(男性では南丹、女性では相楽東部で「出会いの機会がなかった」の回答が多い)

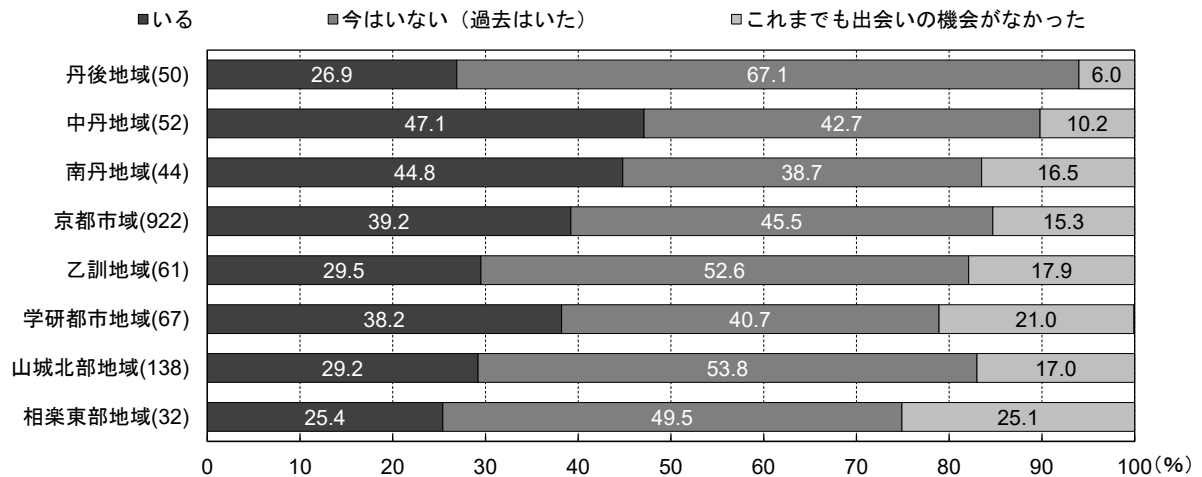
男性のうち、現在、交際相手が「いる」と回答した方は、京都市域で29%と最も多くなっている。一方、南丹で「これまでも出会いの機会がなかった」が最も多くなっている。女性では、中丹で「いる」と回答した方が47%と最も多く、相楽東部で「これまでも出会いの機会がなかった」と回答した方が25%と最も多くなっている(図2.7.5)。

図 2.7.5 地域別の交際経験の有無(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



(多くの地域で男女とも「職場や仕事の関係で（アルバイトを含む）」での出会いが多い)

配偶者または現在交際相手がいる者を対象に、地域別に出会いのきっかけを把握した（表 2.7.1）。

男性は、中丹以外の地域で「職場や仕事の関係で（アルバイトを含む）」での出会いが最も多くなっている。中丹は「友人や兄弟姉妹を通じて」の出会いが最も多く、「アプリなどオンラインによる民間の結婚相談サービスで」「まちなかや旅先で」の出会いが他の地域と比べ多くなっている。女性でも男性と同様に多くの地域で「職場や仕事の関係で（アルバイトを含む）」での出会いが最も多くなっている。また、南丹は「結婚相談サービス以外の SNS 等、インターネットを通じて」が 10%と他の地域と比べ多くなっている。

表 2.7.1 地域別の配偶者または現在の交際相手との出会い
(有配偶者及び現在交際相手がいる者、単数)

(男性)

(%)

区分	N	職場や仕事 の 関係 で (アルバイト を含む)	友人や兄弟 姉妹を通じ て	学校で	アプリなど オンライン による民間 の結婚相談 サービスで	学校以外の サークル活 動、趣味や 習い事で	結婚相談サ ービス以外 の SNS 等、 インターネッ トを通じた	民間の対面 の結婚相談 サービスで	まちなかや 旅先で	地域活動や コミュニテ ィ活動で	幼なじみ・ 隣人関係
全体	1366	30.7	16.6	13.4	9.7	6.5	5.4	3.7	3.3	3.0	2.4
丹後	51	32.4	21.3	12.9	3.0	6.5	7.7	3.0	0.0	5.6	2.1
中丹	81	13.6	20.6	14.8	12.4	7.1	0.9	5.0	7.1	2.9	3.5
南丹	60	29.0	18.7	7.0	10.8	7.5	8.5	8.4	0.0	5.6	0.0
京都市域	717	32.0	14.1	13.5	10.6	6.5	6.5	3.2	3.4	2.6	2.4
乙訓	129	32.4	19.5	12.0	10.7	5.0	3.2	4.2	3.4	2.1	3.9
学研都市	102	32.0	23.3	16.6	3.5	12.0	2.4	2.5	0.8	0.7	1.1
山城北部	197	32.1	18.1	13.1	8.4	3.7	4.4	4.1	3.8	4.6	2.7
相楽東部	29	30.2	14.6	14.2	4.9	0.0	10.6	3.9	2.7	7.4	7.4

区分	公的な出会 いづくりの 場で	見 合 い で (親戚や上 役などの紹 介を含む)	その他
全体	2.2	1.5	1.8
丹後	1.5	2.5	1.6
中丹	4.7	2.9	4.4
南丹	1.2	3.3	0.0
京都市域	2.1	1.2	1.9
乙訓	2.1	1.6	0.0
学研都市	1.1	1.5	2.4
山城北部	2.1	1.5	1.4
相楽東部	0.0	0.0	3.9

(女性)

(%)

区分	N	職場や仕事の関係で (アルバイトを含む)	友人や兄弟 姉妹を通じて	学校で	アプリなど オンライン による民間 の結婚相談 サービスで	結婚相談サ ービス以外 のSNS等、 インターネットを 通じて	学校以外の サークル活 動、趣味や 習い事で	まちなかや 旅先で	幼なじみ・ 隣人関係	公的な出会 いづくりの 場で	地域活動や コミュニテ ィ活動で
全体	2135	33.0	19.2	13.1	8.2	6.2	5.5	3.4	3.0	2.1	1.7
丹後	102	27.2	29.1	12.9	2.3	5.7	9.1	3.6	2.7	0.7	1.5
中丹	124	34.9	21.9	14.3	6.3	4.3	5.0	3.3	4.4	1.2	0.0
南丹	77	30.3	18.4	11.2	6.4	10.2	0.0	2.6	7.4	1.3	1.0
京都市域	1196	34.3	17.0	12.9	8.6	6.4	6.4	4.3	2.6	1.6	2.1
乙訓	151	31.5	18.9	15.0	4.7	7.3	4.2	4.5	3.1	2.8	2.2
学研都市	185	32.2	24.4	15.4	9.9	5.0	5.0	0.5	2.6	1.5	1.4
山城北部	258	30.0	22.1	11.5	9.4	5.5	4.0	1.1	2.7	5.0	1.2
相楽東部	42	28.7	16.9	10.2	12.2	4.6	2.5	4.9	3.3	6.8	1.3

区分	見合いで (親戚や上 役などの紹 介を含む)	民間の対面 の結婚相談 サービスで	その他
全体	1.6	1.5	1.6
丹後	3.8	0.8	0.7
中丹	2.1	1.4	0.8
南丹	2.8	3.8	4.6
京都市域	1.4	1.2	1.4
乙訓	2.0	3.2	0.5
学研都市	0.5	1.1	0.5
山城北部	2.2	2.0	3.3
相楽東部	0.0	0.0	8.6

(交際や結婚につながるような異性との出会い)

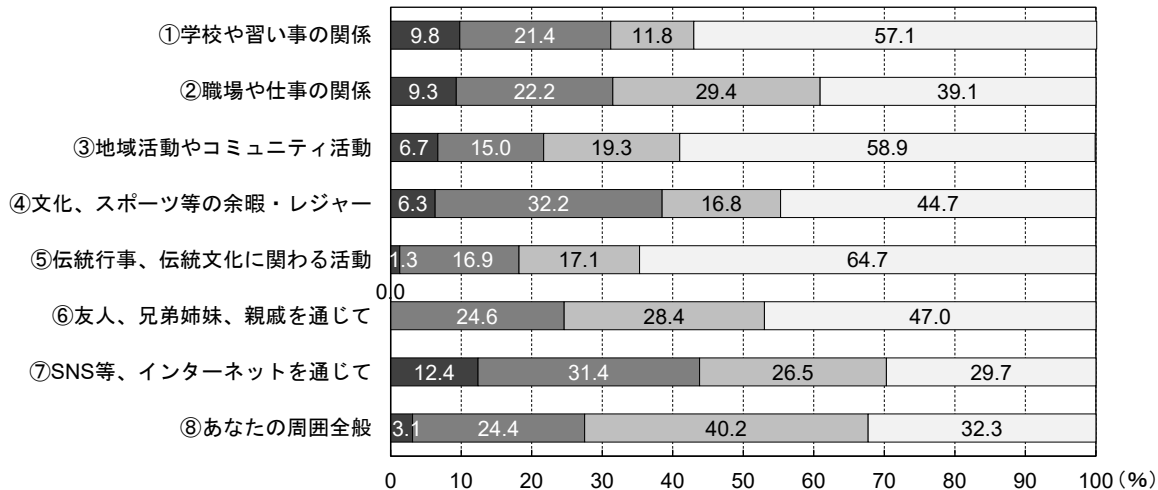
現在、交際相手が「今はいない(過去はいない)」「これまでも出会いの機会がなかった」と回答した未婚者に、交際や結婚につながるような異性との出会いがあるかどうか把握した。

図 2.7.6 地域別の交際経験の有無(未婚者、単数)

(丹後地域)

N=68

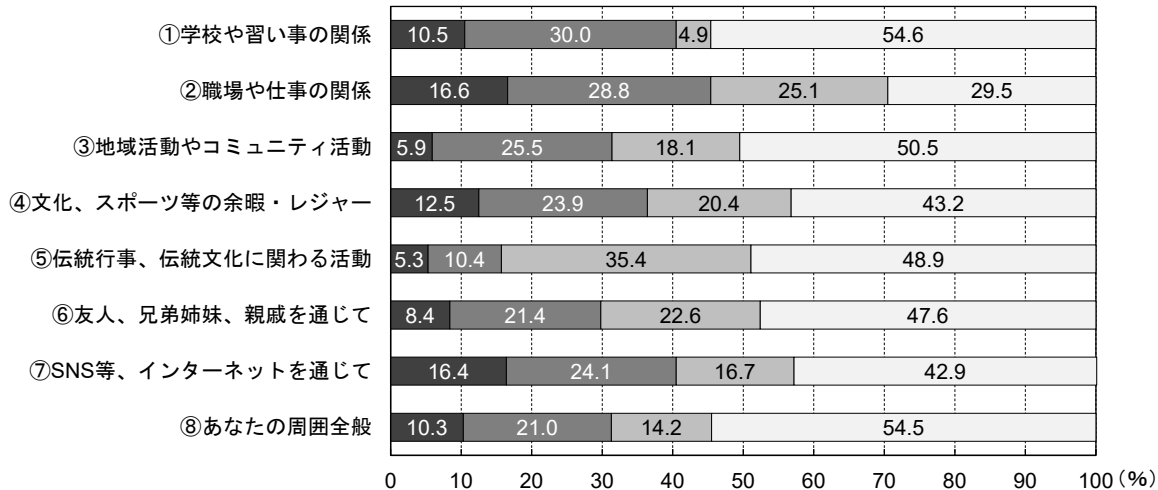
■あると思う ■どちらかと言えば、あると思う □どちらかと言えば、ないと思う □ないと思う



(中丹地域)

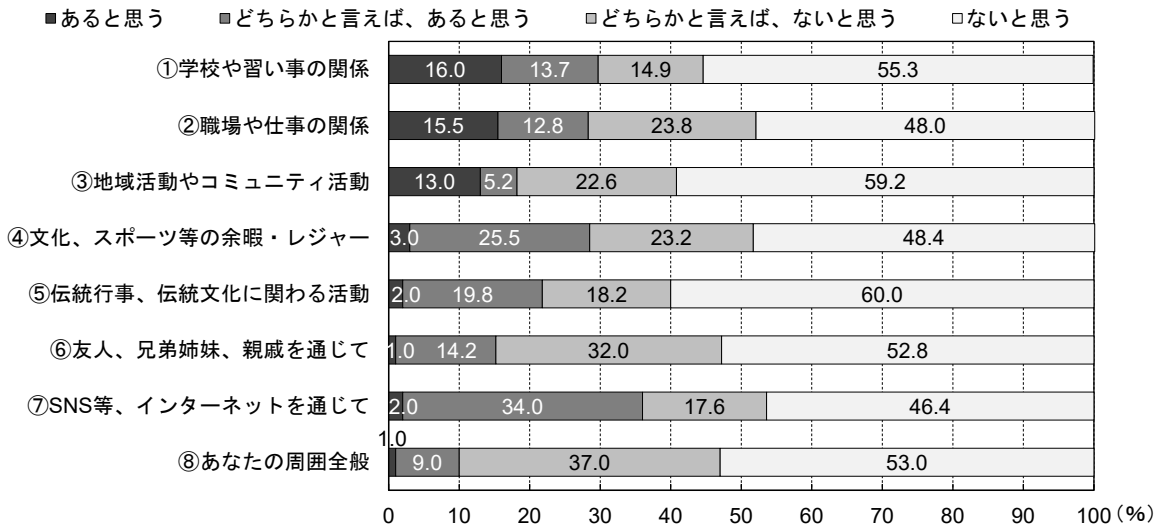
N=66

■あると思う ■どちらかと言えば、あると思う □どちらかと言えば、ないと思う □ないと思う



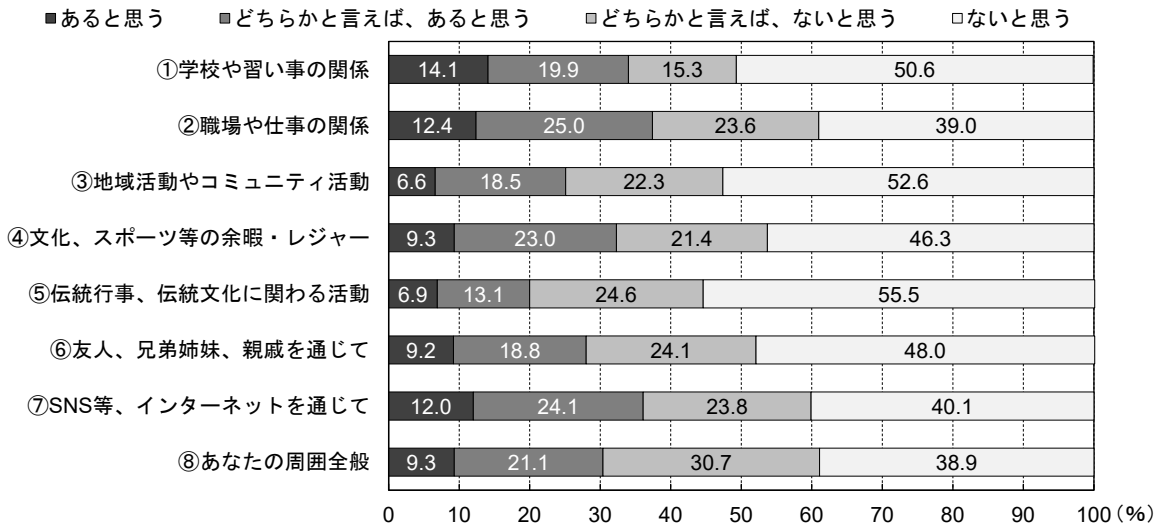
(南丹地域)

N=63



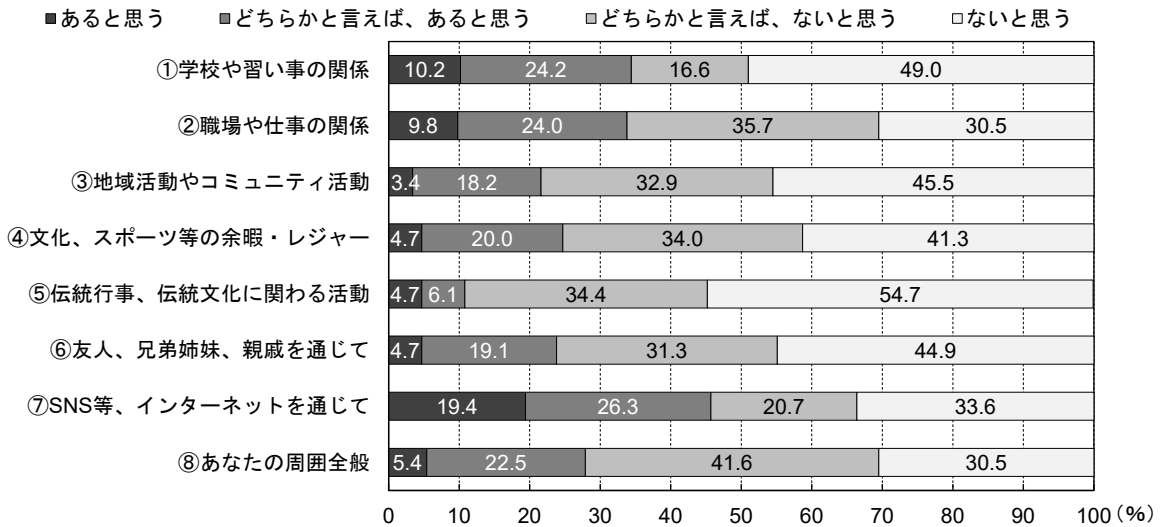
(京都市域)

N=994



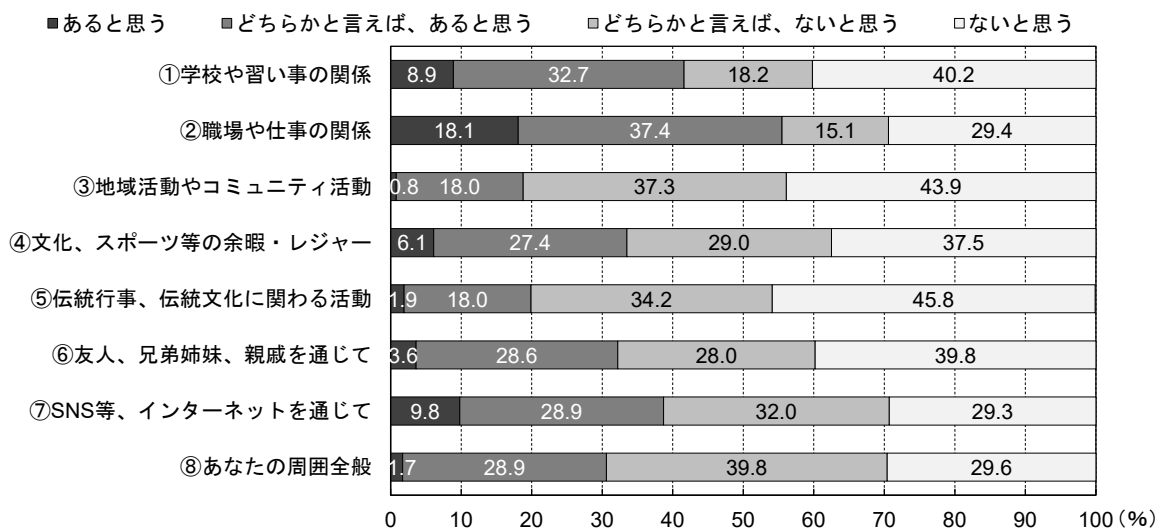
(乙訓地域)

N=78



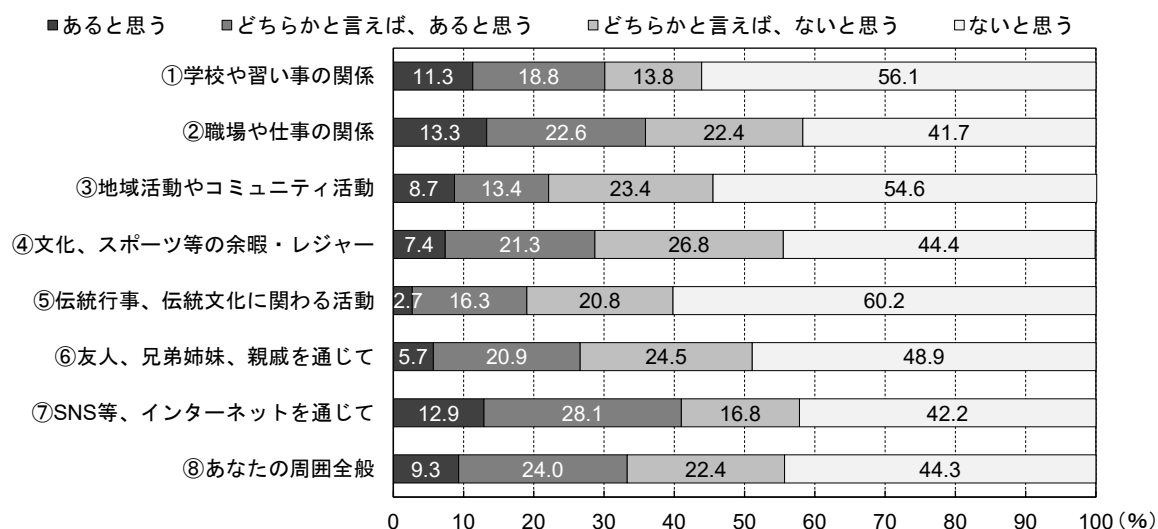
(学研都市地域)

N=84



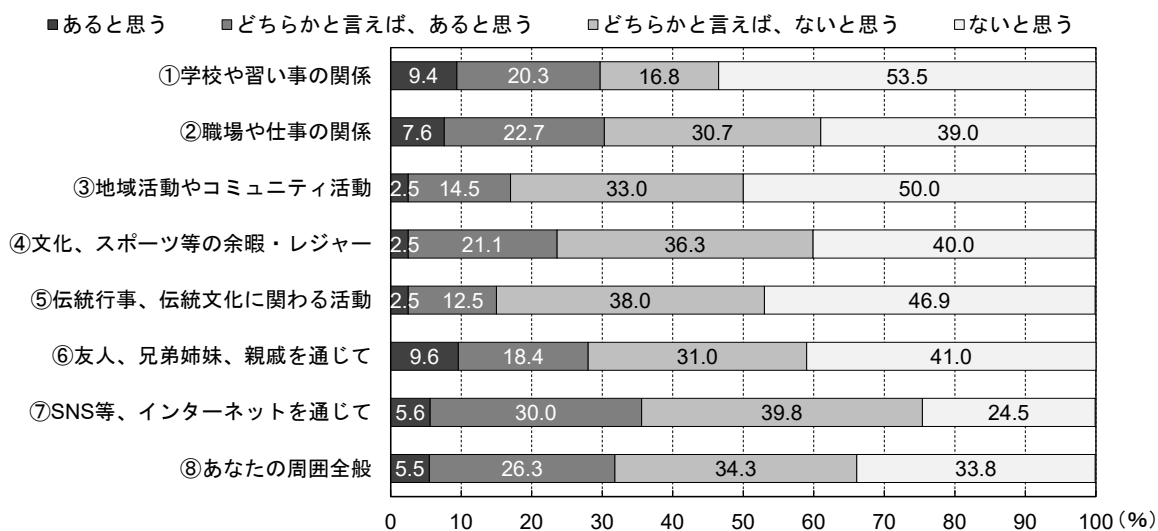
(山城北部地域)

N=196



(相楽東部地域)

N=46



(多くの地域で男女とも「友人が少ないから」の理由が多い)

図 2.7.6 で、交際や結婚につながるような異性との出会いが「ないと思う」「どちらかと言え
ば、ないと思う」とする者を対象に、その理由を把握した(表 2.7.2)。

男性では、多くの地域で「友人が少ないから」が最も多い理由となっている。一方で、南丹は
「仕事の関係で外部との交流が少ないから」「職場の従業員の男女比に偏りがあるから」が 50%
を上回るなど他の地域と比べ多くなっており、相楽東部は「地域の若年人口が減少しているから」
が 53%と他の地域と比べ多くなっている。女性では、多くの地域で「自分が SNS 等を通じた交流
に積極的でないから」「友人が少ないから」が多くなっている。また、丹後では「自分が地域の
交流活動に積極的でないから」が 51%と他の地域より多く、相楽東部では「若者が出会い交流す
る地域活動が活発でないから」「地域の若年人口が減少しているから」が 50%を上回るなど他の地
域と比べ多くなっている。

表 2.7.2 地域別の交際や結婚につながるような異性との出会いが「ないと思う」理由(複数)
(男性) (%)

区分	N	友人が少ないから	自分が地域の交流活動に積極的でないから	自分が SNS 等を通じた交流に積極的でないから	仕事の関係で外部との交流が少ないから	職場の従業員の男女比に偏りがあるから	職場に若年の従業員が少ないから	自分がスポーツ、文化、余暇等の活動を通じた交遊に積極的でないから	若者が出会い交流する地域活動が活発でないから	地域の若年人口が減少しているから	伝統行事や伝統文化の担い手が年配者に偏っているから
全体	660	39.9	32.0	28.3	26.5	25.7	23.4	21.7	17.3	13.1	12.8
丹後	29	42.5	31.7	29.2	30.7	18.8	32.7	18.1	27.6	32.4	11.8
中丹	36	47.0	34.2	16.1	28.7	42.3	38.3	26.4	23.1	11.0	17.3
南丹	36	45.6	51.1	44.3	52.6	54.0	46.7	25.6	25.7	43.4	26.1
京都市域	382	41.0	31.7	28.4	23.9	20.2	20.0	21.1	14.5	10.6	12.6
乙訓	33	32.6	36.9	32.5	31.9	30.4	16.0	25.6	14.8	19.0	11.8
学研都市	39	32.8	18.7	23.6	25.0	28.5	7.0	22.0	25.4	13.4	8.7
山城北部	83	33.2	29.1	30.5	21.6	23.9	27.2	18.5	15.5	3.7	6.9
相楽東部	22	41.8	40.7	17.9	37.5	21.7	36.6	7.9	28.8	52.7	26.7

区分	地域の若年人口の男女比に偏りがあるから	その他
全体	10.2	4.3
丹後	11.8	4.6
中丹	16.4	4.7
南丹	27.0	3.1
京都市域	10.0	5.2
乙訓	10.3	0.0
学研都市	4.3	6.9
山城北部	1.5	0.0
相楽東部	7.9	0.0

(女性)

(%)

区分	N	自分が SNS 等を通じた交流に積極的でないから	友人が少ないから	自分が地域の交流活動に積極的でないから	仕事の関係で外部との交流が少ないから	自分がホビー、文化、余暇等の活動を通じた交遊に積極的でないから	職場の従業員の男女比に偏りがあるから	職場に若年の従業員が少ないから	若者が出会い交流する地域活動が活発でないから	伝統行事や伝統文化の担い手が年配者に偏っているから	地域の若年人口が減少しているから
全体	847	36.8	36.1	35.3	29.2	25.7	22.4	20.5	15.4	9.7	7.5
丹後	34	23.1	34.7	50.7	27.3	19.7	28.9	24.9	30.1	12.8	41.1
中丹	25	40.7	45.3	40.5	19.5	22.5	17.8	25.9	12.9	10.2	5.9
南丹	25	20.1	26.3	27.3	31.8	11.5	24.0	9.6	8.5	11.0	11.0
京都市域	552	39.4	36.9	36.1	30.2	26.9	23.7	20.3	14.4	9.6	6.0
乙訓	43	38.5	36.2	31.7	30.3	16.2	14.0	13.5	12.4	10.9	0.0
学研都市	41	45.7	38.3	33.5	20.0	25.8	11.5	13.9	27.6	9.7	3.7
山城北部	104	25.7	32.5	32.2	29.5	29.9	23.7	27.4	16.4	8.6	13.0
相楽東部	23	39.3	31.7	47.4	39.8	21.3	24.1	47.3	51.7	24.7	56.7

区分	地域の若年人口の男女比に偏りがあるから	その他
全体	3.5	6.9
丹後	5.4	13.0
中丹	3.1	3.3
南丹	0.0	16.3
京都市域	3.7	5.8
乙訓	1.6	11.7
学研都市	5.6	2.7
山城北部	3.1	8.8
相楽東部	17.8	13.9

8. 女性のライフコースとキャリアアップ

(1) 女性の理想のライフコース

（「子どもを持ち、仕事も続ける」は男女ともほぼ半数である）

働く女性の仕事と子育ての両立の実態を把握するために、まず、女性の理想のライフコースを尋ねた。

「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が男性は 54%、女性は 48%と男女ともほぼ半数であった。「結婚し、子どもを持つが、結婚や出産を機会にいったん退職し、その後再び仕事を持つ」が男性は 25%、女性は 26%となっている。男女でいくらか差が見られるのは「結婚し、子どもを持ち、結婚や出産を機会に退職し、その後は仕事を持たない」であり、男性では 4%、女性では 7%であった（図 2.8.1）。

年齢階層別にみると女性において、緩やかではあるものの、年齢階層が低いほど「結婚し、子どもを持つが、結婚や出産を機会にいったん退職し、その後再び仕事を持つ」が減少し、「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が増加する傾向がみられる（図 2.8.2）。

図 2.8.1 女性の理想のライフコース（単数）

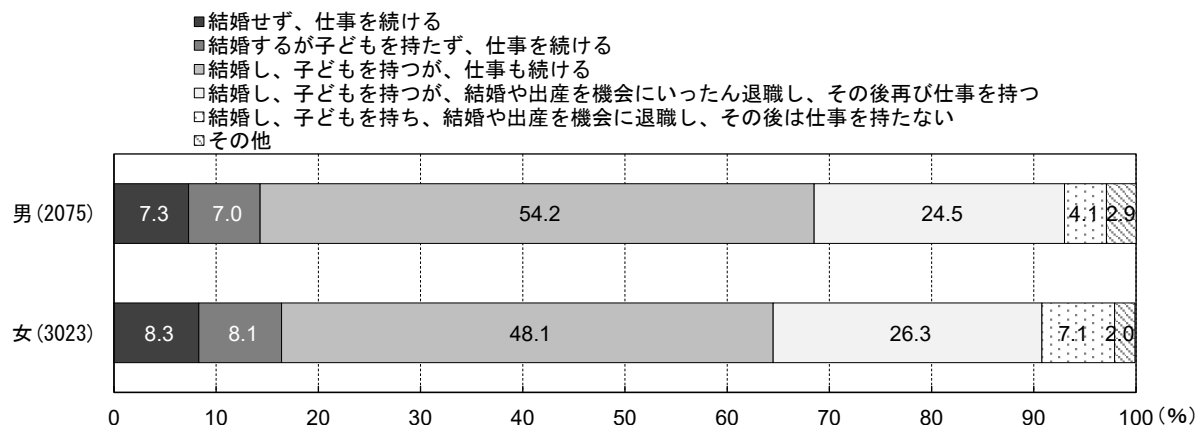
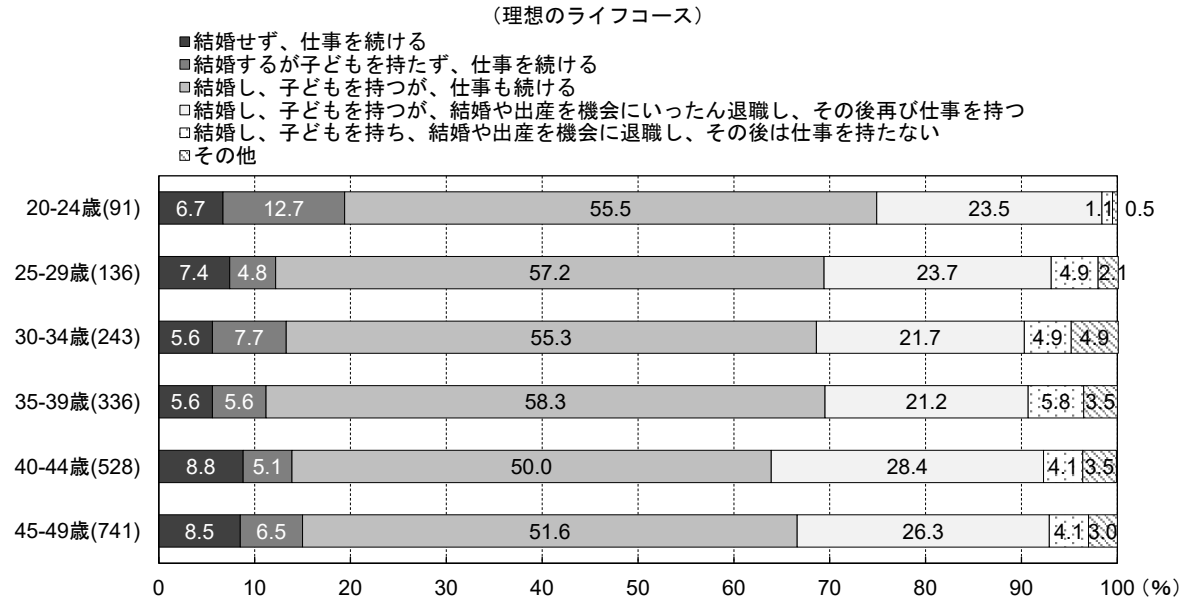
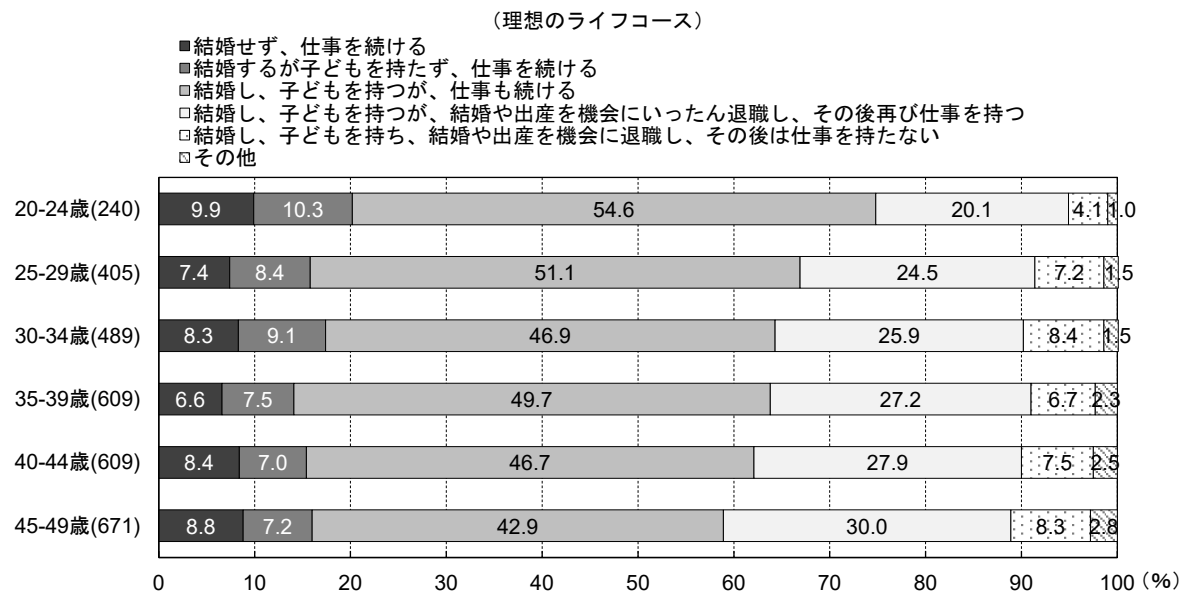


図 2.8.2 年齢階層別にみた理想のライフコース

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0526	0.0472
P値	0.2777	0.1140

(2) 職場における女性のキャリア形成と子育ての両立

①キャリア形成と子育ての両立の理想

(女性では「二人以上の子育てをしながらキャリアアップを目指す」は24%)

現在、就業している者に加え、就業経験のある者及び就業希望がある者を対象に、働く女性のキャリアアップと子育ての両立について理想を尋ねた(図2.8.3)。

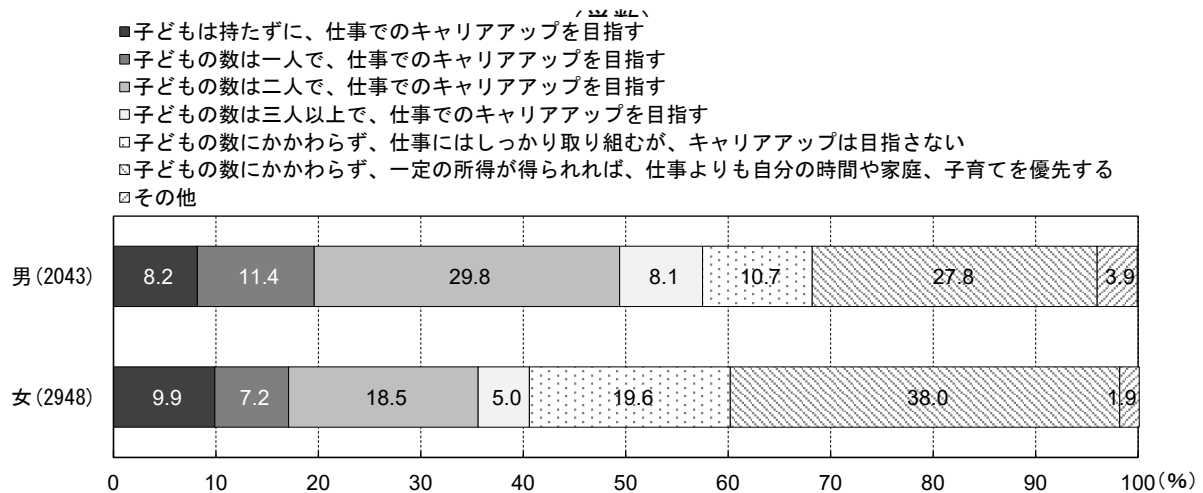
男性は「子どもの数は二人で、仕事でのキャリアアップを目指す」が30%であり、「子どもの数は三人以上で、仕事でのキャリアアップを目指す」を合計すると38%となる。これらの回答は、女性では24%であり、男女に意識差がみられる。

女性は、上の回答に代わって、「子どもの数にかかわらず、仕事にはしっかり取り組むが、キャリアアップは目指さない」が20%(男性11%)、さらに「子どもの数にかかわらず、一定の所得が得られれば、仕事よりも自分の時間や家庭、子育てを優先する」が38%を占める(男性28%)。これらの回答を合計すると58%(男性39%)と半数を大きく上回る。

本意・不本意を別にすれば、子育てとキャリアアップの両立できるかという問題の前に、キャリア志向が強い女性が多いわけではないとみることができる。

一方、「子どもを持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す」は女性で10%、「子どもの数は一人で、仕事でのキャリアアップを目指す」は7%であった。これらの子どもを持つことよりもキャリアアップを重視しているという見方もできそうであるが、合計で27%であった。

図2.8.3 女性のキャリア形成と子育ての両立の理想(就業者、就業経験者及び就業希望者)



②職場での理想のキャリアアップの実現可能性

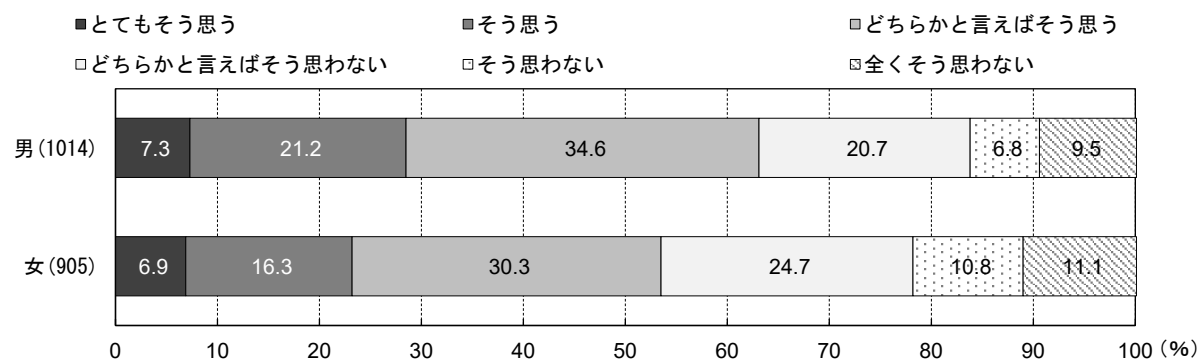
(女性の否定的回答は半数に近い)

図 2.8.3 で「キャリアアップを目指す」と回答した者に、現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性について尋ねた。

男性では「とてもそう思う」が7%、「そう思う」が21%であり、合計は29%であった(図 2.8.4)。一方、女性の「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は23%であり、女性の方がやや評価が低い。

「どちらかと言えばそう思う」を加えると、男性63%、女性54%であり、肯定的意見は否定的意見をいくらか上回っている。反対にみれば、女性の半数近くが、職場での理想のキャリア形成について否定的意見を持っている。

図 2.8.4 現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性(就業者、単数)



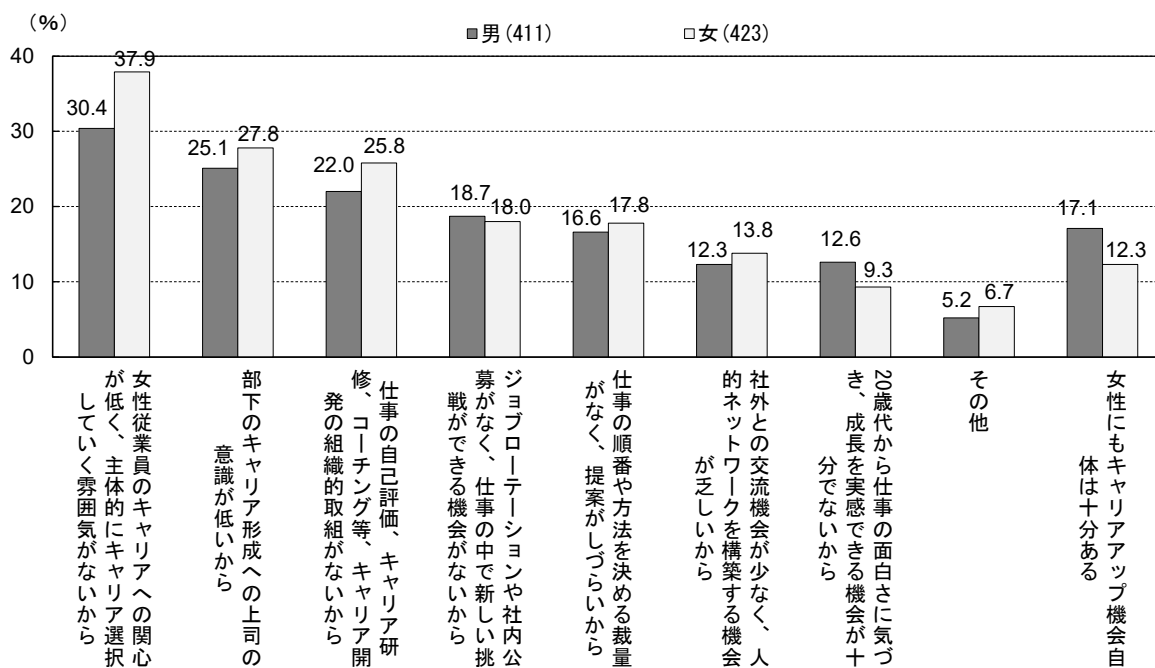
(女性のキャリアアップへの関心や主体性が一番の問題点)

図 2.8.4 で、否定的意見(「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」)であった者に、女性のキャリア開発の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由を尋ねた。

「女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから」が男性は30%、女性は37%と男女とも最も多くなっている(図 2.8.5)。この他では、「部下のキャリア形成への上司の意識が低いから」(男性 25%、女性 28%)、「仕事の自己評価、キャリア研修、コーチング等、キャリア開発の組織的取組がないから」(男性 22%、女性 26)などの回答が多い。

一方、男性は「女性にもキャリアアップ機会自体は十分にある」が17%であるのに対して、女性の回答は12%であるなど、全体的に男性と女性の捉え方にいくらか差異がみられる。

図 2.8.5 女性のキャリア開発の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由(就業者、複数)



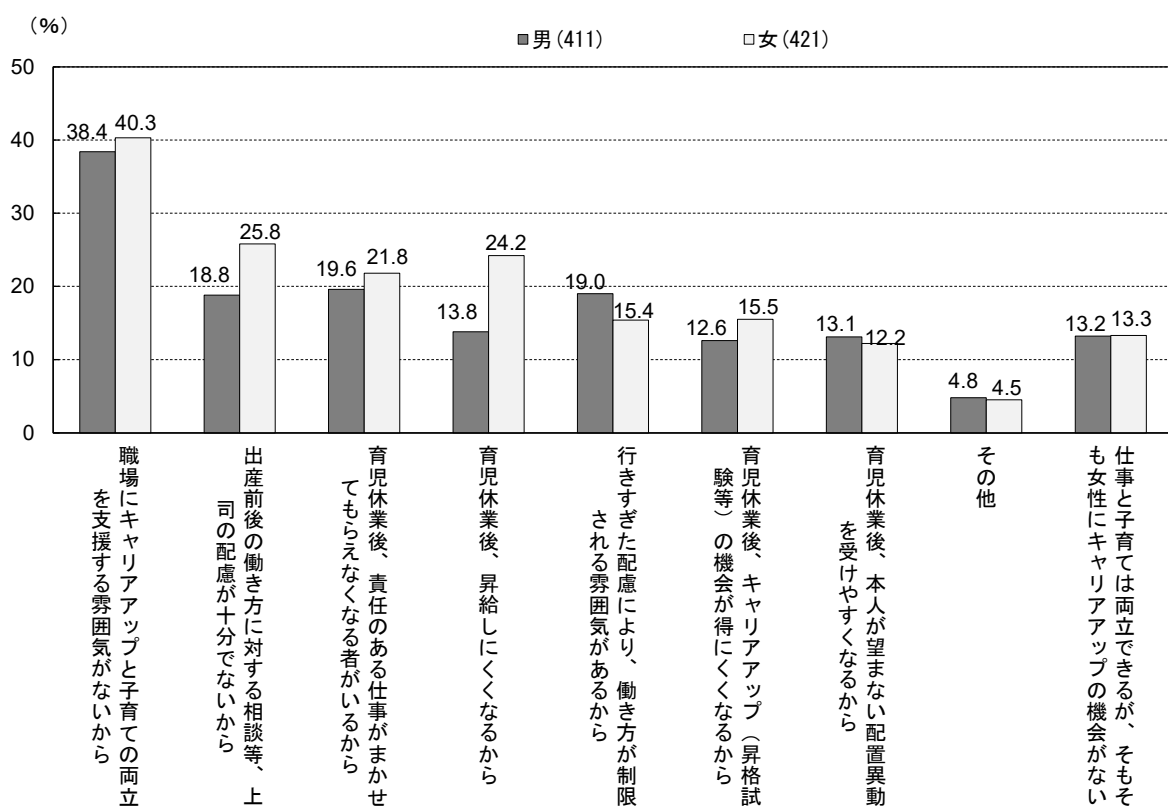
(職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がない)

図 2.8.4 で、否定的意見(「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」)であった者に、仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由を尋ねた。

「職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がないから」が、男性は38%、女性は40%に上り、際立って回答が多くなっている(図 2.8.6)。

この他では、「出産前後の働き方に対する相談等、上司の配慮が十分でないから」「育児休業後、昇給しにくくなるから」などが多いが、これらの二つは男性と女性の間を開きがみられる。

図 2.8.6 仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由(複数)



(女性がキャリアアップに専念せざるを得ない職場が存在すると考えられる)

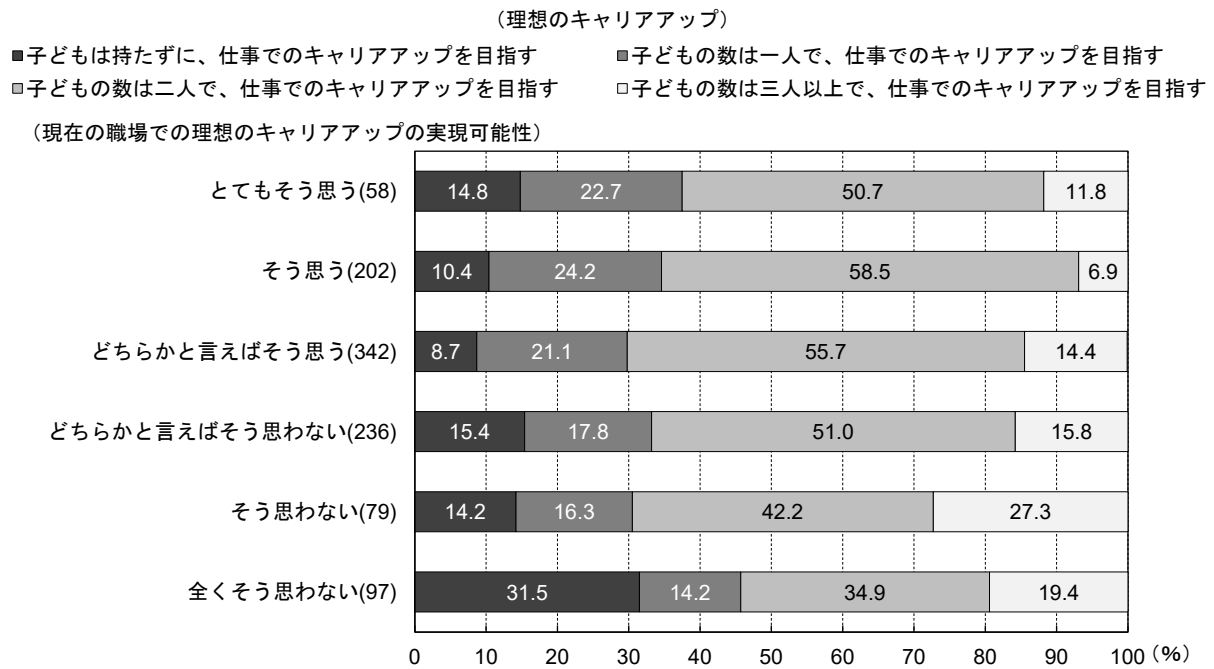
図 2.8.3 で女性がキャリアアップを目指すと回答した者を対象にして、職場でのキャリアアップの可能性と、女性のキャリア形成と子育ての両立との関係について調べた(図 2.8.7)。

女性の結果に注目すると、職場での理想のキャリアアップについて「全くそう思わない」では、「子どもを持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す」が46%と半数近くに上る。その他の回答では、「子どもの数は二人で、仕事でのキャリアアップを目指す」が40%から50%を占めている。

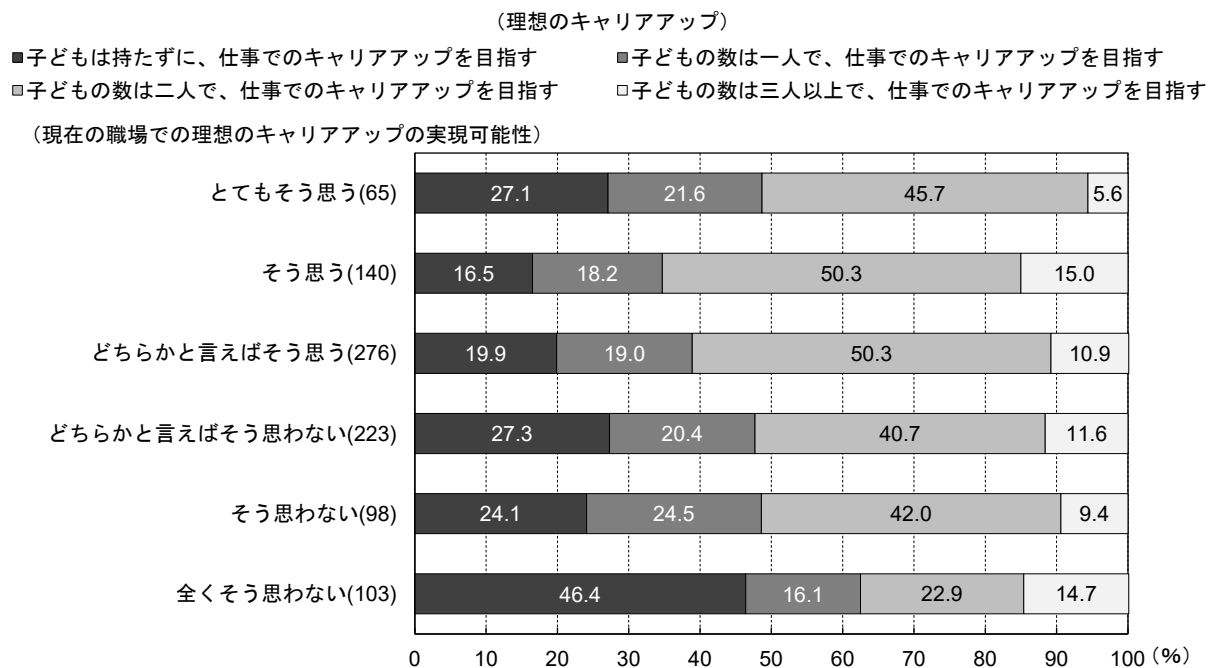
極端にキャリア形成と子育ての両立が難しい職場が一定程度存在し、仕事でのキャリアアップに専念せざるを得ない状況が窺える。

図 2.8.7 女性のキャリア形成と子育ての両立の理想
(職場での理想のキャリアアップの実現可能性別、キャリアアップを目指すと回答した者)

(男性)



(女性)



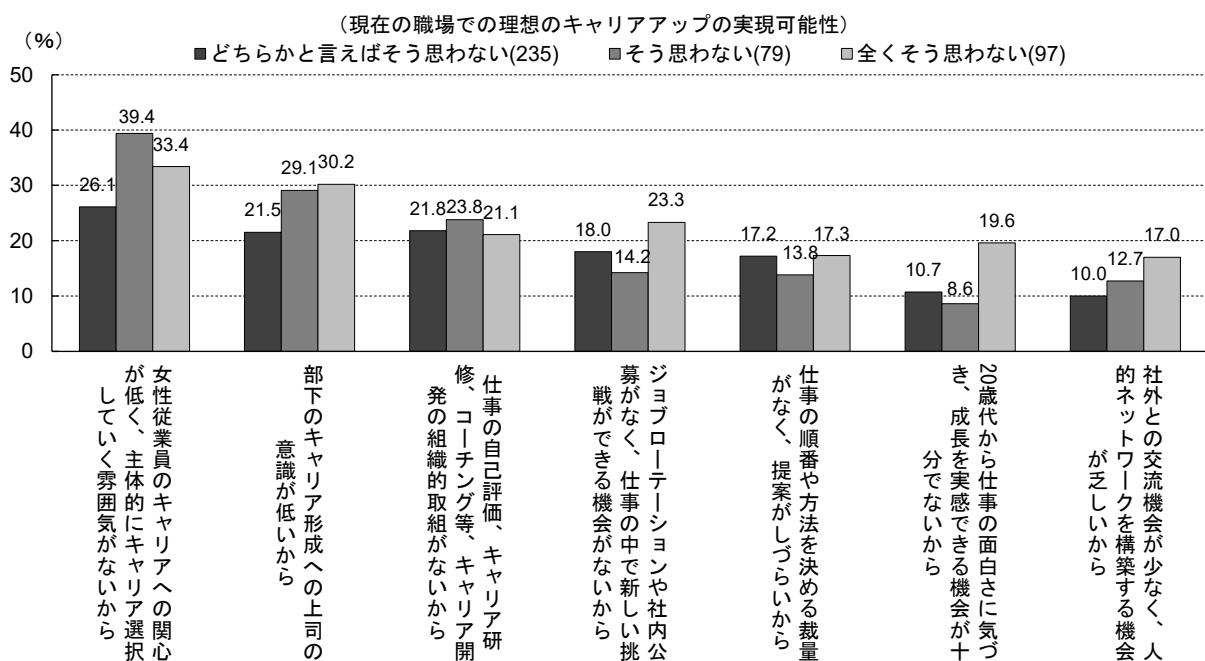
(女性のキャリアアップへの関心や主体性の問題は、職場の評価との結びつきが強い)

図 2.8.4 の職場での理想のキャリアアップの実現可能性の評価 (どちらかと言えばそう思わない、そう思わない、全くそう思わない) で分けて、女性のキャリア開発の面から職場でキャリアアップができないと思う理由を集計した (図 2.8.8)。

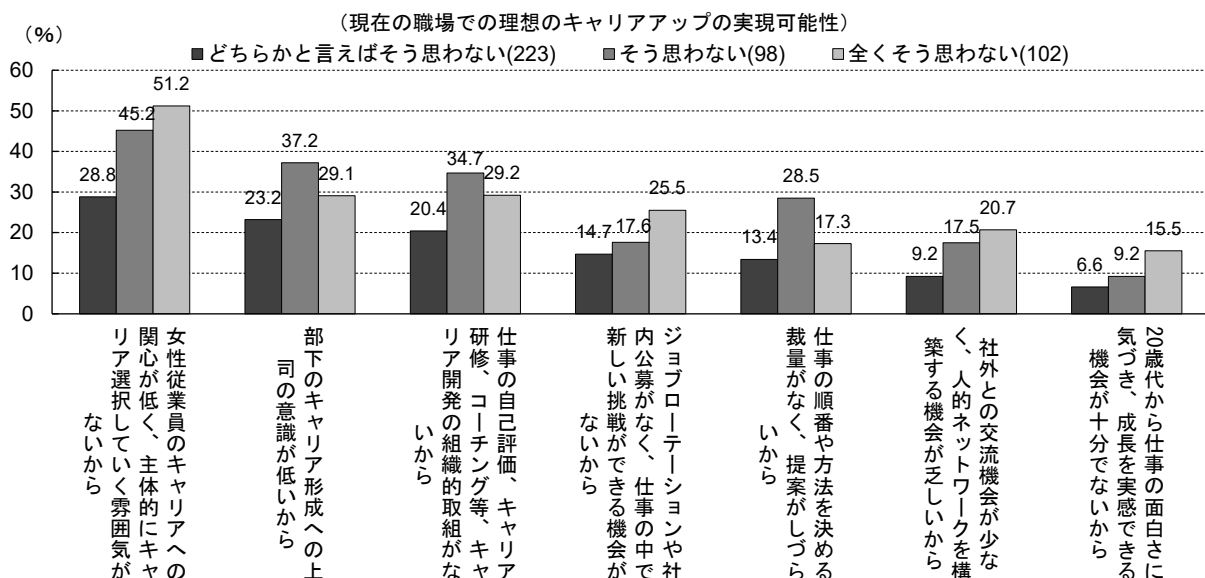
女性の回答に注目すると、最も回答が多かった「女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから」は、職場での実現可能性の評価が低いほど回答が増える傾向が明らかである。また、「社外との交流機会が少なく、人的ネットワークを構築する機会が乏しいから」も同様の傾向にある。

図 2.8.8 女性のキャリア開発の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由 (現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性別)

(男性)



(女性)



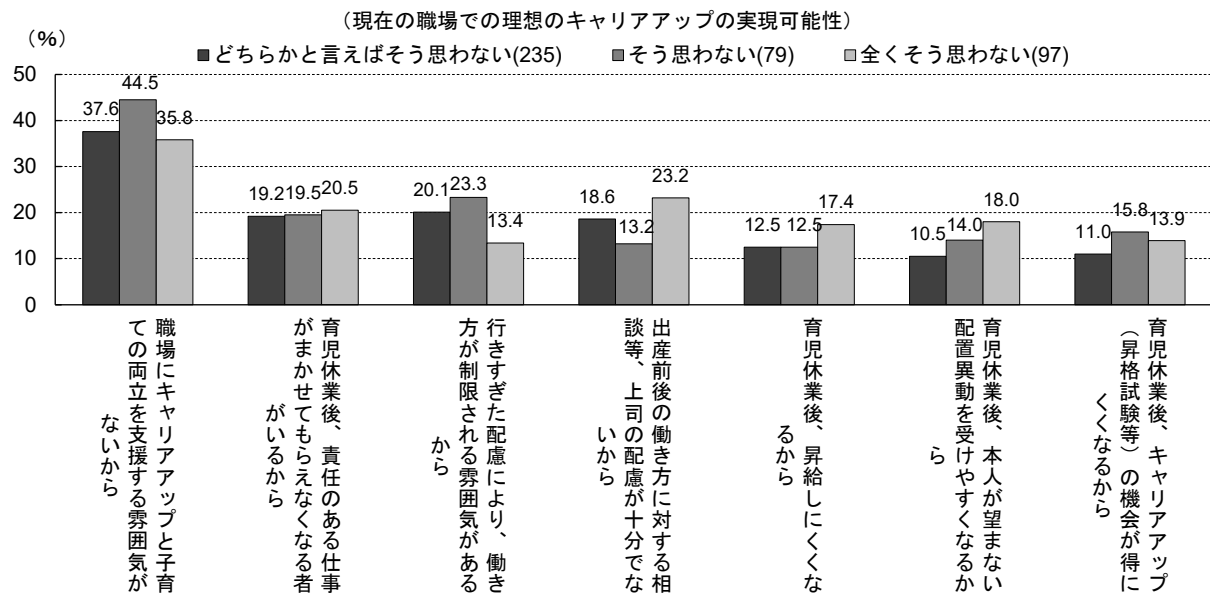
(女性では「本人が望まない配置移動」は職場の評価と関係が強い)

仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由についても、図 2.8.8 と同様の集計を行った (図 2.8.9)。

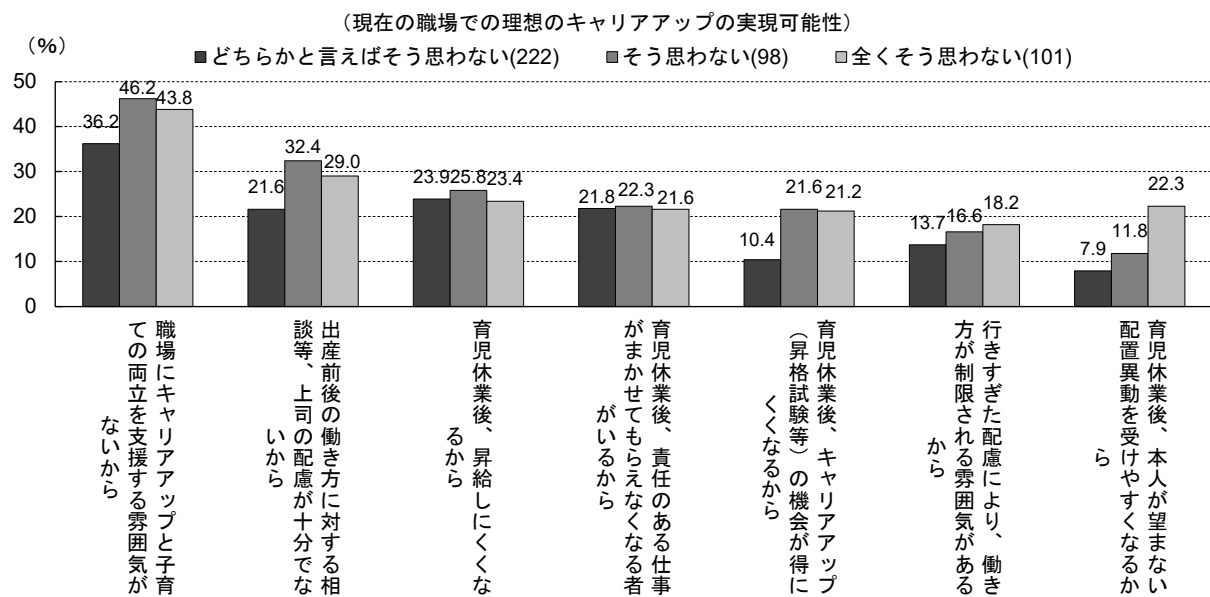
全般に両者に強い関係はみられないものの、「育児休業後、本人が望まない配置移動を受けやすくなるから」は、全体雄回答は少ないながら「全くそう思わない」であると女性では22%の回答に上るようになっている。

図 2.8.9 仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由 (現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性)

(男性)



(女性)



(3) キャリア形成と子育ての両立に対する夫婦の考え方

①希望する子ども数を持っていない場合のキャリア形成の考え方

（「希望子ども数を諦める」が20%を超える）

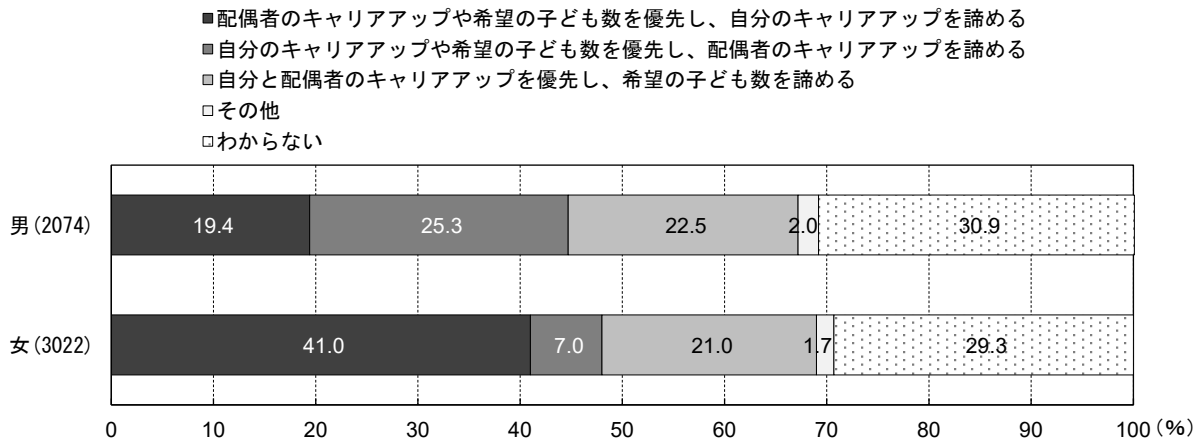
夫婦でキャリアアップを目指している中で、希望する子どもの数を持っていないとしたら、何を諦めざるを得ないか尋ねた（図2.8.10）。

「わからない」が多くなっているものの、具体的に回答があった者でみると、男性では、「自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める」が25%であった。また、男性では「希望の子ども数を諦める」とする者が23%に上る。

これに対して、女性では「配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める」が41%に上り、男性の回答と差異が表れている。また、「希望の子ども数を諦める」は21%であった。

キャリアアップを目指す夫婦が増加することを想定すると、キャリア形成が希望の子ども数の実現に対して影響を及ぼすと予想される結果となった。

図2.8.10 夫婦でキャリアアップを目指している中で、希望する子どもの数を持っていない場合の優先すること（単数）



（子ども数一人で両立を目指す者に「希望子ども数を諦める」が多い）

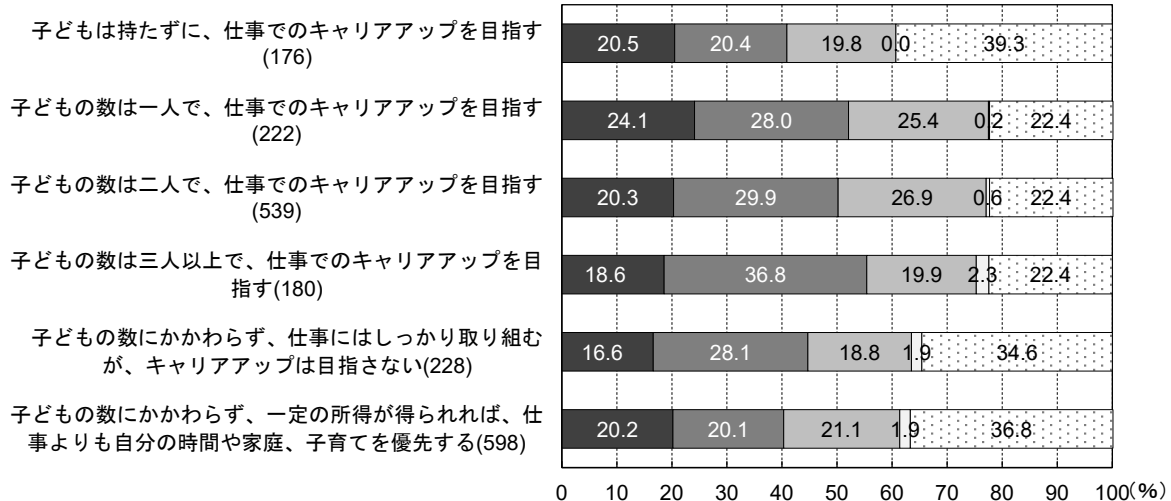
図2.8.3の女性のキャリア形成と子育ての両立の理想と、上の図2.8.10との関係を見た。

女性の回答に注目すると、「希望子ども数を諦める」は、「子どもの数は一人で、仕事でのキャリアアップを目指す」で36%に上る（図2.8.11）。「子ども数一人」は元々仕事を優先する意識が強い者と考えられるものの、両立が難しいと「子ども数一人」も諦めざるを得ないと考える者が多い状況がわかる。

図 2.8.11 理想のキャリアアップ別にみた希望する子どもの数を持たない場合の優先
(男性)

- 配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める
- 自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める
- 自分と配偶者のキャリアアップを優先し、希望の子ども数を諦める
- その他
- わからない

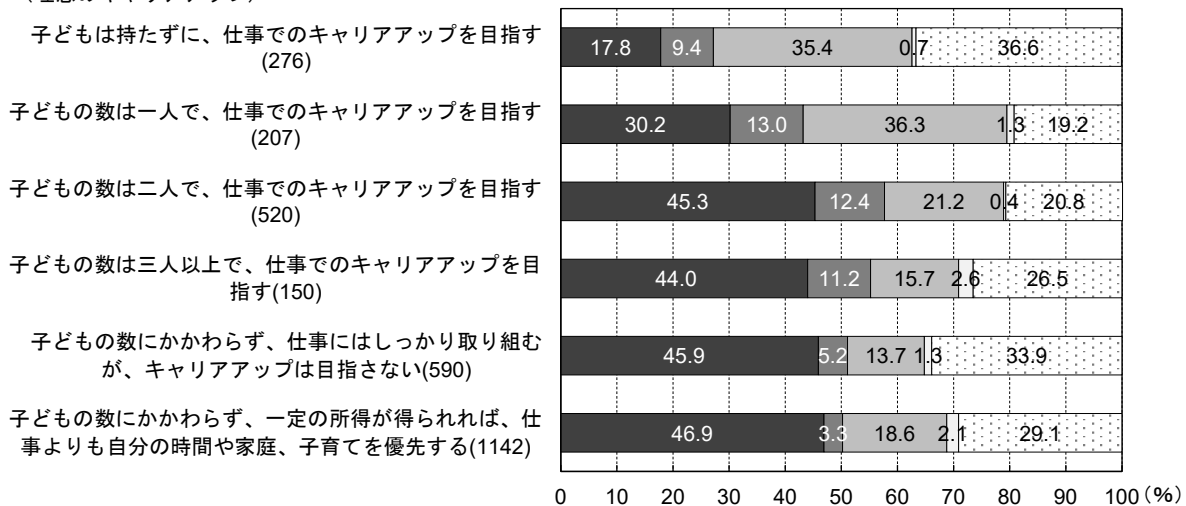
(理想のキャリアアップ)



(女性)

- 配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める
- 自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める
- 自分と配偶者のキャリアアップを優先し、希望の子ども数を諦める
- その他
- わからない

(理想のキャリアアップ)



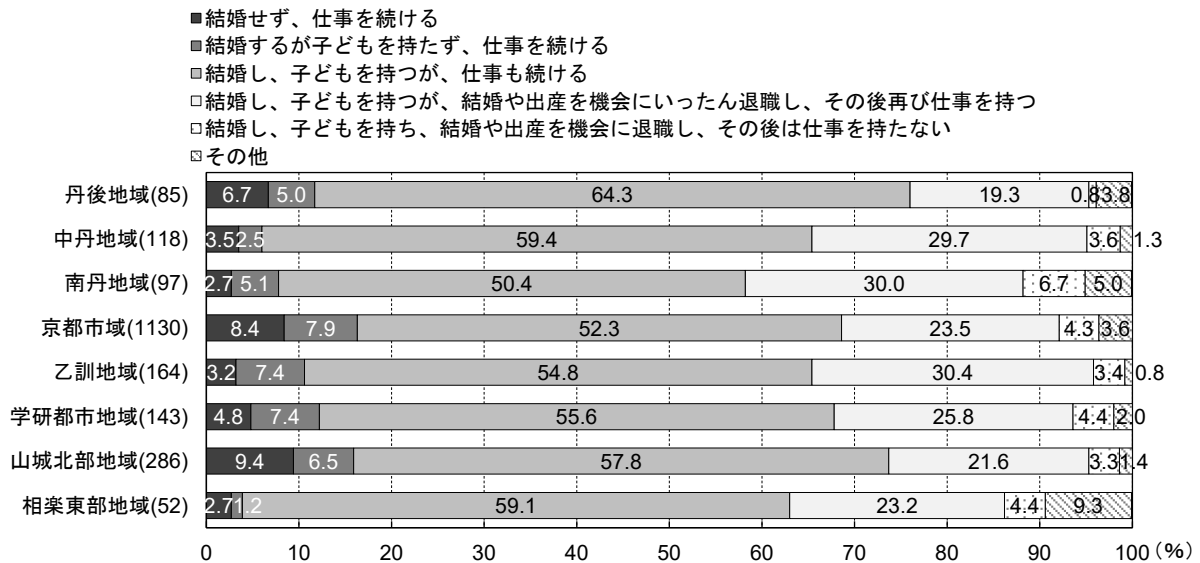
(4) 地域別の集計

(「子どもを持ち、仕事も続ける」は丹後や相楽東部に多い)

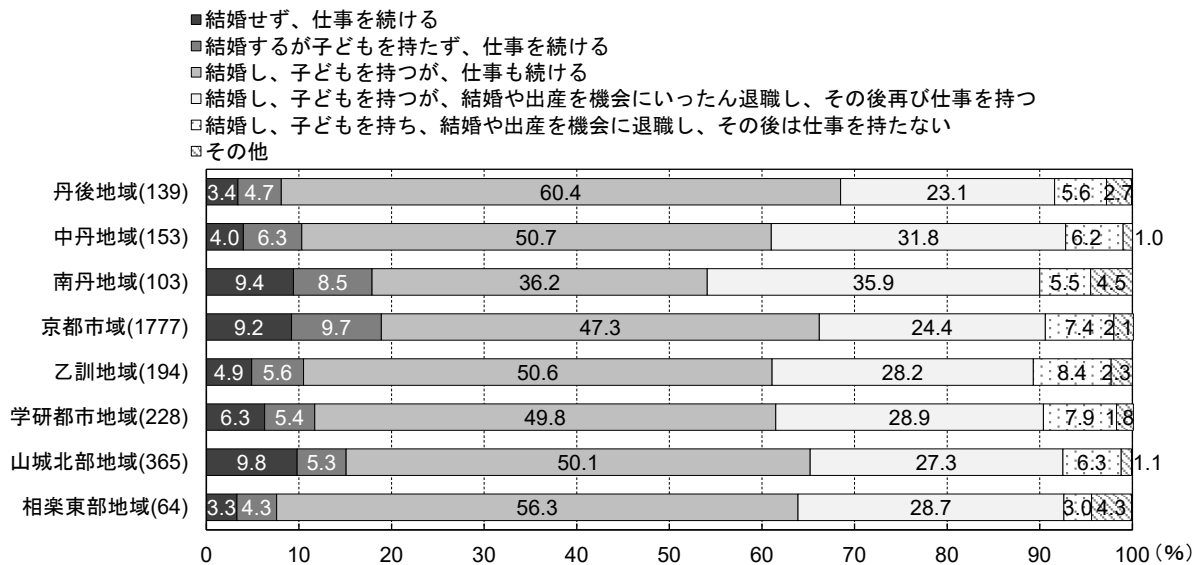
「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が多い地域は、男性では、丹後(64%)、相楽東部(59%)、山城北部(57%)等である(図2.8.12)。女性でも丹後(60%)や相楽東部(56%)は、「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が他地域に比較してやや多い。

図 2.8.12 地域別にみた女性の理想のライフコース(単数)

(男性)



(女性)



(京都市域で子供よりキャリアアップを優先する傾向がみられる)

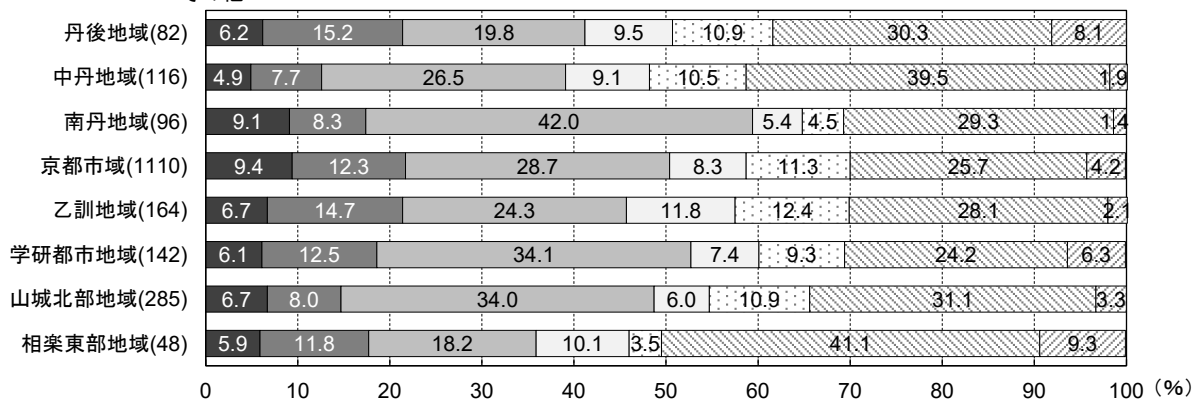
現在、就業している者に加え、就業経験のある者及び就業希望がある者を対象に、働く女性のキャリアアップと子育ての両立について理想を地域別に把握した(図2.8.13)。

男性では、京都市域で「子どもは持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す」が9%と他の地域より多くなっている。一方相楽東部で「子どもの数にかかわらず、一定の所得が得られれば、仕事よりも自分の時間や家庭、子育てを優先する」が41%と最も多くなっている。女性でも男性と同様に京都市域で「子どもは持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す」が11%と他の地域より多くなっており、更に男性よりも約2ポイント多くなっている。

図 2.8.13 地域別の女性のキャリア形成と子育ての両立の理想
(就業者、就業経験者及び就業希望者)

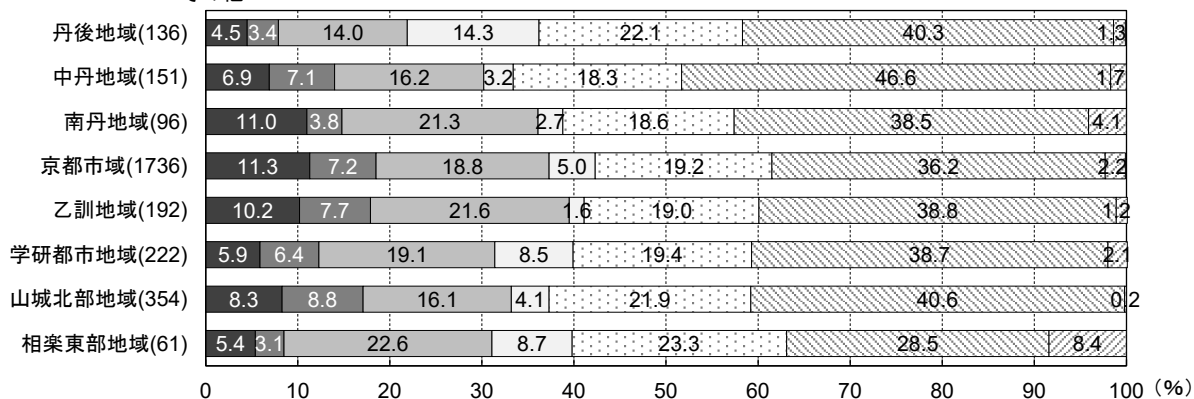
(男性)

- 子どもは持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は一人、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は二人、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は三人以上、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数にかかわらず、仕事にはしっかり取り組むが、キャリアアップは目指さない
- 子どもの数にかかわらず、一定の所得が得られれば、仕事よりも自分の時間や家庭、子育てを優先する
- その他



(女性)

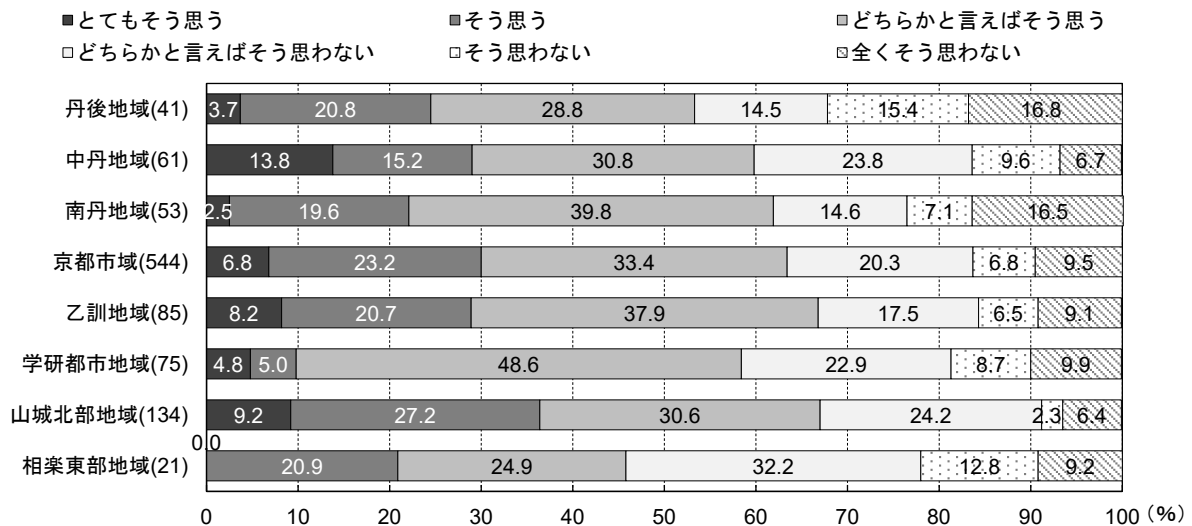
- 子どもは持たずに、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は一人、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は二人、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数は三人以上、仕事でのキャリアアップを目指す
- 子どもの数にかかわらず、仕事にはしっかり取り組むが、キャリアアップは目指さない
- 子どもの数にかかわらず、一定の所得が得られれば、仕事よりも自分の時間や家庭、子育てを優先する
- その他



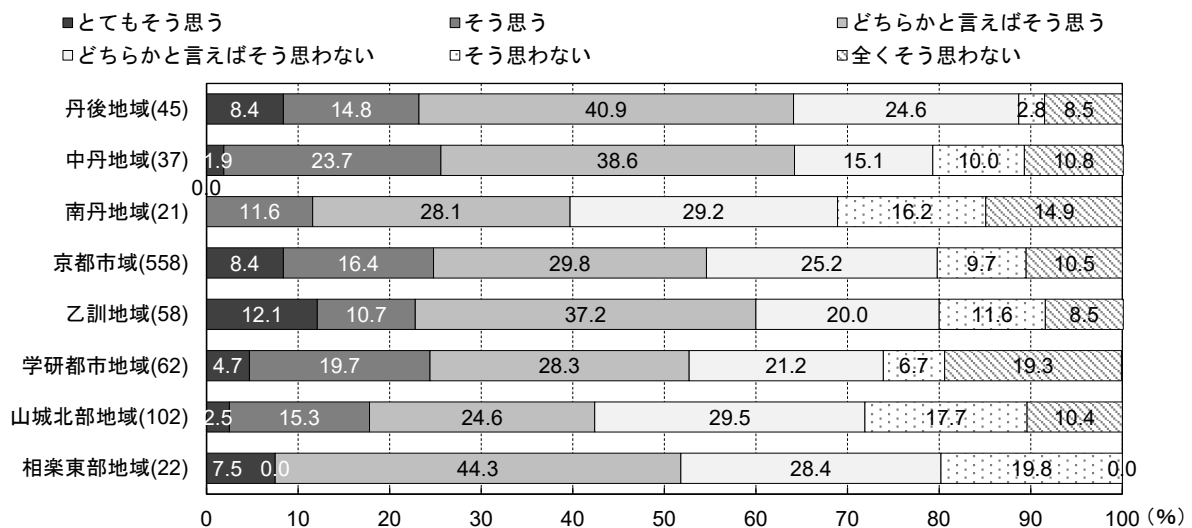
(男性では相楽東部、女性では南丹・山城北部でキャリアアップが難しくなっている)

図 2.8.13 で「キャリアアップを目指す」と回答した者に、現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性について尋ねた。男性では、相楽東部で「思う」(「とても思う」から「どちらかといえば思う」の計)と回答した者が50%を下回るなど最も低く、女性では、南丹と山城北部で「思う」と回答した者が50%を下回るなど低くなっている(図 2.8.14)。

図 2.8.14 地域別の現材の職場での理想のキャリアアップの実現可能性(就業者、単数)
(男性)



(女性)



(相楽東部・中丹・乙訓で女性のキャリアアップへの関心が低い)

図 2.8.14 の職場での理想のキャリアアップの実現可能性の評価（どちらかと言えばそう思わない、そう思わない、全くそう思わない）で分けて、女性のキャリア開発の面から職場でキャリアアップができないと思う理由を集計した（図 2.8.15）。

男性では「女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから」が最も多い理由である地域が多く、特に相楽東部が40%を上回るなど最も多くなっている。女性でも「女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから」が最も多い理由である地域が多く、特に中丹と乙訓が40%を上回るなど多くなっている。

図 2.8.15 地域別の女性のキャリア開発の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由（現在の職場での理想のキャリアアップの実現可能性別）

(男性)

(%)

区分	N	女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから	部下のキャリア形成への上司の意識が低いから	仕事の自己評価、キャリア研修、コーチング等、キャリア開発の組織的取組がないから	ジョブローテーションや社内公募がなく、仕事の中で新しい挑戦ができる機会がないから	仕事の順番や方法を決める裁量がなく、提案がしづらいから	20歳代から仕事の面白さに気づき、成長を実感できる機会が十分でないから	社外との交流機会が少なく、人的ネットワークを構築する機会が乏しいから	その他	女性にもキャリアアップ機会自体は十分ある
全体	411	30.4	25.1	22.0	18.7	16.6	12.6	12.3	5.2	17.1
丹後	16	30.5	20.1	36.8	30.5	27.9	6.4	6.4	6.4	18.4
中丹	28	21.0	34.6	27.5	22.0	15.2	15.9	21.3	7.8	4.5
南丹	22	21.0	27.1	20.4	21.4	11.1	14.0	19.8	6.5	28.5
京都市域	220	31.5	27.1	22.8	21.0	16.3	12.2	13.1	5.5	16.6
乙訓	33	25.1	14.8	18.6	14.8	27.2	6.8	11.9	4.3	16.8
学研都市	30	36.7	25.5	17.6	12.4	11.1	11.7	6.8	2.3	35.5
山城北部	52	33.2	16.3	17.4	9.2	17.0	16.9	5.8	3.5	8.7
相楽東部	10	40.0	7.7	8.0	15.7	29.1	6.1	21.4	32.5	0.0

(女性)

(%)

区分	N	女性従業員のキャリアへの関心が低く、主体的にキャリア選択していく雰囲気がないから	部下のキャリア形成への上司の意識が低いから	仕事の自己評価、キャリア研修、コーチング等、キャリア開発の組織的取組がないから	ジョブローテーションや社内公募がなく、仕事の中で新しい挑戦ができる機会がないから	仕事の順番や方法を決める裁量がなく、提案がしづらいから	社外との交流機会が少なく、人的ネットワークを構築する機会が乏しいから	20歳代から仕事の面白さに気づき、成長を実感できる機会が十分でないから	その他	女性にもキャリアアップ機会自体は十分ある
全体	423	37.9	27.8	25.8	18.0	17.8	13.8	9.3	6.7	12.3
丹後	16	37.7	33.4	14.6	4.6	18.0	9.1	0.0	22.4	18.8
中丹	14	54.6	42.1	25.6	24.9	15.7	29.7	10.4	19.7	0.0
南丹	13	31.3	16.0	16.2	11.0	0.0	0.0	28.8	0.0	23.9
京都市域	259	37.4	25.4	23.5	14.1	17.3	14.5	7.8	7.2	14.9
乙訓	24	48.8	32.7	33.9	23.2	24.6	11.5	8.1	9.4	3.4
学研都市	30	35.1	30.0	41.5	12.5	19.6	12.8	17.0	2.5	5.8
山城北部	57	34.9	33.0	29.2	34.0	21.6	12.5	7.9	1.6	8.1
相楽東部	10	21.7	22.6	4.4	35.8	38.5	31.3	0.0	12.8	4.4

(多くの地域で職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がない)

図 2.8.14 で、否定的意見(「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」)であった者に、仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由を尋ねた(図 2.8.16)。

男女ともすべての地域で「職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がないから」が多く、特に中丹は男女とも50%を上回るなど他の地域より多くなっている。また、中丹は女性での「育児休業後、キャリアアップ(昇格試験等)の機会が得にくくなるから」「育児休業後、本人が望まない配置異動を受けやすくなるから」も他の地域より多くなっている。

図 2.8.16 地域別の仕事と子育ての両立の面から現在の職場でキャリアアップができないと思う理由(複数)

(男性)

(%)

区分	N	職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がないから	育児休業後、責任のある仕事がかまされてもらえなくなる者があるから	行きすぎた配慮により、働き方が制限される雰囲気があるから	出産前後の働き方に対する相談等、上司の配慮が十分でないから	育児休業後、昇給しにくくなるから	育児休業後、本人が望まない配置異動を受けやすくなるから	育児休業後、キャリアアップ(昇格試験等)の機会が得にくくなるから	その他	仕事と子育ては両立できるが、そもそも女性にキャリアアップの機会がない
全体	411	38.4	19.6	19.0	18.8	13.8	13.1	12.6	4.8	13.2
丹後	16	38.4	0.0	50.6	17.6	21.5	20.1	17.6	6.4	20.8
中丹	28	57.9	19.4	21.3	32.7	5.2	12.3	9.7	0.0	4.5
南丹	22	39.0	6.1	12.7	14.3	12.7	8.2	11.4	6.5	14.3
京都市域	220	37.7	20.7	21.3	20.6	12.9	12.6	12.6	5.6	14.9
乙訓	33	25.8	5.2	7.4	14.1	7.4	17.1	18.7	4.3	16.8
学研都市	30	32.5	26.0	18.1	19.2	31.5	16.5	14.2	6.9	10.7
山城北部	52	38.9	28.1	7.9	7.1	10.6	11.6	9.3	1.5	9.2
相楽東部	10	48.2	29.4	21.5	0.0	29.4	11.2	21.4	13.3	0.0

(女性)

(%)

区分	N	職場にキャリアアップと子育ての両立を支援する雰囲気がないから	出産前後の働き方に対する相談等、上司の配慮が十分でないから	育児休業後、昇給しにくくなるから	育児休業後、責任のある仕事がかまされてもらえなくなる者があるから	育児休業後、キャリアアップ(昇格試験等)の機会が得にくくなるから	行きすぎた配慮により、働き方が制限される雰囲気があるから	育児休業後、本人が望まない配置異動を受けやすくなるから	その他	仕事と子育ては両立できるが、そもそも女性にキャリアアップの機会がない
全体	421	40.3	25.8	24.2	21.8	15.5	15.4	12.2	4.5	13.3
丹後	14	45.7	27.7	9.2	47.5	5.6	9.2	37.4	0.0	20.5
中丹	14	68.4	35.2	29.7	37.2	31.9	31.6	36.9	19.7	4.8
南丹	13	33.2	30.3	21.2	18.4	10.7	23.9	0.0	0.0	11.3
京都市域	259	40.6	23.1	22.1	20.4	14.1	13.9	9.9	5.1	14.9
乙訓	24	44.2	30.0	18.4	33.7	19.7	11.7	14.1	0.0	6.0
学研都市	30	36.7	31.1	35.8	20.3	18.9	22.7	24.0	6.8	10.6
山城北部	57	33.6	28.7	30.3	18.1	16.0	13.9	9.1	0.0	12.7
相楽東部	10	28.8	7.1	0.0	7.1	17.2	4.4	0.0	31.3	32.7

(女性では「自分のキャリアアップを諦める」と考える者が乙訓で多い)

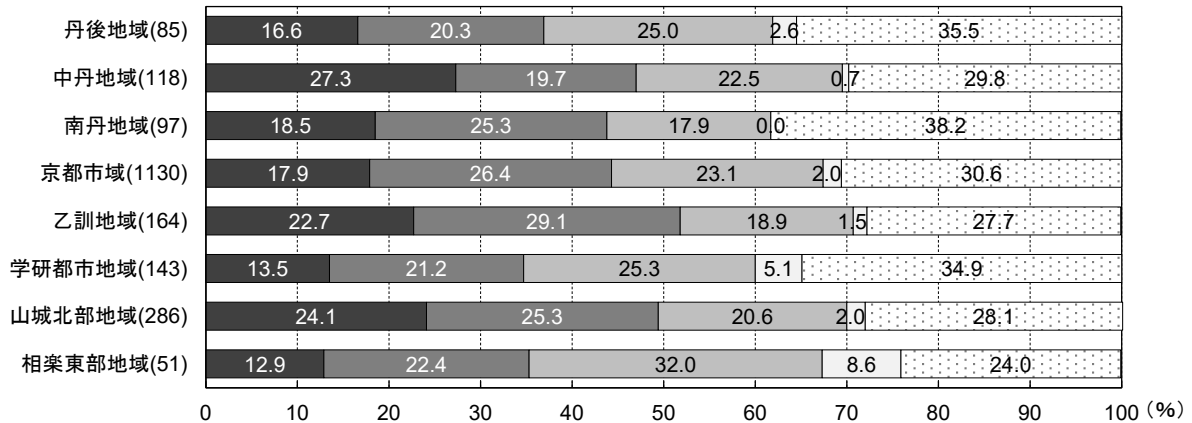
夫婦でキャリアアップを目指している中で、希望する子どもの数を持ってないとしたら、何を諦めざるを得ないか尋ねた (図 2.8.17)。

男性では、相楽東部で「自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める」が32%と最も多くなっている。女性では「配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める」がすべての地域で最も多く、特に乙訓が51%と他の地域より多くなっている。

図 2.8.17 地域別の夫婦でキャリアアップを目指している中で、希望する子どもの数を持ってない場合の優先すること (単数)

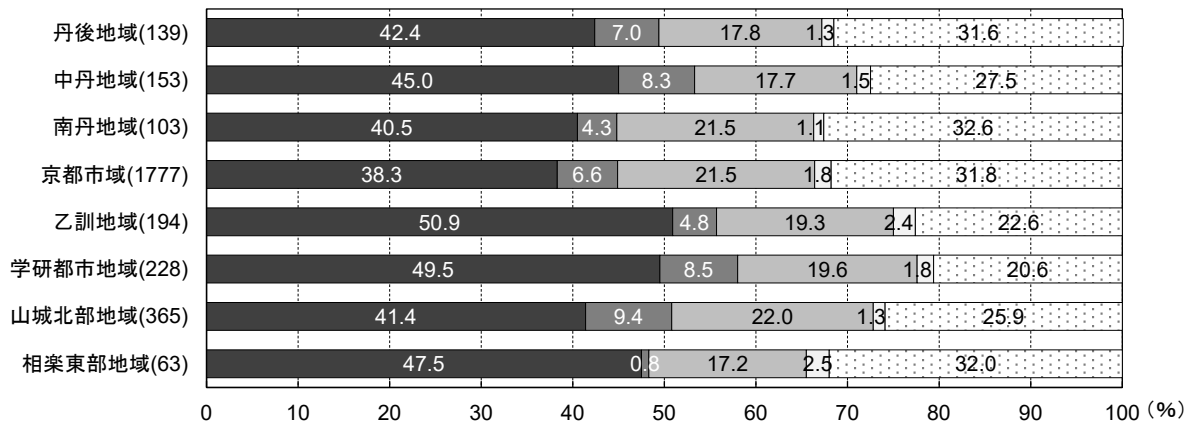
(男性)

- 配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める
- 自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める
- 自分と配偶者のキャリアアップを優先し、希望の子ども数を諦める
- その他
- わからない



(女性)

- 配偶者のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、自分のキャリアアップを諦める
- 自分のキャリアアップや希望の子ども数を優先し、配偶者のキャリアアップを諦める
- 自分と配偶者のキャリアアップを優先し、希望の子ども数を諦める
- その他
- わからない



9. 男女の役割分担意識・ワークライフバランス

(1) 男女の役割分担意識

①伝統的な役割分担意識

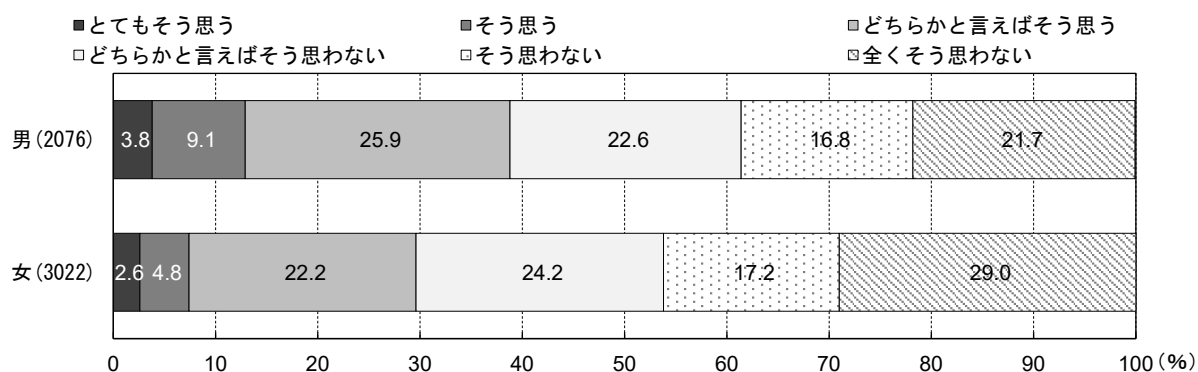
(男女の役割分担意識に肯定的意見は30%から40%に上る)

府内在住者を対象に、「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」について尋ね、伝統的な男女の役割分担意識を把握した。

男性は「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が13%、「どちらかと言えばそう思う」を加えると39%に上る(図2.9.1)。女性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は8%、「どちらかと言えばそう思う」を加えると30%になる。

大半は伝統的な役割分担意識に否定的であり、はっきりとした肯定的意見は10%程度であるもの、「どちらかと言えば」を含めば肯定的意見は30%から40%に上り、伝統的な男女の役割分担は根強く残っているとみられる。また、こうした傾向は男性の方が強い。

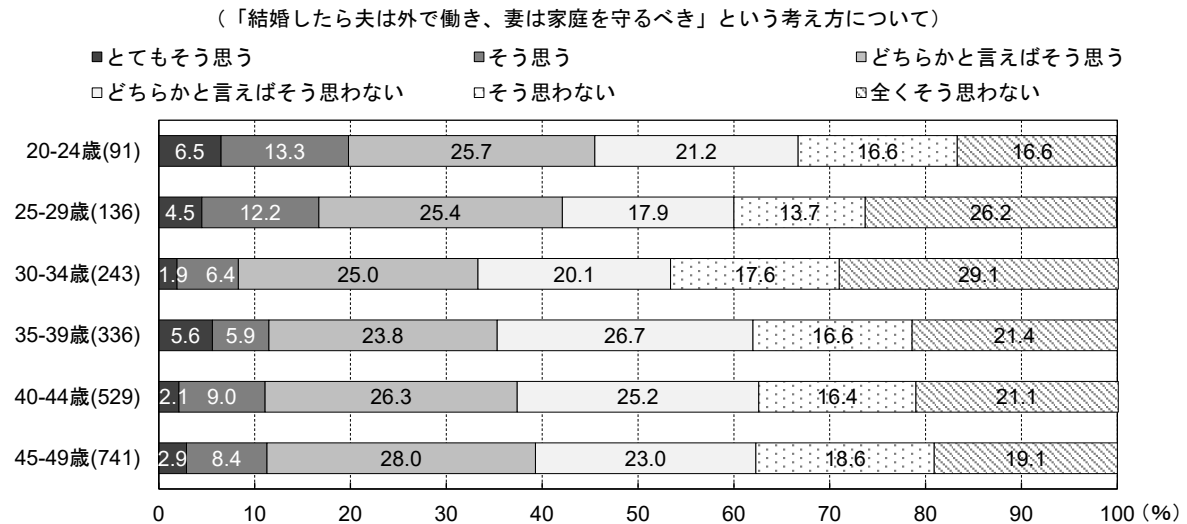
図2.9.1 「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について(単数)



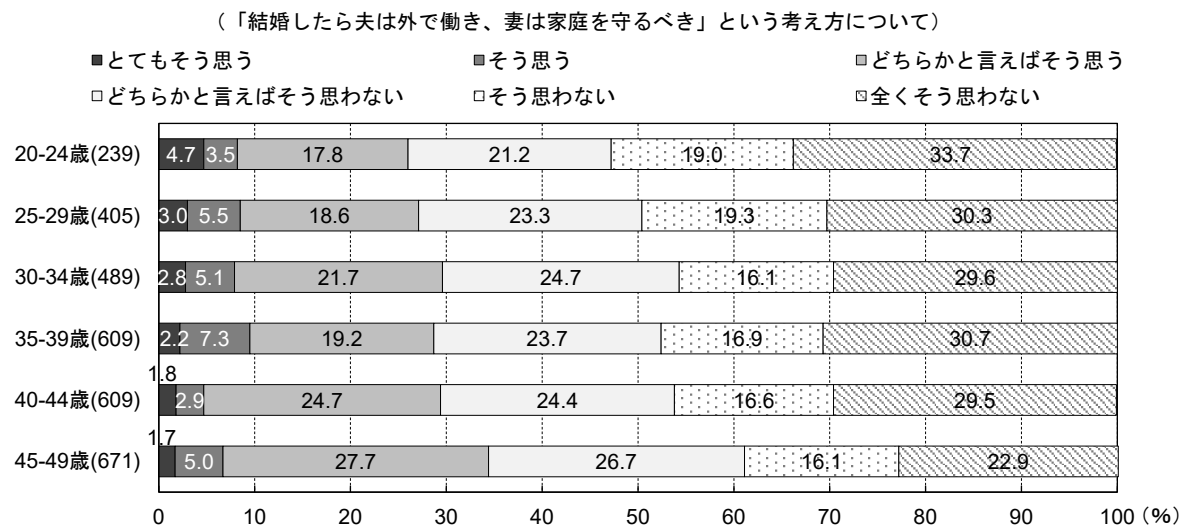
年齢階層別にみると、男性の20歳代に肯定的意見が多くみられる。女性では、年齢による大きな差異はみられないが、「まったくそう思わない」が、年齢とともに少しずつ増加している(図2.9.2)。

図2.9.2 年齢階層別にみた「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について

(男性)



(女性)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.0620	0.0585
P値	0.0297	0.0013

②所得、働き方、キャリアアップに関わる役割分担

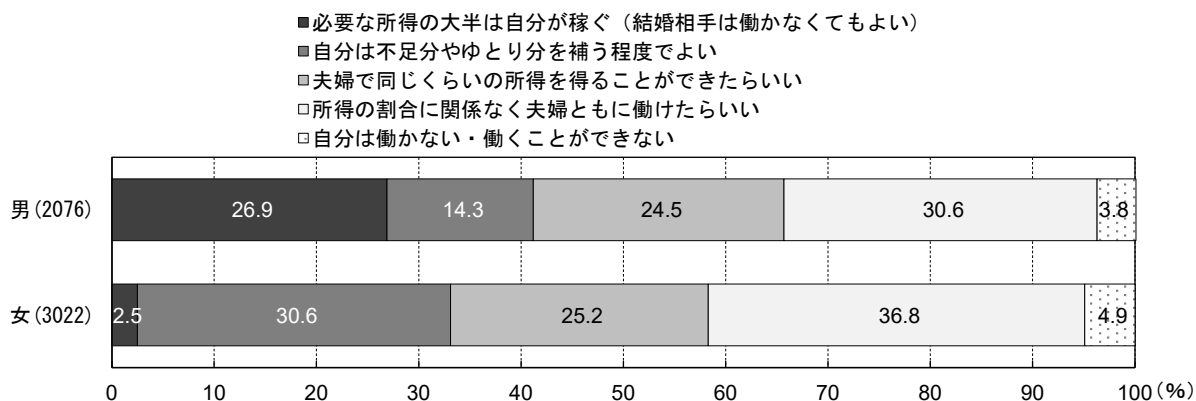
(所得を得ることに30%程度の役割分担意識がある)

男女の役割分担意識に関連して「結婚生活のための所得」の自分の役割について尋ねた。

その結果、「夫婦で同じくらいの所得を得ることができたらいい」「所得の割合に関係なく夫婦とも働けたらいい」といった、夫婦がともに所得を得られたらいいという考え方は、男性で55%、女性では62%に達し、半数を大きく上回る(図2.9.3)。

一方、「必要な所得の大半は自分が稼ぐ」が男性で27%、これと対になる形で女性では「自分は不足分やゆとり分を補う程度でよい」が31%に上り、30%程度の者に男女の役割分担意識がみられる。

図 2.9.3 結婚生活のための所得における自分の役割(単数)

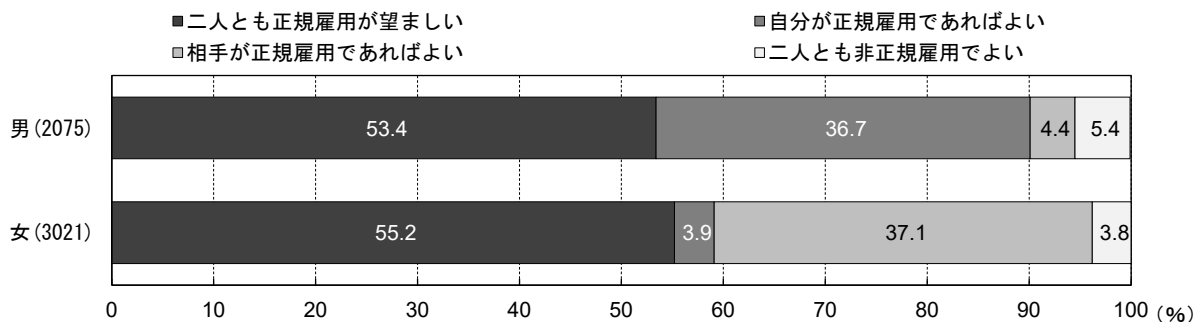


(働き方の役割分担意識は40%近い)

次に、男女の役割分担意識について、結婚生活を送る上での自分や結婚相手の雇用の理想を尋ねた。

「二人とも正規雇用が望ましい」が男性は53%、女性は55%であり、男女でほぼ同じ回答率が得られた。一方、男性では「自分が正規雇用であればよい」は37%の回答があり、これと対になる女性の「相手が正規雇用であればよい」が37%になっている。

図 2.9.4 結婚生活における雇用の理想(単数)

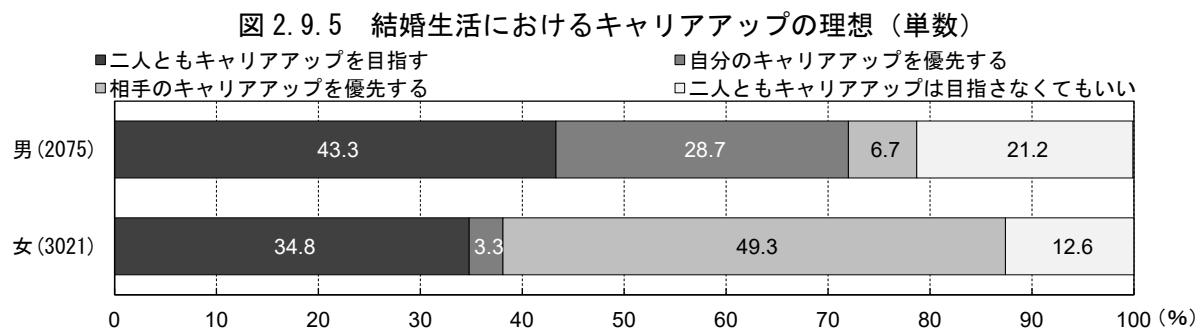


(女性は「相手のキャリアアップを優先」が半数近い)

さらに、結婚生活を送る場合、自分と配偶者のキャリアアップはどのような組み合わせが理想か尋ねた。

「二人ともキャリアアップを目指す」は、男性では 43%、女性は 35%であり、女性の方が 10ポイント近く少ない(図 2.9.5)。女性は「相手のキャリアアップを優先する」が 49%と半数近い。この回答は男性では 7%にとどまり、男女で差が大きい。

一方、「自分のキャリアアップを優先する」は男性の 29%を占める。女性は 3%である。



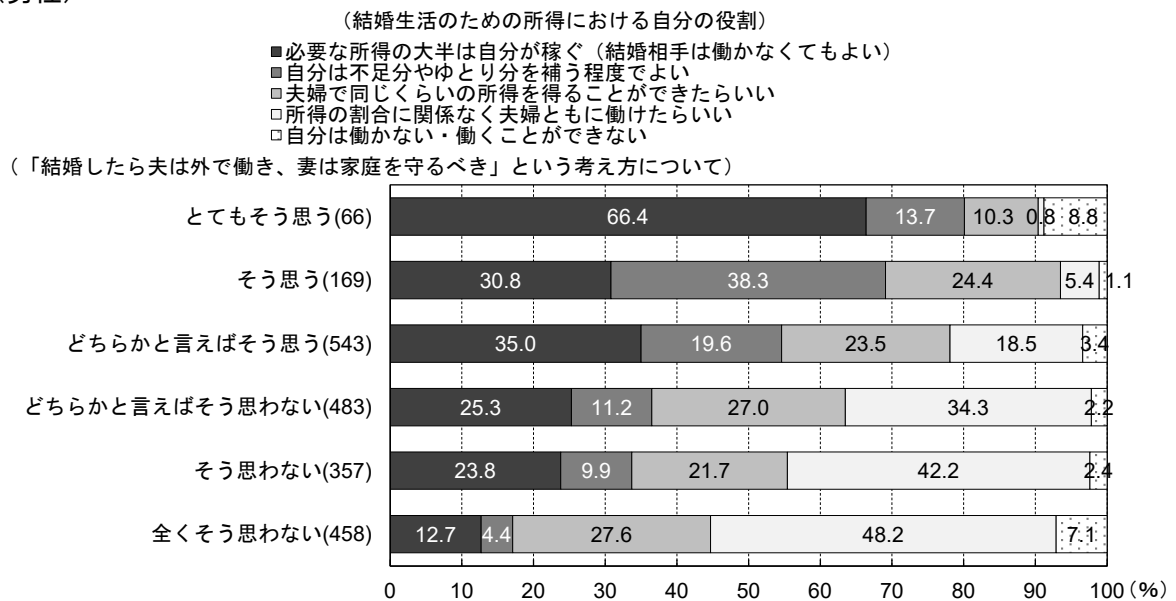
(2) 伝統的な役割分担意識の影響

(所得、働き方、キャリアアップの考え方背後には伝統的な役割分担意識がある)

図 2.9.1 の「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方を分析軸にして、図 2.9.3 の「結婚生活のための所得における自分の役割」、図 2.9.4 の「結婚生活における雇用の理想」、図 2.9.5 の「結婚生活におけるキャリアアップの理想」のそれぞれに対してクロス集計を行った。

その結果、三つのクロス集計いずれにおいても、表側と表頭の間には明瞭な相関が表れた(図 2.9.6、図 2.9.7、図 2.9.8)。「結婚生活を送る上で、所得、雇用、キャリアアップのすべてで、それらの背後において、伝統的な男女の役割分担意識が影響を及ぼしていると推察される。

図 2.9.6 結婚生活のための所得における自分の役割（伝統的な男女の役割分担意識別）
 (男性)



(女性)

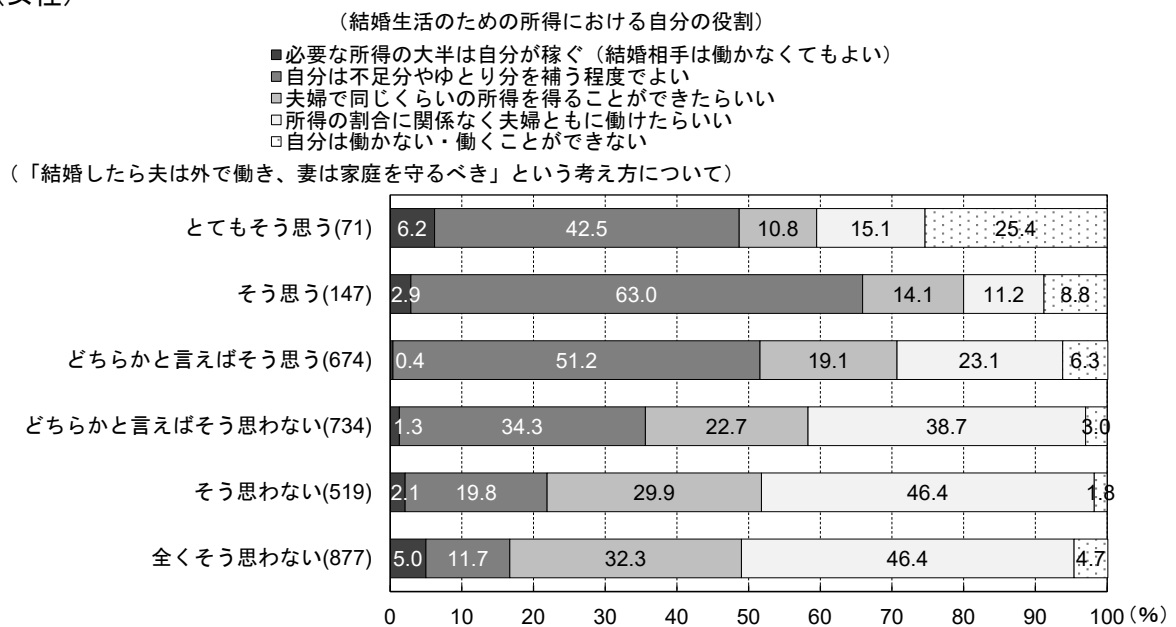
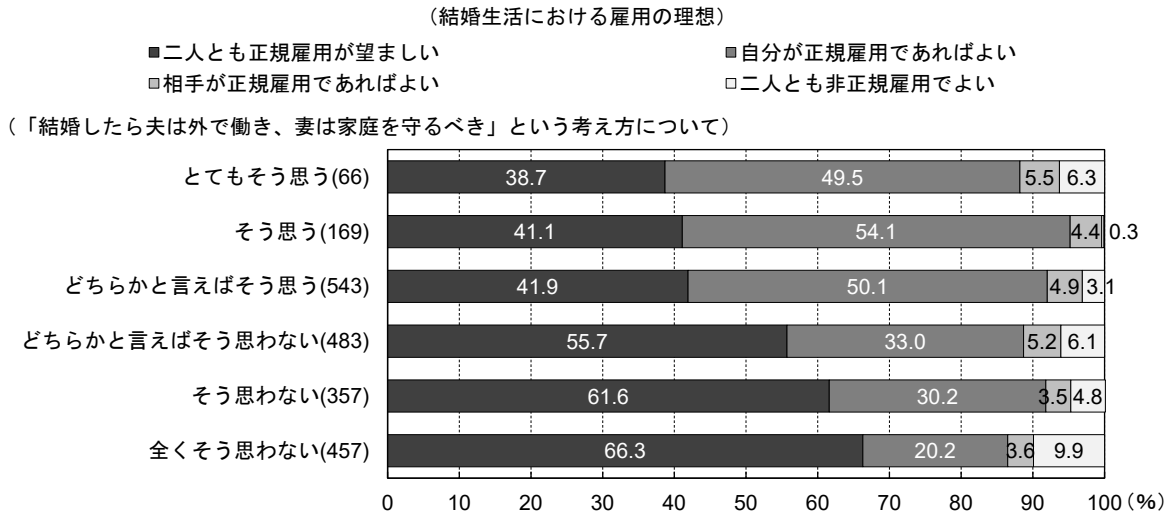


図 2.9.7 結婚生活における雇用の理想（伝統的な男女の役割分担意識別）

(男性)



(女性)

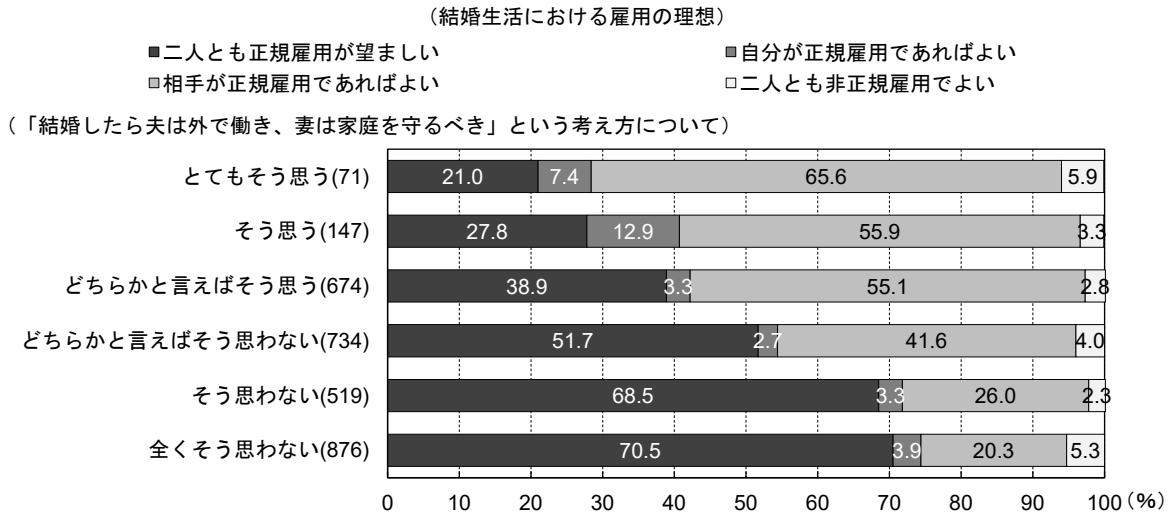
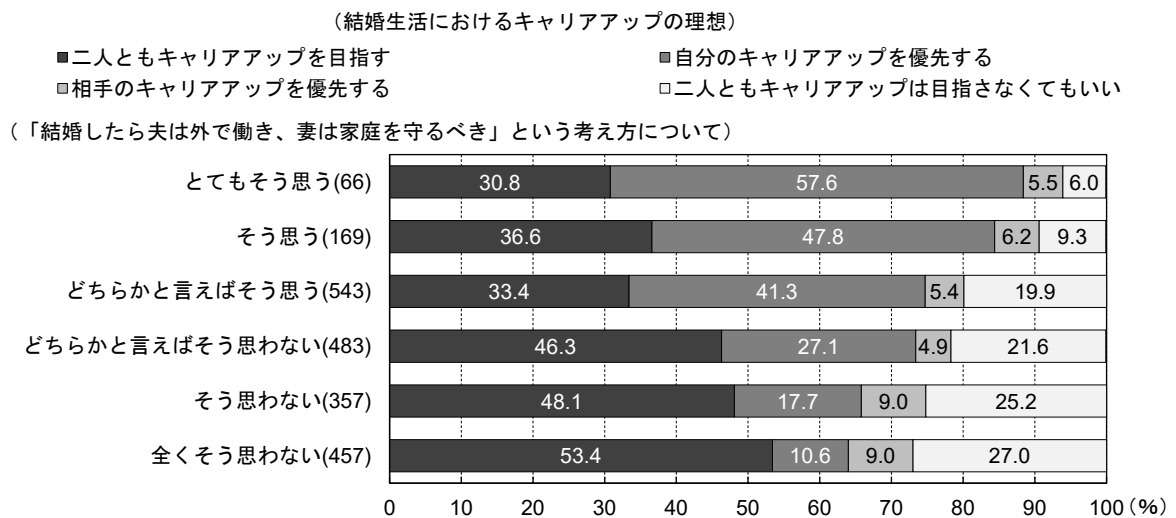
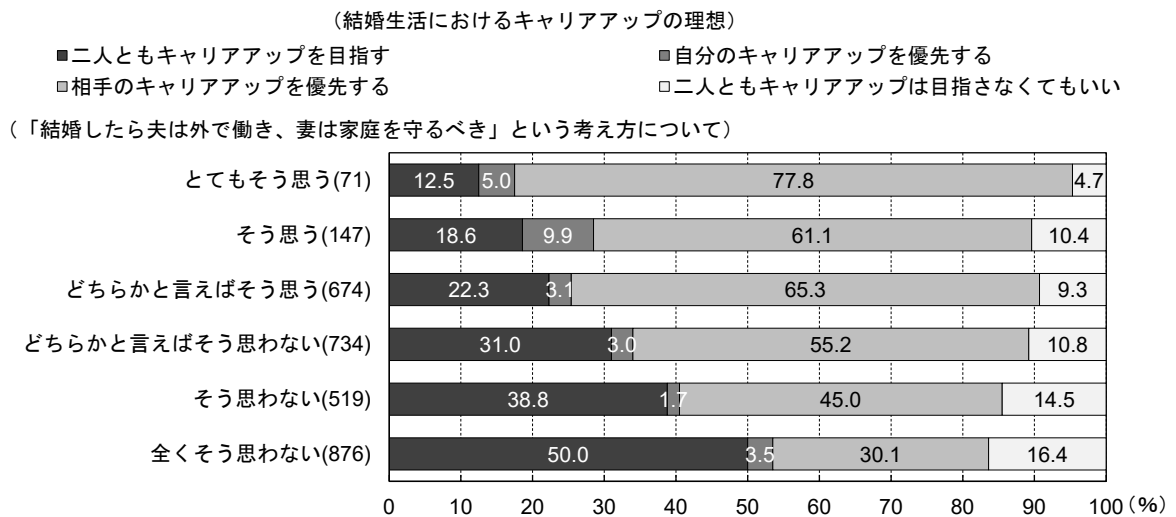


図 2.9.8 結婚生活におけるキャリアアップの理想（伝統的な男女の役割分担意識別）
 (男性)



(女性)



(3) ワークライフバランス

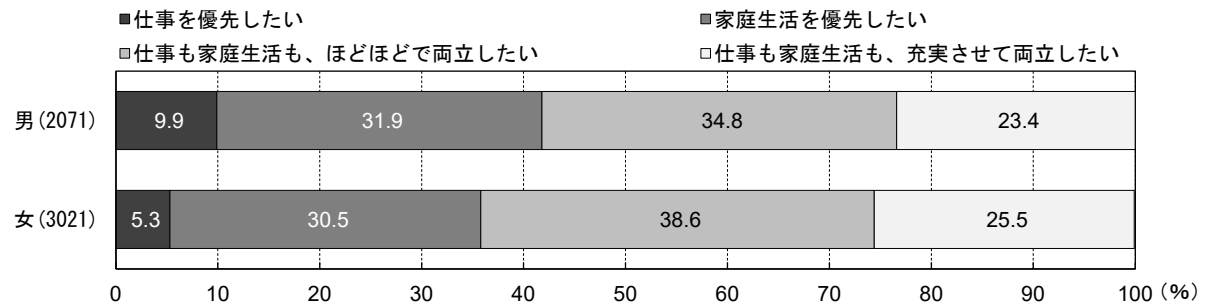
①ワークライフバランスの理想

(理想は「仕事と生活の両立」が約60%を占める)

仕事と家庭(子育てを含む)の優先度(ワークライフバランス)の理想は、「両立」(「仕事も家庭生活も、ほどほどで両立したい」と「仕事も家庭生活も、充実させて両立したい」の合計)が、男性で58%、女性では64%と過半を占める(図2.9.9)。「仕事も家庭生活も、充実させて両立したい」を含めて、女性の方が「両立」の回答がやや多いことは注目される。

反対に、男性では「仕事を優先したい」が10%を占めており、女性(5%)との差異になっている。

図2.9.9 仕事と家庭の優先度の理想(単数)



②ワークライフバランスの現実

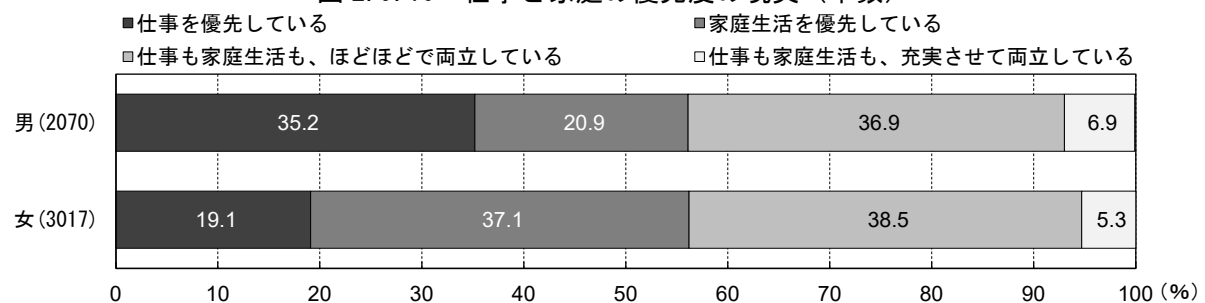
(「充実させて両立」の理想からの乖離が大きい)

図2.9.9の「理想」に対してワークライフバランスの「現実」を尋ねたところ、「仕事を優先している」が、男性で35%、女性では19%に上り、理想との乖離が大きい(図2.9.10)。

その結果、男性では「仕事も家庭生活も、充実させて両立している」(7%)が、理想の「仕事も家庭生活も、充実させて両立したい」から大きく減少している(16ポイント減)。また、「家庭生活を優先している」(21%)の理想からの減少も大きい(11ポイント減)。

女性では、「仕事も家庭生活も、充実させて両立している」(5%)の理想からの減少は20ポイントに及び、男性を上回る。また、女性は「家庭生活を優先している」(37%)が理想の「家庭生活を優先したい」から増加している(7ポイント増)。

図2.9.10 仕事と家庭の優先度の現実(単数)



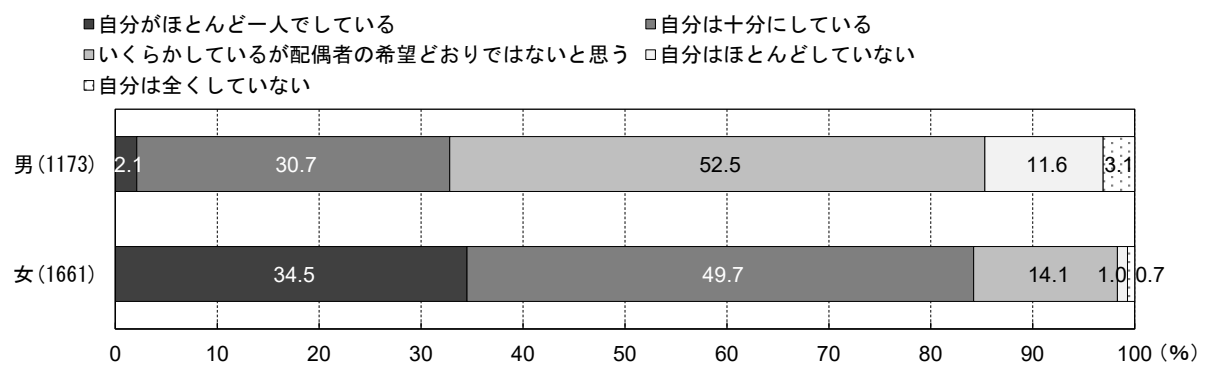
②家事・子育てへの関わり方

(男女の家事・子育ての関わり方のギャップは大きい)

有配偶者に対して、自分の家事や子育てへの関わり方を把握した。女性では「自分がほとんど一人でしている」が35%に上る(図2.9.11)。「自分は十分にしている」を合わせると84%になる。男性では「自分がほとんど一人でしている」(2%)、「自分は十分にしている」(31%)と合計しても33%にとどまり、男女の家事・子育ての関わり方に対するギャップ(あるいは認識のギャップ)は大きい。

男性では、「いくらかしているが配偶者の希望どおりではないと思う」が53%、「自分はほとんどしていない」が12%、「自分は全くしていない」が3%である。合計は67%に上る。

図 2.9.11 自分の家事や子育てへの関わり方 (有配偶者、単数)

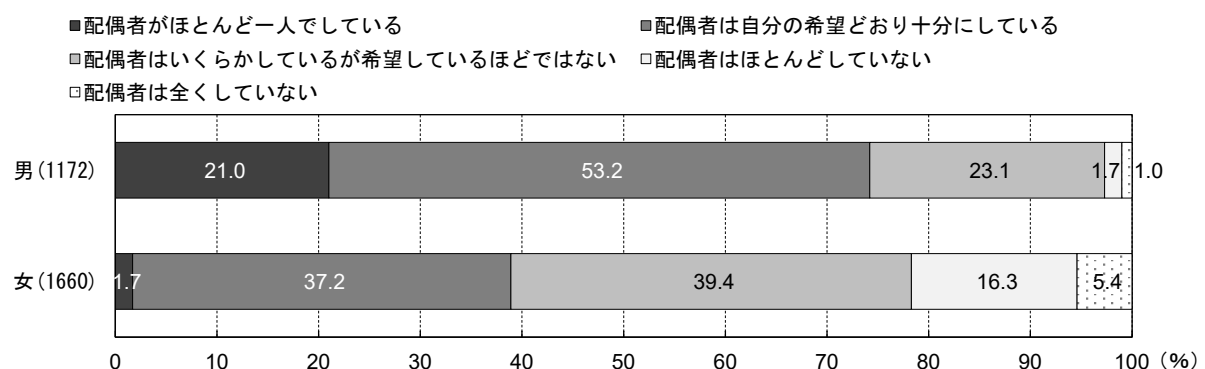


(男性の自分自身の関わり方の認識と相手の評価にはギャップがみられる)

図2.9.11の自分の関わり方に対して、配偶者が家事や子育てにどのように関わっているかを尋ねると、男性は「配偶者がほとんど一人でしている」が21%であった(図2.9.12)。図2.9.11における女性の「自分がほとんどしている」(35%)の回答との間に10ポイント以上の開きがある。

図2.9.11で男性は「自分は十分にしている」は53%であるものの、図2.9.12は、女性の「配偶者は自分の希望通り十分にしている」は37%であり、ここにも大きなギャップがみられる。

図 2.9.12 配偶者の家事や子育てへの関わり方 (有配偶者、単数)



(所得の役割分担意識は家事・育児の関わり方に影響を及ぼす)

図 2.9.3 の「結婚生活のための所得における自分の役割」、図 2.9.4 の「結婚生活における雇用の理想」、図 2.9.5 の「結婚生活におけるキャリアアップの理想」のうち、最初の「結婚生活のための所得における自分の役割」を例として取り上げ、図 2.9.11 の「自分の家事や子育てへの関わり方との関係を調べた。

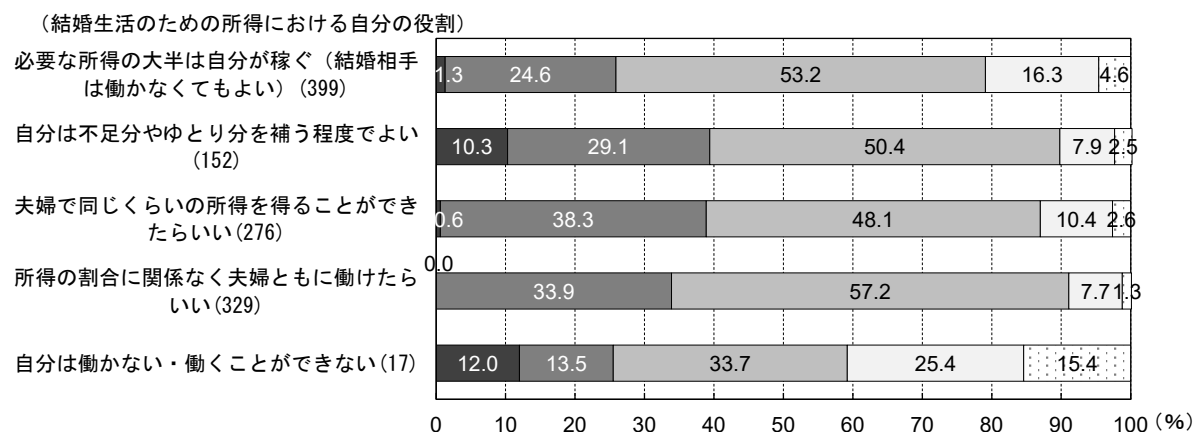
その結果、男性では、「必要な所得の大半は自分が稼ぐ」とであると、家事や子育てについて「自分はほとんどしていない」「自分は全くしていない」が、他の回答（「自分は働かない・働くことはできない」を除く）に比べておおよそ2倍になる（図 2.9.13）。

女性では、「自分は不足分やゆとり分を補う程度でよい」とであると、家事や子育てについて「自分がほとんどしている」が 41%に上る。「夫婦で同じくらい所得を得ることができたらいい」（25%）の 1.6 倍である。

図 2.9.13 自分の家事や子育てへの関わり方
(結婚生活のための所得における自分の役割別、有配偶者)

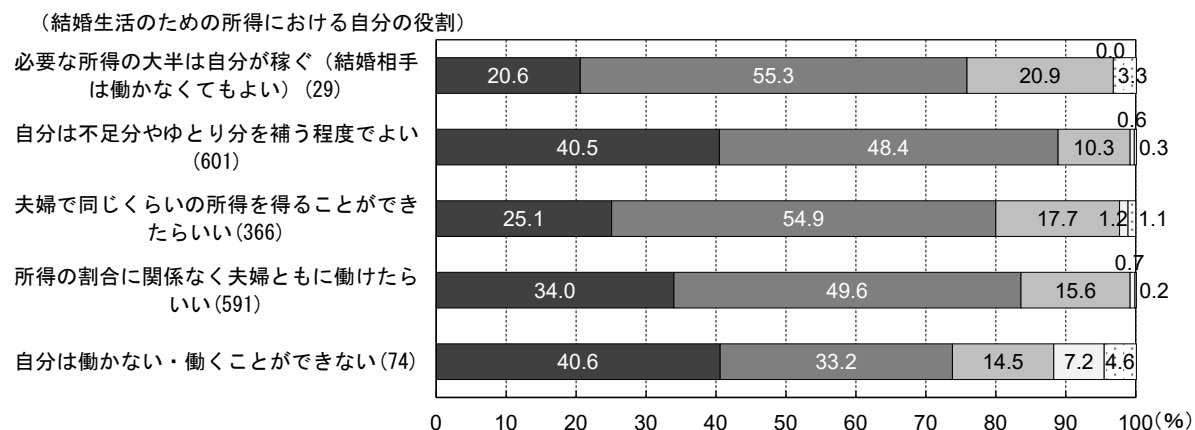
(男性)

- 自分がほとんど一人でしている
- 自分は十分にしている
- いくらかしているが配偶者の希望どおりではないと思う
- 自分はほとんどしていない
- 自分は全くしていない



(女性)

- 自分がほとんど一人でしている
- 自分は十分にしている
- いくらかしているが配偶者の希望どおりではないと思う
- 自分はほとんどしていない
- 自分は全くしていない



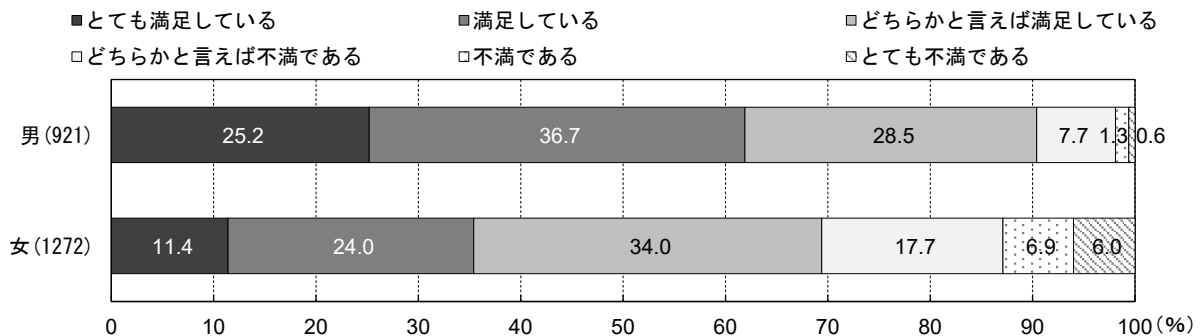
③子育てへの関わり方の満足度

(相互の満足度には大きなギャップがある)

配偶者の子育てへの関わり方についての満足度を尋ねると、「とても満足している」と「満足している」の合計は、男性62%であるのに対して、女性では35%にとどまる(図2.9.14)。

「どちらかと言えば満足している」を合わせると、男性は90%を上回る。女性では69%と70%に近くなるものの相互の差は縮まらない。

図 2.9.14 配偶者の子育てへの関わり方に対する満足度
(有配偶者、子育てをしている者、単数)

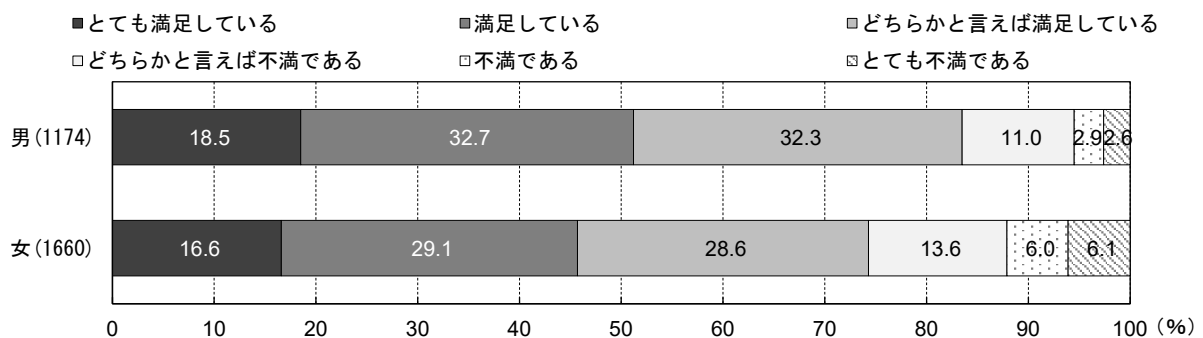


(夫婦関係の満足度にも男女間にいくらかギャップがみられる)

夫婦の関係について、どのように感じているかを尋ねると、「とても満足している」と「満足している」の合計が51%、女性では46%である(図2.9.15)。男女に差はみられるものの、図2.9.14ほどではない。「どちらかと言えば満足している」を加えても傾向は同様である。

また、「とても不満である」から「どちらかと言えば不満である」を合計すると、男性は17%、女性は26%であった。

図 2.9.15 夫婦関係の満足度 (有配偶者、単数)



(配偶者の家事や子育ての関わり方は「満足感」を形成する要因と考えられる)

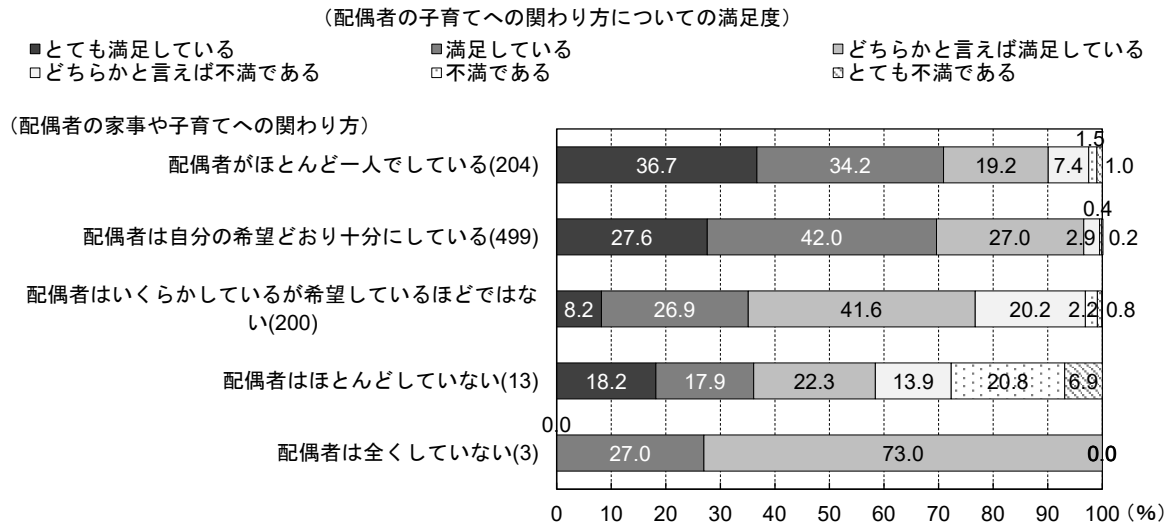
図 2.9.16 は、図 2.9.14 の配偶者の子育てへ関わり方の満足度を、図 2.9.13 の配偶者の家事や子育てへ関わり方を分析軸にして集計を行ったものである。

女性の回答に注目すると、「配偶者は自分の希望どおりに十分している」であると、「とても満足している」が 28%、「満足している」が 46%に達し、「どちらかと言えば満足している」を加えると 96%になる。

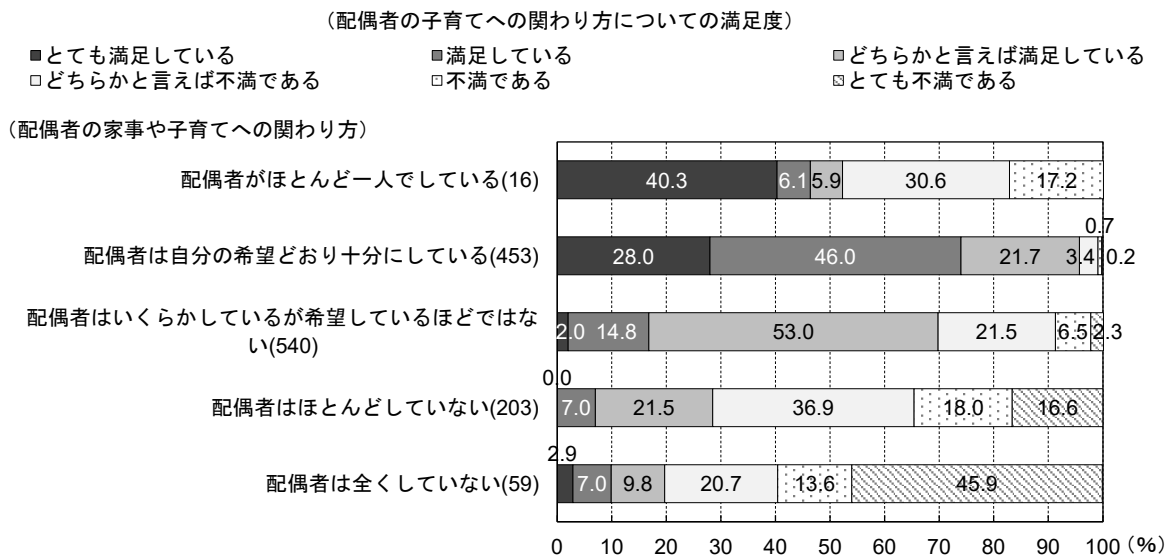
反対に、「配偶者はほとんどしていない」であれば、不満とする回答は 72%に達する。配偶者の家事や子育てへの関わり方は、女性の配偶者に対する満足感を形成する要因になっていると考えられる。

図 2.9.16 配偶者の子育てへの関わり方についての満足度
(配偶者の家事や子育てへの関わり方別、有配偶者)

(男性)



(女性)

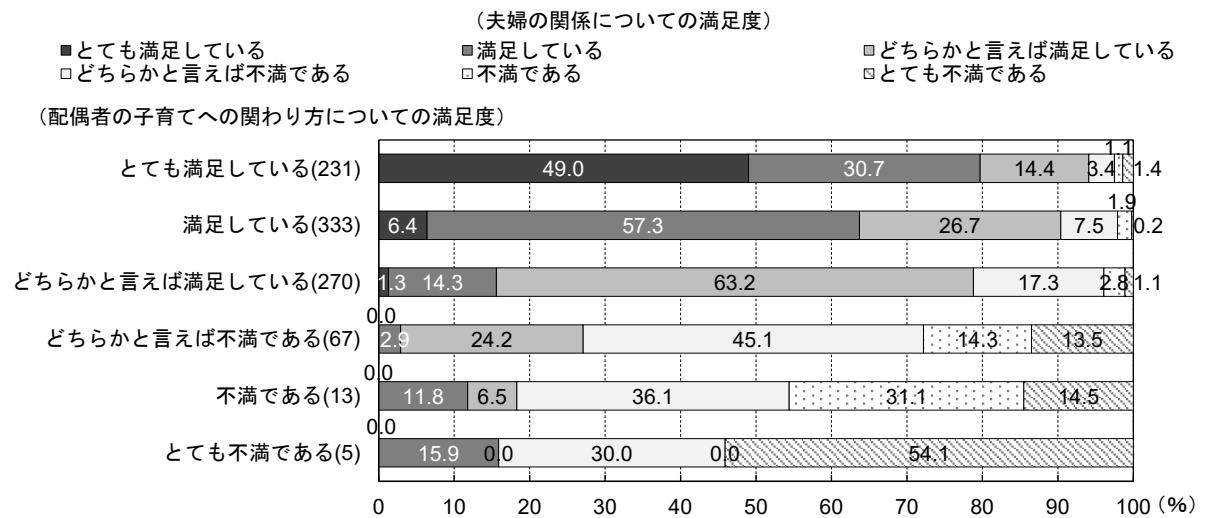


(配偶者の子育てへの関わり方と夫婦関係の満足度の相関は明確)

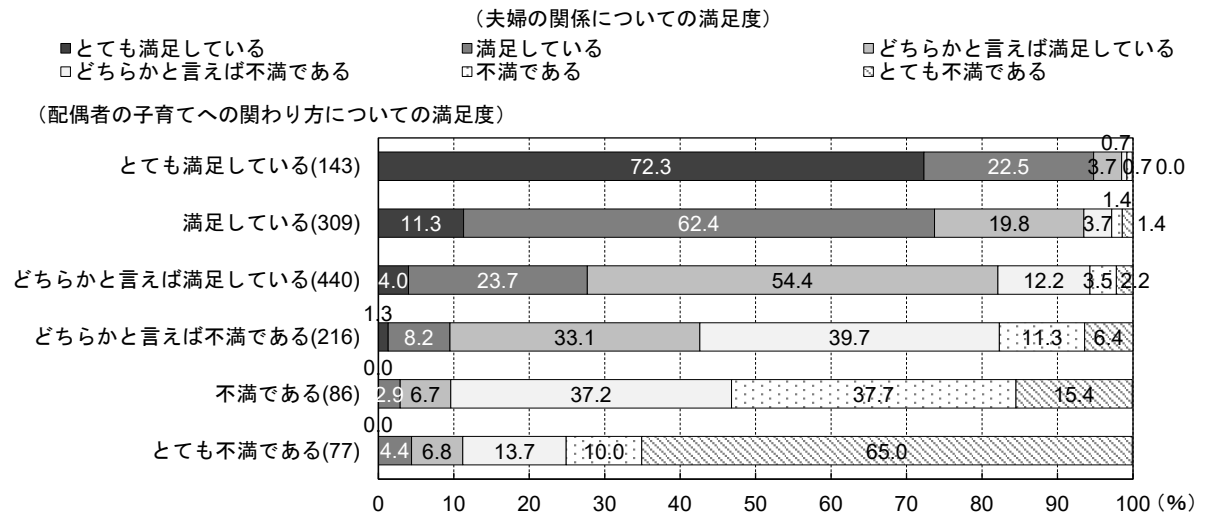
配偶者の子育てへの関わり方の満足度を分析軸にして、夫婦関係の満足度を集計した。

女性では、子育ての関わり方の満足度が「とても満足している」であると、夫婦関係についても「とても満足している」が73%に達する(図2.9.17)。同様に、女性で配偶者の子育てへの関わり方が「満足している」では、夫婦関係の満足度は「とても満足している」が11%、「満足している」が62%に上り、両者の相関は極めて明瞭である。

図 2.9.17 夫婦関係の満足度 (配偶者の子育てへの関わり方に対する満足度別)
(男性)



(女性)



(4) 地域別の集計

①伝統的な役割分担意識

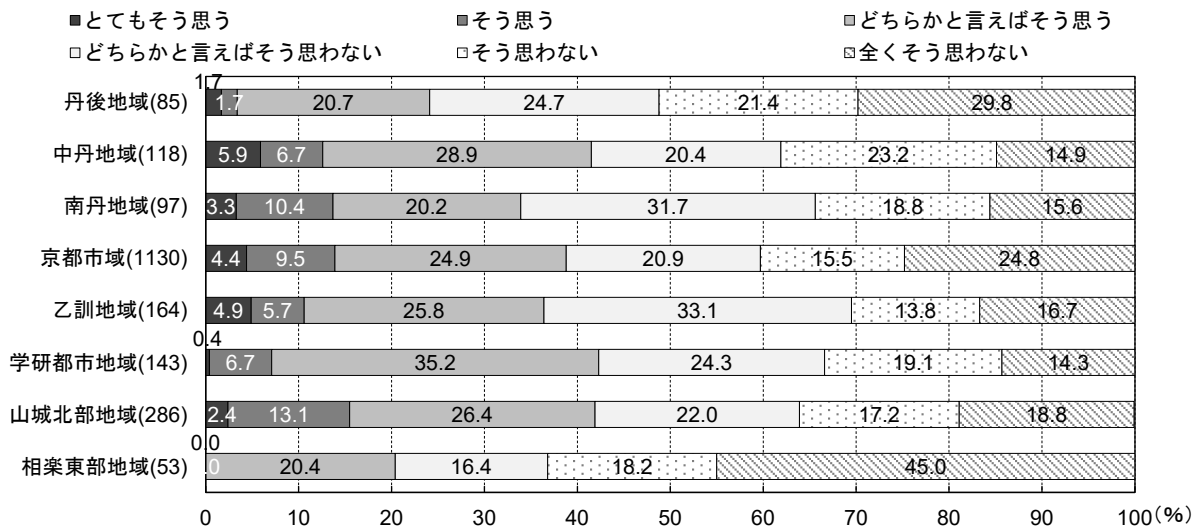
(中丹・南丹・京都市域・山城北部で男女の役割分担意識に肯定的意見が多い)

府内在住者を対象に、「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」について尋ね、伝統的な男女の役割分担意識を把握した(図2.9.18)。

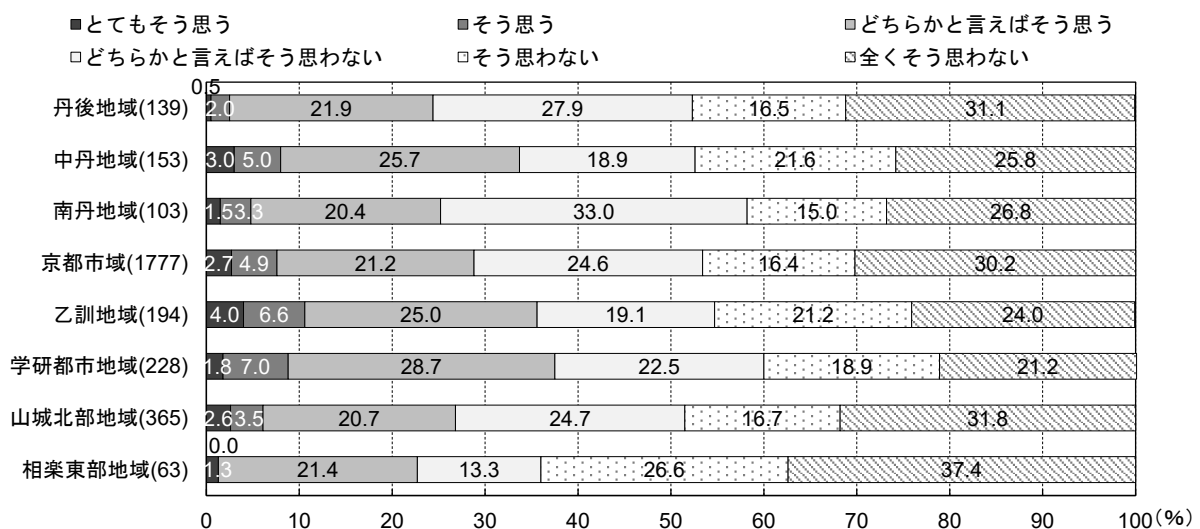
男性では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が中丹・南丹・京都市域・山城北部で多くなっている。一方で相楽東部は「全くそう思わない」が45.0%と他の地域より多くなっている。女性では、多くの地域で「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が男性よりも少なく、丹後・京都市域・山城北部・相楽東部で「全くそう思わない」が30%を上回るなど多くなっている。

図2.9.18 地域別の「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方(単数)

(男性)



(女性)



②所得、働き方、キャリアアップに関わる役割分担

(相楽東部で特に夫婦がともに所得を得られたらいいという考え方が多い)

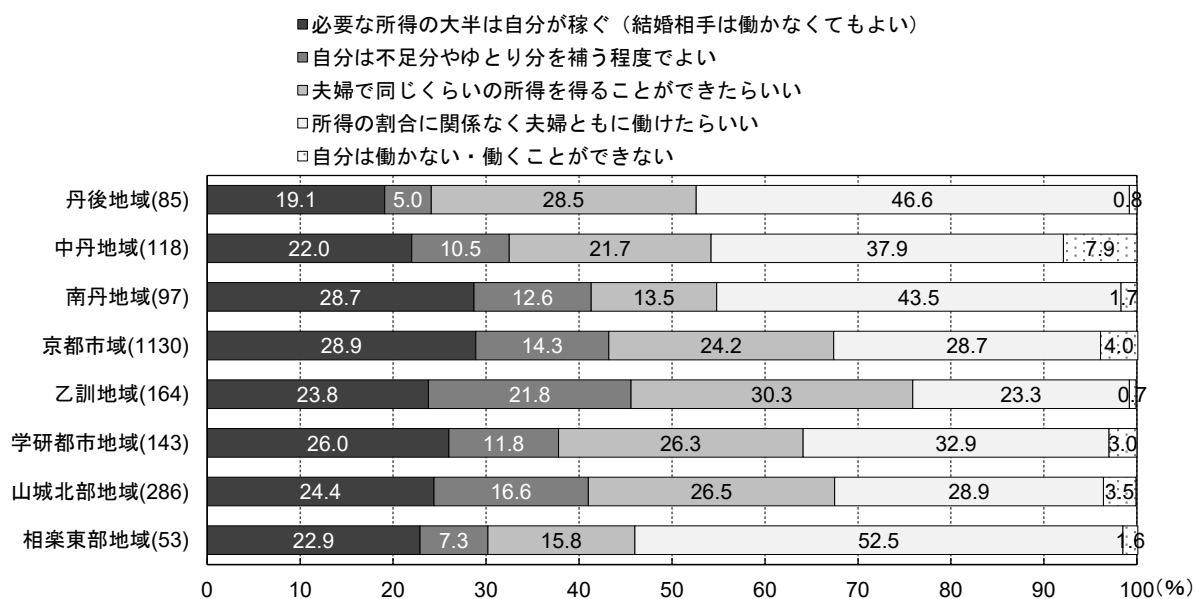
男女の役割分担意識に関連して「結婚生活のための所得」の自分の役割について尋ねた。

「夫婦で同じくらいの所得を得ることができたらいい」「所得の割合に関係なく夫婦とも働けたらいい」といった、夫婦がともに所得を得られたらいいという考え方は、男性では丹後と相楽東部、女性では多くの地域で60%を上回り、特に相楽東部で多くなっている

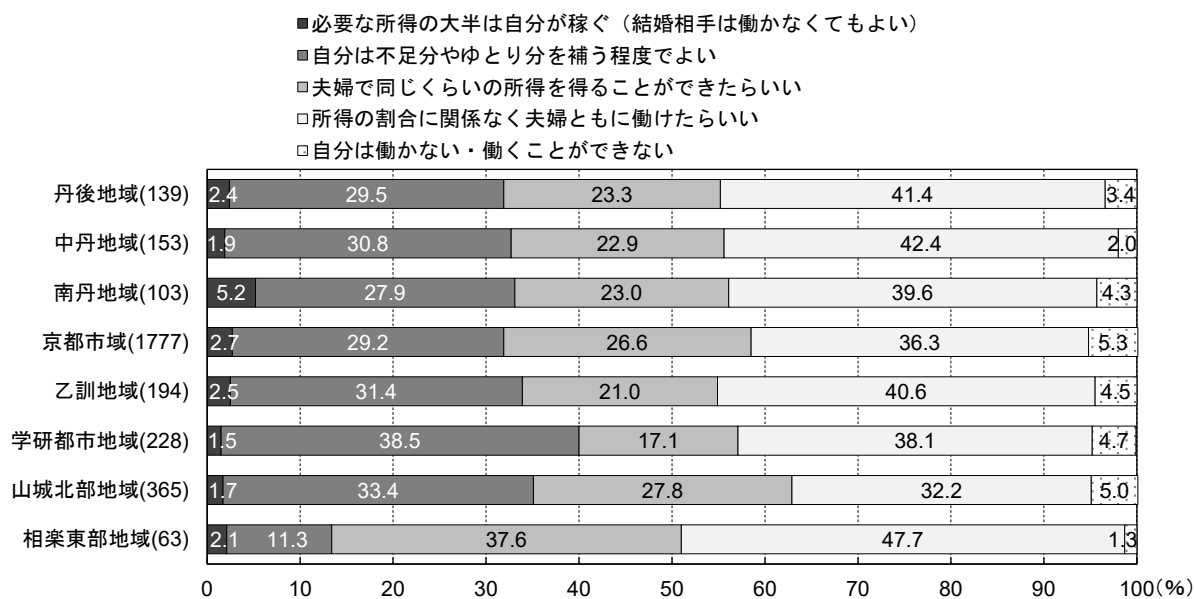
(図 2.9.19)。

図 2.9.19 地域別の結婚生活のための所得における自分の役割 (単数)

(男性)



(女性)



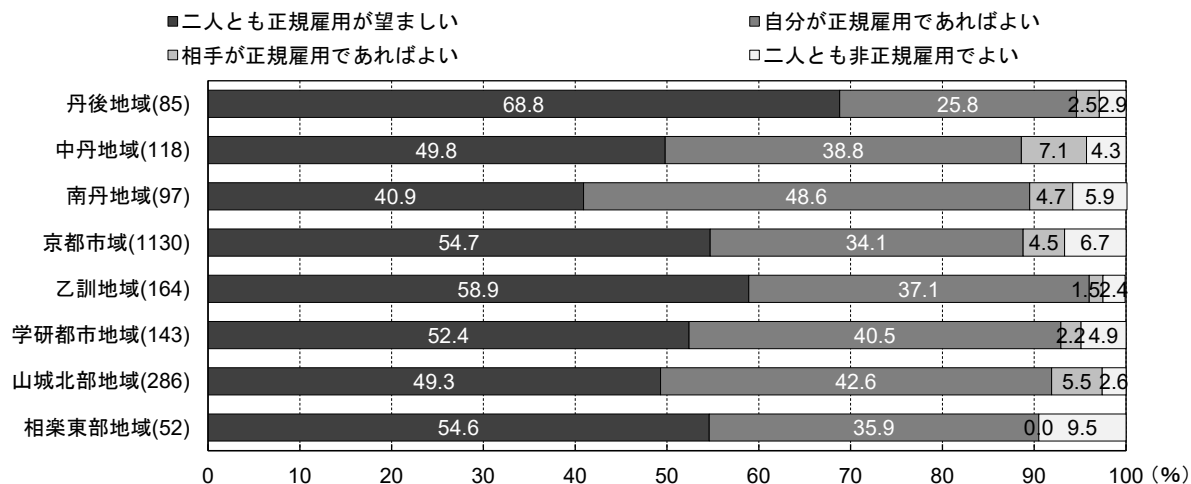
(働き方の役割分担意識は山城北部が多い)

次に、男女の役割分担意識について、結婚生活を送る上での自分や結婚相手の雇用の理想を尋ねた(図 2.9.20)。

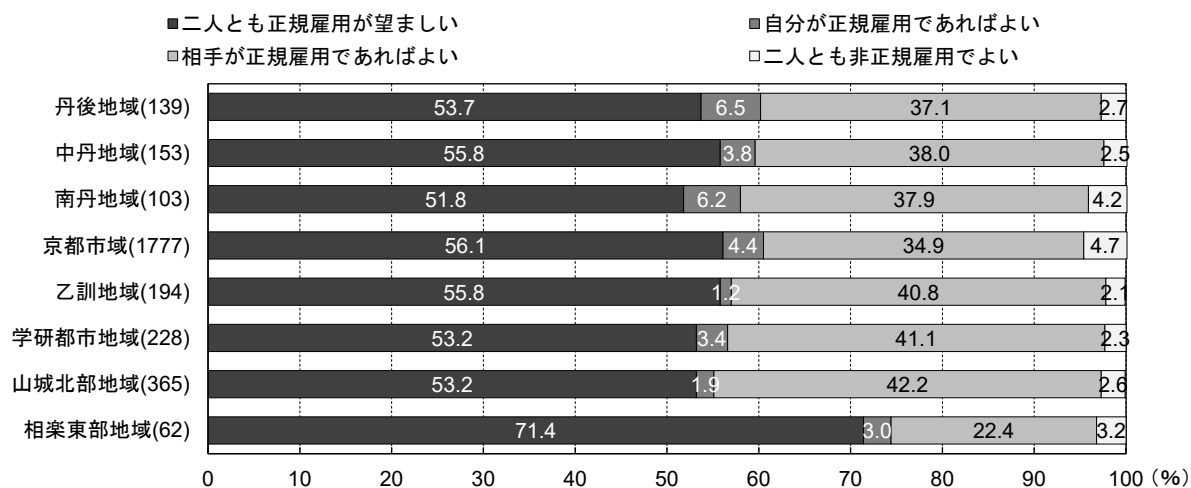
「二人とも正規雇用が望ましい」と回答した者は男性では丹後で 69%と最も多く、南丹で 41%と最も少なくなっている。女性では、「二人とも正規雇用が望ましい」と回答した者は相楽東部で 71%と最も多い。一方で、全ての地域で「相手が正規雇用であればよい」が男性より女性の方が多く、特に山城北部で多くなっている。

図 2.9.20 地域別の結婚生活における雇用の理想 (単数)

(男性)



(女性)



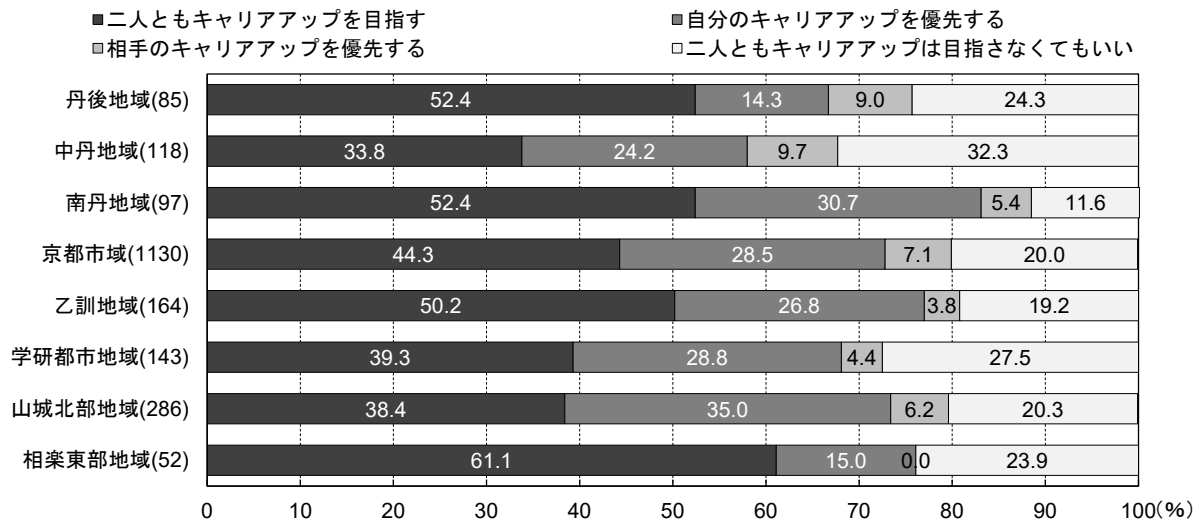
(丹後と相楽東部で「二人ともキャリアアップを目指す」傾向が高い)

さらに、結婚生活を送る場合、自分と配偶者のキャリアアップはどのような組み合わせが理想か尋ねた (図 2.9.21)。

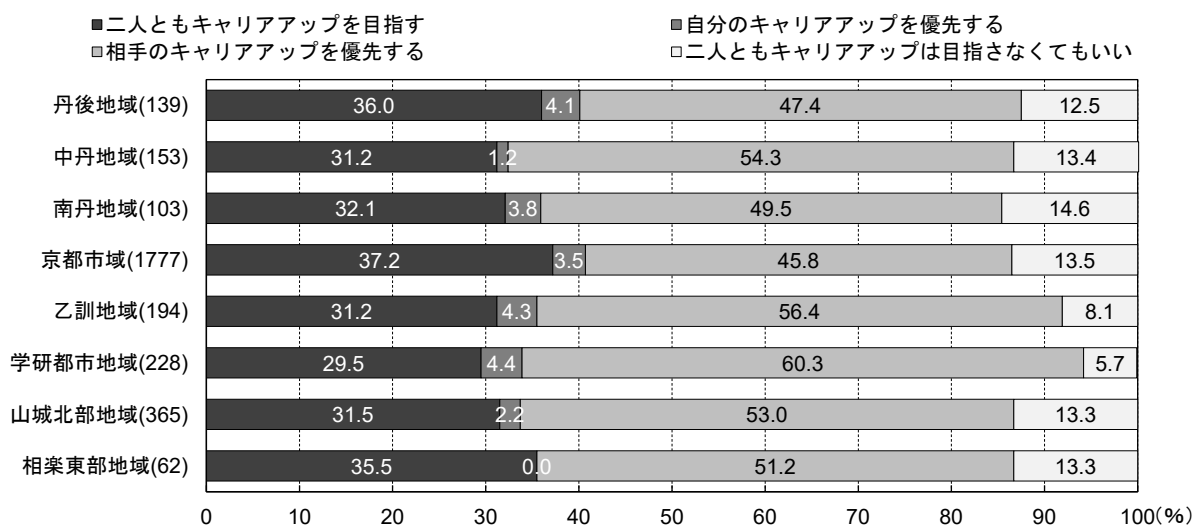
「二人ともキャリアアップを目指す」と回答した者は、男性では相楽東部が61%と最も多くなっている。女性では、丹後と相楽東部が35%を上回るなど多くなっている。

図 2.9.21 地域別の結婚生活におけるキャリアアップの理想 (単数)

(男性)



(女性)



④ワークライフバランスの理想

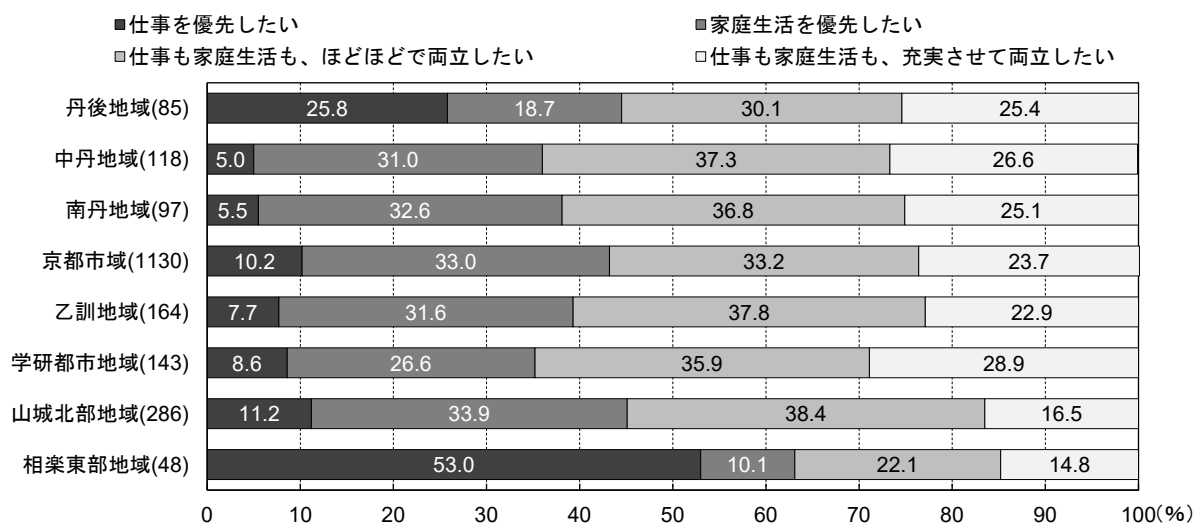
(丹後と相楽東部で男女とも「仕事を優先したい」傾向が高い)

「両立」(「仕事も家庭生活も、ほどほどで両立したい」と「仕事も家庭生活も、充実させて両立したい」の合計)と回答した者は、男性では学園都市と中丹で多くなっており、一方で相楽東部は40%を下回るなど他の地域より特に少なくなっている。また、丹後と相楽東部では「仕事を優先したい」が他の地域より多くなっている。女性で「両立」と回答した者は、乙訓と山城北部が多く、一方で丹後と相楽東部で少なくなっている。また、男性と同様に丹後と相楽東部で「仕事を優先したい」が他の地域と比べ多くなっている。

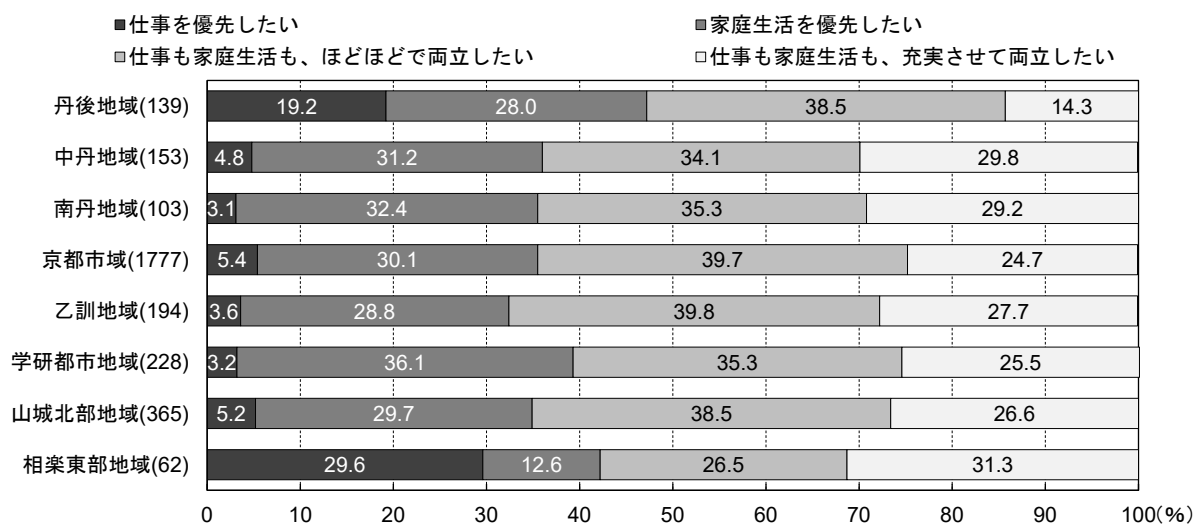
(図 2.9.22)

図 2.9.22 地域別の仕事と家庭の優先度の理想 (単数)

(男性)



(女性)



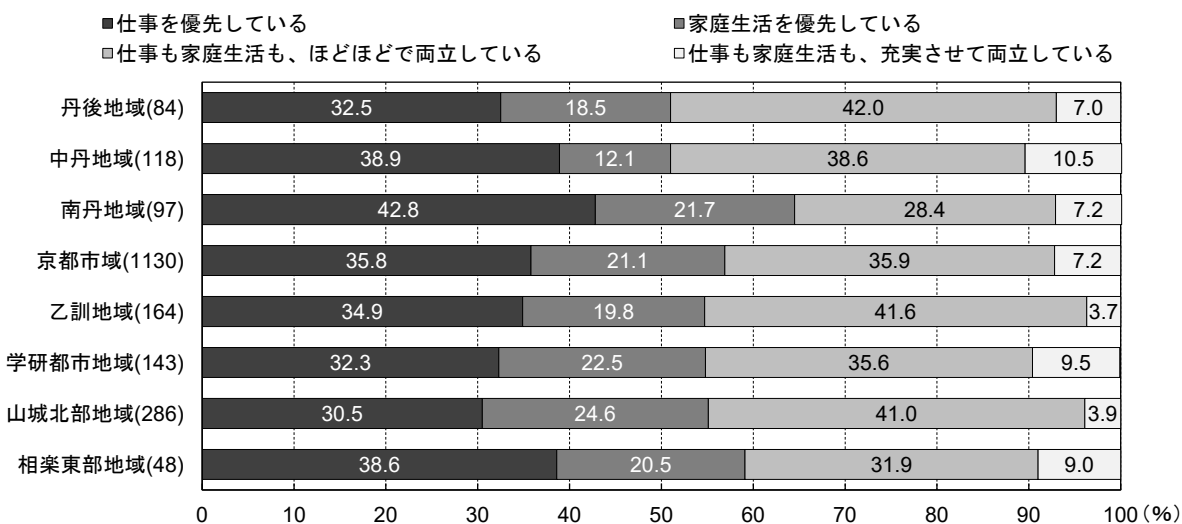
⑤ワークライフバランスの現実

(男性では丹後・中丹、女性では山城北部で「両立」の回答が多い)

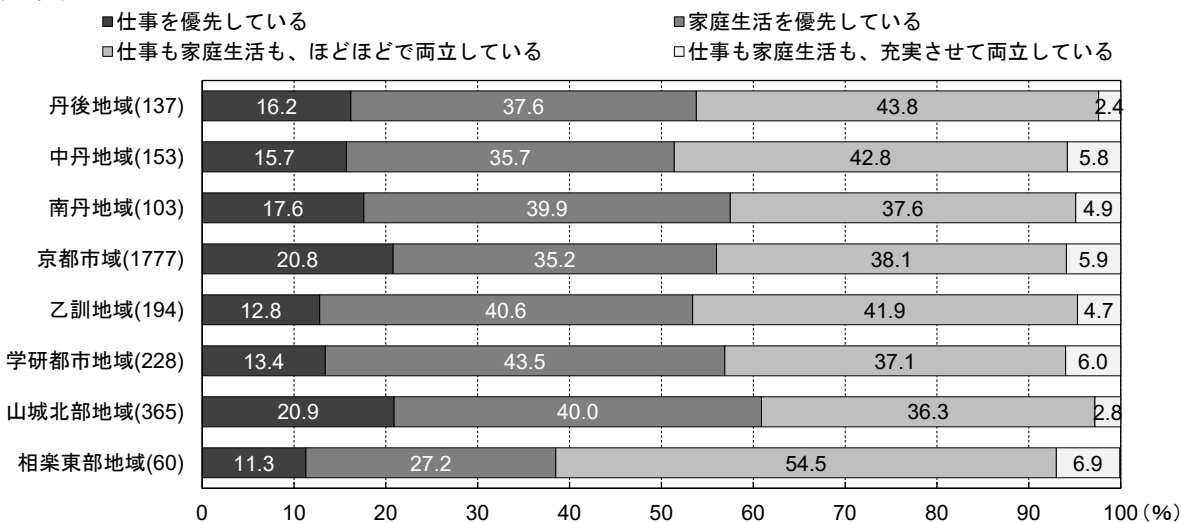
「理想」に対してワークライフバランスの「現実」を尋ねたところ、「両立」(「仕事も家庭生活も、ほどほどで両立したい」と「仕事も家庭生活も、充実させて両立したい」の合計)と回答した者は、男性では丹後と中丹で多くなっており、一方で南丹は40%を下回るなど他の地域より特に少なくなっている。また、南丹と相楽東部では「仕事を優先したい」が他の地域より多くなっている。女性で「両立」と回答した者は、相楽東部で特に多く、一方、山城北部で少なくなっている(図2.9.23)。

図 2.9.23 地域別の仕事と家庭の優先度の現実(単数)

(男性)



(女性)



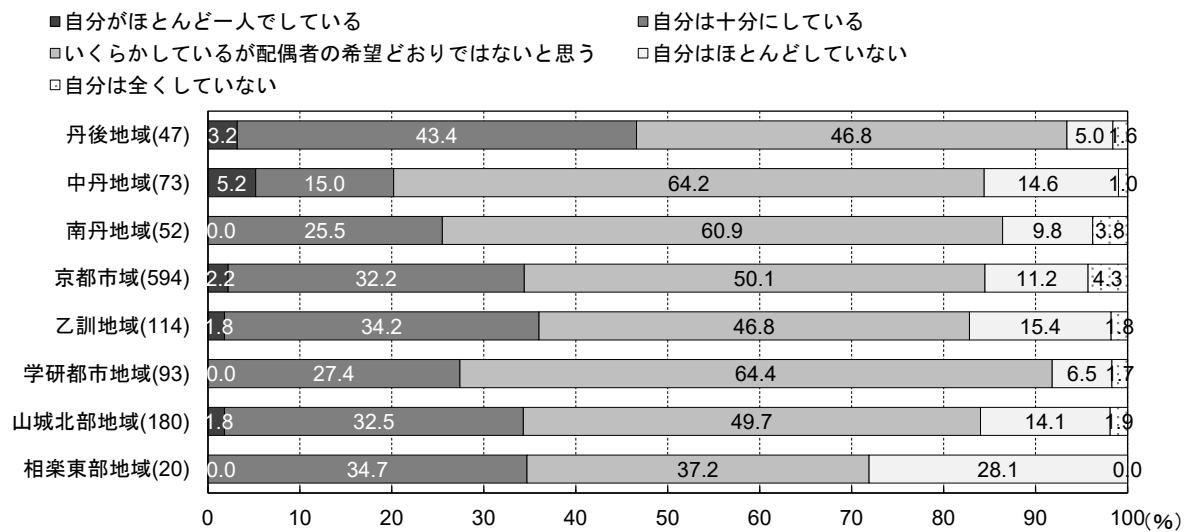
⑥家事・子育てへの関わり方

(家事・子育ての関わり方について男性は丹後、女性は学研都市が多い)

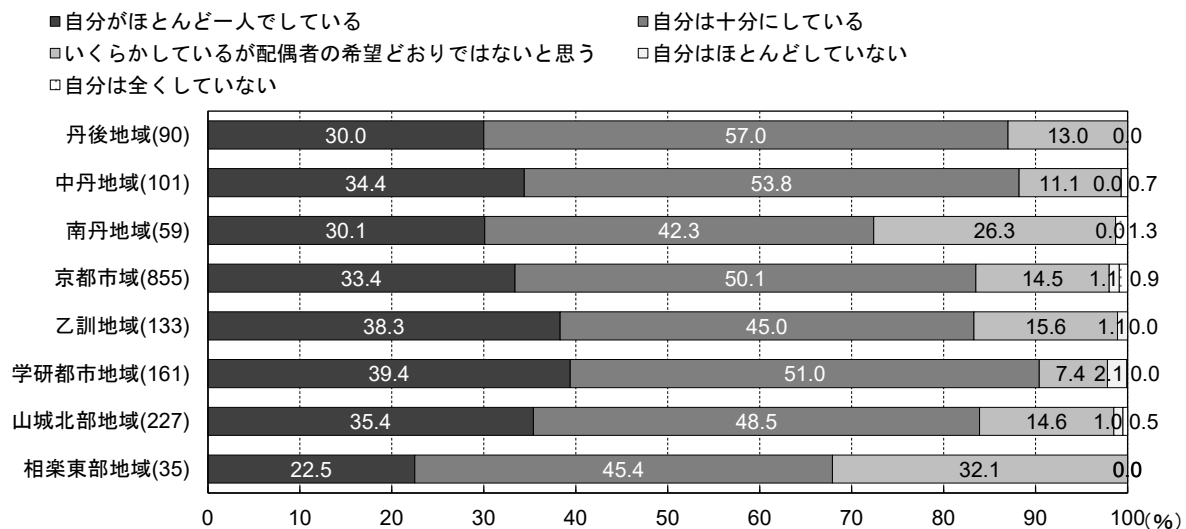
有配偶者に対して、自分の家事や子育てへの関わり方を把握した(図2.9.24)。男性では「している」「自分がほとんど一人でしている」と「自分は十分にしている」の計)と回答した者が丹後で最も多くなっている。女性では「している」と回答した者が学研都市で最も多くなっている。

図 2.9.24 地域別の自分の家事や子育てへの関わり方 (有配偶者、単数)

(男性)



(女性)



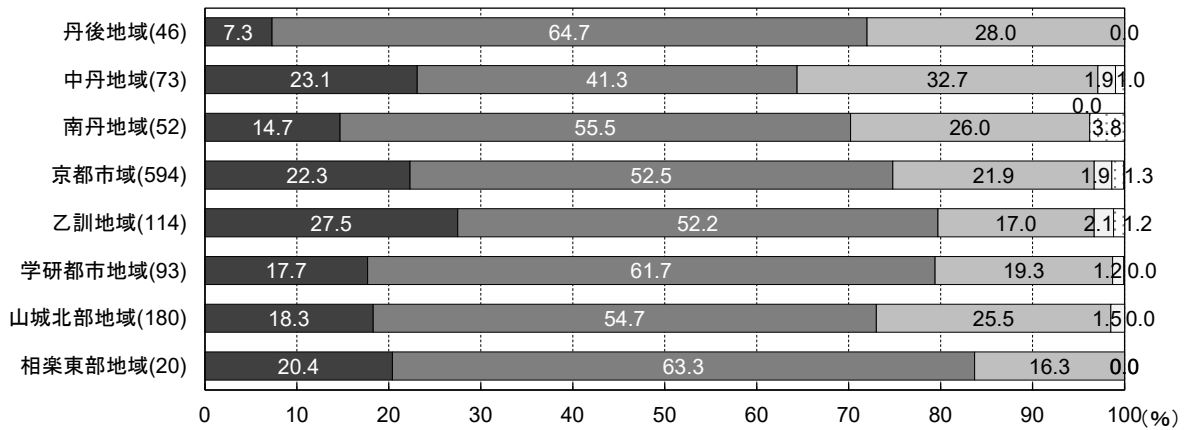
(学研都市で特に家事・子育ての関わり方のギャップは大きい)

有配偶者に対して、自分の家事や子育てへの関わり方を把握した(図 2.9.25)。男性では「配偶者はほとんどしていない」「配偶者は全くしていない」の回答はすべての地域でありみられないものの、女性では、学研都市が25%を上回るなど多くなっている。

図 2.9.25 地域別の仕事と家庭の優先度の現実(単数)

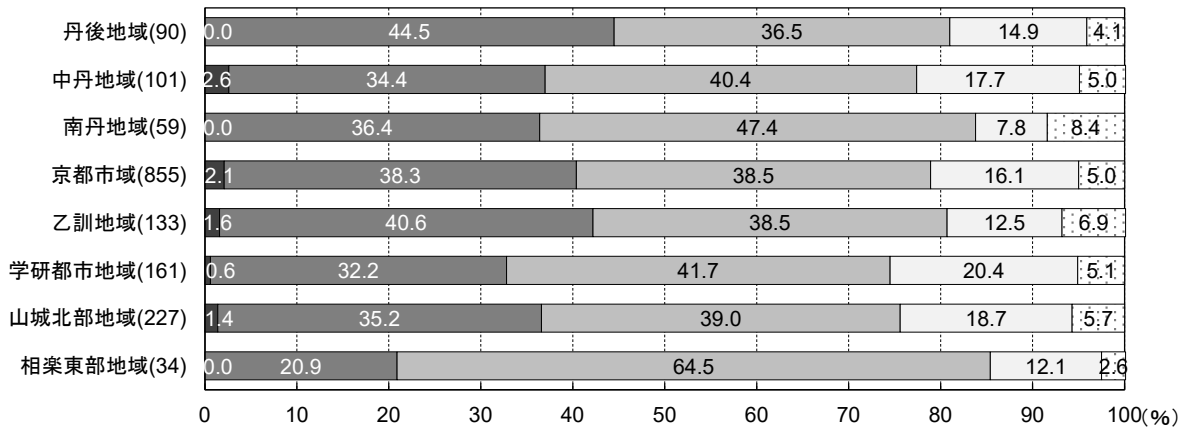
(男性)

- 配偶者がほとんど一人でしている
- 配偶者は自分の希望どおり十分にしている
- 配偶者はいくらかしているが希望しているほどではない
- 配偶者はほとんどしていない
- 配偶者は全くしていない



(女性)

- 配偶者がほとんど一人でしている
- 配偶者は自分の希望どおり十分にしている
- 配偶者はいくらかしているが希望しているほどではない
- 配偶者はほとんどしていない
- 配偶者は全くしていない



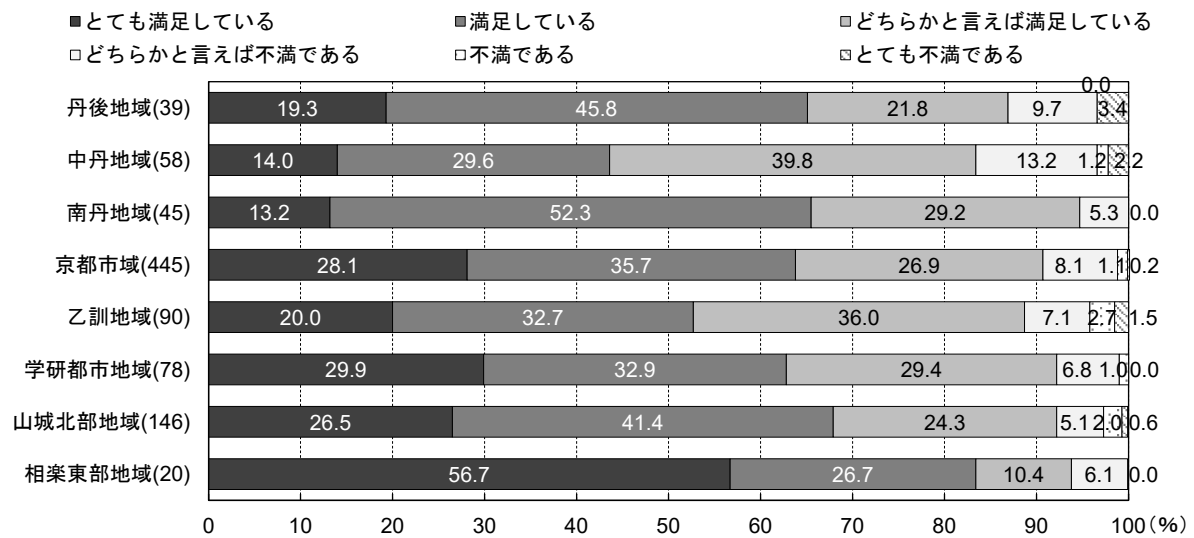
⑦子育てへの関わり方の満足度

(地域によって相互の満足度にはギャップがある)

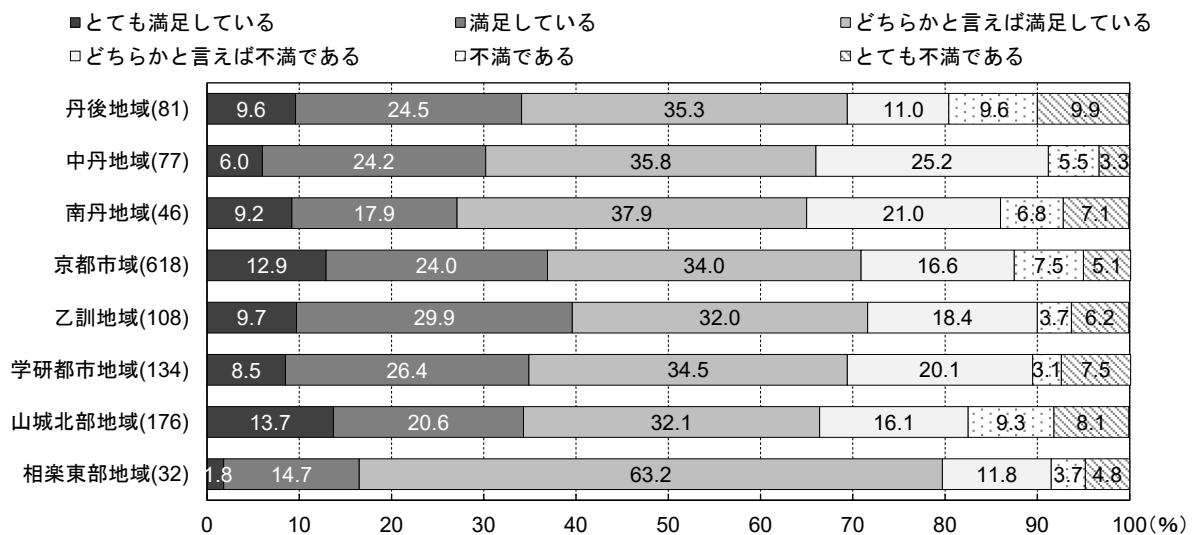
配偶者の子育てへの関わり方についての満足度を尋ねると、男性では「とても満足している」と「満足している」の合計は、相楽東部で最も多くなっている。女性では逆に相楽東部で最も少なく、乙訓で最も多くなっている(図2.9.26)。

図 2.9.26 地域別の配偶者の子育てへの関わり方に対する満足度
(有配偶者、子育てをしている者、単数)

(男性)



(女性)

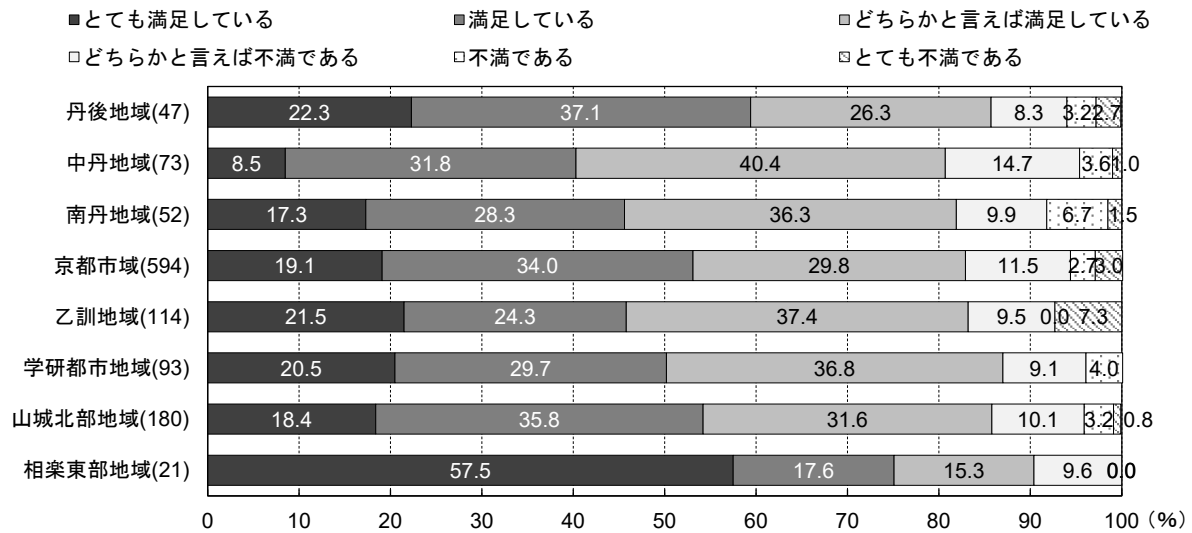


(地域によって夫婦関係の満足度にも男女間にいくらかギャップがみられる)

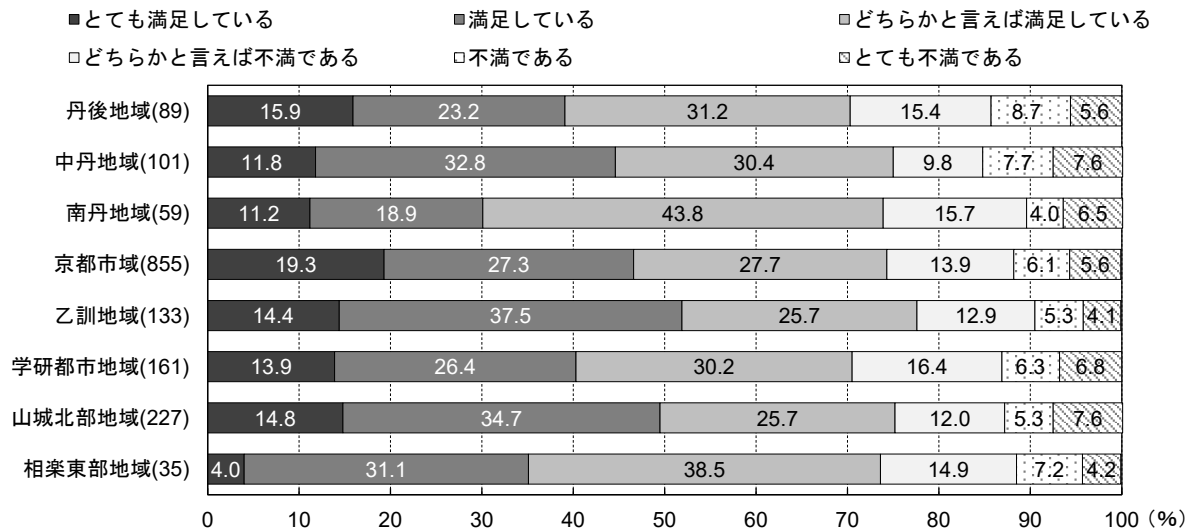
夫婦の関係について、どのように感じているかを尋ねると、「とても満足している」と「満足している」の合計が、男性では相楽東部で最も多く、女性では逆に相楽東部が最も少なく、乙訓で最も多くなっている(図2.9.27)。

図 2.9.27 地域別の夫婦関係の満足度 (有配偶者、単数)

(男性)



(女性)



10. 結婚時や子どもの成長に伴う住居地選択

(1) 結婚後の住居地選択

①地域特性の評価

(女性は「通勤利便性」と「生活利便性」を重視)

結婚後の住居地選択において、どのような地域特性を評価したか把握した(図 2.10.1)。

男性では、「通勤時間(職住の近接性)」を「とても評価した」が、27%と最も多く、次いで「交通利便性(鉄道、バス等の利用のしやすさ)」が21%と交通に関する地域特性が多くなっている。

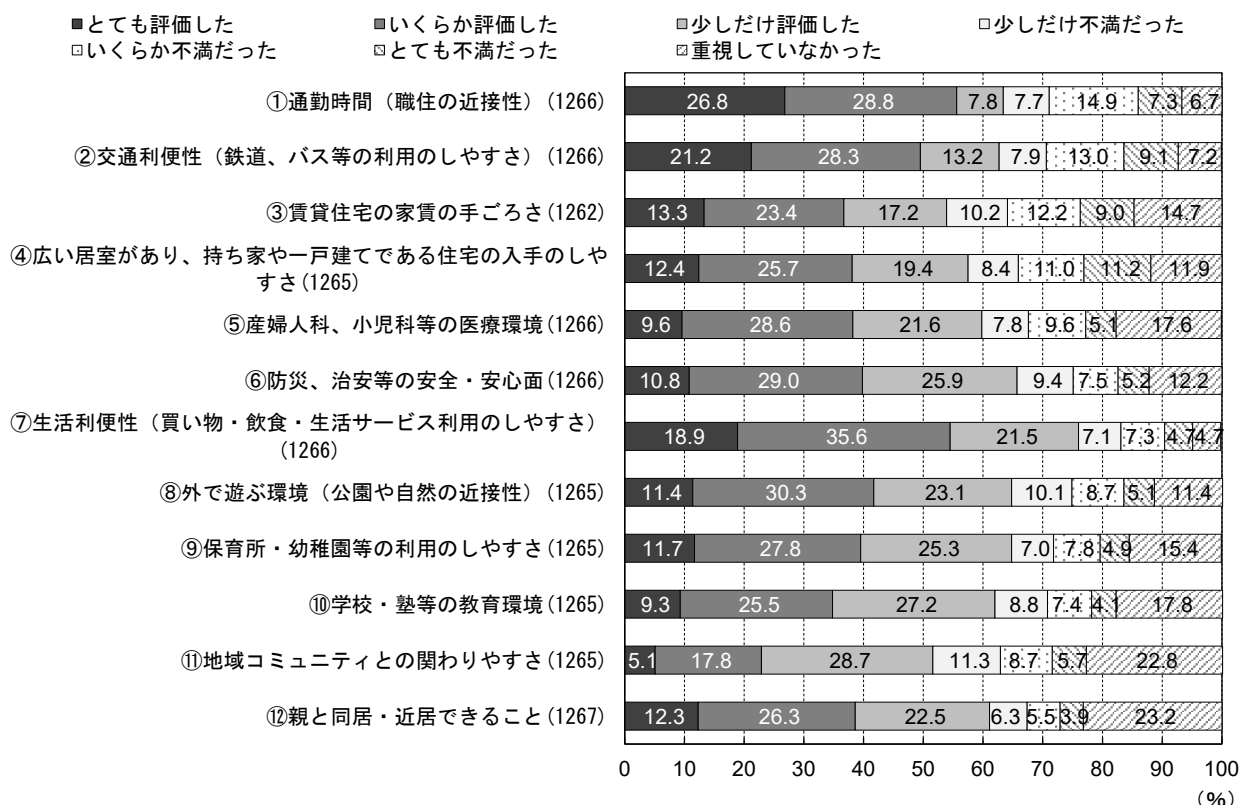
一方で、肯定的評価全体(「評価した」「とても評価した」「いづらか評価した」「少しだけ評価した」の合計)で見ると「生活利便性(買い物・飲食・生活サービスの利用のしやすさ)」が76%に達する。

女性においては、男性と同様に「通勤時間(職住の近接性)」を「とても評価した」と回答した方が、26%と最も多い。一方で「生活利便性(買い物・飲食・生活サービスの利用のしやすさ)」が22%と二番目に多く、特徴になっている。

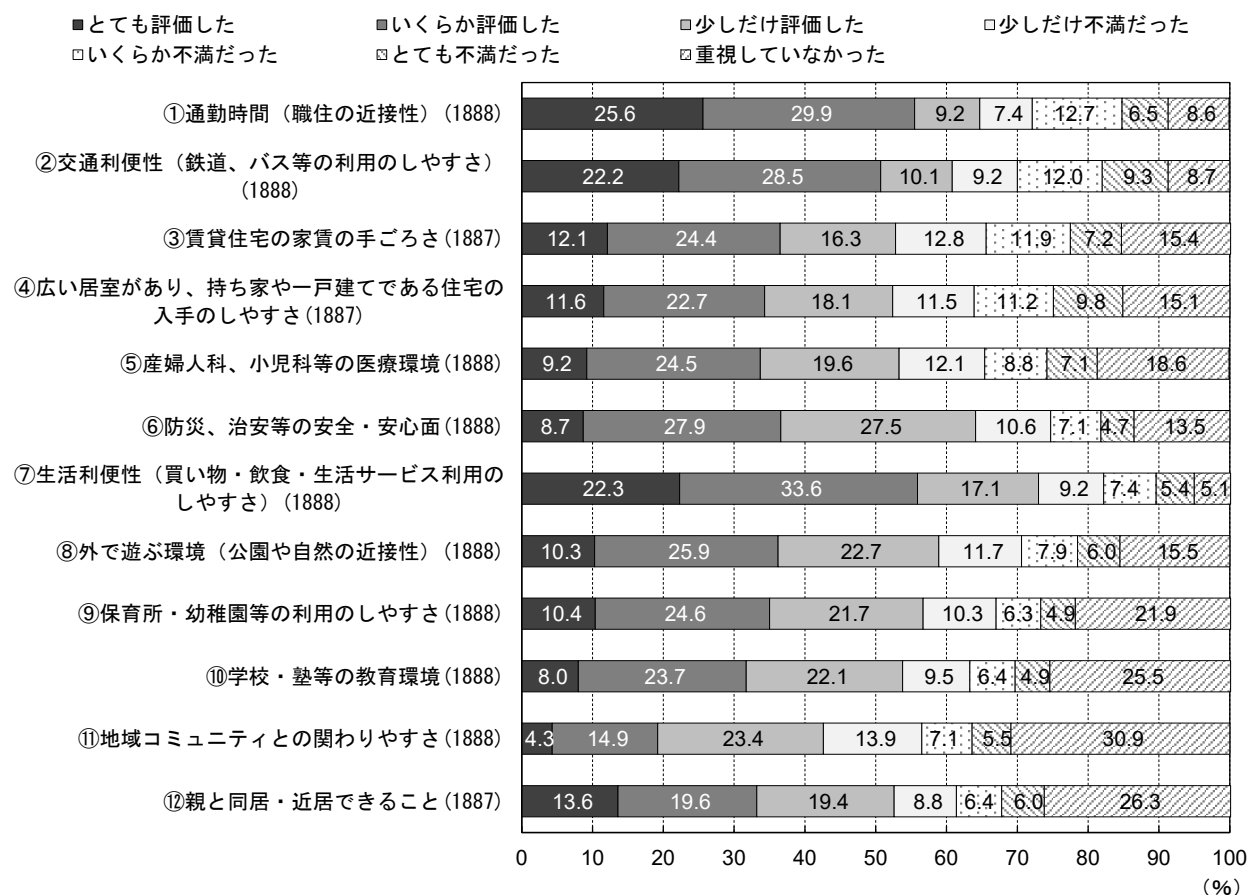
また、肯定的評価全体で見ると、「生活利便性(買い物・飲食・生活サービスの利用のしやすさ)」が73%と最も多くなる。次いで「防災、治安等の安全・安心面」が64%に上る。

図 2. 10. 1 結婚後に生活を始めた住居地を決めたときの地域特性の評価（単数）

（男性）



（女性）



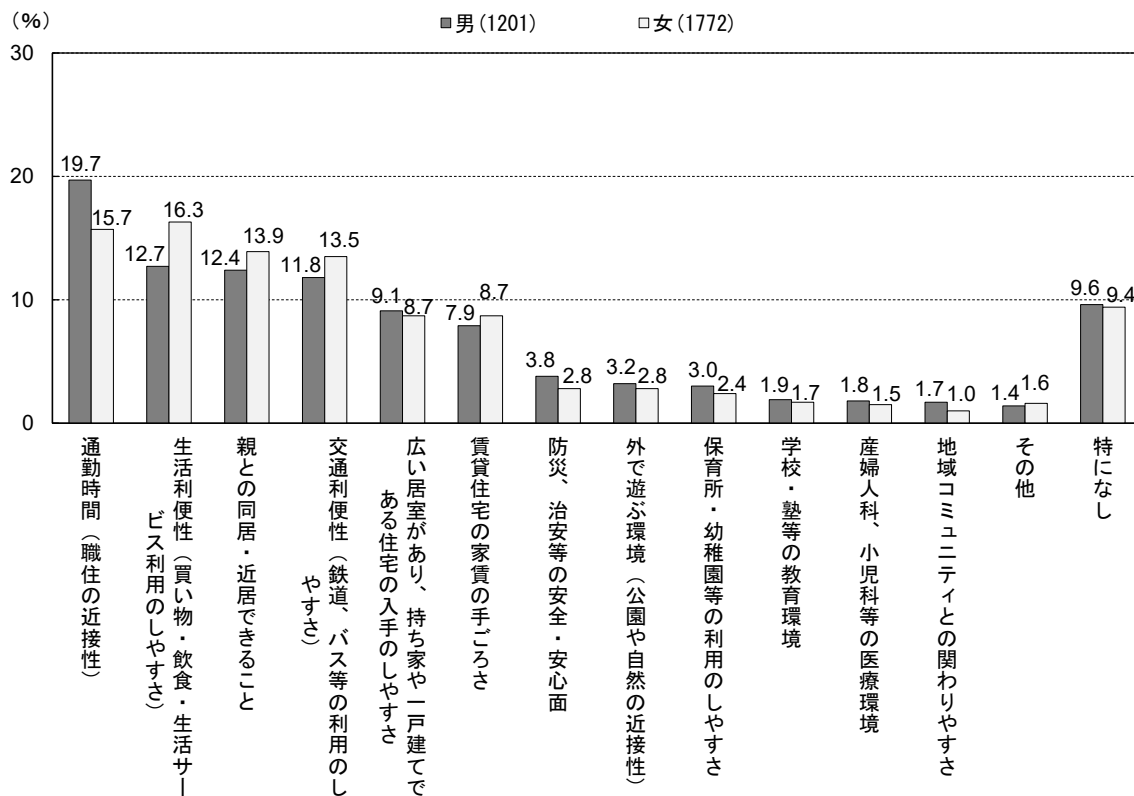
②住居地選択の一番の決め手（結婚時）

（男性は「通勤時間」、女性は「生活利便性」）

図 2.10.1 の評価項目のうち、住居地を選んだ一番の決め手となった地域特性を尋ねると、男性は「通勤時間（職住の近接性）」が 20%と最も多い（図 2.10.2）。これは、図 2.10.1 の「とても評価する」の回答と同じである。

女性の「一番の決め手」は「生活利便性（買い物・飲食・生活サービスの利用のしやすさ）」が 17%に達し、わずかではあるが「図 2.10.1」で「とても評価する」が多かった「職住近接性」と逆転している。

図 2.10.2 結婚後に生活を始めた住居地を選んだ一番の決め手（単数）



(2) 子育てに関わる住居地選択

①子どもに関わる転居

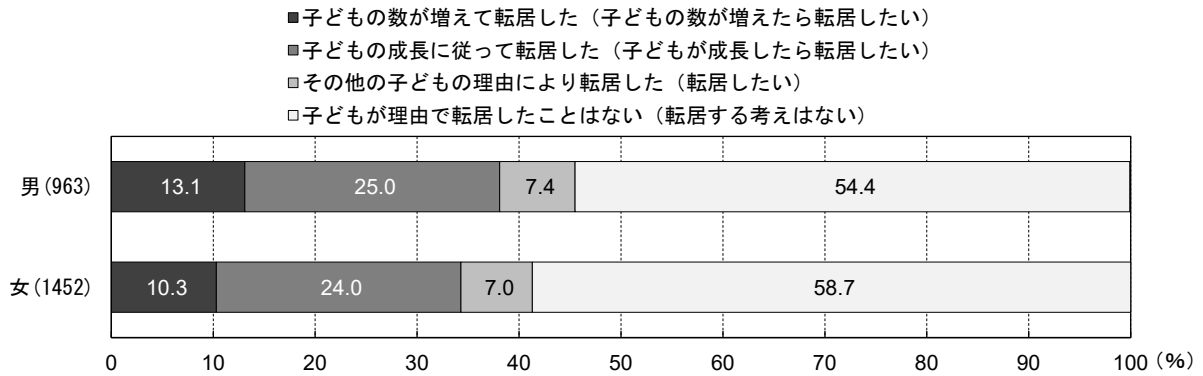
(子育て世帯の半数近くが子どもに関わる転居を経験する)

現在、子育てをしている者を対象に、子供の出生や子どもの成長に伴って転居をした(将来の希望を含む)ことがあるかを尋ねた。

その結果、子どもの数、子どもの成長に、その他の理由を加えると、男性で46%、女性で41%は、「転居した(転居したい)」と回答している(図2.10.3)。子育て世帯の半数近くは、子どもに関わる転居を経験すると考えられる。

また、子どもに関わる転居の理由は、「子どもの成長」が最も多く、男女とも全体の約4分の1の回答を占める。

図 2.10.3 子どもの出生や、子どもの成長に伴う転居(単数)



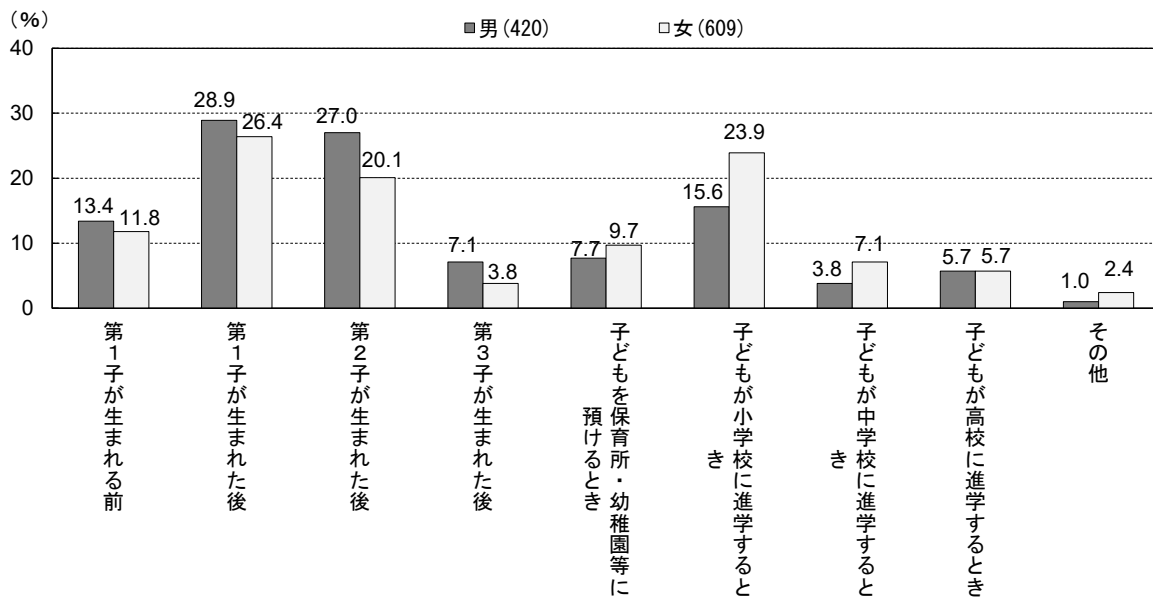
②子どもに関わる転居のタイミング

(「第1子が生まれた後」が最も多い)

図2.10.3で「転居した(転居したい)」と回答した者を対象にして、転居した(転居したい)タイミングを尋ねた。その結果、「第1子が生まれた後」が最も多い(男性29%、女性26%)(図2.10.4)。次いで、男性では「第2子が生まれた後」が27%に上る。女性では20%であった。女性では、「子どもが小学校に進学するとき」が二番目に多く、24%の回答がある(男性16%)。これらの回答は相互に関連し合っていると考えられる。

この他では、「第1子が生まれる前」や「子どもを保育所・幼稚園に預ける時」が10%程度の回答となっており、この二つも関連性が推察される。

図 2.10.4 転居した（転居したい）タイミング（複数）



③地域特性の評価

（結婚後に比べ、広い住宅、保育所・幼稚園等に関わる回答が増えている）

図 2.10.3 で「転居した（転居したい）」と回答した方に、子どもの出生や成長に伴う転居において住居地を決めるときに、どのような地域特性を評価したかを尋ねた。

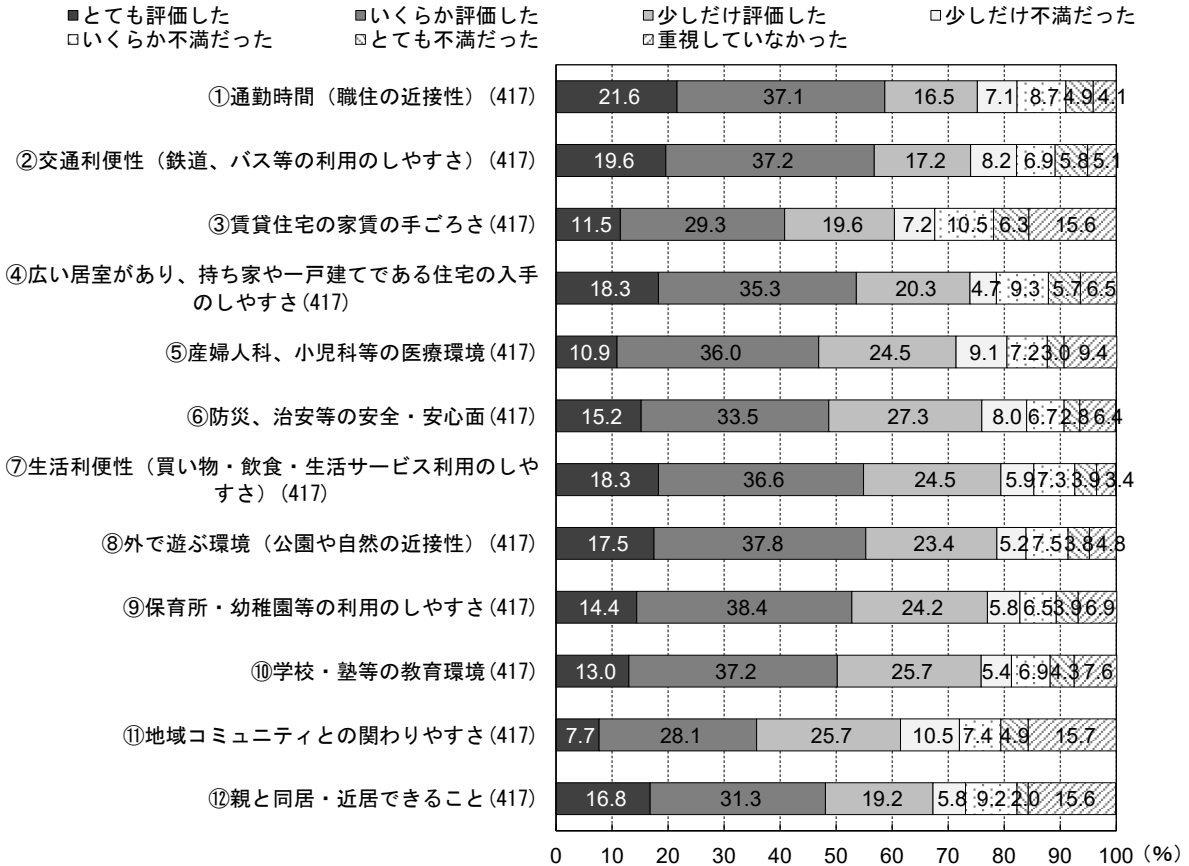
肯定的評価全体では（「とても評価した」「いくらか評価した」「少しだけ評価した」の合計）でみると、男性は、「生活利便性（買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ）」と「外で遊ぶ環境（公園や自然の近接性）」が79%と、ほぼ80%に達する（図 2.10.5）。また、「通勤時間（職住の近接性）」も75%に上る。

また、図 2.10.1 の結婚後に住居地選択と比較すると、「広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ」「保育所・幼稚園等の利用のしやすさ」「学校・塾頭の教育環境」を評価する者が増えている。

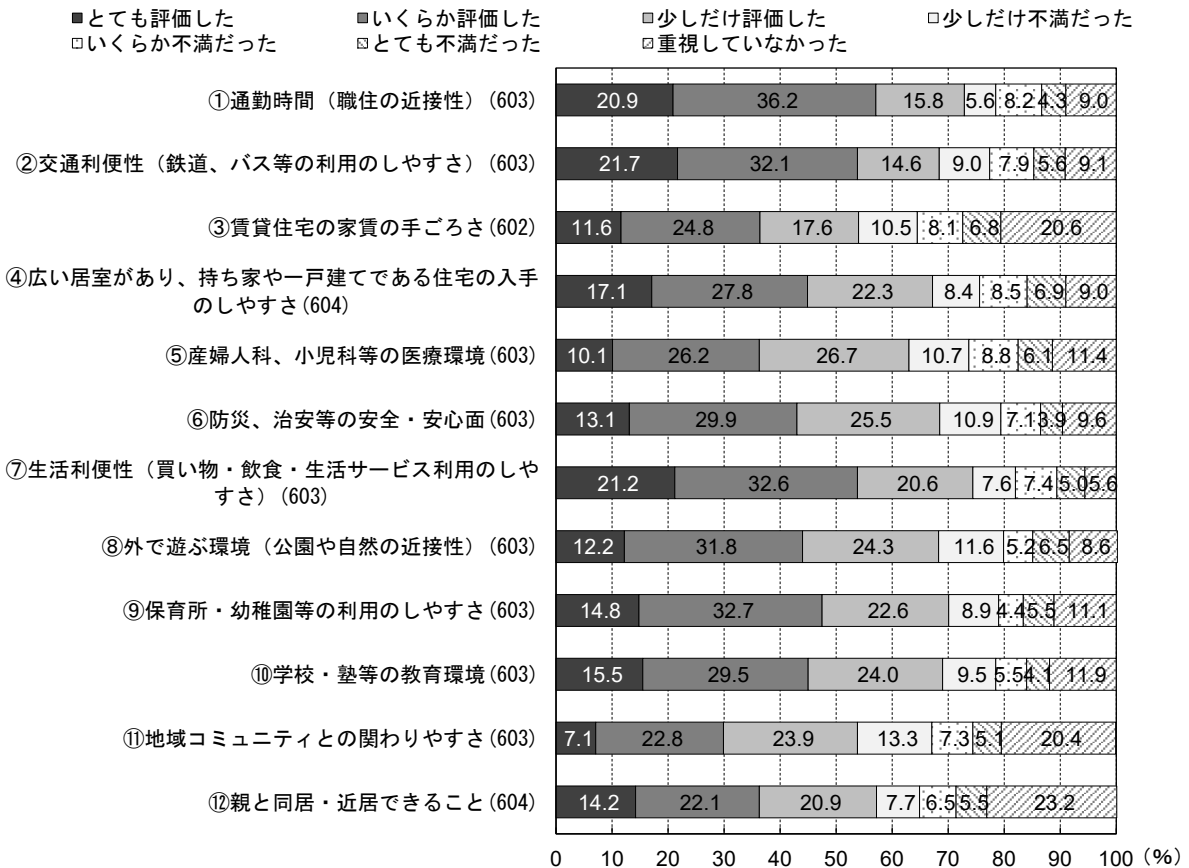
女性でも、男性と同様、「生活利便性（買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ）」が、肯定的評価全体で74%に上り、「通勤時間（職住の近接性）」も73%になる。また、図 2.10.1 の結婚後の住居地選択と比べ、「広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ」「保育所・幼稚園等の利用のしやすさ」「学校・塾頭の教育環境」等の評価が増加することも男性と同様である。

図 2.10.5 子どもの出生、成長に伴う転居先の住居地を決めたときの地域特性の評価（単数）

(男)



(女)



②住居地選択の一番の決め手（子どもに関わる転居）

（男性は「通勤時間」、女性は「生活利便性」）

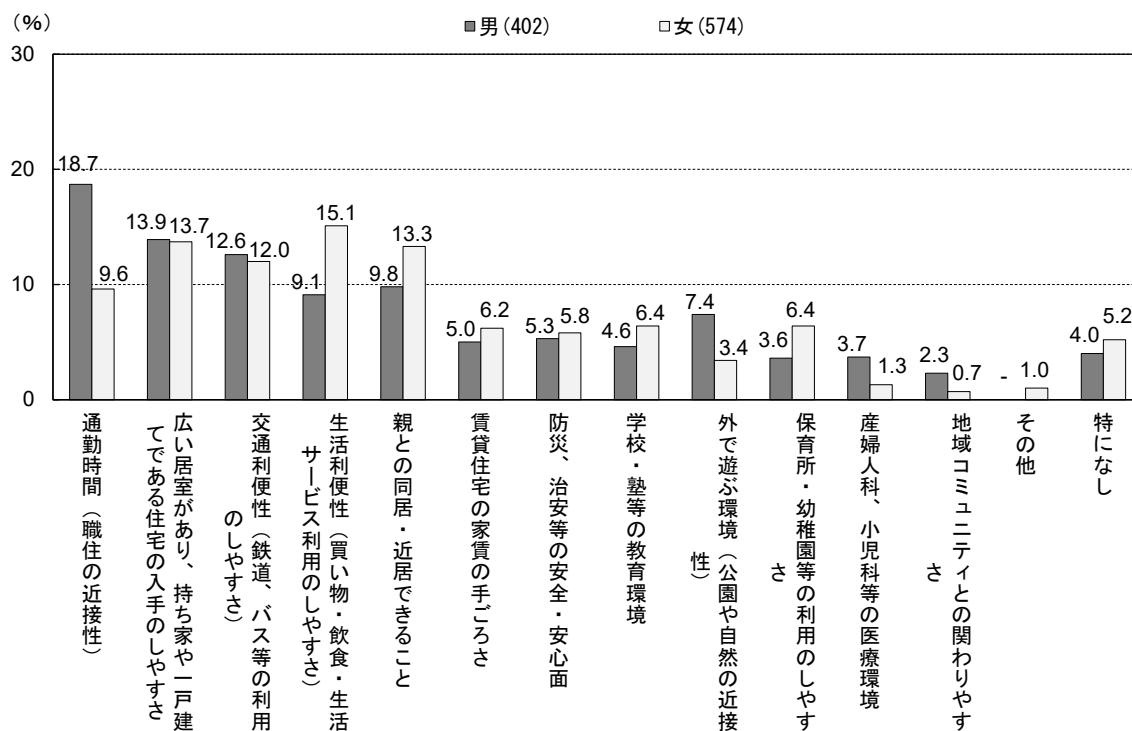
図 2.10.5 の地域特性のうち、一番の決め手を尋ねると、男性は「通勤時間（職住の近接性）」が19%で最も多い（図 2.10.6）。一方、女性の「通勤時間」は10%であり、男女で回答が分かれている。

男性では、上記のほか、「広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ」（14%）、「交通利便性（鉄道、バス等の利用のしやすさ）」（13%）等が続いており、これらは女性の回答も多い。

女性は「生活利便性（買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ）」を一番の決め手と回答する者が最も多く、15%に達する。「親との同居・近居できること」も13%に上り、これらの項目は男性の回答とやや傾向が異なる。

一般に子育て世帯の住居地選択の重点として指摘されることが多い「学校・塾等の教育環境」は、男性で5%、女性では6%であった。

図 2.10.6 子どもの出生、成長に伴う転居先の住居地を選んだ一番の決め手（単数）



(3) 地域別の集計

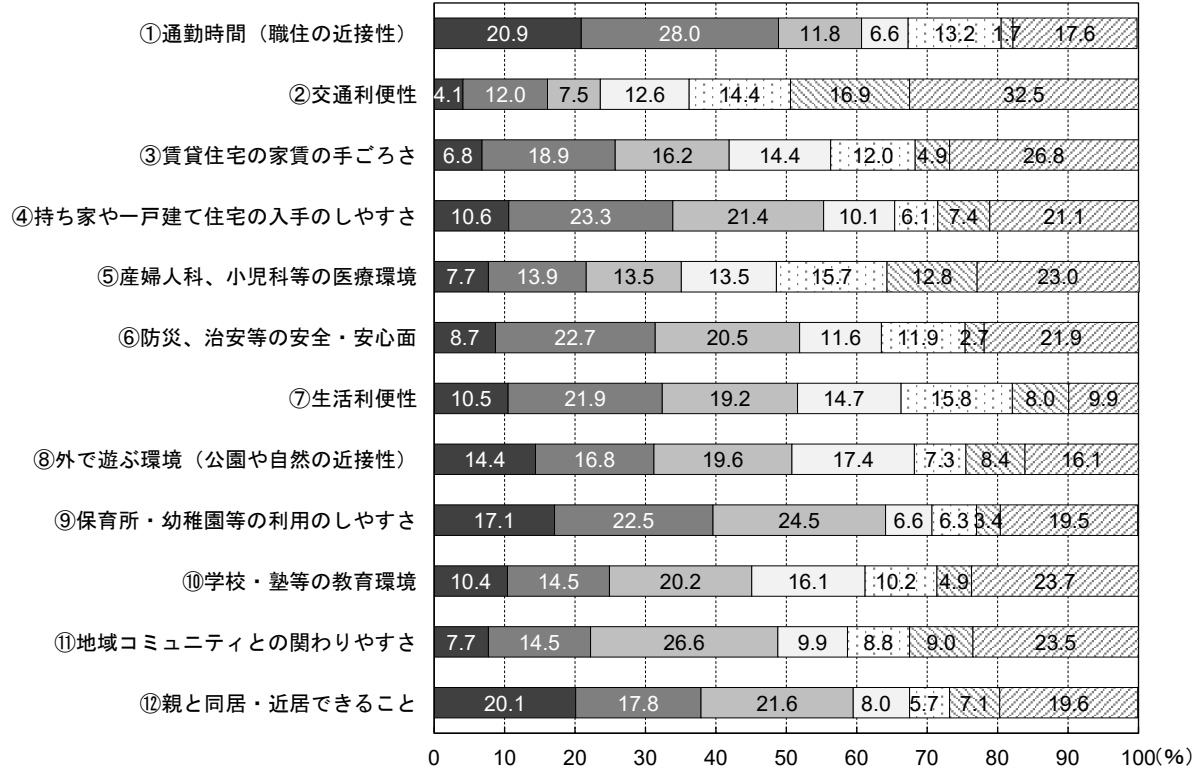
(結婚後の住居地選択)

結婚後の住居地選択において、どのような地域特性を評価したか把握した(図 2.10.7)。

図 2.10.7 地域別の結婚後に生活を始めた住居地を決めたときの地域特性の評価(単数)

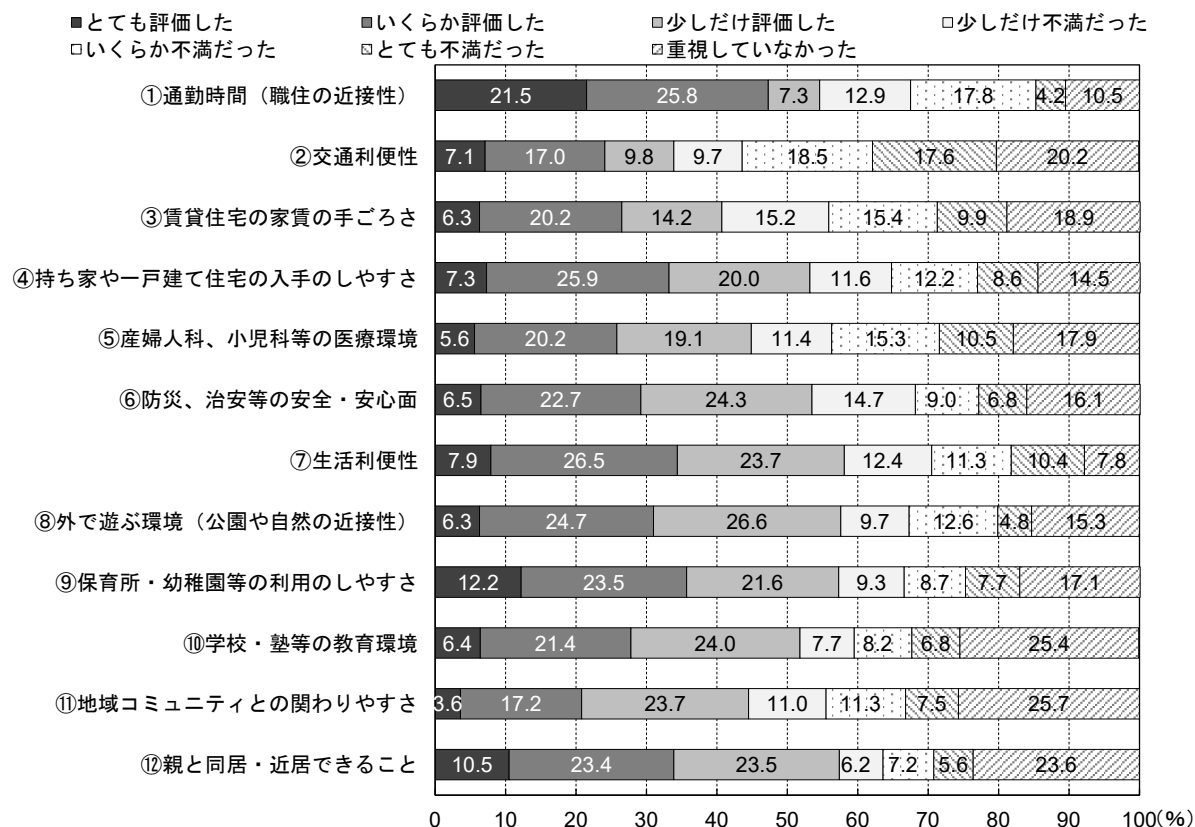
(丹後地域)

■とても評価した □いくらか評価した □少しだけ評価した □少しだけ不満だった
 □いくらか不満だった □とても不満だった □重視していなかった



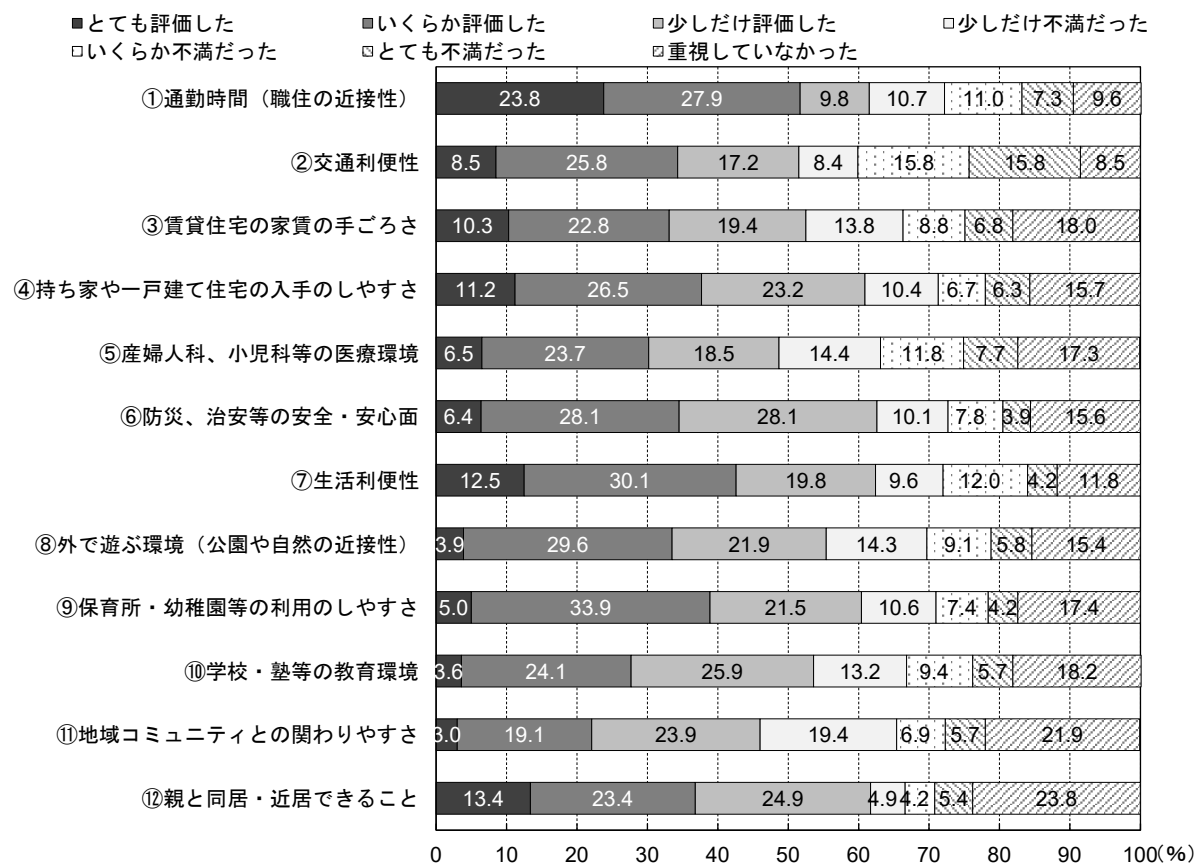
(中丹地域)

N=201



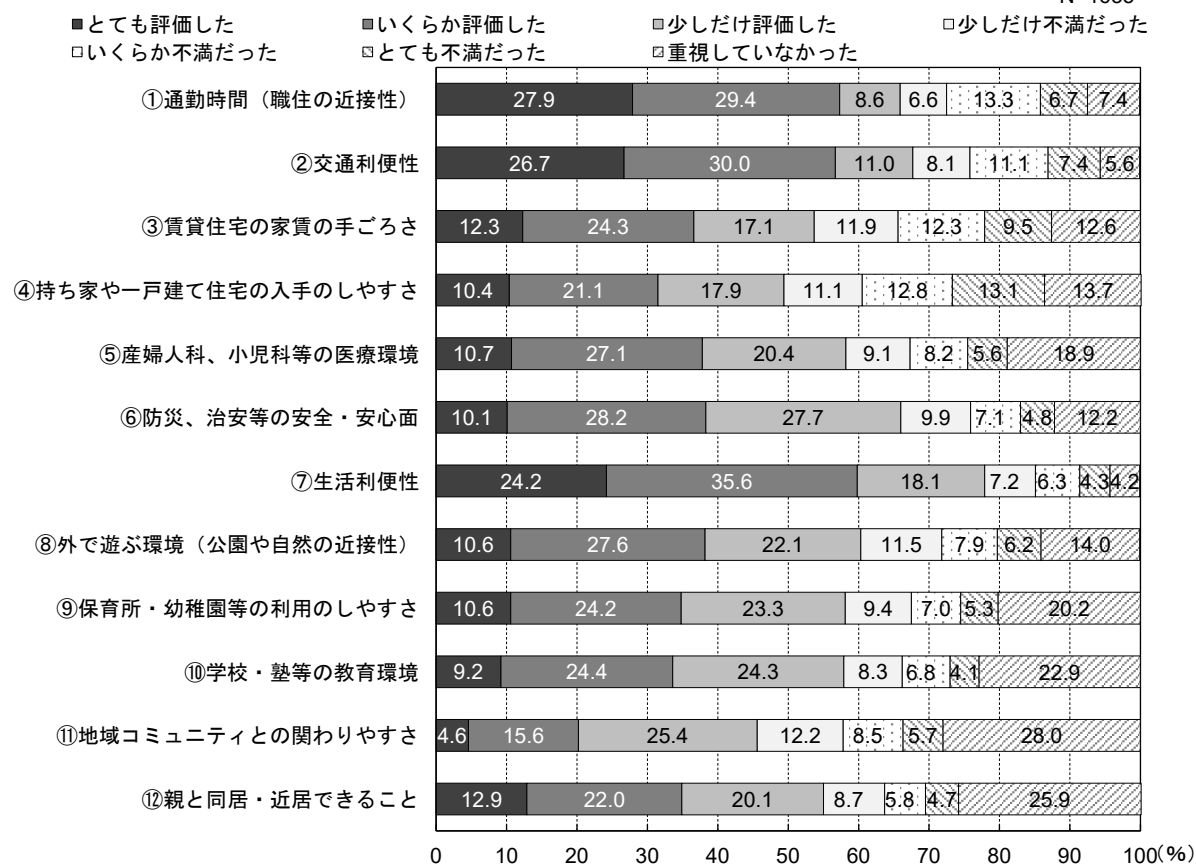
(南丹地域)

N=128



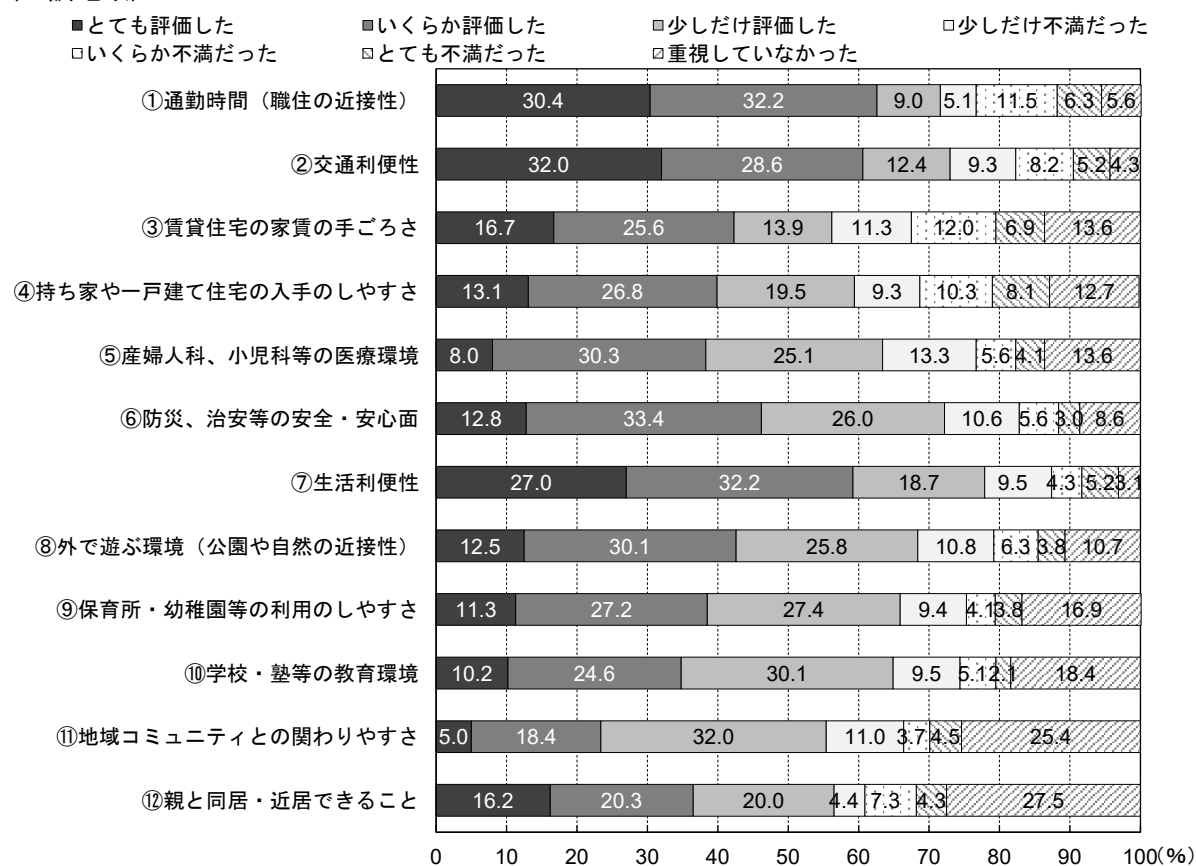
(京都市域)

N=1635



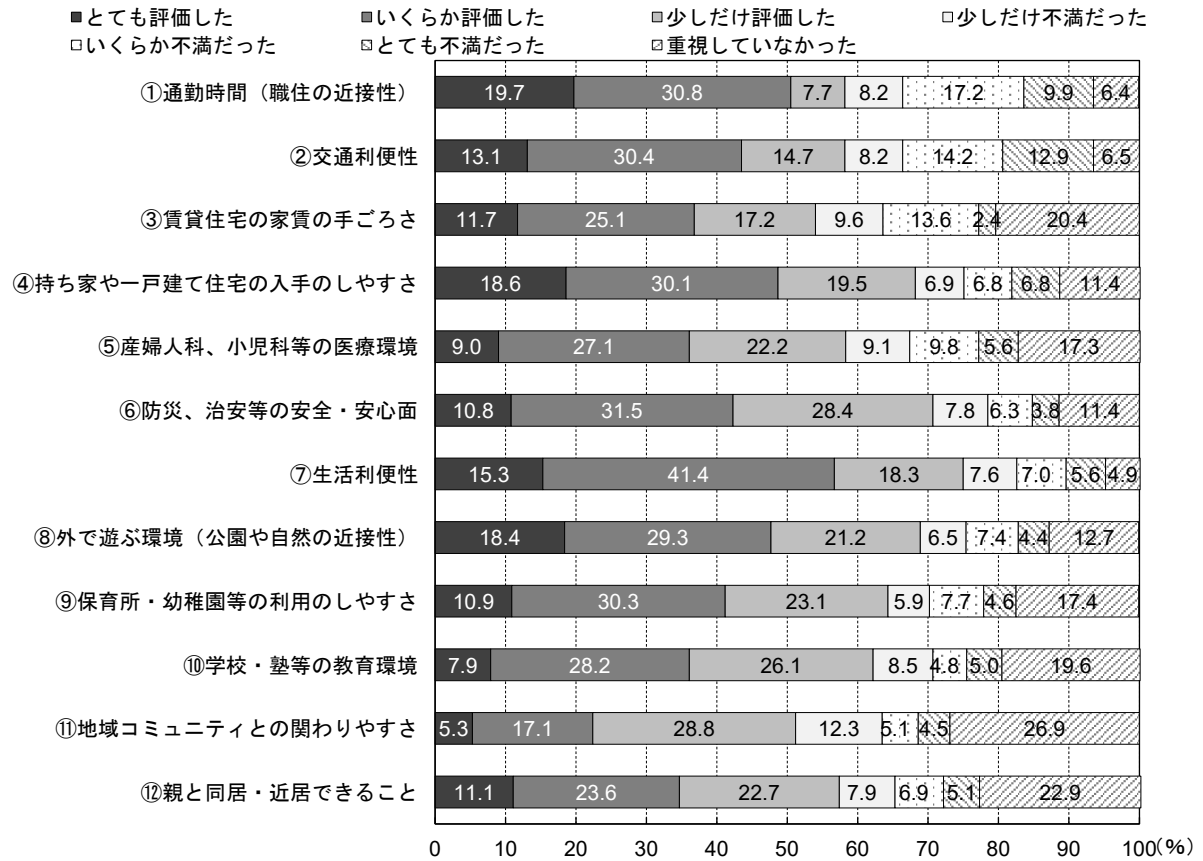
(乙訓地域)

N=266



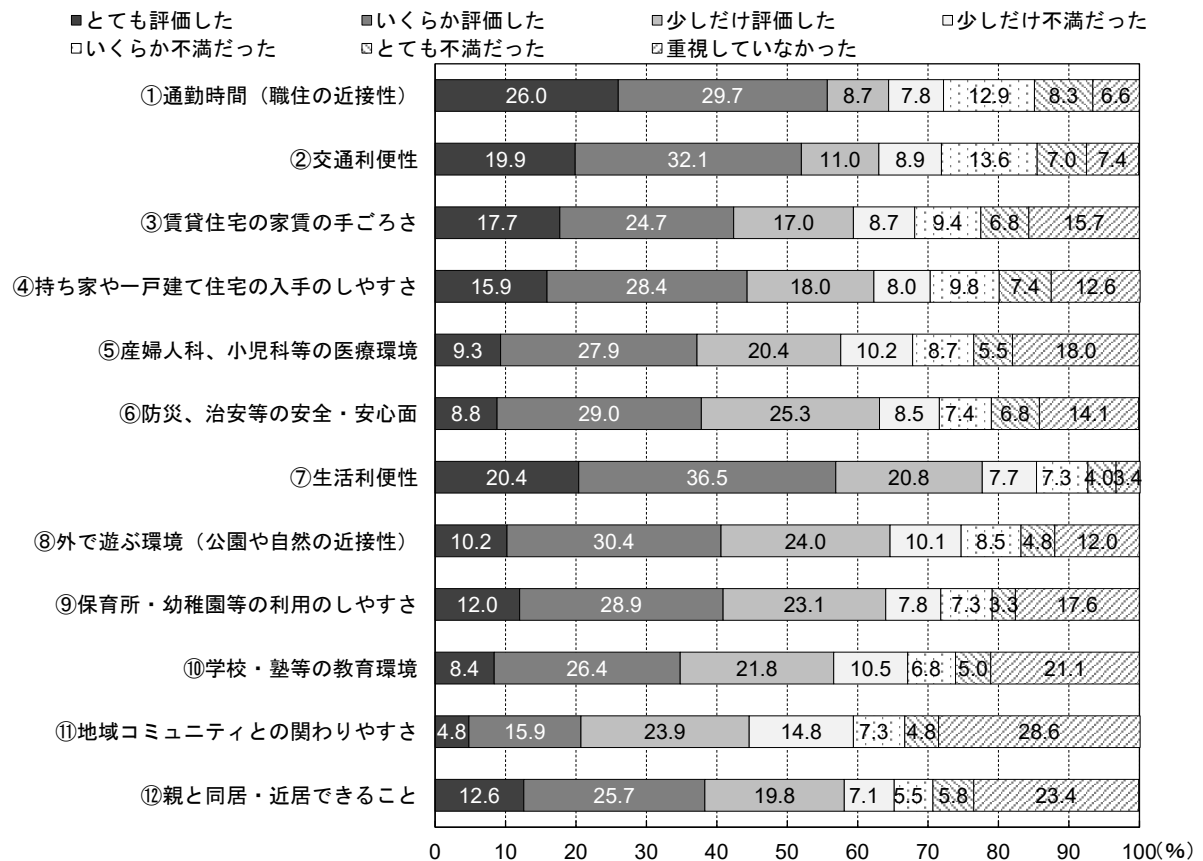
(学研都市地域)

N=268



(山城北部地域)

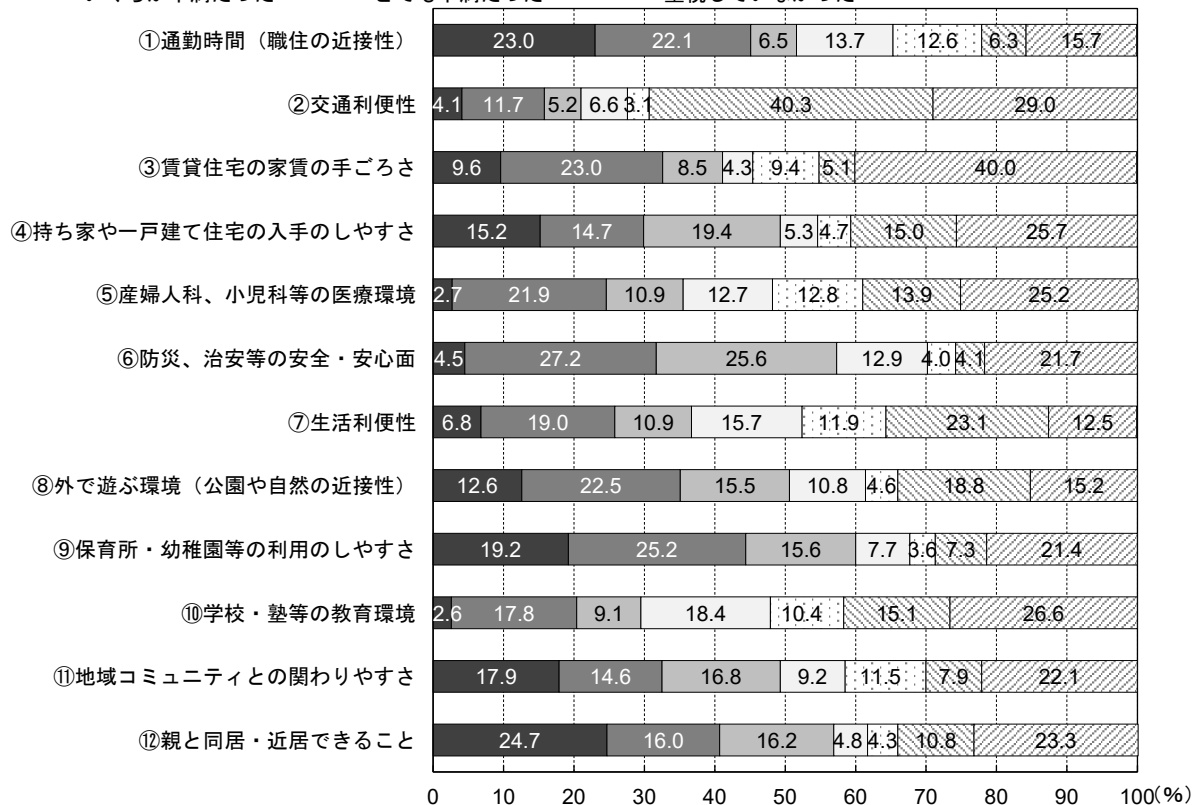
N=452



(相楽東部地域)

N=56

- とても評価した
- いくらか不満だった
- いくらか評価した
- とても不満だった
- 少しだけ評価した
- 重視していなかった
- 少しだけ不満だった



(男性は「交通利便性」を求め京都市域に、女性は「生活利便性」を求め京都市域に居住)

図 2.10.7 の地域特性のうち、一番の決め手を尋ねると、男性では、すべての地域で「通勤時間（職住の近接性）」の理由が最も多く、特に相楽東部が 31%と多くなっている。また、京都市域で「交通利便性（鉄道、バス等の利用のしやすさ）」が 14%と他の地域より多く、丹後で「賃貸住宅の家賃の手ごろさ」が 17%と他の地域より多くなっている。また、乙訓と山城北部では「産婦人科、少子化等の医療環境」が理由として多く選ばれている。女性では、「交通利便性」の他、「生活利便性（買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ）」が多く、特に京都市域で 18%と多くなっている。また、同様に「親との同居・近居できること」もすべての地域で多く、特に丹後で 26%と多くなっている（表 2.10.1）。

表 2.10.1 地域別の結婚後に生活を始めた居住地を選んだ一番の決め手（単数）
（男性） (％)

区分	N	通勤時間 (職住の近接性)	生活利便性 (買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ)	親との同居・近居できること	交通利便性 (鉄道、バス等の利用のしやすさ)	広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ	賃貸住宅の家賃の手ごろさ	防災、治安等の安全・安心面	外で遊ぶ環境（公園や自然の近接性）	保育所・幼稚園等の利用のしやすさ	学校・塾等の教育環境
全体	1201	19.7	12.7	12.4	11.8	9.1	7.9	3.8	3.2	3.0	1.9
丹後	50	20.3	10.6	13.6	3.7	10.1	16.9	1.6	4.3	0.0	0.0
中丹	76	21.3	12.1	8.4	5.9	14.3	0.9	4.9	1.2	5.0	2.2
南丹	56	23.6	11.4	13.5	4.1	13.7	5.8	0.0	2.8	5.5	4.9
京都市域	610	20.4	13.7	11.6	14.1	6.4	8.6	3.8	3.9	2.5	2.2
乙訓	114	21.1	10.9	11.1	12.4	3.9	10.0	6.2	2.0	3.8	0.0
学研都市	92	13.0	16.8	18.0	8.7	12.5	6.9	3.7	5.8	2.7	1.8
山城北部	180	18.0	9.3	14.2	12.2	14.9	7.9	3.8	0.8	3.2	1.7
相楽東部	23	30.8	0.0	27.6	0.0	9.0	12.8	0.0	0.0	3.8	0.0

区分	産婦人科、小児科等の医療環境	地域コミュニティとの関わりやすさ	その他	特になし
全体	1.8	1.7	1.4	9.6
丹後	0.0	2.6	0.0	16.3
中丹	1.6	3.7	1.8	16.7
南丹	0.0	0.0	2.7	12.0
京都市域	0.8	1.4	1.7	9.0
乙訓	4.8	4.0	2.6	7.1
学研都市	0.0	2.2	0.0	8.0
山城北部	5.4	0.5	0.4	7.7
相楽東部	0.0	5.3	5.3	5.3

(女性)

(%)

区分	N	生活利便性 (買い物・ 飲食・生活 サービス利 用のしやす さ)	通 勤 時 間 (職住の近 接性)	親 と の 同 居 ・ 近 居 で きること	交通利便性 (鉄道、バ ス等の利用 のしやす さ)	賃貸住宅の 家賃の手ご ろさ	広い居室が あり、持ち 家や一戸建 てである住 宅の入手の しやすさ	防災、治安 等の安全・ 安心面	外で遊ぶ環 境(公園や 自然の近接 性)	保育所・幼 稚園等の利 用のしやす さ	学校・塾等 の教育環境
全体	1772	16.3	15.7	13.9	13.5	8.7	8.7	2.8	2.8	2.4	1.7
丹後	85	6.6	16.6	26.2	0.0	5.3	8.5	0.0	6.7	5.7	0.0
中丹	110	15.7	19.7	14.1	1.7	11.5	10.8	5.2	1.4	1.6	2.2
南丹	61	12.2	10.0	12.8	11.3	4.7	14.4	0.0	2.6	7.0	0.0
京都市域	947	18.3	14.8	12.3	17.4	9.1	6.3	2.7	2.7	1.7	2.1
乙訓	142	14.4	24.7	12.6	20.0	5.2	4.1	2.2	4.3	3.6	1.2
学研都市	161	12.6	10.3	14.0	8.4	8.7	18.0	3.3	3.3	3.2	1.9
山城北部	238	16.3	16.9	18.6	8.7	9.4	10.9	3.6	2.0	2.3	0.8
相楽東部	28	2.0	21.7	11.5	0.0	2.0	22.5	5.9	7.2	0.0	5.9

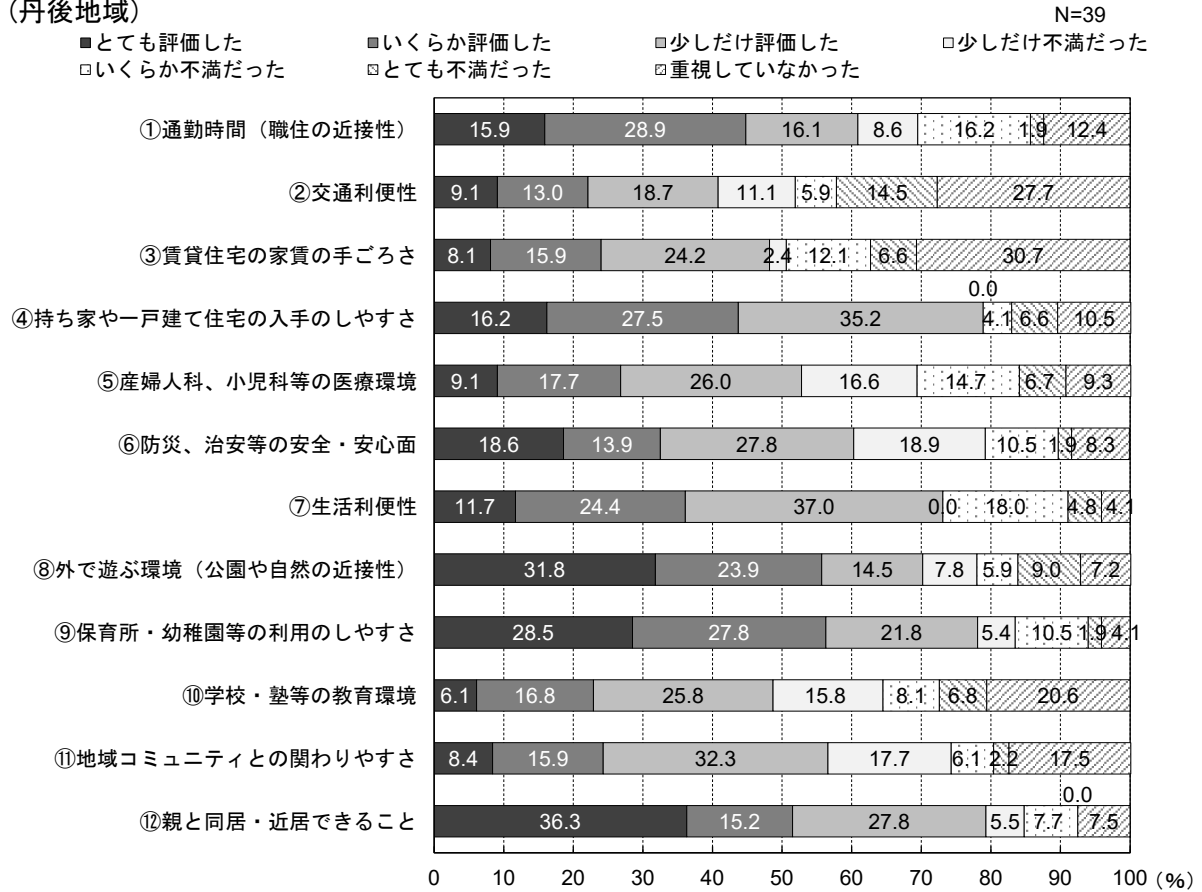
区分	産婦人科、 小児科等の 医療環境	地域コミュニ ティの関わり やすさ	その他	特になし
全体	1.5	1.0	1.6	9.4
丹後	1.9	1.2	0.9	20.4
中丹	2.1	0.0	0.8	13.4
南丹	3.1	5.0	3.8	13.1
京都市域	1.2	1.0	1.3	9.2
乙訓	1.1	0.0	1.5	5.1
学研都市	2.3	0.8	3.2	10.0
山城北部	1.2	1.2	1.3	6.9
相楽東部	0.0	0.0	0.0	21.3

(地域別の子どもの出生や、子どもの成長に伴う転居)

現在、子育てをしている者を対象に、子供の出生や子どもの成長に伴って転居をした(将来の希望を含む)ことがあるかを把握した(図 2.10.8)。

図 2.10.8 地域別の子どもの出生や、子どもの成長に伴う転居(単数)

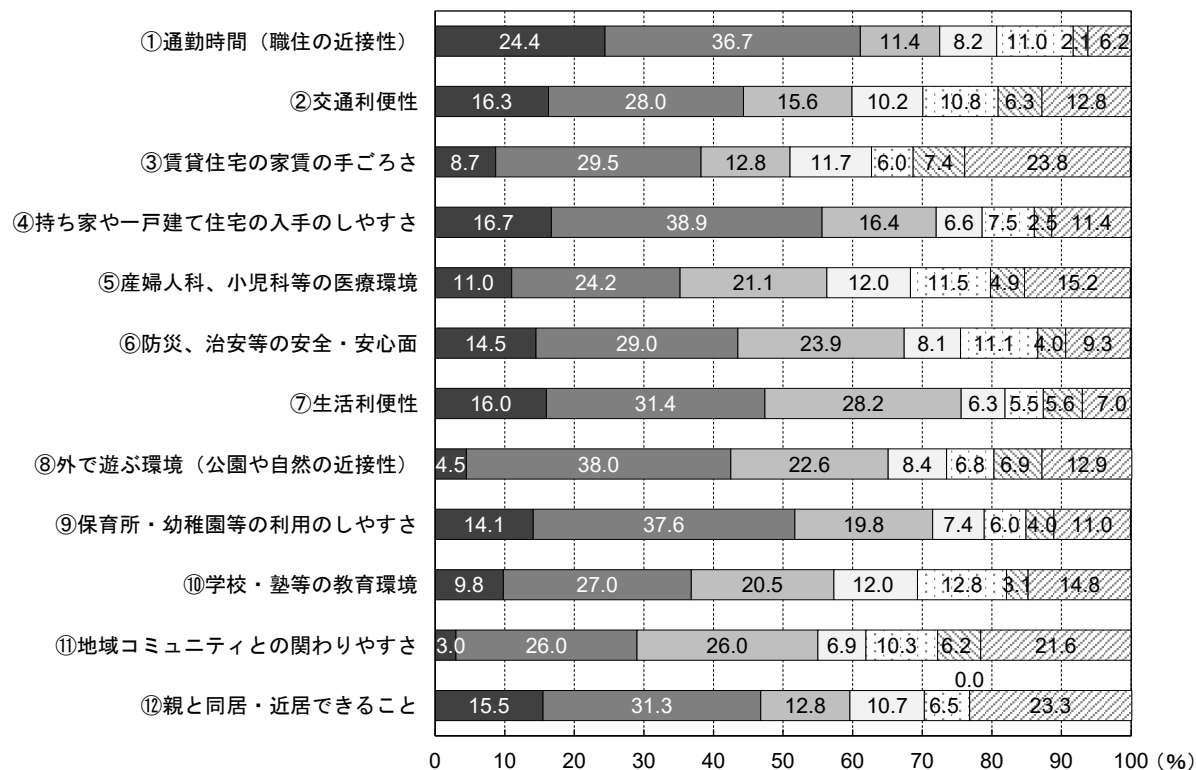
(丹後地域)



(中丹地域)

N=69

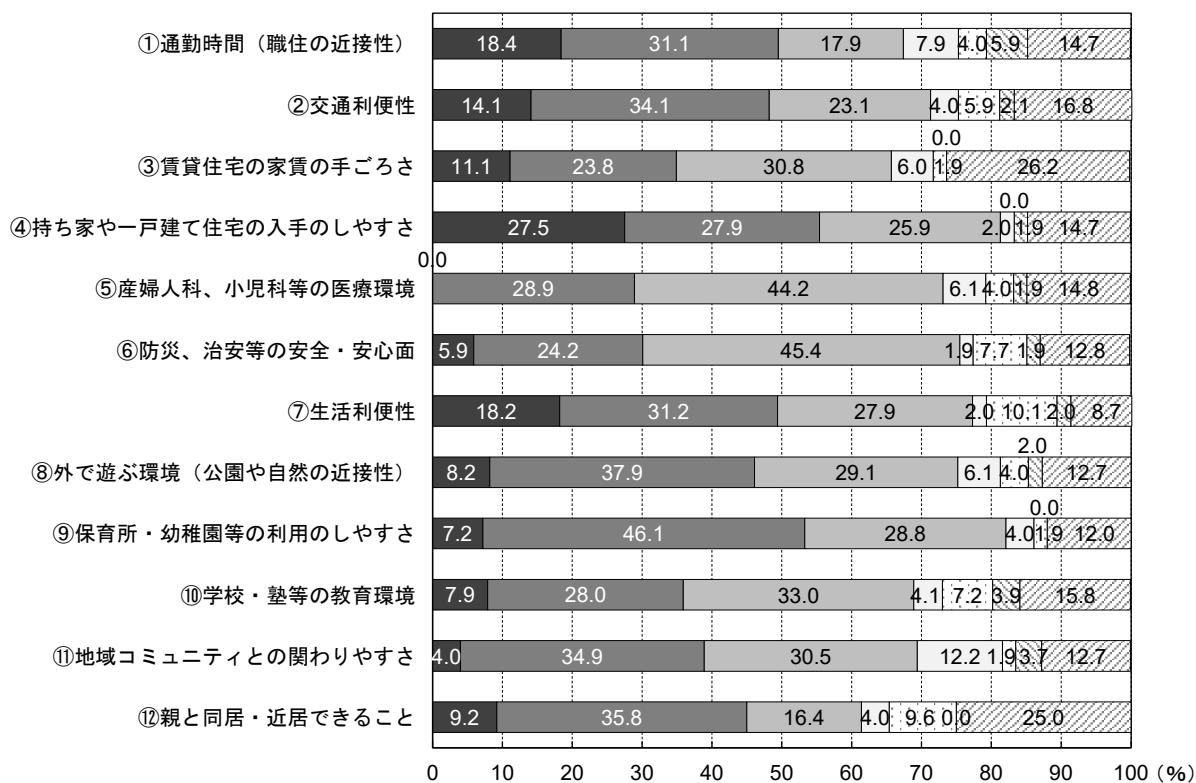
■とても評価した □いづらか不満だった
 □いづらか評価した □とても不満だった
 □少しか評価した □重視していなかった
 □少しか不満だった



(南丹地域)

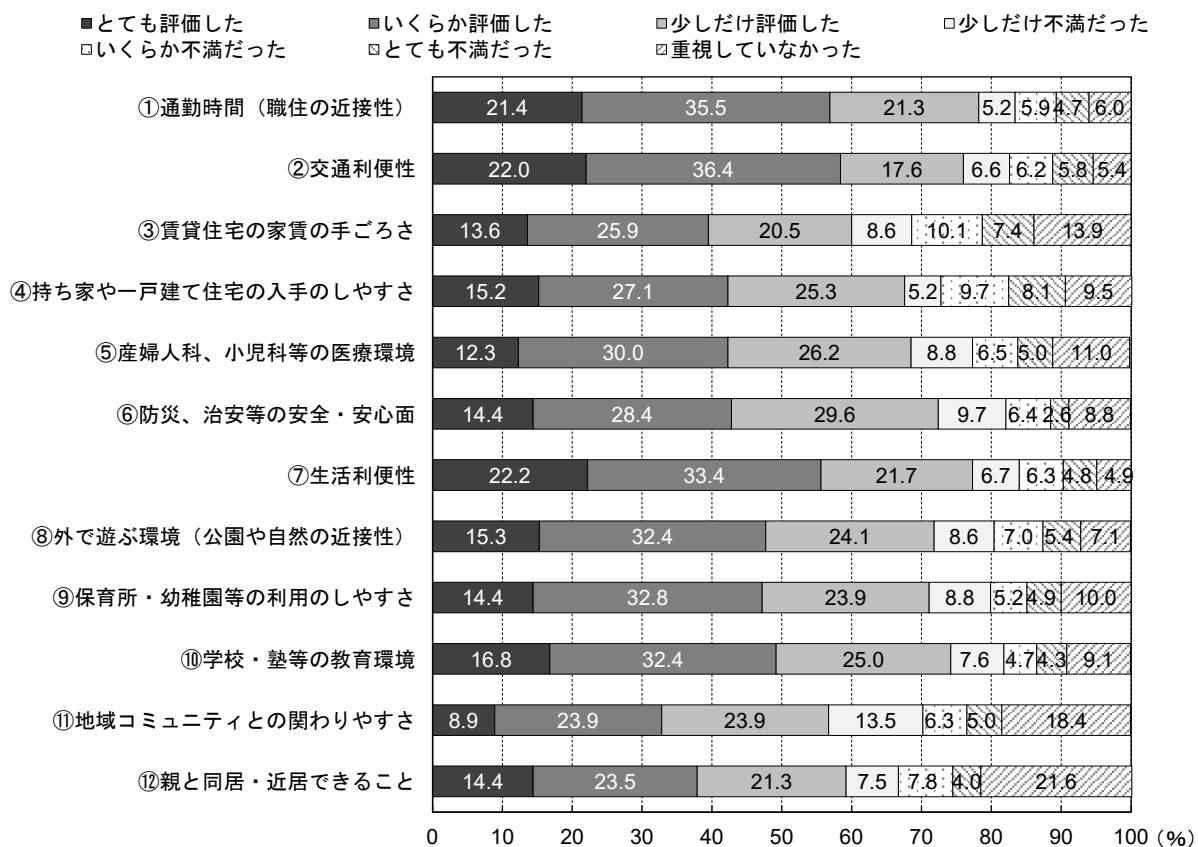
N=43

■とても評価した □いづらか不満だった
 □いづらか評価した □とても不満だった
 □少しか評価した □重視していなかった
 □少しか不満だった



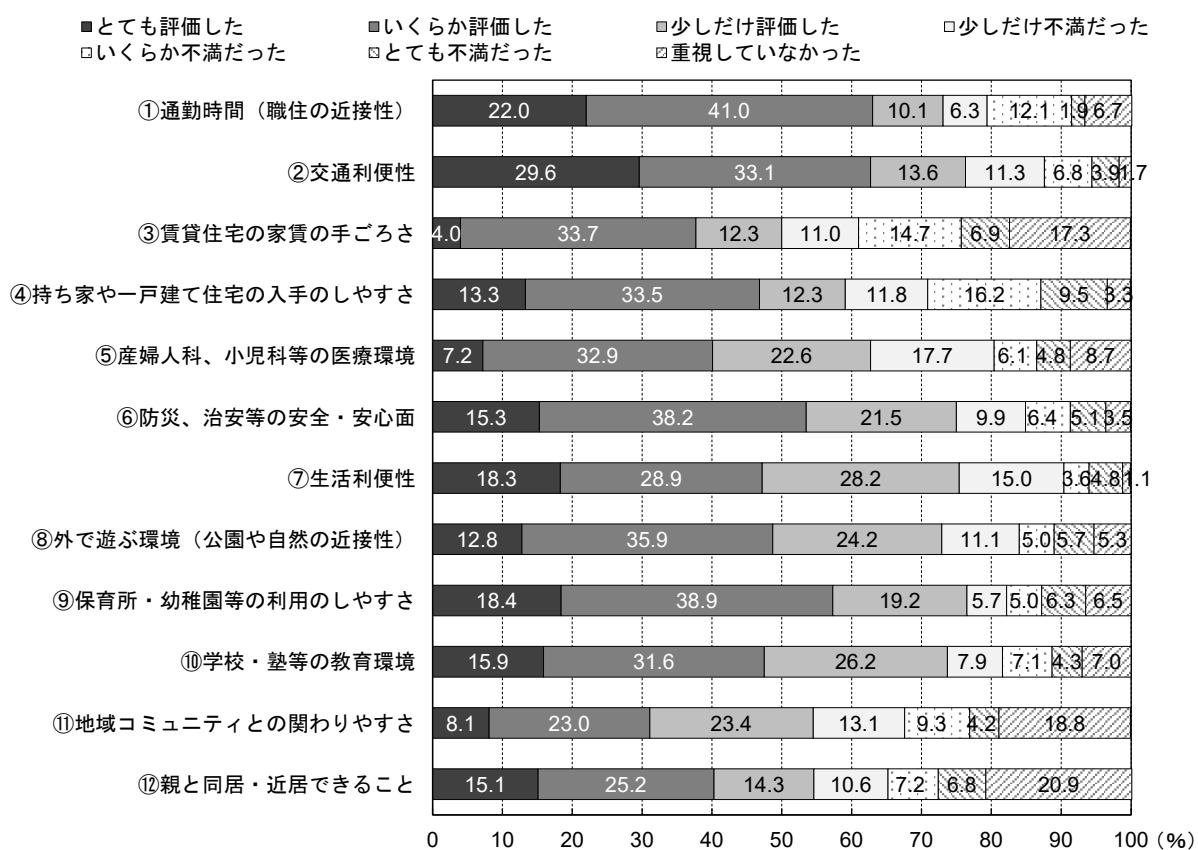
(京都市域)

N=522



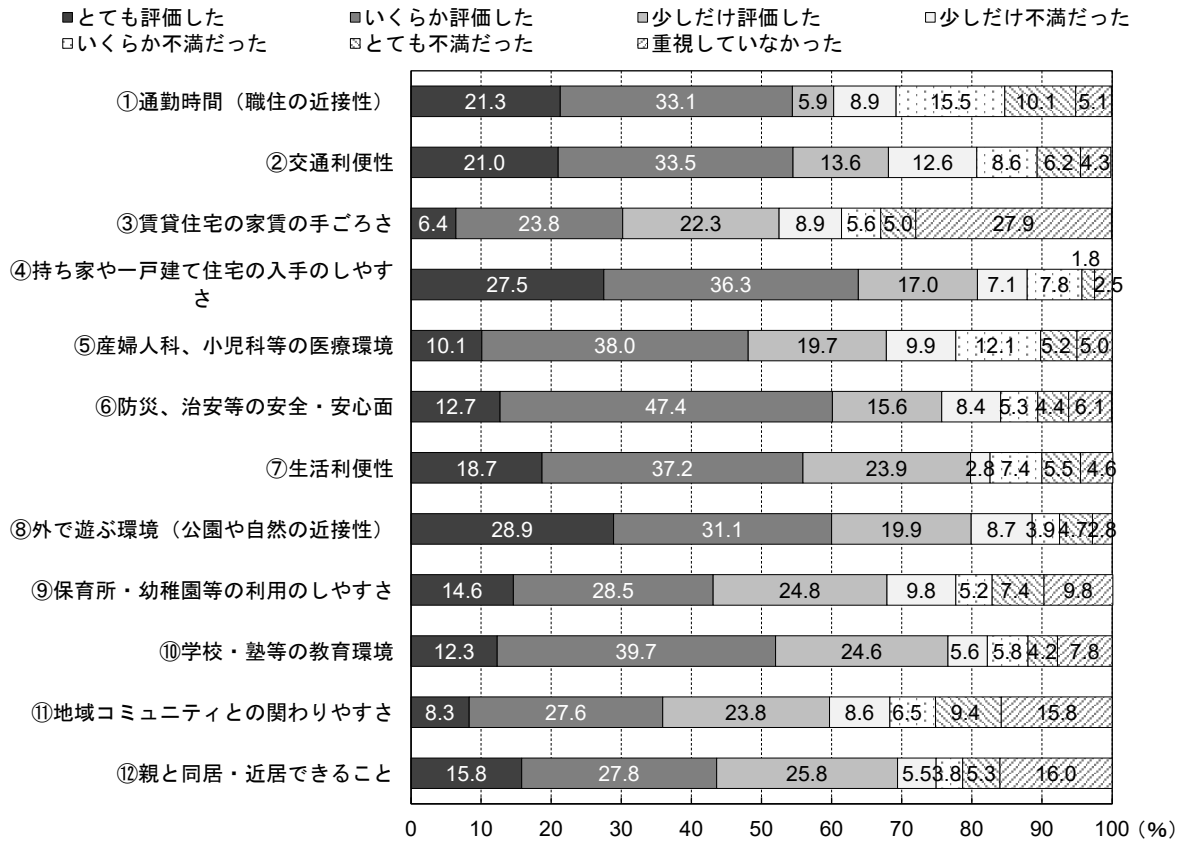
(乙訓地域)

N=92



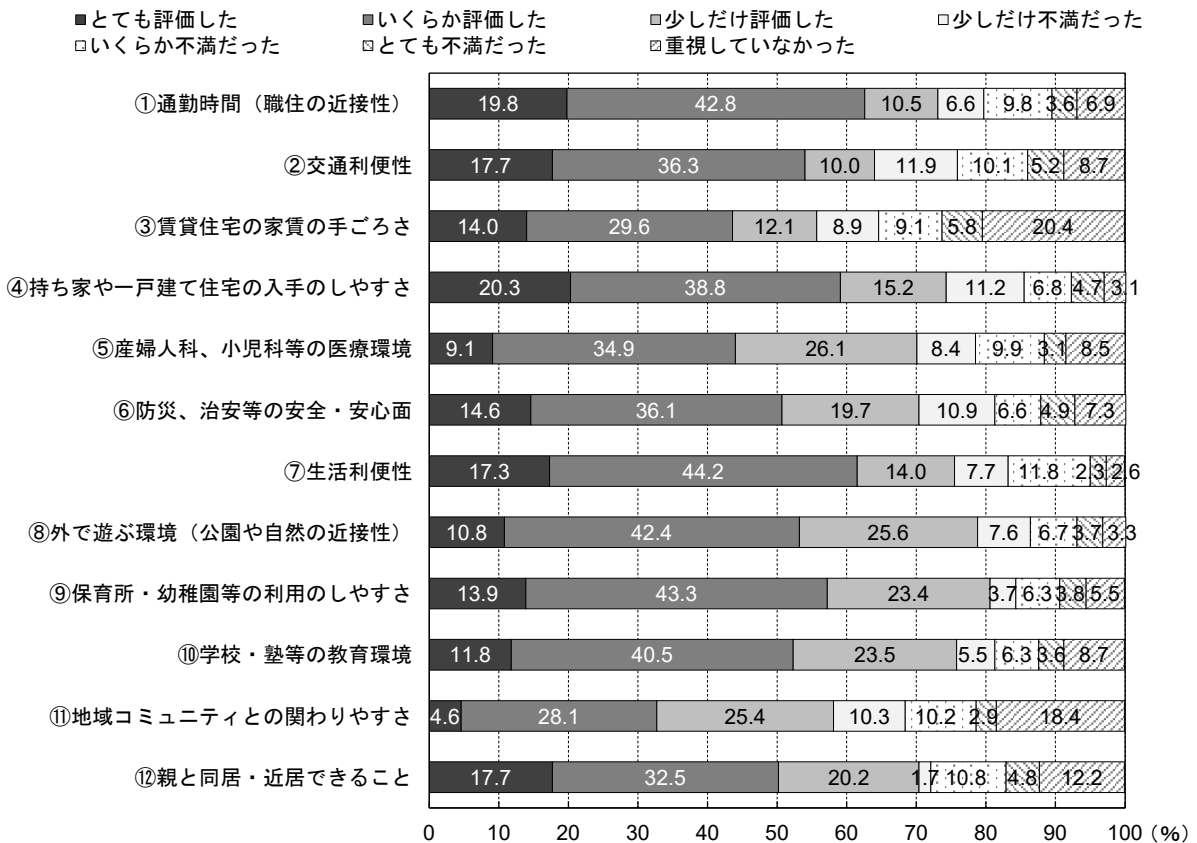
(学研都市地域)

N=93



(山城北部地域)

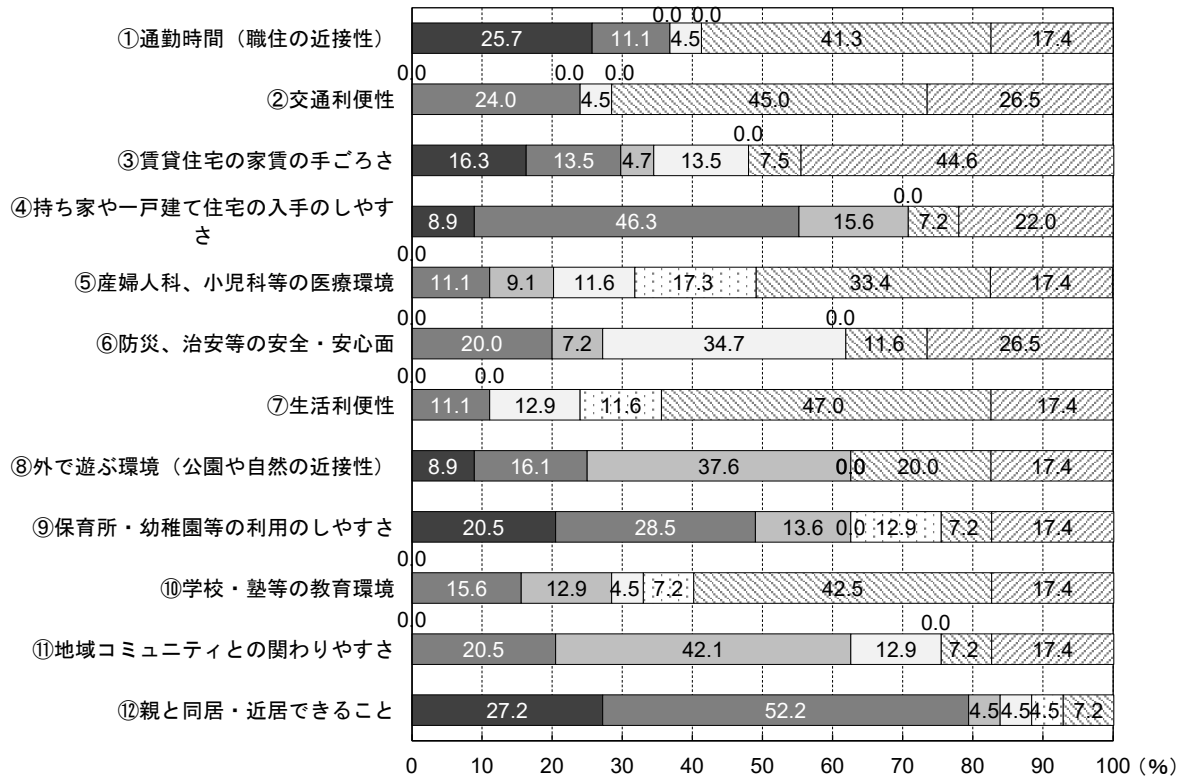
N=150



(相楽東部地域)

N=13

- とても評価した ■いづらか評価した □少しだけ評価した □少しだけ不満だった
- いづらか不満だった □とても不満だった □重視していなかった



(男性は「交通利便性」を求め京都市域に、女性は「生活利便性」を求め南丹に転居)

子どもの出生、成長に伴う転居先の住居地を選んだ一番の決め手を尋ねると、男性は「通勤時間（職住の近接性）」が多く、特に京都市域が 22%と多くなっている。また、学研都市では「広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ」と「交通利便性（鉄道、バス等の利用のしやすさ）」が、丹後では「外で遊ぶ環境（公園や自然の近接性）」が、乙訓では「保育所・幼稚園等の利用のしやすさ」が他の地域より多くなっている。女性では、「生活利便性（買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ）」が多く、特に南丹が 33%と多くなっている。また、丹後では「学校・塾等の教育環境」が、山城北部では「防災、治安等の安全・安心面」が他の地域より多くなっている（表 2.10.2）。

表 2.10.2 地域別の子どもの出生、成長に伴う転居先の住居地を選んだ一番の決め手（単数）
（男性）

(%)

区分	N	通勤時間 (職住の近接性)	広い居室があり、持ち家や一戸建てである住宅の入手のしやすさ	交通利便性 (鉄道、バス等の利用のしやすさ)	親との同居・近居できること	生活利便性 (買い物・飲食・生活サービス利用のしやすさ)	外で遊ぶ環境 (公園や自然の近接性)	防災、治安等の安全・安心面	賃貸住宅の家賃の手ごろさ	学校・塾等の教育環境	産婦人科、小児科等の医療環境
全体	402	18.7	13.9	12.6	9.8	9.1	7.4	5.3	5.0	4.6	3.7
丹後	12	17.5	17.1	0.0	15.3	6.4	28.5	6.4	0.0	0.0	0.0
中丹	30	18.8	18.8	2.9	10.1	2.9	10.1	2.9	11.6	2.1	0.0
南丹	15	14.2	11.0	8.6	14.2	25.0	5.4	0.0	10.4	5.6	5.4
京都市域	211	22.2	14.2	12.2	8.5	11.2	5.3	4.6	3.2	5.9	3.6
乙訓	37	14.2	5.5	16.2	17.6	7.4	5.8	3.6	2.2	2.2	7.3
学研都市	30	13.7	21.2	22.0	9.8	9.8	5.5	9.4	0.0	5.9	2.8
山城北部	61	11.9	10.4	17.3	8.6	2.8	12.4	9.7	10.6	2.6	5.5
相楽東部	6	31.4	0.0	0.0	20.3	0.0	0.0	0.0	20.3	0.0	0.0

区分	保育所・幼稚園等の利用のしやすさ	地域コミュニティとの関わりやすさ	その他	特になし
全体	3.6	2.3	0.0	4.0
丹後	0.0	8.9	0.0	0.0
中丹	3.7	5.8	0.0	10.1
南丹	0.0	0.0	0.0	0.0
京都市域	3.4	2.2	0.0	3.6
乙訓	12.4	3.6	0.0	1.9
学研都市	0.0	0.0	0.0	0.0
山城北部	2.7	0.0	0.0	5.4
相楽東部	0.0	0.0	0.0	28.0

(女性)

(%)

区分	N	生活利便性 (買い物・ 飲食・生活 サービス利 用のしやす さ)	広い居室が あり、持ち 家や一戸建 てである住 宅の入手の しやすさ	親との同 居・近居で きること	交通利便性 (鉄道、バ ス等の利用 のしやす さ)	通 勤 時 間 (職住の近 接性)	保育所・幼 稚園等の利 用のしやす さ	学校・塾等 の教育環境	賃貸住宅の 家賃の手ご ろさ	防災、治安 等の安全・ 安心面	外で遊ぶ環 境(公園や 自然の近接 性)
全体	574	15.1	13.7	13.3	12.0	9.6	6.4	6.4	6.2	5.8	3.4
丹後	30	2.7	17.6	26.0	3.3	6.2	3.6	11.9	6.2	5.7	2.7
中丹	34	23.1	14.8	17.9	9.3	7.4	10.2	0.0	3.0	7.1	0.0
南丹	24	32.8	15.1	3.9	0.0	11.4	9.5	7.4	7.5	0.0	0.0
京都市域	280	16.2	10.2	9.7	14.5	10.1	5.3	8.9	7.5	4.7	3.9
乙訓	53	9.9	9.2	10.3	17.3	18.2	12.1	7.4	4.3	4.2	2.7
学研都市	60	10.8	26.2	19.0	11.7	0.0	5.0	2.5	3.5	5.0	3.0
山城北部	79	10.3	16.9	21.2	7.8	10.6	5.1	2.4	6.0	12.2	5.4
相楽東部	14	0.0	16.6	35.6	0.0	19.5	0.0	0.0	4.7	4.7	4.7

区分	産婦人科、 小児科等の 医療環境	地域コミュ ニティとの 関わりやす さ	その他	特になし
全体	1.3	0.7	1.0	5.2
丹後	2.8	0.0	0.0	11.4
中丹	2.1	0.0	2.5	2.5
南丹	0.0	3.7	0.0	8.8
京都市域	1.4	0.4	1.1	6.0
乙訓	0.0	0.0	0.0	4.3
学研都市	3.4	3.0	2.2	4.7
山城北部	0.0	0.0	0.0	2.2
相楽東部	0.0	0.0	7.6	6.5

1 1. 子育てや教育の経済的負担

(1) 子育てにおける家計の負担

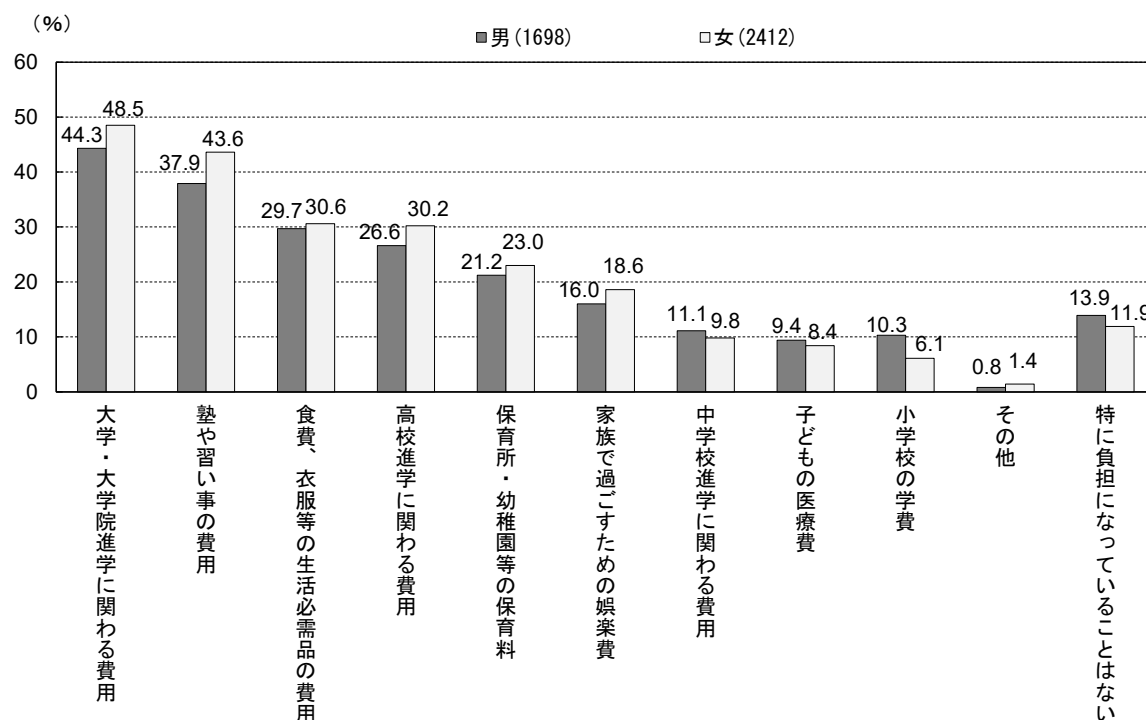
(大学進学等、教育に関わる費用が負担になっている)

子育てにおける家計の負担を尋ねたところ、男女とも「大学・大学院進学に関わる費用」が最も多い（男性44%、女性49%）（図2.11.1）。次いで、「塾や習い事の費用」（男性は38%、女性44%）であり、「大学・大学院進学に関わる費用」を含め、女性の方がやや回答が多い。

これらの他では「食費、衣服等の生活必需品の費用」「高校進学に関わる費用」等の回答が多く、これらは、所得等との関係が弱く必ず支出が生じる費目と考えられる。

また、「保育所・幼稚園等の保育料」は20%強であった。

図2.11.1 子育てにおける家計の負担（子どもがいる者、複数）

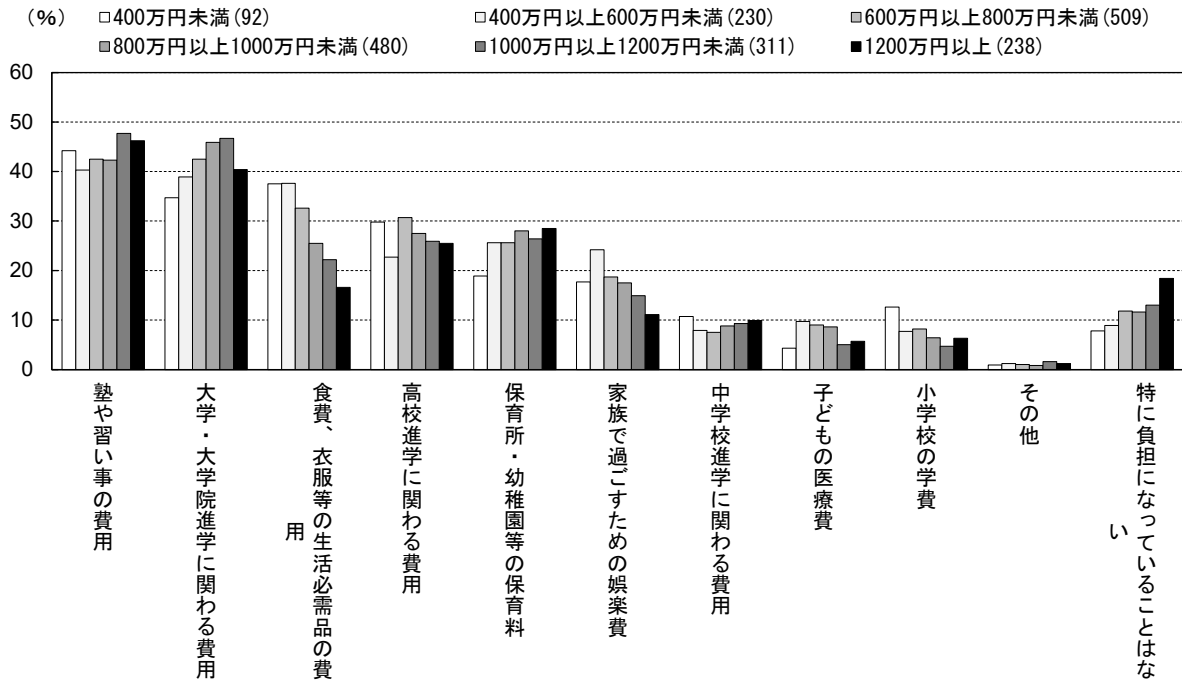


(必需品は収入との関係がみられる)

図 2.11.1 の回答を夫婦の収入合計別に集計すると、「食費、衣服等の生活必需品の費用」と「家族で過ごすための娯楽費は、収入が少ないほど負担であるとする回答が増加する傾向がみられる(図 2.11.2)。

これらの費目は収入が少ないからといって減らすことが難しい面がある(所得弾力性が低い)と考えられ、収入が少ないと負担になりやすいと考えられる。

図 2.11.2 夫婦の収入合計別にみた子育てで家計の負担になっていること(子育てしている者)

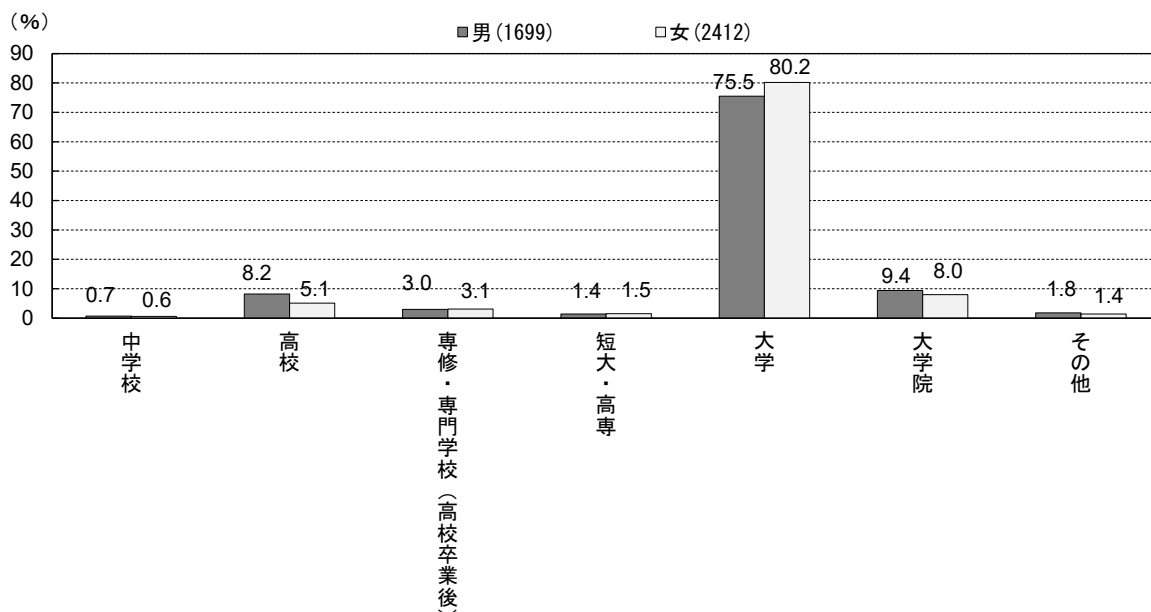


(2) 子どもに受けさせたい教育

(男の子、女の子の両方で「大学」が80%近くを占める)

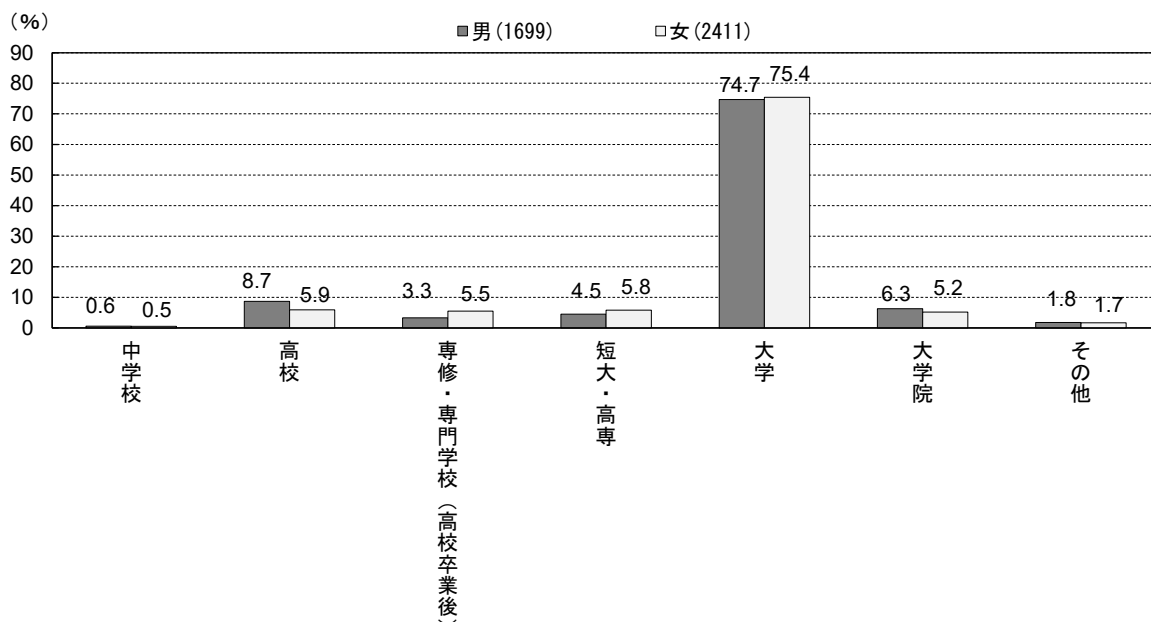
子どものうち、男の子にどの程度の教育を受けさせたいと考えているか尋ねると、「大学」が男性で76%、女性は80%に上る(図2.11.3)。

図2.11.3 子どもに受けさせたい教育(男の子)
(子どもがいる者、子どもを持つ希望がある者、単数)



女の子では、「大学」が男女とも75%であった(図2.11.4)。特に、男性の「大学」の回答は、男の子と女の子でまったく差異はみられない。女性でも5%の差にとどまる。

図2.11.4 子どもに受けさせたい教育(女の子)
(子どもがいる者、子どもを持つ希望がある者、単数)

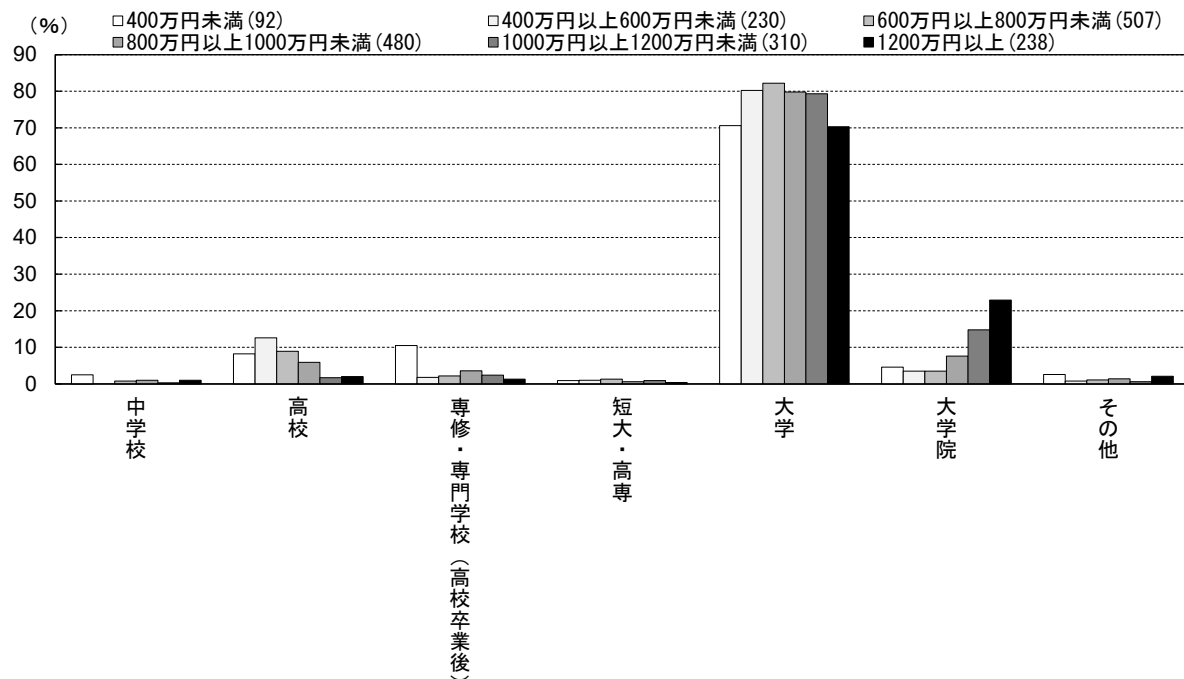


(受けさせたい教育のうち「大学」は収入との関係がほとんどみられない)

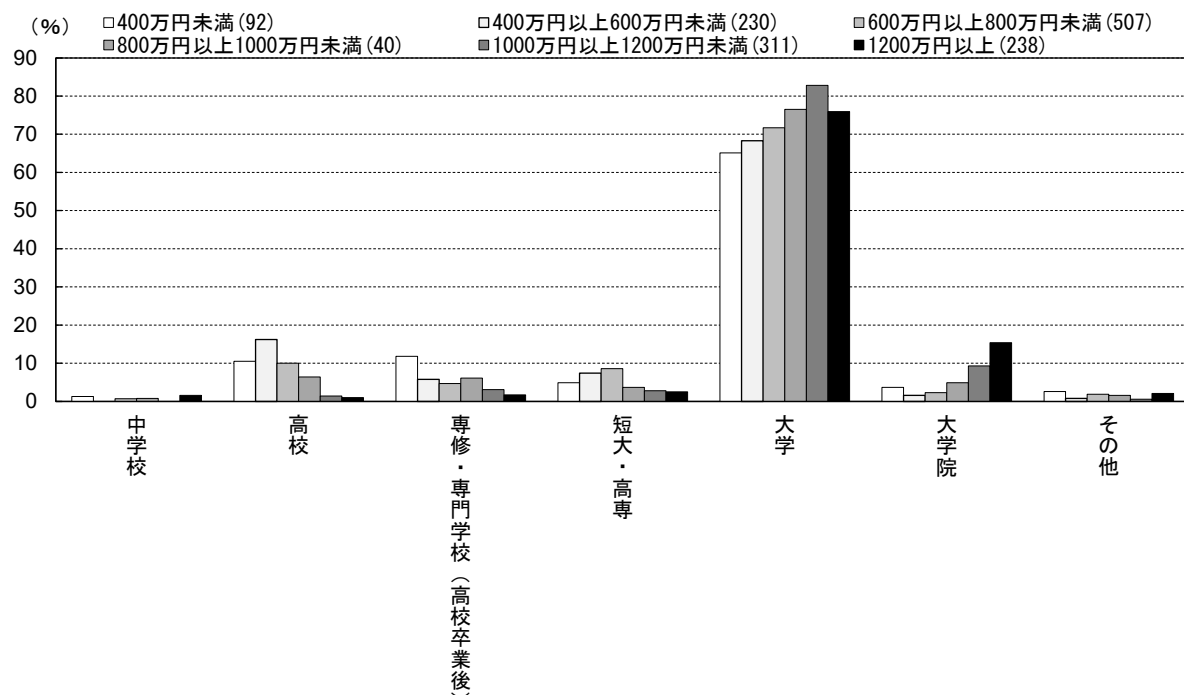
夫婦の収入合計別に受けさせたい教育を集計すると、80%近くを占める「大学」は、男の子では夫婦の収入合計との相関はみられない。

女の子では、収入とともに「大学」の回答がやや多くなるものの10%程度の差である。

図 2.11.5 夫婦の収入合計別にみた子どもに受けさせたい教育（子育てしている有配偶者）
（男の子）



(女の子)

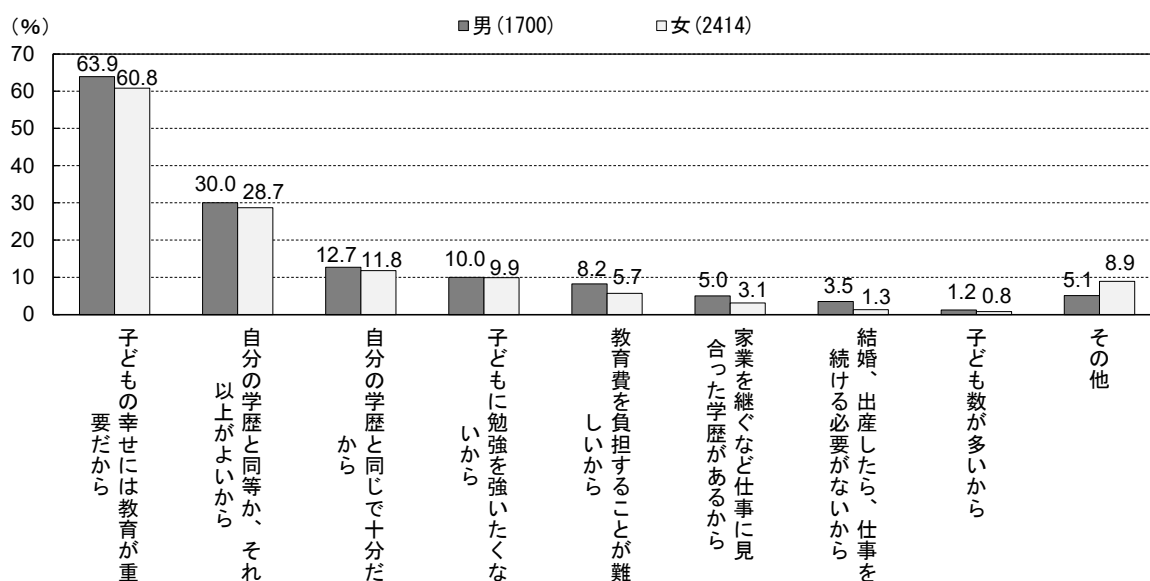


（受けさせたい教育の理由は「子どもの幸せには教育が重要だから」）

図 2.11.3、図 2.11.4 のように考える理由は、「子どもの幸せには教育が重要だから」が圧倒的に多い（男性 64%、女性 61%）（図 2.11.6）

また、「自分の学歴と同等か、それ以上がよいから」は約 30%の回答になっている。ここから、親の高学歴化が、受けさせたい教育で「大学」が多いことの要因の一つになっていると考えられる。

図 2.11.6 受けさせたい教育の理由（子どもがいる者、子どもを持つ希望がある者、単数）



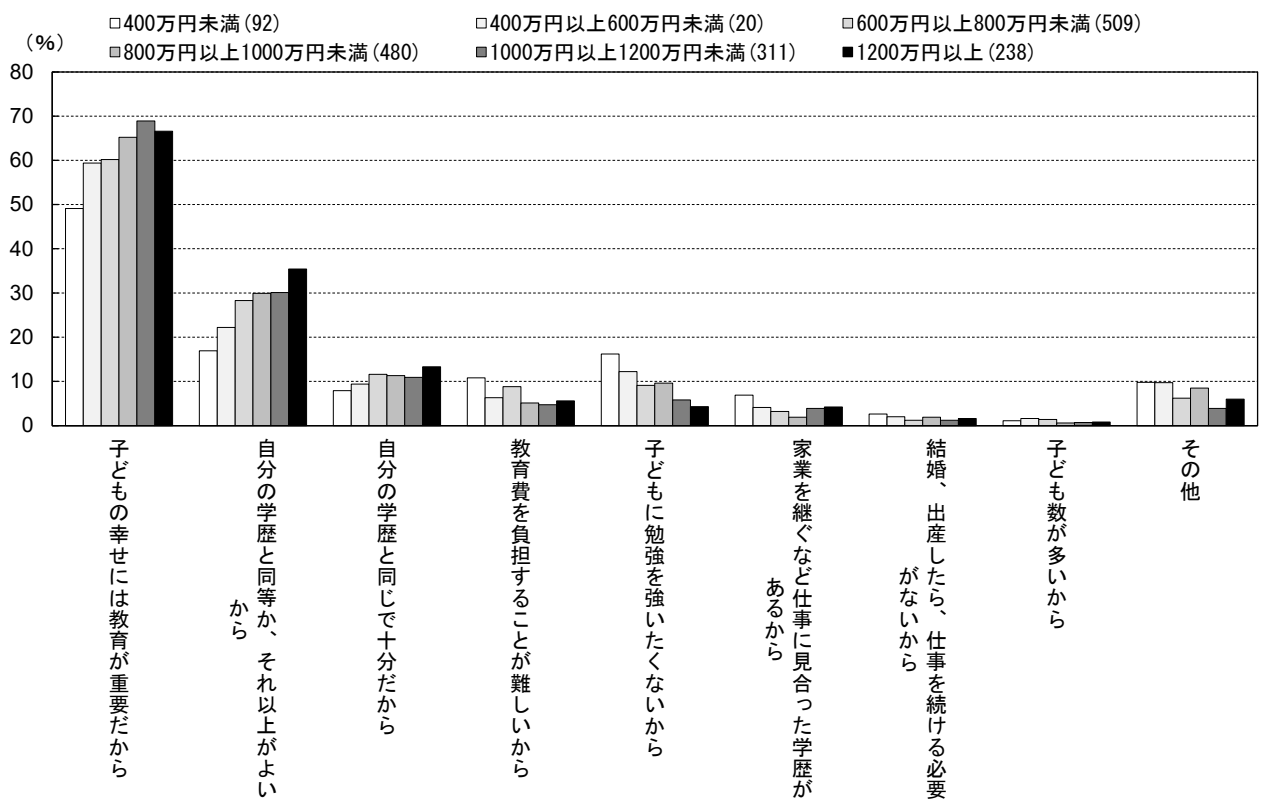
「子どもの幸せには教育が重要だから」はどの所得層でも回答が多い

子どもに受けさせたい教育の理由について、夫婦の収入合計との関係を調べた。

その結果、「子どもの幸せには教育が重要だから」は夫婦の収入との相関が認められるものの、どの所得層でみても他の理由に比べて際立って回答が多い。このことから、図 2.11.5 の通り収入が少ない世帯でも子どもに教育費をかけようとして、図 2.11.2 において教育費が家計の負担になっていると考えられる。

また、「自分の学歴と同等か、それ以上がよいから」は、収入が増えると増加する傾向がある。親の学歴と収入に相関があるとすると、収入が多い世帯では教育費の支出が増加する要因になっていると考えられる。

図 2.11.7 夫婦に収入合計別にみた受けさせたい教育の理由
(子どもがいる者、子どもを持つ希望がある者、単数)



(3) 祖父母の支援

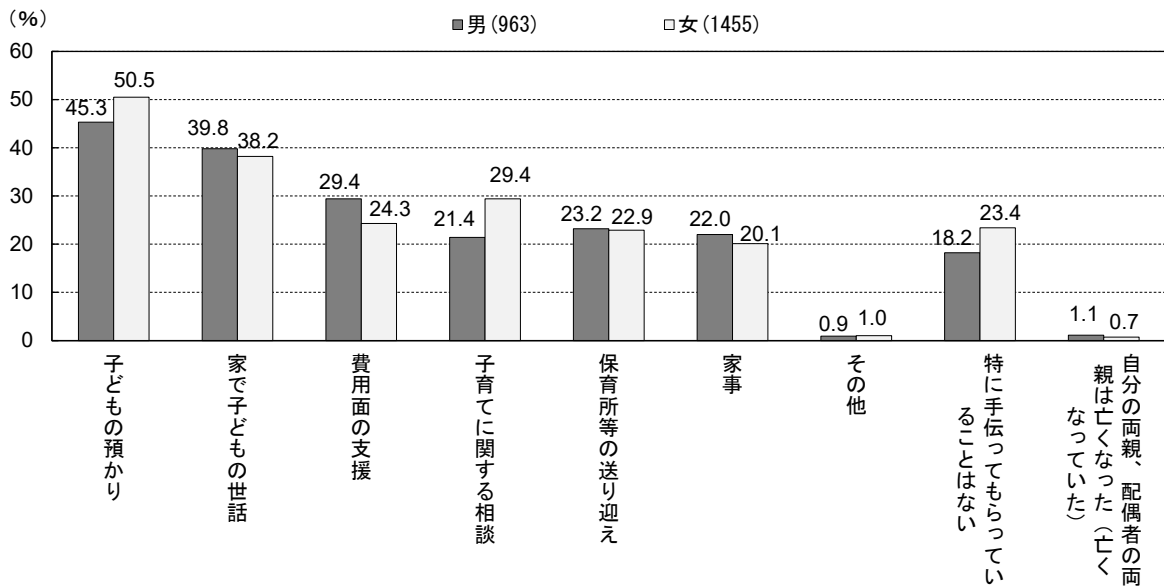
(費用面の支援は 20%から 30%)

子どもを持つ者を対象に、子どもが未就学児のときに、自分や配偶者の父親・母親から子育てに関してどのような支援を得られたかを把握した。

「子どもの預かり」が最も多く（男性 45%、女性 51%）、次いで「家で子どもの世話」が 40% 近い（男性 40%、女性 38%）（図 2.11.7）。

子育ての経済的負担を軽減すると考えられる「費用面の支援」は、男性 29%、女性 24%であった。

図 2.11.8 祖父母による子育ての手助け（子どもがいる者、複数）



(4) 地域別の集計

(大学・大学院進学が負担となる地域が多く、特に男女とも相楽東部が多い)

子育てにおける家計の負担を尋ねたところ、男性ではすべての地域で「大学・大学院進学に関わる費用」が最も多く、特に相楽東部が66%と多くなっている。また、乙訓は「保育所・幼稚園等の保育料」が、学研都市では「家族で過ごすための娯楽費」が他の地域と比べ多くなっている。女性でも多くの地域で「大学・大学院進学に関わる費用」が負担であるという回答が最も多く、特に丹後と相楽東部が多くなっている。また、相楽東部と学研都市では「塾や習い事の費用」が、相楽東部では「子どもの医療費」が負担と回答した者が多くなっている。

図 2.11.9 地域別の子育てにおける家計の負担（子どもがいる者、複数）

(男性)

(%)

区分	N	大学・大学院進学に関わる費用	塾や習い事の費用	食費、衣服等の生活必需品の費用	高校進学に関わる費用	保育所・幼稚園等の保育料	家族で過ごすための娯楽費	中学校進学に関わる費用	小学校の学費	子どもの医療費	その他	特に負担になっていない
全体	1698	44.7	37.9	29.8	26.7	21.2	16.0	11.1	10.3	9.4	0.8	13.9
丹後	70	55.5	30.7	28.5	24.5	20.9	18.7	7.2	10.5	15.1	4.2	13.1
中丹	101	40.0	37.0	40.9	20.4	21.7	17.1	12.6	7.9	11.2	1.3	12.1
南丹	86	51.3	40.2	38.7	18.9	17.2	13.5	13.8	7.1	8.0	0.0	10.2
京都市域	893	44.1	36.9	26.1	28.4	21.3	13.9	12.0	11.6	11.3	0.8	15.3
乙訓	145	41.6	37.0	28.8	22.9	29.0	19.0	9.2	11.1	7.3	0.0	12.5
学研都市	120	54.8	49.7	30.7	36.0	18.6	25.6	8.3	6.8	2.5	1.7	5.5
山城北部	240	41.0	37.2	34.6	23.6	19.9	17.4	8.6	8.7	5.1	0.3	16.4
相楽東部	43	65.5	38.8	41.1	43.6	9.6	15.4	24.1	9.1	8.1	1.9	0.0

(女性)

(%)

区分	N	大学・大学院進学に関わる費用	塾や習い事の費用	食費、衣服等の生活必需品の費用	高校進学に関わる費用	保育所・幼稚園等の保育料	家族で過ごすための娯楽費	中学校進学に関わる費用	子どもの医療費	小学校の学費	その他	特に負担になっていない
全体	2412	48.6	43.7	30.6	30.4	23.0	18.6	9.8	8.4	6.1	1.4	11.9
丹後	119	63.2	48.5	33.9	33.6	22.0	13.6	8.9	3.9	2.0	2.7	8.6
中丹	136	50.2	34.6	35.3	29.5	26.9	15.8	4.9	7.1	6.4	0.0	11.0
南丹	84	50.2	41.1	33.4	36.9	17.4	16.5	14.7	6.4	7.2	1.7	7.0
京都市域	1345	47.2	43.5	28.9	30.2	23.8	18.6	10.8	10.1	6.6	1.3	12.2
乙訓	174	50.2	43.9	26.7	29.1	22.9	21.6	11.3	5.8	3.5	2.3	12.7
学研都市	201	49.6	54.0	31.6	28.4	19.6	17.9	8.0	8.8	3.5	1.7	10.6
山城北部	302	48.5	41.9	34.6	30.9	22.5	20.8	7.2	4.3	7.1	1.2	13.7
相楽東部	51	62.0	62.7	34.6	36.4	8.4	10.8	10.0	16.5	4.2	2.6	8.8

12. 生活のゆとり感と満足感、子育ての感じ方

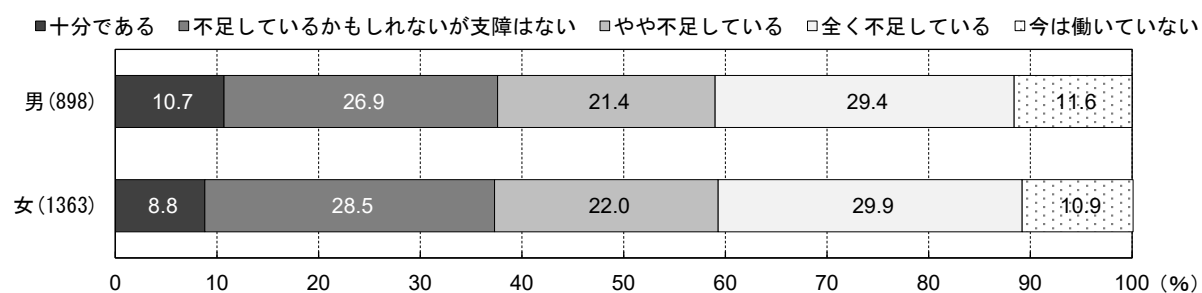
(1) 結婚生活を想定したときの所得のゆとり

(独身者の半数以上が結婚生活を想定した場合に所得が不足している)

独身者に結婚生活を送ることを想定した場合について、現在の所得のゆとりを尋ねた。男性では「やや不足している」は21%、「まったく不足している」は29%であり、合計51%が「不足」という回答であった(図2.12.1)。「不足しているかもしれないが支障はない」という選択肢があるため、「不足」の回答は、所得が十分でないために結婚に支障があると捉えることができる。

女性では「やや不足している」は22%、「全く不足している」が30%であり、合計は52%である。

図 2.12.1 結婚生活を想定した場合の現在の所得(独身者、単数)



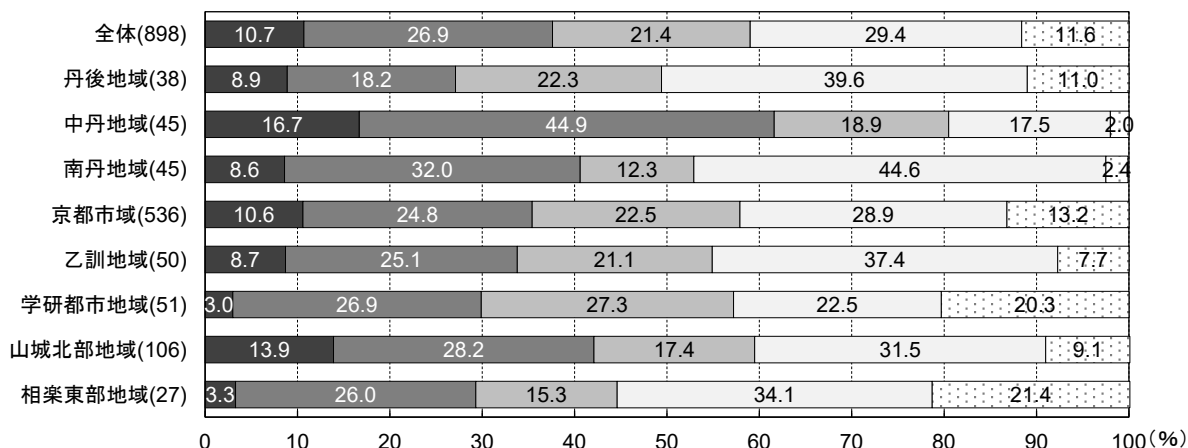
標本サイズが小さいため参考値であるものの、「全く不足している」を地域別に比較すると、男性では南丹（45%）や丹後（40%）が多い（図 2.12.2）。

女性に「全く不足している」にあまり地域差はみられないが、「十分である」と「不足しているかもしれないが支障はない」の合計が、学研都市、南丹等でやや少ない。

図 2.12.2 地域別にみた結婚を想定した場合の現在の所得（単数）

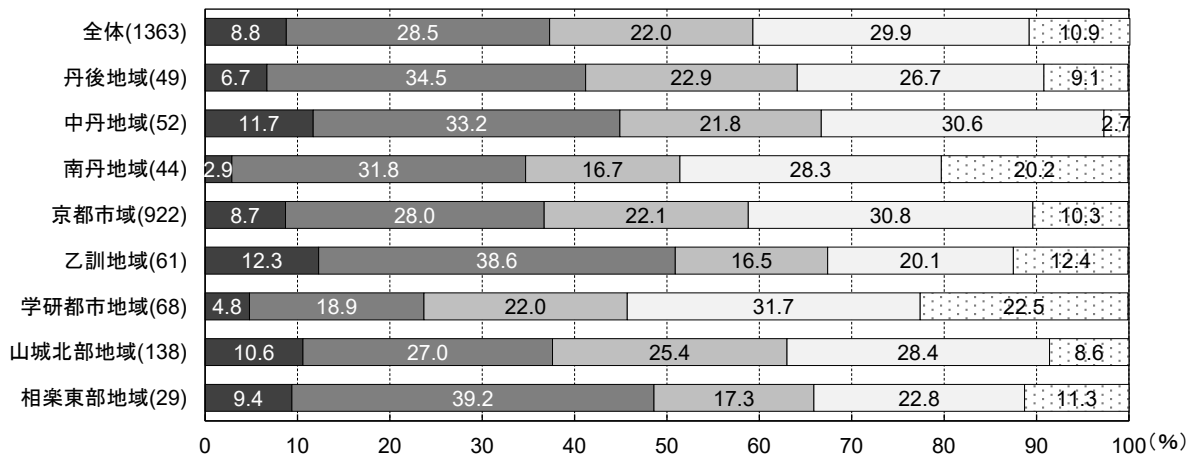
(男性)

■十分である ■不足しているかもしれないが支障はない □やや不足している □全く不足している □今は働いていない



(女性)

■十分である ■不足しているかもしれないが支障はない □やや不足している □全く不足している □今は働いていない



(2) 生活のゆとり感

(所得のゆとり感が一番低い)

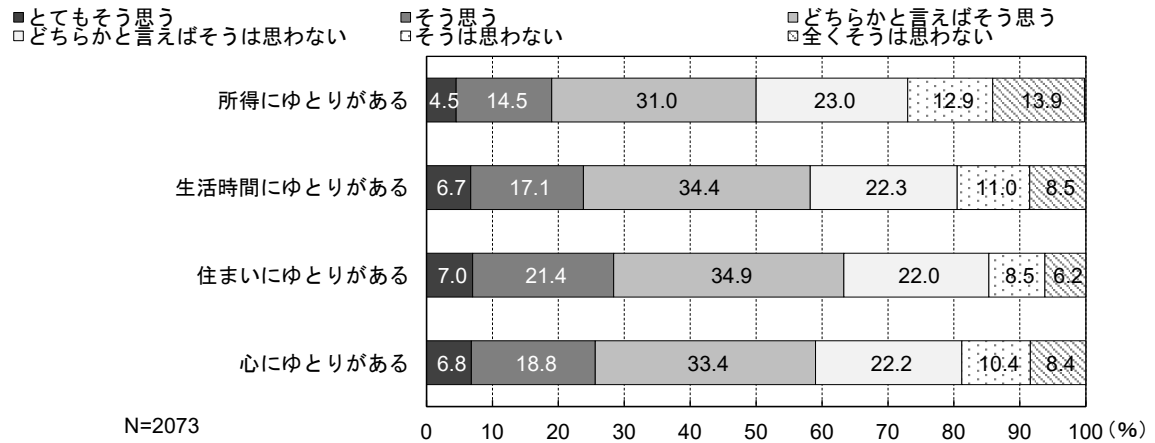
所得に加え、時間、住まい、心の四面から生活のゆとり感を尋ねた。

肯定的回答（「とてもそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計）は、四つのゆとりの中で「所得」が最も少なく、男性で50%、女性では41%となっている（図2.12.3）。

地域別でみると、全般的にゆとり感に対する肯定的回答が少ない南丹、住まいのゆとり感が高い丹後（「とてもそう思う」14%）、相楽東部（同 15%）、生活時間のゆとり感が低い学研都市（肯定的回答の合計が50%）などの特徴が表れる（図2.12.4）。

図 2.12.3 生活のゆとり感

(男性)



(女性)

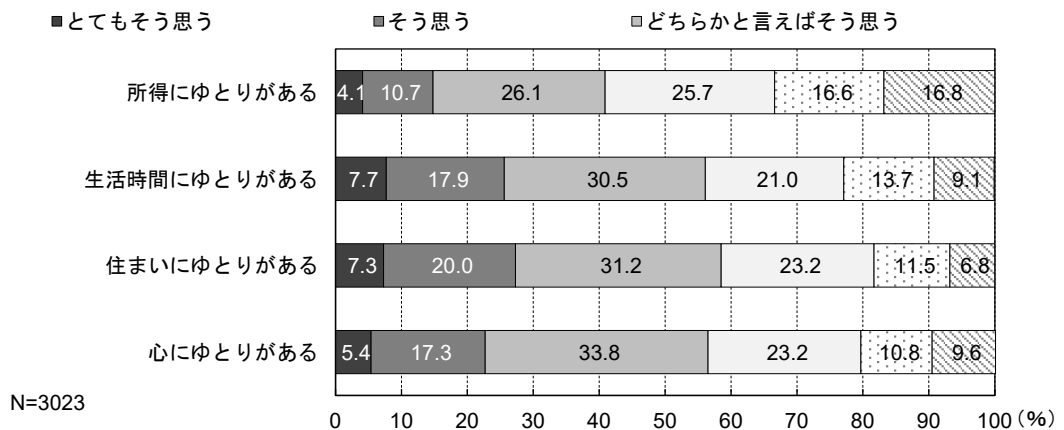
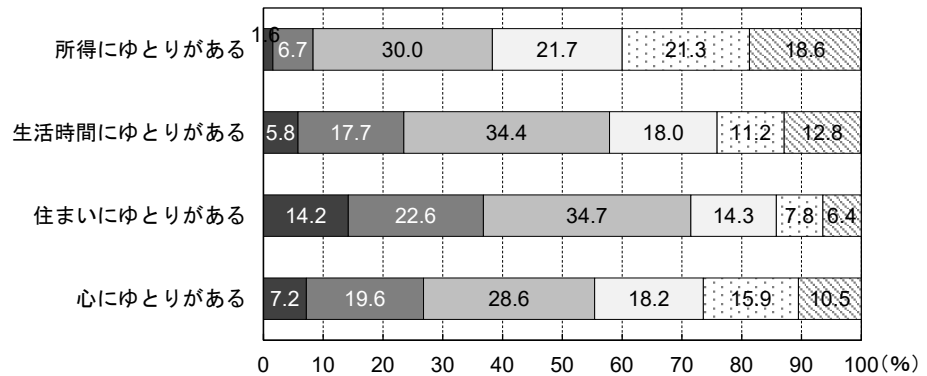


図 2.12.4 地域別にみた現在の生活の満足感、幸福感、ゆとり感（単数）

(丹後地域)

N=224

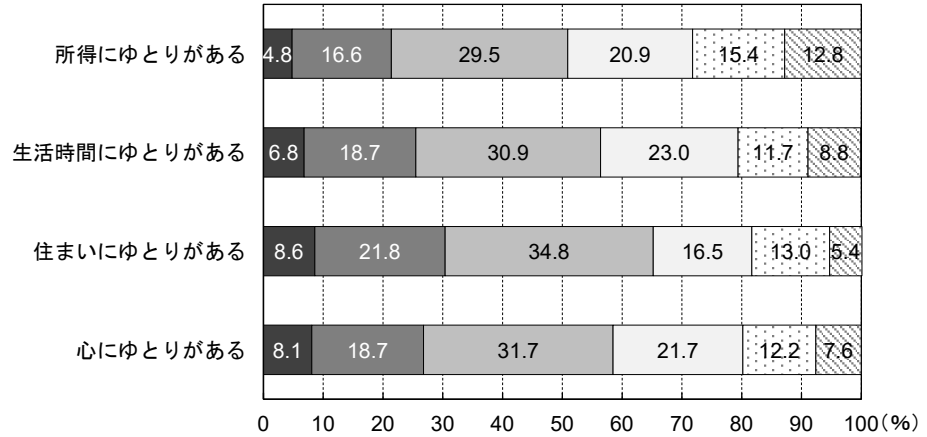
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(中丹地域)

N=271

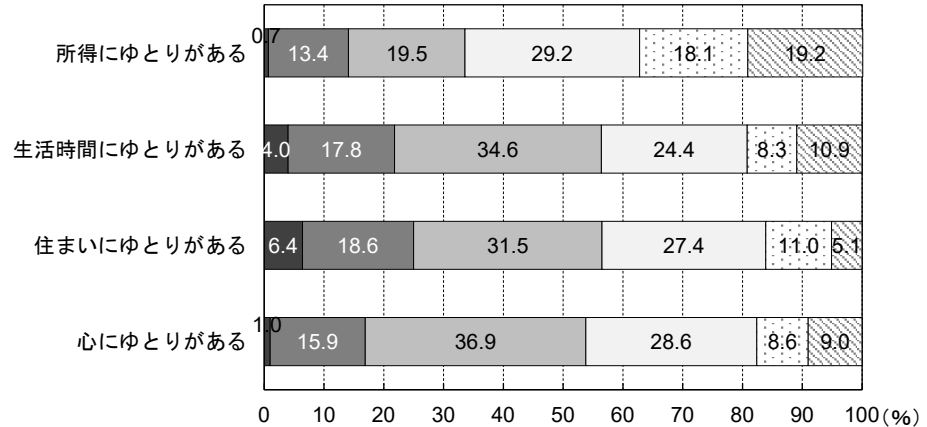
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(南丹地域)

N=200

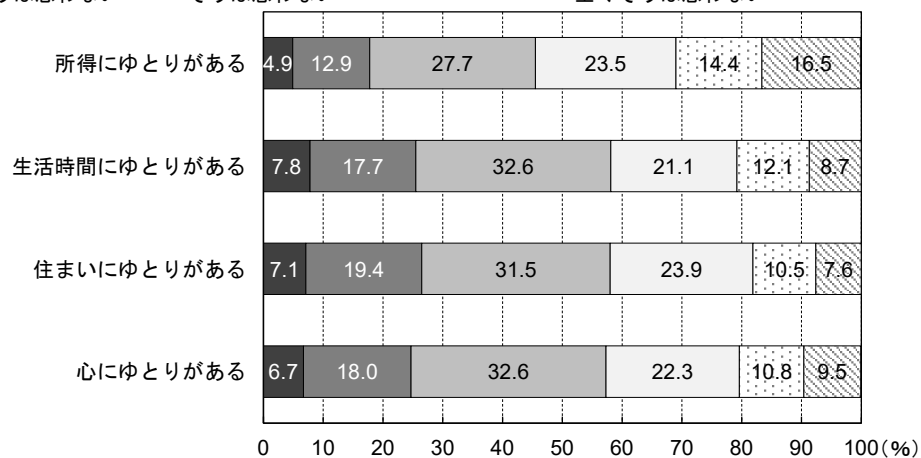
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(京都市域)

N=2907

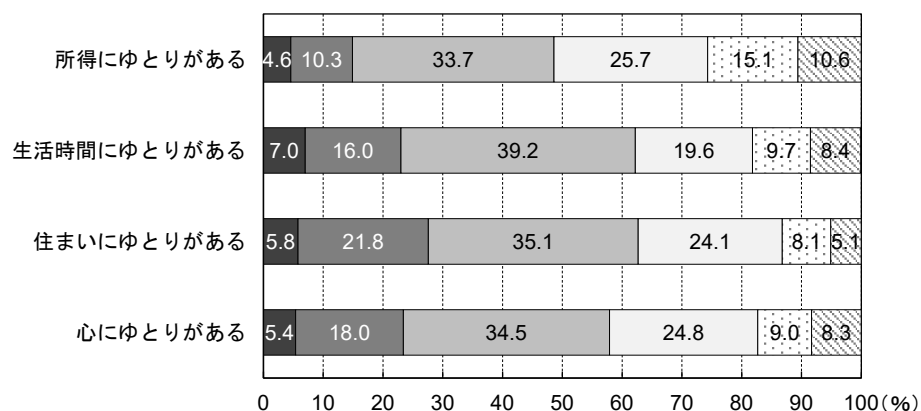
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(乙訓地域)

N=358

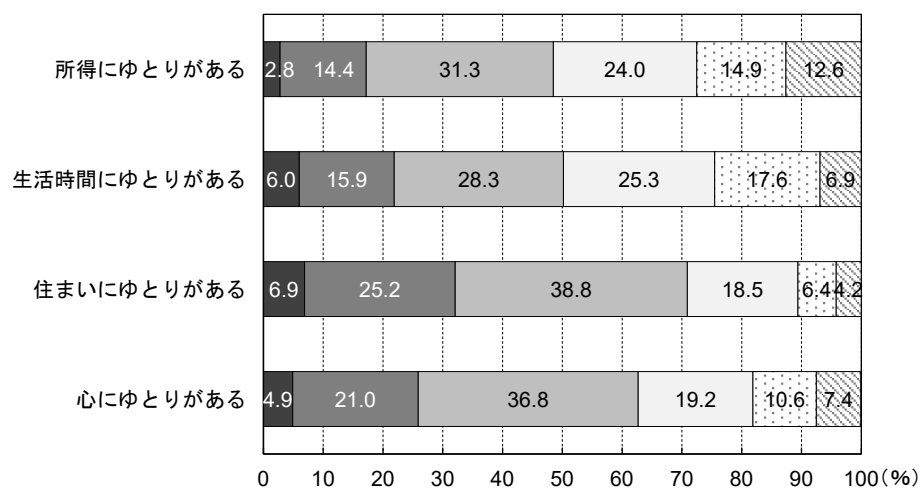
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(学研都市地域)

N=372

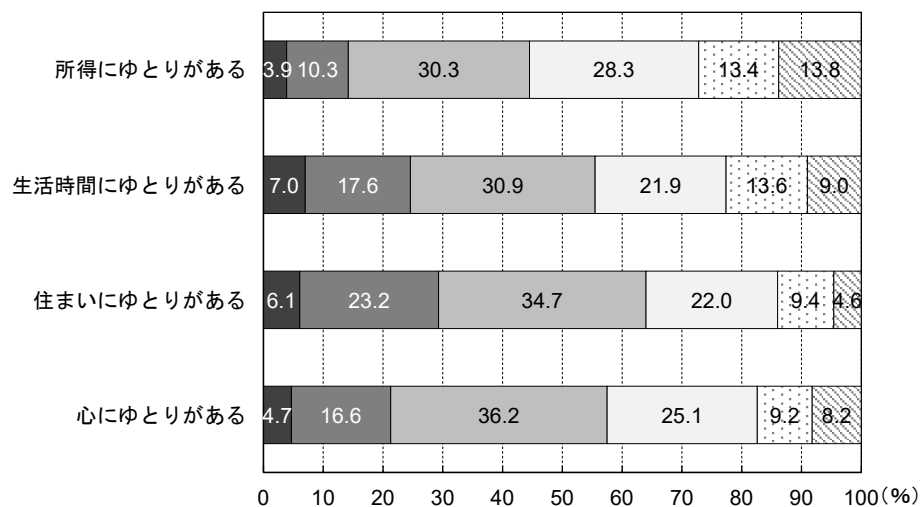
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- 全くそうは思わない



(山城北部地域)

N=651

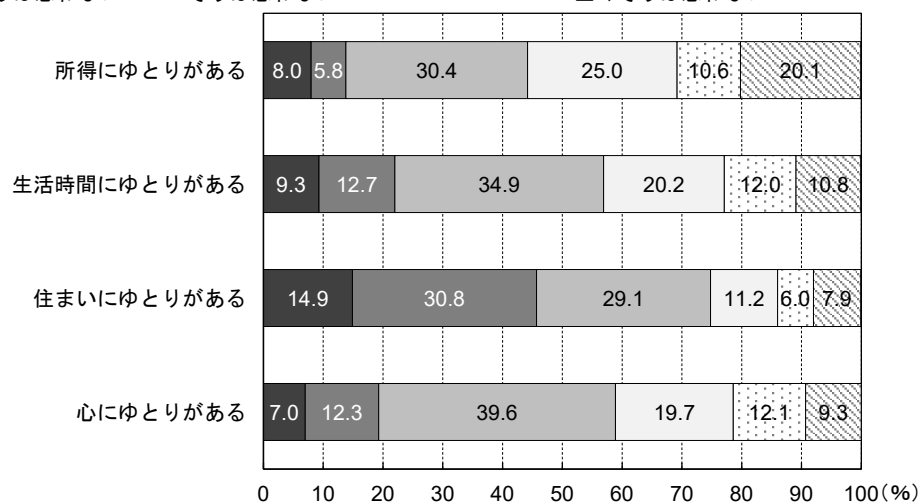
- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- ▨全くそうは思わない



(相楽東部地域)

N=113

- とてもそう思う
- どちらかと言えばそうは思わない
- そう思う
- そうは思わない
- どちらかと言えばそう思う
- ▨全くそうは思わない



(3) 生活の満足感・幸福感

「心身とも良好」は男女とも 68%

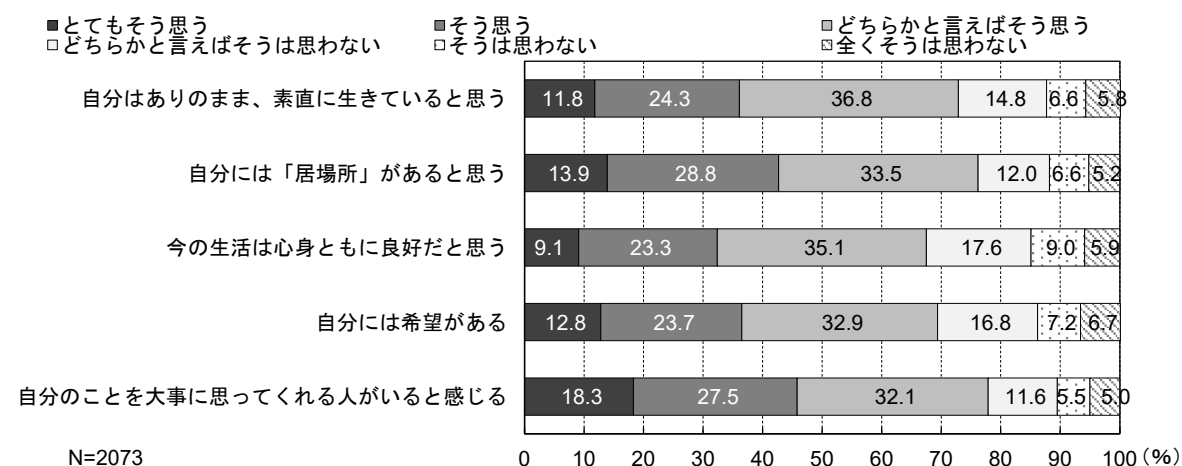
生活の満足感や幸福感に関わる五つの質問を行った（図 2.12.5）。自分らしさ（本来感）を表す「自分はありのまま、素直に生きていると思う」と「自分には「居場所」があると思う」、心身の健康である「今の生活は心身ともに良好だと思う」、幸福感に直結する「自分には希望がある」や「自分のことを大事に思ってくれる人がいると感じる」についての問いであり、これらはウェルビーイングの構成要素であると考えられる。

質問の結果、男女とも全般に肯定的回答が多いが、その中でも「自分のことを大事に思ってくれる人がいると感じる」は肯定的回答が男性では 78%、女性では 84%に上る。五つの質問の中では「今の生活は心身とも良好である」が、やや肯定的回答が少ない（男女とも 68%）。

図 2.12.6 に地域別集計を行ったが、全般に大きな地域差はみられない。

図 2.12.5 現在の生活の満足感・幸福感（単数）

(男性)



(女性)

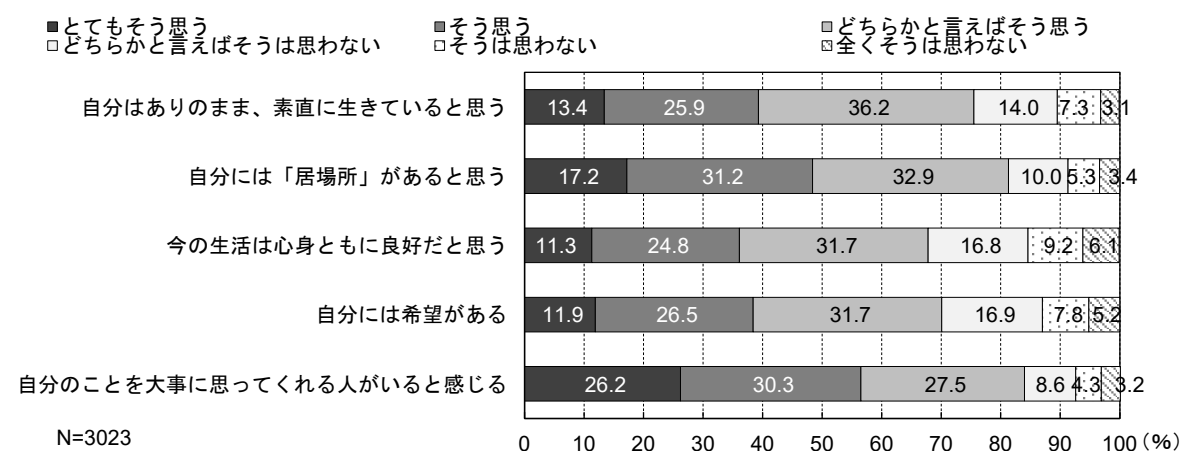
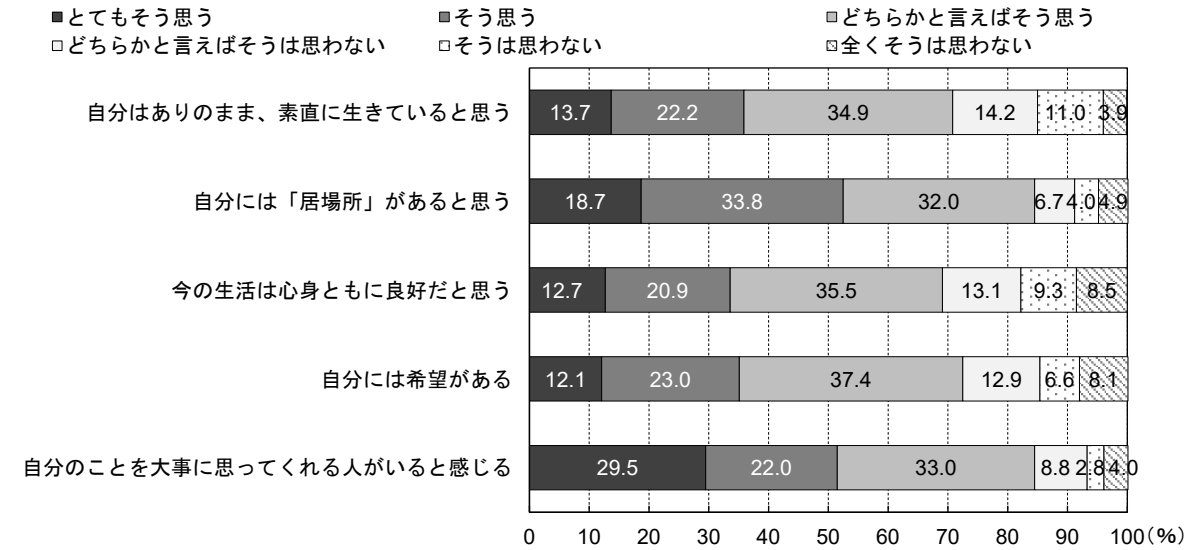


図 2.12.6 地域別にみた現在の生活の満足感、幸福感、ゆとり感（単数）

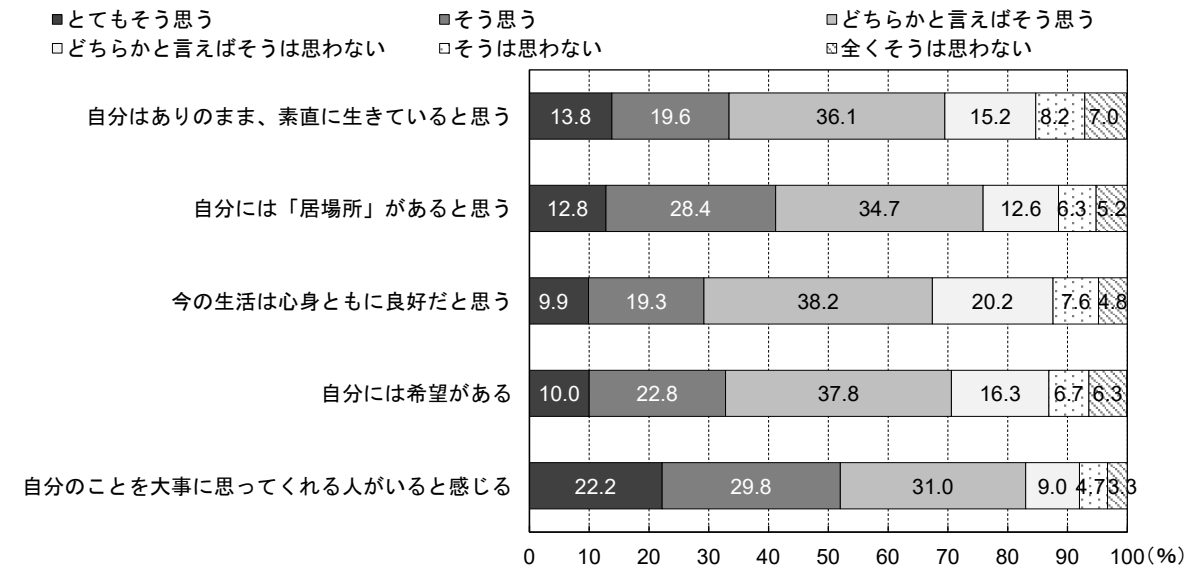
(丹後地域)

N=224



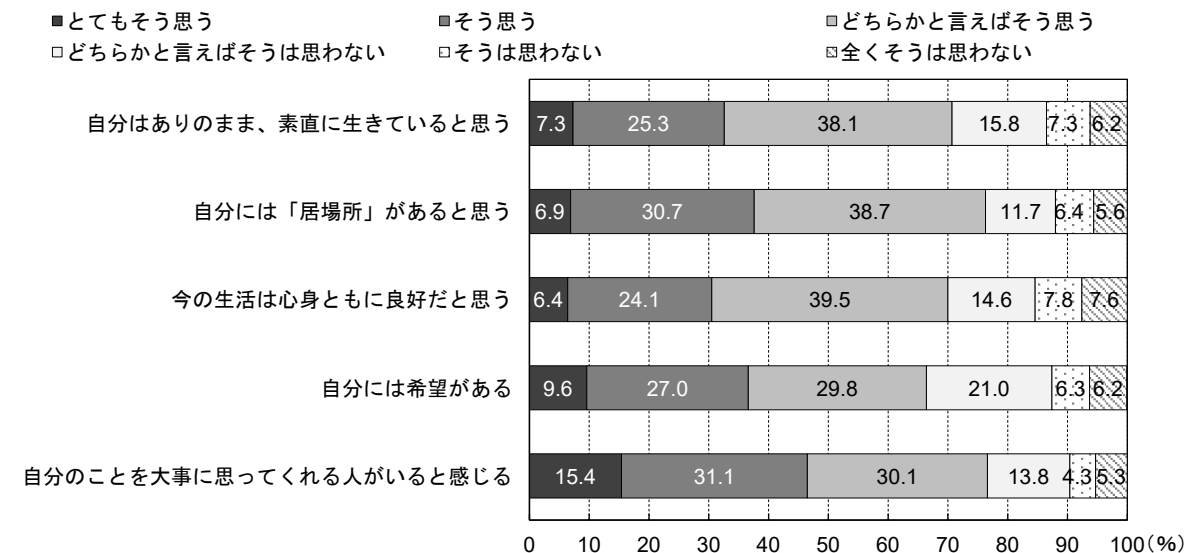
(中丹地域)

N=271



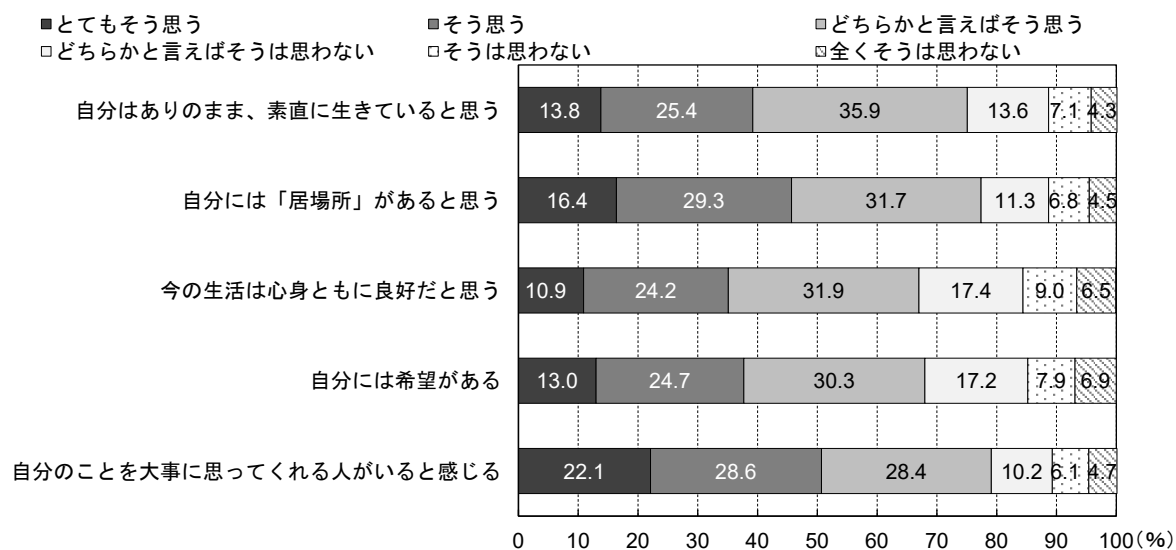
(南丹地域)

N=200



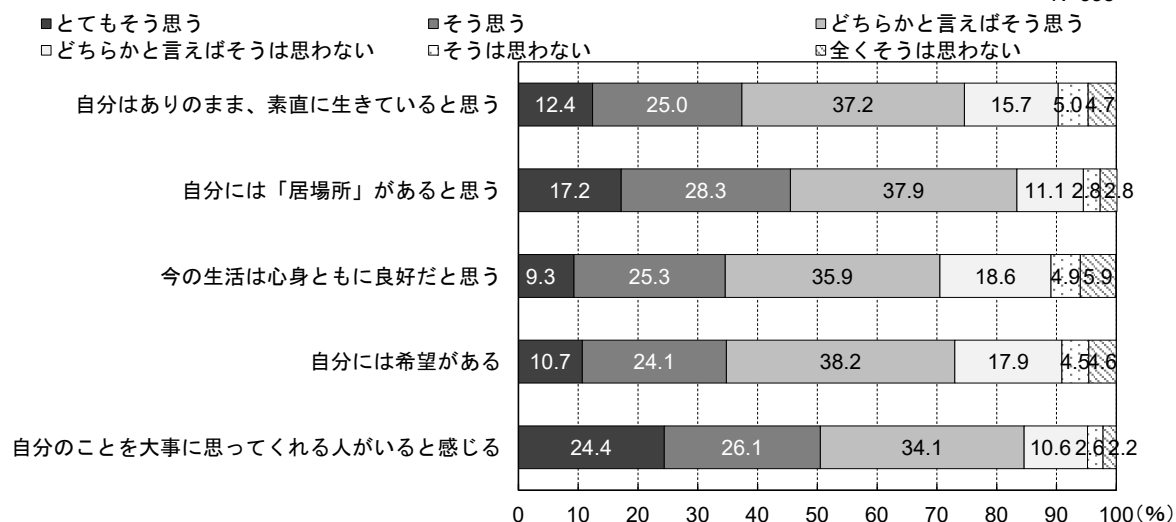
(京都市域)

N=2907



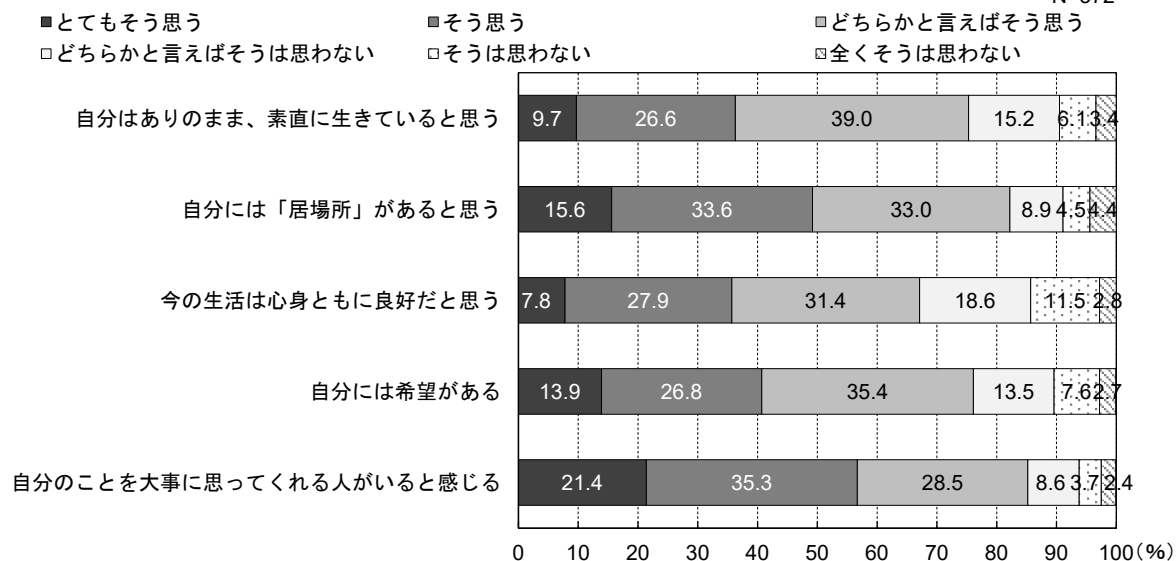
(乙訓地域)

N=358



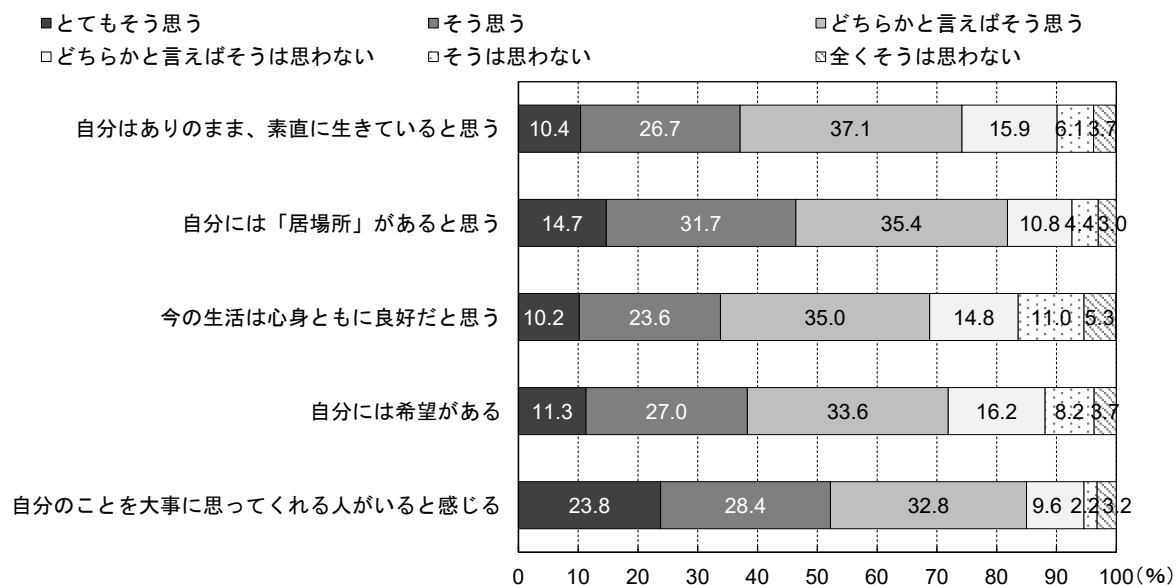
(学研都市地域)

N=372



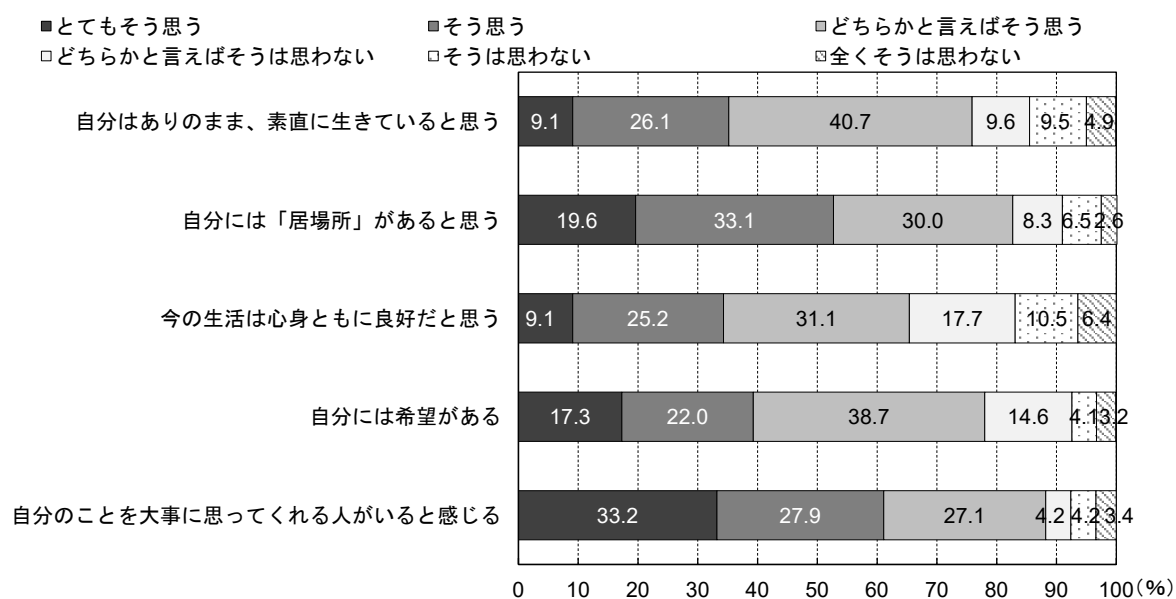
(山城北部地域)

N=651



(相楽東部地域)

N=113



(4) 子育てに対する感じ方

「孤育」の回答は男女差が大きい

最後に、子育て世帯の男女に、三つの子育てに対する感じ方を尋ねた。図 2.12.7 の①と②は「子育ての幸福感」、③と④は「子育ての負担感・不安感」、⑤と⑥は「孤育」の感情である。

男女とも、子育ての幸福感に対して肯定的な回答は非常に多く、①の「子育てをされていて幸せを感じる」では男女とも89%が肯定的である。

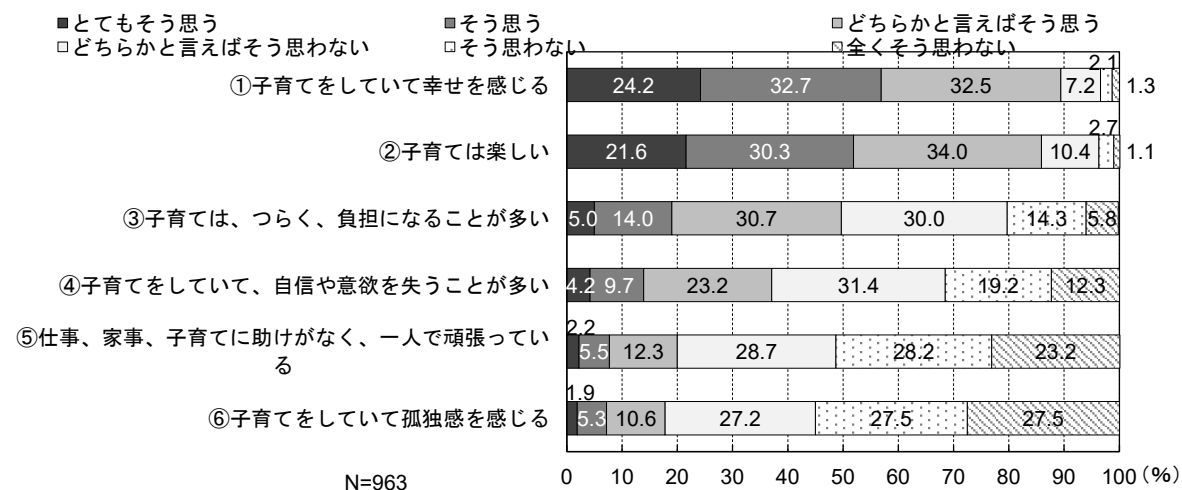
負担感・不安感を③の「子育ては、つらく、負担になることが多い」で見ると、男性で40%、女性では53%が肯定的回答であり、女性の方が多い。

孤育について「子育てをされていて孤独感を感じる」で見ると、男性では18%、女性では34%が肯定的であり、回答数は少ないものの男女の差は負担感・不安感よりも大きい。

地域別では「幸福感」は丹後で「とてもそう思う」の回答が多く、「孤育」で否定的回答が丹後や相楽東部で多いといった特徴がみられる(図 2.12.8)。

図 2.12.7 子育てに対する感じ方 (子育てをしている者、単数)

(男性)



(女性)

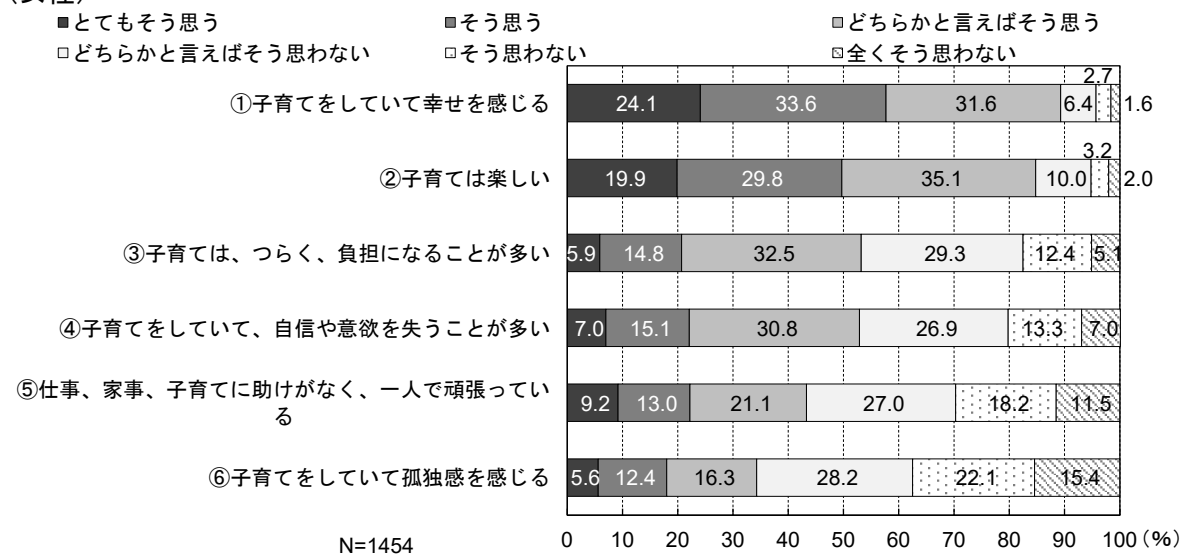
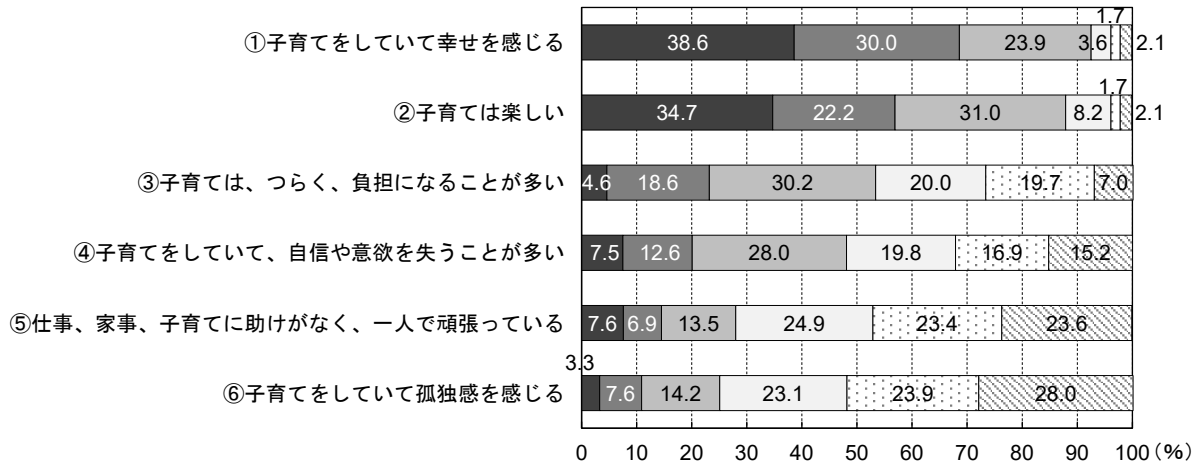


図 2.12.8 地域別にみた子育てに対する感じ方（子育てをしている者、単数）

(丹後地域)

N=129

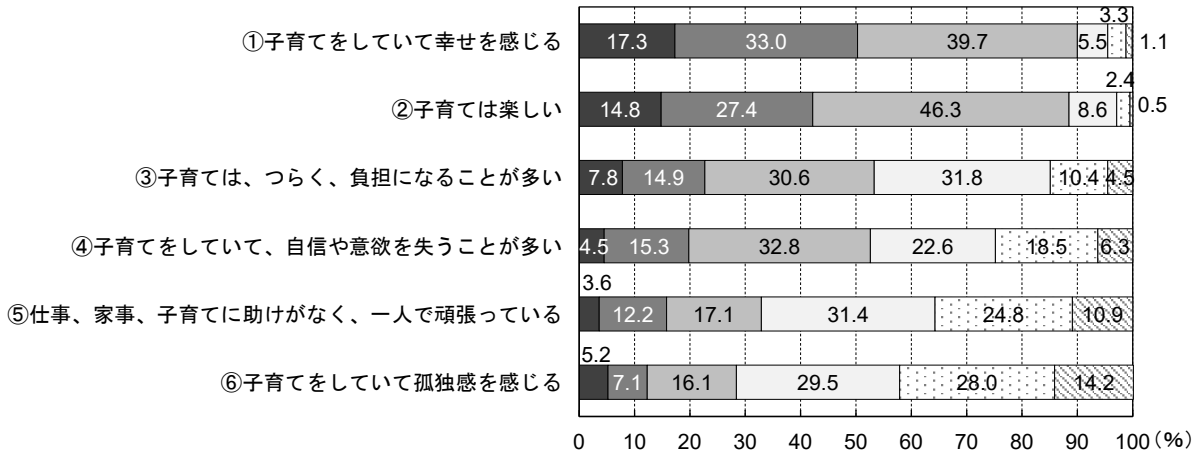
- とてもそう思う ■そう思う □どちらかと言えばそう思う
- どちらかと言えばそう思わない □そう思わない □全くそう思わない



(中丹地域)

N=156

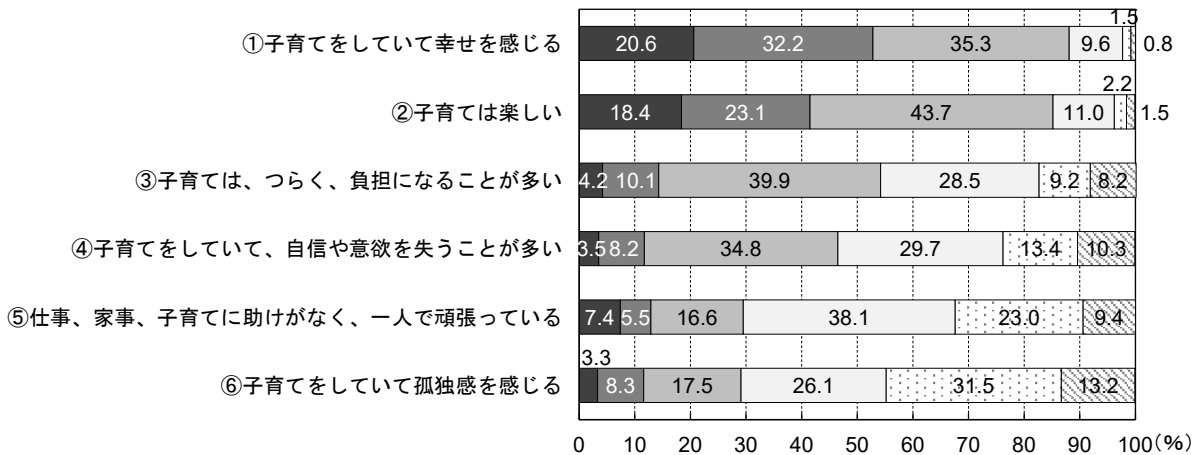
- とてもそう思う ■そう思う □どちらかと言えばそう思う
- どちらかと言えばそう思わない □そう思わない □全くそう思わない



(南丹地域)

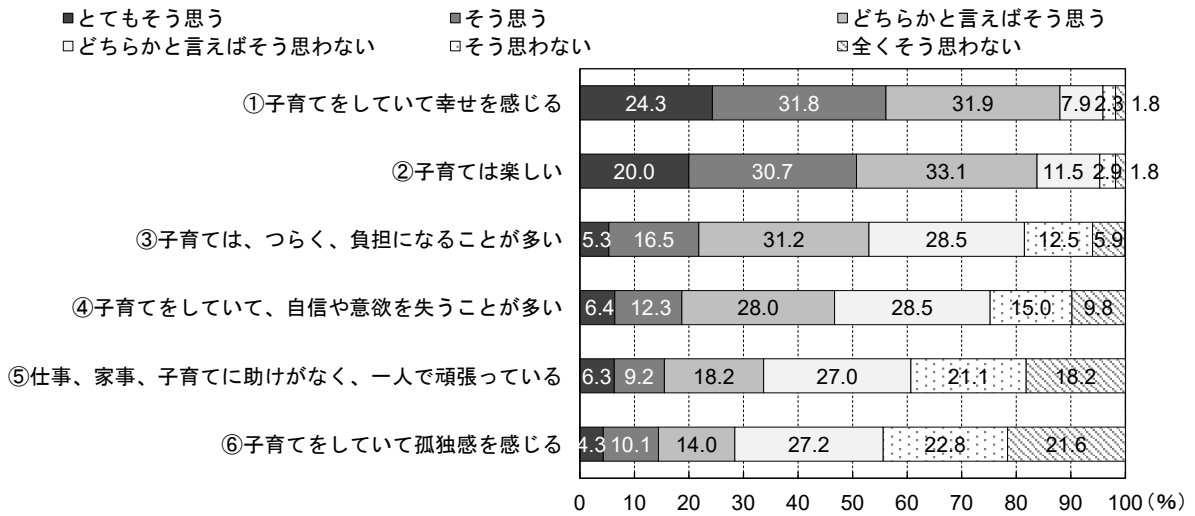
N=106

- とてもそう思う ■そう思う □どちらかと言えばそう思う
- どちらかと言えばそう思わない □そう思わない □全くそう思わない



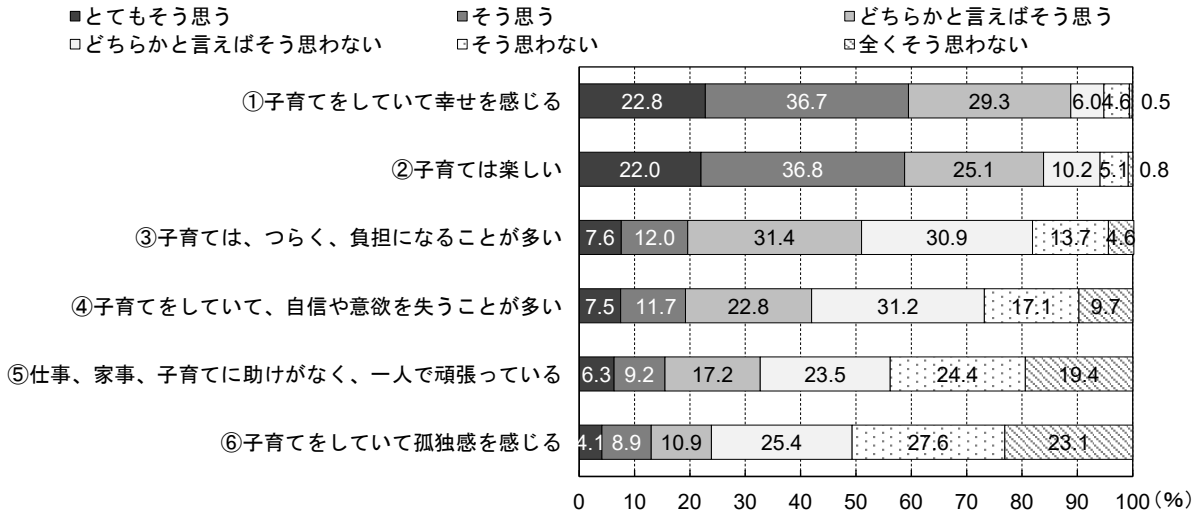
(京都市域)

N=1177



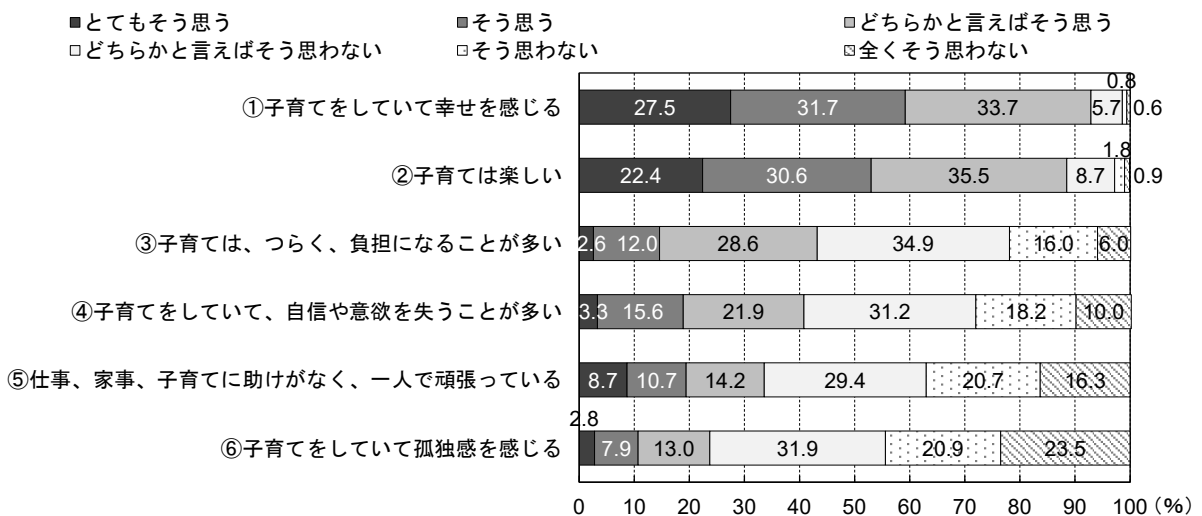
(乙訓地域)

N=215



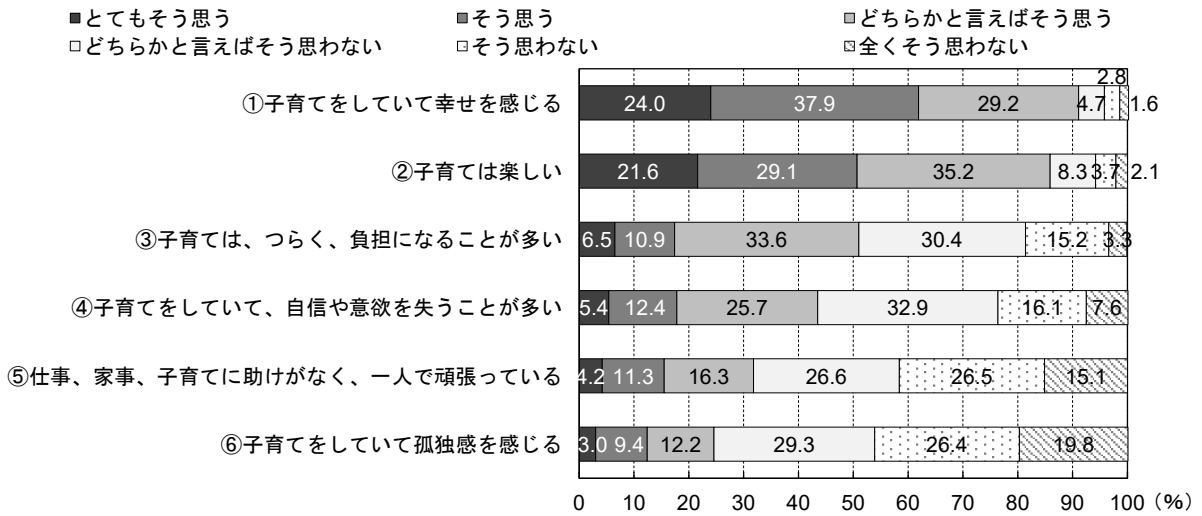
(学研都市地域)

N=225



(山城北部地域)

N=358



(相楽東部地域)

N=51

